
過去の予言書

由城 要

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

過去の予言書

【Nコード】

N1211Q

【作者名】

由城 要

【あらすじ】

かつて知によつて世界を統一していた国があつた。平穩の一時はある日一変、一夜にして国は消滅し、世界から知が失われる。混乱の最中、人々が求めたのは『過去の全てを知る予言書』。

予言書を作り出した魔術師の孫で放蕩者のフレイは、ある日旅人の女サーシャに頼まれ（脅され）、予言書を探す旅に出ることに。剣を振れない剣士クリフも仲間に入れ、3人の旅が幕を開ける。

お気に入り登録、感想、評価 e t c ありがとうございます。 2 /
27 完結いたしました。運営サイトにも投稿しております。

序章 祖父の思い出（前書き）

この物語の半分は残酷さで出来ています。苦手な方は用法／容量を守って、注意して服用して下さい。

序章 祖父の思い出

Memories with grandfather
- 祖父の思い出 -

この地上に生きる全てのモノには、この世に生まれ出る理由がある。幾つかの要素が偶然によって結びつき、更なる命、存在を紡ぎだし、それらはまた新しい何かを作り出してゆく。運命の連鎖、とても呼ぼうか。

連鎖はこの地上に最初の生命が誕生してから、果てしなく繰り返されてきたもの。人が人を生むことで集落が出来、木が大地に種を落とすことで森が出来た。狼は群れをつくり、鳥は互いに助け合つて空を渡ることを覚えた。

そして幾度の生と死によつて、人は多くを学び、やがて独自の文明を造った。火を使うことに慣れた者たちが、次第に頭脳を発達させた結果だった。

やがて人間は世界の真理を「^{メテイス}知」と呼ぶようになった。自然が作り上げた規律、人が作り出した定義、そんな諸々のものを「^{メテイス}知」として、次に生まれ来る子供達に教え伝えた。

それから数千年の時を経て、人間は万物の長として頂点に君臨した。「^{メテイス}知」を得たものだけに与えられた運命。彼らはそうして束の間の優越感に浸っていた。しかし、それも彼らと同じ人間によつて、平和という日々は消し去られていった。

3205年、アリアナ大陸に勢力を拡大していたトゥアス帝国は、

戦争に負けた国々に対して、彼らの持つ『^{メテイス}知』を差し出すように求めた。小国の学者や文献はトウアスに吸収され、『^{メテイス}知』を奪われた国々は、文明を発展させることが出来なくなり、やがて他の国々の勢力は衰えていった。

3458年、トウアス帝国の領土は広がり、この年、この地上の全ての国々は帝国に降った。それはトウアスが全ての国々の『^{メテイス}知』を手に入れたということでもあった。世界を征服した帝国は民に圧力をかけることもなかった。知識を失った国々は反乱を起こすこともなく、再び訪れた平和を謳歌した。そしてトウアス帝国が世界の中心となつてから、約500年の月日が流れた。

TC498年。トウアスが世界を征服してから、もうすぐ500年を迎えようとしていた頃。帝国では500周年を記念した大掛かりな工事の為に、城下の周りの整備が行われていた。工事によって城下を囲む八方の門のうち、六つが閉ざされ、特に夜の出入りは禁止された。

そして、ある夜。帝国側はいつものように工事を行い、城下、そして城への出入りは禁止されていた。そして次の日の早朝。帝国へ貿易の品を運んできた馬車が、城下を目の前にして足を止めた。

そこにあつたのは、風化して何千年も時を経たような、帝国の姿だった。

帝国の支配下になっていた諸国は、大慌てでトウアスに使者を派遣した。しかし、どれも言うことは同じで、トウアスの街は風化し、建物も崩れ落ちており、人の姿さえ見受けられない、城の中にあるはずの『^{メテイス}知』を記した文献すら無くなっていた、ということだった。

世界は一夜にして帝国と『^{メテイス}知』の両方を失った。そして世界は争乱の時代へと、変化していったのだ。

そして現在。誰もがこう思う。何故、帝国は一夜にして滅んだのか。何故、『^{メテイス}知』は消え去ってしまったのか。かつて世界の規律、そして定義を『知』と呼んで重宝してきた人間は、やがて過去に目を向けるようになる。

過去という、礎を。連鎖を作り出す、偶然という名の運命の正体を。

だから私は、最期の時に『過去を知る本』を残そう。人が知りたと思う過去を全て教えてくれる本を。見落としてしまった過去の歴史と、その真実を知る本を。

私はこれを、過去の預言書と名付ける。

第1章 1

うざってえ。もう誰も話しかけんな。

何も知らねえつつつてんだろ。ジジイが俺に残したモンなんざ、これっぽっちも無い。余計な名声やら、期待だけ残して消えたクソジジイのことなんて知るか。

俺は何も知らない。知りたいとも思わねーんだよ！！

- 『知』を失った世界 -

潮風が鼻につく、貿易港。中立国グロツクワースの大通りは人だけじゃなく、情報や品物も行き交う、最も栄える中心街だ。大通りから少し路地へ足を踏み入れれば、そこは市場へと様相を変える。特に人の多い時間帯になれば、人間が蟻のように通り一帯を歩き回る、俺にとってはウザイことこの上ない場所だ。

すれ違う奴らを一瞥しながら、俺は大きく息を吐いた。最近はこの辺りも物騒なモンを持ち歩く奴が多くなつた。中立国といえど、一枚皮を剥いでみれば、ただの平和主義の緩衝国。いつ近隣の国々から攻撃されるか怯えている小国だ。エクリュ騎士団とか言う奴らを軍隊代わりに、危険因子の排除をしているところを見れば、世界平和とか言う掲げ文句も薄っぺらなものでしかない。

数人の男達が俺の隣をすれ違う。男達の荷物の中から、親指くらの大きさの木の板が落ちる。俺は足を止めると、その板を拾い上げる。

板には、特殊な文字で『旅標』と書かれていた。色と形からすれば、隣国で作ったものだろう。拾い上げたその手で、俺は通り過ぎようとしていた男の一人を呼び止めた。

「おい。旅標」

旅標は旅人であることを示し、かつ、国への入国するための重要な書類の役割を果たす。これが無ければ今日の宿も無くなる。俺は振り返った男の一人に旅標を放り投げた。

「!……つと、悪いな、兄ちゃん」

礼を言う男に背を向けて、俺は再び歩き出す。

「別に。……じゃあな」

後ろ手に手を振り、俺は再び歩き始めた。

今日はどこの宿に泊まるか、晩飯は何にするか。俺の思考にあったのはただそれだけだった。この間稼いだ金もある。今日くらいなら少し高めの宿にも泊まれるだろう。酒と女を我慢すれば、もう少し金を使ってもいい。もともとこんなご時世じゃ、その日暮らしをするのがもつとも賢い生き方だ。

人の波の中を歩いてみると、ふと後ろから何かがぶつかって来た。もちろんそんなに派手なぶつかり方でもなかったし、振り向かなくても相手が大人ではないことくらい分かった。

「わっ……ごめんなさい」

振り向くと、俺の肘くらいまでしかないような小さいガキがこっちに頭を下げていた。顔は見えないが、金髪をしていて、いたると

ころに穴が開いているような灰色のワンピースを身に纏っている。
俺はふと嫌な予感に駆られた。

「本当にごめんなさい。……そ、それじゃー！」
「おい、ちよっ……」

ガキは俺が何を言うよりも早く、その場から駆け出していく。俺はすぐにポケットに手をつ突っ込んだ。しまった、やっぱり無い。

俺は瞬時に手を挙げようとしたが、すぐに止めた。こんな人の多いところで騒ぎ立てれば、すぐに騎士団が飛んでくることになる。捕まって事情聴取なんて面倒なことはしてられない。

「てめっ……そのガキ！！待ちやがれ！！」

俺は人ごみを掻き分けるようにして、さっきのガキの姿を追い始めた。行き交う人の波の間でちらちらと見えるのは、あの金髪のガキが俺の財布をしっかりと握って裏通りへと逃げていく姿。やっぱりスリだ、と心の中で再確認して、俺は裏通りへと駆け込んでいった。

裏通りは表通りとはうって変わって、人氣が全く無かった。まるで立ち入り禁止になっているかのように、誰の気配もしない。暗くくすんだ壁と壁、そして上を見上げると切り取ったような青天の空旗のように掲げられた洗濯物が、窓から窓へと渡された物干し竿に引っかかって揺れている。

俺は壁に手をついて、大きくため息を吐いた。苛立ちは追いかけている時から募っていたが、あのガキの姿がなくなると、それはいつそう大きなものに変わっていく。

「……畜生っ」

金がなけりや、また適当な仕事を探してこななければならない。たださえ最近は何力を使うことが多いってのに。今日は運が無さ過ぎる。

俺はしばらく息を整えて、そして表通りに戻ろうとした。その時だった。

「……………?!？」

振り返った視線の先に、1人の女の姿があった。真白な肌に、まるで神が創ったんじゃないかと思うほど整えられた輪郭。二重の瞳と、そして動かない口元。全てが左右対称で、それでいて何者にも叶わないほど、死んだような目をしている女。

奴は直立で俺を見ていた。その瞳には感慨すら浮かんでこない。右手に煌めく長剣を携えているのにも関わらず。

俺は笑った。口元が引きつる感覚を覚えながら。

「またお前らか。…………俺様に何の用事があるのか、今度は聞かせてもらえるんだろっな」

壁から手を離すと、俺は奴に向かってそう言った。奴は顔色一つ変えずに、口を開いた。咽喉の奥から、この世のものとは思えないほどの棒読みの声が響いてくる。

『…………ターゲット、発見。ナンバー21、行動に移ります』
「……………!」

俺が身構えるより先に、奴の体が傾いた。獣のようなスピードで間合いを詰め、右手に持っていた長剣を左から右へと一閃させる。俺はそれをギリギリでかわすと、一步後ろに下がった。奴は構わずに体重を右足から左足へと移動させ、今度は斜めに剣を振り上げる。

ミシ、とその腕が音を立てた。

俺は小さく舌打ちした。奴のスピードが速すぎて、反撃をする暇がない。もちろん俺は近距離攻撃型ではないし、得物なんざ持っていない。

仕方ない、と心の中で呟いて、俺は攻撃の隙を狙って女の腹部を蹴り倒す。普通なら男であろうと女であろうと、腹というのはある程度の弾力があるものだ。けれど奴の体はまるで壁を蹴ったような感触しかなかった。

奴の体が後ろへと傾く。たったそれだけの隙で、俺様には十分だ。

「さつきから、どいつもこいつも、いちいちいち……うっせえんだよ!!」

今まで溜まっていた鬱憤を晴らすように、俺は利き手に力を込めた。瞬時に奴の目の前に炎が吹き上がり、それが轟音をたてて爆ぜる。どうやら俺の怒りが反映してか、爆発音は1発、2発、そして3発と響いた。

俺は力を入れすぎで震えている手をヒラヒラと振った。どうやら必要以上に力を入れすぎたようだ。手の痺れがそれを訴えている。騎士団が来る前に此処から立ち去った方がいい。身を翻して俺は歩き出した。奴が死んだのか、しっかりと確認しないまま。後から聞いた話によると、この時俺の左胸の辺りに煙の向こうから赤い光が差していたらしい。もっとも、俺はそれに気付くことはなく……。

「 危ないっ!! 」

そんな声が、何処からか響いた。それが誰の声か、何処から響いているのかを確認するより先に、俺は後ろを振り返っていた。

パツと左腕が血煙を吹いた。そして後から遅れて、一発の轟音が裏路地に響く。痛みが襲ってくるより先に、俺は煙の中に立っ

る『奴』の姿を見つけた。真白な肌は焦げて、腕が片方無くなっている。整った輪郭もまた半分は崩れて、その傷口からは幾本もの線が見えていた。

人の神経などではない。筋肉でもない。それはまるで、造られたような太い糸状のものだった。

「……………」

俺は戦意を喪失していない奴の姿を見て、少しだけ背筋に冷たいものが通ったような気がした。再び身構え、そしてもう一度右手に力を込める。装身具がシャラシャラと音を立て、腕輪に埋め込まれた宝石が光を灯した。

最大限の魔力を使って俺が反撃しようとしたその瞬間、背後より少し高い位置から、その声は響いた。

「伏せてください、頭が吹っ飛びますよ」

やけに冷静な暴言に、俺は振り返るより先に伏せることにした。同時に後ろから先ほどの音と似た鋭い轟音が響き渡る。空気を裂くような、そんな音。

俺が瞬きをしたその瞬間、あの音と同時に奴の額に穴が開いた。何かが貫通したような穴だった。人間のものとは思えないその体は傾き、開いたままだった目がゆっくりと閉じていく。

『捕ソク、失敗……。N O 2 1、修復フ力能、シュウ復、フ力、ノ……………』

そんな声が微かに聞こえたが、俺には意味が分からなかった。すぐに背後から、あの声が聞こえてくる。

「人が集まってきました、早くこちらへ」

「あ、ああ……」

振り返ると、行き止まりの壁の上にそいつは立っていた。年は俺とそう変わらない。金髪というよりもクリーム色に近い、肩で切りそろえられた髪に、青い瞳をしていた。壁の上に立っているからあまり分からないが、身長はそんなに大きくはない。しかし、その右手には今では殆ど出回っていない昔の得物、リボルバーが握られていた。

俺はうろたえながらも頷いた。未だに何が起こったのか理解できないまま、差し出されたそいつの手を掴んで気付く。先ほどの衝撃で視界を覆っていた砂煙が晴れてくると、その体のラインまでもが見えてきた。

(こいつ……)

自信たっぷりの表情を浮かべて、そいつは赤い唇の端を吊り上げて笑っていた。

(女あ!?)

「私はサーシャと申します。フレイ・リーシェンさんで間違いはないですね?」

サーシャはカフェの椅子に腰掛けながら、俺に向かってそう言った。こいつもか、と俺は苛立ちを覚えたが、晩飯を奢ってくれという一言で仕方なくついてきてしまった。俺も反対側の椅子に腰を下ろして、つまらなそうに肘を突いてサーシャに視線を向ける。

次に言う言葉は、大体予想していたものと同じだった。

「ではやはり、貴方が……」

俺は今まで何千回も聞いたその台詞が繰り返されるのを、不機嫌な表情のまま聞いていた。サーシャは運ばれてきたティーカップを受け取って、もう一度俺に視線を向ける。

「貴方があの『過去の預言書』を創造された魔術師ファーレン様のお孫さんなんですね」

「ああ。……それが？」

そう、それが俺の肩書きだった。ファーレンは俺の祖父で、有名な『過去の預言書』を作った稀代の天才魔術師。彼を育てた一族はすぐに有名になり、その血を引く子供たちは一流魔術師としてその名を広めていった。そして俺は数多の孫たちの中で唯一、ファーレンと正妻との間に出来た息子の、子供。つまりはファーレンの血を受け継ぐ正統な子孫というわけだ。

おかげで俺は、昔から何かと『ファーレンの孫』として期待を受けてきた。ファーレンが過去の人となった今でもそれは同じだ。祖父譲りの茶髪と赤みがかった瞳のせいで、すぐ魔術師の家系だとバシる。茶髪に赤眼というミスマッチな組み合わせは、多分世界中どこを探してもファーレンの家系の者しかいないだろう。

女は俺をまじまじと見つめて、そして大袈裟なほどにため息を吐いた。

「ファーレン様の孫と聞いていたので、どれくらい聡明な方かと思っ
ていましたが……」

「……あ？」

なんか言ったか、この女。俺の言葉に、サーシャはニッコリと貼り付けたような笑みを浮かべて繰り返す。

「聡明という言葉とは無縁の野蛮人のようですね」

「はあっ!？」

微笑を浮かべて切って捨てたサーシャに、俺は啞然としてしまった。あまりに鋭い暴言に言い返す言葉すら見失ってしまう。つき会ったばかりの人間を野蛮人呼ばわり。そっぴや、さっきは「頭が吹っ飛ぶ」とか言ってたなかつたか？

俺が何か言い返そうと口を開くより先に、サーシャは真面目な顔に戻って話し始めた。

「……私は『過去の預言書』を探しています。知っている情報を教えていただけませんか」

「お前、野蛮人とか言った後に言える台詞か、それ」

「あら、口に出してしまっていましたか。大丈夫です、見た目は不良崩れにしか見えませんから」

野蛮人の後は不良崩れ。いったいどんな女だよ、こいつ。俺は盛大にため息を吐いて、持っていたグラスをテーブルに叩き付けた。ガソツ、という鈍い音が響いて、周りの客の視線まで集めてしまう。俺はサーシャを睨みつけると、きっぱりと言い捨てた。

「……知らねえな。あんなクソジジイのことなんざ、知ったことかっ!！」

最大限に不機嫌な俺を目の前にして、サーシャは少しだけ目を丸くしたが、あまり気にしていない様子で聞き返す。

「……何も、ですか？」

「何も、だ」

耳が悪いのか、と言い返すと、サーシャは俺の発言を無視してなにやら考え始めた。おい、俺の話聞いてんのか、コイツ。

サーシャはしばらく考え込んで、そしてもう一度俺に視線を戻した。ウエイトレスが持ってきた伝票を掴み、変わらない真剣な表情で俺を真っ直ぐに見つめる。その強い碧眼の力に、俺は一瞬たじろいでしまった。なんだ、この自信たっぷりな視線は。

サーシャは俺から視線を離さず、一つ一つ言い聞かせるように話し始める。

「……いえ、何か知っているはずです。ファーレン様の遺言に『過去の預言書』は貴方に任せると書かれていたのですから」

「うっ、それは……」

それは間違っていない。あのクソジジイは何故か遺言で俺の名前を指名しやがった。数多の孫たちの中で、おそらく一番顔を会わせる回数も少なかった、この俺に。俺だってあのジジイに相手してもらった記憶なんざ、数えるほどしかない。

「知るかよ！ 『過去の預言書』はすぐにどっかの国の奴が貰って行ったんだ、それ以降の行方なんて……」

「知らないというのなら、手伝って下さい」

見上げるサーシャの口から、とんでもない爆弾発言が飛び出した。見下ろしてるのはコッチだったのに、こいつの傍にいと立場が逆

転しているような気がしてならない。

「はあっ!?!」

俺の素っ頓狂な声にサーシャは顔を顰める。こちらだって嫌ですがと、はつきり前置きしてから話し始めた。てか、そんな前置きいらねえっての。

「……手伝え、という言葉は間違ってますね。では、『依頼』でいかがでしょう?」

自信たっぷりの表情だ。ついさっき、行き止まりの壁の上から手を伸ばした時と同じように、赤い唇の端を上げて、満面の笑みを浮かべている。いったい何処から湧いてくるんだよ、その根拠のない自信は。

「依頼い?馬鹿言つなよ、野蛮だの不良崩れだの言うようなやつ
の依頼を聞くほど、俺は……」

「では、どうぞ」

サーシャはそう言って、手元にあった伝票を俺に突き出した。そこに並んだ数字の羅列を目の前にして、俺は固まってしまう。財布はあの時のガキにスられたままだ。つまり、俺は今文無しなわけで。サーシャはそれを全て予測していたかのように、破顔する。

「私としても、貴方のような野蛮人はお断りしたいところですが……『過去の預言書』の後継として選ばれた人間ならば、使いようによっては私の助けとなるかもしれません。……もつとも」

サーシャは伝票をヒラヒラさせながら、笑っている。この女、伝

票押し付ける気か。いや、待て、俺の財布はさっきのガキの手の中だ。文無しの俺に払える金なんてあるはずもなく……。

自信たっぷりな笑みを目の前にして、俺は足場が崩れていくような気がした。もう2度と、あのクソジジイとは関わらないように生きていこうと思っていたのに。

そう、これが俺の……否、俺たちの悪夢の始まりだった。

第1章 2

走っても走っても、目の前に広がるのは炎だけだった。激しい音を立てて燃え上がる建物を見つめて、僕の手から剣が滑り落ちる。頭の中は真っ白だった。やがてそれが目の前の建物が崩れ落ちるのと共に、僕の頬を涙が伝った。

神様、神様、お願いです。僕はもう人を傷つけることはしません。だから、返してください。僕の大切な、大切な人達を。

- 残酷な神への祈り -

その人達は、この店には入ったときから色々と人目を引いていた。それは同じくらい年齢の男女で、男の人は少し茶色に入った長い髪を一つに結んでいて、赤っぽい瞳をしていた。ローブを羽織っているから、多分魔術師だと思う。

もう1人の女の人は少し背が低めで、ふわふわした金髪に蒼い瞳をしていた。格好は旅人っぽく見えるけど、上品な顔立ちをしてる。どこかのお嬢様、と言われても多分僕なら信じてしまつかもしれない。

「……んで？ここで何しようってんだ」

二人は僕の斜め向かいの席に腰を下ろした。僕はメニュー表で顔を隠しながら、ちらとそちらに目を向ける。

そうしていたのは、もちろん僕だけじゃない。店の中にいる数人は同じことをしていたと思う。なにせ、ここは護衛を生業とした人々が集う特殊な酒場なのだから。

この酒場は普通の酒場とは違った看板になっている。商人や一般の人達を近くの街まで山賊や盗賊から守る『護衛業』を行う人達が依頼を受ける場所。だから見慣れない顔の人達が来ると、みんな依頼人かと思ってしまう。大抵の場合はそうだけど、そうじゃないときは新顔の同業者、なんてこともある。

「護衛の依頼です」

椅子に腰を下ろした二人のうち、女の方がそんなことを口にした。やっぱり依頼だ、と僕はメニュー表を前にして思う。けど、何故か男の人は浮かない顔をしていた。

「護衛……っってお前……」

ぼそっと、後ろの方で誰かが『ドウギョウシャ』と呟いた。

（同業者？）

僕はメニューを下げて、男の人の顔を見る。僕は見たことないけれど、魔術師なら確かに同業者かもしれない。『護衛業』を行う人達には魔法を使う人もいるし、弓矢を使う人もいるし、僕みたいに剣を使う人もいる。

（同業者なのに、護衛が必要……？）

僕は首を傾げた。すると丁度良いタイミングで、こちらに背を向けている女の人が理由を説明してくれる。

「私もフレイさんも前線で戦うタイプではないですから。まあ、さっきのアレの目の前で詠唱時間を稼げると言うのなら、いいんですけど」

「くっ……」

男の人は言いくるめられて額に皺を寄せている。殺気立った空気が流れているけど、女の人は全く気にした様子はない。彼女は店員にメニューを聞かれると迷わず、水とだけ答えた。魔術師の人は何か言いたそうだったけど、何も言わずに首を横に振る。

店員が彼らのテーブルを離れて、僕の横を通り過ぎていった。視界が一瞬だけ店員に遮られる。もう一度メニューで顔を隠しながら二人に視線を向けると、ふと女の人の蒼い瞳と目が合った。

(わっ……!)

僕は慌てて目をそらした。もしかして見ていたのが気づかれたかもしれない。彼女はじつとこちらに視線を向け、そして口を開こうとした。その時だった。

「そこのお嬢ちゃん。護衛の依頼かな？」

ぱっと酒場中の視線が、その声の主に集まった。『ドウギョウシヤ』の声があちこちから聞こえてくる。ちよっとつり目の、でもがつしりとした体つきの剣士だ。うらやましいくらい身長も高いし、筋肉もついているし、剣士向きの体格をしている。

女の人はふと顔を上げて、近づいてきた剣士に視線を向けた。

「……ええ。そうです」

「内容によっちゃあ、俺が引き受けても良いぜ？」

剣士はそういつて笑った。でも何故だろう、女の人の表情は少し冷たい。周りの人達も、冷たい視線で彼を見つめている。

「……盗み聞きかよ」

彼女の反対側に座っていた魔術師の人が、鼻を鳴らして言った。剣士は少し肩を竦めて、苦笑する。

「はっ、大体ここにいるやつらの殆どは護衛業のヤツらだ。みんな聞き耳立ててるようなもんだろ」

「……ちっ」

ちょっと険悪な空気が流れ始めて、水を持ってきた店員さんがオロオロしている。剣士はもう一度視線をあの子の人に向けた。作り笑顔のような笑いを浮かべて。

「なあ、こんなヤツとの契約は切って、俺と契約した方がマシだぜ？」

ざわざわと店内がざわめいている。誰かがボソボソと『女目当てだろ』とか『金をふんだくって、あとは放つとくんじゃないか』とか言っている。今のご時世、護衛業を偽ってそうゆうことをする人は多い。僕らだって世界中の護衛業の人達の顔を知っているわけじゃないから、誰が偽者で、誰が本物かなんて分からない。だから全ては依頼者の目にかかっている。

なんだか嫌だな、と僕はため息をついた。このまま騙されるのを見ているのは辛いけど、ここで助けに入るほどの勇気もないんだ。

でも状況は彼女の一言で全てひっくり返された。

「いえ、実力のない方には必要ありませんので。それならまだ、コレの方が役に立ちそうです」

「なっ……！」

剣士の顔がみるみる赤く変わっていく。周りで見ていた同業者達が、耐え切れなくなって笑い始めた。馬鹿にされた剣士は空いていた椅子を蹴り倒して店から出て行く。凄い物音にびっくりしたけど、これで彼らが騙されることもなくなったので僕はほっとした。

「お嬢ちゃん、やるじゃねえか！」

「気に入ったぜ！」

皆、そういつて彼女を囁し立てる。でも彼女は表情一つ変えず、オロオロしていた店員さんから水を受け取って口をつけた。反対側のテーブルにいた魔術師の人が言う。

「おい……お前、どさくさに紛れて俺のことを『コレ』とか言わなかったか……？」

「フレイさんの被害妄想では？」

女の人は水を飲み干すと、グラスをテーブルに置いて椅子から立ち上がった。そしてつかつかとテーブルから離れる。魔術師の男の人が声をあげるけど、彼女は聞こえていないフリをした。店内が一気に静かになる。

彼女はあるテーブルの前まで来ると、にっこりと上品な笑顔で微笑んだ。さっきの剣士に見せたような表情ではない。

「貴方も護衛業の方ですね。……依頼、受けてくださいますか？」

「いつ!？」

蒼い瞳で微笑まれて、僕はそんな声を出してしまった。愛用の剣、レイテルパラツシユを抱きかかえた状態のまま硬直してしまう。あつちのテールブルでは魔術師の人がこつちを睨んでるし、周りの同業者の視線も痛い。

僕が答えに困っていると、奥の方から声がした。

「お嬢ちゃん、そいつはちょっと……」

「そうだ、もつと良い奴を紹介してやつから、そいつは止めときな」

そんな声が徐々に飛び交い始める。すると魔術師の人が顔を顰めて、周りの人達に問いかける。

「なんだよ。弱いのか？」

「ああ、弱い弱い。驚くくらいの弱さだ。なあ？」

みんなの馬鹿にするような笑いが木霊する。僕は椅子に座った状態のまま、レイテルパラツシユを強く抱きしめた。

そうだ、依頼を受けてから幻滅して破棄されるくらいなら、今ここで僕に依頼したことを取り下げてもらった方がマシかもしれない。

「っ……」

悔しさで泣きそうになるのを堪えて、僕は下を向いていた。でも意外な言葉が耳に届いて、僕はふと彼女を見上げてしまった。

「いえ、大丈夫です。……貴方さえよければ、依頼をしたいのです。がよろしいですか？」

「えっ、あ……」

僕はその時初めてはつきりと彼女の顔を見た。金髪のふわふわした髪、そして整った綺麗な顔。女性らしい赤い唇。そしてしなやかな体型。あの剣士の人じゃないけど、女性としてとても魅力的な人だと思っ。

でもその時僕の印象に残ったのは、蒼い色の瞳だった。何よりもはつきりとした、強い瞳。上品とかそういう次元を超えた、何か固い意志を感じる色をしていた。

「は、はい……」

僕はこのとき、その強い視線に気圧されてそう答えた。でも何故だろう、今思うと依頼を断る自分なんか想像できない。そう、多分あの出会いは『そうなるべくして』出会ったのだから。

第1章 3

握った手に響くこの反動は、私が引き金を引いた証拠だ。少し遅れて響く轟音、そして目の前にいた影が派手な音を立てて倒れる。見通しの良くなった廊下を見つめて、私は静かに息を吐いた。

そしてまた一歩、足を踏み出す。構えた武器のみを信じて、私の本能は残酷なまでに生への道を切り拓く。私は大きく息を吐いた。貴方はそこで待っていていい。私はその場所へ、必ずや辿り着いてみせる。

- 銃を携えた少女 -

「あ、僕はクリフ・パレスンと言います。あの、どうぞよろしく…」

私が指名した彼はそう名乗った。身長は私より少し上で、男の人にしては小さい方だと思う。栗色の髪が特徴的で、女の私が言うのも何だけれど、どちらかと言ったら可愛らしい顔つきをしている。剣士だと言っていたが、彼の愛用の剣は装備しているというより、抱きかかえていると言った方がいいかもしれない。

私が彼を選んだのにこれといって理由はない。女の勘だと言えばおそらく、隣に座っているフレイさんが文句を言うだろう。正直に

言うならば、あの店に入った瞬間に目に入ったのが彼だった。体つきに似合わない、大きめの剣を抱え込んでこちらをチラチラと見ている様子。それが一番印象に残ったからだった。

（もう一つ理由をつけるなら、扱いやすそうだったからなんですけどね……）

私は注文をとりに来た店員に人数分の飲み物と食事を頼んで、隣に座るフレイさんに視線を向ける。先ほどの酒場から宿屋へと移動してきてから、フレイさんはクリフさんが本当に剣を扱えるのかと不審な目で見ている。

「……ところでフレイさん。過去の預言書はどこかの国が持つていったと話していただけでしょう？それがどこの国か覚えていますか？」

「あ？……あれが持ち出されたのはガキの頃だから……。噂だとエレンシア公国っつー話だ」

「エレンシア……ですか？」

私は椅子の下に置いていた荷物の中から一枚の紙を取り出し、テーブルの上に広げた。大陸、そして国の地形が全て書き込まれたそれを覗き込む2人の表情が変わる。クリフさんは空気を求める魚のように口をパクパクさせて、フレイさんは眉間に皺を寄せて私と紙を見比べている。

先に声をあげたのはクリフさんだった。

「さ、サーシャさんっ！？こ、こここここれは……」

「世界地図です」

「えええっ！？」

驚きの度合いが分かるくらいの大音量で叫んだクリフさんを、フ

レイさんが、煩いと言って睨みつける。私は2人の様子を無視して、現在地の中立国グロッグワースに持っていたペンで印をつけた。

さつきフレイさんが言っていたエレンシア公国はグロッグワースの北東に位置している。国境を挟んで向こう側にある、肥沃な大地の広がる農村地帯だ。もちろん都まで行けば様子は一変し、公国とは思えないほど栄えた街が存在すると聞く。

考え込んでいると、隣にいたクリフさんが疑わしい視線を私に向けていた。

「……なんで世界地図なんてたいそうなもん、お前が持つてんだよ」「そ、そうですね。トウアス帝国が滅びてから、世界地図を持つていた国は数えるほどしかなかったわけですし」

各国の国土や国力を測る道具として、世界地図は昔から使われてきた。旅人にとっては旅をするための重要な「知」であり、王族や政を行う者にとっても必要なものだ。それを一般人が持つていることはまずない。これもまた、トウアスの滅亡によって滅ぼされそうになったものだったのだから。

私は運ばれてきた水を受け取りながら言う。

「ちょっとしたツテで手に入れたものです。……それよりエレンシア公国についてなんですが」

私は指先でエレンシア公国を指差した。ちょうどこの国、グロッグワースとエレンシアとの国境には赤線が引かれている。もちろんこれは私が書き込んだものだ。

クリフさんは首を傾げ、フレイさんは思い当たるところがあるのか顔を顰めた。

「過去の預言書の騒動が起こってから、公国は国の外への出入りを

禁止しています。旅人すらも通さないように、数メートル単位で警備の人間を配置しているとか」

「……ああ、聞いたことがあるな」

おそらくフレイさんは『過去の預言書』の騒動についてある程度のことは知っているのだろう。

稀代の魔術師ファーレンの作った過去を知ることができる本『過去の預言書』は、トウアス帝国を失ったこの世界にとって咽喉から手が出るほど、誰もが欲しがらる魔法の書だった。過去を知ることが出来るということは、つまり過去に失われた『知』を知ることが出来るからだ。その本を独り占めに出来れば、おそらくどんなに小さな国であってもトウアス帝国並の力を持つことが出来る。

それを知った各国は、秘密裏に『過去の預言書』を探し始めた。表では平和を謳い、裏ではどんな汚い手を使ってでも手に入れようとしている国もある。また逆に、旅人やハンターのような個人が探している場合もあった。私も後者の一人に含まれるのだが。

私はしばらく考え、そして二人に視線を向けた。

「……仕方ないですね。エレンシアに行かないことには預言書の行方は掴めそうにないですし。よろしいですか？お二人とも」

にこつと笑ってそう言うと、二人の表情が一瞬にして固まった。

「お二人ともって……おい、待て！！まさか行く気じゃないだろうな、お前！？」

「え、えええっ！？」

私はグラスに口をつけながら、二人の表情を見つめる。予想通りの反応としか言いようがない。エレンシアの警戒は異常なもので、国境を一步踏み越えようものなら数万という大公の私軍に殺される

ことになるだろう。まあ、あくまで普通に越える場合の話だが。
私はため息を吐いた。

「方法は考えてありますし……それ相応の金額はお支払いします。
もちろん、後払いになりますか」

「相応の金額つてお前……」

まだ疑わしそうなフレイさんの視線。私は世界地図を荷物の中に戻すと、グラスについた水滴を指先で拭ってテーブルに文字を書いた。もちろん、報酬の値だ。最初は睨みつけるようにしてそれを見つめていたフレイさんの顔が、徐々に驚愕の色に染まっていく。もちろんクリフさんは途中から口から魂が抜けたような顔になっていた。

「どこかの国が世界統一して貨幣が変わるか、値が落ちない限り……このくらいが妥当でしょう」

書き終わった私は、いかがですか、と二人の顔を覗き込む。我に返ったクリフさんとフレイさんが声をあげるまで数秒も掛からなかった。

「ええええええええつ！！！！！！」

「お前、本気か！？」

私はしつかりと頷いた。提示した金額は1千万スフィア。おそらく豪遊の限りを尽くして暮らしても、孫の代まで遊んで暮らせる金額だ。でもこれははったりではない。過去の預言書を手に入れることが出来れば、お金以上のものが手に入るのだから。

私の提示した金額に目をチカチカさせている二人。さあ、これで私が何故この地図を持っているのかなんて、細かいことを考えずに

私に従う気になりましたか。

その答えはフレイさんの舌打ちが表していた。

「ちっ……仕方ねえ」

「ぼ、ぼぼぼくも、頑張りたいと思いますっ」

おそらくクリフさんの方は半分勢いでオーケーしたようなものですが。まあ、いいとしましょう。私はさっそく二人に視線を向けて、明日以降の動きを確認する。二人はさつきと打って変わって、真面目に私の指示に聞き入っている。

私は地図に沿って指先を動かしながら、視線だけを後方に向けた。先ほどから、何か良からぬものの気配を感じていたからだ。私はすぐに視線を二人に戻すと、地図を丸めた。

丁度良いタイミングで店員が食事を運んでくる。私は地図を荷物の中に仕舞うと、一度会話を打ち切った。

「明日からエレンシアの方へ向かいます。旅の準備は明日、宿を出た後でも十分でしょう」

夜、グロックワースに雨が降った。静寂を包み込むような小雨が、風の流れを作り出している。今日の宿は、こじんまりとしている小さな部屋だ。一人部屋なのだから仕方ないが、どうやら防寒にはす

ぐれていないらしい。扉を閉めても、外の冷気が何処からか忍び込んでくるようだ。

真向かいの部屋にはフレイさんとクリフさんがいる。反対側は二人部屋になっているようだ。私はベッドに座りながら、食事の後に別れた二人のことを思い出す。クリフさんとの相部屋に、フレイさんは始終嫌そうな顔をしていが、宿代の話を口にするたびに部屋に戻っていった。

「……」

私は愛用のリボルバーを手に取り、銃弾を確認した。ゆっくりと息を吸い、そして吐き出す。手に馴染んだバレルの感触を確かめながら、私は静かに銃口を入り口へと向けた。引き金を引けば、おそらく静かな夜に銃声が轟くだろう。

私はため息を吐いて、引き金に指をかけた。

「……どうやら休む暇はないようですね」

ベッドから腰を上げ、肩を竦める。すると、私の声と同時に、廊下から誰かの絶叫が聞こえてきた。やれやれ、と呟いて、私は即座に銃口を背後の窓へと向けた。窓の端から端を黒い影が移動する。

引き金を引いた反動と、銃声の音がほぼ同時のように思えた。静寂の夜を切り裂く、旋律の轟音が轟く。それはいつも、死と隣り合わせた戦いの始まりを告げる音。

私は背筋を伸ばし、窓ガラスと共に1階へと落ちていった黒い影を見つめていた。その瞳が、はっきりとこちらを捉えている。耳障りな機械音が、カシャカシャと音を立てながら落ちていくのを私は感じた。

微かに、地面に叩きつけられる音がする。それは人間のものとは違っていた。

「……今のはフレイさん狙いでしょうか。それとも……」

私は静かにそう呟いた。今のは間違いなく殺人人形の一つ。トウアス帝国が世界を治めていた頃、危険因子の排除を目的として作られた機械の人形。あれを作る技術は、もはやどの国も持つてはいない。どこかの国が持つていいるならば、早々に殺人人形を作らせ、戦争を始めるはず。

「……」

私はリボルバーを一回転させ、壁際に身を寄せた。どうやら今回は一体だけではないらしい。他にも生気のない気配がいくつか、廊下を彷徨っている。どうやら銃声に反応したのか、この部屋の前へと集まりつつあるようだ。

ゆっくりと、私は目を瞑った。鼓動が高鳴っている。血液を循環させる重要な部分が、緊張によって強く圧迫された。それでも働こうとするこの大きな力は、生きる為の力だ。生きていることを実感させる力強い音。

『……その音をよく覚えておきなさい。全てのものを押さえ込み、心音だけに意識を集中させる』

思い出の中の声が私に語りかける。優しいようで、それでいて厳しい言葉。私は言葉のとおりには鼓動に意識を集中させる。壁を挟んだ反対側に蠢く人形は、6体。気配を読み取りながらも、あくまで意識は心音にのみ傾けたまま。

私はゆっくりと息を吸う。

『……一度息を吸い、そして吐き。ゆっくりと目を開いたら、それ

が始まりの合図です』

肺に溜まったものを吐き出し、ゆっくりと目を開く。手からリボルバーが語りかけているように、腕がゆっくりと上がっていく。どうやら人形たちは突入を決めたようだ。私もゆっくりと視線を入り口に向ける。

やがて思い出の中の言葉は、最後にこう締めくくった。

『始めなさい』

扉を破る破壊音に続いて、2発目の銃声が夜空を切り裂くように轟く。

第1章 4

銃声が響き渡る。それはもう、後戻りの出来ない運命の始まり。戻れることは許されない。

どれくらいの日日を経て、彼はここを辿るのだろう。彼の過去を生きる私には、想像すら出来ない。

しかし、一つだけ願おう。……彼らの旅路に、幸運を。

- 預言書を探す旅 -

「じ、こっこ、これって何なんですか!？」

背後で声を震わせながら叫ぶクリフの声。俺は真正面に飛び出してきたヤツの腹を蹴り飛ばし、苛立ち紛れに口を開いた。

「知るかつ！お前、剣持ってんなら、さっさと倒せ!!」

そう言って睨みつけると、クリフは俺の方を見て必死に首を横に振っている。部屋の片隅で剣を抱きしめながら顔を真っ青にしている様子は、ただのビビリだ。護衛業の奴等が言っていたのはこれのことか。

俺とクリフの相部屋は、2人分のベッド以外にはテーブルと暖炉しかない小綺麗な部屋だった。しかし今はあちこちに斬撃の傷跡が

つき、もとの部屋の様子さえ思い出すことが出来ない。そして2人用の部屋には、珍客が居座っていた。細身の剣を握り締めた、女の姿のヤツだ。肩で切りそろえられた真つ直ぐな髪、そして生気のない瞳。背筋を凍らせるほど、無表情な人形の顔。

蹴飛ばされた人形は背後の壁にぶち当たり、一瞬だけ動きを止めた。俺は睨みつけるような視線で相手の動きを見つめる。この部屋の中では距離が近すぎて、魔法を唱える時間がない。

「おいっ！！せめて隙を作るくらいの働きをしろっ！！」

俺は人形と睨み合いながら、背後で怯えているクリフを怒鳴りつける。ここからでは顔が見えないが、さきほどの表情を見る限り、半泣きの状態だろう。知るか、と俺は心の中で吐き捨てた。そして同時に、コイツを選んだサーシャに向かって心の中で毒づく。

(見る目、無さすぎなんだよ！あの女！！)

「む、無理ですっ！！だってあれ……人の形してるじゃないですか
っ
っ」

「中身は人じゃねえっっのっ！！」

俺が叫ぶと同時に、殺人人形が恐ろしいスピードで近づいてきた。俺は小さく舌打ちをすると、呪文を省略させ、一言だけ言葉を紡ぐ。防御力は落ちるが、一撃を弾き返すくらいのは出来るはずだ。

感電したような音が響き渡る。剣の刃を伝った電撃が柄に伝わり、やがてヤツの手に向かう。一瞬にして皮膚が黒い煙をあげた。嫌な臭いが鼻につく。これは……。

「っ！！」

後ろにいたクリフが、声にならない悲鳴をあげた。ちっ、余計な

ところで恐怖心を煽っちまった。俺は続けて省略した呪文で足元に魔方阵を出現させる。真つ赤な光が床に照らし出され、俺はその中心に手をついた。木の感触が肌から伝わってくる。

その刹那、ヤツの足元から植物の蔦が現れた。足を絡めとるように踝から膝へと徐々に登っていく。俺はそれを見つめ、後ろで丸くなっていたクリフにもう一度怒鳴りつけた。

「さっさとしろ！！人間の皮を被ってるだけで、中身は機械と変わらねえんだよ！」

「う……」

クリフはおずおずと立ち上がり、ゆっくりと俺の隣まで歩いてきた。殺人人形は足を床に縫い付けている蔦を切ろうと悪戦苦闘しているが、どうやら剣も固定され、動けなくなっただけらしい。無駄な抵抗を繰り返す姿を見つめ、クリフは静かに唾を飲んだ。

殺人人形はゆっくりと視線を上げ、クリフを睨み付けた。さつきまで俺と戦っていたときはなんの表情も浮かべていなかったのに、今はまるで獣が威嚇するように鋭い視線でクリフを睨んでいる。

踏み出した右足が再び後ろに下がろうとするのを、俺は許さなかった。

「こつちは依頼料出してんだ、なんならここで契約切ってもいいんだぜ？」

「えっ、あ、そそそそれは……」

クリフは首を横に振って、再び殺人人形に視線を向けた。ヤツの右手は黒く焦げ、異臭を放っている。これは人間の皮膚が焼ける臭いだ。中身は機械のくせに、体を覆う皮膚だけは人間のものを使っているらしい。

クリフは再び剣を強く握り締めた。人間じゃない、人間じゃない、

と暗示のように唱えながら、剣を構える。俺は盛大にため息をつくと、後ろからその背中を蹴り飛ばした。

「さっさと、しろっ!!」

「わ、うわあっ!!」

押し出されたクリフは、目を瞑ったまま無茶苦茶に剣を振るった。人形の肩を切り裂き、腕を裂き、開いた傷口から束になった金属のコードが見える。右へ左へと振るっていたクリフの刃は、運良くヤツの急所である額を一閃させたようだった。

ヤツの動きが止まった。カクン、と首だけ力が抜けて、咳きが唇から漏れる。

『……状況処理装置、エラー。……左端子損傷ニヨリ、自動回復不可能…… No.18、シャットダウン……』

棒読みの音声と共に、瞼が閉じられた。体が傾き、壁に背中を預ける形で動きが停止する。肩で息をするクリフと殺人人形を後ろから見つめながら、俺は首を傾げた。

(No.18……?型番か何かか?)

そういえば今日の昼に襲ってきたヤツはNo.21と言っていた。そう考えるとコイツらは、少なくとも21体以上存在しているのかもしれない。

嫌な想像に顔を顰めていると、振り返ったクリフが泣きそうな顔で叫んだ。

「ふ、ふ、ふ、フレイさんっ!!なんてことするんですかっ」

いや、泣きそうというより、もう既に泣いている状態だ。俺は盛大にため息をつく。とりあえずサーシャが生きていたら、コイツとの契約を破棄させた方が良くもしいれない。弱いうえに怖がり、護衛業をやってる人間としては低レベル過ぎる。

「な、なにも後ろから押さなくても……っ!」

「お前がタラタラしてっからだろーがっ!!文句あんのか、ああ!」

ドスのきいた声でギツと睨みつけてやると、クリフは蛇に睨まれた力エルのように動けなくなってしまう。ちっ、やりすぎたか。

クリフが顔を歪めて再び泣き出そうとしたその瞬間、向かいにある部屋から盛大な銃声の音が木霊した。窓ガラスの割れる音、そして廊下にいた『仲間』の気配が一気に向こうの部屋へとなだれ込んでいく。あそこはサーシャの部屋だ。

俺は再び舌打ちをした。気配はおそらく5体。いくらあの武器があるからといって、一人でどうにかできる数ではない。少なくともあの部屋の中では。

俺は背後で涙を拭っているクリフを怒鳴りつけ、加勢に行こうとした。あの女の加勢は気に入らないが、これも金のためだ。あとで逆恨みでもされて宿代や夕食代を請求されると困る。今の俺は文無しなのだ。

「おい、さっさと……!」

クリフに向かって口を開いたその瞬間、この世のものとは思えないほど盛大な銃声が連続して響いた。一拍空白を置いて、再び轟音が肌を震わせる。クリフが悲鳴をあげて俺の腕にすがり付いてきた。俺は呆然として、扉の向こうに視線を向ける。銃声は再び間を置いて響き渡った。クリフが俺のローブを掴みながら、震える声で言

う。

「さ、さ、……サーシャ、さん……？」

暗闇の向こうはまるで暗幕に覆われているようだ。中で何が起ったのかすら、反対側のこの部屋からは見えてこない。俺はゆっくりと歩き出した。クリフがロープを引っ張るが、気にせず廊下に出る。

人形の気配は感じられない。少なくとも、動いている気配は。俺が部屋の中を覗きこむと、中央に5体の殺人人形が折り重なっていた。そして視線を上げると、窓際から下を見つめているサーシャの姿がある。

俺が一步、部屋の中に足を踏み出した瞬間、サーシャの腕が動いた。両腕に握り締めたリボルバーの片方が俺たちに向けられる。瞬時に、引き金に指がかかった。ガチャリ、と背筋を凍らせるような音がする。

後ろにいたクリフがビクリと、体を震わせた。サーシャの視線が、やっと俺たちの気配に気付いたように、こちらへと向けられる。

「！……お二人でしたか、すみません」

サーシャはそう言うと、ゆっくりとリボルバーを下ろした。俺は安堵のため息を吐いた。クリフはへなへなと床に座り込む。

「お前な……俺たちを殺す気か？」

「いえ、……つい、反射的に」

サーシャは苦笑を浮かべ、座り込んでいるクリフに手を貸してやった。クリフはまだ震える足で立ち上がると、床に転がる殺人人形の残骸を見つめる。そのどれにも弾痕と思われる痕があちこちにつ

いていた。

俺もそれを見つめ、サーシャに視線を移す。

「……随分派手に殺ったな」

「人聞きの悪いことを言わないで下さい。そちらも随分と盛大に魔法を使っていたようですが？」

サーシャは済ました顔でそう言った。俺は顔を顰めて、サーシャを睨み返す。今にも喧嘩を始めそうな雰囲気、クリフが困惑した表情で俺とサーシャを見比べている。

しかしそれを中断させたのは、外から聞こえてきた野次馬の声だった。

「なんだ、今の銃声は!？」

「宿屋からだぞ!」

サーシャは窓から下を見つめ、野次馬が集まってきたのを確認した。そしてベッドの上に置いてあった荷物から数枚の硬貨を取り出し、枕元に置く。

「……宿から出ましょう。このままだと騎士団が出てくる可能性もあります」

冷えた夜のような碧眼が、俺たちに有無を言わせずにそう言った。俺は最後にもう一度、あの殺人人形の山を見つめ、そして頷いた。

「……あーあ、随分派手にやられたもんだなあ」

男は騒ぎの広がり始めた宿の前で、ヒュイ、と口笛を吹いてみせた。宿の中は人の形をした人形の残骸が見つかったせいで、夜中にも関わらず野次馬が集まり始めている。しかし宿の裏手、草地に転がった一体の殺人人形には誰も気づいていなかった。

男はその人形に歩み寄る。人の形をした人形の額には、まるで静止した状態で撃たれたかのような、見事な銃痕がついていた。男はその体を持ち上げると、無造作に服を脱がし、背中に手を這わせた。

「本物のお嬢さんなら脱がし甲斐があるのにな……よっと」

人の皮を被った背中を叩くと、長方形の蓋が現れた。男はそれを器用に外し、中のコードを除けて一枚のカードを取り出す。それは七色に輝くカードだった。何度か叩くと、機械音とともに残りの2枚が吐き出される。

傷が無いかどうか月の光に照らし出して見ていると、背後から小さな影が近づいてきた。

「……おともだちを、叩かないで」

「ん？……ああ、シルヴィか」

月光のもとに出てきた影は、少女の姿をしていた。まだ15、16くらいの年齢だろう。透き通るような白い肌、左右対称の顔。身長は男の胸の辺りまでしかない。生気のない瞳が、額に穴の開いた人形を見下ろしている。

男は立ち上がると、シルヴィと呼ばれた少女の頭をぼんぼん、と軽く撫でてやった。

「今回は残念だったな。……でも『おともだち』が欲しけりゃ、また作ってくれるように頼んでやるからさ」

ニコツと人なつこい笑みで笑い、男は歩き出した。シルヴィはじつと殺人人形を見つめていたが、男が離れていくのに気づいて、後を追って歩き始めた。隣まで追いつくと、シルヴィは生氣のない瞳で男を見上げる。

「……やりたいことは終わった？」

「ああ、一応。あとはデータを持ち帰って、中に可愛いお嬢さんがいてくれるのを願うのみ！」

嬉々とする男に対して、シルヴィは興味のなさそうな表情で再び宿屋を振り返った。路地を曲がると、その建物すら見えなくなっていく。しかし彼女の瞳は、宿のある方向をじつと見つめたまま、動かなかった。

二人は街の外れまでくると、もう一度後ろの景色を振り返る。男のすぐ後ろにピツタリくっついていたシルヴィが、ふと男から距離をとった。男はシルヴィに視線を向けると、笑いながら言う。

「シルヴィ。もうちょっと下がってくれるか？」

「何メートル？」

「2メートル」

その声にシルヴィは一言、了解、とだけ返した。その恐ろしく事務的な言葉は、あの殺人人形に酷似している。

男はそれを確認すると、まるで口笛を吹くかのように口を開いた。

すると彼の目の前に、一瞬にして巨大な魔法陣が出現する。紫色の光で出現したそれは、男たちの姿を闇の中にくつきりと浮かびあがらせた。

「余計なものを見た宿の奴らを消しておかないとな……っ！！」

紫の光の許に照らし出されたのは、栗色の髪をした青年の姿だった。優男のような表情だが、その口元は笑みに歪んでいる。２メートル離れた場所でそれを見つめるシルヴィは、魔法陣の威力によって深緑に近い髪を揺らしていた。胸元まである長い髪が、風によって後ろへと流される。

巨大な魔法陣から、灰色の姿をした女の顔が浮かび上がった。しかし、人の形をしているのは顔だけで、首が異様に長い。手は鳥の翼のようになっていて、足は蛇のようにうねりながら這い出てきた。憂いの表情を浮かべた女は、一度だけ、自分を喚び出した男に視線を向け、そして再び街に視線を戻す。

男は言った。

「おいで、フィオ。……君の順番だ」

太陽が上がり始めた頃、俺たちは街から北東に伸びる街道にいた。まだここはグロックワース領だが、おそらくあの宿屋の一件はこの

辺りまで伝わっていないだろう。時折すれ違う旅人や商人の姿を見つめながら、俺はそう思った。隣を歩くクリフはいつものように愛用の剣を抱きかかえながら、不安そうな瞳をサーシャに向けた。おそらくサーシャが何者か、考えているのだろう。いくら過去の……それも強力な武器を持っているとはいえ、あの女の戦闘能力は桁外れだ。疑いたくなる気持ちには共感できる。

「あの、サーシャさん……」

クリフの声に、サーシャは歩く速度を緩めた。3人が並ぶ形になり、クリフはサーシャの表情を覗き込む。

「……昨日の『アレ』は、一体なんなんでしょう」

サーシャはクリフの言葉に、何かを考えるようにして視線を落とした。そして静かに言う。

「殺人人形……遠い昔、トウアス帝国が持っていたとされる軍事兵器です。人間でないことはクリフさんもお分かりになったでしょう。……それ以上のことは私にも分かりません。ただ、あれが動き回っているということは……」

サーシャの碧眼が、反対側にいた俺に向けられる。その瞳はまるでよく研いだ刃物のように鋭く、それだけを見れば兵士や殺し屋とさほど変わりがないように見えた。どんな屈強の男達よりも、鋭く強い視線。

俺は一瞬だけ、コイツのこの目に寒気を覚えた。自分より頭一つ小さい、この女に対して。

「『過去の予言書』を使って、誰かが彼らを作った可能性がありま

す
「

淡々と、サーシャは言った。しかしその声の裏には、何か強い感情が秘められているような、そんな気配が含まれていた。

第2章 1

歌えや踊れ、森の精霊達。日が沈む西の空を仰ぎ、一日の終わりに舞い踊れ。森の『瞳』が揺らめく夜、空を見つめる泉の満月。惑わされた愚かな人間が、紫の光の許に円舞曲を踊る。滑稽なるその姿、森の王は静かに笑うだろう。

踊れや踊れ、森の怨霊達。日が昇る東の空に背を向けて、一日の終わりに舞い狂え。

- 森の守護者達 -

「さ、サーシャさんっ……も、もうそろそろ、休憩にしませんかっ？」

ゼエゼエ言いながら、クリフが前を歩くサーシャにそう言った。両膝に手をつけて息を整える様子を見て、サーシャはいままで歩いてきた道を振り返った。

あの夜、突然殺人人形に襲われた俺たちは、騒ぎが起ころる前に宿を出た。しかしこの先に集落のようなものはない。俺たちはここまですで丸一日歩き通しだったのだ。俺ももうそろそろ足が限界に近い。しかしサーシャは俺たちと同じ分だけ歩いて、ほとんど顔色を変えなかった。

振り返って小さく息を吐くサーシャに、俺は呆れたように呟く。

「……お前……バケモンだな」

しかしコイツの耳は地獄耳だったようだ。サーシャは俺に視線を向けると、呆れたように鼻で笑いやがった。

「ふっ……フレイさんも限界ですか？」

「なっ、コイツと一緒にすんな！……俺はまだ行ける」

俺の言葉にサーシャは肩をすくめてみせる。

「その割には先ほどから、足を引きずっているように見えますが？」

俺は憎たらしい表情を浮かべるサーシャの顔を睨みつけた。苛立ちが殆どだったが。それでも俺の中のどこか冷静な頭がこう呟いている。

(コイツ、いつの間に……)

そう、いつからそんなことに気づいていたのか。俺は改めてサーシャの顔を見つめる。いくらコイツも旅の経験が長いとはいえ、俺だって簡単に疲れを見抜かれるような人間ではない。

クリフの説得にサーシャは小さくため息を吐いて頷いた。どうやら野宿をしようというクリフの案が通ったらしい。喜びと同時にへなへたと座り込むクリフを見つめるサーシャの横顔。

「……なんですか？フレイさん」

ふとその顔が振り返った。俺はなんでもねえよ、と首を横に振る。

サーシャは訝しげな表情を浮かべていたが、すぐに視線をクリフの方へと戻した。

サーシャは座り込んだクリフの顔を覗き込んで微笑む。

「……そうですね、今日はこの辺りで野宿にしましょうか」

この時期の野宿は冬に比べて比較的楽だ。夏が終わり、秋の気配が近づいてくる頃。冬場のような重装備をしていなくても、地べたに寝転がればすぐに眠ることが出来る。

俺たちは道から少し林の中に入ったところで野宿をすることになった。木々の陰なら、雨が降ってきて濡れにくい。

「……」

俺はちょうど良い大きさの石の上に座り、薪集めでチヨロチヨロ動き回っているクリフに視線を向けた。いつも抱えるようにして大事そうに持っている剣は薪を集めるのに邪魔らしく、荷物と一緒に木の幹の根元に置かれている。

よくよく見ると、キツチリと手入れの施された剣のようだ。長年使っているもののように、鍛冶屋で直した跡も残っている。

(……そんだけ使って腕があれじゃ、剣が泣くな)

俺はポケットからタバコを取り出した。スリ騒ぎや、殺人人形の襲撃のおかげで、残りは3本ほどしかない。それを口に加え、火をつけようとした俺にサーシャがふと視線を向けた。

「……フレイさんは喫煙者ですか」

「あ？……なんだよ、吸うなってのか？」

俺の反応に、サーシャは世界地図で顔を隠した。

「いえ、構いません。……それより先に、薪に火をつけていただけませんか。月が翳ると地図が見えないので」

「んなの、アイツに……」

振り返ってみると、先ほどまでそこにいたクリフの姿が無い。薪広いに、森の奥の方へ入っていったのだろう。俺は大きいため息を吐いて、集められた薪の前に腰を下ろした。指をパチリと鳴らすと、中から炎が燃え上がってくる。呪文を極力短縮させた魔法だ。一瞬の発火能力しか発揮しないが、火をつけるのにはこれで十分すぎるほどだ。

俺は火の様子を見ながら薪を足していく。しかし、ある一本の薪を炎の中に突っ込んだところ、火が少し燻った。

「？……げっ、これ櫟じゃねーか。こっちは櫟、杉に……アイツ、全然考えずに拾ってきてやがんな」

手元にある薪のストックに目をやると、櫟の枝が何本か混じっていた。櫟は皮が爆ぜるため、薪には適さない。俺は腹立ちまぎれに使える薪と使えない薪を分けることにした。炎の様子を見つめていたサーシャが苦笑する。

「……随分と詳しいんですね」

「あ?」

睨みつけてやると、サーシャは肩をすくめて言った。

「……魔術師の方は、魔法以外のことに興味を持たない方が多いので」

炎が火の粉を巻き上げていく。俺は使える薪だけを炎の中に投げ入れながら、息を吐いた。サーシャの言葉はあながち間違っではない。魔術師として大成するヤツは、そのほとんどが昔から英才教育を受けてきた人間ばかりだ。魔法以外のことに興味を持たない。俺はタバコに火をつけると、それを加えながら薪を分け始めた。サーシャはその様子を面白そうに眺めている。

「……んだよ?」

俺がそう言うと、サーシャは首を振った。

「いえ。……植物に詳しいのなら、旅をするうえで何かと役に立つだろうと思っただけです」

サーシャの言葉に俺は下を向いた。タバコの灰を落とし、煙を吐き出す。炎の煙とタバコの煙が混じり合いながら、星の輝く夜に消えていく。

「……言っとくが、俺が知ってるのは簡単な薬草くらいのもんだ。俺は学者じゃねえからな」

「そうですね。……でも、今の学者なんてたかが知れていますから」

世界が『知』を失い、人は生きる上で必要な知識以外の全てを忘れてしまった。まるで干ばつに襲われた畑のように、撒かれた知識の種は地面から顔を出そうとしない。そうやって気が遠くなるほど長い年月が同じように流れて来た。

「……………そうだな」

再びタバコを加えると、その煙が体の中に吸い込まれ、ほのかな苦みが舌の上を滑っていく。スツと冷たい風が通るような、そんな感覚にも似た味。

俺は薪を適当に分けると、使える薪を数本、炎の中に投げ入れた。炎が再び勢いを取り戻していく。俺はため息を吐いた。

「それにしても……………アイツ、何処まで行ったんだ？」

「そうですね。薪を探しに、随分奥に入っていたようですが……………」

サーシャが地図から顔を出す。俺たちは顔を見合わせ、そしてもう一度クリフが入っていった森の中に視線を向けた。おそらくこのときほど、俺とサーシャの考えが一致したことはないだろう。

(……………これは完全に迷いやがったな……………)

俺はタバコを地面に擦り付けて火を消すと、大きくため息を吐いた。

「……………なあ、アイツの契約切ったらどうだ？他の街で探せば、もっとマシなやつがいるだろ」

サーシャは立ち上がると、肩をすくめて歩き出した。荷物の中か

ら取り出した二丁のリボルバーを腰のホルスターに収め、暗闇の中へと消えていく。俺もまた、その姿を追って歩き出した。

「考えておきます」

薪の燃える音と共に、サーシャのそんな声が響く。

「……あ、いたたた……」

闇の中、微かに差し込む月明かりだけを頼りに僕は森の中を歩いていた。木の枝が頬に当たってペチツと音を立てる。僕は頬をさすりながら辺りを見回した。

さつきフレイさん達と一緒にいた場所から、そう遠く離れていない。僕の感覚はそう訴えるのに、周りに人の気配はない。そのかわり、川のせせらぎの音が耳に届いた。もしかして僕は全く反対の方向に歩いていたらだろうか。

「ビュ、ビュビュビュウッ……」

さっと血の気が引いて、僕は身震いをしてしまった。あとでフレイさんに何を言われるか分からない。またあの夜のように契約破棄

の話を持ち出されたらどうしよう。

(久しぶりの依頼、これを逃したら……)

僕はぎゅっと服の裾を握った。いつもこうゆうときに抱きかかえているはずの剣はない。なんだか不安になって、僕は足早に川の近くへと降りていった。川まで行けば、月明かりで少しは明るいはずだ。開けているから、フレイさんかサーシャさんが探してくれるかもしれない。

山の斜面から半分転がり落ちるようにして河原へ出た。大きな岩のゴロゴロ並んでいる河原が視界に入ってくる。砂利のせいで歩きにくいけれど、それでも森の中よりは幾分マシだ。

僕は辺りを見回した。人の影は見当たらない。

「さ、サーシャさん……フレイさあーん」

二人を捜すために口を開くと、弱々しくて情けない声が出た。自分でも泣きたくなるくらいに不甲斐ない。溢れてきそうな涙を拭いて再び足を動かした。その瞬間だった。

大きな水音が、上流から響き渡った。まるで何か大きなものが水面に飛び込んだようだった。不安に包まれていた僕はビクリと体を震わせる。

「いつ……今の、み、水音は……？」

僕の頭が一瞬で叩き出した答えは、幼少の頃、誰かに聞かされたおとぎ話の一節だった。混乱した思考は、やけにクリアな昔の思い出を引きずり出してくる。

『北東の森にはね、森全体を守護する妖精が住んでいるんだよ。彼

らは日が暮れると毎晩人気のない場所に出て来て踊り明かすんだ」

祖父か、祖母か。それとも近しい間柄の人間か。随分前のことで忘れてしまったけど、しゃがれた老人の言う。それに対して答えるのは、小さい頃の僕だ。

『へえ、楽しそう!!』

『だがね、クリフ。彼らを見たら、絶対に近づいてはいけないよ。人間が彼らの姿を見ると……あっちの世界に連れて行かれてしまうからね……』

ぞわぞわと足下から這い上がってくる寒気に、僕は身震いした。そんなおとぎ話を思い出した途端、向こうから子供の声が聞こえて来る。カチカチと歯が鳴っているのが、自分でもよく分かった。声は1つではなく、2つ、3つと増えていく。女の子の声、男の子の声……。

「クスクス……」

「……あははは……」

僕の頭は混乱していて、とにかくこの場から逃げ出すことしか考えていなかった。後ずさりしようとして右足を後ろへと引く。砂利が微かに音を立てて、僕はそんな音にも震え上がってしまった。

そして振り返るって走り出そうとした瞬間、僕の肩を誰かが強い力で掴んだんだ。

「クリフさん」

「うわぁぁぁあっ!!」

恐怖を吐き出すように叫んだ僕。けれど次に聞こえて来たのは、

妖精達の声でも、幽霊の声でもなくて、呆れたようなサーシャさんとフレイさんの声だった。

「……今のは耳にきましたね……」

「うるせーなっ！！静かに出来ないのかお前は！」

フレイさんにグーで頭を殴られる。痛みはあつたけれど、それよりも安堵と嬉しさが勝ってしまった。僕は半泣きのまま目の前にいたフレイさんに抱きついていて。もしかしたら呆れられて置いていかれたかもしれない、とまで考えていたから、まさか二人が探しに来てくれるとは思わなかった。

「探しにぎでぐれだんれすね……うっ、うっ、嬉しいいれす」

フレイさんとサーシャさんの顔を見て、僕はそう言った。もう絶対に迷わないように、とフレイさんのローブを掴む。

「だあ、もうウゼエ！！抱きつくな！」

抱きつくなら女にしろ、と嫌がるフレイさん。あまりの剣幕に、言われた通りサーシャさんに視線を向けると、今まで見たことのない、世にも冷たい瞳でこう言われた。

「それは一種の男女差別です。お断りしておきます」

「お前も結局嫌なんじゃねえか！」

フレイさんの言葉に、サーシャさんは鼻で笑う。

「いえ、少なくともフレイさんよりはマシだと思ってます」

そう言って河原の方へとサーシャさんは歩き出した。僕に抱きつかれた状態で動けなくなっているフレイさんは、右手をぐっと握りしめて、サーシャさんの背中に怒鳴りつける。

「お前みたいなの腹黒女はコッチがお断りだっ！！」
「光栄です」

どうやら言い合いでは完全にサーシャさんの方が役者が上みたいだ。言葉に詰まったフレイさんの拳が怒りに震えている。僕はふと河原へ歩き始めたサーシャさんに気づいて、慌てて声を上げた。そっちはさっき水音がした方だ。

「さ、サーシャさんっ！そっちには……っ！！」

僕がそう声をあげた瞬間、サーシャさんの目の前にあつた大きな岩の上に黒い影が見えた。でもそんな気配に気づかないサーシャさんじゃない。誰よりも早くその影に気づき、彼女は上を見上げる。

「……何してるの？サーシャお姉ちゃん」

そこにいたのは、妖精でも幽霊でもなく、大きな瞳が可愛い、一人の女の子だった。

第2章 2

一年前まで其処に在ったものは、もう存在していなかった。気配と呼べるものはなく、そこは全て焼き払った後だったらしい。建物も何もかもがなくなってしまった草原。広すぎる空き地のようにはっきりと拓かれた場所。

風が頬を撫でる。その草原の中に一つでも誰かの遺した何かがあれば、この人生は変わっていたかもしれない。でも、そんなものは一つとしてなかった。……そう、一つとして。

- 消え去った幸せ -

岩の上からこちらを覗いているのは、ボロボロの服を身にまとったガキだ。月光に映える金髪に、灰色のワンピースを着ている。無駄にでかい瞳に、生意気そうな表情。歳でいうなら12くらいのもんだろう。無邪気といえは聞こえが良いが、怖い物知らずともとれる好奇心に染まった瞳でサーシャを見下ろしている。

「こんなところで何してるの？」

はた、と俺はガキの顔を見上げた。どっかで聞いた声だ。もともとガキみたいなるさいのとは付き合えないから、記憶の中から

同じ声を引つ張り出してくるのは簡単なことだった。

『本当にごめんなさい。……そ、それじゃ!』

脳裏に一瞬だけ、俺の脇をすり抜けて人ごみに混じっていくガキの姿が思い浮かんだ。消えていくほんの一瞬、その手の中にしつかりと俺の財布を握りしめていた、あの光景。

俺は即座に声をあげていた。

「お前!この間のスリか!？」

「え……ひゃっ!？」

ガキはその声に驚き、やっと俺を確認したようだった。顔からさっと血の気が引いていく。強ばった表情で岩を降りると、すぐにサーシャの後ろに隠れた。まるで人見知りの子供のように、サーシャの背中から顔を出しては、こちらの剣幕を確認して顔を隠す。

「おいサーシャ!そいつをこっちによこせ」

俺の言葉に、サーシャは涼しい顔で言う。

「子供相手に大人げないですね……。簡単にさられたフレイさんもフレイさんだと思いますが」

呆れたようにため息を吐く憎たらしい顔。それを見た瞬間、俺は矛盾に気づいた。このガキに財布をさられたのは、たしかサーシャに会うより前だ。そうになると、サーシャは俺と会う前にさられる瞬間を見ていることになる。

「てめ、やっぱ見てたのか!？」

「ええ、たまたま」

たまたま、なわけがあるか。文句の一つや二つ、いや三つ四つ言
ってやるうと口を開いた瞬間、抱きついていたクリフがガキとサー
シャに視線を向けた。

「さ、サーシャさんのお知り合い、ですか……？」

クリフの言葉に、サーシャは苦笑する。腰に手を回して後ろに隠
れようとしているガキを引っ張り出して言った。ガキは嫌がつて首
を横に振っているが、どうやらサーシャの力には敵わないらしい。
隣に立たせられ俺と目が合うと、ファイと視線を逸らした。

「知人の娘さんです。……メイ、セルマは近くにいますか？」

サーシャに見下ろされ、メイと呼ばれたガキは少し拗ねたような
顔で頷いてみせた。

「……いつもの場所にいるよ」

スリの時と違って、その口調はガキそのものだ。もともと俺がガ
キ嫌いなせいもあるかもしれないが、見てると憎たらしくなっ
てくる。

サーシャは少しだけ何かを考えるように地面と睨み合っていたが、
しばらくして顔をあげた。メイに視線を向けると、静かな声で言う。

「……それなら、セルマの所に行きましょうか。もしかしたら彼女
が何か情報を持っているかもしれないし」

「情報……ですか？」

俺に引き剥がされたクリフが、メイを見つめながら首を傾げた。ついでさつきまで頬を膨らませていたメイは、クリフが無害だと直感したのか、クリフに向かつて胸を張ってみせる。濡れた金色の髪が、体の動きにあわせて揺れた。

「メイのお母さんはね、色んなこと知ってるんだ！」

「？」

訝しげなクリフの表情にサーシャは肩をすくめたが、自分の口から答えを言おうとはしなかった。

ガキに案内されて行き着いた場所は、森の奥深くにある一軒の小屋だった。周りにはメイより年下のガキ共が数人、走り回っている。どいつも髪が濡れていて、服を着ている途中のもしれば、互いに髪を拭いてやっつてるのもいる。中には素っ裸で走り回るヤツもいた。メイはぎゃーぎゃー騒ぎ回る子供達を前にして、サーシャに視線を向ける。

「さつきまで、みんな河原で体洗ってたんだ」

申し訳なさそうに言うメイに、サーシャは苦笑してみせた。後ろで冷や汗をかいているクリフをちら、と振り返り、そして納得した

ように頷く。

「……ああ、そうゆうことですか」

俺たちの様子に気づいたのか、走り回っていたガキ共がふと足を止めた。どうやら見慣れない客人を前にして、警戒心が勝ったんだろう。数人はそそくさと家の中に入っていき、残りはサーシャに近づいて来た。

メイは近づいて来たガキにテキパキと指示を出す。

「カレン、ダーラ、お母さんにサーシャさんが来たって言って。ダン、アールの頭拭いてあげてよ。髪濡れてるまま服着たら濡れちゃうでしょ。あとリック！走り回るなら服着てよ！！」

どうやらガキ共の中でメイが一番年上らしい。他のガキは5、6歳が殆どで、メイくらいのガキは他にいない。しっかりしていそうな二人組がメイの指示通り、家の中に入っていく。それを確認してサーシャは苦笑した。

「……また増えたように見えるのは気のせいですか？」

「うん。前にサーシャさんが来たときから2人増えたんだよ」

二人の会話を聞いていたクリフが、首を傾げる。

「え、ってことは……兄弟じゃない？」

「そう、血が繋がってるのはお母さんとメイだけ」

メイはそう言って首を横に振った。ここまで来る間、どうやらクリフが気に入ったらしく、さっきからずっと隣を歩いている。ちなみに俺に対してはというと、これ見よがしに舌をだしてみたり、視

線が合えばわざとらしく逸らしたりしていた。

メイはサーシャとクリフの手を引いて、家の中へ入っていく。俺は後ろから三人の様子を見ながら、後に続いた。

家の中は思っていたよりも暗かった。寝るところだったのか、灯りは消され、家の中には月明かりが差し込んでいる。ガキ共は皆、奥へと入っていき、残されたメイはサーシャに椅子をすすめた。おい、俺とクリフは立ちっぱなしかよ。

俺が文句を言おうと口を開いたとき、ふと奥の部屋からロウソクの明かりが揺れた。視線を向けると、30後半くらいの女が立っている。量の多い茶の髪を一つに纏めた長身の女だ。着ている服はさほど綺麗なものではなく、使い古された綿の衣。袖から伸びる腕には多少の筋肉がついているようだ。男のものとは違う、しなやかな腕。

(……………剣士か何かに近いな……………)

ゆっくりと、女はサーシャの座っている椅子に歩み寄った。そしてじっとサーシャを見下ろす。その瞳の右半分は眼帯に覆われていた。

「……………あと数ヶ月は来ないだろうと思っていたが……………思ったより早いな」

無表情でそう言われ、見上げるサーシャは苦笑した。苦笑するしかない、といった表情で。

「ええ……………色々動きがあったので。でも丁度良かったです。追加で、商品をいただけますか？」

商品というサーシャの言葉に、クリフが首を傾げている。女はじ

つとサーシャを見下ろし、仕方ない、と息を吐いた。

「メイ。リストを持って来な」

「はあい！」

ガキが奥の部屋へ入っていくのを見送って、女はやつと俺たちに視線を向けた。クリフと俺を一人ずつ、じつと眺め、何の表情も浮かべずにサーシャに視線を向ける。

「こいつらは？」

「『護衛』です。グロツクワースで契約をしてきました。こちらがクリフ・パレスンさん、そしてこっちがフレイ・リーシェンさんです。……クリフさん、フレイさん、こちらはセルマ・レディンス」

サーシャが俺たちを紹介する。しかしセルマという女はその言葉を聞いて顔を顰めた。俺はまた、あのジジイの話をされるのかと警戒していたが、女が気にかけたのは全く別の言葉だった。

セルマは戻って来たメイから『リスト』とかいう紙束を受け取ると、俺たちにも椅子をすすめた。そして自分もソファに腰掛け、テーブルに口ウソクを置く。

「……グロツクワースで、と言ったな？どれくらい其処にいた」

サーシャはセルマの言葉に顔を顰めた。

「……メイが『仕事』をしていた日の夜中まで、ですね」

仕事、と言われて俺は思い出したようにセルマの後ろに立っていたメイを睨みつけた。

「そついやお前、まだ財布の中身を返してもらってないぞ!？」
「盗つたらもう私のものだもん。教えられなかった?盗られた方が悪いって」

プイ、と顔を逸らすメイに、俺は握りこぶしを震わせる。怒りを鎮めようとクリフが俺を諭すが、お前に諭されると逆効果だ。

怒りに震える俺に気づき、セルマが振り返る。

「なんだ、メイ。この男から盗つたのか」

「う……だつてサーシャさんの探し人だと思わなくて……」

メイの言葉に、セルマは目を細めた。そしてもう一度俺を見つめると、後ろに向かって声を投げる。

「なら、メイ。半分返してやれ」

「ええっ、うそ!？」

「半分っ!？」

思わぬ言葉にメイが素っ頓狂な声を上げた。俺もまた驚きの言葉についそう叫んでしまう。隣にいたクリフも、何がなんだか分からず、ぼかんと口を開けている。セルマは俺たちの様子に苦笑を浮かべ、そしてサーシャに視線を向けた。

「……サーシャ、今回の代金はそこから貰おう」

セルマの言葉に、サーシャは笑った。何処か悪どい笑いに見えるのは気のせいか。

「助かります」

「助かるのはお前だけじゃねーかつ!！」

叫ぶ俺をクリフが宥めるが、お前に宥められると余計に苛つく。メイは嫌そうな表情を隠そうともせず、柵から取り出した俺の財布を差し出した。顔に

『仕方ないけど、あげる』

と書いてある気がするのには、被害妄想なせいではない。

「お前っ、俺様から盗んでおいて、なんだその態度はっ！謝罪の言葉くらい言えっ、ガキ！」

「なっ、ガキ！？……そんなこと言うならあげないから！」

「『あげない』って、それはそもそもテメエのモンじゃねーっ！！」

しかしそんな外野の攻防を完全に無視して、サーシャはセルマに向き直った。そして何かを考えている様子のセルマに問いかける。

「……グロックワースがどうかしたんですか」

セルマは目を細め、そしてロウソクの灯りに視線を向ける。ユラユラと揺れ動く小さな炎が、この部屋の中の唯一の灯りだ。セルマの独眼がじっとそれを見つめていた。サーシャもまた、自らの問いの答を探すように、ロウソクに視線を落とす。

騒ぎ合う俺たちをよそに、セルマは低い声で言った。

「……昨日のことだ。グロックワースの街が消えた」

「……！？」

セルマの言葉に真っ先に反応したのはサーシャではなく、俺たちの仲裁に入っていたクリフだった。言い合いをしていた俺とメイは、

真ん中に立っていたクリフがそつちに気を取られたおかげで、話の腰を折られてしまった。

サーシャは眉をひそめ、静かに口を開く。

「……昨日、ですか？」

「ああ、荷馬車で南に向かおうとしていた商人達が発見したらしい。街は焼け野原、人の気配は全くなし……それもたった一夜で、だ」「たった……一夜で……？」

クリフが呆然と、セルマの言った言葉を繰り返した。メイは突然大人しくなったクリフの顔を横から見上げ、首を傾げている。顔面蒼白のクリフはメイの視線にも気づいていない。

それに対して、ソファに座ったサーシャはひどく落ち着いていた。

「……これで何件目ですか」

「正確な数は定かではないが……この大陸ではここ10年の間に4、5件といったところだ。もっとも、国が体面上黙っている場合もあるが」

セルマはメイの持って来たリストを片手に、俺の財布から抜き出した半分の金額と照らし合わせていた。サーシャはセルマの言葉にしばらく何かを考えているようだったが、軽く首を横に振って顔をあげた。どうやらそれ以上のことを追求するのは止めたようだ。

セルマはそれを悟ったように聞き返す。

「……聞きたいことはないのか？」

「いえ、特には。……貴女がそれ以上話さないということは、また今回も原因不明なのでしょう？」

「よく分かっているじゃないか。だが、そう言われてしまうと、こちらとしては商売あがったりだ」

セルマはそう言うと、メイを呼びつけて何かを指示した。『リスト』から何かを指差すと、よく分からない単語を口にする。しかし俺たちには伝わらない会話でも、メイは何度も頷いていた。

メイが奥の部屋へ入っていくのを見送ると、セルマは再びサーシヤに向き直った。外では風が木々を揺らす音が聞こえてくる。

「……本当に、この時代というのは不便なものだな。全てが曖昧で、闇の中。腑に落ちないことばかりで、本当のことが見えて来ない」

セルマは隠されていない左目でサーシヤを見る。その瞳は決して暖かいものではなく、かといって冷たいものでもない。

ふと風のざわめきが止み、辺りが静かになった。ずっと遠くで鳴いているフクロウの声だけが、静寂を邪魔している。静けさがやけに気に障る、そんな夜だ。

サーシヤはセルマの言葉に聞き入っていたが、しばらくして口を開く。

「それで良いのではないのでしょうか」

その言葉はやけにはっきりと響いた。サーシヤは何かを懐かしむような、それでいて何か苦いものを思い出すような、そんな表情を浮かべている。

サーシヤは言う。静かに、それでいてはっきりと。

「全てが完璧な世界は……きっと、飽きるような味しかしませんか」

第2章 3

その日、俺たちはセルマの家で一晩を過ごすことになった。もつとも食事なんか出されるはずもなく、野宿用の携帯食料を齧り、あとはそれぞれ好きなところで寝た。俺はリビングのソファの上、クリフはガキ共に気に入られて子供部屋、サーシャはセルマの寝室。メイが渋りながら持ってきた毛布に包まると、久方ぶりに深い眠りに落ちた。風の音が何かを囁きかけるように、窓の外でざわめく。

- ある夜の夢 -

「ねえ、今度はこっちだよ！」
「違うわよ、今度は私たちの番っ」

あちこちで、呼び声が木霊してる。頭の中が真っ白で、ただその声を追いかけて走る。呼んでいるのは子供達の声だった。どれもよく聞き覚えがある。そしてそれは、あまりいい印象じゃない。

次第に視界がクリアになって、目の前が開けた。窪地にぽつりぽつりと建つ家並み、向こうではヤギが放牧されている。白い影が新緑の草花をはんで、両頬をしきりに動かしていた。そのずっと遠くには馬も見える。

「見て見て！」
「っ！」

ふと頬の脇を風が通り抜けた。ふと振り返ると、こちらを見て笑っている声が木霊した。少し離れたところに集まった子供達が、こつちを指差して笑っている。馬鹿にするような、そんな表情を浮かべて。

「！」

悔しさや恥ずかしさが入り交じって、咄嗟に視線を逸らした。足下に視線を落とすと、急に足下の木の葉が円を描くように回り始める。それは徐々に強くなり、やがて小さなつむじ風になった。慌ててそれを避けると、向こうで笑っていた声が更に大きくなる。

「あいつ、怖がってやんの！」

「仕方ないわよ、だって『できそこない』だもの」
「！」

カアツと頭に血が上った。『できそこない』の言葉の意味を把握しているのは、きつとこの中で自分だけだろう。向こうにいる子供達はその言葉の意味を知らない。大人達がそう言うのを真似しているだけ。だから怒っちゃいけない。怒っても、結局自分は負けてしまっから。

ふと砂利を踏む音が聞こえた。子供達が憎らしい表情から無邪気な表情へと顔色を変える。彼らの先にいたのは、白い髭が特徴的な老人。爺ちゃんだ。

「おや、次に呼んでいたのは誰だったかな？ フリオか、ジエステインか……それともミハイルか？」

一人一人孫の名前を呼んでいく爺ちゃん。すると集まっていた子供達の中から、一人が手をあげた。アイツだ。

「はい。……僕だよ、お爺ちゃん」

アイツは栗色の髪に子供特有の無邪気な笑顔で真つすぐに手を伸ばしていた。ソイツが声を出すと、さっきまで自分のことを嘲笑っていた者達の視線までもが、ソイツに向けられる。

老人もまた、彼を見てニツコリと笑ってみせた。可愛い孫達の中で、一番のお気に入りを見るような目で。

「おや、お前か。……聞いたるよ、お前は毎日しっかり勉強をしているそうじゃないか」

「当然だよ！僕お爺ちゃんみたいになるのが夢なんだもん」

嘘つきだ、と僕は静かに呟いた。他の子供達は、アイツが『一番だつてことをなんとなく分かつてる。だから負けず嫌いの他の子供達も、媚びるみたいにアイツの周りにくつついてるんだ。子供だけじゃない、親だつて皆そう。爺ちゃんのようにになりたいんじゃない、爺ちゃんのような偉い魔術師になりたいだけ。』

ふとアイツの視線がこちらへ向けられた。その目は爺ちゃんに笑いかけてるときとは全然違う色をしているように思えた。俺はギュッと手に力を入れた。すると手が固い感触を伝えてくる。視線を向けると、僕の手の中には、分厚い本があった。

向こうから爺ちゃんの機嫌の良さそうな声が聞こえてくる。

「おお、そうかそうか。流石にお前は言うことが違うな、フレイに爪の垢でも煎じて飲ませたいところだ」

「！」

急に名前を呼ばれて、慌てて本を背中後ろに隠した。すると誰かが、爺ちゃんフレイならあそこにいるよ、とわざと余計なことを言つて、こつちを指差す。

僕は上目遣いに爺ちゃんに視線を向ける。おそろおそろ視線を上げると、冷やかな目が僕を見下ろしていた。

「……なんだ、フレイ。また植物の本なんぞ読んでいるのか？」
「えっ、あつ、これは……その……」

爺ちゃんはきつと僕のことか嫌いだと思う。だって他の誰にもそんな目をしないのに、僕の時だけは違うんだ。僕は今まで爺ちゃんに笑ってもらったことなんか無い。頭を撫でてもらったことも、抱き上げてもらったこともない。

爺ちゃんはいつもこうやって僕を睨みつけるだけなんだ。

「爺ちゃん爺ちゃん！もー、今は僕の話でしょ」

ふと俺と爺ちゃんの間で、そんな声が響いた。爺ちゃんはふと足下で袖を引つ張るアイツの姿に視線を向ける。他の子達も、視線をアイツに戻した。

「おお、そうだったな。どれどれ、見せておくれ。お前の成長が僕には一番の楽しみだからな」

「えへへ、ほんと？爺ちゃん」

じゃあこつち来て、とアイツは爺ちゃんの手を引いて歩いていく。そろそろと子供達もそれについていった。ぽつりと残された僕の周りに、自然の風が木の葉を散らしながら去っていく。ざわめく木々の下で、木はきゅつと唇と結んだ。

持っていた本を抱え直すと、遙か高いところに浮かぶ雲間から、消えかけていた太陽が差し込んでくる。

「……………」

ハッと俺は目を開けた。気づくと外からは太陽の光が差し込んでいて、部屋の中を照らし出している。随分と長いこと眠っていたようだ。なんとなく嫌な夢を見たような気がする。いや、それ以前に1つだけ。

「……………」オイ。なんで俺は銃口を向けられてるんだ？」

俺の目の前には、リボルバーの銃口を俺のこめかみに向けているサーシャの姿があった。ソファの後ろからこちらを覗き込み、呆れたようにリボルバーを下ろす。

「起こしても起きないので、死んでいるのかどうか試そうと……………」

「試した瞬間に死ぬじゃねーかつ！！！」

「……………」メイに提案されたんですが」

「てめーっ！！ガキっ！！！」

サーシャに怒鳴りつけた直後、メイを睨みつける俺。メイは昨晚

より幾分身なりの良い格好でフイ、と顔を背けた。おそらくボロボロの服を着ていたのはスリで捕まったときに相手の同情を引くためだろう。抜け目ねえガキだ。だからガキは嫌いなんだ。

「ま、まあまあ……」

俺とメイの様子に、クリフが仲裁に入ってきた。それで俺はやっとなら返る。気づくと向こうの部屋からガキ共が面白がるようにこっちを見ている。どうやら俺はかなりの寝坊をってしまったようだった。

こつち見んな、と一喝すると、ガキ共は慌てて部屋の中に戻っていった。後ろからサーシャの呆れたような声が聞こえてくる。

「……さて、さっさと顔を洗ってきて下さい。準備ができれば出発します」

外に井戸があると言われて、俺は入り口の扉を開けた。眩しいほどの光が目を刺してくる。後ろをついてきたクリフが何度も瞬きを繰り返していた。

俺は顔を顰めながらあちこちを見回す。するとちょうど家の右側、林に近い裏手にぼつんと小さな井戸があった。サワサワと揺れる木々の間から朝日が差し込み、足下は光と影がまだらに踊っている。

適当に顔を洗うと、ぼやっと頭の中を覆っていた睡魔が消え去っていった。井戸水はまるで雪解けの水のように冷たい。

ふと、顔を洗ってから、近くに拭くものがないことに気づいた。

「おい、なんか拭くもの持ってるか？」

「えっ……あ、中に戻れば……」

そう答えるクリフに俺は舌打ち一つして、さほど濡れていない手の甲で水気を払い落とす。すると、隣から白いタオルが差し出された。見ると、いつのまにかふて腐れた顔でメイが立っている。

「ちゃんとタオルで拭いてよ、大人なのにだらしないなあ」

「うるせえな……お前こそ、ガキのくせに」

さっき寝起きで怒鳴ったせいか、あまりガキの挑発に乗る気がしない。俺はタオルを手にとると、それで顔を拭いた。メイは家の壁に背をもたれて、しかめっ面をしている。表情から見るに、あのセルマとかいう女からタオルを持っていくように言いつけられたんだろう。

「だからガキは嫌いなんだよ」

使い終わったタオルを頭の上から落としてやると、メイは更に眉間に皺を寄せた。

「うっわ！やめてよ、もうっ」

メイは頭から被せられたタオルを取ると、適当に畳みながら俺を睨みつける。一方の俺はというと、夜には見ることの出来なかった辺りの風景を見回していた。いつも通り仲裁に入るクリフの声を聞

きながら、井戸とは反対の方向に視線を向ける。

ぐるりと辺りを見回すと、この家がどれだけ山奥に立っているのが容易に感じる事が出来た。四方八方、どこを見回しても林しかない。ここに井戸があるのも不思議なくらいだが、この辺りだけ拓けているところを見ると、何となく嫌な予感が脳裏を横切った。

拓けた一帯は草原になっていて、そこは風が吹くたびに緑の絨毯がうねっている。円のように広がる草原が自然のものではないことに俺はやつと気づいた。

「……………ここ、前に何があつたか分かる？」

「……………え？」

メイに袖を引かれ、クリフがふと首を傾げた。メイは幼さの残る瞳で、眩しそくに朝の草原に視線をむける。草に覆われていて地面は見えない。

俺は草原の真ん中辺りまで歩いていった。すると足先に何かに触れる。草をかき分けて見てみると、欠けたレンガが散らばっていた。泥に汚れているが、おそらく建築に使われるものだ。

玄関の前に立っていたメイが言う。

「メイが生まれたばかりの頃は、ここにグロックワースの隠し武器庫があつたんだって。ずっとずっと前……………トウアス帝国と戦争をするときに作つたんだけど、それがずっと残つてて……………でも、メイが生まれた頃に全部無くなつたんだって」

「無くなつた……………？」

クリフの言葉に、俺は振り返った。目を凝らして見ると、俺の足下には無数の残骸が草花の下に埋もれている。『無くなつた』にしては尋常な取り壊し方じゃない。俺の頭の中には、昨日のセルマとサーシャの会話が繰り返されていた。

「……グロツクワースと同じように、か？」

俺がメイに視線を向けると、メイは静かに頷いた。ふとクリフの表情が曇る。

「グロツクワースのことはメイも見たの。……『お仕事』したあと、お母さんのお使いで隣の街に行つて、帰り際にグロツクワースの様子を見たんだ。街は焼け落ちて、人の姿はなくて……お母さんから聞いた、10年前の此処みたいだに」

風がメイの言葉に応えるように草原を通り過ぎていく。朝露に濡れた歯がぼつりぼつりと雫を落とす。俺は静かに過去の残骸をつま先で弾くと、二人のいる場所へと近づいていった。

「つまりは10年前、ここにはグロツクワースの隠し武器庫があつて、それがなぜか急に破壊された、と。……するとあのセルマって女は軍人崩れか」

「そう。メイのお母さんはとっても強いんだから！」

お兄ちゃん達なんか一発だよ、と拳を突き出してみせるメイ。女ごときに負けるか、と言い返そうと思つたが、クリフはおそらく一睨みで終わつてしまいそうなので止めておいた。

メイはニンマリ笑うと、隣に立っているクリフに視線を向けた。クリフは珍しく何かを考えるように地面と睨み合いをしている。しかしじつとこちらを見つめるメイに気づいて、クリフは我に返つた。メイはクリフの反応に首を傾げたが、さほど気に留めてはいなかった。

「……じゃあ昨日言つてた『リスト』は武器か何かか？」

俺の言葉にメイは頷く。

「そうだよ。武器庫は地上にあつたのが主だけど、地下にもいっぱいあるの。そつちは無事だったから、今はサーシャさんみたいな特別のお客さんにだけ売ってるんだ」

特別、という言葉に俺は大きくため息をついた。つまりそれらは裏ルートでしか売らない品なのだろう。サーシャが買うとすればおそらく銃弾の類いだ。鉄を鍛えて造る剣や槍とは違い、銃器は特別な『知』がなくては造れない。つまり今の時代、それを生産できる人間はいない。

「え……でもそれじゃあ、使えば使うほど在庫もなくなるんじゃない……」

首を傾げるクリフにメイはピースをしてみせた。ふんぞりかえってる姿が癩に触るが、クリフにとってはそれほどでもないらしい。

「地下にはね、いっぱい銃弾が残ってるんだよ！それに銃弾を買うお客さんなんて、最近ではサーシャさん以外にいないし……あつ！剣もあるよ、皆で手入れしてるから状態はいいし……クリフお兄ちゃん買っていかない？」

キラキラと目を輝かせて商売つ気を出すメイにクリフは苦笑した。そして腰に下がった愛用の剣に視線を向ける。

「せつかくけど……遠慮しておくよ。やっぱり使い慣れた剣の方がいいし……」

「むう……。あつちは……まあ、除外するとして」

チラとこつちに視線を向けるメイ。

「除外ってなんだよ除外って!」

「だって魔術師って皆、性格悪いんだもん。スリの時もやけに目敏いしさあ」

メイの言葉に、俺は喉元まで出かかった言葉が詰まってしまった。さつき見たあの胸くそ悪い夢が頭の中を横切る。まるで樹液に虫が集まってくるように、あのクソジジイに群がる子供達。あれのほとんどは性悪な親の差し金だった。どれだけ子供が有能かを見せつけ、ジジイのコネで何処かの城や貴族仕えの魔術師になれば、子供の将来だけではなく、自分たちの老後も安泰になる。

一子相伝とまではいかないが、魔術師は師から弟子に言葉で魔術の理論を伝える。トウアス帝国のように機械任せに生きていたころもそうやって魔術は伝えられていた。だからこそ、今の時代魔術師は重宝される。いわゆるエリート職、というところだ。

「同情引こうとしても失敗するから、魔術師に捕まったらすぐにお金返すことにしてるもん」

「……なら昨日の残り半分、さつさと返せ」

呻く俺にメイは舌を突き出してみせる。

「やだ。もう支払い完了したもん。それにクリフお兄ちゃんやサーシャさんなら返すけど、アンタは嫌」

「てめえ……こんの、ガキっ!!」

取っ捕まえようと駆け出す俺に、メイは素早くクリフを盾にして家の中へと駆け込んでいく。一旦目の前で閉められた扉を開けて中に入ると、中からサーシャの呆れたようなため息が聞こえてきた。

ぼつんと外に残されたクリフは苦笑を浮かべ、そしてもう一度連のように揺れる小さな草原に視線を向けた。瞬きをすると、目の前に別な光景が浮かんでくる。

連なる小さな家、あちこちに子供達が戯れ、向こうでは大人達が畑仕事に励んでいる。家の前には子供達の母親らしき影が青空の下で白いシーツを干していた。家の柵の前には小さいながらも蕾をつけた花が揺れていて、何処までもどこかで平和な一場面。

『クリフーっ！』

はっとクリフは我に返った。声がした方向に視線を向けると、窓から体半分乗り出してこちらに手を振っているメイの姿がある。

「クリフお兄ちゃん、サーシャさんが呼んでるよーっ！」

「あ、うん……」

クリフは生返事を返して、再び草原に視線を向けた。10年前の武器庫がそんなのどかな風景のはずはない。クリフは静かに視線を落とし、入り口への階段を上る。

爽やかな朝の風が、背中を撫でるように通り過ぎた。

第2章 4

今宵は本当に月の美しい夜だね。美貌と狂気を併せ持つ女神フィオレンティーナも、かのトウアス帝国の華と呼ばれたカタリナ嬢も、この白銀の輝きを放つ月の前にはしおれて見えるだろう。もっとも、その美しい月に照らされたキミはこの枯れた世に咲く、一輪のリリイ。……どう？月夜に咲くりリイの香りに誘われたこの道化と一夜限りの戯れを……

- 公国の闇市場 -

ふとサーシャが歩みを止めたのは、セルマの家を出てしばらくしてからのことだった。家を出た時、まだ東の端にあった太陽が、今は真上まで昇っている。空を見上げると、思いがけず近くに雲がたなびいているように見えて、俺は口を開いた。

「……………何処まで昇るんだ？」

俺の声に反応したのか、それともそこが行き止まりだったせいか、とりあえずサーシャは足を止め、眼下に広がる風景を見渡した。ゼエゼエ息を切らせながらついてきたクリフが、剣を杖代わりにへたりこむ。

サーシャが足を止めた場所は崖だった。下には鬱蒼とした森が広がり、その先には平野が続いている。あの世界地図によれば、森と平野の境がグロックワースとエレンシアの国境にあたる。平野の辺りにはチラ、と黒い点が動いているのが見えた。おそらくエレンシアの警備兵だろう。

そしてその向こうには街が横に広がっているのが見えた。

「……どうすんだ？いつとくが、俺は姿を消すような魔法は使わないからな」

「それは『使えるのに使わない』んですか？それとも『最初から使えない』んですか？」

鼻で笑うサーシャに俺は怒鳴りかけた。しかしぐつと怒りを飲み込む。下手に挑発されて魔法を使うことになったら困る。だが勘違いされると困る。俺は『使えるのに使わない』のだ。

サーシャは目を細めて平野に視線を向けた。そして後ろで息を整えているクリフを振り返る。

「……先ほどの道を左に曲がりました。ここからエレンシアの街の近くに出る抜け道があります」

「ぬ、抜け道……ですか？」

脇を通り過ぎて歩き出すサーシャに、クリフが声をかけた。サーシャは顔だけこちらに向けると、ニッコリと微笑んで頷く。俺はとたんに嫌な予感に襲われた。この女がこうやって笑うときは、いつもろくでもないことになる。

サーシャは視線をもと来た道に戻すと、はつきりとした声で言った。

「地下洞窟です。……そこを通れば、今日の夜にはエレンシアに着

きます」

しばらくして俺たちの前に現れたのは、まるで木の枝の陰に隠れるようにして掘られた小さな穴だった。さっきの崖の下の方、一番背の高い俺が頭から入るのもギリギリの小さな穴だ。サーシャは木の葉やクモの巣を避けると、小さな洞窟の中を覗き込んだ。

「さ、サーシャさん……あの、いくらなんでもこの大きさは……」

不安げな声を上げるクリフに、サーシャは穴の中を覗き込んだまま言う。

「大丈夫です。入り口は狭いですが、中に入ればフレイさんでも立つて歩けるくらいの広さですから」

そんなことを言われても、馬車の車輪ほどしかない穴の向こうにそんな空間があると誰が想像出来る。サーシャは俺とクリフの顔を交互に見るとクリフに視線を止めて、先にどうぞというポーズをとった。

「えっ、えっ、僕ですか!？」

「はい、レディーファーストは要りませんので、お先にどうぞ」

ニッコリと笑うサーシャ。これは悪魔の笑顔だ。助け舟を求めるクリフの視線を受け流し、俺は気づいていないフリをした。

サーシャに急かされ、クリフは半分涙ぐみながら穴の中に片足を突っ込む。俺もクリフもすぐに足が地面につくものと思っていたが、予想外に穴は深いようだった。剣を持って降りようとしていたクリフは、一度それをサーシャに預ける。

「あ、ちょっとお願いします……よい、しょっと」

クリフは地面に手をつくすと、足から腰、腰から肩と徐々に穴の中に潜っていく。転がり落ちたりするんじゃないかと淡い期待をしていたが、つまらないことにクリフは冷静に穴の中に降りたようだった。中でクリフの音が反響している。

「あ、けっこう広いですよ！空気も悪くないし……」

クリフの声を聞きながら、サーシャが顎で俺に指示を出す。さっさと入れということらしい。クリフは何やら感動したように声を反響させている。

「天井も、フレ伊さんぐらいなら大丈夫だと思いま……あいたっ！」

俺は洞窟に降りるフリをして、クリフの頭を蹴ってやった。フレ伊さんぐらいって何だ、ぐらいつて。

「足場にいるなっつの。邪魔だ、邪魔！」

適当にそう言って胸の辺りまで潜ると、思った以上に足場が遠かった。俺は頭をぶつけないように穴に潜る。次いでサーシャも中に降りてきた。

サーシャはセルマのところまで、俺の金で買ったランプを取り出した。器用に灯りをつけると、辺りの様子が浮かび上がってくる。

「……………うわぁ……………」

そう声を上げたのはクリフだった。俺たちの足下は滑らかな岩盤になっており、奥には水が溜まっている。いや、実際はゆっくりと

流れているのかもしれない。

近づいて覗き込むクリフに、サーシャが言った。

「ここは地下水脈になっていきます。平野の下に網の目状に広がっているので、エレンシアまで辿り着く人間は殆どいません」

「お前……そこに行くのか？」

俺の抗議の声に、サーシャは無然として頷いた。

「道は覚えています。実際に私はここを何度も行き来していますから」

行きましょう、とサーシャはクリフに声をかけて歩き出した。まるで何かで磨いたように滑らかな岩盤に手をつきながら、俺たちはサーシャを先頭にして歩き始める。二番目にクリフ、三番目に俺……。って、なんで魔術師の俺がしんがりなんだよ。

天井から滴り落ちる水滴がピチャン、ピチャンと音を立てた。なんとなく俺たちは無言になって道を進む。道はいくつも分岐していたが、サーシャは迷うことなくその中の一つに向かって歩き出した。

「……………」

不思議なものだった。サーシャの足に迷いは全く見られない。だから俺たちもサーシャの案内に疑いは持たなかったし、サーシャも何も言わずに黙々と進んでいくことが出来た。

水滴の音、そして何処からか入ってくる風の鳴き声。足下に流れる地下水の中では小さな魚が泳いでいる。この水流を辿っていけば大きな川に出るのかもしれない。

「……………おい、サーシャ」

ふと俺は足下から視線をあげた。サーシャは視線を前に向けたまま答える。

「何ですか？」

「……お前、どんくらい前から旅してんだ？」

きっかけも何もかもを端折って、俺は単刀直入にそう聞いた。クリフや俺はともかく、この女は全てが謎だ。あの世界地図、そしてリボルバー、あのセルマとかいう軍人崩れの武器商人。護衛業では依頼人の素性をとやかく言わないのが決まりだが、今回は事情が事情だ。クリフもまた興味を持ったようにサーシャに視線を向ける。

サーシャはしばらく無言で歩いていたが、後ろから刺さる視線に鬱陶しさを感じたのか、大きくため息をついて、ランプを更に高く掲げた。

「……どれくらい、と言われると私も答えづらいのですが……そうですね、フレイさんよりは長いと思います」

当てつけかよ、とつい口を滑らしそうになったが、サーシャの言葉には続きがあった。

「フレイさんやクリフさんは魔法や剣術を誰かに習ったんでしょう？……私は戦いに関する知識は全て、実践で覚えました。そう言えば、どれくらいの年月かは分かるはずですよ」

ゆらゆらと揺れるランプの光が、岩盤に反射して淡い色に浮かびあがった。俺とサーシャの間にいたクリフがふと首を傾げる。

「……あれ、でもそれじゃあ、随分小さい頃になりますよね？」

「……」

クリフの言葉にサーシャは答えなかった。何も言わず、サーシャは段になった岩場を飛び降りる。振り返ると、無言のままクリフに手を貸す。クリフは片手に剣を持って岩場を降りた。隣では地下水が小さな滝のようになって流れている。

俺もまた下へと飛び降り、先を歩くサーシャに視線を向けた。その背中はその以上のことを何も語らず、そしてまた、何も答えようとはしなかった。

「……着きました」

どれくらい歩いていただろう。先頭を歩くサーシャが、暗闇の中に一つの光が浮かぶ上がっているのに気づいて指を差した。その先には橙色に染まった光がぼっかりと浮かんでいる。どうやら入ってきた時のように苦勞をする必要はないらしい。その出口は三人が並んでも余りあるほどの広さがあった。

サーシャは足下が見えてくると、慣れた手つきでランプの火を吹き消した。そして靴の泥を払い落とすと、改めて出口の先に視線を向ける。

出口はやはり川へと繋がっており、その先には平野とエレンシアの街が見えた。どうやらここは平野の中にある小さな丘で、警備兵

が見張っているところからは死角にあたるのだろう。

夕焼けに染まる平野とエレンシアの街並みは昔、ジジイの家で見た、写真の色あせたものに似ていた。この一瞬を切り取れば、きっとあのような形になるんだろう。原理は今じゃ全く分からないが、そんな粹なことを考える人間が、ずっと昔にいたということだ。

風が後ろから平野へと吹き抜けたかと思うと、今度は逆に流れ始める。サーシャは髪をおさえながら言った。

「……エレンシアが別名『榛の街』と呼ばれるのはこの風景ゆえです
ね」

ひたすら感動しているクリフの隣で、俺は川の先に視線を向けた。向こうに一本だけ天を見上げた木が立っている。どうやら川沿いに道があるのだろう。木の下には古びた看板が立っていた。

サーシャはランプを荷物の中に戻すと、河原を上り、道の上へと出た。

「行きましょう。……もうすぐ夜になります」

俺はいつまでも風景に見惚れているクリフの頭を軽く殴って、サーシャの後ろ姿を追って歩き出した。

太陽が平野の西に消えるのを確認して、俺たちは街に入るようになった。エレンシアは敷地の周りに警備兵を置いているせいか、街に入る際に旅標の確認をとる必要はなかった。以前は一つ一つを確認していたと思われる詰め所も、今では人気がなくなっている。

街はグロックワースほど大きくはなく、こじんまりとしていた。大通りの周りに申し訳程度に飲食店が立ち並んでいるが、それ以上のものは何もない。エレンシアは旅人にとっては一度は行ってみたい街だと聞いていた俺とクリフは、街の様子に少々落胆してしまった。

サーシャは俺たちの落胆を完全に無視したまま、大通りを途中から奥へと曲がった。奥に入ると、今にも崩れそうな家が軒を連ねている。

「……まずは宿をとりましょうか。田舎の方から出てきたといえ、旅人だと悟られることもないでしょう」

「でも、これって本当に大丈夫なんですか……？もし旅人だって分かったら、僕たちどうなるんでしょう……」

クリフは半分屋根に穴の空いた廃墟を覗き込みながら、そう呟いた。俺は呆れたように、クリフに視線を向ける。

「警備の目をくぐって国境を越えたんだ、そりゃあ捕まればエレンシアの大監獄『淵霊嶺』えんれいりょう 行きだろ」

「え、えんれいりよ……むぐっ！」

「ば、バカっ！デカイ声を出すなっ」

素っ頓狂な声を出したクリフに、俺は慌ててその口を抑えた。こんな裏路地で、もし誰かに聞かれるとマズい。エレンシアの『淵霊嶺』という場所は、つまりはそうゆう所だった。エレンシアは法律

に厳しい。法に逆らったり、滅多なことをすればすぐに『淵霊嶺』行きとなる。そしてそこは、帰って来た罪人が一人もいないという、大監獄。

少し前を歩くサーシャはふと足を止めて俺たちを振り返った。

「……『淵霊嶺』ですか。たしかにあまり行きたくはない場所ですね」

普通の監獄ならば、食事が貧しい、労働が辛いなどの噂が流れるものだが、『淵霊嶺』はそういつた噂が一つもない。たった一言いえるのは、あの監獄に入るくらいなら死んだ方がマシだということだ。

ふ、とサーシャが何かに気づいて俺たちに目配せをした。夕日が沈み始め、裏路地は所々から漏れる家の薄明かりによつてかるうじて足下が見えるくらいだった。首を傾げるクリフに、俺はもう一度口を抑える。

しばらくすると俺の耳にもその音が聞こえてきた。足音だ。俺は弾かれたようにサーシャを見つめ返すが、サーシャの瞳は路地の先に向けられていた。

「……」

まさかこんなところにまで機械人形がいると思えないが、サーシヤはゆつくりと左手を腰にまわした。瞬時にリボルバーを構えることが出来る体勢だ。俺はじつと路地に視線を移す。クリフが呼吸困難でギブアップを求めているが、俺の意識はもう路地の先にあった。俺たちが完全に立ち止まったとき、スツと薄明かりの中にその姿が見えた。ボロ布を頭から被った男だ。身長は高く、体つきはしっかりしている。そいつは何か長い棒のようなものを布に包み、ゆつくりとこちらへ歩いてきた。

チラ、と視線がサーシャへ向けられる。サーシャは見えていないように視線を逸らしたが、男が俺とクリフの隣を通り過ぎたとき、何かを思い出したように振り返った。

「！」

その表情は、俺たちが今まで見たことのない表情だった。最初に浮かんだのは驚き、そしてそれは困惑に変わった。

「……………なんだ？」

俺の声が聞こえているのかいないのか、サーシャは男の姿が路地を曲がったのに気づくと俺に宿代の金を渡し、一言だけこう言った。

「……………宿はこの道を真っすぐ行った左側にあります。先に行ってください」

「おい、ちよっ……………！」

俺はわけも分からず呼吸困難だったクリフを離して、押し付けられた金を受け取った。サーシャは俺の制止も聞かず、男の後を追うように駆けていく。

残された俺たちの影が、困惑したように裏路地の壁に張り付いていた。

私は走りながら、後ろから聞こえる制止の声を振りきった。さきほど擦れ違った男の瞳を、私ははつきりと見てしまったのだ。ポロポロになつた布の間から私を見下ろすあの緑がかった瞳。それを私はよく覚えている。

男の影を追つて路地を曲がると、辺りは暗闇だった。向こうに大通りの灯りが見える。行き交う人々の姿に私は顔を顰めた。あの中に紛れ込まれては、いくらあの長身とはいえ探しづらい。

壁際に積んである空の酒樽を避けながら、私は大通りへと飛び出した。思わぬ攻撃のために、左手はリボルバーにかけてある。もつとも、これを抜いた時点で騒ぎが起ることは確実で、本当の緊急事態にならないかぎり、これを抜く気はない。

雑踏の中に出てくると、男の姿を完全に見失つてしまっていた。私は苛立つて、バレルを指先で弾いた。おそらくあつちも気づいているだろう。はつきりと顔を見られたのは不覚だった。

私は足を止め、辺りを見回す。

(……そうなるべし以外の人間がいる可能性もありますね……)

厄介なことになりそうだとため息をついて、私は再び路地裏へと戻ろうとした。私が指定した宿はマナーもサービスも最悪で、その代わり客の入りは少なく、店員の頭も弱い。警備の目を潜ってエレンシアに忍び込んだ私たちにはぴったりの宿だ。

戻ろう、と足を路地裏に向けたとき、向こうから歩いてきた人の体がぶつかった。混み合う夜の大通りではよくあることだ。しかし不覚にもこのとき片足を踏み出していた私は、相手とぶつかった衝撃でバランスを崩しかけてしまった。

「ああ、すいません……急いでいたもので。お怪我は？」

柔らかな笑顔を浮かべて、ぶつかってきた男は私の顔を覗き込んだ。まるで貼付けたような笑みだ。身長はさきほどの男ほどではないが、歳は私と同じくらいだろう。中肉中背、茶色の髪に優男風の笑顔を浮かべて、男は微笑んだ。

ふと、私は違和感を覚える。寒気、嫌な予感、とりあえずそんな感覚だ。そしてそうゆう感覚は、大体相手に下心があることを示している。女の勘としか言いようがないが。

「……いえ、大丈夫です」

「本当に済まない……今日はよく晴れたから、つい空を見上げてしまっていたんだ」

男の視線を追って空を見上げると、確かに群青色の闇の中に透き通った月が浮かんでいた。今日はどうやら満月らしい。野宿をしていればこうやって空を見上げる暇もあるが、街にいと建物や人の姿に目を囚われて、あまり空を見上げる機会も少ない。

男は優男の笑みで笑いかけた。飄々とした笑顔で軽く顔を傾ける。それだけで十分だということを、彼はよく分かっていた。そして私も、それで大体の事情は察した。やはりナンパだ。

男は謳うように言う。一昔前に舞台か何かで流行った物語の台詞のように。

「……今宵は本当に月の美しい夜だ。美貌と狂気を併せ持つ女神フイオレンティーナも、かのトウアス帝国の華と呼ばれたカタリナ嬢も、この白銀の輝きを放つ月の前にはしおれて見えるだろう」

もつとも、と男は言葉を切った。横流しの目線で、歩み寄ってきた相手に思わせぶりの視線を送る。

「その美しい月に照らされたキミはこの枯れた世に咲く、一輪の
リイ……。……。どう？月夜に咲くりイイの香りに誘われたこの道化
と一夜限りの戯れを……。」

私は差し出された右手に自分の手を重ねた。男の笑みが、少々意
味の違う微笑へと変わる。私はそれを観察しながら、ニツコリと微
笑み返して言った。

「……急いでいたのでは？」

ロウソクの火が風に揺れるように、男の笑みが揺らぐのを、私は
微笑みながら眺めていた。

第3章 1

その顔も声も、全く変わっていないかのように思えた。一瞬視線が交差した刹那、時間が遡っていったかのように、俺は動くことが出来なくなった。

喧噪がまるで何処か遠くの出来事のように、あるいは打ち寄せた波がひいていくように、全ての物事が俺の前から離れていった。

そしてそこにいたのは、あの頃の……あの思い出したくもない、小さな子供の頃の俺。どうしようもなく馬鹿で、純粹で……それでいて滑稽な、自分の姿。

- 笑う魔術師 -

「どこ行っちゃったんでしょうね、サーシャさん……」

テーブルを挟んで反対側に座っているクリフが、もう何度目かも分からない台詞を口にした。俺はもう答える気力すら失って、窓ガラスに視線を向けた。俺たちのテーブルは窓の隣に置かれていて、路地の様子がよく見える。時折人が行き来しているが、サーシャが戻ってくる気配はなかった。

俺は食い終わった皿をフォークで叩く。

「別にいいだろ、あんな女。いない方がよっぽどマシだ」
「ふ、フレイさん。言い過ぎですよ……」

恐々と反論するクリフ。俺がギツと睨みつけてやると、慌てて食事に視線を落とした。俺はため息をつく、椅子に背をもたれて呟く。

「大体あの女、謎が多すぎなんだよ。なんで普通の旅人が世界地図にリボルバーなんて持ってんだ？ 非合法で手に入れたとしてもおかしいだろ」

俺の言葉に、クリフがふと顔をあげた。こいつにも思うところはあるのだろう。ガラス越しの路地の向こうに視線を向けて、何かを考えるような表情を浮かべている。

「……セルマさんのところで手に入れたわけではないみたいですし」
俺は大きく息を吐くと、頬杖をついた。思えばセルマとかいう女と知り合いなのも奇妙な話だ。俺もある程度は裏社会のことも知っているつもりだが、あの女のこととは出会って初めて知ったと言ってもいい。

「……たしかに依頼人のプライバシーを穿らないのが護衛の決まりだが、秘密主義すぎるぞ、アレは」

俺はそう言いながらサーシャに関する情報を頭の中に並べてみる。年齢は俺と同じくらいで、世界地図やリボルバーのような過去の武器や道具を持っている。昔から旅をしているらしく、その辺の知識にも狂いはない。頭もそこそこキれる。

ふとクリフが何かを見つけたように顔をあげた。しかし俺はその

ことに気付かず、ため息を吐いてこう言った。

「分かっていることと言えば……あの女の戦闘能力は化け物だつてことだな」

「……誰が化け物なのか、もう一度言っていただけですか？」

今まで聞いたことのないような、ある意味で優しい言葉をかけられて俺は震え上がった。反対側から見ていたクリフが、苦笑を浮かべて俺の後ろに声をかける。

「サーシャさん、おかえりなさい。……遅かったですね」

軋む首に無理を言わせて振り向くと、貼付けたような笑みを浮かべるサーシャの姿があった。俺は次に飛んでくる毒舌や罵詈雑言を予想して肩をすくめたが、意外にもサーシャは隣のテーブルに腰を下ろすと、後ろにいた男に向かって反対側の席をすすめた。

「……ああ、取り込み中に悪かったかな？」

「いえ、構いません。……どうぞ」

サーシャに促されて、俺たちの隣のテーブルに腰を下ろした男は、栗色の長い髪をしていた。軟派な男だと一目で分かるような笑みを浮かべ、サーシャを見つめている。前を向いていた俺はそいつが隣にきた瞬間、頭が真っ白になった。

「おまつ……アイルークっ!？」

俺の咄嗟の叫びに、男……いや、アイルークは今気付いたと言わんばかりの表情で俺に視線を向けた。俺とサーシャを交互に見て、がっかりしたように肩を落とす。そしてさっきのサーシャに対する

口調とは全く違う声音で呟いた。

「……なんだ、フレイのお手つきか……」

「てめーっ！数年ぶりに会った一言目はそれかあっ！！」

一発殴ってやろうと身を乗り出す俺を、クリフが慌てて抑える。

サーシャは俺にチラと視線を向けると、呆れたようにため息をついた。

アイルークはふざけた優男の表情でサーシャに話しかける。

「ああ、コイツは実は俺の同郷で……爺さんが一緒なんだ。まさかサーシャさんのコレだとは思わなかったなあ」

コレ、と言いながら親指をたててみせるアイルーク。サーシャは俺に視線を向けると、慌てる様子も嫌がる様子も見せず、スッパリと言い放った。

「勘違いです」

バツサリと切って捨てた発言に、俺を抑えていたクリフが笑いを吹き出しそうになった。決めた、アイルークを殴ったら、今度はお前に蹴りを入れてやる。

アイルークは瞬きをすると、落ち着き払ったような態度に戻った。

「あれ、そうなの？……ああ、でもそれなら良かった。麗しきリリイが従兄弟の毒牙にかかっていると思うと、僕も心が痛むからね……」

「誰が毒牙だっ！この万年発情期野郎っ！！」

「若いって素敵なことだよ。少なくとも娼館に行くしか能のない野

暮な男よりはマシさ。ねえ、リリイ？」

何がリリイか知らないが、話題を向けられたサーシャは露骨に嫌そうな顔をした。汚いものを見るような目で俺とアイルーク、ついでにクリフを見る。……ちなみにクリフはとぼちりだ。

サーシャはため息をついてアイルークに向き直った。

「……貴方はフレイさんの従兄弟、ですか？」

「ん？ああ、そうだよ。……あの『過去の予言書』を作ったフアーレン爺さんの孫さ。あの爺さん、娘息子は沢山いるんだ。爺さんの時代は一夫多妻の世の中だったから。おかげで、孫も何十人といるんだよ」

俺もアイルークもその中の一人だ。おかげで従兄弟は山ほどいる。顔も名前も覚えていない奴もいるくらいだ。クリフが納得したような顔でアイルークを見る。

「どつりで、あんまり似てないんですね。……あの、色々と」

おい、色々ってどうゆう意味だ、色々って。

アイルークの話を聞いていたサーシャはふと俺に視線を向けた。

「……それだとフアーレン様と正妻の孫にあたるフレイさんは家長に当たるのでは？家を継がなくていいんですか」

ふと俺は殴りかかろうとしていた手を止めた。俺を抑えようとしていたクリフが拍子抜けしたように俺を見上げてくる。俺は何も言わず、椅子に腰を下ろした。

「別に……どうだっていいだろ」

テーブルにあったグラスの水を飲み干すと、それを見つめていた
アイルークが苦笑した。クリフはおどおどしながら向かいの席に座
る。サーシャは軽く首を傾げたが、それ以上のことを聞こうとはし
なかった。

アイルークが静かに言う。

「……普通の家だとそうなるんだけどね。僕ら魔術師の世界では少
し違うんだ。家長になるのは一番能力的に劣っている者だけだから
……おいクリフ、部屋の鍵貸せ」

俺はグラスをテーブルに打ちつけると、席を立った。クリフから
部屋の鍵を奪い取ると、食堂に背を向けて歩き出す。

「……ふ、フレイさん？」

クリフが戸惑ったように制止の声をあげるが、恐々した声に立ち
止まってやるつもりはない。擦れ違ったサーシャは何かを考えるよ
うに俺の背中を見つめていた。

苦笑するアイルークの声が後ろから響いてくる。

「能力が劣る者が家長となって家に留まる。有能な魔術師は宮廷に
仕えたり、城仕えになる。ファーレンの孫ってレットルがあると引
く手あまただからね……」

そうだ。あのジジイの孫だと言えば、生きる道なんていくらでも
あった。あのジジイの家系に生まれて来ただけで、その血をひく人
間の将来は安泰だった。

たった一人、一番才のない人間を除いては。

「爺ちゃんっ！！爺ちゃんっ、大変だよっ！！！」

階段を歩きながら思い出す。あれはたしか、俺がまだ10にも満たない頃のことだ。いつものように俺を除け者にして遊んでいた子供達が、珍しく慌てた様子で駆け込んできた。たまたま俺の……正確に言えば、俺と俺のお袋の家にいたジジイは、駆け込んできた子供に目を丸くした。

「おお、どうしたミハイル。何かあったのか？」

椅子からゆっくりと腰をあげたジジイを、子供達は取り囲んだ。その必死の形相を見て、俺はふとアイツがこの場所にいないことに気付いた。いつもなら取り巻きの連中がアイツの後ろを金魚の糞のようについてまわっているのに、と。

「召喚の練習してたら……だれが一番強い精霊を使役に出来るかって話になって……」

「とにかくこっちに来て、爺ちゃん！」

足の悪いジジイが子供達に引つ張られていく。俺は咄嗟にその脇を駆け抜けた。後ろから子供達が制止の声をあげるが、そんなものを気にしているわけにはいかなかった。

「くら、フレイー!!」

後ろからジジイの声までも聞こえてくる。それでも俺が足を止めなかったのは、もしかしたら何かを感じていたからかもしれない。俺は家を出ると辺りを見回し……そして足を止めた。

いつも遊び場になっている大きな一本木の下には異様な空気が渦巻いていた。空中に描かれた魔法陣が紫色という、本来の呪文からは有り得ない光を発し、その下には一人の子供の姿があった。

『……カナル・エミナ・ラ・フィリオーネ……』

俺は足を止めた。近寄れないほどの強力な圧力が両肩にのしかかってきたのを感じたからだ。体を押えつけるような力に、膝が崩れる。胃をひっくり返されたような吐き気が襲う。しかしそれ以上に俺を襲ったのは、驚愕と恐怖だった。

目の前で俺に背を向けて立っているアイツは、圧力をものともせず、真つすぐに魔法陣を見つめている。

「……っ！」

いけない、と本能でそう思った。咄嗟にアイツの名前を呼ぶが、アイツは気付いているのかいないのか、振り返る様子はない。

『……カナル・エミナ・ラ・フィリオーネ……』

子供とは思えない声でアイツは言う。呼びかけている相手は、俺たち魔術師の扱う召喚魔法の中で最上級の精霊、レイジン鈴人だ。

ふと体にかかる圧力が増して、俺は悲鳴にならない声をあげた。目を瞑った刹那、微かに聞こえた言葉を俺は今でも覚えている。

「カナル・エミナ・ラ・フィリオーネ！ 汝、我の使役に下れっ！」

「……悪いね。フレイのやつ、この話になるといつもああなんだ」

フレイさんが去っていったのを確認して、彼はそう言った。クリフさんはまだ困惑した表情を浮かべている。私は椅子に座ったまま、ふと野宿をしたときにフレイさんと話した言葉を思い出した。

魔術師は魔法以外に興味を持たない。彼らは一族の中で英才教育を受けてきた者が殆どで、言葉は悪いが、子供の頃から高給取りになるために育てられていると言っても過言ではない。魔術師同士の結婚が多く、近親相姦に近い形で血族が繋がっていることもよくあることで、一族はそうして閉鎖された環境を作り上げていった。

「いえ、私も不躰な質問をしてしまいました」

私はそう言って、手元に視線を落とす。

私には、最初から奇妙に思っていたことがあった。ファーレン様と正妻の孫であるフレイさんが、何故どこかの宮仕えにならず、旅人として放浪しているのか。こんなに条件の良い人物を国が欲しが

らないはずはない。

隣のテーブルに腰を下ろしたクリフさんがアイルークさんに向かって言う。

「……でも、あれ？そうするとアイルークさんは旅人じゃないんですか？」

「ん？ああ……僕は一応、とある人に仕えてるんだ。と言っても、その人と一緒に旅をしてるから……ま、旅人みたいなものだけだね」

旅人。私はその言葉を聞いて顔を顰めた。嫌な予感が的中したような気がして、背筋が固くなる。

「……では、貴方も国境越えを？」

アイルークさんは私の方にニツコリと微笑みかけて頷いた。クリフさんが驚きの声をあげようとするのを、私は視線で制する。慌てて口を覆ったクリフさんは辺りを見回して安堵のため息をついた。私はテーブルを挟んだ反対側にいるアイルークさんに視線を向ける。

「……エレンシアに旅人が集まっているように見えたのですが。何かあるのですか？」

「ん、ああ……もしかして『あれ』のことかな……」

アイルークさんはそう言ってグラスに注がれた水に口をつけた。優雅に振る舞う様子は本当にフレイさんの従兄弟だとは思えない。たしかに軟派だが、女性の扱いに慣れてるのはなんとなく理解出来た。フレイさんの真逆の人間と言えるかもしれない。

アイルークさんは私に視線を戻すと、辺りを憚るようにして顔を近づけた。

「……実はね、今、エレンシアの闇市場で噂になっているんだ」
「……噂？」

声が届かないのか、クリフさんが首を傾げている。私はそれを無視してアイルークさんに問い返した。

「そう。……ここに来るってことは、エレンシアの『裏』の顔は知ってるよね？」

公国エレンシアの裏の顔。それはもちろん知っていた。旅をしている人間で知らない者は殆どいないと思う。エレンシアは清く美しい国を目指しているが、格差社会によって裏の世界も成長し、闇取り引きの聖地のような場所だった。武器の密輸や売春、麻薬取引……この世の悪という悪を寄せ集めた街。それが公国エレンシアの裏の顔だ。

そして逆を言えば、そんな汚い社会があるからこそ『淵霊嶺』のような大監獄も存在する。

「ええ……ある程度は」

私の言葉に、アイルークさんは真顔に戻った。おそらくトップシークレットなのだろう、もう一度辺りを警戒してから、囁き声を発する。

「……じゃあコロッセオのことは知ってるね」

エレンシアの闇市場の奥には、金持ちの好き者が人間同士を戦わせて金を賭ける、コロッセオが存在する。噂は聞いたことがあった。月に一度行われるコロッセオの戦いで数十人の人間が死に、生き残った者は莫大な報奨金を手に入れる。死んだ者達はコロッセオの裏

手にあるドブ川に捨てられ、川は人間の血で真っ赤に染まるのだという。

コロッセオの名前を口に出せば、そのテの人間だと思われて捕まる場合がある。私は辺りを警戒しながら頷いた。アイルークさんは続ける。

「今まで、コロッセオの勝利者には報奨金が渡されてきたんだ。それが……つい数ヶ月前、全く別なものに変わってしまった」

食事を終えた数人の客が、私たちのテーブルの脇を通っていく。私たちは会話を一旦中断させると、彼らが声の届かない場所まで去っていくのを確認した。アイルークさんはその茶色の瞳で私を見つめる。

真顔で口にした彼の言葉は、私の思考を一瞬停止させた。

「分かるかい？……『過去の予言書』だよ」

「！」

私は咄嗟に顔をあげた。そう考えれば、全てのことに関点がいく。

「『過去の予言書』の名を語る偽物は沢山あるけど、どうやら此処にあるのは本物らしい。……それは此処に集まる冒険者達を見れば分かるだろう？」

アイルークさんの言葉に私は頷いた。コロッセオに勝利して、『過去の予言書』を手に入れる。それは一々予言書の移動ルート調べ上げるより、ずっと簡単な方法だった。どの国も喉から手が出るほど欲しがる魔法の書。各国がこぞって力のある人間を送り出しているのだろう。

「フレイを連れてここに来るってことは、キミも『過去の予言書』目当て、ってことかな？」

私は顔を離すと、椅子の背もたれに体を預けた。グラスに注がれた水を口にして、喉を潤す。いつの間にか喉が渴いていたことに、私は今気付いた。

「……………そうですね。そう思って頂いて間違いはありません」

『過去の予言書』への手がかりが掴めた。私は隠し持ったりボールバールのバレルに指先で触れる。硬質な感触とともに、私の体の中に一つの意志が浮かび上がった。

『過去の予言書』を見つけ出し、手に入れるという確乎たる意志が。

「そうか。……………キミ達が『過去の予言書』を手に入れたっていうなら、僕も出来る限りの協力はするよ」

アイルークさんは私の顔を覗き込み、ふと笑う。

「美しい女性の役に立てるなら、僕としては感無量だしね。それに……………アレはもともとフレイに受け継がれるべきものだったんだから……………」

稀代の魔術師ファーレン。その血族に生まれて来た者達は、それだけで将来を保証されているようなものだった。実際にどの子供も魔術に関しては有能で、遊び半分に魔法を使うことは日常茶飯事だった。

だが、あの時は違っていた。俺は今でもはっきりと覚えている。

「……フレイ？」

問いかけられて俺は我に返ったんだ。顔をあげると、こっちに手を差し伸べるアイツの姿があった。ニツと笑った表情は端から見れば子供の無邪気な表情に見えたかもしれないが、その時の俺には世にも恐ろしい顔に見えたのだ。

「爺ちゃん、こっちこっちっ！」

少し遅れて、ジジイと子供達が走ってくる。俺は呆然としたまま目の前のアイツを見上げているしかなかった。アイツはいつまで経っても立ち上がるうとしない俺に首を傾げたが、ジジイの姿を見つけるとすぐにそっちへ駆け寄って行った。

「爺ちゃん！僕やったよ、召喚できたんだ！！しかも鈴人の『フィオ』だよ！」

無邪気にはしゃぐ様子は、今さっき鈴人と対峙した時と全く違っていた。俺はフラフラと立ち上がると、歓声をあげる子供達の輪へと近づいて行く。

ジジイは目を丸くしてアイツの頭に触れると、何度も何度もその頭を撫でた。

「おお……なんと、『フィオ』は鈴人の姫神ではないか……」
「えへへ……、凄いや？」

召喚術の使役する精霊にはランクがある。そのなかで鈴人は一番上、城使いのエリート魔術師達でも召喚出来ない、強力な精霊だった。また鈴人にはそれぞれ階級があり、階級が高ければ高いほど力は強い。

アイツが喚び出した『フィオ』は、鈴人の中でも2番目に数えられる姫神だった。

「ああ、お前は儂より筋がいいかもしれん……知っておるか？『フィオ』の夫はアレクス・エミナル・デルヴァーズ。『デルヴァ』と呼ばば分かるだろう。あれは儂しか召喚できん。お前はその次に強い精霊を使役に下したのだよ」

子供達がわつと歓声をあげた。俺はそれ以上近づけなくなり、輪の手前で足を止める。アイツはジジイに頭を撫でられながら、嬉しそうに笑っていた。俺はそれを見つめながら唇を噛む。

一族の中で俺は出来損ないだった。ファーレンと正妻の息子、つまり俺の父は相当に力のある魔術師だったが、若くして亡くなり、俺と母親だけが残されたのだ。

周りの人間はもちろん俺に期待した。しかしある程度物心がついたころ、ジジイが俺に父親ほどの才能がないことに気付いた。そこから周囲の俺に対する反応は一気に変わっていった。

一族の出来損ないは、家長として家に残る決まりになっている。どこかに仕えようにも、雇い手が見つからないからだ。その欲しくない役割が俺のもとに転がり込んでこようとしていた。

ジジイは有能な孫を可愛がりながら、ふと俺に視線を向けた。その瞳の冷たさは、あのジジイが死んだ今でも思い出せる。

ジジイは言う。

「ああ、やはりお前は筋がいい。……お前のような孫を持って、僕は嬉しい限りだよ、アイルーク」

アイルーク・ハルト。それが一族の中で最も有能で最もファールンに可愛がられた『アイツ』の名前だった。

第3章 2

言葉は思ったよりも冷たく響いた。シンと静まり返った部屋の中に、言葉の余韻が反響している。でもそれを言った俺自身は気付いていなかった。その意味と、サーシャの瞳に。

薄暗い部屋の中、扉から差し込む光は眩しい。その光を遮るように立っているサーシャの姿は殆どシルエットにしか見えなかった。

サーシャは言う。淡々とした言葉で。

- 止まった時間の中で -

アイルークと名乗ったあの男の人は、宿で食事をとると、別な場所に宿をとっていると言って帰って行った。『サーシャさんが止めるのならこっちに泊まってもいい』なんて言っただけ、もちろんサーシャさんの冷たい視線を受けると、肩を竦ませてまた明日、と笑っていた。本当にフレイさんの従兄弟だとは思えない。

僕はサーシャさんと一緒に二階に上がると、部屋まで案内した。鍵を手渡すと、ふとサーシャさんが向かいの部屋に目を止める。

「……フレイさんは向かいの部屋ですか？」

「あ、はい。どうしても個室がいいって……。あ、ちなみに僕は隣の部屋なんで、何かあったら言ったださいね」

そう言って僕は自分の部屋に戻ろうとした。久しぶりにベッドの上で眠れると思うと、気分が軽くなってくる。ドアに手を伸ばすと、ふとサーシャさんがこちらに視線を向けた。

「……すみません、クリフさん。部屋に戻る前に、少しお話したいことがあるんですけど」

いいですか、と言うサーシャさんの表情は真剣だった。僕は頷いて、ふと首を傾げる。サーシャさんのその表情が、さっきアイルークさんと話していたときのそれだったからだ。

サーシャさんはフレイさんの部屋の扉を叩き、一言二言言葉を交わして、中に入る。僕は慌ててサーシャさんの後を追った。まだフレイさんは寝ていなかったんだろうか。

「……し、失礼します……」

部屋の中は薄暗かった。廊下から差し込む光が部屋の中をかるうじて照らしている。窓際のベッドの上には、起こされたのか単に機嫌が悪いのか、こっちに視線を向けずに唸るフレイさんがいた。

「……んだよ。さっきの話なら、アイルークから聞いただろ。話す気はねーぞ」

部屋の中に漂う不機嫌なオーラに僕は一步後ずさった。けれどサーシャさんは気にした様子も無く、立ったままフレイさんを見下ろしている。その背中には何処かピリピリした空気が伺えた。

サーシャさんは抑揚の無い声で言う。

「……『過去の予言書』の情報が入りました」

「っ!？」

「えっ……本当ですか!？」

僕はついそう叫んで、慌てて後ろ手で扉を閉めた。フレイさんは一瞬反応した後、サーシャさんの顔を見上げて、近くにあったランプに魔法で火を点す。辺りが少し明るくなって、お互いの顔がかるうじて見えるようになった。

サーシャさんは僕とフレイさんの顔を交互に見て、頷く。

「ええ。……なんでもコロッセオの報奨金の代わりにされているとか」

エレンシアのコロッセオ。この国では口にはいけない単語をサーシャさんが簡単に口に出した時、フレイさんの表情が険しくなった。僕も啞然とした表情で、淡々と話すサーシャさんを見つめる。フレイさんはサーシャさんを見上げて言う。

「……まさかお前、俺とクリフでそれを獲ってこいなんて言う気じゃないだろうな……?」

「えっ……えええっ!？」

僕は咄嗟に叫んだ。きつと僕じゃなくても、普通の人なら同じ反応をしたはずだ。だってあのコロッセオは『死の闘技場』とも呼ばれるくらい、残酷で冷徹な、それこそ死と生のどちらかしかないこの世の地獄のような場所なんだから。

僕は体の中から血の気が引いていくのを感じた。だってあそこは『負ける』なんて言葉は存在しない。どちらかが死んでしまえば終わりの世界なんだから。

チラ、とサーシャさんが僕に視線を向ける。僕は勢い良く首を左右に振った。だって、僕があんなところに出たって、すぐに殺され

てしまう。

「……フレイさんは？」

サーシャさんはため息をついて、フレイさんに視線を向けた。フレイさんはじっと足下に視線を向けて、そして苛立ったように息を吐く。その表情は怒っているようなのに、何処か遠くを見るようなそんな瞳をしていた。

「……俺はお前らが思ってるほど、有能じゃねーよ」

「……！」

僕はふと首を止めた。視線を逸らすフレイさんは、まるで取り残された子供のようにだった。

「……それはどうゆうことですか？」

「どうもこうもねえっつーの。……お前の見込み違いってことだ」

サーシャさんはふと顔を顰めた。その表情に僕は二人を見比べる。いつもの喧嘩とは明らかに違う空気に、僕はなす術もなく、ただハラハラしているしかなかった。

サーシャさんはじっとフレイさんを見つめる。顔を上げようとしていないフレイさんの姿は、サーシャさんにはどう映っているんだろう。

「怖くなったんですか」

僕ははっとしてサーシャさんに視線を向ける。どうしてそんなに過敏に反応したのかは分からない。それが僕自身の気持ちだったからかもしれないし、フレイさんの怒りを決じ開ける禁句だったからかもしれない。どちらにしても、僕の仲裁は間にあわなかった。

「っ、ふざけんなよっ!!」

突然、サーシャさんの体が突き飛ばされた。フレイさんは突き飛ばした手でそのままサーシャさんの襟首を掴んで持ち上げる。僕は咄嗟に体が動いたけれど、二人を止めることは出来なかった。

怖かったんじゃない。二人の間には、僕が仲裁に入るような隙がなかったんだ。

「あのジジイの孫として予言書探しを手伝って、あのジジイの孫として予言書を取り返してこいつてか!？」

襟を掴まれ、サーシャさんは顔を顰めた。けれどその瞳は鋭い。まるで相手を射殺さんとするような、そんな目をしている。

「手伝ってほしいならイルークにでも頼めばいいじゃねーか! アイツだってあのジジイの孫だ、俺よかお前には使いやすいだろっ!

「!」
「……」

サーシャさんは何も言わずにフレイさんを睨みつけている。僕は何も言えないまま、フレイさんの怒鳴り声を聞いているしかなかった。今のフレイさんにはきつとどんな言葉も耳をかしてもらえない気がした。

フレイさんは何も言わないサーシャさんを揺さぶりながら吐き捨てる。

「……それともアレか、俺たちはお前にとっちや捨て駒か」

僕はサーシャさんを見る。その横顔には困惑の色も、恐怖の色も、

憤りの色も浮かんでいなかった。怖いぐらいの無表情、そして冷徹な色の瞳。笑うときは全く違うその顔。僕はサーシャさんのそれが一番苦手だった。

微かに開かれた唇が、言葉を紡ぐ。その瞳ははっきりとフレイさんを睨んで。

「……そうですね」

口にされた言葉は、あまりにも残酷だった。

「！」

「えっ……」

僕もフレイさんも言葉をなくした。サーシャさんはフレイさんの手を振りほどくと、何事もなかったかのように服を叩く。セミロングの髪をかきあげて、いつもの表情を浮かべる。強気で、少しだけ人を見下しているようで、でも本当は優しい、そんな表情。

でも、今は少し違う。

「私にはやらなくてはいけないことがあります。そのためなら、私はどんな残酷なことだって出来る……」

サーシャさんはそう言うと、フレイさんに背を向けて歩き出した。ドアを開くと、向こうから廊下の光が差し込んでくる。強い光に目がくらんで、サーシャさんの姿は影のように真っ黒だった。

僕は何か言わなければと口を開く。けれど喉を突いて出てくる言葉は陳腐なものばかりで、僕は言葉を飲み込んだ。

サーシャさんは言う。淡々とした表情で。

「力のない者はいりません。帰るといふのなら、帰り道くらいは

教えましょう。……契約も、無かったことにします」

朝の日差しは僕の目に染みだ。僕は白み始めた空を見上げてため息をつく。

朝食は僕が一番先に取った。他の二人は予想通り、時間通りに食堂へ降りて来なかった。サーシャさんはもうすぐアイルークさんと合流する予定だから、もしかすると何処かで食事をとるのかもしれない。フレイさんはきつと食事を部屋まで運ばせて、そこで食べるんだろう。

僕は昨日の夜のことを思い返す。フレイさんの従兄弟との再会、苛立ったフレイさんの姿、そして残酷なことを言うサーシャさん。捨て駒と言われたのには、流石に僕も堪えた。まだ出会って間もないし、お互いのことだって全然知らない間柄だけど、まさかそんな風に思われてるなんて思いもしなかったから。

『それともアレか、俺たちはお前にとっっちゃ捨て駒か』
『……そうですね』

サーシャの言葉を思い出して、僕はつい目尻を擦った。確かに僕は弱いし、臆病だし、フレイさんやサーシャさんの足手まといなのも分かっている。でも、そんな風に思われるのは辛いんだ。

まだ朝も早い時間帯だから、街には人の姿が少ない。僕は人目を避けるように歩きながら、街の中心にある大広場の前まで来た。目の前には針の止まった時計塔が聳え立っている。朝もやで文字盤は見えないけれど、初めて見た時計塔に、僕はトウアス帝国が世界を統一していた頃の平和な時代の面影を見たような気がした。

大広場の中央には丸い噴水がある。もともと、水を汲み上げる動力の使い方が分からないため、水は溜まったままだった。緑色の藻が、水の中で揺れている。

僕はその淵に腰掛けて、涙でぼやける視界を拭った。護衛の仕事がなかった時や、依頼人に呆れられた時、僕はいつも悲しみを紛らわせるように唄を歌う。鼻歌程度のものだけなど。

「ひとつ星のー、……御名のもと」

ずっと昔に教えられた。悲しいときは唄を歌え、苦しいときは空を見上げろって。

空は少し曇っているけれど、時折雲間から差した光がまるで神様のお告げのように空気を輝かせている。風のざわめきは音の外れた僕の唄をかき消してくれた。

「……駆ける風のー、ざーわめき」

人の足音が増えてくる。きっと人々が起き出して、今日一日のために働き始めるんだ。僕は空を見上げながら思う。もうすぐ日が昇ってくる、と。

「憶いー、願う……清き、こころ」

ふと、エレンシアの街並に視線を戻した僕は、広場の端に不思議なものを見つけた。広場の西側は公園のようになっていて、そこに

ワンピースを着た少女が立っている。頭の白い帽子が朝日に照らされてきた。こちらに背を向けているけれど、見る限り14、15歳くらいだろう。長い髪を揺らしながら、じっと動かない。

(緑の髪……染めてるのかな?)

僕は首を傾げた。それにしてもこんな朝早くから何をしているんだろう。友達でも待っているんだろうか。

「誰が、ためーに………っ!？」

歌っていた僕は、咄嗟に腰を上げた。なぜなら、僕の視界に入っていた少女の体から、急に力が抜けたからだ。膝が崩れ、体が前のめりに倒れる。まるで急に意識を失ったような、そんな感じに。気付くと僕はその子のところに駆け寄っていた。

「だっ、大丈夫!？」

抱え上げると、その子の体はまるで死んでいるかのように冷たかった。その小さな体を仰向けにすると、その子はうっすらと目を開く。

真つ白な肌に整った顔立ち。物語から出て来たのかと思うくらい綺麗な子だった。真つ赤な唇が動いて、視線が僕を捉える。

「……ジエイ……？」

掠れた声がそう呟いた。僕は慌てて辺りを見回した。名前から考えると、この子の男友達か、お兄さんか、お父さんか……いやでもお父さんと呼び捨ては普通しないから……あっ、でもそうするとお

兄さんもだ。でも喧嘩中だとよくあることだし、お父さんと喧嘩中ならそうゆうこともあるかもしれないし……って、そうじゃない、そうじゃなくて。

僕は周りにその『ジエイ』っていう人がいないのを確認して、首を横に振った。

「……ち、違うよ。僕はその人じゃない」

僕がそう言うと、女の子は目を見開いて僕を見た。驚いてるんだろっか。

「誰……?」

「えっ、僕は……僕は、クリフ。クリフ・パレスン。キミは……」

少女は透き通った瞳で僕を見つめた。本当に凄く綺麗な女の子だ。綺麗に染められたワンピースと真新しい靴。もしかしたら何処かのお嬢様かもしれない。

その子はゆっくりと体を起こすと、僕をじつと見つめた。そう見つめられるとなんだか恥ずかしいんだけどな……。

「『クリフ』?……『クリフ』、『クリフ・パレスン』……」

「う、うん。……どうかした?」

少女は僕をじつと見る。あまり表情を変えないけれど、笑えばきつと可愛いのにと僕は思う。

「わたし……私、は、シルヴィ。シルヴィ・フェブライン」

彼女はそう言ってゆっくりと立ち上がった。僕は立ち上がって砂を払うと、傍に落ちていた帽子を手に取った。何度か叩いてシルヴ

イに手渡す。

「急に倒れたからビックリしたよ……具合は大丈夫？」

シルヴィは僕の顔と帽子を見比べて、そして頷いた。顔を隠すようにして帽子を被ると、しっかりとした足取りでクルツと回ってみせる。ワンピースの裾がふわっと膨らんで、まるで踊り子か何かのようだ。

シルヴィは自分の体を見回して頷く。

「うん。体に異常なし。……シルヴィ、もう大丈夫」

「そっか、良かった。……誰かと待ち合わせしてたの？『ジエイ』、って言ってたけど……」

僕は少し屈んでシルヴィの顔を見つめる。それは僕の癖だった。自分より小さい子が相手だとどうしてもこうやって目を合わせてしまふ。特にシルヴィは大きなツバの帽子を被っているから、屈まないと表情が見えなかった。

シルヴィは辺りを見回して、そしてもう一度僕に視線を戻す。

「『ジエイ』……ここで待ってるように、って言ってたの」

「『ジエイ』って、友達？それとも家族？」

僕の言葉にシルヴィは首を横に振った。目をパチパチさせてこっちを見上げてくる。

「……『ジエイ』は、『ジエイ』よ」

「……うん？」

微妙に噛み合わない会話に僕は混乱した。何度問いかけてもシルヴ

イは『ジエイはジエイだ』としか言わないし……。僕は途方に暮れながら、とりあえずそのことは保留することにした。

「じゃあ、とりあえずその『ジエイ』って人を探そう。あんまり一人でいると危ないよ」

シルヴィは首を傾げると、しばらくして口を開いた。

「……ダメ。『ジエイ』の言ったことは絶対。だからダメ」

僕は首を傾げながら辺りを見回した。だんだん人通りは多くなつて来てるけど、シルヴィの待ち人が来る様子はない。それに歩き回って、何かの間違いで旅人だって気付かれたら、きつと『淵霊嶺』行きだ。

僕は慌てて首を振る。

「そ、それじゃあ……。あ！あの噴水の所で待つてよう。待つてるようつて言われたのなら、きつとすぐ戻ってくるよ」

「……」

シルヴィは何かを考えるように地面に視線を向けた。硝子みたいな綺麗な瞳が地面と睨み合い、しばらくしてまた僕の顔を見上げる。

「うん、それなら『ジエイ』の命令に反しない。……了解しました」

第3章 3

噴水の前に座ったシルヴィは本当に何処かのお嬢様のようなだった。僕は隣に座って、彼女の待ち人を待っていたけれど、一向にその『ジエイ』って人が来る気配はない。

時間は刻々と過ぎていく。人通りの少なかった広場に子供達が集まり始め、大通りには沢山の人が行き来し始めた。空を見上げるともうすぐ昼なのだろう、太陽は真上に登っている。

- 優しい剣士と小さな少女 -

「……キミはこの街に住んでるの？」

幾人かの人々が広場の前を通り過ぎるのを眺めながら、僕はシルヴィに問いかけた。彼女は身なりの良さからすると、エレンシアの上流階級のお嬢様のようにも見える。けれど貧富の差が激しいこの街では、その姿はかえって浮いていた。

街中は本当に治安が悪いらしい。さっきもボロボロの服を着たお爺さんが僕らの前を通り過ぎていった。チラ、と虚ろな目をシルヴィに向けていたけれど、彼女は気付いただろうか。

「ううん」

「え……じゃあ、家は何処？」

たしか、公国エレンシアは都以外でこんなに栄えている街はない。北には標高の高い山脈があり、フレイさんの言っていた『淵霊嶺』もそこにある。南は気候がいい平野が広がっているけれど、川もなければ海に面してるわけでもないから、交通の便が悪くて栄えない。代わりに牧草地が広がっているって聞いたことがある。

シルヴィは一度広場をぐるっと見渡して、北西を指差した。

「……あっち」

「あっち、って……。あっちは山の方じゃ……」

僕の呟きに、シルヴィは首を左右に振った。

「山の、もつともつと先」

僕はシルヴィの白い指先を追って、北西に視線を向ける。もちろん都の建物に邪魔されて見えないけれど、たしかサーシャさんの地図によれば、エレンシアのずっと北西にあるのは『アルジェンナ国』。世界を治めていたトウアス帝国の領地だ。

トウアス帝国は世界を統一したから、何処の国も『元領地』になるんだけど、アルジェンナ国は最初から帝国の領地だった。といっても、周りはほとんどが砂漠。帝国がなくなった後に、その砂漠から名前をもらって『アルジェンナ国』と呼ばれるようになった。

「え……もしかして、アルジェンナ国？」

僕は驚いてシルヴィを見た。その顔には表情らしい表情は浮かんでいない。

もし本当にシルヴィがそこから来た人間だとしたら、はつきり言

つて国境を越えて来た僕達よりも大変なことだった。アルジェンナ国はエレンシアの山脈に阻まれていて旅人が通るのは不可能といわれている。トウアス帝国が存在していたころは飛行機械とかいう、空飛ぶ乗り物で越えてくることが出来たけれど、それが無くなつてからは誰もあちらに行かないし、あちらからもこっちに来る人間はいない。

僕はもう一度シルヴィを見つめた。こんな女の子が、一体どうやって此処に来たというんだらう。僕の頭の中には騙されてるという言葉は微塵もなかったし、シルヴィが嘘をついているようにも思えなかった。

「……」

シルヴィは何も言わずに、通りの人ごみに視線を向けている。真つすぐに何かを見つめるその横顔は、冒険なんて知らない貴族か何かのように真つ白だ。緑色の髪はサラサラで、常日頃潮風や焼けるような太陽の光を浴びる僕らからは考えられない。

街を囲む草原から、涼しい風が吹き込んでくる。石畳の砂が舞い上がって、僕は思わず目を瞑った。やけに強い風だ。ふと、隣に座っていた気配が立ち上がる。

「……『ジエイ』！」

嬉しそうなシルヴィの声が聞こえた。急に駆け出していくから、僕もつい立ち上がってしまう。シルヴィは通りから広場へと歩いてくる人ごみの中から、たった一人を見分けたようだった。僕ならこんな人の多い場所で目的の人を見つけるのは難しい。

それでもシルヴィはその人を見つげ出した。

「……どうした、シルヴィ」

腰を浮かせた僕の視界を人々が行き来する。その丁度真ん中に、二人の姿があつた。こちらに背を向けた状態で何かを話すシルヴィ、そして彼女より頭一つ身長の高い、金髪の男の人。

切れ長の目に、身なりの良い紳士風の背格好。ウエストコートを着ていて、背広を腕にかけている。歳はいくつだろう。僕より上なのは彼の纏う空気ですぐに分かった。でも顔を見るかぎり、多分5歳も離れていないと思う。

彼はシルヴィの頭に手をのせて微笑むと、僕に視線を向けた。シルヴィと一言二言会話を交わすと、納得したような表情を浮かべて、こっちに歩いてくる。

その人は街行く人が振り向くような、そんな空気を纏っていた。多分それは顔が整っているからとか、お金持ちに見えるからとかじゃない。何故だろう。僕にも分からない。

「連れの相手をしてくれたそうだが……改めて名前を聞いても構わないか？」

彼は少し高い視点から僕を見つめた。僕はハッと我に返る。どうして男の人に見蕩れたりしてるんだろう。

「あ、え、えと……クリフ、です。クリフ・パレスン……」

隣にいたシルヴィが畏まった僕に首を傾げている。目の前にいるこの人とシルヴィは、並ぶと文字通り美男美女だ。街の人の視線が痛いほど突き刺さってくる。

僕の名前を聞いた彼はしばらく何かを考えて、ふと口元を緩めた。僕が緊張していることが伝わってしまったんだろうか。

「私は、ジェイロード。……シルヴィは、『ジェイ』と呼ぶんだが」

「ジェイロードさん……ですか？」

ジェイロードと名乗った彼は頷いて、そして苦笑してみせた。

「ああ。……随分長いことシルヴィの相手をしてくれたと聞いた」

僕はふとシルヴィに視線を向けた。シルヴィはジェイロードさんの左腕にくっついて、僕を見つめている。さっきジェイロードさんを見つけたときは確かに嬉しそうな顔をしていたのに、今は無表情に戻っていた。

ジェイロードさんはシルヴィに視線を向けて言う。

「気難しい娘だからな……迷惑をかけただろう」

「あ、いえ……」

シルヴィは少し上目遣いでジェイロードさんを見つめる。気難しいというか、感情の起伏が乏しいというか……。怒っているのか笑っているのかよく分からないだけなんだけど。

ジェイロードさんは苦笑を浮かべると、僕に視線を戻した。

「是非、礼がしたいのだが……どうかな？」

「お、お礼なんてそんな……」

僕は首を横に振った。僕はただ、ジェイロードさんが来るまでの間、シルヴィと一緒にいてあげただけだし……。お礼を貰うほどのことなんてしていない。

すつと、ジェイロードさんの腕にしがみついていたシルヴィが、もう片方の手で僕の腕を掴んだ。キュツと袖を掴んで、硝子のように透き通った瞳で僕を見つめる。まるで駄々をこねる子供みたいに、僕は笑った。

「……はい。じゃあ、お言葉に甘えて……」

闇市場は街の中心から少し外れた場所にある。エレンシアは中央に川が流れていて、その川下に闇市場が広がっていた。もっとも河原の周りにある店はろくなものがない。麻薬や武器、爆薬など。河原の周りに集まっているのは、それが軍や兵士に見つかってもすぐに川へ投げ捨てる事が出来るからだ。

だからその辺りにはロクな人間が集まらない。……私も含めて。

「いやあ、まさか本当に来るとは思わなかったよ。……しかも女の子一人で、なんて」

河原の隣に並ぶ闇市の前を歩きながら、私は隣で喋るイルルクさんに視線を向けた。彼はどうやらこの地理に詳しいらしい。闇市の奥の奥、コロッセオの場所まで知っているのだから、そうとう『裏の世界』に精通しているのだろう。ある程度使えそうな男だ。私の腰に手を回していることを除けば。

「……。……それで」

私は利き手でイルルクさんの手を思いっきり抓った。

「いつ!？」

「……コロッセオの登録に必要なものはありますか？」

抓られて飛び上がるアイルークさんを無視して私は歩く。アイルークさんはしばらく抓られた部分に息を吹きかけていたが、すぐに私の隣に戻って来た。懲りない男だ。

「別に……必要なのは名前と、サイン。それだけだよ」

「『怖くなつて逃げ帰る』場合もあるでしょう?」

私はアイルークさんを睨みつけた。よく見れば、彼の目元はフレイさんに似ている。正確は天と地ほどの差があるけれど。

アイルークさんは肩を竦めて苦笑してみせた。

「まあね。でもそれも賭けの一つの選択肢さ。最近はそのゆづやつが増えて賭けにならなかつたんだけど、アレが報奨金の代わりになつてから、逃げるやつなんてめつきり減つてさ」

立ち並ぶ市場を左に曲がる。他と違って細い路地だ。店に座る真っ黒な肌の老人がこちらに視線を向ける。商人達が目配せし合い、ひそひそと何かを呟いていた。

アイルークさんは私に顔を寄せると、耳元で囁いた。

「……さっきのジイさん達はコロッセオの人間だね。登録しに来た奴らの顔を、睫毛の数まではつきり覚えてる」

「……つまり逃げる者にはそれなりの制裁があると。そうゆづことですね」

遠回しな言葉に、私はそう言った。つまり逃げる者は国を出るまでに殺される。賭けをする者達にとって、逃げ帰ろうが何をしようが関係はないが、コロッセオを運営する者達にとっては費用的にも損失を負う。逃げた者は捕まえて殺し、金品を奪い取るのだろう。アイルークさんが私の肩を抱いて、路地を右に曲がった。建物と建物の中の細い路地だ。しばらく行くと、地下へと下る階段が見えて来た。薄暗い闇の気配に張りつめた空気が伝わってくる。

「地下ですか。……想像通り、といったところですね」

「まあね。分かりやすい場所にあるのに、不思議なことに誰も気付かない。……誰も、ね」

アイルークさんが前を歩き、狭い階段を下る。灯りは下の方に見えるだけだ。虫の羽音のような雑音が階段を下ることに大きくなってくる。

興奮と熱狂した声、体を包む熱気。徐々に明るくなる視界と、そして血生臭さ。私は一度足を止めた。まるで臭気を溜め込んだ壺の中に閉じ込められたかのように、様々な臭いが体に触れる。一度だけ、私は口元を覆った。

「……大丈夫？」

アイルークさんが振り返る。私は目を閉じた。体全体が危険を知らせている。吐き気が喉を圧迫し、指先が緊張する。近づいてはいけない、関わってはいけないと体が叫んでいる。生きる者として。

「……」

血の臭いが鼻を突く。私はすつと息を吸い込んだ。世の中の悪や残酷を寄せ集めたような、そんな空気を。そんな汚い空気でも肺は

動く。呼吸は出来る。吐き気は飲み下すと、あとは何事もなかったかのように体は正常を取り戻した。
私はゆっくりと目を開く。

「……行きましようか」

コロッセオは円形の闘技場を中心として、1階席、そして2階席に分けられていた。闘技場の東と西には入り口があり、そこから賭けの対象となる者が現れる。チーム制というわけではないが、2、3人が出場することになるのだろう。

加熱した盛り上がりを見せる客席の後ろを通りながら、アイルークさんは説明する。

「本当にいいの？見ての通り、一人で出るやつなんて殆どいないんだよ？」

「……何人で出ても、戦う時に一対一になるなら同じことです」

私は視線を下に落とした。試合が始まったばかりなのか、下では戦いが始まっている。2人对1人だが、実際に戦う時は一対一だ。それは賭けるうえで決められたのだろう。『番狂わせ』を狙うにはうってつけなのだ。

闘技場の真ん中には筋肉の盛り上がった屈強な戦士と、黒くボロボロになった布を纏った男が立っていた。私はふと足を止める。緑がかかった瞳に、黒髪。戦士が剣を抜くと同時に、彼もまた布で包んでいた長い棒状のものを左手から右手に持ち替えた。
アイルークさんが私の視線に気付いて戻ってくる。

「？……ああ、アイツ？最近勝ち抜いてるヤツだよ。旅人だって話だけど……知り合い？」

それとも彼氏とか、と軽口を飛ばすアイルークさんに、私は呆れた目のため息をついてやった。この人の頭の中にはそれしかないのだろうか。

私は闘技場に視線を戻す。

「……同業者です。もっともあちらは国仕えで『過去の予言書』を探している人間ですが」

街中で見たのはやはり間違いでなかったのだと、私は思った。

あの目は人目につきやすい。女で旅人の私も、相手からするとそうなのかもしれないけれど。

熱狂した声が響き渡る。戦士が剣を構えて、男に斬りかかっていった。しかし、それも彼のもつ武器で弾き飛ばされる。

右手に持ち替えたそれが、はらりと布を落とした。そこから現れるのは、コルセスカと呼ばれる三日月形の2つのウイングをもった槍。

私はそこまで見て、興味をなくした。立ち止まっていたアイルークさんを追い抜いて歩き始める。

「あれ、いいの？試合見なくて」

アイルークさんの声に、私は立ち止まらずに答える。

「いいです。……どちらが勝っても、今の私に影響はありませんから」

歓声が私の声をかき消す。どれが誰の声とも聞き分けがつかない、さまざまな雄叫び。私は客席の後ろを歩きながら、隠し持ったリボルバーに触れる。

頭を真っ白にさせる大音量の中に、昨晚のフレイさんの言葉が蘇

った。

『俺たちはお前にとっちゃ捨て駒か』

私は前を向く。この世の中に情けも義理も必要ない。そんなものがなくても、明日の太陽は昇る。信じられるのは、己と武器のみ。そうして今まで生きて来た。

私には覚悟がある。だから私は私に嘘をつかない。

「……」

歡喜する人々の影を踏みしめながら、私はここより先を見据えた。

第3章 4

気がつけば夕刻。俺はエレンシアの川に架かる橋の上にいる。

明日にでもここから出るために、旅に必要なものは闇市や街で買い集めて来た。闇市では法外な値段の取引を要求されたが、睨みをきかせてやれば半分くらいに値は下がる。それでも高い買い物だったが、別に悔いはない。

金は宿代の残りを使った。おかげで懐は以前のように寒々しくなっている。そんなことを考えるとため息が出た。

汚い色の水が川を流れていく。

- 誓いの言葉とりボルバー -

榛の街、エレンシア。平原から斜めに差し込む夕日が目を刺してくる。地平線の向こうから吹き込む風が街中を通って消えていった。夕日なんかどの街で見ても同じだと思う。エレンシアは立地条件が良いだけで、見ているものはどの場所からも変わらない。同じ太陽がどう見えようが、そんなもんに価値はない。

「……………」

無言のまま川に視線を向けると、穏やかな流れの水が、俺と俺の

真上にある蒼い空を映し出していた。俺はゆっくりと肺の中に溜まった息を吐き出した。

どうやったら内側に溜まった苛立ちを吐き出すことが出来るのか。俺は何度もため息を吐くしかなかった。

(……あのクソジジイ、余計なもんばつか俺に押しつけやがって)

サーシャのことも苛立ったし、アイルークのことも思い出せば陰鬱な気分になった。けれどそれは全部、あの予告書のせいだ。あのジジイの作った、馬鹿馬鹿しい幻想の産物。この世の中にそんなものを残せばどうなるか、あのジジイだって知っていたはずだ。

拾った小石を川に投げ込むと、俺の姿は歪んで、そしてまた元に戻った。川の水は青いような黒いような色に染まっていて、河原の小石もまともな色をしていない。この川は闇市の方まで伸びている。そう考えると、何が流れているのかは考えたくもない。

俺は顔を上げ宿に戻ろうと踵を返した。闇市が並んだ通りに背を向ける。すると、聞き覚えのある声が背後から響いた。

「……ああ、やっぱりフレイか」

振り返って見ると、橋の向こう側にアイルークの姿があった。背格好は俺とさほど変わらないが、その顔に浮かべている貼付けたような笑みだけは違う。ガキの頃からずっとそうだ。すくなくとも俺は、コイツの笑顔以外の表情を見たことは一度もない。

「黄昏れるの好きだな、フレイは。昔もそうだったし」
「うるせえよ」

俺はアイルークに背中を向けた。別に昔から黄昏れてるような、更けたガキだったわけじゃない。実力で何でもかんでも決められる

ような、あの生活についていけなかっただけだ。だからいつも一人だった。いつも騒ぎ回る奴らの真ん中にいたイルークとは正反対に。

歩き出そうとした俺にイルークは言う。

「……お前さあ、本当にいいの？リリイ……じゃない、サーシャさん一人で受付済ませただけだ」

「別に。契約解除したあとのことなんて知らねえな」

後ろからため息が聞こえてくる。俺はそれが癪に障った。コイツの一步高いところから俺を見る姿勢が気に食わない。つい手が出そうになるが、俺はそれを抑えた。コイツとの縁もここで終わりなんだと、自分に言い聞かせて。

しかし次の一言が俺を立ち止まらせた。声は確かに笑っていた。

「……怖いのか？」

「なっ……!!」

俺は振り返ってイルークを睨みつけた。ヤツは苦笑を浮かべながら俺を見つめている。ガキの頃、爺さんに可愛がられている時のあの目。嘲笑するような、そんな色の瞳。

乗せられてはいけない、と頭の何処かで制止の声がかかる。それでも俺は言い返さずにはいられなかった。

「んなわけがあるか！あの女の言いなりになって死ぬのが馬鹿らしくなっただけだっ!!」

「契約者、だろ？彼女は……護衛なら多少の危険も顧みてはいけない。お前は彼女に従うか、それが嫌なら彼女を止めるべきだった」

俺はイルークに歩み寄り、その胸ぐらを掴む。それでもコイツ

の表情は変わらなかった。恐怖の色も、焦りの色も、俺は見たことがない。今、この状況下でさえ。

橋を行き来する人間が俺たちの言い合いに振り返る。しかしさほど気に留めた様子もなく、歩みを再会した。橋の向こうは闇市場だ。おそらくその一帯では喧嘩なんて日常茶飯事なんだろう。

「ふざけんなっ！あのジジイの孫だからって無理矢理ここまで連れて来られて、あの女を守って死ねってか！？んなのテメーがやればいいだけの話だろ！！」

俺の言葉にアイルークは苦笑を浮かべた。胸ぐらを掴んだ手を払うと、襟を正しながら言う。むかつくくらい余裕の動作で。

「……悪いけど、俺は俺の契約者の為に命を賭けてる。だからいくら美人のサーシャさんとはいっても、命まではちよっとね」

俺は舌打ちをして、アイルークに背を向けた。やっぱりこいつに関わるんじゃないかった、と唇を噛み締めながらそう思う。口でも才能でも、こいつには敵わない。悲しみも苛立ちも通り越して、虚しささえ浮かんできそうだった。

アイルークは咳払い一つして、俺の背中に向かって言う。

「……サーシャさんは今日の深夜にコロッセオに出るそうだよ。一応俺の名前を言えば、市場が場所を教えてくれるから、お前も来てみれば？」

ふざけんな。あの女とはもう他人だ。

俺は立ち止まらず、宿への道に戻って行った。

受付を済ませると、コロッセオの待合室に通された。どうやら試合を待つ人間がここに集められるらしい。小さなホールには長椅子が4つ置かれ、そのうち3つには人の姿があつた。2人組の者、1人で壁に背もたれている者。私は誰も座っていない椅子に腰を下ろした。

ホールには受付に繋がる扉と、闘技場に繋がる扉がある。試合に決着がついたのか、闘技場の扉からは歓声が響いていた。しばらくすると扉が開く。

「治療はいるか？」

「……」

コロッセオの人間と共に現れたのは、先ほどのコルセス力を持った男だつた。あちこちに怪我があるが、さほど致命傷ではない。男は首を横に振つた。

男はゆっくりとこちらに近づいて来た。私はふと自分の足下に男のものらしい荷物があることに気付く。

「……どうぞ」

荷物の麻袋を手を取った私は、男の手にそれを握らせてやった。男は緑の瞳を真っすぐに壁へと向けたまま、口を開く。

「?……何処かで聞いた声だが」

男の視線は私ではなく、何処か虚空を見ている。私はじっと男の顔を見上げ、あたりに聞こえない小さな声で言った。

「……『サーシャ』と言えば分かりますか。私も名前だけは知っています、ジャン・ユサク」

私の言葉に、男の表情が変わった。何度か瞬きをして、そうかとだけ呟くと、持っていたコルセス力を器用に布の袋の中に仕舞い始めた。

「……」

随分と背の高い男だ。私の頭二つ分はあるだろう。長い槍が小さく見えるほどにがたいが良い。歳は40前といったところだろう。そして緑の両目。これは特殊な義眼で、とある国の選ばれた戦士のみに許されたもの。彼らは視力を失う代わりに、それ以外の聴力、触覚、味覚、嗅覚が人より敏感になる。

そして彼らは最強の戦士となるべく、厳しい訓練を行う。

「……お前も出るのか」

「……はい。何か?」

ジャンは私を見下ろすと、低い声音で呟いた。おそらく周りに聞かれては不都合なことなのだろう。私は椅子から立ち上がり、ジャンを見上げた。

「……今晚、エレンシアの公国軍がコロッセオに踏み込んでくると

いう噂がある。予言書の在処に大公が気付いたようだ」

その言葉に私は顔を顰めた。つまりコロッセオの賞品が『過去の予言書』にすり替わったことに国が気付いたのだろう。今まで見て見ぬフリをしていたが、予言書絡みのこととなつては放つては置けないのだろう。あれがあれば、エレンシアは世界を統一することも出来る。

私はため息をついた。

「随分とタイミングが悪いお話ですね……」

逃げれば殺され、試合に出ても途中で軍に踏み込まれる可能性がある。つまりはそうゆうことだ。私が個人で予言書を探している人間だとバレてしまえば、おそらくただでは済まないだろう。

私はジャンを見上げた。焼けた黒い肌に緑の瞳が目立つ。

「貴方はどうなさるおつもりですか？」

「……宿はコロッセオの人間に見張られている。状況は変わらない」

私はもう一度ため息をついた。彼の背格好では逃げるにしても目立つのだろう。睫毛の数まで覚えているほど執念深い、あの闇市の老人達が、目の色の違うジャンを取り逃がすわけがない。私は肩を竦めて苦笑するしかなかった。

向こうで次の試合の人間が呼ばれ、扉から出て行った。帰ってくる時は生者か死者か。それは誰にも分からない。

「どちらにしても……なるようになるだけ、だ」

ジャンは言うことだけ言うと、私の隣から外へと歩いて行く。私はその背を見送りながら言った。

「そ、う、す、け、だ、ね、……、は、ま、た」

第4章 1

宿に帰って飯を食い、部屋で横になる。人間ってのは簡単なもので、酒を飲んで飯を食えば、苛立ちも多少は治まった。あとはエレンシアを無事に出ることが出来れば、あれこれ文句を言うこともない。全ては終わったことだと考えることにしよう。

街の灯が徐々に消えていくのをベッドの上から見つめながら、俺はベッドに横になった。丁度良いくらい腹は満たした。苛立ちも徐々に治まりつつある。目を瞑れば、明日の太陽を拝むことが出来る……はずだった。

- 戦いと闘いと -

「……あんのクソ女!!」

闇市場は昼より夜の方が人通りが多い。麻薬で頭が完全にイッてるヤツや、娼館の客引きがウロウロする中を、俺は地面を踏みつけながら歩いた。さっきまで治まっていた苛立ちが、また沸々とわき上がってくる。

テキトウに捕まえた闇市の商人によれば、コロッセオは闇市場の奥の奥に位置してるらしい。俺は人ごみを押しつけ、ジロジロこっちを見る市場の年寄りの視線を無視して急ぐ。

裏路地へと入ると、そこは真つ暗闇だった。下の方から光が漏れている。階段があるんだろう。

「……やっぱり来た」

「っ！」

後ろから聞こえたアイルークの声に、俺は即座に振り向いた。細い路地を後ろから塞ぐように、アイルークはこっちを見つめている。なんだってこうゆう会いたくないヤツに会っちゃうんだ。

アイルークは苦笑を浮かべる。俺はそれが癩に障って、一言言つてやろうと口を開く。しかしそれより先に、アイルークがそれを制した。

「分かつてるって。……それより、早く行かないとサーシャさんの試合、終わっちゃうよ」

ニタリとアイルークが笑う。その瞬間、俺は理解した。いや、正確に言えば思い出したんだ。それまですっかり忘れていたことを。

魔術師は、魔術以外に興味を持たない。目の前に今にも消えそうな命があったとしても。

「！」

俺は階段を下る。下れば下るほど地下の歓声は大きくなっていく。異様な盛り上がり、そして罵倒。さまざまなものが入り交じった声や感情がコロッセオの中に充満している。

光を放つ入り口に足を踏み出す。その瞬間、目の前が真つ白に染まり……次の瞬間、コロッセオ全体が俺の視界に飛び込んできた。

「……な……」

鮮烈な赤、そして有り得ないような血の臭い。肉片が飛び散った跡。

歓声と怒号が耳を劈いた。興奮が最高潮まで達したコロッセオの客席で、俺だけが場違いのように突っ立っていた。

俺はしばらく声が出なかった。後ろからアイルークが階段を下りて来たことにも気付かなかった。

「なん、だよ……これっ……」

掠れた声しか出なかった。足が動かなかった。それがおそらく、普通の人間には正しい反応だ。俺は呆然として、客席の一番後ろから闘技場を見下ろす。

闘技場の土は真っ赤に染まっていた。あちこちに数体の死体が転がっている。どれも左胸から血を流して死んでいた。溢れた血が溜まり、土を汚し、闘技場はかつてないほどの殺戮の中にあった。

「……！」

中央にはサーシャが立っていた。その横顔は今まで見たことがないほど無表情で、冷やかな瞳で死骸の山を見つめている。右手には血に染まった剣を持っていた。一振りすると、血の滴りが地面に落ちる。

ふと、サーシャがこちらに視線を向けた。その瞳に背筋が凍る。硬直する俺をすり抜けて、視線はアイルークに向けられた。睨みつけるようなサーシャの視線に物怖じせず、アイルークは女をナンパするときの要領で軽く手を振る。

「……良かったなあ、フレイ。サーシャさんの相手はあと一人。間にあっただろ？」

「……！」

俺はアイルークを見た。アイルークはニヤツと笑い、サーシャに視線を戻す。サーシャは視線を闘技場内に戻すと、向かい側にある待ち合い室の扉が開くのを見つめている。

俺は咄嗟に客席の通路から一番前へと階段を下りた。興奮した奴らが手すりの前に集まっている。俺はそれを押しつけて、叫んだ。

「サーシャ……！」

何故そうしたのか、自分でもよく分からない。サーシャの横顔はこちらを見ようとはしない。ただ、その唇が微かに動いているのだけは分かった。何かを唱えるように、何かを思い出すように。

「おいつ……！」

会場は異様な熱気を放っている。ここにいる全ての人間は狂っていると、言っても間違いないかもしれない。人が人を殺し、それに金を賭ける好き者達。それに踊らされる人間が半分は生き残り、半分は死んで行く。

そんな空間に俺と、サーシャはいた。ある意味狂っているのは俺たちなのかもしれない。目的のために人を殺すサーシャと、あいつを止めるでもなく助けるでもなく、ただ呆然とするしかない俺と。

「サーシャ……！」

叫びながら、俺は思った。今の俺は、ガキの頃から何一つ変わっていないんだと。優秀な魔術師になりたかった。けれど目の前に立ちただかった才能という壁を目の前にして、俺はどうすることも出

来なくなっていた。

アイルークのように優秀な魔術師の奴らなら、今ここでサーシャがどうなるかとただ笑って見ていられるんだろ。死のうが生きようが、俺には関係ない。

俺もそうなりたかった。そうなるのが一番楽なことなんだと分かっている。それでも俺はそう出来なかった。

サーシャは何かを呟き、深呼吸をする。そしてアイツなりに何かを考えているのか、チラと死骸に視線を向けた。

その時、ふとサーシャは待合室の扉が開いたことに気付いた。しっかりとした足取りで、相手は薄暗い待合室から明るい闘技場へと歩みを進める。その姿がはつきりと見えた瞬間、サーシャの表情が驚きが変わった。

「なっ……!!」

闘技場に姿を現したのは、愛用のレイテルパラッシュを鞘から抜いた……クリフの姿だった。

どこか遠くで、沢山の人の声が聞こえる。漣のように寄せては返す音。僕はぼうつとした思考の中にいた。手はレイテルパラッシュを握っている。今までずっと、ずっと僕と一緒にいた剣だ。それが僕が村を出た、あの日からずっと変わらない宝物。

なんだろう、視界はつきりしてる。数えきれない人の群れと、地面に寝そべった人と、僕の視界の真ん中にいる、真っ赤な剣を持った綺麗な女の人……あれ、あれは誰だっけ。

『……クリフは何故、旅をしてるの？』

ふと、頭の中に女の子の声が聞こえてくる。これも名前が思い出せない。誰だっけ。……まあ、いいか。質問に答えてあげなくちゃ。

(僕は……僕には帰る場所がないんだ。剣しか取り柄がないから、護衛の仕事をするしかないんだよ)

帰る場所はずっと前に無くなった。いや、無くなっていたって言ったほうが正しいのかな。僕が村に戻って来たら、村はもう無くなっていた。一瞬、場所を間違えたのかと思っちゃったんだ。小さい家が寄せ集まって出来たような小さな村が、ただの草原に変わってしまったから。

あの草原で、僕はレイテルパラッシュを抱きかかえたまま呆然としたんだ。

『……家族はどうしたの？』

声は更に聞いてくる。あんまり思い出したくないことなんだけど……何故だろう、言ってしまうたくて仕方がなかった。

(家族もみんな見つからなかったんだ……へんぴなところにあった村だから、焼けて無くなったことに近くの村や街は気付かなくて……気付いたらもう、焼け跡に雑草が生えるくらい時間が経ってた)

あの頃17歳だった僕は、周辺の村や街で家族の消息を尋ね歩い

た。周辺っていつても、山一つ越えたような場所ばかりだったから、もちろん誰もそんなこと知っているはずはなかったんだ。

「……そのまま、旅に出たノ？」

（そうだよ。……でも僕、そんなに強くないんだ。だから一緒に旅をしてる人にも、馬鹿にされてる。機械で出来た人形すら壊せない、って）

僕は問いかけてくる声に答えながら、ふと思う。僕は誰と一緒に旅をしていたんだっけ。どうしてだろう、顔も思い出せない。どうしてだろう……。

声は言う。

「……クリフはどうしてわたしのオトモダチを、コロセナイノ……？」

僕の脳裏に、宿を襲ってきた機械人形の姿が思い浮かぶ。だってあれは人の姿をしていた。肌は人の皮が使われていて、髪の毛だってそうだった。切って出てくるのは、機械と機械を繋ぐコードだって分かってるけど、分かってるけど……。

だって、僕は……。

「クリフー！」

（！）

体が動いている。何故だろう、レイテルパラッシュを握る手に力が入る。駆け出して、視界の中心にいる女の目掛けて剣を突き放つ。ギリギリのところその人は僕の剣を避けた。……一瞬、受け止めようかどうしようか迷ったように見えたけど。

僕は体勢を立て直す。何故だろう、いつもより体の動きが良い。

初めて剣を持ったときのような、あんな感じだ。体がよく動く。剣は躊躇なく風を切り裂いて、耳に心地よい音を届かせる。そう、そうだ。初めて村を出たあの日から、僕はずっとこんな風に剣を振っていた。そして帰る場所がなくなったことを知ってから……剣が振れなくなった。

女の人は僕の剣を受け止める。金属の音が高く鳴いた。鏢迫り合いで、相手の顔がはつきりと見えた。

「……くっ……」

押し勝ってる。徐々に刃が相手の方へと寄っていく。このまま攻撃に移ろうかと思っただけ、彼女が渾身の力で刃を押し返して来た。反動を利用して、その人はまた距離を置く。

凄い歓声が響いている。なんだろう、この盛り上がり。女の人は一拍置いて、僕との距離を詰めた。凄いスピードで。

僕の剣を弾いて、そのまま真っすぐに刃を振ろうとする。でも、駄目だよ。その攻撃じゃ、ただの時間稼ぎにしかない。……そう。

「……っ！」

体勢をずらして、彼女の剣をやり過ぎす。体勢が整う前に、僕が利き足を踏み出した。体勢を低くする。弾かれる前に左手を剣に添えた。体の重心を移動させて、一気に前へと出る。そしてしっかりと握ったレイテルパラッシュの柄を、すばやく突き出した。

その瞬間に、人の体を剣が突き抜ける感触が両手から背筋へと伝わって……。

「サーシャ……！」

(え……?)

剣が体を貫いている。レイテルパラッシュの柄の辺りまで刃を差し込まれた体は、ゆっくりと赤く染まっていく。僕の目の前で揺れる金色の髪。整った顔つき。そうだ、この人はサーシャさんだ。

サーシャさんの右手から剣が滑り落ちる。血溜まりになった地面に倒れて、ベチャツと音が響いた。細い左手が、ゆっくりと剣を握る僕の手伸びる。触れた白い手が、剣を抜こうとするかのように弱い力を込めた。

でも抜けない。剣は完全にサーシャさんの体を刺し貫いているんだから。

(さ……サーシャ、さん……?)

僕はそう呟いた。でも声は出ない。どうしても分からないけれど、声が出ない。

「……………」

サーシャさんの口端から赤い液体が流れ出る。ゆっくりと顎を伝って、血液の溜まった地面にピチャンと落ちた。その瞬間、僕の思考は一気に巻き戻っていく。

「さ、サーシャさん……っ、サーシャさんっ!？」

街でシルヴィとジェイロードさんと会って、街で食事をした。その後は覚えていない。路地を曲がったところで急に何かの衝撃を感

じて、気付いたら僕はここに立っていた。……いや、違う。

あの時、僕を気絶させたのは、まぎれもなくシルヴィだったんだ。

「……かはっ……!」

「サーシャさんっ」

僕はそう言っつて剣を抜こうとした。でも何故か、腕が動かない。

腕だけじゃない、足も、首も、体全体がいうことをきかない。

サーシャさんの服に染みた血はどんどん大きくなっていく。剣を抜こうとするサーシャさんの手は確実に力を無くしていく。

いやだ。こんなのは嫌だ。だって決めたんだけ、人を殺したりしないって。この剣に誓ったんだ。……誓ったんだ!

「サーシャさんっ!!」

第4章 2

あまりにもあっけなく、勝負は決着がついた。彼女は剣で貫かれ、あのクリフつて男も半分は暗示が解けたようだけど、まだ体の自由はきいてない。

真っ赤に染まる彼女の姿は、赤く染まった一本の百合だ。自身で己を悲しみその魂を慰める、一本の百合。その姿は凜として美しい。

「純血のシルシの白百合ではなく、血に染まった紅百合か……いいね、それも素敵だよリィ？」

- 憎しみと悲しみの上に立つ -

サーシャの体が血溜まりの中に倒れた。波うつ血の波紋に、観客の怒号や歓声が木霊する。サーシャの体はピクリとも動かず、俺は呆然としたまま二人を見つめていた。

サーシャの血液はすでに致死量に達している。その肌が白く染まっていくのを見つめながら、クリフの右手は残酷にも剣を振り上げた。そのまま刃が振り下ろされれば、サーシャは死ぬ。

「クリフ、止めろっ!!!」

咄嗟に俺はそう叫んでいた。その瞬間、クリフの手が金縛りにあったようにピタリと止まる。それでも完全に体の動きを止めることは出来ないようだった。視線が客席にいる俺へと向けられる。助けてくれ、と言わんばかりの瞳で。

「っ……っ！」

俺は瞬時に利き手に力を込めた。人差し指と中指を立てて、それを空中で一閃させる。省略呪文の魔法だ。決めた場所に衝撃にも近い強風を吹かせる。

突如としてクリフの体は後方へと投げ飛ばされた。俺は観客が静まりかえる一瞬を狙って、客席から闘技場へと飛び降りた。

「サーシャ！！」

サーシャの体は血溜まりの真ん中に横たわっていた。首筋に触れると、微かに脈はある。しかし閉じた目は開かれず、ただ静かに瞼が閉じられたまま。

俺は立ち上がったって、客席の上に視線を向けた。アイルークはさも楽しそうな顔でこちらを見ている。まるで面白い悪戯に引っかけたガキを見るような目で。

俺は叫んだ。侵入者のせいだ。静まり返ったコロッセオに、俺の声が響く。

「アイルーク！！これは全部、テメーの仕業かっ！！」

アイルークは肯定するでも否定するでもなく俺を見つめている。しかしその表情に浮かぶニヤけた笑みは肯定しているのも同じことだ。ざわめく場内を見回して、アイツはわざとらしく肩をすくめてみせる。

「仕業、なんて……俺が悪巧みでもしたみたいじゃないか」
「デメエー!!」

俺は瞬間的に魔法を発動させた。さっきのような省略呪文の類いじゃない。今まさに俺の、この怒りを爆発させるに相応しい、猛火だ。

手のひらに魔力を集める。右手がギシギシと軋むほどの力に、意識を集中させる。そしてそれを迷うことなくアイルークへと向けた。

「我、汝らが主の名を受け継ぎし者。冥界の劫火よ、我の前に立ちはだかる者を焼き尽くせっ!」

俺の言葉が発せられた瞬間、入り口に近い客席の一部が爆発した。賭け事に興じていた観客は逃げ惑い、逃げ場を求める虫のように四方へと散っていく。

爆発した客席は、劫火によって燃え盛っていた。しかし、その中に人の姿がある。

アイルークの足下には魔法陣が浮かび、そこから灰のような肌をした女がアイルークを庇うような格好で立ちふさがっていた。翼のような両腕がアイルークの体を包み込んでいる。

アイルークは灰色の翼に触れて言った。

「……もういいよ、『フィオ』。キミが出てくるほどのことじゃないさ」

「っー」

俺は真っすぐに異形の女を見上げる。ガキのころ、あいつが奇跡的に召喚させた精霊『フィオ』。アイツはあの一件で、ジジイに次ぐ魔力を一族に見せつけたんだ。

アイルークは恋人にでも触れるような動作でフィオを後ろへと下からせると、俺を見下ろして口角を上げた。

「……お前は本当に変わらないよな。そうやって他のことにまで手を出すから身動きがとれなくなるんだよ」

「っ……」

俺は拳を握りしめた。気分はガキの頃と一緒にだった。アイツはいつもずっと上の方にいる。俺は他の奴らのように器用に動き回れず、結局泥沼を這いずり回るしかない。

アイルークが視線を闘技場の隅に向けると、クリフがゆっくりと立ち上がった。おそらくクリフを操ってるのはアイルークだ。

けれど魔法でどうにかすることは不可能。あいつには、フィオがいる。ジジイの持つ最高位の精霊に次ぐ力を持つ、フィオが。

「……ほら、早くしないと、フレイ」

「くそっ……くそっ!!」

唇を噛む。俺はここに突っ立ってるしかないのか。どうしようもない怒りと焦りが、まるで他人のようにどうにかしろ、と叫んでいる。どうにかできるもんなら、とっくにそうしてる。どうにかできるもんなら、俺はあのジジイに見放されることも、族長に選ばれることもなかった。

俺は叫ぶ。胸を突いて出た言葉は、自分でも驚きの言葉だった。

「……どうして、どうして俺なんだっ!!」

「『どうして自分なのか』、ですか。簡単なことですね」

ハッと、背後から聞こえた声に俺は振り返った。血溜まりの中から、人影が立ち上がる。真っ赤に染まった服の、貫かれた部分を押しさえながら顔をあげたのは、まぎれもなくサーシャだった。

サーシャは空いている片方の手を背中に入れる。そこから出て来たのは、銀のバレルが鈍い深紅を反射する一丁のリボルバー。

サーシャは胸を押さえていた手を放し、俺の脇をすり抜ける。

「それは、貴方が貴方だったから、ですよ。フレイさん」

手をリボルバーに添えて、引き金に指をかける。その動作は自然で、剣で貫かれた人間だとは思えない。

「お前っ……どうして……」

「……貴方が貴方であることを止められなかった。だから運命は自分の身に降り掛かって来た。それは貴方が招いた結果です」

サーシャは銃口をイルルクに向けた。フィオが咄嗟に庇おうとするより早く、正確に引き金を引く。銃声特有の轟音が響き、その刹那、イルルクの目の前で紫色の魔法陣が光った。硝子を割るように魔法陣にヒビが入り、砕け散った破片が空中に消える。その瞬間、剣を構えていたクリフの膝が崩れた。

サーシャは銃をイルルクに向けたまま言う。

「どつにもならない運命を嘆こうが喚こうが、全ては貴方の勝手ですよ。……ただ一つ言わせていただくなら……」

その背中は凜として、はっきりとした強い意志を持っている。少なくとも俺にはそう見えた。サーシャははっきりと前を見据え、そして言う。

「『嘆く暇があるなら前を向き、喚く暇があつたら歩き出しなさい。……違う風景を見たいと思うなら』」

逃げ惑う観客の声が変わった。エレンシア軍の服を着た男達がコロッセオを出ようとする観客を一人一人、まるで群れた蟻を捕獲するように捕らえていく。おそらく国がコロッセオの排除に動き出したのだろう。闘技場には助けを求める声、怒号、様々なものが行き交っている。

辺りは混乱の渦。観客の喚き声や叫びが木霊する中、サーシャのその言葉ははっきりと響いた。俺はハツとしてサーシャの背中を見つめる。

「……ふっ、さすがリリイだね」

俺たちの会話を中断させたのはイルークのため息にも似た笑い声だった。サーシャはリボルバーを構え直し、イルークを睨みつける。引き金には指が掛けられていた。その背中には今まで感じたことのない憎悪が宿っている。

「……ああ、この呼び方は嫌かい？サーシャ・レヴィアス。……どこから気付いてた？」

サーシャは下らない言葉には見向きもせず、静かに弾倉を回転さ

せた。冷静に見えて、その目には怒りが宿っている。サーシャを纏う空気には近づきがたいものがあった。

サーシャは言う。

「……貴方がナンパをして来た時から、です。私には喧嘩の売り文句にしか聞こえませんでしたか？」

アイルークはクス、と口角を上げる。俺にはそれが何のことだか分からなかった。クリフも同様に困惑した表情を浮かべている。

二人の会話から察するに、アイルークがサーシャを嵌めるために仕組んだってことか？どうしてアイツがサーシャにそんなことを…。

アイルークはサーシャと俺、そしてクリフの顔を一人一人見つめ、そして自分の背後に向かって視線を向けた。

「そっか……。ふふっ、さすが貴方の妹君ってところだよ、ジェイロード」

「！」

アイルークの後ろから、一人の男とガキが姿を現した。どっかの貴族みたいな紳士風の格好をした、妙に落ち着き払った男だ。金髪に碧眼、目元の雰囲気確かにサーシャと似ている。

隣にいるガキは女だ。緑色の奇天烈な色に髪を染めて、隣の男に見合うような、金持ちの娘のような服を着ている。

ジェイロードという男の出現に、サーシャは表情を変えなかった。代わりにクリフが驚いた顔でサーシャとジェイロードに視線を向ける。

「ジェイロードさん！？……サーシャさんが妹って……」

スツと、サーシャが片手でクリフの言葉を制する。サーシャはクリフが黙るのを確認すると、客席にいるジェイロードを睨みつけた。引き金に掛けた指に力が入っている。俺もクリフも、何も言えず、二人のやり取りを聞いているしかなかった。

「……お久しぶりですね、ジェイロード」

ジェイロードはじつとサーシャを見下ろしている。闘技場を挟んだ向こう側の客席から、軍の奴らが観客の捕獲し始めているのにも目を向けず。

サーシャは口元を引きつらせながら、アイルークと隣のガキに視線を向けた。

「随分見ないうちに手駒が増えたようですね。とくに、その娘……」

緑頭のガキは、サーシャに睨みつけられていることに気付いているのかいないのか、曇った色の瞳をしていた。その無表情に固まった顔を見つめて、ようやく俺は気付く。

こいつ、殺人人形だ。

「なっ……!!」

クリフも俺とほぼ同時にそれを悟ったようだった。サーシャが俺たちの言葉を代表するように呟く。

「高性能の殺人人形ですか……」

今まで見て来た奴らは動作も声も全てが機械的で、明らかに生きている気配がしなかった。だが、こいつの動きは人間に近い。

ガキはジェイロードとイルークを交互に見つめる。まるで命令を待つ犬のようだ。俺は咄嗟に体勢を整える。クリフは困惑したまま、身動きがとれなくなっていた。

「殺人人形を作る『知』……予言書は貴方が持っているということですか」

サーシャの声に、イルークが笑う。

「ふ……ちょっと違うよ、リリイ。俺たちが持っている予言書は完全とは言えないんだ」

「!?!?……どうゆうことだ?」

俺はイルークを見上げる。イルークは昔の、まるでジジイに褒められた時のような、得意そうな表情を浮かべて俺たちを見る。

「予言書はジイさんの手を離れた後、途中でバラバラになったんだよ。……あれは魔術師の下になれば効果がない代物だからさ」

イルークはそう言って隣のガキに視線を向ける。ガキは何かを感じ取ったように頷くと曇った瞳を空中に向けて、データを読み上げるような恐ろしく事務的な口調で話し始めた。

「……バラバラといっても一枚一枚切り離された状態ではありません。『過去の予言書』は原初の章、蒼天の章、万物の章、大地の章、終焉の章の5つに分けられています。我々が持つのは人が作り上げた機器およびシステムプログラムに関する蒼天の章……」

サーシャはじっとガキの言葉を聞いていた。その間も手に持ったリボルバーの引き金にかかる力は増している。

アイルークは客席の椅子に肘をつきながら笑う。

「つまりはそうゆうこと。……つまり、リリイが『過去の予言書』を手にしたいのならば、他の4つの章を集めて、その上で俺たちから蒼天の章を力づくで奪い取るしかないわけだ」

「な、なんでそんな大事なことを、僕たちに……？」

クリフの言葉は至極もつともな意見だった。しかしサーシャは何も言わず、一步、二歩と客席に歩み寄り、三步目で足を止める。その瞳はしっかりと、ジェイロードという男を睨みつけて。

「！」

殺人人形のガキが何かに反応した。しかしそれより先にサーシャが引き金を引くのが早かった。

銃声は大きく轟いた。迷いなく放たれた銃弾は、先ほどから一言も言葉を発しないジェイロードの頬を擦り、端正な顔に赤い線を作らせた。咄嗟にガキが反撃の体勢をとるが、ジェイロードは左手でそれを止めた。

そいつは口端をあげて笑った。サーシャはしっかりと自分の兄を見上げて、言い放つ。

「……覚えておいて下さい、ジェイロード・レヴィアス」

エレンシア国軍の本隊がコロッセオ制圧に突入してくる。アイルークはその様子を確認すると、紫色の光を放つ魔法陣を発生させた。3人の姿が徐々に薄れていく。おそらく空間移動の魔法だ。

「私は貴方を必ず殺し、予言書を手に入れます……」

逃げ惑う客の混乱の渦の中で、サーシャは憎しみの上になんた
た。

第4章 3

そこからどうなったのか、俺はその時のことをはっきりと覚えていない。ただ一つ言えることは、アイルークたちを取り逃がしたということだけだ。

サーシャは3人が消えてもこっちを振り向こうとはしなかった。ゆっくりと下ろされたりボルバー。バレルを握る手に、強い力がこもったのを俺は見た。

そして突然の終幕とともに……俺たちはコロッセオ制圧に踏み込んできたエレンシア国軍に捕まった。

- 突然の終幕 -

「くそっ！！」

俺は目の前にある壁を蹴りあげた。向こうから『五月蠅い』だの『黙れ』だのという罵倒が聞こえてくるが、俺の苛立ちはそんなもので萎むほど小さなものではなかった。

運悪くエレンシア国軍のコロッセオ制圧に巻き込まれた俺たちは、あの後すぐに軍に捕まった。偶然居合わせてコロッセオの関係者に仕立て上げられた俺たちは、数日前の言葉通り、北の大山脈にある監獄『淵霊嶺』に送り込まれることになった。つい数時間前のこと

だ。

「あーくそ！思い出すだけで腹が立つっ！！」

俺はヒビの入った牢屋の壁に何度も蹴りを入れる。

牢屋は3、4人専用の造りになっていた。牢屋には死んでいるのかいないのか、数時間前から寝床でピクリとも動かない皺だらけのジジイが1人、そして寝床の毛布をすっぽりと被った状態で壁に張り付いてるヤツが1人。

「五月蠅い！静かにできねえのかっ」

斜め向こうの牢屋からも非難の音が聞こえて来た。俺は鉄格子を掴んで怒鳴る。

「テメーこそ黙れ！燃やすぞ！？」

そう言つとパタリと声がやんだ。そのかわりひそひそと何かを呟き合っているのが聞こえてくる。何を言っているのかは大体予想が出来た。魔術師なんてエリートがよりにもよって監獄の中でも地獄と呼ばれる『淵霊嶺』に入ってきたのが珍しいんだらう。

本気で燃やしてやるうかと悪意が心をつついたその時、ふと壁に身を寄せていたヤツが肩を震わせた。

「……兄さん、あんまり叫ばない方がいいのん」

「あぁ？」

奇妙な言葉に振り返ると、そいつは毛布の間から両目を出してこちらを見上げていた。

「叫ぶのー……ええと、力、なくなりますのん。『タイリヨク』が
「たいりよくって……体力か？」

「そそ。発音むずかし。……それに『マジユツシ』さんは『キリヨ
ク』がないの駄目だて聞きました。ここ長居するなら、止めた方
いでのんよ」

そいつの言葉は理解するのに数秒を必要とした。耳慣れないイン
トネーションと喋り方の癖。俺は何か引つかかるものを感じながら、
とりあえず自分の寢床に腰を下ろす。

「魔術師は気力……か？まあ、間違ってはいねーな」

そいつは壁にそって並べて設置された2つの寢床の片方に座って
いた。俺は反対側の寢床にいるから、座ると自然と向き合う形にな
る。

毛布を被ったそいつは、俺の様子を確認するともう一度肩を震わ
せた。

「そそそ。あんまり騒ぐの独房行きですのん。ちなみに真面目にし
てると……」

毛布の中から指先が現れる。寒いのが嫌なのか、姿を見られたく
ないのかは知らないが、今のところコイツは目と指先しか見えてい
ない。指先は細く、浅黒い。隙間から見える瞳はベージュ色をして
いた。

そして細い指先が示すのは、俺の枕元の寢床でピクリとも動かな
いジジイの姿。

「そのオジジのようにホトケサマ」

「そうなのか……っておい、看守ーっ！ジイさん死んでるぞー！！」

俺の叫び声に、向こうからまた囚人たちの怒鳴り声が返ってきた。俺が呼んでるのはテメーらじゃねえ、看守だ、看守。

叫んだ後、俺はふと格子を持つ手を離れた。そういえば俺がこれだけ騒いでいるのに看守が止めにくる様子はない。さっきこの牢屋に入れられる時に看守ともめたが、その後は一度も様子を見にこない。毛布を被ったヤツは、俺の様子を見て笑った。

「くしし……兄さん、『カンシユ』来ないのん。久しぶりに『最下層』行きが出たて、みんなで見物と冷やかしね。しかもオナノコだて」

女の子、という声に俺は視線をヤツに戻す。

「『最下層』、独房なんて嘘のん。あれ拷問部屋だと思た方がいい。……オナノコだとも大変よ、男たちに弄ばれて最後は死ぬ。カワイソーネー」

両手を合わせて合掌しているつもりなのか、ソイツは毛布と毛布を摺り合わせた。

ジェイロードとかいう男がイルークたちと共に消えた後、俺たち3人の間には何とも言えない空気が横たわっていた。向こうから軍の奴らが近づいてきたのは分かっていたが、はつきり言って俺たちはそれぞれどころではなかった。

サーシャは3人が姿を消したのを確認するとリボルバーを下ろし、引き金から指を外した。俺はそれを見つめながら言った。

「……………おい」

サーシャは何も答えなかった。血溜まりの地面に向けられた銃口が、力なく揺れている。滴った赤い雫が落ちてポチャンと音を立てた。

「……………おい、サーシャ」

「……………サーシャさん」

よろよろと近づいてきたクリフもまた、俺と同じことを思っていただろう。悲鳴や怒号の坩堝となった闘技場の中で、唯一俺たちは冷静だった。

俺もクリフも、サーシャの背中から目を離さない。俺たちが言いたいことはただ一つ。

「……………お前は、何者なんだ……………？」

「……………」

サーシャは何も答えなかった。やがて闘技場内に入って来た軍のやつらが俺たちの姿を確認して近づいてくる。

「おいつ、サーシャ！」

俺は怒鳴った。何も知らないまま何も聞かないまま、ハイさようなら、と切って捨てられるわけにはいかなかった。取り押さえようと腕を掴む軍人たち。俺はそれを渾身の力で振り払った。サーシャも同じように軍のやつらに拘束されていく。あいつは抗わなかった。

「……ふざけんなよっ!!」

それは俺が最後に言った言葉。

サーシャは、最後までこちらを振り向こうとはしなかった。

「畜生っ、アイツ……」

俺は寢床に拳を突き付けた。『淵霊嶺』の最下層に送られたのはおそらくサーシャで間違いない。このまま、俺は事情を知らないまま、アイルークのことを、あの機械人形のガキやジェイロードとかいう奴らのことを忘れろっていうのか。

北の冷えた空気が体を包む。だがそれとは反対に、俺の中に溜まった怒りや理不尽な感情はどんどん熱さを増していった。

反対側で毛布に包まっていたヤツは、俺の様子に何かを察したようだった。

「……あれ、オンナノコ、兄さんの仲間ですのん？」
「別にあんな怪物、仲間じゃねえ……」

でも、と俺は突きつけた拳を握りしめた。このまま終わりに出来るほど、俺は都合良く出来ているわけじゃない。

「でもな……アイツに洗いざらい喋らせるまで、死なせるわけにはいかねえんだよ……！」

俺は拳を見つめながら、溜まった感情をその一言で全て吐き出した。このまま大人しくしているのは割に合わない。アイツを『最下層』から引っぱり出して、全ての事情を聞き出すまでは。

毛布を被っていたヤツは、クシシと肩を震わせて笑った。馬鹿にしてんのかと睨みつけると、そいつはベージュ色の瞳で俺を見つめる。

「……兄さん、威勢がいいのん。相部屋がオジジだけでなくて良かった思た」

「ああ？」

俺は立ち上がってソイツに視線を向けた。ソイツはまた訛った言葉で笑う。

「実を言つと、ウチの相方も捕まてるのん。『ダツソウ』するなら、手伝いするのんね。ど、ど？」

「脱走つて……テメーみたいなひ弱は大人しく捕まってる。そこのジイさんと仲良くな」

そう言つて鉄格子に手を伸ばしたその時、はらりとソイツは被っていた毛布を取り去った。そしてゆっくりと俺に近づき、俺の顔の

すぐ近くでニツコリと微笑んでみせた。

血のように真っ赤な髪と、浅黒く日焼けした肌。そして髪は高い位置で一つに結ってある。そして何故か、その右手にはつい数時間前に見た、ここの牢屋の鍵が握られていた。

「……兄さん、ここはいるとき看守と一騒動してくれた。だから盗れたのんね」

ソイツは鍵を掴むと、自分の厚い唇に押し当てた。そして俺を見上げてウインクする。

「アタシ、名前、テレジア。テレジア・ケベリいうのん。よろしくどーぞ」

その女はそう言って笑ってみせた。

「うっ、ひっく……」

僕は声を抑えるようにして泣きながら、何度も目を擦った。体は怪我や疲れで動かないのに、涙だけは何度も何度も溢れ出て来た。

僕の頭の中は色んなことでいっぱいだった。シルヴィのこと、ジエイロードさんのこと、そしてサーシャさんのこと。裏切りとか、

事情の分からない関係とか、この寒くて暗い牢屋とか。全てが僕を責め立てているみたいで、僕はどうしようもなく悲しくなった。

「……………ひっく、……………」

エレンシアで捕まってから、サーシャさんとフレイさんがどうなったかは知らない。もしかしたら同じ場所にいるのかもしれないし、いないのかもしれない。……………でも、僕だけ『淵霊嶺』に連れて来られたのだとしたら、僕は多分もつと泣くことになると思う。

ここはどうやら、怪我をしている囚人が収容される場所のようだった。清潔だけど、どの牢屋にも人が居ない。さっき僕を連れて来た皮肉屋の看守が、『みんな怪我や病気をするとこの寒さですぐ死ぬから、ここは滅多に使われないんだ』って笑っていた。

「……………っく……………」

僕は溢れる涙を拭った。そして鉄格子の嵌められた窓から外を見つめる。雪の時期じゃないから雪は降っていないけれど、代わりに冷たい雨が降っている。中途半端に割れた窓からは冷えた空気が入って来た。

「……………おい」

「ひっ!？」

突然背中から聞こえて来た声に、僕は悲鳴をあげた。僕の背中には壁しかない。なのにそこから声がしたんだ。すごく低い、男の人の声。

「……………。……………泣き止んだか？」

壁から聞こえて来た声が隣の牢屋から響いてくることに気付くまで、少し時間がかかった。人の気配なんてしなかったから、僕は慌てて壁と向かい合う形になる。

「えっ、あ、はははいつ！」

「……………そうか」

声はすぐに沈黙に変わった。僕は不安になって、会話を繋ぐような話題を探した。そうしていないと壁の向こうにいるこの声の主が、自分の聞き間違いなのではないかと疑ってしまいそうだったから。

「……………え、えつと……………あの、貴方は？」

「……………ジャン・ユサク」

返答は少し遅かったけど、当然のことを答えるようなはつきりとした言葉だった。でも、返って来たその返答は、僕には全く思いがけないものだったんだ。

「え、えええっ！？ジャン・ユサクって、あのジャン・ユサクさんですかっ！？」

「……………どのジャン・ユサクか知らないが……………。世界に同じ名前を持つ者がいない限り、お前の想像通りだろう」

僕は口をパクパクさせながら、壁の向こうから返って来た答えに混乱していた。ジャン・ユサクといたら、あの太陽国ネオ・オリエントで最も有名な、メティスカといわれる部族の戦士だ。先祖代々、視力を失う代わりに父親から受け継いだ義眼を、一族の誇りと共に受け継いでいく。

そんな凄い人の前でメソメソ泣いていたんだと思うと、僕は急に恥ずかしくなってしまった。

「…………お前は？」

「え？」

「お前の、名は？」

ジャンさんは低い声でそう言った。僕は慌てて姿勢を正し、壁に向かって頭を下げる。

「あつ、はい！僕はクリフ・パレスンと言います。…………あの、弱いんですけど、一応剣士をやってます…………」

小さくなっていく語尾。ジャンさんには聞こえただろうか。壁の向こうの声は何かを考えるように一度沈黙して、捻り出すような低い声を発する。

「…………傭兵学校の出か」

「はい、あの一応…………」

僕はさらに小さくなった。フレイさんの前では間違っても傭兵学校の出だ、なんて言えない。じゃあなんでこんなに使えないんだと言いつ返されるのが目に見えてるから。

ジャンさんはまた何かを考えるように沈黙した。僕は返答を待ちながら、寢床にあつた毛布に包まる。この寒さは、グロツクワースやエレンシアの都の比じゃない。段々と冷えていく指先を摺り合わせながら、僕は白い息を吐いた。

「さ、寒いですね…………」

「…………ここは雪山だからな」

ジャンさんはそう呟く。きつと彼はどんな寒さも我慢出来るんだ

ろう。声は僕みたいに震えていない。

「山を越えるとアルジェンナ砂漠なのに、こんなに寒いんですか……？」

「……エレンシアはもともと地盤が高い場所であり、アルジェンナ砂漠は海面より低い位置にある。高地と砂漠では気温も気候も違う」

僕はふとサーシャさんの地図を思い出した。エレンシアから山脈の頂上へ行くことは簡単だけど、アルジェンナ砂漠の方からは難しいと言われている。

エレンシアはもともと高い場所にあるから、山の中腹辺りから登るようなもの。逆に砂漠はずっと低い位置にあるから、山の裾野から登ってくるようなものだったことだ。

でも、あれ……？

「それじゃあ、あの……さっき看守さんが言ってた『最下層』って、山の麓辺りになるんですか？」

僕は両手の人差し指と親指で三角形を作ってみる。左人差し指の第2関節の辺りがエレンシアの都の位置で、人差し指が合わさった部分が『淵霊嶺』の場所。

右手の指の付け根あたりが国境を越えたアルジェンナの砂漠だとすると、『淵霊嶺』の最下層は親指と親指の触れる地点。つまり、アルジェンナ砂漠と大体同じ高さに位置することになる。

「……そうだ。そしてそこからアルジェンナに抜けるルートが存在する」

僕は指で三角形を作ったまま、一瞬思考が停止してしまった。

第5章 1

テレジアと名乗った女は、鍵を開けると周りの囚人たちの目も気にせず歩き始めた。騒ぎ出そうとする奴には「その兄さんが魔法で焼くと言うのん。だから静かにした方がいいのんよ」と冗談とも脅しともつかないような言葉で黙らせ、テレジアは廊下へと出る。胡散臭い奴だなと思いつつも、俺は結局コイツについていくしかなかった。

- 太陽国の二人の戦士 -

『淵霊嶺』は普通の監獄とは違った造りをしていた。まず中央には螺旋階段があり、そこから扇状に看守の部屋やおそらく交代で番をする奴らの寝床があった。そして部屋と部屋の間には廊下があり、螺旋階段から放射線状に伸びたこの廊下が、更に外側にある牢屋へと続く。

つまり脱走者は看守たちが常に待機している場所を通過しなければいけない。しかも廊下に面する場所にはご丁寧な窓がついていて、そこを通る人間が見えるようになっていた。

「……兄さん、看守、全然いないね。もともとサボり多いから、あんまり警戒することないのんよ」

俺は窓から中を覗いた。たしかに、看守の姿は見当たらない。おそらくさつきまではいたんだろう、読みかけの本が開いたまま、デスクの上に置かれている。暖炉には火が燃え盛っていてパチパチと音をたてていた。

テレジアはくしし、と笑う。

「兄さんのお仲間、よほどいい女だてことね。ここ野郎ばかり、仕方ない」

「……お前だつて一応女だろうが」

俺は後ろで笑うテレジアにそう言った。そういえば、なんでコイツは男ばつかりの牢屋に入れられてたんだ。同室が死にかけジイさんとはいえ、『淵霊嶺』ではそんな細かいことに気を配る気もないのか。

テレジアは窓から看守部屋に忍び込むと、壁にかけてあった鍵を手を取った。そして壁沿いにずらりと並んだ武器の中から、一つに目を留める。

それは戦棍だった。たしかメイスと呼んではずだ。鍵で壁に縛り付けられていたそれを、テレジアは素早く解放した。そしてこちらに向かってニヤリと、暗い笑みを向ける。

「あの看守……貧乳は男と変わりなくて言たのん。もしも何処かお会いしたら、お礼しよ思てた」

殺気立った空気でメイスを握るテレジア。俺は一步後ずさった。テレジアは窓から廊下へと戻ってくる。

「ホント失礼な男のんね！貧乳だていつかは救われる、美貌の神様ファイオレンティーナの言葉よ」

女神フィオレンティーナがそんなことを本当に言ったかどうかは知らないが、俺の知るかぎりフィオレンティーナの女神像は殆ど胸が膨らんでいる場合が多い。

テレジアはそう言いながら無い胸を張って歩き出した。手に持ったメイスから見るかぎり、おそらくその看守と出会ったら最後、剣や魔法よりも無惨な殺し方をするのは目に見えている。

俺はとりあえず、コイツとは必要以上に関わらないようにしようと心に決めた。あと貧乳という言葉は間違っても口にはしていない。

「……………で？お前の相方は何処にいるか分かってんのか？」

俺は階段を下ろうとするテレジアにそう言った。螺旋階段を見ることがぎり、おそらく最下層まで続いているんだろう。冷えた空気が這い上がってくるのがわかる。

テレジアは足を止めると、顔をこちらに向けて得意そうに笑った。一つに結った赤い髪が揺れる。

「くしし……………このテレジア・ケベリ、お仲間の居場所くらいちゃんと把握してるのんね」

ガチャ、ガチャと何かが外れる音がして、僕は慌てて鉄格子から隣の牢屋に視線を向けた。鉄格子が一本、二本、三本と折られて、通路の床に投げ出される。四本、五本と格子が壊されると、そこからゆっくりと黒い布を被った男の人が外へと出てくる。

僕は呆然と、牢屋から抜け出したジャンンさんを見上げた。

「……もしかして抜け出すんですか……？」

ジャンンさんは熊みたいな大きな体で僕のいる牢屋の前に立ちはだかると、僕を見下ろして言った。

「……お前は素直に捕まっているのか」

「そ、それは嫌ですけど……」

僕の返答を聞くと、ジャンンさんは無言で鉄格子の一本に触れた。そして先ほどと同じ要領で格子を折る。手入れの行き届いていない牢屋だから、格子は錆びていて脆くなっているようだった。

ジャンンさんと違って体の小さい僕は、簡単に格子の隙間をくぐり抜けることができた。

「……あ、ありがとうございます」

「……『力ある者、救いを必要とする人間の太陽となれ』太陽神バルトロの言葉だ。……礼はいらん。感謝なら神にしる」

僕は歩き出したジャンンさんの後ろ姿を改めて見上げた。ジャンさんは辺りを見回しながら歩き出す。僕はその背中を追いながら、ジャンンさんの言葉を何度も何度も心の中で繰り返した。

牢屋を出た僕とジャンンさんは、看守のいない部屋を通って階段のところまで出た。看守室にはレイテルパッシュとジャンンさんのコルセス力があって、数時間ぶりにレイテルパッシュを手にした僕

は、人心地をつくことができた。

僕はレイテルパラツシユを抱いて看守室を出ると、階段の前で何かを考えているジャンさんに気付いた。

「?……どうかしましたか?」

「……足音が近づいてくる」

螺旋階段の手すりに体を預けた状態で、ジャンさんは上を見上げた。僕は咄嗟にレイテルパラツシユを抱く手に力を入れる。もしかして看守が戻って来たんだろうか。でも、僕には足音が聞こえない。やっぱり視覚を持たないジャンさんには普通の人には聞こえないような音まで聞くことが出来るんだろうか。

僕はレイテルパラツシユの柄に手をかけた。ジャンさんにばかり助けてもらうわけにはいかないんだ。でも、やっぱり少し怖い。

ジャンさんは少し考えた後、僕に視線を向けた。

「看守ではない……テレジア、か」

ジャンさんの言葉から間髪おかずに、僕の耳にも2人分の足音が聞こえて来た。しかも人の声も聞こえてくる。

「ほら、いたのん! 兄さん、アタシの勘、間違いなかたよ」

「……っ テメ、走るの早すぎだっ……」

妙な訛りの女の人の声と、もう一人は…… フレイさん?

「兄さん典型的な『マジユツシ』。力続かない、仕方ない」

「うっせえなっ!! 魔力使って仲間の気配探しながら走れるバケモンに言われたかねえっつの!」

「……あ、一つ言うておくよ、アタシ『バケモン』て言葉も嫌いね。

バケモン救う神、無いのん」

ジャンさんは上から聞こえてくる掛け合いに、無言のまま目を閉じている。僕は螺旋階段から上を見上げてみた。すると階段を駆け下りてくる赤髪の女の人の姿と、少し遅れて後をついてくるフレイさんの姿が見えた。

僕に先に気付いたのは女の人だった。そのままこの階まで駆け降りてくると、ジャンさんに視線を向けて。片手をあげてみせた。

「お、いたのん相棒。怪我不い？そうか、なら心配ないね。……で、この可愛いの誰ね」

女の人はいいたいことだけ言うと、すぐに僕に視線を移した。ジャンさんは自分で答える、という視線を向けている。僕は戸惑いながら、急に現れた見慣れない女の人に視線を戻す。しかし僕が名乗るより先に、一周遅れで駆け込んできたフレイさんが僕の姿に気付いた。

「あつ、テメ、クリフっ！！」

僕を見つけたフレイさんはもの凄い形相で僕に駆け寄って来た。僕はいつもの癖で反射的に後ずさる。フレイさんは僕の襟首を掴んで逃げられなくすると、ガツクンガツクン僕の体を揺さぶり始めた。

「てめえ、なんで簡単に操られてたんだよっ！テメーが意識しっかり持ってれば、あんなの簡単に振り切れんだぞ！？」

「えっつ、で、でもおっ、あのとき、色々、あつてっ……」

僕は目を回しながらそう答えるしかなかった。ひたすら怒鳴りつけるフレイさんに、隣に居た赤い髪の女の人が笑う。

「兄さん兄さん、あんまりやると剣士の兄さん使いものにならなくなってしまうよ」

「もともと使えねえから関係ねえっ!」

女の方はやれやれと肩を竦めると、ジャンさんに視線を向けた。

戦棍を肩に担ぐような格好でジャンさんの隣から螺旋階段の下を見下ろすと、緊張感のない顔で言う。

「最下層に兄さんたちのお仲間いるらしいから連れてこ思ったんだけど、どうやら出口も下にあるのんね。どする?」

ジャンさんは僕とフレイさんに視線を向けて、ため息をついた。

フレイさんの怒りは未だに治まらない。僕はガクガク揺さぶられながら、半分酔い始めていた。

女の方は僕らの様子をくしし、と笑って最下層に向かってのんびりと呟いた。

「賑やかなるね、良いこと良いこと」

目を覚ますと暗闇が体を包んでいた。先ほどまで感じていた寒気

が消え、同時に体の痛みも消え去っていく。コロッセオを出て3日。クリフさんに刺し貫かれた傷はおそらく、もう傷跡すらも残っていないだろう。今では呼吸も楽に出来る。ただ、流れた血の量が多すぎた。体がだるさを訴えている。

私は目を瞑ったまま、静かに辺りの気配を窺う。なんとなく目を開かない方が良さだろうと、女の勘が言っていた。先ほどから壁を隔てた向こう側から、男達の声がしている。

私は格子越しにチラチラと様子を確認している男達に気付かれないうつ、ため息を吐いた。どうやら、目を覚ましたら慰み者にしてやろうという魂胆らしい。気を失っている間に手を出さなかったのは泣き叫ぶ姿を見たいがためだろう。

(下衆ですね……)

私は気絶しているフリを続けながら考えを巡らせた。

私はこんなところで絶望しているわけにはいかない。一瞬コロッセオで見たジェイロードの表情が思い浮かぶ。ここから出て彼を殺すまで、私は諦める訳にはいかないのだ。

入れ替わり立ち替わり様子を見る看守達。その足音の種類を聞き分けながら、私は大体の数を推測する。おそらく十数人だ。

(……リボルバーは……ありますね)

背中に固いものが当たる感触に私はため息をついた。おそらく看守達はそれが武器だと思わなかったのだろう。彼らが引き金を引かなかったことに私はほっとした。普通の人間なら、おそらくこれが武器だとは思えない。しかしこれは剣よりも弓よりも、時には魔法よりも絶対的な力だ。

体が動くかどうか、一つ一つ力を入れて確認していく。血が足りないのが少々辛い、とりあえずここにいる十数人の相手は出来る

だろう。

私は鉄格子から見えない方の手を背中へと忍ばせた。

『どんな逆境も、待てば何処かに好機があると思いなさい。大事なのは辛抱。そして……』

(……チャンス掴む運と心)

男の一人が独房を覗き込み、つまらなそうに戻って行った。一瞬の際に、私は即座に体を起こした。入り口は鉄の扉。小さい格子戸が嵌っているが、その真下は死角になる。

私はリボルバーを構えた。また別な足音が近づいてくる。私は弾倉を回転させた。牢屋の中に人影がないことに気付いて、男は鍵を持ってくるだろう。チャンスは一回。それをものに出るかどうかは、すべて私にかかっていた。

「……で、どうやってここから最下層まで行くつもりなんだよ」

クリフ相手に怒鳴り散らした俺は、スッキリした気分ではテレジアに向き直った。テレジアは螺旋階段の下を覗き込みながら、何かを考えている。隣にいるジャンとか言う男は何も言わず、テレジアの様子を見つめていた。

テレジアは下を向きながら難しそうに顔をしている。クリフはし

きりに首を傾げていたが俺にはなんとなく分かった。コイツは魔力を使ってこの空間の構造を把握している。メイスを握っている姿からは想像がつかなかったが、コイツは多少の魔法を使えるんだろう。俺とは違う、特殊な魔力だ。

「うーん、どやら地下層に行くルート、2つあるのん。兄さんのお仲間、居場所把握できた。でも……うーん」

「な、なにか問題があるんですか……？」

テレジアはクリフに視線を向けると、はつきりと頷いてみせた。

「ルート選択、難しい。危険だけど早く行ける方するか。それとも安全に降りる方するか」

「どつゆつことだよ」

回りくどい説明に、俺は顔を顰めた。テレジアは一度ジャンに視線を向けると、困ったように俺たちに視線を戻した。そして赤い髪をかきながら苦笑してみせる。

数秒後、俺は詳しいことを聞こうとした自分を恨んだ。

「ここ、どやら20階。で、お仲間は地下28階ね。……階段下るのん、とても安全」

くししと笑うのが癖のテレジアが、可愛い子ぶってテへ、と笑って見せた。さつき10階分階段を下って来た俺は、いくら下りとはいえそれがどれだけ大変か身を以て体験している。ここからまた48階分下りろって言うのか、お前は。

ついさっきの勢いで掴み掛かるうとする俺を、クリフが慌てて押さえた。

「わ、ちょっと……フレイさん、落ち着いて下さい！さっきルートは2つあるって言ってたじゃないですかっ」

クリフの言葉に、テレジアはまた苦笑を浮かべた。この表情を見るかぎり、どっちももロクなことじゃないんだろう。

テレジアは言う。

「……ええと、各階に古い機械が設置されてるのんね、どやら下まで降下できる……エベなんとかて機械」

「……『エレベーター』。人や荷物を乗せて上昇、降下が出来る機械だ」

黙っていたジャンが補足を加える。それぞれ、とテレジアは頷き、俺に向き直った。俺は嫌な予感を感じて一歩後ずさる。

なんだよお前、そのキラキラした目は。

「ただ、あれは電気がないと無理ね。……てことよ兄さん」

頑張って、と笑うテレジアに、俺は気が遠くなりかけた。

第5章 2

僕にはたった一つだけ、思っていたことがあった。こうやって護衛の仕事をして、いつか強くなれたら、失ってしまった故郷のことを調べたい。何故消えてしまったのか、何故誰一人として助からなかったのか、それを知ることが残された僕の役目だと思ったから。

僕は無力で、非力だ。……でも、僕には僕の、やらなければいけないことがある。

- 光無き、声無き暗闇 -

降下機械は長四角の形をしていて、入り口とその反対側には壁がなかった。下を覗き込もうとしたけど、機械が動き出すみたいだから止めた。それにしてもこの箱、もしかしてロープが何かで吊り下げているんだろうか。もしそうなら、運悪くロープがキレてしまった時のことを考えると足が震えてくる。

テレジアさんは壁際にあったボタンに手を伸ばした。ボタンに書いてある数字は多分階数だと思う。テレジアさんは地下28階を押した。

「……えと、逃げ道確保が2人、お仲間助けるのが2人。これでいいのん？」

「あ、はい」

僕はフレイさんの提案で二人ずつに分かれて行動することになった。サーシャさんを助けるのがフレイさんとテレジアさん、逃げ道を確保するのが僕とジャンさん。なんで僕が逃げ道確保に回されたかというと、フレイさんが『お前がいると邪魔だ』って言ったから、なんだけど……。

はつきりとそう言われると、分かっていることはいえやっぱり悲しくなってくる。

やがてガタンと音がして降下機械が動き始めた。錆び付いているのか、時々音をたてて揺れる。けど確かに螺旋階段を下りて行くよらずつと楽だ。でも凄い音がする。

僕の隣にいたテレジアさんが、ぽん、と僕の肩に手を置いた。そしてニコツと微笑む。

「……剣士の兄さん、気にする必要のないのね。あの兄さん、口悪いけど悪い人ない」

僕らの後ろにはジャンさんがいて、その更に後ろにフレイさんがいた。ギシギシ音を立てる機械に顔を顰めている。多分テレジアさんの声はあっちまで届いていないんだろう。

テレジアさんはメイスを持って余しながら言った。

「……正直は本当のことだけ言うのん。でも一番駄目は良い人のフリする悪人ね。あの兄さん、どちらかと言うと悪人顔の善人」

テレジアさんの言葉に僕はコロッセオのことを思い出した。フレイさんは自分の気をしっかり持っていればあれくらいの暗示は簡単に解けるって言ったけど、サーシャさんにトドメを刺そうとした僕を止めてくれたのはフレイさんだった。あの時魔法を使ってくれ

なかったら、多分恐ろしいことになっていたと思う。

僕はしばらく考えて、そして頷いた。テレジアさんは満足げに頷く。

「それにな、兄さん。兄さん自分のこと弱い言う。でもそれは悪いことない」

赤い髪が降下機械の下から上がって来た風に揺れた。テレジアさんはゆっくりと頷いた。真っ黒に焼けた顔で破顔する表情は、凄く魅力的だ。眩しい笑顔ってこんな表情を言うのかな。

「悪いことじゃ……ない？」

「そぞ。……生きてれば、弱い人にしか出来ないこと、沢山あるのん。非力も無力も、一つの力よ」

だから『力』て字を書くね、とテレジアさんは結構無理のある理屈に堂々と笑ってみせた。

僕は胸に抱いていたレイテルパラッシュに視線を向ける。非力も無力も、一つの力。力の形。何度も何度も自分にそう言い聞かせる、冷たい空気で冷えていたレイテルパラッシュが、少しだけ暖かくなったような気がした。

(力、か……)

昔からずっと思っていたことがあった。護衛の仕事をして腕があがって、いつか強くなれたら……消えてしまった故郷のことを調べてみたい、と。この間グロツクワースの街の一件を耳にしたときから、その思いが再び自分の胸に宿っていた。伝え聞いたその状況があまりにも自分の知っている故郷の惨状と同じだったから。

いつか一人で旅を出来るくらい強くなれたら、いつか全ての原因

を知りたい。それはずっと前から、心の奥底で燻っていた。

でもままならないまま、自分はするところまで来てしまった。僕は自分で自分に絶望していたんだ。弱くて、臆病で、どうしようもない自分に。

(……もし……)

僕は顔をあげた。もうすぐ最下層が近づいてくるのか、降下機械はゆっくりとスピードを緩めていく。それと引き換えに、金属をひつかくような耳障りな音が木霊した。フレイさんが何か文句を言っているのがきこえてくる。

(……もし、ここから抜け出せたら……)

僕の決意と共に、降下機械は止まった。

独房の中に人がないことに気付いた一人が声をあげた。私は入り口の死角に入り込み、リボルバーを握りしめた。体は怠いが、多少の無理はききそうだ。ゆっくりと息を吐き、そして足音が近づいてくるのを待つ。足音はおそらく3人。

心臓が脈打つ。慌てているのだろう、鍵を差し込む音が忙しく響いた。私は目を瞑り、息を整える。いつものように記憶の中のあ

のを感じながら。

『サーシャ。……貴女には謝らなくてはいいけませんね』

錠が落ちる音が、静かな独房内を緊張させた。鉄の扉が開く様子が私にはまるでひどくゆっくりとした動作に見える。タイミングは一瞬だけ、私の姿が無いことに気付いたその一瞬。警戒する暇を与えてはいけない。

看守の一人が一步を踏み出した。その瞬間、私は死角から看守達の目の前に跳躍する。銃口は入り口付近に立つ、邪魔な者たちに向けて。

「……っ！」

男が私の姿に気付いたその瞬間。彼が叫び声をあげるより速く、目にも留まらぬ速度で銃弾が看守の左胸を襲った。背後にいた二人は状況を理解出来ていない顔で、急に倒れた仲間と私を見つめている。

私は再びリボルバーを構えた。発砲音が2発連続する。二人分の体が折り重なるようにして倒れると、奥から声が響いて来た。

「な、何だ!？」

「脱走だ!独房にいた女が逃げ出したぞ!」

非常用の武器を持った男達が通路に立ちはだかる。独房を出た私は、前後を取り囲む人数を頭の中で数えながら、汚れた自分の衣服の中に空いている片方の手を入れた。利き手に持つ銀色のものとは違う、黒塗りのリボルバーが現れる。

『私はいてはいけない存在だった。……あの時に滅ぶべきだったの
でしょう』

リボルバーの製品名も型番も、私は知らない。だから私は常に使用
するシルバーのバレルにブラックのグリップをしたりリボルバーを
『クロノス』と呼び、普段使わず隠し持っているこちらを『ヒュペ
リオン』と呼ぶ。

このクロノスとヒュペリオンが私をここまで生かして来た。そし
て、これからも。

「……女一人に随分な数ですね」

私は左右を見回した。外へ続くのは右か、左か。看守の人数から
見るかぎり、おそらく正解は右だ。私は二丁のリボルバーを握りし
めた。男達は殺気立っている。もはや囚人だろうが何だろうが、殺
してやるうという勢いだろう。だが彼らのその考えは間違っている。

『万物の理から外れた者の末路、とでも言うべきでしょうね……』

私は右方向にいる囚人達の真上に跳躍した。体を捻りながら銃口
を狙った人間に向ける。クロノスが派手な音をたてて看守の一人に
命中した。咄嗟に周囲の男達が警戒する。集まった看守が互いに体
を引いて、真ん中にサークルが出来る。私はそこに着地するとヒュ
ペリオンの引き金を引いた。

「……っ！」

後ろから飛びかかってくる男たちを蹴り倒し、クロノスのシリンドラーを回転させる。弾数は残り少ない。ここからヒュペリオンのみで逃げ切れるだろうか。体術は多少出来るし、もしヒュペリオンの銃弾も切れたら男たちの武器を奪い取って戦うこともできる。

剣術、槍術、体術……生きていくための全てのことを、私は知っている。そしてそれはあの男……ジェイロードも同じだ。

頬の横を刃が通り過ぎて行くのを感じながら、私は看守の腹を蹴り上げた。やがて状況の不利を悟った男たちの顔に恐怖の色が浮かんでくる。それは死を目の前にした者の顔。

記憶の中の私が叫ぶ。

「……違います。貴女はいつだって逃げたことはなかった。逃げないことを教えたのは貴女じゃないですか！」

1人、また1人と逃げ出す者が出てくる。この世で悪意を持つ者の半分は、それを支えるだけの強い心を持たない。自分より強い者には頭を下げ、弱い者を見下し群れる人間。そんな者たちは邪魔にこそなれ、蹴散らすのに手間はさほどかからない。そう、それは一発の弾丸で小鳥の群れを散らすようなもの。

逃げ出そうとする看守たちに私はクロノスとヒュペリオンの銃口を向けた。弾数は少ないが、リボルバーの造りを知らない人間に、弾切れなど分かるはずもない。引き金に掛けた指に力を入れれば、彼らを恫喝するには十分だった。

道をあけるように命令しようとした刹那、通路の向こうから聞き覚えのある声が響いた。

「サーシャ！」

私は視線だけを動かし、階段へと続く道に視線を向ける。そこにはフレイさんの姿と、見覚えのある女の冒険者の顔があった。メイスにあの赤い髪、おそらくジャン・ユサクのパートナーだろう。

なぜフレイさんが彼女と一緒にいるのか疑問に思ったが、私はそれより先にここから脱出することを優先させた。人を助けにくるのだから、フレイさんたちは出口を分かっているのだろう。ここは彼らについて行った方がいい。

私は牽制の一発を放ち、男たちの動きを止めた。そして二人のもとへと駆け出す。後ろでは追いかける力をなくした男たちが、呆然と私たちの背中を見つめていた。

『…………サーシャ。一つだけ約束出来ますか？』

フレイさん達が先導し、私は地下層からアルジエンナ砂漠へと続く通路を走った。やがて走っていくうちに肌が温かい空気を感じた。顔を上げると向こうにあるのは真っ白な陽の光。風の吹く音が私の耳にも届いてきた。

通路の終わりには大きな鉄の扉があり、そこにはクリフさんとジャン・ユサクの姿があった。常人にはとても開くことの出来ないような鉄扉は決じ開けられていて、人一人分の隙間が開いている。

再会を喜ぶクリフさんを適当にあしらい、私は4人の後を追って砂漠へと通じる鉄扉を抜けた。

第5章 3

神がもしこの地上にいるのなら、私は己の罪を己の口から告白しましょう。私は死から逃げたのです。神が示した死の機会を失い、生きながらえてしまった。それが偶然にしる必然にしる、罪であることにかわりはありません。

ただ一つだけ、祈ることが許されるのなら。私は、私の意志を継ぐ彼女の幸せを願いましょう。彼女の道に憎しみと悲しみの花が咲くことのないように。

- 荒野に咲く一輪の花 -

「アタシ達、一度お国に帰るのんね。色々『ジヨウホウ』入たから、上の人に伝える。お仕事まだ続くね」

監獄からアルジェンナ砂漠に出ると、テレジア達はそう言うて去っていった。メイスを担ぎ上げたテレジアと、コルセスカを布に包み黒い布を頭まで被って歩き出すジャンの背中。クリフは何度も二人に頭を下げながら、それを見送っていた。

俺は視線をアルジェンナ砂漠へと向けた。山の裾は僅かばかりの草が生えているが、砂嵐のせいで茶色く染まっているのが殆どだった。向こうに視線を向けると、瓦礫のような岩がゴロゴロと転がる

荒野が広がっている。

ふと砂を踏む音に気付いて、俺はサーシャの背中に目を向けた。

「おい。……何処行くんだよ」

アルジェンナ砂漠へと歩き出そうとしていたサーシャが、ふと足を止めた。テレジア達を見送ったクリフが駆け戻ってくる。

サーシャは顔をこちらに向けてると、無表情で言った。

「関係ないでしょう……契約はすでに切つてあります。お二人もお好きにどうぞ」

「サーシャさん……」

クリフがオドオドと困つたような表情を浮かべた。俺はそれを押しつけて、サーシャを睨みつける。

「俺たちがこれからどうするかは俺たちが決めることだ。だからつてな……ここまで巻き込まれて説明なしで『ハイ、さようなら』かよ」

サーシャが顔を顰めた。冷やかな視線で俺たちを射る。いつもならこの表情一つで逃げ腰になるクリフが、俺の隣で静かに頷いた。そして言う。

「あの……僕も、知りたいです。なんだか色んなことがいつぺんに起きて、何がなんだか分からないから……」

俺たちの言葉にサーシャはため息をついてみせた。どんな表情をされようが、俺は引く気はない。アイルークたちの考えていること、そして過去の予言書のこと。知る権利もへつたくれもない。俺はそ

れを知りたいと、そう思った。それ以上に理由は必要ない。

「……仕方のない人たちですね……」

荒野に視線を戻して、サーシャはそう呟いた。

「……私の名前は、サーシャ・レヴィアス。名前で分かるでしょうが、ジェイロードとは兄妹の関係です」

サーシャはまず、そこから話し始めた。荒野に吹く風が、青空に砂を舞い上がらせていく。時折吹く突風が山脈を昇っていった。サーシャの視線は山脈の向こうに続く大地と空の間へと向けられている。

クリフはじつと、サーシャの言葉を聞いていた。サーシャがあのジェイロードと血縁だというのは本当だろう。二人は目元がよく似ている。

サーシャは視線を足下へ向けて呟いた。

「レヴィアスは父の性です。私が生まれた頃に亡くなったので、覚えてはいません。そして母の性は、リドル・T・ブレイス」

「!」

俺とクリフは一瞬、サーシャの言葉に耳を疑った。姓名が長いのは財閥や貴族、そして王族の証。しかも省略された文字は、この歴史のある時点からその一族以外禁止とされた言葉だった。

「おまつ……まさか……」

俺の声にサーシャが振り向く。

「……ええ。私の母の名はカタリナ・リドル・トウアス・ブレイス。約500年前の、トウアス帝国の第18王女です」
「なっ!?! おかしいだろ、500年前の人間の娘って!」

人間の寿命はせいぜい50かそこいらの世の中だ。トウアス帝国があつたころは医療も発達して70まで生きるのが普通だったらしいが、今ではそれも無くなって寿命が低下している。だからって500年はおかしい。だいいち、サーシャは俺と同じくらいにしか見えない。

サーシャは驚く俺たちに呆れたような顔をした。

「……変な想像をしないでください。私は18です。それ以上に見えるんですか」

「い、いえ、見えないです……。あの、でもサーシャさん。それじやあその……カタリナさんが結構な年齢になるんですけど……」

サーシャが18歳であることが間違いないなら、クリフの言葉は当たっている。サーシャはため息混じりに、視線を荒野へ戻した。空に浮かぶ雲が影をつくり、影は砂の上を移動していく。サーシャはそれを見つめながら、一つ一つを説明し始めた。

「……500年前、トウアス帝国はもはやこれ以上ないだろうというほどの権力と『知』を独占していました。その中でも当時注目されたのは、万物の理から外れた『禁忌』に関する情報です」
「禁忌、ですか……?」

サーシャの瞳は何処か遠くを見ているようだった。砂嵐の吹き上がる砂漠の向こうに何かを見るように。

「ええ。この世の中で一番の禁忌……『不老不死』です」

クリフが驚きの声を上げる。『不老不死』なんてものは物語の中の話で、それが実際に存在したという証拠はない。それが500年前の帝国の技術で実現していたというのだから、声を上げずにはいられないだろう。

サーシャは小さくため息をついて、呆れたようにクリフを見る。人の話は最後まで聞け、と言わんばかりの表情で。

「……『不老不死』といつても、効果は完全なものではありません。心臓をひと突きされればもちろん死にますし、胴体を切り離されて細胞が死んでしまえば、結局死に至ります。……いわば、人間の数十倍、治癒能力が上昇した状態だと考えて下さい」
「数十倍って……」

俺はふとコロッセオでクリフがサーシャの体を剣で貫いたときのことを思い出した。あれだけの出血と怪我をしておきながら、数日経った今、サーシャはこうやって俺たちの目の前に立っている。もしかしたら、傷はもう殆ど完治しているのかもしれない。

「当時の王族は、ほとんどの人間が『不老不死』という魅力的な力に溺れていました。しかしそれには大きな欠点があった……」
「欠点……ですか？」

首を傾げるクリフの隣で、俺はふとあることを思い出していた。魔法を学ぶうえで1つの基礎となる『対価』という考え方がある。何かを実現させるためにはそれに見合った代償を必要とする、という理論だ。実現させるものが大きくなればなるほど、対価もまた大きくなっていく。

特に生と死には、一定のバランスがあるとされてきた。

「……死なねえうえに増やすわけにはいかねえってことだろ」

俺の呟きに、サーシャは深い泉のような色をした瞳をこちらに向けた。

「そうです。特に女は、子供をつくれれば『不老不死』の力を失ってしまいました。何故かはわかりません。自ら実験台になるような勇敢な人間は王族の中にいなかったですから。……しかし、その力が子供へと受け継がれてしまうということだけは分かっていた……」

ふとクリフの表情が曇った。何を考えたのか、俺にだって分かる。サーシャの母親・カタリナは『不老不死』の力を持っていた。その絶対的な力を、その女は捨てたのだ。俺たちには、そいつが何を考えていたのかは分からない。おそらくそれは血を分けた娘であるサーシャにも、永遠に分からないことだろう。

サーシャは言う。

「カタリナは、500年前のあの夜を生き延びました。それは本当に偶然だったそうです。……彼女はそこから1人で生きて、父と出会い、そして私とジェイロードを生んだのです」

みなまで言わなくても、サーシャの伝えたいことは伝わって来た。カタリナの血を受け継いだサーシャとジェイロードというあの男は、500年前にトウアス帝国が溺れた『不老不死』の力を受け継いでいるのだ。

おずおずとクリフは言う。

「じゃあ、カタリナさんは……」

サーシャはクリフの言葉に頷くと、荒野の果てに視線を向けた。

風の音が耳の中で木霊する。

「……ありがとうございます」

「いえ、いいんですよ。私たちの家には子供がいらないから、とても楽しかったわ」

私は頭を下げる母を斜め下から見つめた。

髪を三つ編みに結び、結びきれなかった後れ毛が首筋から肩へと流れている。肌は乾燥した空気によってカサカサになり、顔はシミとそばかすが目立つ。彼女がトウアス帝国一の美女と謳われたカタリナ王女だと、誰が気付くだろうか。

母は私と、少し離れたところで出発を待つ兄を振り返って苦笑した。

「可愛げの無い子供達で……」

『あの日』の前日。私たちは街までの道のりを断念して、集落から離れた場所にあったこの老夫婦の家に一泊した。老夫婦には子供がなく、私も兄も随分と可愛がられた。特に私は夫人が欲しがっていた女の子ということもあり、とくに良くしてもらった。

ふくよかな体つきをした夫人が、皺の寄った顔を私に近づける。

「いえいえ、とても可愛いですよ。……また来て頂戴ね、サーシャちゃん」

頭を撫でられるのは慣れていなかったが、私は我慢した。母は少し遠くにいる兄を振り返ると、再び苦笑を浮かべて言う。

「……では、そろそろ。本当にありがとうございました」

「いえいえ、また来て下さいね。歓迎するわ」

私は見よう見まねで母と同じように頭を下げた。そして母の隣に並びながら、少し前を歩く兄の背中を視線で追う。

兄がそうやって私たちの少し前を歩くようになったのは、昨日今日の話ではなかった。私はすらりと伸びた背中と、腰に下げられたリボルバーを見つめる。そこには銀色のリボルバーが収まっていた。それは私の持つクロノスと対となる『カイロス』。

「……」

物心ついた頃にはもう旅をしていた。母は私や兄に戦う方法を教え、私たちは共に自分の身を守るすべと、生きていく力を身につけていった。

母は何でも知っていた。体術、剣術、槍術……それは本当の意味での年の功だった。私と兄は時に助け合うことを教えられ、時に互いを敵と見立てて戦わせられた。

母の訓練は、訓練ではなかった。

『訓練だとタカをくくる人間は危機的状況を生き延びることはできません。本気でかかっていきなさい』

私たちは母の言葉で何度も剣を交え、時には撃ち合いをした。

『常に自分の背後に「死」を感じなさい。感じるからこそ、人は抗う。それが分からない人間に、生死をかけた戦いは出来ません』

私は兄に勝ったことが一度もなかった。体力的な面で、兄は私の何倍も上をいつていたからだ。それでも母は勝負に手を抜くことを許さなかった。きっとそれは500年の時を生きてきた彼女が身を以て、この世のあらゆる危険と相まみえてきたからかもしれない。それでも『あの日』、母は死に抗うことが出来なかった。

「……少々忘れ物をしてしまったようです。サーシャ、取りに戻ってもらえますか」

あの日、母は私にそんな奇妙なことを言った。何でも行動前にきつちりと確認する母が、何かを忘れてくるなど有り得ないことだった。首を傾げる私に母は有無を言わさなかった。

「私とジェイはここで待っています。……いいですね、サーシャ」

集落も何も無い、林に囲まれた道だった。私は首を傾げながら、母と、少し前で足を止めている兄を見比べた。

何故あそこで頷いてしまったのか、私には分からない。私は母の言う通りに道を引き返し、そして老夫婦の家へと戻った。

老夫婦は苦虫を噛み潰した顔で一丁の黒塗りのリボルバーを差し出した。それは母がずっと愛用していた『ヒュペリオン』だった。母の言葉によれば、その名前の意味は『高みを行く者』……トウアス帝国の、あの悪夢の一夜から偶然生き延びてしまった自分が持つには皮肉な名前だと、母はいつも口癖のように言っていた。

黒く反射するヒュペリオンを見たその時、私は心臓の辺りにざわつきを覚えた。ざわめく木々の音に呼応するように激しくなる鼓動。

女の子にこんなものを持たせるのは、と苦い表情を浮かべる夫人からヒュペリオンを奪い取り、私は走った。

足をただ前に、前にと動かし、地面を蹴り上げる。胸のざわつきはまるで心の奥を不安という真つ黒な手に驚掴みにされたかのようにだった。自分の鼓動に耳を当てているように、心音が体全体に伝わってくる。

坂を駆け上がり、私の足はそこで止まった。

「……！」

銃声が鳴り響いた。引き金を引いたのは、誰でもない、実の兄だった。

私は呆然と、硝煙をあげる兄のリボルバーとそこに倒れている母の姿を見た。兄はゆっくりと腕を下ろすと、リボルバーをホルスタ―に収める。まるで私との訓練を終えた時のような、ごく普通の自然な動作だった。

私は何も言えなかった。兄は私の顔を見て、そして背を向けた。その背中が、ついさっき母と兄と私の三人で歩いていた時と、何も変わりがなかった。無言のまま小さくなっていく背中、それを見つめる私。

変わったことと言えば、兄のリボルバーの弾が一つ減っただけのことだった。

「……兄、さま……？」

私は無力だった。状況すら把握出来ず、私はただ兄の背中を見つめてそう呟くしかなかった。きつと何かの間違いだ、そう考えることさえ私には出来なかったのだから。

「……サー、シャ……」

耳慣れた声が私を現実へと引き戻した。

「！……母様っ！！」

駆け寄った私は、悲しくも母の怪我がどれだけのものかを一瞬にして知ってしまった。血の量、そして傷口の場所。通常の人の方では、その怪我は治すことが出来ない。そんな冷静な判断を、幼い頃から戦うことと同時に叩き込まれた私の頭は、いち早く察知してしまったのだ。皮肉にも、それを教えた母の最期を。

私は地面に倒れた母の体を抱き上げた。思っていたよりも母の体は軽く、そして触れた肌は冷たかった。

「母様……何故、こんな……っ！」

「サーシャ……」

母の肩は細く、三つ編みは砂にまみれている。羽織った上着からはゆっくりと血液が滲み出てきた。

「兄様が……母様を？何故、どうして……っ！！」

母の手が私の頬に触れる。乾燥してカサカサした手が私の頬をなぞり、まるで私の中に兄の面影を見るかのように、母は弱々しい微笑みを浮かべて掠れた声で呟いた。

「よいのです……。ジエイは……悪く、ありません」
「母様！」

私はその手をとった。

私はこの目で見たのだ。兄が母を撃ち殺すその瞬間を。決定的な、

その場面を。

「貴女には……謝らなくては、いけませんね……」

母は私の腕の中から空を見上げた。薄い雲が青空の色を淡くし、太陽の光を弱めている。時折思い出したように強い光が地面を照らし出し、風はまるで母の魂を誘うかのようにざわめいていた。

母の瞳はずっと高いところを見つめている。

「わたし、は……いてはいけない、存在だった……。あの時、帝国と共に……っ……滅ぶべき、だったのでしょうか……」

母がトウアス帝国の王女だという話を、私は微塵も疑ったことはない。それは私と兄の持つ『不老不死』の力のせいだけではない。

母は嘘が嫌いだった。嘘をつくことはこの世で一番してはいけないことだと、母はいつもそう言っていた。たわいのない嘘も、誰かのことを思っつてつく優しい嘘さえも。

だから私は、母を疑ったことは一度もなかった。

「万物の、理から……っ、かはっ！……外れた、ものの……末路とでも……言うべき、でしょうね……」

「……違います」

私は叫んだ。母の手を痛いほどに握りながら、叫ぶしかなかった。

「貴女はいつだって逃げたことはなかった。……逃げないことを教えたのは貴女じゃないですか！」

どんな状況でも背を向けるな。背後の『死』を感じ、そして徹底

的に抗え。それこそが、目の前に道を開く。

いつだって母は私たちにそう言い聞かせてきた。それなのに母は自分が『死』と向かい合ったこの状況で、逃げようとしている。私にはそれが耐えられなかった。

どんな時も、どんな状況でも、凜として前を向く……。荒野に咲いても雪山に咲いても、生まれたことを嘆かず、ただ真つすぐ太陽を見上げる強い花のような母が、私は一番好きだったのだ。

「……………サー、シャ」

母は切れ切れに私の名前を呼んだ。ここにいます、と呟いて私は母の体を抱く。母は私を見ず、ただ空を見上げて言った。

「ひとつ、だけ……………約束、できますか……………」

母の蒼い瞳に、刻々と流れてゆく雲が映っている。風に流されるまま、吹かれるままに移り変わる雲が。やがて何処か世界の果てで消えるのだろう。それも命と変わりが無いのに、誰にも悲しまれることのないまま。

母は微かに唇を開く。隙間から漏れてくるのは、もはや息と変わりがなかった。

「あの家に、戻って……………」この家の子供にさせてください』と……………
つそう、言い、なさい……………」
「っ—」

私は声をあげた。しかし母は首を微かに横に振る。

「ジエイを……………追いかけては……………っ、かはっ！……………いけ、ませんよ……………」

母はそう言うと、微かに握った手に力を入れた。それはおそらく、母の最後の願い。その弱々しい力は、私には何よりも痛かった。反論する言葉すら私から奪い、私はただ言葉を知らない赤子のように歯を食いしばって涙を流すしかなかった。

母は祈るように、願うように呟く。

「サー、シャ……どう、か……どうか……人と、して」

しあわせ、に。

「母様……」

母の呼吸が細くなる。瞼がゆっくりと落ちてきて、最後に蒼い瞳が私に向けられた。触れた手からも力が抜けてゆく。

私は、あまり得意ではない笑顔を浮かべた。

「……分かりました。兄さまは追いません。あの家に戻って、あの二人の子供として生きましよう。普通の人間として生きて、誰かと結婚もします。でも……」

母は私の言葉を聞いて安心したようだった。私は涙の伝う頬に力を入れて笑う。笑うことはこんなに辛いものなのか。笑っていないければ、私は駄目になってしまいそうだった。

笑っていないければ、私は母に嘘をつくことが出来なかった。

「私の母は、カタリナ・リドル・トゥアス・ブレイス。……貴女ただ1人だけです」

「……………」

ふっと、母の口から息が吐き出された。それが苦笑だったのか、それとも本当の微笑みだったのか、私には分からなかった。

母の首筋に触れて、私はやっと声をあげた。何と言ったのかは覚えていない。もしかしたら声にもならなかったかもしれないし、ざわめく木々が私のすべてをかき消してしまったのかもしれない。ただそうやって泣くしか、私には出来なかった。

青空が私たちを嘲笑うかのように輝いている。母の体を抱いて、私はいつまでもいつまでも泣いていた。乾燥しカサカサになった手は力を失い、シミとそばかすが目立っていた顔は死人の色に染まった。彼女がトウアス帝国一の美女と謳われたカタリナ王女だと、誰が気付くだろうか。

彼女は500年という途方もない月日を生き、たった十数年だけを愛する子供達と過ごした。それが幸せと呼べるのかどうか、私には分からない。ただ、言えることはたった一つ。彼女は自分の愛した子供によって殺され、自分の愛した子供に最後の嘘をつかれた。私は泣くだけ泣いた後、母の体からホルスターを外し、自分の腰につけた。そしてあの家から持ってきた『ヒュペリオン』を収める。そして母の亡骸の前に立った。

黒塗りのヒュペリオンが青空の光を鈍く反射している。

「……………」

私は泣き腫らした瞳で、兄……ジェイロードが去って行った方向に視線を向けた。もうそこに兄の背中は無いらぬ。私の前を歩く、その姿はもう無い。

私は道の向こうを睨みつける。言すべき言葉はたった一つ。

「……………」母様。私の嘘を、お許し下さい」

嘆くよつに、風が吹いた。

第5章 4

私が歩いて来たその足跡は、それがどんな些細なことであれ消えることはない。悲しみや苦しみばかりの跡が私の後ろに続いているのだ。

それでも私は嘆かない。ひたすらに前へ進む。幸せという道を選けて歩む。神などというものが本当にいるのなら、私の生き様を笑えばいい。

憎しみと悲しみの花が咲き誇る真ん中で、私は空を見上げよう。

- この血に誓って -

俺たちは無言だった。サーシャは荒野に視線を向けたまま、それ以上何も言おうとしない。

言葉はまるで意味をなさなかった。サーシャの覚悟の前には、おそらく同情も励ましも灰のように変わってしまう。

俺はエレンシアでサーシャの言った言葉を思い出した。

『私にはやらなくてはいけないことがあります。そのためなら、私はどんな残酷なことだって出来る』

サーシャにとって一番残酷だったのは、嘘をついたことだろう。

何よりも嘘を嫌っていた母親に死の間際に嘘をついた。人として、女としての幸せを取ると、笑みまで浮かべたのだ。それはサーシャの母親にとっても、そして嘘をついたサーシャにとっても残酷な選択だったのかもしれない。

サーシャは俺たちの空気にため息を吐くと、少し苛立ったようにため息をついた。

「……ジエイロードを殺すことが私の目的です。予言書を探していれば、あの男は必ず私の前に現れる」

クリフはじつと下を向いている。サーシャはそれだけ言うと、もう一度荒野に視線を向けた。

「もう十分でしょう……お二人は元の仕事に戻っていただいて構いません」

それでは、とサーシャは歩き始めた。クリフが咄嗟に顔を上げる。俺が口を開かなければ、きっとクリフがサーシャを引き止めていただろう。

「……ふざけんな」

俺の言葉に、サーシャは足を止めた。そしてこれ以上ないほど不機嫌な顔で振り向く。その顔には、聞きたいことは全て話しただろう、と書かれていた。

サーシャは低い声で言う。

「……なんですか？」

クリフがハラハラしたように俺とサーシャを見比べている。俺は

ズカズカとサーシャの前に歩み寄り、自分より小さいこの女を見下ろした。サーシャは眉間に皺を寄せた顔で俺を睨みつける。見下ろしているのはこちらなのに、この女の態度の大きさはなんだ。こいつと向き合っていると、時々屈強な男と体面しているときよりも圧力を感じる。

俺は腹が立っていた。でもそれはエレンシアの宿でサーシャを怒鳴りつけた時とは違う。俺ははつきりと、この苛立ちの意味を知っている。どうしようもなくむしゃくしゃするこの感じの理由を。

俺は腹の底から叫んだ。

「……ああ、くそっ！！テメエに頭下げるのなんざ、これつきりだからな！！」

俺はそう言っただけで片膝を引いた。膝を地面につけて、立てた左膝に肘を乗せる。昔から……おそらく、帝国が出来るよりずっと昔から伝わって来た、目上の者に対する忠誠の形だ。跪いて、頭を下げる。サーシャは戸惑うというより、顔を顰めてみせた。ある意味予想出来る反応だった。

「何のつもりですか？」

「……気が変わった。アイルークの奴にあれだけコケにされて引き下がるほど、俺は大人じゃねえ」

俺はガキの頃からイルークには敵わなかった。アイツの才能を羨んでばかりで、身動きがとれなくなるのをただ嘆いているしかなかった。このままサーシャと別れて平凡な生活に戻るのも悪くはない。こうやって馬鹿みたいに関わって、もしかしたら更に深みにはまるのかもしれない。

でも俺は、この女についていくことを後悔しないだろう。どんな結末がこの先にあったとしても。口が裂けても言わないが、この女

の覚悟に惚れた。俺にとつての理由なんて、それで十分だ。

「ぼ、僕も……ついていかせてください！」

俺の様子に呆然としていたクリフが、慌てたように隣に並んで跪いた。サーシャは更に顔を顰めていることだろう。クリフはサーシャを見上げる。その顔はいつものように泣きそうだったが、その目は違っていた。

クリフは言う。

「……僕も、知りたいことがあるんですっ！サーシャさん達についていけば、それが分かるかもしれない……だから、だからっ！！！」

声は涙声だった。それでもクリフの目は泣いていなかった。

「僕は弱くて臆病で、サーシャさん達みたいに強くはありません。……でも、僕にも譲れないものがあるんですっ！」

サーシャは俺たちをじつと見下ろしていた。その表情は俺たちには見えない。それでも、サーシャがため息をついたのは分かった。呆れ果てたような、そんな空気が伝わってくる。

サーシャは視線を荒野に向けた。晴れ渡った空が地平線の彼方まで続いている。空から照らし出す太陽の強い日差し。そこに立つサーシャは、果てしない荒野を見つめて呟いた。

「……仕方のない人たちですね……」

パツと、弾かれたようにクリフが顔をあげた。サーシャは砂嵐の向こうを見つめ、背筋を伸ばす。腰に下げたホルスターが太陽の光を反射した。

俺とクリフは立ち上がりサーシャの背中を見つめる。サーシャはもう一度ため息をつくど、はつきりところ言った。

「共に行きましょう。……『過去の予言書』を手にする、その時まで」

歩き出したサーシャの後ろ姿をクリフが追う。俺は二人から少し離れて歩き始めた。

強い風が吹荒び、俺たちの旅の本当の始まりを告げている。

Stage of extra

Stage of extra

(第2部予告)

「この国に生きる者はみな、誇りを持っている。太陽神バルトロの子孫として、都に住まう者も、砂漠に生きる者も」

乾いた砂漠の中に存在する、大国ネオ・オリエント。遊牧民との調和によつて長い歴史を刻んできた国に、太陽の色をした髪の少年がいた。太陽神バルトロの子孫と呼ばれる国王の末子、フェオール・マルス。

小さな王子はその幼い瞳で、この国の行く末を憂えていた。

「お前は……あの男の術中に嵌つて、この国をアクロスのものたされてしまつても良いのか!？」

王子は、この国を愛していた。誰よりも強く、誰よりも確かに。だからこそ、名前すら知らない旅の女は、彼に古の武器を手渡した。それは一挺のリボルバー高みヒュベリオンを行く者……。

「貴方が高みを行くというのなら、このことは不問に致しましょう」

全ては国に殉じる覚悟と共に。小さな王子の誇りは、やがて国を大きく動かしていく。

N
e
x
t
S
t
o
r
y

[G
i
r
l
s
p
e
n
s
i
v
e
n
e
s
s
]

だから、静かにお眠り下さい。

第1章 1

頭の上に浮かぶ月。私はそれを眺めるのが凄く好き。だって毎日形が変わって、最後はまた同じ丸に戻る。それを見てると安心するんだ。だって、これがずっと続くんだって思えるから。

みんな、世の中おかしくなってると言う。グロックワースは突然消えちゃうし、海に向こうの国が密かに戦争の準備をしてるなんて噂もあるし。たしかに暗い話ばかりで、世の中おかしいよ。

天気さえ良ければ太陽も月も昇るのに。太陽と月さえあれば、明日はかならず来るはずなのに。

- 少女の物思い -

砂風が吹きつけ、小さな竜巻が砂利を巻き上げる。乾いた風が吹くのはここが砂漠の証拠だ。それでもこの街はまだいい。オアシスを中心にして円形に作られた街並みは竜巻や砂嵐を弱め、街の中心部まで届かない。おそらく小さな集落なら、いちいちこのクソ暑いなかで砂だらけになりながら歩かなければいけないだろう。

「……あーっ、クソ暑いっ！」

俺はジリジリと照り付ける太陽を睨みつける。ここはアルジェン

ナ沙漠の北西にある、レスティナという街。この大陸でもっとも昼間の時間が長いとかいう街だ。もっともそれは気候のせいだけじゃなく、この辺りに陽の光をさえぎるような山がないという立地条件のため。エレンシアとの国境にあたる山脈は南に位置し、東西には果てしない沙漠が広がっている。東に行けば海に隣接したネオ・オリエントという国があり、北と西には果てしない荒野が広がる。

俺は雲ひとつない天気を恨みながらため息をつく。それにしてもこの暑さ。気候が穏やかな場所で育ってきた俺には結構堪える。通りに浮かぶ陽炎を見つめながら俺は呟く。

「水分摂らねえとクリフの二の舞だな……」

俺達がこの街に立ち寄ったのは、あのジジイ……ファールレンが創った『過去の預言書』に関する情報を集める為だった。情報を集めた後は別な街に移る予定があつたのだが、よりもよってこの暑さでクリフが倒れた。サーシャ曰く熱中症のようなものらしい。

俺はもちろん予定を長引かせやがったクリフを一発ぶん殴ってやるうとしたが、サーシャに止められた。

『更に滞在が長引くと迷惑です』

やけに納得がいく発言だったが、俺も合わせて迷惑呼ばわりされた気がするのはいかぬかい？

「あちい……」

とりあえず俺は急に出来た暇を持て余して、このレスティナを歩き回ることにした。金は全部サーシャが管理しているせいで遊ぶことも出来ないし女も買えない。浪費癖があるのは否定しないが、財布の紐をあいっぴ握られてると思うと必要なものを買うのにも気を

使う。まあ、俺が一文無しに近いのは全部あのガキのせいだ……。そんなことを思いながら通りを歩いていたら、ふっと後ろから軽い衝撃が伝わってきた。

「あつ、ごめんなさ……」

嫌な予感に、俺は即座に振り向いた。ただでさえ軽いポケットが更に軽くなったような、そんな感触。ちよつと待て、このパターン。しかもこの、聞き覚えのある生意気な女の声。

俺が相手の姿を捉えるより先に、声は言った。

「……あ」

どうやら俺よりコイツの方が先に気付いたようだった。そりゃあ、同じ財布を2度もスればいくらなんだって同一人物だと分かるだろう。

背後には俺の財布を開けた状態で立っている金髪のガキの姿があった。スリの子供らしいボロボロの服を着て、長い金髪をひとつに纏めている。ガキは俺の財布を握り締めたまま、もう片方の手で指を差した。

「な、なんでここにいるのーっ!？」

「あつ、テメツ!指差すな、ガキ!」

「なっ、ガキ!？」

スリのガキ……もといメイは俺の発言が気に入らないのか、頬を膨らませてこちらを睨みつけてくる。相変わらず生意気なガキだ。だいたいなんでコイツが此処にいるんだよ。

「テメーなんざガキで十分だ！」
「メイ子供じゃないもん！」

メイは初めて会ったときと同じ灰色のワンピースを着ていた。唯一違うのは、背負った大きなリュックサックだ。動くたびにガシャガシャと何かがぶつかる音がしている。

メイは『年寄り』だの『ケチ』だの『貧乏』だの、好きなだけ暴言を吐くと、重そうなりユックを背負い直した。重い物が入っているのか、背負い直すたびに体が揺れている。

「よいしょつ。……で、なんで『魔術師サマ』がここにいるの？」

皮肉った調子で話すメイに俺は咽喉元まで出てきた怒鳴り声を抑えた。ここで怒ってもどうせさつきと同じ状態になるだけだ。

俺はとりあえずメイから財布を奪い返して言う。

「……情報収集中」

「えっ、もしかしてまだサーシャさんと一緒にいるの？意外……」

なんでコイツは喋り方から性格までいちいちムカつく奴なんだ。俺はクリフを殴る時の要領で作った拳を抑える。だいたいあのセルマからどうしてこんな性格のガキが生まれるんだ。

メイは手に持った小銭を一つ一つ数えながら言う。

「相性合わないと思ったんだけどなあ……」

「うるせえ。……って、お前いつのまに小銭スってんだよ！」

しかもメイの手の中にあるのは俺の数少ない全財産だ。メイはそれを丁寧に数え上げると、手際よくその半分を俺に差し出した。お前、まさかこの間の要領で半分貰ってく気が。

考えていることが顔に出たのか、メイは俺の目の前で人差し指を振ってみせた。

「い・ち・お・う『魔術師サマ』はサーシャさんのお仲間だから、返してあげる。……その代わり、サーシャさんのいる宿に連れてって？」

宿は街の端にある。外れかかった看板に宿の名前が書かれている寂れた宿だ。宿の名前は殆ど消えかかっている、誰もこの宿の名前なんか知らない。この街には宿はここしかないため、『宿』というのが此処の名前のようなもんだった。

「……それで、さっさと宿に戻って来たということですか」

サーシャは椅子に座ったままメイに視線を向けた。手には砂漠で穫れるという赤い皮をした果物と、小型のナイフが握られている。クリフの看病なのか自分が食いたいからなのかは知らないが、俺はつい数時間前、この得体の知らない果物を買に行かされた。もちろん文句は言ったが、口でこの女に敵う奴はいない。

メイは荷物をサーシャの隣の椅子に置いて頷いた。

「うん！『クロノス』の弾数も少なくなってきたかなって思って」

ガシャン、と鉄と鉄がぶつかり合う音が響く。奥のベッドで上体を起こしていたクリフがその音に目を丸くした。随分重そうに見えるたんだろ、クリフは言う。

「そ、その中身って、もしかして……」

メイはニツと笑って、荷物を開けた。そして中身を一つ一つテーブルに並べ始める。

「うん、ナイフとか銃弾だよ。あと暗器とか、投擲とか……変わりは吹き矢かな。クリフお兄ちゃん、いる？」

テーブルに大きさや形の違うナイフや銃弾が置かれていく。爆薬から弓矢、ナックルダスターの類いまで、一体どこにどう詰め込めばそんなに入るんだと言いたくなるほど、様々な武器が並べられた。テーブルに並べきれなくなって俺のベッドの上にまで並べようとするメイに、クリフは慌てて首を横に振った。

「ぼ、僕はレイテルパラッシュがあるからいいよ。それよりどうしてこんなところに……？」

メイは商品を並べる手を止めると、俺のベッドに腰を下ろす。そして手元にあった散弾銃の弾を弄びながら、さも当然のことのようにこう言った。

「お仕事だよ。出張で販売」

「出張で販売い？」

俺の声に、メイは唇を尖らせた。

「そう。持ち運びしやすい武器は歩き回って売るのが。結構儲かるんだよ。ここら辺は武器を造れるような国がないから」

空中に放り投げた3つの銃弾を順にキャッチして、メイはサーシヤに視線を向けた。サーシヤはあの気味の悪い色をした果物を丁寧に切り分けると、その一切れを俺に差し出す。

「この辺りにはネオ・オリ以外に大きな国が無いですからね。……フレイさん、どうぞ」

差し出された果肉は、あの真つ赤な外見に反して白と黒の斑点になっていた。サーシヤはキツイ香りに顔を顰めながら、俺に皿を押しつける。こいつ、俺に毒味役させる気が。

俺とサーシヤの無言の攻防に苦笑しながら、クリフはメイに視線を向ける。

「……でも、グロツクワース領からここまでどうやって?」

「ふふふ……。実はねえ、メイとお母さんしか知らない通り道が国境付近にはいっぱいあるんだよ!旅人も知らない道ばかりだから、山賊もいないし……メイも1人で通れるの」

「1人って……1人で!?!」

驚愕の表情を浮かべるクリフにメイは頷いてピースをしてみせた。もしかしたら、俺たちからはぐれただけでメソメソするクリフより、この歳でグロツクワースから山1つ越えて商売をしに来るメイの方が、よっぽど肝が据わっているかもしれない。

メイは苦笑しながら言う。

「でも一応護身用の武器は持ってるよ。お母さんに時々稽古しても

らってるから、とりあえず逃げるくらいは出来るし。お母さん教えるの上手だから」

「えっ、じゃ、じゃあ……セルマさんって、やっぱり……強い？」

うん、とはつきり頷くメイ。そりゃそうだ、体型やあの筋肉の付き方からして一般人のそれじゃない。それにグロックワースの暗躍部隊つつたら、十数年前まで裏の世界じゃ有名だった。何がどうなっただ武器商人に転じたのかは知らないが、あの女ならクリフよりずっと役に立つだろう。

メイはベッドから下りると、クリフのベッドに腰掛ける。

「仕方ないよ、人には向き不向きがあるってお母さんが言ってた」

「……おい、それフォローになってないぞ」

俺はキツイ臭いを放つ果物をつまみながら呟いた。メイは聞いているのかいないのか、クリフのベッドに立てかけてあった剣に触れる。

「大丈夫、メイは剣を見ればね、その人の癖とか分かるんだよ。お兄ちゃんだってそんなに不向きってわけじゃ……」

そう言っただけメイは慣れた手つきでレイテルパラッシュを鞘から引き抜いた。金属が擦れる澄んだ音が響いて、刃先が窓から差し込む光に反射する。

クリフの持つ剣は他の剣士が使う剣より刃が幅広くなっている。柄は拳を守るように造られていて、実は重量も細身の剣に比べると重い。

「……えっ？」

メイは剣を引き抜くと、一瞬驚いたように手を止めた。そして今度はまるで質屋の人間のようにレイテルパラッシュをあちこちから眺め始める。

驚愕するメイにクリフがオドオドし始めた。

「えっ、えっ？……な、なにか変な癖とかあった？」

メイは何も言わずに真剣な表情で剣の柄の部分を見つめている。俺はあの得体の知れない果物を口に放り込むと、拳動不審になっているクリフに視線を向けた。

「使っていないのに癖もなにもあるか」

「……それは同感ですね」

俺の反応に異常がないことを確認して、サーシャは新しい果物をナイフで切り始めた。サーシャの一言にシヨックを受けたのか、クリフは魂が抜けそうな表情でベッドに突っ伏す。半泣きなのはもう言わなくても分かるだろう。

剣の柄や鞘を存分に眺め回したメイは、何か信じがたいものを見たような呆然とした表情で鞘にレイテルパラッシュを仕舞った。そして次の瞬間、がしつとクリフの腕を掴む。

「お兄ちゃん！」

「うっつ……な、何？やっぱりこの職業向いてない……？」

もはや完全に気分が沈み込んでしまったクリフに対して、メイの目は爛々としていた。クリフの左手をギュッと両手で握りしめると、クリフの顔の近くで問いかける。

「このレイテルパラッシュって、ほんっとーに、お兄ちゃんの!？」

旅の途中でお兄ちゃんの友達が死んじゃって、その人の形見に持ってる剣だとか、お兄ちゃんの家先祖代々伝わって来た家宝だとか言わないよねっ!?!?」

おい、お前、それは一体何処の物語だ。

メイは俺のツッコミを完全に無視して、サーシャに視線を向ける。サーシャはメイの視線に振り向かず、もくもくとナイフを動かしていた。皿の上にあの果物が並べられていく。

クリフは目を輝かせるメイに迫られて、オドオドしながら首を上下に振った。

「う、うん……違うけど……」

「本当につ!?!?」

「ほ、本当に……」

クリフの言葉を聞いてメイはため息をついた。呆れるというより、満足したような表情を浮かべている。一体何が何なのか俺にはさっぱり分からない。あげくの果てにメイは、

「そうゆうことかあ……」

と、何度も納得したように頷き始めた。どうゆうことなのか分からないクリフは挙動不審に首をかしげている。

俺がメイの商売道具を避けて椅子に座ると、サーシャが呆れたようにため息をついていた。俺は頬杖をついて小声で問いかける。

「……どうゆうことだ?」

サーシャは俺を見て苦笑する。

「……『そうゆうこと』じゃないですか？」

あまり人のことを使えないと言わない方がいいですよ、とサーシヤは意味不明な言葉を呟いて席を立った。メイとクリフに皿を差し出す姿を眺めながら、俺はもう一度首を傾げるしかなかった。

第1章 2

夜の街は静まりかえって、吹荒ぶ砂嵐の音だけが別世界の出来事のように何処か遠くで木霊する。手の中で揺らめく炎が煙草に燃え移り、細い煙をあげるのを俺は見えていた。

吸い込んで吐き出す煙のその向こう。砂漠を照らす月だけが無言で俺を見下ろしている。

- 己の味方であること -

その日の夜、メイはサーシャの勧めでこの安宿に泊まることになった。もともと臨時収入を期待していたメイは一も二もなくその勧めに応じたが、おそらくサーシャは善意だけで宿泊代を払ったわけじゃない。大方、ここらを歩き回っていたメイから情報を得ようとしているんだろう。

俺は煙草に火をつけ、狭い路地から見える欠けた月を見上げた。薄い煙が闇の中に浮かんで消える。煙に包まれた月は、煙たそうに雲の間に顔を隠した。

「……」

俺は煙草を加えて、後ろを振り返る。俺たちの使っている部屋に

灯りはなく、どうやらサーシャもクリフも寝ているようだった。

「……んで、なんでお前、ここにいるんだよ」

隣に視線を向けると、むすっとした顔をしているメイの姿があった。目が冴えたのか何なのか知らないが、さつきから俺の唯一の楽しみを邪魔している。

俺は煙草の煙を吐き出しながら言った。

「ガキは寝る時間だろ」

「目がさえちゃったんだもん」

「だからって、なんで俺のところに来んだよ」

「……」

メイは黙り込んで、両膝を抱えた。俺はため息をついて煙草の灰を地面に落とす。火のついた一欠片が地面に落ちて、やがて静かに消えていった。

風が路地を吹き抜けていく。メイは持ってきた上着を頭まで被りながら、月しか出ていない空を見上げた。

「……ねえ、もしかしてだけど……」

メイはちら、と俺に視線を向ける。

「……エレンシアでジェイロードさんに会ったりした……？」

じつとこちらを見つめるメイに、俺は煙を吐き出した。このガキからあの男の名前が出てくるってことは、つまりコイツはある程度サーシャの事情を知っているんだろう。

俺は向かい側の店に視線を向けながら言う。

「……なんでんなことお前に言わなきゃいけないんだよ」
「それは……えっと……」

メイは上着の前を押さええて俯く。何かを考えるように視線を彷徨わせながら、答えを探しているようだった。

俺は煙草を地面に落とすと、靴裏で火を消した。そして懐から次の煙草を取り出す。火は一々持ち歩くのが面倒だから、適当に魔法でつける。

メイは足を投げ出してため息をついた。

「……こうゆうのメイは苦手なんだけど、お母さんがそうしろって言うから聞いているの」

時折強い風が吹き荒れ、路地を駆け抜けていく。まるで生き物のように声を上げる風の音。飛んでくる砂に目を瞑り、メイはそのまま呟いた。

「……メイ達は商人でもあるし、情報屋でもあるの。情報屋は常に中立なんだって、お母さんはよく言ってる」

俺はふとセルマの顔を思い出して、その言葉の意味を考えた。いかにもあの女の言いそうなことだ。だが、メイが言いたいのはおそらく薄っぺらな意味じゃない。

メイやセルマは、金に見合った分の情報をサーシャに与える。それは『過去の予言書』の情報であり、ジエイロードに関する情報だ。

「……！」

不意にメイの言葉を辿っていった俺は、その意味するところを悟

ってしまった。

「んじゃあ何か、お前は俺たちの情報をあのジェイロードとかいう男に売る場合もあるってのか？」

「……うん」

メイは俺に視線を向けて、しっかりとそう頷いた。そしてこう付け加える。

「お母さんがよくこう言うの。『ジェイロードもサーシャも、他の客とは違うんだ』って。サーシャお姉ちゃんのお母さんと私のお母さんは知り合いだったからそう言うんだと思う」

サーシャの母。トウアス帝国のカタリナ王女と言えば、おそらく知っている人間は多いだろうと思う。帝国が世界の『知』と共に一夜にして消え失せたという歴史的な事件は、まさにカタリナが生きていた頃に起きたものだ。

カタリナは不老不死によってつい最近まで密かに生き延びていた。セルマと出会ったのはおそらくその頃だろう。

メイはセルマの言葉だと、前置きをして言う。おそらくまだメイ自身、その考え方に納得がいかないのだろう。

「でも……でも、どんな人が相手でもそれは商売なんだって割り切らなきゃいけないだって。メイはサーシャお姉ちゃんの味方をしたくなるけど、それはいけないだって」

「……」

俺はじつと煙草の煙を見つめながらメイの言葉を聞いていた。メイはいつキれるのかとチラチラ俺の顔を見ているようだったが、俺の中に苛立ちや不快感はなかった。

俺は大きいため息をつく。煙草から零れた灰が風に巻き上げられて消えていった。

「……情報屋なんてそんなもんだろ」

自分でも不思議なくらい、俺は冷静にそう答えていた。おそらくそれは俺が口を出すべき問題じゃない。サーシャはそれを理解したうえでセルマやメイから情報を買っている。

メイは唇を尖らせて、拍子抜けしたように地面に視線を落とした。

「……そんなもんなのかなあ……？」

「んだよ、否定して欲しかったのか？」

俺がそう言うと、メイは頬を膨らませた。魔術師サマって本当に性格悪いよね、と可愛げもなくそう呟く。馬鹿言っな、サーシャよりはマシな性格をしてるつもりだ。

俺は二本目の煙草を吸い終わると、さっさと立ち上がった。慌てたようにメイが俺の後ろをついてくる。俺は宿の扉を開けながら言った。

「……結局、そのジエイロードに情報売ったことはあんのか？」

メイは首を横に振る。

「ううん。これはサーシャさんにも言ったんだけど……1年前くらい前お母さんのところに来て、それっきり。あ、あときは1人だけだったよ」

扉の門を閉め、二階への階段を上がる。木で出来た階段が静寂の中でギシギシと不快な音を立てた。俺は階段を踏みしめながら、考

えを巡らせる。

魔術師は大体15か16で仕える相手や場所が決まる。その大半は王族や貴族で、才能の有無によって下働きから始める奴もいれば、最初からある程度の地位を貰う奴もいる。アイルークは後者の典型的なパターンだった。俺はその決まりが嫌で家を出たが、俺の記憶が確かなら、ファーレン……あのジジイが一度仕えたことのある貴族の家だったはず。

(一年前か……里に帰ってねえから、あいつの情報は全く聞こえてこねえしな……)

頭をかく俺の後ろでメイは大きな欠伸をした。自分の部屋のドアノブを握ると、目尻に溜まった涙を擦りながら言う。

「ふぁ……やつと眠くなってきた……それじゃあ、おやす、みつ！？」

丁度良く視界に入ったメイの襟首を俺はガシツと掴んだ。よく考えれば、目の前に情報屋がいるじゃねえか。まだまだ新米だが、使いようによっては使えるかもしれない。

「ちよつ、何……？」

「お前に別口の仕事をやる」

俺はメイに人差し指を突きつけた。メイは訳が分からず、顔を顰めたまま俺を見上げる。

「……変な仕事じゃないよね。サーシャさんの覗きとかだったらヤだよ」

「誰がそんな依頼するかつ！ぶつ殺されんだろ。……そうじゃなく

てだな、ジェイロードと一緒にいるイルーク・ハルトつて男に関する情報だ。里を出た後からのことを知りたい」

俺の言葉にメイは目をしばたたかせた。

「いいけど……別口でいいの？お金、魔術師サマ持ちになるよ」
「金は作っとく。……じゃあな」

メイが疑わしそうな目で見てくるのを無視して、俺は自分の部屋の扉を開けた。

エレンシアのコロッセオで会った時のイルークは、随分とジェイロードに傾斜しているように見えた。もともとあいつは他人に付き従うような性格じゃない。それは俺がよく知っている。

魔術師として十分な地位と実力を持ったあいつにどんな心変わりがあったのか。俺にはそれが気になって仕方がなかった。

翌日の朝、俺たちはレスティナを立つことになった。とりあえず病み上がりのクリフの体調に気を配りつつ砂漠を歩かなければいけない。面倒くせえと呟くと、俺の後ろについて来たクリフが縮こまった。

荷物をまとめて宿を出ると、先に外に出ていたサーシャとメイが何かを話していた。メイもどうやら行かなければいけない場所があ

るらしく、あの武器の詰まった鞆を背負って、サーシャから借りた地図を見つめている。

「んだよ、また商売か？」

俺がそう問いかけると、メイは地図に視線を落としたまま頷いた。

「そうだよ。次はネオ・オリ」

ネオ・オリ。それはこの砂漠の殆どを統治する長い歴史を持った『太陽国ネオ・オリエント』だ。かつて500年前世界を統治したトウアス帝国下にあり、その頃から王族の血筋が続いていると言われている。もつとも、ネオ・オリを支えているのは王家の血筋という象徴だけではない。

俺の後ろからクリフが顔を出して地図を覗き込む。

「ネオ・オリなら、キャラバン商隊か遊牧民の人たちについて行った方がいいんじゃないかな」

「うん。でもね、知り合いの商隊が今どの辺りにいるか分からなくて……」

ちよつと聞いてくる、と近くの露天商に声をかけにいぐメイ。俺は後ろから顔を出しているクリフに訝しげな視線を向けた。

「……なんでんなこと知ってたんだよ」

「えっ？え、あ……ね、ネオ・オリって『戦士の都』って言われているくらい旅人の間では有名な場所だし……少なくとも剣士では知らない人はいないってくらい有名な場所だから……」

しどろもどろで応えるクリフに、サーシャは荷物を地面に置いて

ため息をついた。

ネオ・オリが戦士の都と呼ばれるのは、国が遊牧民族と強い信頼関係を保っているからだ。しかも遊牧民族には武闘派が多い。血の気が多いのも時々いるが、自分の民族に誇りを持っているような硬派な奴が殆どだ。

「そうですね。ジャン・ユサク、テレジア・ケベリは共にネオ・オリの三大戦士に名を連ねています。……護衛業の酒場では常にその話題が上りますから」

サーシャはそう言って、メイに視線を向ける。道の反対側にいる露天商の爺は、真っ黒に焼けた肌に皺を刻ませ、真っ白な髭を撫でながらメイの問いかけに応えている。

「お爺さん、それ本当？」

メイは商品の向かい側から爺に問いかける。耳が遠いのか、頭の回転が遅いのか、爺は1テンポ以上遅れて頷いた。

「そうじゃよ。その商隊ならもうそろそろ……おっ、ほれ来たようじゃ」

パツとメイは顔を輝かせて、枯れ木のような爺の指差す方向に視線を向ける。すると街の入り口の向こう、砂嵐の中に人影がぼつりぼつりと見え始める。荷物を引く馬や駱駝、そして人の姿。

丁度良いタイミングだと、喜びかけたメイの足が一瞬止まった。クリフも俺も、その異様な雰囲気にも首を傾げる。

「あれ……」

指を差して振り返るクリフ。サーシャは無言のまま、街の入り口

に入ってきた商隊の人間に歩み寄っていった。

街の入り口では、不穏な空気を察した街の人間達が野次馬のように集まってきていた。サーシャは人ごみをかき分け、商隊のリーダーらしき中年の男の前に入る。

「……すみません」

問いかけに、男はあからさまに顔を顰めた。そして一度商隊のメンバーに声をかける。

「おい！歩ける奴は医者のもとに怪我人を運べ！あと馬と駱駝の様子も見てやってくれ。……で、なんだ？嬢ちゃん」

サーシャは男の後ろを運ばれていく怪我人の様子を見つめていた。商隊の3分の1は切り傷や火傷を負っている。馬や駱駝も、足の調子を気にしているように見えた。

サーシャは顔を上げる。

「……随分と怪我人が多いようですが、何かあったんですか？」
「ハッ！あった、なんてもんじゃねーよ。聞いてくれ、嬢ちゃん」

リーダーの男はサーシャの言葉に、待ってましたと言わんばかりに肩を竦めて喋り出した。野次馬達にも聞こえるように、声をデカくして。

「俺たちがいつもの通り、ネオ・オリで休憩してこの街に戻って来ようとしたら、珍しく入り口に監視がいねえ。旅標ウツヒコの確認もせず、不用心だなと門を潜ったら突然あちこちから火炎瓶やら弓矢やら、てんやわんやの大騒ぎ！」

ぼん、と肩に手を置かれ、野次馬の輪の真ん中に巻き込まれてしまったサーシャはあからさまに嫌そうな顔をして男を見上げた。男は気付かず話を続ける。

「あれが一時間は続いたか……ともかく、投げるもんがなくなつて腐った卵が飛び交い始めた頃、やっと国のお偉いさん方の登場だ。誰かが『国王様直属の上長官殿だっ』と叫んだ瞬間、今までの混乱が嘘のようにパツタリと治まりやがる。巻き込まれた俺たちや、ワケも分らず呆然とするしかなかったぜ」

おそらく商品と共に情報も運ぶコイツらは、こうゆう語りが日常になっているのだろう。回りくどい説明に業を煮やしたサーシャは、肩に置かれた手を払って言った。

「……それで、その暴動の原因とは？」

つれない反応をされたことで野次馬の数人から笑い声が聞こえて来た。男は肩を竦ませてサーシャを見下ろす。

「今、ネオ・オリは国王の後を継いで誰が政権を執るか、揉めに揉めてんのさ。1人はバートン国王の第1子、頭はちと弱いが武闘派一族と親交のある王子ボルドー・マルス。もう1人は、バートン国王が急病で床に臥せている間、宰相を勤めたディーター・エデュロイ。こいつは遊牧民とも武闘派のやつらとも折り合いがすこぶる悪い。……次の国王はディーターだ、ボルドーだって国は真つ二つ。俺たちや、暴動のとはつちりだな」

俺はその声を聞きながらチラ、とメイに視線を向ける。もちろんその顔は血の気が引けてしまっている。露天商の爺は話が聞こえな

いらしく、しきりに首を傾げていた。

サーシャはたいして表情を変えず、男に軽く頭を下げる。

「……そうですか。ありがとうございます」

それでは、と踵を返すと、男がサーシャの背中に向かって声を投げる。

「おい嬢ちゃん、まさかネオ・オリに行くわけじゃねえだろうな？
止めとけよ、女はいえおそらく容赦はないと思っぜ？」

男の言葉に、今度はクリフがメイに視線を向ける。メイの表情は真っ青になってしまっていた。サーシャは野次馬の輪から抜け出してくると、メイに歩み寄る。

「……だ、そうですが。どうしますか？」

殆ど表情を変えないサーシャを見上げ、メイは今にも泣きそうな表情で顔を上げた。

「で、でも……ネオ・オリには1人、注文をくれたお客さんがいて……」

メイはサーシャの服の裾を掴んで、じっとサーシャを見上げる。
おそらくどうしても切り捨てることの出来ない注文なんだろう。

サーシャは軽くため息をついた。

「そうですか……仕方ありませんね」

「なっ……仕方ない、ってまさかガキの為にネオ・オリに行くのか
!??」

「えっ、ええっ!?!」

俺の声にクリフがいつものように驚きの声をあげた。テメーはいちいち五月蠅いんだよ。

サーシャは俺とクリフに視線を向け、そしてもう一度メイを見下ろす。その頭に手を置き、珍しくメイの頭を撫でてやりながら言った。

「もしかしたら『過去の予言書』の情報があるかもしれません。…それに、メイはセルマの娘ですから」

「お姉ちゃんっ!?!」

メイが目をキラキラさせてサーシャに飛びつく。俺は深いため息をつき、クリフは怪我を負った商隊の奴らを見て震え上がった。憧れの『戦士の都』とはいっても、暴動の起きている街に入るのは怖いらしい。いや、それが普通の考え方だと言っていていいだろう。

サーシャはメイを宥めながら、珍しく慈愛の笑みを浮かべて白い手を差し伸べた。

「……お礼はクロノスとヒュペリオンの銃弾で頂きましょう」

メイも含め、俺たちが言葉を失ったのは言わずもなだった。

第1章 3

僕の思考は一瞬にして凍りついた。どうしてこう、僕ってタイミングが悪いんだろう。後ろではフレイさんが呆れている………というより呆然としているし、メイはなんだか嬉しそうにしてるし、サーシャさんは苦笑してる。

きっとこれからフレイさんにガミガミ言われるんだろうなあ、と何処か他人事のように思いながら、僕は目の前にいる『彼』に頭を下げた。

- 懐かしい人との再会 -

「やっと着いたあ!」

ネオ・オリの門を潜ると、メイは嬉しそうに飛び跳ねた。レステイナを出てからここまで、ずっと砂漠ばかりだったから退屈していたのかもしれない。メイは僕の目の前をウサギみたいに飛び跳ねて、そしてすぐ後ろを歩いていたらフレイさんに捕まった。

「バカ、飛び跳ねると監視に見つかるだろっ」

「あ、そうだった」

思い出したようにそう呟くと、メイは捕らえられたウサギみたいに静かになった。

ネオ・オリの門は通行料として旅人からお金を取る仕組みになっている。商人なら、通常の旅人の2倍。本当はメイはその料金を支払わなければいけないんだけど、彼女はまだ子供だし、僕らの連れっことで旅人と同じ料金を支払うことにしたんだ。門番には内緒で。

メイはなるべく荷物を動かさないようにしながら、ネオ・オリの都を見つめる。

「久しぶりに来たけど……確かに、雰囲気がちよっと違うね」

僕は石を敷き詰めた歩道を真つすぐに見つめた。確かに、噂で聞いていた『戦士の都』は、イメージしていたものと違っていた。

褐色の壁で出来た家々が立ち並び、道は曲がりくねりながらも中央の城へと続いている。建物と建物の間には時折小さな路地があって、フレイさんたちと逸れたらすぐに迷子になってしまいそうだった。

僕たちはメイに案内されながら、客との待ち合わせ場所へと向かう。ふと上を見ると、茶色の壁に取り付けられた窓には時折板が貼ってあったり、ガラスが割れていたりした。よく見ると、建物の一つ一つにも細かい傷や焦げた後が見える。

サーシャさんは辺りを見回しながら言った。

「……思ったより暴動の痕がありますね」

道の端には、破り捨てられた紙や割れた瓶が落ちていた。もしかしたら昨日、今日に暴動があったのかもしれない。

乾いた道の端に赤黒い小さなシミを見つけて、僕は背筋が寒くなるのを感じた。

「……あ、あんまり……長居したくない感じですよね……」

道にはあんまり人の姿がない。時折擦れ違う人々も、こちらが旅人だと気付くと陰鬱な瞳を向けてきた。フレイさんはそれを無視して言う。

「ったく、テメーは……。もうビビってんのか？」
「だ、だって……」

僕がそう呟くと、フレイさんは呆れたようにため息をついた。あの商隊の言葉を全部鵜呑みにしているわけじゃないけれど、やっぱり怖い。こつこつゆづのって何時何処で起きるか分からないものだし。メイはすると路地の奥へと入っていき、辺りに注意しながら通りへ出た。そしてサーシャさんに視線を向ける。

「ここだよ、この酒場」

僕らはメイを追って通りに出る。通りはさつきよりも人気があつて、まだ安全な場所に見えた。道端にちらほらと露天商の姿も見える。

メイは通りに面した大きめの酒場に向かって行った。あれ、子供一人で入っても大丈夫なのかな。

「おい、酒場にお前の客がいるとは限らねえだろ？」

フレイさんがその声を投げると、メイは入り口の扉を開けて振り返った。

「うん。だけどネオ・オリに来たら、ここの人に言伝する手筈にな

つてるから」

「へえ……なんだか、本当に『お仕事』してるみたいだね」

僕がそう呟くと、メイはクスッと笑って酒場の中に入っていった。フレイさんはため息をつくとき、ポケットから煙草を取り出して吸い始める。サーシャさんは辺りを見回しながら、ネオ・オリの様子を見つめているようだった。僕もなんとなく、行き交う人に視線を向ける。

ネオ・オリの人口の半分は遊牧民族の血を引いている人間が殆どだ。肌の色は褐色だったり、黒に近い色をしている人もいる。民族も色々あるけれど、有名な一族は3つ。

1つは槍術に長け、どの部族よりも信仰に厚いメティスカ一族。この間エレンシアの監獄で助けてもらったジャンさんはこの一族だ。そして次に大きな一族は、辺境の付近に住み独特の言語を持つルヴァ一族。テレジアさんは喋り方から考えてもすぐこの出身だと分かる。そして最後の1つは、肌の色も通常の人間に近く、今では殆どが街で暮らしているゲイツ一族だ。

「……そういえば、ジャンさんとテレジアさんも此処にいるんですかね？」

二人の顔が頭に浮かんで、ポツリと呟く。するとフレイさんがあからさまに嫌そうな顔をした。

「……クリフ、テメー『噂をすれば影』って言葉、知ってるか？」
「……」。予言書の新しい情報がない限り、まだこの国にいるでしょうね。あの三大戦士の二人が国に戻れば、多少の騒ぎになると思いますが」

サーシャさんは腕を組んだまま、そう言う。確かに、国が混乱し

ている最中に二人が戻れば騒ぎにもなるはずだ。一応二人は国王の部下ということになっているけれど、もともとは民族派の人間。次期国王候補のボルドー王子は民族尊重派だけどもあまり聡明とは言えないし、宰相のディーターって人は民族よりも国家を固めることに力を費やしている。

「ボスが代わる大事な時期ってか。……お偉いさんの部下ってのは面倒くせえな」

サーシャさんは自分の髪を弄びながら言う。

「良かったですね、フレイさんは気楽で」

「バカ言うな、斬られても死なないバケモンの下で働いてる方が更に面倒くせえっつーの！」

店の入り口の前で、いつもの様に口喧嘩が始まった。喧嘩といっても、大抵フレイさんが噛みついてサーシャさんがそれを受け流してるだけなだけで。最初は僕もハラハラしながらそれを見ていたけれど、最近はだいぶ慣れてきた。どっちが勝つかは明確だから。

苦笑しながら勝利の行方を見守っていると、通りを歩いて来た人が二人の前で足を止めた。店と二人を見比べて、困ったように言う。

「……通りたいんだけど、いいかな？」

「……ああ、すみません。邪魔でしたね」

店のドアの前で喋っていたサーシャさんは、そう言ってフレイさんを押しやった。もちろん体力的にもサーシャさんには敵わないフレイさんは、苛立ったように喋りかけてきた男の人を睨んだ。

僕もまた、フレイさんの視線を追ってその人を見る。緑の石のはめ込まれた剣、茶髪に綺麗な紫の瞳、右目の下には泣きボクロ。ふ

と店に視線を向けた横顔に、僕はつい声をあげてしまった。

「あ……」

言っただけからしまった、と思った。フレイさんとサーシャさんの視線が突き刺さってくるのを感じる。男の人は僕の声にふと振り返った。その顔は、見覚えのある顔だった。

「あれえ……クリフ君じゃないか」

「えっ、あ、あ、ああ、え、ええとっ……」

僕は反射的に逃げ場所を探してしまった。拳動不審に慌てる僕を見て、後ろからサーシャさんが訝しげな表情で言う。

「クリフさん。お知り合いですか？」

「えっ？あ、あ、その……」

僕は後ろに後ずさる。すると男の人はヒョイと僕の襟首を掴んだ。猫を掴みあげるような動作だけど、簡単に振り払うことは出来ない。男の人はニッコリと笑って、捕まえた僕の顔を覗き込んだ。

「あはは、クリフ君は相変わらずだなあ。こらこら、逃げない逃げない」

ね、と笑いかけられて、僕は観念した。こっぴどく捕まえられたら最後、逃がしては貰えないことを僕は知っている。

僕の様子を見てサーシャさんが更に口を開こうとしたその時、酒場の扉が開いてメイが出て来た。そして僕らを見て、ぼかんとした表情を浮かべる。

「あれ……フリッツさん？」

「あ、メイちゃん。……丁度良かった、メイちゃんが来てないか店の人に聞いてみようと思ってたんだ」

メイは僕を猫みたいにつまみあげる男の人を見て、しばらく何かを考えているようだった。そしてしばらくすると、ああ、と納得した声をあげた。

いまいち状況がつかめていないフレイさんがメイに問いかける。

「……何が『ああ』だよ。客ってコイツか？」

メイは振り返ると、しっかりと頷いてみせた。

「うん、そうだよ。……そっかあ、そうだよね、フリッツさんはルクスブルム傭兵学校の先生してたもんね。クリフお兄ちゃんと知り合いなんだ」

まるで近所の子供をあやすお兄さんのようにフリッツさんはもう片方の手でメイの頭を撫でる。と、ところで僕はいつになったら地面に下ろしてもらえるんだろう。

メイの言葉に、腕を組んで頭をフル回転させていたフレイさんは、ハッと何かに気付いたようにサーシャさんに視線を向けた。サーシャさんは何も言わずにただ頷く。

僕はこの後に予想されるフレイさんの説教を予想して、宙ぶらりんのまま魂が抜けそうになった。

「…………で、つまりテメーは、かの有名なルクスブルムを卒業して、あの野郎は剣術の師匠ってわけか？」

場所は酒場の中に移された。メイとフリッツ先生は隣のテーブルで商談を始めている。僕はフレイさんと同じテーブルに二人きり。フレイさんは夕食を取りながら、口元を引きつらせて言った。

「ルクスブルムってのは本当に才能のある奴だけしか入らないっていう、あのルクスブルムだよなあ…………？」

「そ、そうです…………」

「入学試験で何十倍っていう関門を抜けた奴しか入れないうえに、卒業も試験を通らないと卒業出来ないっつー、あのルクスブルムだよなあ…………？」

「そ、その通りです…………」

「そしてその剣はルクスブルムの卒業生しか持てないっつー、あのレイテルパラッシュ…………」

フレイさんが呟くと、隣のテーブルにいたメイがこちらに視線を向けた。フリッツ先生との商談が上手くいっているのか、上機嫌でフレイさんに余計な知識を植え付ける。

「あつ、そのレイテルパラッシュね、卒業生の中でも優秀者しか貰えない、有名な鍛冶屋の特製なんだよ」

「…………ほお…………」

ギロリ、とフレイさんに睨まれて、僕は小さくなった。フレイさ

んはフォークで肉を刺すと、それを口に放り込みながら言う。

「……つまりはコロッセオで見たあれが実力、ってわけか」

ちっ、とフレイさんは舌打ちをする。僕は肩を竦めて頷いた。フレイさんはグラスのお酒を飲み干して、テーブルの上に叩き付ける。そして憎々しげに呟いた。

「……アイルークはそれを知った上で利用してやがったのか……？」
「……おそらく、そうですね」

パツと顔を上げると、サーシャさんがテーブルの前に立っていた。上着を脱ぐと、僕の隣の椅子に腰を下ろす。店員を呼んで適当に食事を注文すると、フレイさんはサーシャさんに視線を向けた。

「宿は？」

「とってきました。暴動のおかげで何処もかしこも空室状態でしたから、今回は一人一部屋借りることが出来ましたよ」

良かった、と僕は胸を撫で下ろした。機嫌の悪いフレイさんと同室はとても気を使う。フレイさんは僕の様子に気付いたらしく、ギョッとこちらに視線を向けた。

サーシャさんは運ばれて来た水を口にしながら言う。

「……クリフさんの剣は近くで見なければルクスブルムのものだと気付くことは出来ません。おそらく人質として利用するつもりで捕まえて、剣に気付いたのでしょ」

「人質、ね……。そうゆうお前は、あの酒場ですぐに気付いたのかよ」

フレイさんがフォークを向けると、サーシャさんはふと肩を竦めて笑って見せた。

「……さあ、どうでしょうね。とありえずフレイさんより先に気付いたのは確かです」

サーシャさんの言葉にフレイさんはカチンときたようだったけど、僕は苦笑を浮かべるサーシャさんの横顔を見つめながら思った。多分、初めて出会ったあの酒場で、サーシャさんは僕がルクスブルム学校出の剣士だつてことに気付いていたんだろ。でも、僕が全然剣が使えないと知ってもそれを引き合いに出して責めるようなことは一度もしなかった。

またフレイさんがサーシャさん相手に喧嘩をふっかけているのを眺めながら、僕は自分の弱さを恥ずかしく思った。

第1章 4

夕日の光を浴びてオレンジ色に染まる太陽神バルトロの石像。雨に打たれ、風に吹かれて薄汚れた石像の前に、1人の少年が立っていた。夕日の色をした髪少年。その瞳はじっとバルトロの像を見つめている。

少年は何度も首を傾げ、そして改めて呟いた。

「……うむ、似ておらぬのう」

- ある日の、ある少年の、ある出来事 -

「じゃあ……僕はこれで失礼するよ」

私たちを宿まで見送った彼……フリッツ・コールはそう言って歩き出した。私の後ろを歩いて来たクリフさんがふとその背中に声をかける。

「あれ……フリッツ先生は別のところに宿をとってるんですか？」

フリッツさんに呼びかけるクリフさんの声は少し違う。恩師に対する敬意なのだろうが、おそらくそれだけではない。きっと剣士な

ら誰でも彼を尊敬するはず。

フリッツさんは足を止めるとこちらに向かつて微笑みかけた。

「うん。お城の方に呼ばれてるから、友人達と合流してそっちに行くつもりだよ」

「そうなんですか！お疲れさまです」

クリフさんが頭を下げるとフリッツさんは軽く手を振って歩き出す。その背中が路地を曲がったのを確認して、私は隣に立っているフレイさんを肘で小突いた。

「……フレイさんの言葉はあながち外れていませんでしたね」

「あ？なんのことだよ」

クリフさんはフリッツさんを見送ると、ポケットの中から鍵を取り出して宿の中へと入っていく。メイはすっかりクリフさんに懐いたようで、二人は並んで部屋へと向かっていった。

私はその後ろを追いながらフレイさんを見上げる。

「彼……フリッツ・コールはネオ・オリ三大部族の一つゲイツ一族出身の戦士です。……『三大戦士』の最後の1人ですよ」

私の言葉にフレイさんは予想通りの反応を返してきた。一瞬、理解出来ないような顔をし、そして次の瞬間驚きが言葉を弾き出させる。即座に叫ぶクリフさんも五月蠅いが、彼は五月蠅いというより面倒臭い。

「……はあ！？あの男がか！？」

「そうです。ルクスブルム傭兵学校は多額の金額をこの国に渡して、三大戦士の1人を『買った』んです。……まあ、もともとゲイツ一

族の出身ですから、国を離れることにさほど抵抗感はなかったようですね」

この国の事情も彼ら『三大戦士』の関係も私には興味のないことだが、彼らは国に、もしくは王族に使える忠実な部下だ。国は彼らを従えることで遊牧民族や各有力部族を従えることが出来る。そうゆう意味では国と部族のパイプ的役割を果たしていると言ってもいいかもしれない。

そんな関係が危うくなり始めたのは、現国王が病に伏してからだった。国王の後を継ぐべき王子達はまだ完全に国を統べる術を学んでおらず、一時的に『宰相』という地位が作られた。その地位に就いたのはディーター・エデュロイ。それはただの間に合わせの地位と人材だった。

それが全ての火種。

「ディーターは国の経済が傾いていることを知り、他の国との関係の強化を図りました。そこに丁度良く話を持ちかけて来たのが、かの有名なルクスブルム傭兵学校だった、というわけです」

一時的な宰相はその取引に高額な金を要求し、歴史ある傭兵学校はそれに応じた。その辺りから、彼を指示する人々が都の中で増え始めたのだ。遊牧民族に頼って細々と生きる生活から、他の国のように貿易や取引で成立する国へ……。それは都に暮らす人々にとつて憧れでもあった。

「……この暴動の火種は『宰相』のカリスマ性と人々の生活の変貌にあります。住む場所を転々とする部族はいなくなり、都に安住する者が多くなりました。彼らは今も古い風習に凝り固まった部族を良く思っていないのです」

私の説明に、フレイさんは廊下を歩きながら呟く。

「……コンプレックスとは違うが、似たようなもんだな」

「ですね。ただ、気になるのは……」

私はふと今日、この街を最初に見たときのことを思い出す。私が一人で旅をしていた時の噂だと、ネオ・オリの国力は他の国に比べて弱く、経済的にも潤いはなかったはず。しかしこの街を見る限り、この国はエレンシアやグロックワースに近い発展を見せている。

急に黙り込んだ私に、フレイさんが顔を顰めている。私は階段から外の様子を見つめながら呟いた。

「……いえ、なんでもありません」

街はゆっくりと夜の雰囲気が変わっていく。でもこの街は他の大きな都と違って猥雑な雰囲気は全くないから不思議。多分、ここに生きる人たちがみんな太陽神バルト口の血筋だからかもしれない。本当かどうかはよく分からないけど。

「……よつと」

私はゆっくりと窓から下に降りた。もちろん、私の部屋は1階。

部屋の入り口には鍵をかけて、窓から外に出る。なんでこんな時間に私が外に出るのかって言ったなら、もちろん情報集めのため。

暴動は怖いけど、それを怖がっていたら立派な裏世界の情報屋になれないんだもん。それに多分こんな時間に暴動は起きないはず。ネオ・オリ精神っていうのかな。この国の人たちは『勝負は堂々と』っていうポリシーがあるから。

「……………」

サーシャさんの部屋の窓の下を屈んで通ると、後は一気に通りへ出る。多分サーシャさんのことだから気付いてもお咎めはないと思うんだけど……………とりあえず、ね。

通りに出ると、人の気配は殆どなかった。やっぱり普通の人には家の中に籠りたくなるよね。危ないし。

「……………ええと、とりあえず何処にいきこうかな……………」

私はキヨロキヨロと辺りを見回す。メイを相手にしてくれそうな人がいる場所だと……………やっぱり酒場かな。お酒飲んでる人たちって、饒舌になりやすいからポロツと重要な話をしちやったりするんだもん。上手く話を聞き出してあげれば、こっちにも面白い情報が入ってきたりする。

「それじゃあ、酒場に……………っ!？」

意気揚々と振り返った私は、向こうから走って来た人にぶつかっただ。しかもあの『魔術師サマ』とかクリフお兄ちゃんとかならまだしも、私と同じくらいの身長の子。頭と頭がぶつかって、自分でもビックリするくらい大きな音が出た。

「い、いたたた……」
「つう……」

私が頭をさすりながら顔を上げると、男の子が同じ格好で頭をさすりながらこつちを睨みつけてきた。

「そち、何処を見ながら歩いておる！」
「なっ！そつちだって、前も見ずに走ってきたじゃない！」

男の子はよく見たら私より少し視線が低かった。オレンジ色のさらさらの髪に、ちよつと生意気そうな目つき。私の言葉にむつとしたのか、つり目をもつとつり上げて、私の顔の前に人差し指を向けてくる。

「急に振り返る方が悪いのだ！余は急いでいてだな……！」

はつと何かに気付いたように、男の子は咄嗟に後ろを振り向いた。通りの向こうから数人の足音が聞こえてくる。彼は慌てたように建物の隙間に入り込み、私まで引つ張り込んだ。

「な、何……？」
「いいから黙っておれ、静かに！」

静かにつて、そつちの方が五月蠅いよ。私はそう反論しようとしたけど、向こうから聞こえてきた足音に口を閉じた。数人のガラの悪い男の人たちが、さっきまで私たちのいた辺りでキョロキョロしてる。1人が何かを言うと、他の人たちが一斉に頷いて、街のあちこちに散らばっていった。

私は男の人たちがいなくなるのを確認して、男の子に視線を向けた。

「……スリでもしたの？」

「なっ、余がそんなはしたない真似をするものか！」

はしたない、と言われて私は口を尖らせる。そんなこと言っただけで、この状態はスリに失敗したときの状態と一緒に。財布を握っているところを見つみると、あんな風に追われるハメになるから。

私達は辺りを見回して、建物の隙間から顔を出した。

「むう……じゃあ、なんで追われてるのよー」

「そんなこと、そちに関係なかるう」

むっ、こつちがお姉さんらしくなるとかしてあげようと思ったのに、返答はそれ？可愛くないっ。

「あ、そんなこと言っているの？さっきの人たちに教えちゃうことだって出来るんだよ？メイ、情報屋だもん」

私はそう言っただけをぼんつと叩いた。どーだ、恐れ入ったか。でも男の子の反応は私が思ったのとは全然違ってた。慌てふためくかと思っただけに、私をじつと見つめて、何かを考えてる。

「……そち、情報屋というのは……何でも知っておるのか？」

「えっ？え、いや……何でもってわけじゃないけど」

私は慌てて首を横に振った。だって、私は知っている情報しか知らない。知らない情報は知らなくて当然な訳で、だって知らないから知らないんだし……って、訳分からなくなってきた。夕日の色の髪をした男の子は、私の反応に顔を顰める。

「情報屋なのに情報を知らぬのか？」

「そんなこと言ったって、メイまだ半人前だし……だ、大体情報屋のお仕事ってどんなのか知ってる!？」

私がそう言って迫ると、彼は面食らったような表情で顔を横に振った。

呆れた。この子、もしかして何処かの財閥のお坊ちゃんか何かかな。なんとなく口調も偉そうだし、もしかしたら本当にそうかも。

私はぽん、と思いついたように手を叩いた。それなら、この世間知らずのお坊ちゃんに情報屋のお仕事がどうゆうものか見せてあげようっと。こつゆづの……えっと、社会見学って言うんだよね。

「じゃあ、このお姉さんのお仕事を特別に見学させてあげる!……あなた、名前は？」

私がニツコリと笑ってみせると、彼は瞬きをして言った。

「余か？余の名は……」

「……やあ」

夜の広場には人氣が少なく、街の光が輝かしいのに対してこの場所だけはどこか寂しげに見える。そう思い始めたのは数年前からだけど、どうやらそう感じているのは僕だけではないようだ。

片手をあげて笑いかけると、旧友達は僕の顔を見てため息を吐いた。真つ赤な髪をした友人は呆れたような表情で僕を睨みつける。

「……フウ、そののんびり挨拶いい加減直すね。聞いててイライラするのん」

靴の裏で地面を叩きながら、彼女は戦棍のメイスを担ぎ直す。ちなみに『フウ』とは僕のニックネームのようなものだ。彼女は僕の名前をしっかりと発音することが出来ない。

「まあ、いいじゃないか。テレジアの訛りに比べれば……」

「フウののんびりと同じない！」

珍しく眉間に皺を寄せてそう叫ぶ彼女はテレジア・ケベリ。今は機嫌が悪いけれど、機嫌が良ければとても優しい世話好きな性格のはず。

僕は苦笑を浮かべながら、銅像の隣で黙りを決め込んでいる彼女の相方に視線を向けた。焼けた肌に長身の大男はジャン・ユサク。

「……随分とテレジアの機嫌が悪いようだけど、禁句でも口にしたかなあ？」

僕がそうやって助け舟を求めると、ジャンはため息をついた。ちなみにテレジアの禁句は3つある。一つは貧乳、一つは化け物。そして最後の一つは……僕は命が惜しいから、言わないでおくことにしよう。

ジャンは相変わらずボロ布を被って、顔がはっきりと見えないよ

うにしていた。シャイなのか人見知りなのかは分からないけれど、彼はいつもこんな格好をしている。

ジャンはカリカリしているテレジアを横目で見ながら言う。

「……王子が城から抜け出した」

「あれ……ボルドー王子が？」

僕がそう戯けてみせると、テレジアがキツとこちらを振り向いた。そして僕の襟首を掴んで言う。

「違うね！ミニの方ね、ミニの」

「ミニって……」

僕はしばらく会っていない王子達の顔を思い浮かべた。国王の跡継ぎ問題で騒がれているボルドー王子を除く王子達はたしか4、5人。その中でテレジアがカリカリするくらい重要な人物というところ……。

ほん、と頭の中に浮かんできたのは、まだ15歳にも満たない小さな少年だった。少し橙色に近い髪に、ちよつと気の強そうな顔をした男の子。

「フェオール王子が……？」

僕の言葉にジャンが頷く。たしかに、暴動が起きている城下に王子がいるとしたら危険だ。

「……抜け出したのは夕刻。至急探し出せとの命だ」

でも、とテレジアは靴裏で地面を叩く。メイスを担ぎ上げたまま、チラと辺りを気にする仕草を見せる。テレジアは僕に一步近づくと、

小声で囁いた。

「……それだけじゃないね。嫌な噂、聞いたのん」

「噂……？」

テレジアは頷いて、もう一度辺りに視線を向ける。そして呟いた。

「データー、動いたのん。海の方こうと連絡取り始めたよ。ボルドー王子に和解の話し合いを持ちかけてるね」

月が雲の中に顔を隠し、太陽神バルトロの石像が闇の中に紛れていく。風の音が広場の木々を揺らし、まるでこの国の光を揺らめかせているように見えた。

テレジアは真剣な顔で言う。

「……嫌な予感、する」

俺の部屋の扉が叩かれたのは、深夜を少しまわった頃だった。酒でも飲みにいこうと考えていた俺は、突然のノック音に顔を顰めた。なぜなら、向こうから聞こえて来た声がサーシャの声だったからだ。

「……フレイさん、起きてますか？」

煙草を加えた状態で扉を開けると、いつもの格好のサーシャが立っていた。腰のホルスターにはクロノスが仕舞われている。

サーシャは俺を見上げて言う。

「これから少々外に行くつもりなんですが……一緒にしませんか」
「ご一緒って……誰が行くか、お前なんかと」

俺がそう答えるとサーシャは苦笑を浮かべて、人差し指を俺に突きつける。

「……一軒なら奢ってさしあげましょう。いかがですか」
「うっ……」

俺は言葉に詰まった。こいつの場合、おそらく酒場で酒を飲むのが目的というわけじゃない。酒場で予言書の情報を集めるつもりなんだろう。『ご一緒』というのは、それについてこいという意味だ。しかし、一軒分奢りするのはまあまあ……いや、結構良い話かもしれない……。

財布の中の小銭を頭の中で確認して、俺は頷いた。

「ちっ、仕方ねえな……」

サーシャは俺の答えを確認すると出口に向かって歩き始めた。俺は部屋の鍵を閉め、その後続く。ふと隣の部屋を見ると、そっちはもう既に部屋の灯りが消えていた。クリフのやつ、もう寝たのかよ。

俺たちは宿を出て、外を歩き始める。大通りに並ぶ店はまだ灯りをつけたままだが、路地の奥はひっそりと静まり返っていた。サーシャは月明かりに照らされた道を真っすぐに歩いていった。

「……やけに静かだな」

俺は辺りを見回してそう呟く。もう少し活気があるもんかと思っ
ていたが、大通りも人通りが少なくひっそりとしている。サーシャ
は俺の前を歩きながら言った。

「暴動の影響でしょうね」

「暴動、ね……どうしてこうゆう部族だのなんなのって、血の気が
多いんだろっな」

ふとサーシャが足を止めて俺の顔を呆れた表情で見つめる。なん
だよお前、その顔は。

サーシャはため息をつきながら再び歩を進めた。歩くたびに靴
音が響く、静かな夜だ。

「……まあ、宗教心だ何だと言う気はありませんが、彼らには彼ら
なりの『誇り』があるのでしょっ」

呟いた言葉は、ゆっくりと闇の中に消えていった。

第2章 1

酒場に足を踏み入れた私は、酒場の奥のテーブルに座ってジュースを頼んでいるメイの姿を見つけた。彼女はこちらに背を向けた状態で、向かい側にいる誰かと会話をしている。

私が立ち止まったことで前に進めなくなったフレイさんが、顔を顰めて私の見ている方向に視線を向けた。私より身長が高いフレイさんは、メイと共にジュースを飲んでいる相手を見て一言、こう言った。

なんだあのガキ、こんなところでデートか、と。

- 小さな王子様の憂鬱 -

「……………ここが酒場か？」

私の向かい側に座った男の子はそう言って辺りを見回した。物珍しそうにキョロキョロとあちこちを眺めている。店員さんが通りかかるたびにその姿を目で追ったり、カウンターにいるおじさんがカクテルを振ってるのを不思議そうに見てみたり。

「そつだよ。……………中に入るの初めて？」

「入るも何も、見るのも聞くのも初めてだ。……………そうか、この国の

人間は夜をここで過ごすのだな」

納得したように首を縦に振るこの子はフェオール。下の名前も聞いたんだけど、全然教えてくれなかった。なんでだろう。サーシャさんみたいになにか理由があるのかな。

フェオールは辺りを見回しながら、知らないものは何でも私に聞いてくる。

「そち、あの赤っぽい飲み物はなんだ？」

私はフェオールが指差す先に視線を向ける。カウンターでおじさんが準備しているのは、瓶に入った飲み物だ。よくよく見ると赤い色をしている。

「あれは葡萄酒だよ。葡萄の果汁を発酵させた飲み物」

「葡萄酒……ああ、聞いたことがあるぞ。父上が体の具合が良いときに飲んでいるのを見たことがある」

フェオールはグラスに注がれる葡萄酒を見つめながらそう言った。表情が少し明るく見えるのは、私の気のせいかな。さっきまで周りの視線を気にしてそわそわしていたのに、今は随分落ち着いたように見える。

じつとその顔を見つめていると、フェオールは私の視線に気付いて首を傾げた。

「……なんだ？余の顔になにかついてしているのか？」

「ん？うつん。……フェオールの髪って綺麗な夕焼けの色なんだなあって思つて。ほら、あれに似てるじゃない。ええと……バルト口の持つ太陽石みたいな」

この国で……というよりこの国を支える遊牧民族の間で信仰される神様に、太陽神バルトロフって人がいる。男の神様で、太陽を司る神様なんだけど、この人の逸話に面白い話があるんだ。

ずっとずっと昔、この世界がまだ闇に覆われていた頃、神様の一族が競って『この世で最も素晴らしいもの』を探そうとした。みんなが納得できるものを見つけた人には、この世界の神様を統べる重要な役目を与えられるとかで、神様はみんな世界の果てまで『もつとも素晴らしいもの』を探しに出かけたんだ。

みんな色んなものを持ってきて、互いに自分の選んだ美しいものを自慢し始めた。『愛』、『力』、『理』、『美』……集まったものはどれも素晴らしくて、どれが一番かなんて決められなかった。でも最後にバルトロフが自分の持ってきたものを見せると、みんなが納得してしまった。

彼が持つてきたのは、燃えるような太陽の石。愛も、力も、理も、美も、全てを光の許に浮かび上がらせる眩しいほどの太陽。

だから太陽神バルトロフの像は、いつも太陽石に似せたオレンジ色の宝石を持っている。

「そういえば、たしか国王様も同じ髪の色をしてたよね。やっぱりあの宝石は王家の血筋を表してるのかなあ」

私は葡萄ジュースを飲みながらそう呟く。するとフェオールは何故か慌てたように首を横に振った。いつのまにか顔が真っ青になっている。なんでだろう。

「よ、余はそうは思わぬが！お、おそらく気のせいであろう」
「……？何慌ててるの？」

私が首を傾げると、フェオールはぶんぶん首を横に振った。

「慌ててなどおらぬつ。そ、それより情報屋とやらの仕事を教えるのではなかったのかっ」

「あ、そうだったっけ。これじゃあ酒場で葡萄ジュース飲んでるちよつとおませなお子ちゃまだよね。ちゃんとお仕事しないと……」

私はそう言つて椅子から降りると、まず葡萄酒を準備していたおじさんのところに駆寄つていく。とりあえず話を聞くなら、毎日酒場で働いている人に聞いてみないと。

振り返つてテーブルにいるフェオールを見ると、何故かほつとした様子で葡萄ジュースを啜っていた。私と目が合つと、また慌てたように視線を逸らす。へんなフェオール。

私はカウンターの椅子に座ると、おじさんにニッコリと笑いかけた。

「おじさん、こんばんは」

「おお、メイちゃん。彼氏を連れているからどうしたのかと思つたぞ。なんだデートか？」

「おじさん、これはデートじゃなくて、社会見学だよ」

メイがカウンターに寄つてきたことでカウンターにいる店主との会話がこつちのテーブルにも聞こえて来た。サーシャは酒を飲みながら、何かを考えるようにメイの言葉を聞いている。俺は店員に追

加の注文をつけながら、奥に座っているガキに視線を向けた。

オレンジ色の髪に、やけに身なりの良い格好。どこからどう見てもいいところの坊ちゃんだ。メイのやつ、どこであんなの拾って来たんだか。

サーシャはグラスの氷を回しながら呟く。

「……………気になりますか」

「俺は男に興味はねえぞ」

「フレイさんの嗜好は聞いていません」

俺の言葉に、サーシャは冷えた目を向けて来た。この女……………ほんつとーに冗談が通じない奴だな……………。

サーシャは横目でガキを見つめる。キョロキョロとあちこちを見回しているガキは、こちらの視線に気付いていない。もともと観葉植物の隣に席をとったから、メイの位置からもガキの位置からもちらは見えないはずだ。

サーシャはグラスに口をつけながら言う。

「あのオレンジの髪……………ネオ・オリの王族に似ています。私も詳しく聞いたことはないのですが……………」

俺は店員から注文した葡萄酒を受け取って、もう一度ガキとメイに視線を向けた。カウンターから戻ってきたメイはガキと何やら会話をしている。あの自信たっぷりの顔を見るに、ガキに何かを教えてやってるんだろう。

ふとサーシャは何か気付いたように窓に視線を向けた。通りに面した窓には酒場の明かりが反射して、外は見え難くなっている。

「……………？」

サーシャがふと首を傾げた。その時だった。

ドン、と派手な音がして、酒場の扉が開かれた。店にいた奴らが一斉に入り口に視線を向ける。それは俺もサーシャも同じだった。

「……なんだ？」

店に入ってきたのは、5人ほどの男たちだった。どいつもそこら辺にいそうな旅人の格好をしている。ただ普通と違うのは、そいつらの目指した場所が空いているテーブルでもカウンターでもなく、メイとガキのいる奥のテーブルだったことだ。

メイは咄嗟に何かに気付いたようにガキを庇った。そして何やら男たちと睨み合っている。あのバカ、なに喧嘩売られて素直に買っただよ。

チラと視線を戻すと、サーシャは慌てた様子もなくグラスを傾けている。

「……おい、どうすんだよアレ」

サーシャは観葉植物の陰から一触即発のメイ達の様子を冷静に見つめた。相手は大人の男5人。いくらセルマに護身術を教わっているとはいえ、障害物の多い店の中で男5人を相手に立ち回りを演じるなんて、到底無理な話だ。

サーシャは氷とグラスがぶつかる音を聞きながら、俺に視線を向けた。

「……私が出て行くわけにはいかないでしょう」

そりゃそうだ。この店内でクロノスをぶつ放されたら、俺もメイもあのガキも流れ弾に当たらないとも限らない。それに女が出て行けばあのガラの悪そうな奴らに馬鹿にされるのは目に見えてる。…

…けどな。

「……暗に俺に出て行けと言ってる気がするの、気のせいかな？」

「最近頭の回転が早くなってきたようで助かります」

サーシャはそう言って笑ってみせる。笑顔というより、せせら笑いと言った方がいい。以前は徹底して無表情を貫いていたが、最近はこの表情を見せるようになった。はっきり言っておぞましいことこの上ない。もうちょっとマシな表情が出来ないのかお前は。

「……ちっ……」

俺は舌打ち一つして席を立った。元はと言えば、この女の気概にほれ込んでついてきてしまった自分が悪い。

ローブを脱いで音をたてて椅子を引くと、何人かがこっちに視線を向けた。俺は一步一步とメイ達に近づいていく。背中に突き刺さる視線が痛い。

「ちよっ……何！？フェオールをどうするの！」

「だからなあ、お嬢ちゃん。俺たちはこの人の世話役みたいなモンさ」

「そんなわけないでしょ！だったらフェオールだって嫌がらないはずだよ」

男たちの言葉にメイはすっかり頭に血が上っているようだった。

このままだと男たちに手を出しかねない。そりゃあ1人2人ならまだしも、相手は5人だ。

男たちの1人が俺に気付く。しかし俺はそれに目も向けず、メイをからかっているリーダー格の茶髪の男の肩を左手で掴んだ。

「おい」

「……………あつ……………」

目をつり上げて怒っていたメイが俺の姿に気付いた。驚いたというよりも呆然とした様子でこつちを見上げてくる。

リーダー格の男はチャラチャラした不良のようだった。振り向くとすぐに顔を顰め、凄みの利いた顔で睨みつけてくる。

「んあ？……………なんだよオマエ。このお嬢ちゃん助けて王子様気取り？」

「はあ？……………あのなあ……………」

俺はため息をついて、男の肩を掴む左手に力を込めた。男は顔を顰めて俺の手を振り払う。そしてもう一度メイとガキに視線を向けようとしたその瞬間、派手な音をたてて俺の拳が男の顔を強打した。いきなり攻撃を受けた男は、受け身もとれずに床に転がった。周りにいた男たちは呆然として、俺と転がったリーダー格の男を見比べる。

俺は振り向き様に拳を作り、呟いた。

「……………俺はガキにも興味はねえんだよ」

「……ご苦労様です」

グラスを空にした私は新しい注文を店員に頼んだ後、フレイさんに歩み寄る。男たちのうち2人は完全にノックアウトされていて、残りの3人はついさつき這々の体で逃げ帰っていった。魔法を使わずにここまで出来れば及第点だ。今度から雑魚はフレイさんに任せようと、私は考えを改めた。

「……ああくそ、久々の殴り合いだと手が痛えな」

フレイさんは息切れしながら座り込んでいる。とりあえず怪我はないらしい。私はそれを確認してメイに視線を向けた。メイは私と目が合うと叱られた子供のように肩を竦める。

「……さ、サーシャお姉ちゃん達、なんでここに……？」

「無論、お酒を飲みに来たのですが？」

そう言つと、メイは更に小さくなったようだった。私はため息をついて、テーブルの奥に追いやられた少年に視線を向ける。少年はきよとんとした表情で、私とフレイさん、そしてメイを見つめていた。

少年は言つ。

「……そちはメイの知り合いか？」

その口調を聞いた瞬間、私の予想は確信になった。後片付けをしている店員達を振り返り、彼らには聞こえない小声で少年に視線を向ける。

「ええ。サーシャと申します。あちらはフレイ・リーシェン。……
貴方はネオ・オリ現国王の末子、フェオール王子ですね？」
「……………」

少年は私の言葉にすぐ顔色を変えた。驚きの表情を浮かべている
メイとフレイさんを睨みつけ、牽制する。近くにはまだこちらを気
にする野次馬達が集まっているのだ。

少年……………いえ、フェオール王子は私を上から下まで見つめて、顔
を顰めたようだった。それもそのはず、私やフレイさんは服装や持
ち物からすぐに旅人と分かる。温室で育てられた王子様からすれば
野蛮な者に見えるのだろう。

王子は私を睨みつける。

「……………そなたらも、ディーターの手下なのか？」

「えっ……………？」

王子の言葉に真っ先に反応したのはメイだった。

「ディーターって……………宰相でしょ？なんで私たちが……………？」

「……………」

メイの言葉にも王子は視線を逸らし、何も答えようとしなかった。
無視をし続ける王子の様子に、メイの声から力が失われていく。隣
で徐々に沈んでいくメイの様子に、フレイさんは立ち上がったため
息をついた。

私は小声で王子に囁く。

「……………私たちは何も言いません。メイの表情に嘘偽りがあると、貴
方がそう思うのなら」

「……………」

王子は一度だけメイに視線を向けたが、すぐに顔を逸らした。フレイさんが肩を竦めて私に視線を向ける。

「……………どうすんだよ、これ」

「どうするもこうするも……………このままここに置いていくわけにはいきませんかからね……………」

私がそう言っただけ息を吐いた。この王子があとで誰かに発見されて、城の人間から難癖をつけられては堪らない。私の言葉に、王子がピクと反応を示した。何処かに連れていかれることを察知したのだらう。その様子を見て、メイが何かを言おうと口を開く。

「で、でも、フェオールが此処にいるのも、何か事情があるんじゃない……………あれ？」

ふと通りが騒がしくなった。メイの視線につられて、私たちは通りに視線を向ける。酒場にいた人々は何かに気付いたように、通りに面したテーブルに集まり始めた。もしかやまた仲間でも連れて来たのかとフレイさんが入り口に視線を向ける。

しかし扉を開けて入って来たのは、全く違う人間だった。

「あれ？みんな騒ぎすぎね。アタシそんな有名な人違うよ」

高い女の声。聞き覚えのある口調に、フレイさんが声をあげる。

「げっ！」

「！」

咄嗟にフレイさんはメイを前に押しやり、王子は同じタイミング

で私の後ろに隠れる。もちろん、先に発見されたのはフレイさんの方だった。

「あ、『マジユツシ』の兄さんね。茶髪に赤目の兄さんが酒場で暴れてるって聞いたから走って来たのん」

「俺かよ！」

メイの後ろから顔を除かせたフレイさんが思わずそう叫んだ。まあ、あの一方的な喧嘩を見れば誰もがそう勘違いするに違いない。苦笑を浮かべると、フレイさんに睨まれた。

酒場に入ってきたテレジアさんは、フレイさん、メイ、私の順番に視線を向けて、最後にフェオール王子を見下ろした。背後に隠れていた王子はテレジアさんの視線を避けるように、顔を逸らす。

テレジアさんはため息をついて髪をかきあげ、そして小声で言った。

「……王子。帰るのんね」

「……」

「……国王様が心配してるよ」

国王様、という言葉に王子は顔を上げた。テレジアさんはにっこりと笑って、その手を取る。王子は何も言わずにそれに従った。

テレジアさんは自分の着ていた上着を王子の肩にかけると、私に視線を向けた。

「……お礼したいけど、ここはちと無理ね。明日、城に来るといい。歓迎するのん」

「……ええ。分かりました」

それじゃあ、また明日、と言ってテレジアさんは私たちに背を向

けた。集まっていた野次馬達には知り合いの子供だと言い、入り口にいた店主に口止め料を密かに握らせる。普段はとぼけた人間を装っているが、やはり国使えの人間らしい。金の使い方を心得ている。王子はテレジアさんの様子をじっと眺めながら、何も言わずに歩き出した。

私はそれを見送りながら、王子の言った言葉を思い出す。

(……………ディーターの手下、ですか……………)

ディーター・エデュロイ。一時的に設けられた宰相の地位から、国王へ成り上がるうとしている男。彼は確か、海の向こうの国の出身だったはず。彼は国の経済を立て直すために三大戦士の1人であるフリッツ・コールをルクスブルム傭兵学校に売り、このネオ・オリエントを発展させた。

野次馬達がテレジアさんの姿を追って窓に張り付いている様子を見つめながら、私は一人呟いた。

「……………出来過ぎていますね……………」

第2章 2

夕日が照らし出したあの一瞬。背中を吹き抜けた風と共に消えたのは、私と母を縛り付けていた何よりも重い言葉。もちろん、自分で言った言葉に迷いなどなかった。もしかしたらこの言葉で何かが変わるのかもしれない、何も変わらないのかもしれない。

重みの消えた上着を羽織って、私は息を吐いた。

- 愚かな決意とヒュペリオン -

翌日、言われた通りに城の前まで来た俺たちを迎えたのはテレジアだった。

「あ、兄さんたち！ここね、ここ！」

馬鹿でかい城門の前で仁王立ちをしていたテレジアは、俺たちの姿を見るといつもの笑みを浮かべて盛大に手を振った。大声で呼ばれた俺たちに通りを歩く奴らの視線が突き刺さる。クリフは拳動不審になり、サーシャは呆れたようにため息をついていた。

俺はやけに元気の良いテレジアに言う。

「お前……仮にも三大戦士だっていう自覚があるのか？」

「あ、五月蠅かた？でも相棒と待ち合わせするよりマシね。黙たまだからいつも見つからないのん」

テレジアは城門をくぐりながら脳天気な顔でそう言った。相棒つてのはおそらくあの太男ジャン・ユサクのことだろう。なんとなくその様子が思い浮かぶ。

城の内部に足を踏み入れると、そこは城というよりも要塞のような作りをしていた。白煉瓦の積み上げられた巨大な建物だ。俺たちの目の前には真っすぐにエントランスに続く敷石が積まれている、左右には何処へ続くのかも分からない通路がある。

テレジアは真っすぐにエントランスへ向かう道を歩き始めた。一番後ろを歩くクリフが辺りを見回しながら言う。

「な、なんだか……他のお城とはちよつと違う雰囲気ですね」

「ん、そう言われればそうかもしれないのん。ネオ・オリは昔アタシ達と仲が悪かた。だからお城もこんなつくりね。あの頃は毎日戦争だたて、ウチのオジジ言てたよ」

それからすると今なんてへでもないね、とテレジアは笑った。俺の隣を歩いていたサーシャは城の内部を見渡しながら呟く。

「……それほどまでに憎み合っていた者同士が、どうして現在のよくな関係になつたのですか？」

テレジアはチラと視線だけで後ろを歩くサーシャを振り返り、そしてまた廊下に視線を戻した。サーシャはその様子を後ろからじつと見つめる。

「それは、この国に生まれてみないと分からないことのん。『言葉にするべき言葉とそうではないものを見極めよ』……太陽神バルト

口の言葉ね」

「……そうですか」

テレジアの言葉にサーシャは頷き、それ以上を問おうとはしなかった。2人のやりとりに俺とクリフは首を傾げる。しかしサーシャはいつものように俺たちを無視し、テレジアは何も言おうとしなかった。

やがて城の中を登ったり下ったりを繰り返した後、俺たちは太陽の光が差し込む通路に出た。右側には部屋が並び、左側には空中庭園のようなものが広がっている。庭園は緑によって埋め尽くされ、眼下の砂漠の風景に映えて見えた。

「うわぁ……！」

「これは圧巻ですね」

足を止めて庭園を眺める俺たちに、テレジアは目を細める。

「ここ、とても空気がいいところん。砂もここまでは上がて来ないよ」

クリフは庭園の中に入って、下に見える砂漠を見渡した。顔が真っ青になったところを見ると、この城はそうとう高い位置にあるんだろう。風が緑を揺らしている。

ふと足下に視線を落とすと、太陽と同じ色で咲く一輪の花が俺を見上げていた。テレジアはくしし、と笑って、立ち並ぶ部屋の一室を指差した。

「……ちなみに応接室はあそこね。そろそろ行くのん」

サーシャはテレジアの背中を追って歩き出す。俺は庭園の真ん中

で固まっているクリフの襟首を掴むと、案内された応接室へと向かった。

部屋に入るとそこにはジャンの姿があつた。壁に背もたれながら俺たちに視線を向け、軽く首を上下させる。会釈のつもりなのだろう。クリフが慌てて深々と頭を下げるのを見て、サーシャは軽く会釈をした。

応接室にはテーブルとソファ、そしていくつかの棚が置かれていた。壁には古風な剣が飾られている。刃が曲線を描いた2本の剣だ。クリフはそれを見つけると、何かを思い出したようにテレジアに視線を向けた。

「あつ、そういえばフリッツ先生は……？」

ソファに腰を下ろしたテレジアは、向かいのソファを俺たちにすすめながら言う。

「フウならちよつと野暮用ね。お城にはいないよ」

「そうですか……」

しゅんとするクリフを見て、テレジアは笑った。

「でも会つたらよろしく伝えといて言てたよ。剣士の兄さんはフウの教え子のんね」

「あ……い、一応……ですけど」

クリフは俺とサーシャの顔色をうかがいながらそう答えた。俺は呆れてため息を吐き、サーシャは軽く咳払いをする。どうやらこいつは報酬の話に早く持って行きたいらしい。

サーシャの様子を悟ったテレジアは苦笑を浮かべて棚の中から袋を取り出した。黒い布地の、大きめの袋だ。それが3分の2……い

や、5分の4くらい膨らんでいる。テレジアがテーブルの上に置く
と硬貨がぶつかり合って重みのある音を響かせた。

絶句する俺とクリフ。浪費家の俺でも2ヶ月間、3食女付きの良
いとこの宿で遊べるくらいのお金だ。目を丸くする俺たちを尻目に、
サーシャは冷静に金の入った袋を見つめる。

「……随分いただけのですね」

「いらぬなら減らしてもいいのんよ」

くしし、とテレジアは笑う。後ろの壁に背もたれているジャンは
じつと2人の会話を見つめていた。

「いえ……頂けるのならば文句はいいません。ただ……」

サーシャは口端をあげる。その瞬間、テレジアの笑みに影が差す
のを俺は見た。

「これだけ事が上手く運ぶと、裏を疑いたくなるのは人の性では？」

その一言で、ふっとテレジアの顔から笑みが消える。突然の言葉
に俺もクリフもサーシャを振り返った。しかしサーシャはテレジア
と、その後ろにいるジャンを真っすぐに見つめ、真剣な表情を浮か
べている。

テレジアはサーシャを睨む。

「……どゆことね」

「私たちの目的はそちらも分かっているはずですよ。……たまたま立
ち寄ったこの国で、たまたま城下にいた王子に出くわし、それを救
った。そこまでは偶然で片付けられますが、どうも早く出て行って
ほしいという感じがしてならないのですよ」

「さ、サーシャさん……」

言われてみればサーシャの言う通りだ。この国に来たのはサーシャの意志、そしてあのチビの王子に会ったのはメイがいたからだ。そこまでは俺たちの偶然だとしても、報酬があれだと割にあわない。もちろん多すぎる、という意味でだ。

テレジアは目を細くして、サーシャを見つめる。

「……口止め込みよ」

「フツ……ありがとうございます、それだけではない気がしますね」

クリフがハラハラしながら2人を交互に見つめる。サーシャは追いつきをかけるようにジャンとテレジアに視線を向けた。

「それにフリッツ・コールがネオ・オリに戻ってきていることも気にかかります。いくら王位継承で揉めている時期だからといって、あなた方3人が揃うほどのことでしょうか」

「それは……！」

テレジアがそう言って身を乗り出した瞬間、後ろからジャンがその肩を抑えた。テレジアはキツと後ろを振り返ったが、ジャンの顔を見ると俯いた。サーシャはその様子を無言で見つめる。

ジャンはサーシャを見下ろすと、低い声を響かせる。

「……つまり、裏に『過去の預言書』があると言いたいのか」

「！」

サーシャは無言のままジャンを見上げていた。その横顔を見て俺は納得する。こいつがこんな顔をするのは、預言書に関わる話の時だけだ。獲物を狙う狼に似た鋭利な蒼い瞳。俺には時々、それがテ

レジア達によく言う太陽神バルト口とかいうもんより、ずっと恐ろしく思える。

しかし、この剣呑な空気を打ち破ったのは、応接室の扉を叩くノック音だった。

「……………何ね」

おそらく人払いをしていたのだろう。テレジアが嫌そうにそう答えると、扉が開いた。そこから見覚えのあるガキが顔を覗かせる。橙色の髪に白い肌。予想もしない相手の出現に、テレジアは思わず腰を浮かせた。

「王子！なんでここに……………」

「余を助けた者達が来ていると聞いたのだ。礼くらい言わなければと思っただけ」

ガキは俺たちの顔を見渡して、軽く頭を下げた。サーシャは軽く会釈し、初対面のクリフは慌ててテーブルに頭をぶつけた。ガキは大きな目をパチクリさせてサーシャに視線を向ける。

「……………メイはおらぬのか」

ガキの言葉にサーシャは苦笑した。

「……………ええ。伝言でもあれば承りますが」

「そうだな……………なら文でも認めよう。ジャン、紙とペンはあるか」

ジャンは棚を一つ二つ引っ張り出すと、適当な紙とペンを手に取った。ガキはそれを受け取ると、出窓に置いてサラサラと字を書き始める。すぐさま文章が浮かぶのはやはり王子様、と言ったところ

だろう。見た目も中身も温室育ち。それが見ているだけでも伝わってくる。

ガキは紙を三つに折ると、サーシャに視線を向けた。

「これだけでは何だからな。庭園の花でも添えるところ。……そち、ついて参れ」

「王子！」

咄嗟にテレジアが抗議の声をあげる。さっきカマをかけられた奇立ち半分、そして半分は知らない者を指名するこのガキの浅はかさに対してだろう。しかしガキは泰然たる様子でテレジアを見つめ返す。

「庭園はすぐ目の前だ。それにこんな城の中で余を狙う馬鹿な人間はいない」

ガキはそう言うと、サーシャに視線を向けて行くぞ、と言った。それにしても俺でもクリフでもなく、サーシャを指名するとは見上げた根性だ。

サーシャは苦笑を浮かべてガキの後ろをついていく。応接室の扉を開けると、外の風が部屋の中に吹き込んできた。

外は先ほどよりも少し風が強くなっていた。私は花を見つめる王子の後ろをついていく。庭園から空を見上げると、太陽がもう西の山間に帰ろうとしている。日差しは王子の髪の色と同じ橙色に輝き、緑の葉も昼を名残惜しむかのように朱色に染まっていた。

王子は花壇の前まで行くと、私を呼び寄せる。

「……そち、メイはどの花が好きなのだ？」

「さあ……そういった会話をしたことがないのでよく分かりませんね」

私の言葉に、王子は顔を顰める。花や服、価値観、そして男性の好み。普通の女性は複数集まればそういった会話を交わすもの。しかし私は今までそういった類いの話をしたことがない。メイと交わす会話といえば、依頼人と情報屋、もしくは武器商人としての会話だけ。

王子は花壇を指差して言う。

「ならそちに任せよう。どの花が良いと思う？」

「……そうですね……」

花壇の中には白く小さな花や太陽の色をした花など、様々なものがあった。色とりどりだからこそ映えるものばかりだ。私はその中で薄い赤紫色のものに手を伸ばす。似合う似合わないという基準ではなく、ただ長持ちしそうなものを選んだだけ。理由は至極簡単だった。

ふと強い風が吹き上がってくる。花々は一斉に茎を揺らし、空中庭園にざわめきが起った。私はその花に手を伸ばした状態で反射的に目を瞑る。風が髪を揺らし、私の上着をはためかせる。王子は背後にいるのだらう。目を瞑る前に私の足下に王子の影があったことを思い出す。

す、と風が背中を通り過ぎた。

「……………」

私は目を開いた。風はそのまま私たちの前を通り過ぎ、城下へと消えて行く。私はもう一度花に手を伸ばし、それを摘み取った。思ったよりも香りのある花だ。

振り返ると、王子は左手を後ろに隠していた。私は彼の右手に花を差し出す。

「……………」

「あ、ああ……………すまぬな。……………それでは戻るとするか」

先に行け、と王子はそう言う。私は深く息を吐き、彼の隠された左手を見つめる。風が止むと、庭園内は静寂に包まれていた。西日が私たちの影を緑の葉の上に作り出す。

私は王子の瞳を見た。

「……………スリの手口はメイにでも教わりましたか、王子」

さっと王子の顔色が変わった。背後に回された左手をカモフラージュするかのように、花を握った右手も後ろへと回される。

「なんの……………ことだ」

王子はそう言って私を睨みつけた。強い瞳だ。おそらく鈍い者ならば分からなかったかもしれない。だが、彼は選んだ人間が悪かったのだ。……………いや、もしかしたら私を選んだ事に何か事情があるのかもしれないが。

私は王子の強い眼差しを見つめ返しながら言う。

「……女性の服の中に手を入れるのは褒められた所作ではありませんね。私が気付かないとお思いですか、左手に握られた銃……『ヒュペリオン』に」
「！」

王子の顔が青くなり、私を睨む瞳から力が失せる。

風が強く吹いたあの時、私は背中に風を感じた。上着の中に隠し持っていた『ヒュペリオン』の重さが消えたことに気付いたのはその時だった。

思えば昨日の夜、テレジアさんが酒場に入ってきたとき咄嗟に私の後ろに隠れたのは王子だった。その時に『ヒュペリオン』の存在に気付いたのかもしれない。

王子は視線を逸らした。やはり城の中で育てられてきた彼は嘘を貫き通すだけの心を持ち合わせていないのだろう。

「……て、テレジアに言おうがジャンに言おうが、返す気などないぞ！」

左手に握られた『ヒュペリオン』が顔を覗かせる。私は深くため息をついた。王子は首を激しく横に振る。

「ずっと昔に何かで見たことがある……これは人を確実に仕留めることのできる武器なのだ！これがあれば、余は……余はっ！」

「……王子」
「余は、この国を……！」

風が流れてゆく。強くに握られた花は彼の手の中で苦しそうに揺れていた。太陽の色をした髪が揺れるのを見つめながら、私はもう一度口を開く。

「王子」

ピタリ、と王子は喋る事を止めた。私はそれを見下ろして、そして彼の手の中にある『ヒュペリオン』を見つめる。それは私の母……カタリナをずっと支え続けたもの。そして同時に、彼女を縛り付けた力。

私は息を吐くと静かに言った。

「……その名は『ヒュペリオン』。高みを行く者、という意味です」

「……？」

高みを行く者。偶然とはいえ死期から逃れてしまったカタリナは、それを持つ自分をいつも皮肉に思っていた。そしてそれは私も同じだ。私の中にあるのは復讐という二文字。『ヒュペリオン』を持つとき、カタリナが感じていた矛盾を私の中にも感じる。母の死に際に嘘をつき、ジエイロードを追う自分を思えば思うほどに。

「貴方が高みを行くというのならば、このことは不問に致しましょう」

「……よ、良いのか!？」

王子が驚いた表情で私を見上げる。しかしそれに礼儀として微笑み返すことなど私には無理な事だった。

「……王子。高みに行くには数えきれないほどの死を犠牲に、憎しみと苦しみの上を歩かなければならないのです」

「それは……それは、分かっておる」

私は王子の瞳を見つめる。どんなに重い事だと分かっている、目の前で経験しなければ分からない事もある。彼はまだ知らない。高みに行くことの苦しさ、そしてその重圧を。

私は王子に背を向けて歩き出した。

「……申し訳ありませんが、先に帰るとお伝え下さい。あと……しばらくはこの国に残る、と」

西日が山際に消えようとしていた。

第2章 3

サーシャお姉ちゃんがお城から戻って来たのは、太陽が消えて辺りが薄暗くなつた頃だった。食事に行かないかって誘われたけど、私は先に食べちゃつたつて言ったら『なら私も食事に行つてきます。2人が帰つて来たらそう伝えて下さい』つて言つて出てっちゃんつた。それから不機嫌そうな魔術師サマと、挙動不審になつてるクリフお兄ちゃんが帰つて来たのは、しばらくしてからのことだった。

- 平和への生け贄 -

「おい、ガキ！サーシャは！」

私の部屋にズカズカと入ってきた魔術師サマの第一声はそれだった。本当にレディに対する礼儀つてものがなつてないよね。ノックくらいしてくれないと、こっちが着替え中とかだつたらどうするんだらう。

でもちようどベッドに寝転がってゴロゴロしていた時だったから、余計なことは言わないでおいた。だつて言うと五月蠅くなるんだもん。メイ、大人だよね。

「…………ご飯に行つたよ」

「はあ！？あの女、俺たち置いて先にメシかよっ！」

魔術師サマはそう言って苛立ちまぎれにため息をついた。あれ、また喧嘩でもしたのかな。喧嘩って言ってももちろん、魔術師サマの一方的な喧嘩。クリフお兄ちゃんは魔術師サマの怒りにビクビクしてるみたい。部屋に入らないでドアの付近でこっちを見てる。魔術師サマは私の目の前まで来ると、鼻先に手紙と花を突き出した。

「おい。……王子様からの手紙だぞ」

「えっ……フェオールから!？」

私は咄嗟に体を起こして、手紙と花を受け取った。もしかして誤解が解けないままだったらどうしようとか、今日一日そんなことばっかり考えていたから、まさかあつちから手紙が来るなんて思ってもみなかった。

手紙を広げると、流麗な文字が現れる。凄い。さすが王子様、としか言えなくなっちゃう。でも……メイ実は文字読めないんだよね。読めるのはお母さんの持つてる武器リストとか、情報屋として必要な知識の単語だけ。どうしよう。

私は一度魔術師サマを見上げて、そして廊下からこっちを窺ってるクリフお兄ちゃんに視線を向けた。

「クリフお兄ちゃん。手紙、読んでほしいんだけど……いい?」

「えっ、あ、う、うん……いいよ」

クリフお兄ちゃんは私の隣に腰掛けると、手紙を受け取って目を通し始めた。クリフお兄ちゃんはなんてったってルクスブルムの卒業生だもんね。あそこって傭兵としての戦い方だけじゃなくて、知識とか礼儀も教わるから頼りになるの。

手紙を読んでいるクリフお兄ちゃんを尻目に、魔術師サマは口元

をつりあげる。

「お前……目の前にいる俺をスルーしてクリフを指名しやがったな……」

「あれ、魔術師サマって文字読めたっけ？」

ププ、と笑ってみせると、魔術師サマはいつも通り眉間に皺を寄せて、こう言おうとする。読めるに決まってるだろ！このガキ、つて。

でも魔術師サマがそう言う前に、物凄い音が通りから響いた。クリフお兄ちゃんの小動物みたいに吃驚して、魔術師サマは窓に駆寄る。私は咄嗟に魔術師サマに向かって叫んだ。

「な、何……！？」

「……暴動だな。目の前の通りでやり始めやがった」

「えっ……えええっ！！」

クリフお兄ちゃんの叫び声はまた爆発音の中にかき消された。窓ガラスにヒビが入り始める。魔術師サマは舌打ち一つすると、私とクリフお兄ちゃんの襟首を掴んで部屋の外に連れ出した。廊下に出ると、他にも部屋に泊まっていた数人のお客さん達が集まっている。

それを見たとき、私ははっとサーシャお姉ちゃんのことを思い出した。

「サーシャお姉ちゃんは……っ！？」

「！」

魔術師サマはとりあえず私たちを通りから一番遠い場所にあるクリフお兄ちゃんの部屋に引っ張り込んだ。無理矢理背中を押された私は床に転がって、慌てて起き上がった。振り返ると魔術師サマが

部屋の窓を開けようとしてる。

私は表の騒ぎに負けなくらいの大声で叫んだ。

「で、出てくの!？」

「様子見だ。お前らここにいろよ」

窓に片足をかけて魔術師サマが外に出て行く。クリフお兄ちゃんが何かを言おうとするけれど、爆風に阻まれて、その姿を見失ってしまった。

表では爆発音や叫び声が木霊している。私は体を竦めて壁際にへたり込んだ。

食事を終えて通りへ出ると、宿の辺りが騒がしくなっていた。人々が駈けて行ったり、戻って来たりしている。爆発音を聞きながら、どうやら暴動らしいということが私にも分かった。どちらの勢力が押しているのかは分からないが、肌の色を見るかぎり、都に住むデイナー派の人間だろう。

私は辺りを見回し、一カ所に人垣が出来ていることに気付いた。デイナー派の集まりだろう。私はその輪の中に近づいていく。

「……どうするんだよ、これ」

「どうしようだったって、あんた考えがあんのかい？」

「悪いのはこいつだろう、放っておけば……」

人の群れをかき分けていくと輪の中央に子供の姿があった。肌の黒い、遊牧民の少女。まだ7、8歳くらいだろう。息が絶え絶えで、苦しそうに顔を歪ませている。

周りにいた人々はコソコソと呟きながらも、誰も少女に手を差し伸べようとはしない。

「……メテイスカカルヴァのガキだろ」

「道端に店を出してて、ケチをつけられたとか……」

「知らないよ、ワタシがやったんじゃないんだしね……」

周りの会話から察するに、どうやら道端に店を出していた遊牧民の少女が、ディーター派にケチをつけられ暴力を振るわれたのだろう。それを見ていたボルドー派の遊牧民達が怒りを露にした。つまりはそういうことだ。

バラバラと人垣が崩れてゆく。まるでここには何もなかったのだと言わんばかりの顔で。

「……」

私は一步、少女に近づいた。真つ黒な瞳が虚ろにこちらを見上げてくる。膝を折って首元の脈拍を確かめ、手を離すと彼女の体を仰向けにした。少女の体はすぐに力を無くし、息が途絶える。力を失った体はまるで別な生き物のようにならずしりと重かった。

通りの間をいくつもの視線が交差する。その視線はすべて私と、小さな屍に集まっていた。見て見ぬフリを決め込んだ彼らは、私の一挙一動を監視している。

私は少女の体を持ち上げると、細い路地へと歩き出した。もちろん追ってくる者はない。追ってくるということは同時にこのややこ

しい事態に関わるということだからだ。

路地は薄暗く、暴動とは真逆の神聖な静寂を保っていた。野良猫さえもいない、建物の影。人の姿は2人分しかない。私と……そしてもう1人。

「……その子を何処につれていくのか、聞いてもいいかな？」

「別に何処に連れていく気もありませんよ。あいにく私はクリフさんとは違うので」

路地の中央に、紫の瞳をした男が立っている。右目の下には泣きボクロ、腰に下げた剣は体を覆う布で隠されている。

私は少女の屍を彼の手に渡して言った。

「……まるでジャン・ユサクのような格好ですね、フリッツ・コー
ル」

私の目の前にいたのは、遊牧民のように頭まで黒地の布で覆ったフリッツさんの姿だった。彼は少女の体を抱き上げると、ニッコリと笑う。

「まあ、今はルクスブルムで先生をしているけれど、僕も遊牧民族の出だからね。時折こんな格好もするよ」

「……『こんな格好』で、野暮用ですか？」

私がそう言って口元をあげると、フリッツさんは頷いた。私は表情だけは笑いながらも心の中で呟く。この人はテレジアさん達よりずっと考えが読めない。

「なんだか大体のことは察しているように見えるなあ」

「……ええ。ただ、これから展開がどう転ぶかを見てみたいのです」

よ。私にとって有利に動くか、不利に動くか」

私は苦笑を浮かべる彼を見つめる。彼は肩を竦めると、あつちを見てご覧、と言って私が歩いて来た路地を示した。私はすつと顔だけをそちらへ向ける。静寂に包まれた路地に、馬車が近づいてくる音がした。

少女が倒れていた辺りを数台の馬車が通過する。一台、二台……そして三台目が通りかかろうとした時、人々の歓喜の音が聞こえてきた。馬車から顔を出しているのは歳でいうなら40前の紳士だ。身なりの良い格好に口髭が特徴的に見える。

フリッツさんは私の横まで来ると、低い声で呟いた。

「……彼が渦中の人物ディーター・エデュロイ。海の方この国アクロス出身の人間さ」

「アクロス……たしかルクスブルムの隣にある国ですね」

ディーターの姿が見えたのはほんの一瞬だった。やがて馬車が何台も後を追って消えていき、喧噪もすぐに遠のいていく。フリッツさんは少女の亡骸を抱え直すと、困ったようにため息をついた。

「……どうやらキミは頭が良すぎるみたいだ。勘が良いのはいいことじゃないよ。早死にしようからね」

「ですが私の生死を決めるのもまた、私の勘です。……つまりアクロスとルクスブルムが蔓んで、ネオ・オリを潰そうとしているわけですか」

私がそう言うと、フリッツさんは肯定の代わりに肩を竦めてみせる。

つまりはこうゆうことだ。海の方この国アクロス、そして傭兵学校を有する国ルクスブルムが、戦闘部族を持つネオ・オリを我が

ものにしようとして、政治に使えそうな男を送り込んできた。彼こそが現宰相のディーター・エデュロイ。

ディーターは国王が病床についた隙を狙って宰相という地位まで登り詰めた。彼は三大戦士のフリッツ・コールをルクスブルム傭兵学校に売ること、ネオ・オリの資金源を作らせ、今まで自分達だけで生きてきたこの国を、他の国の干渉なしでは生きていけないようにしてしまった。

(……王子がヒュペリオンを欲した理由はおそらくこれでしょうね)

ディーターの計画によって持ち直したネオ・オリ。そして部族の考えから離れ、都に住むようになった人々。このまま行けばネオ・オリは無条件で海の方こうにある脅威に従う国になってしまう。おそらく王子はその現状を知っていたのだろう。そう考えれば全てに合点がいく。

私はフリッツさんに視線を向けた。

「……それであなた方は、アクロスとルクスブルムの動きを窺っているというわけですね」

フリッツさんは困ったように笑いながら片手で顔を覆うと、路地の間から見える空に視線を向けた。

「僕らにとつて守るべきものは全て一緒なんだ。……きっとキミには分からないだろうけど」

フリッツさんの言葉に私は嗤う。

「ええ、分かりませんね。……私は、私のためだけに生きていますから」

そう、私の全てはあの『過去の預言書』、そしてその先にあるあの男への復讐のため。私にとって優先させるべきはたった一つなのだから。

フリッツさんはため息を吐いて、黒地の布を被る。顔が見えなくなると、くぐもったような声で彼は呟いた。

「……クリフ君は大変な人の仕事を引き受けてしまったようだね。できれば彼とは剣を交えたくはなかった」

フリッツさんは背を向けると、少女の亡骸を抱き上げたまま歩き出した。路地の闇の中に黒い布がゆっくりと溶けていくように見える。少女の死を嘆くかのように風が吹き抜けていった。

私はフリッツさんの背中に、一言問いかける。

「……フリッツ・コール。その少女は何処へ？」

彼は足を止めると、振り返ることなくただ空を見上げた。路地から見えるのはまるで別世界のように鮮やかな青い空。同じ風が吹いているのに、此処の路地だけは静寂と悲しみに包まれているように見える。

空を見上げながら彼は言う。

「太陽の下、誰も気付かない場所に埋めるんだ」

誰も気付かない場所。それはおそらく、あの少女の父も母も、兄妹達すらも気付かない場所なのだろう。おそらく少女の生死は誰も知らず、ただ姿を消したことにされる。もしこのことを部族の人間が知れば、再び暴動が起こり、犠牲者が出る。

「……この子は、これから『行方不明』になるんだ。人買いに連れていかれたのかもしれないし、間違つて砂漠に出て衰弱死したのかもしれない。家族は探しまわるだろうけど、きっと永遠に見つからない」

まるで平和へ捧ぐ生け贄のように……少女の死は隠蔽される。フリッツさんは顔だけこちらを向けて、私を見る。

「……キミも僕も、ここでは会わなかった。何も見なかった。そうゆうことだよ」

「……そうですね」

私が頷くと、フリッツさんはまた背を向けて歩き出した。私は小さく息を吐いて、もと来た道を歩き出す。通りに出ると数人の人の視線が突き刺さった。しかし私は何事もなかったかのように宿へと足を進める。

しばらくすると、宿の方向から誰かが走ってくるのが見えてきた。私はふと顔をあげ、向こうから疾走してきた相手に片手をあげた。

「ああ、フレイさん。……どうかしましたか」

フレイさんは私の姿を発見すると、不機嫌そうな地顔を更に歪ませて近づいてきた。

「……てめえ！人が心配して来てやったつーのに、『どうかしましたか』とは何だっ！」

今にも掴み掛かって来そうな形相に私はため息を吐く。あの程度の暴動で、私が心配されるような事態になるはずがない。

考えていたことが顔に出ていたのか、フレイさんはワナワナと怒

りに肩を震わせている。私はため息を吐くと、宿への道を歩き始めた。街のあちこちには暴動のあとが残っている。焼け焦げた煉瓦や、赤い血溜まりをつくる敷石。

「何もありませんでしたよ。……何も」

呟いた私の声は、真っ青な空の下に消えた。

第2章 4

過去の預言書。魔術師ファールンの手で創られし『過去を知る為の』預言書。原初の章、蒼天の章、万物の章、大地の章、終焉の章に分けられ、互いの分野を補うよう構成される。

現在蒼天の章はジェイロード・レヴィアスが所持。残りの章は各国が行方を追っているが、アクロス国において預言書と思しき書物が発見されたとの情報有り。

目下、確認作業を急ぐ。

- クレイジー・ガール -

街中を通る馬車がやがて閑散とした通りに入る。人の行き来が多い通りから離れ、人の気配も疎らな地域。愛想を振りまかなくても良いと判断したのだろう。ディーター・エデュロイは馬車から身を乗り出すのを止めて、一度大きくため息を吐いた。

隣に座っていた私はディーターに苦笑してみせる。

「さすがカリスマ指導者は存在感が違いますわ。国民の支持も圧倒的でしょう」

「ははは……貴女にそう言われると悪い気はしませんな」

データーはそう言いながら私の肩に手を回してきた。私は口角をあげつつ、膝の上に置いていた紙束に視線を落とす。人の上に立つ男というものは金と女には目がない。いくら紳士、カリスマを気取っていても所詮はただの動物でしかないということだ。

どちらにせよ後少しでネオ・オリの城に入る。下手なことは出来ないだろう。私は馬車の窓から外に視線を向ける。風が強いのか、街の向こうにある砂漠から砂が舞い込んでくるのが見えた。

「……それにしてもここは本当に乾ききった地ですこと。作物も育たないのでは？」

「ああ……ここは領地の殆どが砂漠ですからな。こんなところにいるとアクロスの新鮮な空気が懐かしく感じますよ」

馬車が小刻みに揺れるのを感じながら、私はもう一度街に視線を向ける。先ほど暴動があったのは馬車の中からでも分かった。ネオ・オリの部族は強靱な体と高い誇りを持つというが、それはどうやら本当らしい。

データーは私の体を引き寄せて言う。

「メテイスカ、ルヴァ、ゲイツ。いかがかな……貴女の願い通りの人間がここには揃っております」

「ふっ……アクロスの出した条件も中々ですわ。ですが……反抗する部族は不安要因、いかなさるおつもりで？」

猫のようにデーターに擦り寄り、そう問いかける。私の黒髪を弄びながら、この『紳士の皮を被った獣』は耳元で囁く。まるで甘い愛の言葉を囁くように。

「日照りが更に続けば、あの野蛮な人間達もすぐに白旗をあげます

……」

「日照り……」

私はそう呟きながら、ディーターの頬に手を伸ばす。そして頬から顎へと指先でなぞりながら、その甘い言葉の意味を問いかける。日照りは人工的に起こせるものではない。もしかしたら500年前のあの時代なら出来たかもしれない。でも、今となってはそれは夢のまた夢。

私は触れるか触れないかという近距離でディーターの顔を見つめる。早く言って頂戴、この世で私が一番欲している、甘い甘い言葉を。

「それは……『過去の預言書』……?」

「ええ……この国をアクロスのものとするために必要な力、ですよ……」

ガタン、と大きく馬車が揺れ、城門を通過する。調子に乗って唇を奪おうとするディーターの腕から私はするりと避けて、唇を舐めて笑ってみせた。

「……城に着きましたわ。続きは、また後で」

ふふつと笑うと、ディーターは少し不満そうな顔をしてため息を吐いた。私は膝の上の紙束を整える。馬車の前後にいた警備兵が扉を開け、ディーターと私をそれぞれ馬車から降ろした。私は馬車から降りると改めて辺りを見回す。

白い煉瓦が積み重なって出来たエントランス、そして真っすぐに城内へと続く敷石。もとは要塞と聞いていたけれど、意外と見栄えのする建物のように。

ふと視線を向けると、出迎えた兵士達の中に少し肌の色の違う3人の姿が見えた。警備兵達と話をしていたディーターは、彼らに気

付くとその中の1人に声をかける。

「フリッツ・コール。……帰って来ていたのか」

三人の真ん中にいた中肉中背の男が顔をあげた。優男のような微笑みで、近づいてきたデーターを見る。

「ええ……傭兵学校の長期休業期間なので、久しぶりに故郷に戻って参りました」

フリッツ・コール。私の知識が確かならば、三大戦士の1人で、ルクスブルムに買われた男だ。私はじつとその男の顔を見つめる。データーよりは利口な顔つきをした男だ。腰に下がった剣を見る限り、彼は剣士なのだろう。

ふとフリッツが私の存在に気付いて視線を向ける。データーは私を招き寄せると、私に彼を紹介した。

「ライラ嬢。こちらはネオ・オリ三大戦士の1人で、今はルクスブルムの傭兵学校で教師をしているフリッツ・コール」

「……初めまして」

フリッツはそう言って私に微笑んでみせる。しかし心の底から歓迎しているわけではないのだろう。瞳が笑っていない。ルクスブルムの犬に成り下がったかと思っていたが、どうやらそうゆうわけでもないらしい。

データーは続けて私をフリッツに紹介した。

「こちらはライラ・メーリング嬢だ。メーリング卿の妹君と言えばお前も分かるだろう」

「ご機嫌麗しゅう、フリッツ様」

私はドレスの裾を持ち上げて軽く会釈をする。しかし再び顔をあげたときの彼の表情は少し変わっていた。笑ってはいるが、驚きと焦りが微かに瞳の奥に混じっている。おそらくディーターなどでは気付かない微細な変化。どうやらこの男、利口そうなのは顔だけではないらしい。

「どうかいたしまして？」

「いえ……」

フリッツはそう言って、再び貼付けたような笑みを浮かべた。私は微笑み返しながら心の中で思う。この男、おそらくあまり良い人間ではない。少なくとも、私の……いえ、私たちの計画にとってはふと砂の混じった風が吹き込んできて、私は空を見上げた。砂が青空を斑に染めている。その向こうで光り輝く太陽の円の中に、黒く影をつくる鳥の姿が見えた。

私はディーターを見上げて言う。

「ディーター様、わたくし、少し馬車に酔ったようなので、国王陛下下の謁見まで休ませていただいてもよろしいですかしら……？」

「ああ……貴女には特別な部屋をご用意しておりますからな。部下に連れて行かせましょう」

ディーターは下心が透けて見せる笑いを浮かべて、自分の部下達を呼び寄せる。私は口角を上げてそれを見つめていた。

太陽が空の彼方で燦然と輝く午後。先日までの砂まじりの強風が収まった今日は、街をゆく人通りも多い。窓際の椅子に腰掛けて通りを見つめていると、まるで単純作業のように流されていく人ごみが、まるで誰かの意思でそうされているかのように見えてくる。

ふと廊下を走る足音が聞こえてきて、私は顔を顰めた。クリフさんか、フレイさんか……いや、メイもありうる。いくら私たちの他に客がないとはいえ、室内を走るのは遠慮がなさ過ぎる。

ノックもせずに私の部屋の扉が開いた。顔を出したのはメイ。

「さ、さささささ、サーシャお姉ちゃんっ！」

転がり込む勢いで部屋の中に入って来たメイに、私はため息をついた。

「メイ。廊下を走るのは止めて下さい。響きます」

「あ、ごめんなさ……じゃないよっ!! ところどころじゃなくてね、今メイすっごいこと聞いちゃった」

メイは私のベッドに飛び乗ると、私の目の前に座り込んだ。興奮した表情のまま、今さっき聞いた出来事を話し始める。どうやら情報屋という仕事を忘れてしまうほど驚いているらしい。金を払わずに情報が手に入るのならこちらは万々歳ですが。

メイは身振り手振りを交えて離し始める。

「この間の暴動の時に宰相の馬車が街を通ったんだけど、街の人の話によると宰相と一緒にの馬車に女の人に乗ってたんだって!!」

「……そうですね」

宰相の交友関係に興味はない。愛人がいようが妾がいようが、私には全く関係のないことだ。どうしてフレイさんといいいクリフさんといいい、世間話が好きなのだろうか。

私が興味無さげに窓に視線を向けると、メイは首を激しく横に振った。

「違うの！その女の人の、アクロスの方から来たらしいんだけど……もしかしたら、あのメーリング卿の妹じゃないかって、噂なの！」

ベッドの端に手をかけて身を乗り出すメイ。私は外の風景から目を離すと、メイに視線を向けた。

「……メーリング卿の？」

メイは激しく頷いてみせる。たしかに、そんな情報が入ってくれば多少興奮するのは仕方のないことだろう。少々大人気ない興奮の仕方だが。

私は口角を上げて口を開く。

「メイ。あの2人を呼んで下さい。……話があります」

「うっ……この間あんなことがあったばかりなのに買い出して……」

人通りが多くなってきた通りを僕はビクビクしながら歩く。人が多くなってくると、もちろんトラブルが起きる可能性も高くなってくるわけで……。挙動不審になりながら、僕はポケットの中から紙切れを取り出した。

僕がなぜ一人で歩き回っているのかというと、話はい数時間前に遡る。

「えっ……か、買い物ですかっ？」

この間の暴動ですっかり気弱になってしまった僕は、あんまり出歩かず部屋の中に籠っていた。なるべく食事の時以外は外に出ないようにしていたんだ。けど……。

目の前に立ちはだかったフレイさんは、僕の言葉に顔を顰めてため息を吐く。

「声裏返ってるぞ」

「だ、だだだだだだっ、あ、あああ危ないじゃないですかっ」

突き出された紙切れを目の前にして、僕はそう言った。この間暴動があったばかりなのに一人で外に出るなんて恐ろしすぎる。なるべく一人で外出しないようにしようと思っていたのに。

フレイさんは今にも怒り出しそうに僕を睨みつけ、そして何かを思い出したようにニヤリと笑う。

「まさか怖い、なんて言わないよな？……なんたってルクスブルム傭兵学校出身の『剣士サマ』だもんなあ？」

「っ！」

怖いです、という言葉が喉元まで上がってきたけれど、僕はすぐにその言葉を飲み込んだ。別に剣士の誇りがどうこうとかさうゆうわけじゃない。だって外に行くこと以前に睨みをきかせたフレイさんの方が怖かったから。

「……………うつつ……………頼まれた品物、何処で売ってるか全然分からないし……………」

僕は半泣きの状態で紙切れを覗き込んだ。そこに書かれているのはよく分からない文字の羅列。隣には丁寧に『薬草』とか『鉱石』とか書いてあるけど、何処で売っているのかはサッパリだ。どうしよう、このままじゃ帰れない。……………怖くて。

「ええと……………アルカネットと、カユプテ、孔雀石……………」

通りの端に立ち止まってメモされた項目を一つ一つ確認する。それにしてもこれって何に使うんだろう。魔法使うのにいつもはこんな使っていないし……………。

メモを片手に首を傾げていると、僕の隣を小さな少女が駆けていった。肩から下げた麻袋の中には夕食の材料なのか、野菜や果物が入っている。

(うつつ……………あんな小さい子でも怖がらずにお遣いしてるんだから、僕もちゃんとしなきゃなあ……………)

そんなことを考えながらポケットに紙を戻すと、さっきの少女が駆けていった方向から声が聞こえた。顔をあげると、道の向こうでさっきの子が仰向けに倒れている。角を曲がってきた人とぶつかつ

て転んでしまったらしい。

「あわわ……だ、大丈夫？」

僕は女の子に駆寄って膝や背中についた砂を払い落とす。ふと辺りを見回すと、さっきこの子が持っていた野菜や果物が散乱していた。野菜はまだ無事だけど、果物は割れてしまったり傷がついてしまっている。

立ち上がった女の子は呆然と散らばった果物の欠片を見渡して、徐々に顔を歪ませ始めた。

「だ、大丈夫だよ、全部駄目になっちゃったわけじゃないし……な、泣かないで？」

「う……ひつく、……つく」

頭を撫でてあげると、食いしばった唇とは裏腹に目尻からポロポロと涙が零れ落ちた。気持ちはよく分かるよ。帰ったらきつとお母さんが喜んでくれると思うているから、転んじやった瞬間にそれがなくなってしまう気がして悲しくなるんだ。

目尻を擦って地団駄を踏む少女。どうすればいいのかと辺りを見回した僕は、彼女の後ろに人影があることに気付いた。多分、この子とぶつかった人だ。

「ほら、ぶつかってごめんなさい、って言わない……と……っ!？」

僕は女の子の背中を叩いて、人影を見上げる。けれど半泣きで謝罪する少女の声なんて、途中から殆ど聞こえなくなってしまった。

「……」

僕を見下ろすその人は、綺麗な緑色の長い髪をしていた。整った顔つきに、透き通るような白い肌。ネオ・オリの都には似合わない、身なりの良い服装。

そう、彼女はシルヴィ。

「……………、外の……………発生……………」

シルヴィは僕の顔を見て、瞬きをした。瞬きをするうちに瞳の色が生氣を失う。そして寒気が走るくらい事務的な、機械的な口調で唇が動く。

「ネオ・オリにて……………ターゲット発見」

「！」

僕は咄嗟に剣に手をかけた。まさかこんなところでシルヴィに会うなんて、思いもなかった。シルヴィがいるってことは、アイルークさんやジェイロードさんも何処かにいるのかもしれない。どうしよう、1人じゃこの間の二の舞になる。

混乱する僕を目の前にして、シルヴィは続けて口を動かした。

「掃討の指示なし。……………指示があるまで待機し、通常モードに移行します」

再びシルヴィが瞬きをすると、瞳の色が戻った。さっきまでの人形のような表情から、年相応の女の子の顔へと変化する。シルヴィは呆然としている少女を見下ろし、足下に転がっていたハーブの束に手を伸ばす。

「……………これ、は……………何？」

首を傾げるシルヴィは、初めて出会ったときの口調でそう言った。

第3章 1

呆然とした女の子は差し出されたハーブの束とシルヴィを見比べて、ぽかんとした表情で首を傾げた。『お姉ちゃん、セージ知らないの?』と言って受け取ると、『あっちで売ってるんだよ』と言ってさつき走って来た方向を指差す。

シルヴィは女の子の指差した方向に視線を向けると、まるで生きている人間のように目を細めた。

- 機械の乙女 -

買い物用の麻袋を抱え直した少女は、シルヴィと話すうちに気が分が持ち直したのか、散らばった野菜や果物を拾える分だけ袋に詰め直して去っていった。バイバイ、と手を振って去っていく少女に、シルヴィは小首を傾げながらも同じ動作を返す。

「
……」

ぽつん、と残されてしまった僕たちは無言でいるしかなかった。いや、多分シルヴィは重い空気を感じ取ったとかそうゆう意味じゃなくて、ただ単に話す必要がないからかもしれないけれど。

でも意外なことに、黙ったまま言葉を探していた僕に声を掛けたのはシルヴィの方だった。

「……………どうしたの、クリフ」

「えっ……………」

どうしたの、って言われても。だってシルヴィはジェイロードさん側の人間……………いや、機械人形であって、エレンシアの時は急に殴られて気絶させられたうえに、操られるなんて酷いことされたわけだし……………。

どうすればいいのか分からなくなる僕に、シルヴィはもう一度首を横に傾げた。その動作といい、表情といい、僕らを襲ってくる殺人人形とは全然違う。

僕は悩みに悩んだ末に、一番気になることを単刀直入に口にすることにした。

「い……………今は……………攻撃、してこないの？」

僕の言葉にシルヴィは当然のことのように言う。

「シルヴィ、別任務中。クリフはターゲットとして登録されてる。

けど、強襲の指示はなし。だから……………襲わなくてもいいと、判断したの」

「た、ターゲット……………」

それってつまり僕やサーシャさん、フレイさんは排除対象として認識されてること……………だよな……………？

シルヴィは真っ青になる僕を完全に無視して続ける。

「あと、ターゲットの排除優先順位は、戦闘能力順にサーシャ・レ

ヴィアス、フレイ・リーシェン……2つ飛んでクリフ。一番最後」
「ふ、2つ飛んで、しかも最後……」

嬉しいのか悲しいのか、僕はがっくりと肩を落とした。シルヴィ達を相手にするのは凄く……物凄く怖いんだけど、戦闘能力順で一番最後。それってつまり、僕って排除してもしなくても変わらないってこと？……あれ、でも。

「2つ飛んでって……どうゆうこと？」

僕は顔を上げてシルヴィを見る。僕とフレイさん達の間には2人いるって言うってんだけど、それって誰のことなんだろう。シルヴィは僕の言葉に少しだけ眉根を寄せる。ほんのちよつとだけど、聞かれたくないことを聞かれたときのヒトの表情。

「……『内部情報の漏洩に禁止処理が掛かっています』」

聞かないでくれという表情に、僕はなんだか悪いことを聞いたよ
うな気になってしまった。

「あ……ごめん」

「……。……シルヴィ、任務に戻る」

シルヴィはそう呟くと、僕に背を向けて歩き出した。緑色の髪が砂の混じった風に吹かれて、赤茶けた街中にいっそう強い彩りを放っている。きつと通りを擦れ違う誰もが、シルヴィのことを機械で出来た人形だなんて気付かないに違いない。

僕はただじつとその背中が通りを右に曲がっていくのを見つめる。頭の何処かで、今剣を抜けばもしかしたら……なんて考えが過ったけど、本当に『過った』だけ。実行に移そうなんて考えなかったし、

そうしたいとも思わなかった。何故だろう。フレイさんやサーシャさんなら迷わずそうするはずなのに。

「……」

砂が撒き上がって、一瞬視界を覆う。そしてもう一度目を開くと、そこにシルヴィの姿はなくなっていた。

風がゆっくりと舞い上がってくる。ネオ・オリの応接室の前にある空中庭園は今日も平和に草花が咲き誇っていた。その真ん中には絵になるような美女が1人、佇んでいた。

混沌を思わせるような漆黒の瞳と長い髪、白い肌を包むのはまるで喪服のような黒いドレスだ。妖艶な空気を身にまとい、眼下に広がる砂漠を見つめている。

「……」

ふと女は顔をあげた。すると上空から風が巻き起こり、次の瞬間、太陽を浴びて輝いていた空中庭園に影が落ちる。女は上空を見上げ、影をつくった原因が庭園に舞い降りてくるのを待った。

女……いや、ライラ・メーリングは言う。

「ふふ……おいで、私の可愛い子」

突風が庭園の花々をざわめかせる。やがて空から鷹のように大きな鳥が舞い降りてきた。しかしそれはただの鳥ではなく、光沢のある刃のような翼と、長い尾を持つ鳥だった。羽を羽ばたかせて庭園に着地すると、その翼に触れた草が真つ二つに切れる。

彼女は手に持っていた一切れの紙をくちばしに加えさせると、長い髪を耳にかけて呟いた。

「さあ、それを持ってお行きなさい。砂漠を越え、海を越え……私たちの『微睡みの庭』へ」

鳥は彼女の言いつけ通り、庭園の手すりに足を乗せ、そこから眼下に広がる砂漠へと舞い降りた。急降下した大きな翼が風を読み、くるりと大きく円を描いて砂漠の彼方へと飛んでいく。光沢のある翼は太陽の光に反射して、さながら伝説や神話の大鷹のようだ。

「……」

スツとライラ・メーリングは振り返る。考えの全く読み取ることの出来ない艶のある微笑みで一度だけこちらを一瞥し、そしてまた砂漠の向こうへと視線を向けた。強い風が彼女の背中から砂漠へと風向きを変えている。

僕は回廊の影に隠れ、そして小さく安堵のため息をついた。職業柄尾行や監視は上手いつもりだが、どうも彼女は勘が良すぎる。まるで数日前に街中で会ったあのガンスリンガーの少女のように。

(気付かれたんじゃ仕方ないなあ……)

監視を切り上げようと、応接室とは逆の方向に歩き出した時、ふ

と階段からフェオール王子が上ってきた。何かを持っていたけれど、僕の顔を見ると慌ててそれを隠す。

「な……何をしておる、フリッツ」

「……気分転換に歩き回っていただけです。王子こそ、何故ここに？」

僕がそう言うと、王子は少し困ったように顔を顰めた。

「よ、……余は、こ、この間父上から頂いた時計草の様子を見に、だな……」

そう言いながらも後ろ手に隠したものを見せないように横歩きをする王子。思えば数ヶ月前、王子が床に伏した国王から庭園で育てることの出来る草花の種を買ったという話を聞いたことがあった。時計草とはまた、王子にしては渋い趣味の花だけねど。

「そうですかぁ……」

カニのように横へ横へと逃げていく王子。しかし時折足の間からリボルバーがちらついていた。曲がり角まできて庭園へ逃げようとする王子に、僕はその襟首を掴む。クリフ君を捕まえるときの要領で。

「なっ……何をするっ」

「はいはい、逃げないで下さいよー」

襟首を掴んで足止めし、くるっと王子の体を回す。後ろ手に隠していた銀色の銃身がすぐに僕の目に入ってきた。庭園側から差し込む光にリボルバーが鈍く反射している。

僕はそれを見て顔を顰めた。これは……あのガンスリンガーの少女のものだ。初めて会った時に腰のホルスターに納めていたのを覚えてる。

「王子、どうしてこれを……」

まさか盗んだわけではないはずだ。彼女はこれを盗られて気付かないような人間ではない。

王子はバツの悪そうな表情を浮かべて僕を見上げた。しかしすぐに視線を逸らす。理由を口に出来ないということはやはり、僕らに言えないような『何か』を考えているのだろう。

「べ……別に。余の勝手だ」

「勝手も何も、それは扱い方によっては非常に危険な武器です。こちらに渡して下さい」

あの武器のことは詳しく知らないけれど、命中率が剣や槍に比べて劣る代わりに高い殺傷率を持つと聞いたことがある。火薬を原理の基本として利用しているから暴発の危険もあるし、王子が扱えるような代物じゃない。

手を差し伸べる僕に、王子は顔を顰めて顔を逸らした。

「……渡して下さい、王子」

僕は王子の目の前に手を突き出す。しかし王子は顔を逸らして後ろへと後ずさった。

「王子」

「……っ！」

王子の夕焼けの色の髪が左右に揺れた。そして次の瞬間、差し出した僕の手がバシツと音をたてて弾かれる。王子は僕の顔を見上げ、きつく目を閉じて叫んだ。

「お前達に何が分かるっ！このままではっ……このままではあの男に父上の国を奪われてしまうのだぞ!？」

はね返された手から痺れのような痛みを感じた。痛覚はすぐに退いていくのに、痺れのような鈍い感触だけはじんわりと手の中に広がってゆく。まるで何かの古傷のようにその感覚は消えない。

王子は僕を睨みつけて言う。

「お前は……あの男の手中に嵌って、この国をアクロスのものとなされてしまっても良いのか!？」

「……………」

その一言に、僕は顔を顰めた。それは僕ら三大戦士と、今は床に臥せている現国王と数名しか知らない情報だ。アクロスはディーターの人気を利用し、徐々にネオ・オリとの接点を増やしている。現国王が病に倒れている間に権力を増し、実質的な支配者に上りあがらせてしまおうという目論みなのだ。

しかし、そうと分かかっていても、今のネオ・オリには対抗する術がない。対抗できる人間が……いない。

「父上は病で動けぬ、兄上は気が弱くてディーターに文句の一つも言えずにいる！何も出来ないのだと皆、そう言っておる……だが、余はそう思わん!！」

王子はリボルバーのグリップを握る手に力を込める。橙色の髪が

微かに揺れ、王子は僕を見上げた。そして僕の服の裾を掴んで、縋るような瞳を向ける。

「データーに敵う人間がないのなら、つくればよい。余は……
余は、父上の国を守る為ならば、この命だって惜しくはないぞ」
「王子……」

まだ幼い瞳の奥に感じる、強い光。何よりも眩しくて、太陽国と呼ばれるこの国に最も相応しい強く逞しい色だ。ずっと昔、同じ部族の半分ボケた老人達が何度も何度も同じ話を聞かせてくれたことを僕は思い出す。太陽神バルト口は形としては見えなくなってしまうけれど、永遠にこの地に生き続けているのだと。それは部族だからとか、王族だからとか、剣士だからとか、そうゆうことじゃない。

それは、この地に生きる人間の『誇り』。太陽表されるその誇りを、歴代の国王は持ち続けていた。国に殉じる覚悟と共に。

「……」

そう、だから僕たちは……いや、歴代の三大戦士達は折り合いの悪かったこのネオ・オリの国王の覚悟と誇りに臣従した。

僕は小さくため息をついてもう一度右手を差し出す。

「……王子がもう少し早く生まれて下さっていたらと、僕はそう思いますよ」

「……余を子供だと言うのか」

顔を顰める王子に僕は笑った。王子は気分を害したのか、唇を尖らせている。それでも先ほどのような苛立ちではなく、純粹に子供扱いされたことが気に食わないようだった。

僕は言う。

「ええ、まだ王子はお子様です。……分かっておいでですか？貴方の武器は古の機械ではありません」

風が何処からか舞い込み、城の中に澄んだ風が駆抜けていく。首を傾げる王子の目の前に僕は片膝をついた。階段の窓辺から斜めに差し込む光と影が僕たちを包む。

言葉も何も必要ない。……全ては、それだけで十分だった。

「……なんだよ、買い物途中で呼び出しやがって」

サーシャの部屋に入った俺は、苛立ち紛れにそう呟いた。近くにあった椅子に腰を下ろし、舌打ち一つして目の前のサーシャに視線を向ける。

街で買い物をしていた俺は、最後に煙草を買い足そうとしているときに運悪くメイに見つかった。隣でギャース力騒ぐから結局煙草を買わずに戻るハメになったのだ。あのガキ、せめて買い終わるまで待てないのかよ。

サーシャは俺の不機嫌な顔を見て顔を顰める。

「お金もないのによく買い物に行けますね」

「うっ。それは……あ、あれだ。俺も多少は金のやりくりくらい出来るっつーことだ。はは、ははは……」

視線を逸らして笑うと、サーシャは深くため息を吐いた。やべえ、もしかしてテレジア達からの報酬くすねたことに気付いたか!?

「……そ、それより話ってなんだよ」

話を逸らそうと、俺は本題を持って来ることにした。サーシャは呆れたような目で俺を見ていたが、咳払い一つして話し始める。表情は先ほどと打って変わって、神妙な面持ちだ。

「……フレイさんはメーリング家をご存知ですか」

「あ?」

俺が首を傾げると、サーシャは荷物の中から地図を取り出した。ここいらじゃ手に入らない、あの貴重な世界地図だ。とはいえかなりの年代もので、最近では傷みが激しい。

サーシャはそれをテーブルの上に広げてみせる。そしてネオ・オリの位置を指差すと、そこから人差し指でゆっくりと海を渡る。

「海を挟んで真向かいにある国。これがアクロス国です。小さいうえに土地も痩せていますが、かなり豊かな国です」

サーシャの言葉に俺は顔を顰めた。狭い土地で土壤も良くないのに豊かっているのはどうゆう意味だ。俺の知る限り、アクロスは川が流れてたり、漁業に秀でているわけでもない。

考えが顔に出ていたのか、サーシャは目が合うと軽く頷いた。

「……もちろんアクロスに国を豊かにする産業は何もありませんよ。しかしここには沢山の人が行き来します。殆どは商人ですが、国が率先して輸入しているものがあるんです」

サーシャの指先が東南へと動く。山を越えた先には何もない平野が書かれていた。山に囲まれた、広大な平野。俺の知識が確かならば、ここは昔、かなり大規模な国があった場所だ。もっとも今ではその面影すらなく、小さな街が点在しているだけになってしまったが。

地図を覗き込みながら考える俺にサーシャは言う。

「それは、この一帯で栽培される『リル・イン』……」

指先が平野を囲む山々をぐるりと一周した。

「……『麻薬』です」

第3章 2

『リル・イン』。麻薬の一種で、トウアス帝国が栄華を誇っていた時代、支配下に置かれた国々の重労働者達が服用していたとされる薬物だ。決められた使用頻度を超えると恍惚状態に陥り、それにハマると精神的に依存し始める。治療方法は薬を絶つより他にない。少なくとも、今現在は。

- ファントム -

「メーリング家はトウアス帝国時代から続く貴族の家柄。帝国の支配下に置かれていた頃は多くの奴隷を持ち、かなり厳しい労働条件の下、領地の農園で働かせていたと聞きます。……『リル・イン』も多用されていたということですよ」

私は地図に描き込まれた平野に視線を落とした。思えばこの辺りは旅をしたことがない。広大な平野が広がっていると聞くが、麻薬のことを知る旅人達は避けて通るルート。カタリナと旅をしていた頃も、この周辺に立ち寄ったことはなかった。

「帝国という抑止力を失った後は農園を縮小し、薬の栽培を中心に切り替えました。……メーリング家とはそういう関係の人間なので

すよ」

「フレイさんは顔を顰めて言う。」

「……んじゃあ何で、そんな奴が此処に？」

「……。これは私の推測ですが……」

私は地図をたたみながら話し始める。

「メーリング家は奴隷を数多く従えさせていた。しかし過酷な労働条件の下で死者の数も増加し、人手不足に陥る。近隣のアクロスから労働者を募るにしても、相手は『リル・イン』の輸入先であり、そこから労働者を連れてくるには障害が多すぎる。」

「そこでメーリング家が目をつけたのが、海を挟んだ向こうに広い土地と部族を持つネオ・オリエント。」

「おそらくアクロスの思惑にメーリング家が一枚噛んだ形なのだと思います。裏でお金を出しているのはメーリング家だと思って間違いないでしょう」

「メーリング家は今、2人の兄妹によって成り立っている。それが当主ラフィタ・メーリングと、妹のライラ・メーリング。詳しいことは殆ど伝わってこないが、2人はまるで双子のように同じ顔をしているのだという。」

「地図を丸めて荷物の中に戻すと、フレイさんは納得のいかないうな表情を浮かべていた。何かを考えているのか、こちらを睨んでいるのか、いまいち判別しづらい顔だ。」

「……どうかしましたか？」

私の顔をじっと見つめながらフレイさんは言う。

「メーリング家とネオ・オリのことは理解したけどな……まさかお前、それだけで呼んだわけじゃねえだろ？」

「……随分利口になりましたね」

笑いながらそう言うと、フレイさんは眉間に皺を寄せてこちらを睨みつけてきた。私は椅子から立ち上がると、部屋の窓の前に立つ。眼下の通りでは人の往来が少なくなり始めた。疎らになり始めた人影は、間もなく訪れる夜の静けさから逃げるように何処かへと消えていく。

「メーリング家は麻薬によって得た収益でかなりの財産を持つ貴族ですが……、彼らはその権力によって十数人の冒険者達を手駒に持つ、『過去の預言書』争いの首魁です」

「！」

窓を開くと、夕暮れの香りのする風が吹き込んでくる。私は窓枠に背をもたれて、椅子に座るフレイさんを振り返って頷いた。

「メーリング家は『過去の預言書』を求める数多の権力者達の中でもトップクラス。……私は、ジェイロードと同等に注意を払わなければいけない人間だと思っています」

差し込む夕日がテーブルの足を照らす。私の影が風に揺れて、風の音が部屋に響く。

「あいつらと同等って……そんなに危険な人間なのか？」

「ええ。メーリング家に見える冒険者達とはち合わせしたことが何度かありましたが、どれも……」

私はふと足下に視線を向ける。形のないものを口にするのは難しい。当てはまる言葉は見つからず、少しでも意味の近い言葉を探すが見当たらない。

ありきたりな言葉は使いたくはないが……

「どれも……そうですね、『狂犬』のようなものでした」

「フレイさんが首を傾げる。それもそうだろう、私は横目で窓の下を見下ろしながら付け加える。」

「凶暴、粗暴という意味ではありません。まともな人間ではありませんが、考え方がイカれている……ああいった『狂犬』を飼いならすことが出来るのは、同じ……いえ、更に凶悪な『狂犬』だけです」

サーシャお姉ちゃんから2人を連れてくるように言われてから、かなり時間が経っちゃった。魔術師サマは煙草屋さんの前ですぐに見つかったんだけど、クリフお兄ちゃんは全然見つからない。もう、買い物くらいで一体どこまで行っちゃったんだろう。

メイは日が傾き始めた通りを曲がってちよつと細い路地に出ると、建物の影で暗くなっていた裏路地の方にクリフお兄ちゃんの姿を見つけた。

「あつ、いたいた！クリフお兄ちゃん！！」

こっちに背中を向けているクリフお兄ちゃんは、メイの声に吃驚して振り向いた。両手には抱えきれないほどの沢山の紙袋。クリフお兄ちゃんは袋の隙間からメイを見て首を傾げた。

「あ……あれ、どうしたの？」

「メイはお兄ちゃんを呼びに来ただけ……クリフお兄ちゃんこそ、どうしたの？そんなにいっぱい買い物しちゃって……」

メイはクリフお兄ちゃんの持っていた買い物袋を2つ受け取る。

……う、結構重いよ、コレ。お兄ちゃんが普通に持ってたからお手伝いしようと思ったけど、宿まで持っていけるかな……。

「これはフレイさんの買い物の手伝いだから……あ、重いなら片方だけでいいよ」

クリフお兄ちゃんはそう言って重い方の袋をメイから取り上げる。クリフお兄ちゃんって臆病で、いざとなったときに頼りないけど、こうゆうときとっても優しいんだよね。メイにお兄ちゃんが出来たような気分で、とっても嬉しい。

買い物を済ませたクリフお兄ちゃんと並んで歩きながら、メイは言う。

「ありがとう。……でも、魔術師サマの買い物って、コレ一体何に使うの？」

「うーん、それは分からないんだけど……」

これ買ってきてって言われたんだ、と買い物メモを渡されて、メイは首を傾げた。あんまり字は読めないんだけど、なんだかいつ

ばいメモされてる。これ全部買ってこいって魔術師サマって人使い荒いよね。自分はそんなに買い物してなかったのに。

大きな通りに出ると、さっきよりも人通りが少なくなっていた。夕日が更に濃い色が変わって、地面に2人分の長い影が出来る。メイは袋を抱え直して、ふと道の向こう側に集まっている人だかりに気付いた。

あつ、もしかして井戸端会議かな。もしかしたら何か面白い話が聞けるかも。

「お兄ちゃん、ちよつとここで待ってて!!」

「えっ、ちよつ……」

メイは買い物袋を持ったまま、道の端で会話をしているおばさん達のところ近づいていった。こつゆう井戸端会議って、色んな噂が飛び交ってるから面白いんだよね。お母さん曰くガセが多いらしいけど、中には何処から聞いてきたんだろつてくらいの情報が入つてたりするんだ。だからこつゆう井戸端会議を見かけると近づいていきたくなつちゃう。魔術師サマなんかに言ったら『お前、それ職業病だろ』とか言われそうだけど……。

「アナタ、この間の暴動の時、大丈夫だった？」

「ああ、私と息子達は家の中にいたから良かったんだけど、旦那がねえ……」

井戸端会議は5、6人の女の人で行われてた。みんな子持ちって感じ。2人は後ろに子供を連れていて、4歳くらいの男の子達がお母さん達の話に興味なさそうに遊んでる。

メイがおばさん達の声が聞こえてくる場所に立ち止まると、井戸端会議を聞いていた1人が口を開いた。

「……そういえば、聞いた？次期国王様の話」

「聞いたわよ、国王様ったらボルドー王子に王位を譲るんでしょう？」

(！)

ボルドー王子って、たしかフェオルの一番上のお兄さんのことだよ。部族寄りの考え方だけど、ちよつと優柔不断っていうか臆病っていうか……あんまりネオ・オリの国王に向いてない人。

おばさんたちは宰相派なのか、口々に文句を交わしてる。でも、1人が何かを思い出したように手を叩いた。

「あ、でもアタシが聞いた話だと、一応王位をボルドー王子に譲るけど、その後は全部王子に一任するらしいわよ」

「一任つてことは……」

「じゃあ……そのままボルドー王子が『他の誰か』に王位を預けることもあるってこと？」

『他の誰か』ってつまり、あのディーターって宰相のことだよな……。そんな、ボルドー王子じゃ、ちよつとディーターに脅されただけでもすぐに王位を譲っちゃいそうだよ。そうじゃなくても『和解』を申し込まれて簡単に引き受けちゃったって話もあるし……。

「どつしたの？」

さっきまで反対側にいたクリフお兄ちゃんが、いつの間にかメイの後ろに立っていた。徐々に逸れていく井戸端会議から目を離して、メイはなんでもないうつて首を横に振る。お兄ちゃんは首を傾げてるけど、メイは荷物を抱えて歩き出した。

「……行く、サーシャお姉ちゃんが待ってるよ」

「?……っん」

顔をあげると、橙色の夕日がお城の向こうに消えようとしている。その眩しい色にフェオールのことをちよっとだけ思い出した。

フェオール……大丈夫かな……。

太陽が沈むと夜になる。夜になれば生きとし生けるものの殆どは眠りにつき、野生動物が砂漠を徘徊する。もともと野生動物だった『人間』は、他の動物から身を守り、自身の食料摂取量を少なくするために眠ることを覚えた。

夜になると街の灯は消え、城の光だけがぼつかりと浮かんで見える。私は城に近い通りの建物の上でじっとそれを観察している。

「……深の刻、異常なし」

私はそう呟きながら、『頭』の中のデータファイルにそう書き込んだ。『頭』と言っても『記憶』という意味ではない。私……シルヴィ・フェブラインことWP25ML661型はデータを記憶するメモリが頭部に設けられており、『頭に記憶する』という点では人間と一緒にだが、その作業工程は全く異なっている。

「……」

ふと顔をあげると、空には月が出ていた。明日はおそらく快晴だろう。私の中に設定された予測機能がそう告げる。けれど……『天気』は、そう上手く動いてはくれない。予測を越えるような大雨や、嵐が突如として現れる。そうゆうとき……私はとても『分からなくなる』。

「『分からない』……」

私が最初に覚えた言葉は『はい』と『いいえ』だった。それは1と0であり、生と動であり、有と無だった。その2つが私の全てだった。

そしてその後に『どちらでもありません』という言葉を知えた。ジエイが言ったのか、アイルークが言ったのかは分からない。それはとても大切な言葉で、それを覚えることよって私が旧式のオトモダチ達よりも成長した証になるらしい。

でも私には未だにそれが理解出来ない。0と1の間に無数の数が存在するのと同じだと、そう教えられても分からない。

『……内部情報の漏洩に禁止処理が掛かっています』

『あ……ごめん』

月を見ていると、つい6時間と32分前に聞いたクリフの言葉が頭の中をリピートした。『ごめん』とはごめんなさいという意味であり、申し訳ありませんや、すみませんと同一の言葉。相手に不快な行いをしたとき、謝罪の意味で述べる言葉。

でも……なぜクリフは『謝罪』をしたのだろう。私は禁止処理が掛かっているという事実を述べただけ。多少表情は変化するが、私には基本的に『不快』という感覚が発生しない。発生するのは攻撃を仕掛けられた時のみ。しかしそれも不快という感覚より、自己防

衛のためにインプットされた、いわば条件反射。

「……分からない……」

天候のように、人間も時々『分からない』。ジェイやイルークの傍にいても時々そう思う。そしてそう思えば思うほど、頭部のデータファイルにエラーが生じてくる。エラーが溜まりに溜まると、エレンシアの時のようにシャットダウンしてしまうこともある。

「……」

シャットダウンしないためには、別なことに頭を切り替えることだと、いつかイルークがそう言っていた。私はその言葉通りに再び思考を切り替える。現在の任務……ライラ・メーリングの監視へ。

「……初の刻、異常なし」

そう呟いた時、一瞬ネオ・オリの城から強い風が吹き付けた。私は眼球に傷をつけないように目を瞑る。これが壊れると行動の際にとても不自由になるからだ。

風はしばらく吹き続け、やがて過ぎ去っていく。しかし、私の背後にはまるで風が落としていったかのように、さきほどまでなかった一つの気配が残されていた。

「……ふふ、お久しぶりですね、『緑のお人形さん』」

「！」

ターゲットの気配に私は振り向いた。声のする方向……通りを挟んで反対側の、建物の屋根に黒髪の女が立っている。それは漆黒のドレスに身を包んだライラ・メーリング。右手を絡ませているのは

大鎌・メタトロニオス。

三日月のように振り返った刃が月夜に光り輝いている。

「私の可愛い子供達が教えてくれたの。貴方達は本当に勘が良くて、行動も素早いわ。……貴方達が部下なら沢山可愛がって差し上げるのに」

それが残念で仕方ないですわ、とライラは言う。私はその言葉を聞き流して戦闘態勢に入った。ライラ・メーリングは数多くの冒険者達を雇っている『上の人間』だが、その戦闘能力の高さは私の頭の中にしっかりとインプットされている。

「……初刻、ターゲットと接触」

サーシャ・レヴィアス、フレイ・リーシェンと同等に警戒順位の高い人間……それがライラ・メーリング。私は右手で素早く拳を作り、呟いた。

「……任務遂行のため、攻撃に移ります」

第3章 3

微睡むような陽光が差し込む屋敷の一室。長い尾を持つ銀色の鳥が優雅に屋敷の中へと降り立つ。カーテンはふわりと舞い上がり、窓の向こうに広がる緑の田畑が風に靡いた。鳥はくちばしに加えていた紙をテーブルの上に置くと、まるで導かれるように鳥かごへと入っていく。

やがて部屋の扉が空き、1人の人間が入ってくる。鳥かごに微笑みかけた後、彼はテーブルの上の紙を手にした。

- 鎌と蛇女 -

私はすつと体を傾けた。攻撃パターンは特殊なシステムファイルによって定められているが、状況に応じて臨機応変に変化することが出来る。

旧式のオトモダチは武器を使う戦闘に特化しているが、私は関節の動きを利用して体術を得意としている。それは体術を会得することで、次に作られるであろう次世代の殺人人形の攻撃の幅を広げるためだ。

「……………」

私は勢いをつけて屋根から屋根へと飛び移った。通りを挟んで反対側のライラ・メーリングも私と平行して走り出す。この通りが私には一番の問題だった。この距離を跳躍すれば確実に隙が出来る。ターゲットは私を攻撃するに足るその時間を逃しはしないだろう。私は走りながら下の通りを見やった。

「……………」

慣性の法則が働く方向とは真逆に片足を差し出し、私は屋根と屋根の間に体を傾ける。細い路地の闇の中に体を滑り込ませると、ターゲットの足も止まった。

ターゲットは三日月のようなメタトロニオスを一振りすると、闇色の瞳を細めた。

「……………ふふ……………」

風が一瞬強く吹き付ける。煌煌と光り輝く月が薄い雲の間に隠れ、僅かな間ではあったが辺りが暗くなった。私は闇の中から一步、右足に力を込め、踏み出す。それは通常の人間では到底真似の出来ない、一瞬の高速移動。リボルバーが弾丸を押し出すあのスピードで私は駆け出す。

音速のスピードにシステムが切り替わる。人間の反射よりも更に早く、私は路地を横断してライラ・メーリングの後ろに回った。

「……………超音速状態、攻撃パターンFに移行」

途切れ途切れに月が光を差し込み始める。跳躍してターゲットの頭上から奇襲をかけようとした。その時。

「……………！」

微かに、ターゲットがこちらを見た。横目で、微笑むような笑みを浮かべて。

頭の中で危険信号が鳴り響く。相手に行動を読まれた。いや、そんなはずはない。超音速状態の私の姿を確認出来る人間はいない。いない、『はず』。

フルで回転する、私の予測機能。この状態から軌道を変えることは出来ない。着地するまで攻撃パターンを変化させることは不可能。

「ふっ……！！」

私はターゲットの懐に飛び込むと、左足を軸にして相手の体を蹴り上げる。体の中に溜まった空気が力と共に吐き出される。人間の、あの骨と筋肉と脂肪を蹴りあげた感触が足に伝わってきた。だが、足りない。攻撃を上手く流された。

体勢を立て直し、今度は左の拳を鳩尾に叩き込む。ターゲットの黒髪が揺れ、攻撃の勢いと共に体が後方へと弾き飛ばされた。

「……」

私はその場でターゲットを睨む。私の脳裏には相手の状態がデータとして描き込まれている。生死の状態、体温、心拍数、怪我の状態等。そして同時に相手の攻撃データも記録している。

しかし。

「……ふっつ、見た目より積極的なお人形さんですわ」

「……っ！」

弾き飛ばされたライラ・メーリングが体を起こした。しかしその足取りは変わらず、驚くことに私のデータは彼女と接触した状態か

ら全く変化を見せない。体温も、心拍数さえも変化がない。普通の人間ならば、否応無しに乱れを生じるはず。

（何故……？）

データは理解不能を示している。データが理解不能ならば、『私』にも『分からない』。何故、彼女の身体に変化が見られないのか。何故、彼女はあノ攻撃を受けても傷を負わないのか。

（何せ、どうして……）

「……………」

私は低く呻いた。左手で額を押さえる。いけない、ここでエラーを起こしてはいけない。シャツトダウンしてしまえば、どうなるか分からない。自動回復を待つより先に破壊されるか、それとも……。ライラ・メーリングは大鎌を空中で回転させると、妖艶な表情でにっこりと笑って見せた。

「お人形さんは遊んであげてこそ、その存在を確かにするもの。……そろそろ可愛がって差し上げようかしら」

ずっと黒のドレスが風に靡いた。次の瞬間、メタトロニオスの刃先が月光に煌めく。私は咄嗟に後方へと跳躍した。私のいた屋根に刃が突き刺さる。石材で出来ているはずの屋根がまるで油の塊のように刃先を奥深くまで差し込んでいる。

「あらあら……………」

ターゲットは軽い動作で屋根から大鎌を抜き取った。そして品の良さそうな笑顔には似つかわしくないほどの戦い慣れた動作で、大

鎌を構える。

「逃げてはいけないわ。貴女にはとても興味が湧いてしまったの。……ねえ、お人形って泣けるのかしら？」

ニコリと微笑んだ笑みが、まるで冷たい剣の刃のように月明かりに照らされた。そして次の瞬間、彼女の体が私の視界の中で大きくなる。

接近された。

「っっ……っ！」

大鎌の輝きが、風を切る音と共に私の思考を奪い取った。頭部のシステムが左腕の『痛み』を伝える。痛い。まるでコードがショートしたかのような、熱さを伴う痛み。

私にとって幸いだったのは、危機回避能力がエラーの中でも作動したことだった。私は更なる攻撃を避けるため、ターゲットから距離を置く。

腕に視線を落とすと、皮膚の下からコードがのぞいていた。半分がごっそりと切られてしまっている。私は小さな火花を散らす腕を右手で隠すと、ライラ・メーリングを睨みつけた。

左手の指先が動かない。何かを求めるように痙攣する指先も、やがて本当の人形のように動かなくなった。発生した『痛み』のデータは更に私に苦痛を与えてくる。

「っ……っ……っ！」

ターゲットは私の様子を目にすると、きょとんとした表情を浮かべた。それがやがて蔑むような笑みに変化していく。

「あら……冗談で言ったつもりだったのに、本当に泣けるのかしら。レヴィアス氏って意外とロマンチストなのね、人形に『痛み』の感覚まで教えるなんて……」

「……」

人工皮膚を押さえ、私は体勢を立て直す。言葉の裏を読み取るのはまだ得意ではない。それでも、分かる。この表情に、この言葉。ライラ・メーリングは……この『女』は、ジエイを馬鹿にしてる。ジエイを……私のマスターを。

「戦うだけの人形に『痛み』なんて、必要ないんじゃないかしら……
…メイドや奴隷じゃないのだから。ふふっ」

痛みとエラーで私の思考が邪魔されていく。けれどその他に、もつと『私』を邪魔するものがある。この『女』が視界に入る度、嘲笑のような笑い声が聞こえてくる度に広がっていく何か。痛みもエラーも何処かへ押しやってしまっ、真っ黒で恐ろしいもの。

「……わ、ないで……」

「……？」

円形の月が空に浮かぶ。私はゆっくりと立ち上がり、戦闘態勢を解いた。左腕を押さえたまま、ターゲットを睨みつける。何故だろう、機械とコードしかない胸の中がモヤモヤする。まるで重苦しい霧のようなものが私の中に渦巻いているようだった。

私は言う。今度ははっきりと。

「ジエイの……悪口、言わないで」

ライラ・メーリングは私の言葉にまたきよとした表情を浮か

べた。

「あら……悪口に聞こえたかしら」

(……………)

また。体の中が真っ黒になる。腕や指先に必要以上の力が籠る。なんだろう、これは。なんだろう、この……この……この、私を動かそうとする、データ以外のモノは。

「ジエイを……悪く言うの、許さない」

「ふふっ、ご主人様を悪く言われて怒ったの？貴女……面白いわ」

ターゲットが大鎌を構える。また攻撃を仕掛けてくる気だ。私も応戦の構えをとる。今度は外さない。絶対に仕留める。ジエイを悪く言ったこの『女』を。

メタトロニオスがふわりと風を切る。円を描くように一回転した大鎌を掴み、ターゲットが利き足を踏み出そうとした。

「……………！」

刹那、私と彼女の間を一つの影が横切った。

空に月がぼつかりと浮かぶ、そんな夜。僕は窓枠に足をかけながら、まるで他人事のようにキレイだなあと呟いた。

この間の暴動で1階を借りていた僕らの部屋は窓が割れ、使えなくなってしまうた。だから今は2階の部屋を使ってる。宿の人たちは案外良い人で、嫌な顔一つせず僕らを移動させてくれた。

「わあ、本当にキレイだなあ……」

僕は現実逃避をしながら心ここにあらずという声で呟いた。ここは2階だから、地面は遠い。怖いからこんなことしたくないんだけど、もっと怖いものがやってくるから仕方ない。

「よい……しよつ、と」

屋根に手を伸ばして、そこからくるつと逆上がりの要領で屋根に上がる。手を伸ばして、今出て来た窓を閉めた。丁度その時、下の方から怒鳴り声が聞こえてくる。

「てめえ、クリフーっ!!」

「ひいっ!!」

僕は慌てて口を塞ぐと、屋根の上で小さくなった。僕の部屋からは扉が蹴破られる音が響いてる。誰かが歩き回る音と、窓を開ける音。お願いします、気付きませんように……。

「くそ、あいつ何処にいきやがったっ!?!」

僕は音を立てないようにしながら屋根のもっと上の方へ上っていき。やがて窓が閉まる音が聞こえて、僕はほっとした。

フレいさんが怒った原因は、僕の買物にあった。どうやらフレ

イさんは僕に少し多めにお金を持たせてくれたみたいで、お釣りがくるのを予想していたのに、僕はぴったりに買い物をしてきてしまったんだ。つまり……何処の店かは分からないんだけど、僕はぼつたくられたらしい。

ふう、と安堵の息を吐くと、僕の部屋の壁を蹴る音が一発響いた。今のフレイさんは煙草が切れてるせいもあって、剣幕も物凄い。とりあえずもうしばらくここにいたほうがいいかもしれない。

「うつつ……ちょっと寒い……」

メイかサーシャさんに言ったら助けてもらえるかな。でも駄目だ、サーシャさんはきつと我関せずって対応をするだろうし、メイじゃ気付かれてしまうかもしれない。

僕は膝を抱えてため息をついた。ふと顔をあげると大きな月がネオ・オリの城の後ろに浮かんでいる。フリッツ先生も今はあそこにいるのかな。ゆっくり話したいけど、今の状態じゃなんとなく……会いづらい。

「う……風が強いなあ」

そう呟いて街に視線を向ける。するとぽかんと浮いた月の光を反射して、何かが光った。

「あれ……」

スツと、ターゲットの目の前に一本の槍が現れた。刃先は真っすぐ彼女の首筋に当てられている。ターゲットは赤い唇を微笑む形に戻すと、メタトロニオスを下げた。

「あら……もうお出迎えですか？もう少し楽しませていただくと思っただのに……」

ライラ・メーリングはそう言って横目で背後に立つ人間を見やっただ。私は警戒の体勢のまま、後ろに立つ男を見る。その義眼と、部族特有の肌の色、そしてあの槍……コルセスカ。私の中に登録された預言書に関わる者達のデータが、三大戦士の1人ジャン・ユサクの名を叩き出す。

「……宰相が御呼びだ」

突然現れた介入者は、そう言ってコルセスカを下ろした。

「ふふっ……それでは仕方ないですね。すぐに戻りましょう」

ライラ・メーリングはそう答えると、ふと目を細めて私を見下ろす。その表情に私は拳を更に強く握りしめた。必要以上の力を込めて。

ターゲットは言う。

「ねえ、お人形さん。レヴィアス氏に伝えて頂戴。……今度は貴方と楽しみたい、と」

「……」

何も答えない私にライラ・メーリングは肩を竦めて、メタトロニオスを一振りした。そしてすっと彼女の影が闇の中に姿を消す。気が離れていくのを感じながら、私は破損した左腕を押さえた。指が動かなくなっていく。微かに痙攣して見えるのは、電気信号が上手く行き届いていないからだ。

「……………」

ジャン・ユサクはターゲットが城へ戻っていくのを確認すると、私に向き直る。私は警戒していつでも攻撃に転じることが出来るように片足を退いた。

しかし相手は無表情のままコルセスカを担ぐ。

「……………主人の所へ戻れ。国内に機械がいると騒ぎになりかねん」
「……………」

私は拳を解いた。この男に殺気はない。それにここで私に攻撃をしてくる理由もない。

私は相手の動きを見ながらスツと体を退いた。闇に紛れ、屋根から屋根を伝って退却する。男が追ってくる様子はない。私は左腕を押さえながら走った。

(……………つ、……………)

超音速の移動は破損部分に無理が掛かる。連続でエラーを起こしたシステムは今にもシャットダウンしてしまいそんな感覚だった。左腕は動かず、体が自由にならない。

覚束ない足取り。この状態でジェイの所まで辿り着ける確率は低い。

(…………アイル…………ク…………、…………ジエ、イ…………)

エラー音が体内を駆け巡る。システムが停止してしまえば、自動回復を待つ間は無防備になってしまう。それだけ八阻止しなければ…………ソ止、シなけれバ。

「っ…………」

ふつと体が風に包まれた。そして次の瞬間、中枢回路のシャットダウンと共に、『私』は完全に停止した。

第3章 4

誰かが私ヲ呼ンデイル。私ノ名前ヲ呼ンデイル。貴方ハ誰？何故私ノコトヲ知ツテイルノ？ドウシテ、私シカ知ラナイコトヲ知ツテイルノ？

……ドウシテ、私ノ名前ヲ呼ンデルノ？

- ヒューマン・エラー -

何処かで私を呼ぶ声がする。誰の声かは分からない。データに記録された声ならば、履歴の中から声紋が一致する人間を割り出すことも出来るのに。

『……し、る……う……』

ノイズの中で微かに聞こえてくる。まるで赤ん坊のように舌足らずで、男か女かも分からない声色。何度も何度も私を呼んでいる。私を……私を？

『……い……し……る、う……』
「……シル、ヴィ……」

ふと別な声が重なる。これは聞き覚えがある。履歴を遡る必要もない。数時間前に聞いた、ある人の声。しかし反対に、先ほどまで聞こえていたあの中性的な声は何処かへと遠のいていく。

『……………』

まるで風に攫われるように、声はずっと遠くへ消えていく。私は手を伸ばした。声を追うように。しかし実体のない闇の中では、相手も、自分の姿も、存在していないようなもの。何を追っているのかすら分からない。けれど不思議なことにエラーは起らなかった。不思議なほどに頭が冴え渡っている。

「シルヴィ……………シルヴィ！」

はっと、世界が入れ替わる。風の中を漂うような感覚が消え、私の視界には夜空が浮かんでいた。瞳に映っているのは、月と、雲と……………そしてクリフ・パレスンの姿。

クリフは慌てた様子で私の顔を覗き込んでいる。

「だ……………大丈夫？」

「……………」

私はクリフの顔を見つめながら、データの中に記録された今までの行動を確認していた。ライラ・メーリングと接触し、左腕を破損したこと。エラーの連続もあって、途中で中枢回路がシャットダウンしたこと。そして……………。

(……………あの、声は?)

記憶システムを遡っても、『声』の記録がない。あれは確かにク

リフの声ではなかった。声紋確認の機能がそう言っている。しかし、あの『声』のデータが存在しない。

「シルヴィ？」

シャツダウンの影響でバグが発生したのか、それともシャツトダウン中に聴音機能が拾った風の音だったのか。私はクリフの顔を見つめながら考えた。しかし答えは一向に出てこない。

「あの……シルヴィ？本当に大丈夫……？」

ふとクリフの顔が曇る。大丈夫、とは身体のことを聞いているのだろう。視線が左腕へと向けられている。

私はゆっくりと体を起こした。左腕は修理が必要だろう。指先は固まったまま動かない。破損部分から垂れ下がったコードは時折小さな火花を散らしていた。

「左上腕部に破損有り。……シルヴィ、修理必要」

「ええっ!？」

私がそう言うと、クリフは慌てて辺りを見回した。

「あ、あわわ……こ、ここら辺に修理してくれそうな所あるかな!？」

焦った表情でキョロキョロするクリフ。機械技術のないこの国に私を修理出来る場所など存在しない。どうしてそんな当たり前のことにクリフは気付かないのだろう。それに……。

「……どうしてクリフ、修理出来る所探してるの?」

「え、だって修理が必要なんだよね？」

聞き間違い？という顔でクリフが聞き返してくる。そうじゃない、私が聞きたいのは……。私が聞きたいのは、どうしてサーシャ・レヴィアスと共に行動しているクリフが私のことを心配しているのかということ。

別任務中だから私はクリフに攻撃をしない。クリフにとっては、それは攻撃の好機のはず。

「……………」

「……………シルヴィ？」

私はゆっくりと立ち上がった。いつの間にか月の位置が変わっている。長い時間自動回復をしていたのだろう。私は屋根の上から辺りを見回して呟いた。

「……………分からない」

拳を握る。分からないことが多過ぎて、私は正常に動くことがままならない。特にこの任務中はエラーの発生率が高くなっている。任務ごとにこうなるようでは、ジェイにもアイルークにも迷惑がかかる。だって私は……。私は、殺人形なのだから。

大丈夫？と問いかけるクリフ。どうしてそんなことを聞くのだろう。私は敵。クリフは敵。ジェイに従う私にとって、サーシャ・レヴィアスと行動を共にするクリフは敵。

私はその顔を見ないようにして口を開いた。

「シルヴィ……………クリフ、分からないから嫌い」

「えっ？……………あっ」

クリフが何かを言うより先に、私は屋根の端から跳んだ。左腕の機能は停止しているが、自動回復によって他の部分は正常に動いている。

「……」

風を切る音が耳の奥で響く。私は真つすぐに闇の中を進み、後ろを振り返ろうとはしなかった。

コツン、コツン、と定期的に響く足音。階段をゆっくりと下りてくる誰かの気配に、壁に背中を預けていたテレジアが顔をあげた。顔を顰めているのは、その気配の主を知っているからだ。僕は苦笑しながらも同じ方向を見やる。

階段の踊り場から黒いドレスに身を包んだライラ・メーリングが姿を現した。外に出ていたにも関わらず、服にも髪にも乱れた様子はない。彼女は僕とテレジアを見ると、ふと唇を緩めた。

「あら……御機嫌よう」

ふふつと微笑んで、彼女はゆっくりと階段を下りてくる。後ろをついてきたジャンが僕とテレジアに目配せした。

宰相の部屋へと通じる通路に僕とテレジアは立っている。目の前

を通ろうとするライラ・メーリングに、僕は口を開いた。

「……ボルドー王子と宰相の密議なら終わりましたよ」

ふと黒い瞳が僕を射る。貴族という割にはその目は鋭く、まるで獣のような漆黒の色に染まっている。彼女は妖艶に笑うと、足を止めて囁いた。

「あら……まるで共謀でもしているような物言いですわね」

「ええ……本当のことを言っただけですよ」

僕はそう言っただけで彼女の瞳を睨む。しかし相手は気に留める様子もなく、ドレスを翻した。

「データー様も貴方がたくらい頭の回る御仁ならば良いのに……惜しいですね。有能な人材というものは、各々が別の場所で群れをなしている……」

僕とテレジア、ジャンを一人一人見回してライラ・メーリングは呟く。そして宰相の部屋がある通路を見つめ、口端を上げた。何処からか舞い込んだ風が音を立てている。薄気味悪い音を響かせ、まるで獣の呻くような声で。

「どうして相容れないものは決まっているのかしら……どうしてこの世には『理』などというものがあるのかしら……。神など存在しない世界に、何故存在しない者の作り上げた『理』が居座り続けているのかしら……」

まるで語りかけるように、彼女はそう言う。意味の分からない言葉にテレジアが顔を顰めた。それに気付いたのか、彼女は苦笑する

ようにため息をついて僕を見る。

「明後日に此处を発ちますわ。貴方がたがどう出るのか、とても楽しみですの。……何事も……変数あってこそその世界だと思いませんこと?」

ふふつと笑ってライラ・メーリングは歩き出す。通路の奥へと歩いていく彼女の姿に僕はため息をついた。

風を切り、亜音速で私は砂漠へと出た。煌煌と月が照らし出すのは、果てしなく続く砂漠の姿。乾ききつた空気が私の体を通り抜け、破損したコードが揺れている。

早く帰ろうと、私はそればかりを考えていた。再びエラーを起す前に。私にとって、一番不自由のない、それでいてエラーやバグのない、私のいるべき場所に。

少し高い風の音。聴覚機器の反応するままに、私はそれを感じていた。やがて私は前方にポツリと小さな光を確認する。目を凝らし……否、眼球に取り付けられた望遠機能を駆使して、私はふと気付いた。

「……」

私は加速した。距離が近づくのと共に、光は徐々に大きくなり、そしてついに私の視界を覆うほど近くなった。

「……うおっと！」

加速したまま、私はそれに抱きついた。いくら人間に似せた皮膚を被っているとはいえ、かなりの衝撃だったのかもしれない。相手はしばらく痛みに耐えるように脇腹を抑えて苦悶していた。

「いつ……し、シルヴィ……っ」

「……何？アイルーク」

首を傾げながら、アイルークの顔を覗き込む。アイルークはランブを片手に悶えながら呟く。風だけではない震えによって、ランプの中の火が揺れた。

アイルークは痛みが治まってくるのを待って、左手で額を抑えてため息を吐いた。

「シルヴィ……女性が積極的なのは、俺としてはかなり嬉しい。かなり嬉しいが音速で抱きつかれるとお陀仏になる」

もうちょっとそこらへん調整してもらわないとなあ、とアイルークは茶色の髪をかきあげた。人間は弱い。特にアイルークは『魔術師』というカテゴリに含まれ、接近戦に向いていない人間だ。……一度本人の前でデータをそのまま口に出したら怒られた。真実というものは、あまり口に出すべきではないらしい。

私はアイルークに抱きついたまま頷いた。

「うん。シルヴィ、気をつける。アイルーク、お陀仏にしない」

「……。……まあ、分かったならいい。で、どうした？その腕」

ランプが私の左腕を照らす。私はアイルークを離すと、破損データの検出を始めた。視界が切り替わり、私の目の前に膨大な量の管理記録データが表示されていく。青い画面に映し出された赤い文字。その一つ一つが破損部分に関するものだ。

「左腕の機能、41%に障害。原因は……ライラ・メーリングとの接触」

私の報告にアイルークは少しだけ顔を顰めた。

「あのお嬢さん、やっぱり出て来たか。……災難だったな」

アイルークはそう呟くと、持っていた荷物の中から薄い布を取り出した。そして私の破損した左腕にそれを巻き付ける。白いレースのついた女物のハンカチーフが、砂まじりの風に揺れた。

私は固定された破損部分を見て首を傾げる。

「アイルーク。……シルヴィこれ、必要ない」

私はもう一度破損データを読み上げようとした。コードの断絶とそれを覆う人工皮膚の裂傷。骨組みに問題はなく、普通の人間のように血が流れているわけでもない。

「これ、止血の方法。シルヴィに血液、ない」

「あー……いいんだ。ほら、部品落とすと色々大変だろうし、な？」

アイルークはそう言うと身を翻して歩き出す。私はその後ろを歩きながら、もう一度女物のハンカチーフの巻かれた腕を見つめた。

部品を落とす、ということは任務に掃討作戦が含まれていれば仕

方のないこと。何処かを破損すれば部品を何処かに落とすこともある。それはジェイもアイルークも知っている。

「アイルーク……」

「んー……？」

アイルークは私より少し前を歩く。巨大な月はまるで世界を飲み込もうとしているかのようだ。私は眼球のレンズに月と砂漠と、ランプを片手に歩くアイルークの姿を映しながら呟いた。

「シルヴィー……色々分かんない」

「……」

アイルークは何も言わない。私は沈黙した背中に向かって、エラーの増加と任務中のシャットダウンを報告した。クリフのことは何故か口にしなかった。シャットダウンの原因の全てがクリフのせいとは言いがたく、またターゲットとの戦闘中に感じたあの感覚の発端は、ライラ・メーリングにあると考えられるからだ。

「……」

アイルークは何も言わず、私の報告を聞いていた。私はなびく口元に手を伸ばし、それを引っ張る。今度はしっかりと力を調節して。

「……アイルーク。シルヴィー、何処かに異常あるの？」

あの時感じた、ふつふつと沸き上がってくる何か。コードと骨組みしかない身体の奥底に潜む、靄のように不確実なもの。計算上にも出てこない、言いようのない、0でも1でもない……あれは一体、

なに？

ねえ、ともう一度問いかけようとした時。アイルークがふと足を止めた。私は衝突しないよう、同じように歩くのを止める。

「……………」

「アイルーク？」

アイルークは振り返ると、ふつと笑った。そして私の頭をぼんぼんと叩く。年齢に似合わず子供のよような表情で。そしてもう一度歩き出す。

「……………帰ろうか、シルヴィ」

私はアイルークの行動を不思議に思ったが、その理由を聞こうとはしなかった。ジェイに頭を撫でられるのも、アイルークに頭を撫でられるのも、私にはとても心地よい。撫でるといったそれだけの動作だというのに。

「……………うん。シルヴィ、ジェイのところ帰る」

風に揺れるアイルークのローブを掴み、私は頷いた。

第4章 1

動き出す、動き出す。これは闘いの火種。人は戦いによって己の持つ運命の軸から外れていった。戦いこそ、この小さな世界を動かす力。新芽に降り掛かる雨の恵み。

500年の時を越えて再び、世界は動き出す。『過去の預言書』という、強大な力を求めて。

- 動き出す欲望 -

「……………では、データー様」

妖艶に口元を歪め、ライラ・メーリングは馬車に足をかけた。僕を含めた城の人間は彼女の見送りに駆り出され、朝早くに城の門の前に集まっていた。

まだ朝靄が街を包む時間帯。今なら安全に街を通る事が出来るということだろう。見送りに来た兵士達の数人はまだ半分寝ぼけた表情で欠伸を噛み殺している。隣に居合わせたテレジアは、馬車に視線を向けながら兵士の足を思い切り踏んづけた。

宰相は名残惜しそうにライラ・メーリングを見つめている。この男が既に彼女の毒牙にかかっているのは明白だ。

「ああ……では、またお会い致しましょう。ライラ嬢」

メーリング卿にもよろしくお伝え下さい、と宰相は言う。彼女はふと宰相の首に腕を回すと、挨拶代わりの口づけをした。そして肩越しに僕らに視線を向ける。

漆黒の色に、獣のような暗い炎を宿した瞳。妖しい空気はまるで獲物呼び寄せるための擬態であるかのようだ。

ふっと口元を緩め、彼女は馬車に乗り込む。警備兵達が先に動き出し、やがてライラ・メーリングを乗せた馬車もゆっくりと動き出した。開かれた城門から、朝靄の街の中へと馬車が消えていく。

馬車が路地を曲がったのを確認して、バラバラと集まっていた人間が解散し始めた。ジャンは肩を鳴らし、テレジアは大きく背伸びをする。

「さて、と。アタシ仕事戻るよ。2人はどうするね？」

テレジアの言葉に僕とジャンは顔を見合わせた。もともと預言書探して国を離れていることが多い僕らには、決まった仕事は存在しない。だからやることといえば、大体決まっているようなもの。

「……外を少し見回ってくる」

ジャンは少し悩んで、そう呟いた。外、というのは部族のいる砂漠を指す。あっちもここ数日の暴動で神経が逆立っているから、少し諫める必要があるかもしれない。

「なら、僕も………?」

ふと、そう呟きかけて僕は城門を振り返った。門の向こう、靄の漂う街から視線を感じる。僕が一步、二歩とそちらに近づいていく

と、通りの建物の角から人の姿が見えた。僕と目が合うと、あわあわと慌てて逃げようとする。

「クリフ君！」

僕は、逃げようとする背中一言、その声をかけた。ルクスブルム傭兵学校時代から彼はいつもそつだ。誰かと目が合うと即座に逃げようとする。でも名前を言って呼びかけると、逃げる事が出来なくなる。

「う……」

背中を向けた状態で固まったクリフ君に苦笑して、僕はテレジアとジャンに言った。

「……ごめん、やっぱり街の方を見てくることにするよ」

「……」

窓から光が差し込んでくる。強い日差しがベッドの足下を照らし、机の上に置かれた古い本がパラパラとめくれた。開け放された窓から乾いた風が上ってくる。

手に持った『ヒュペリオン』が太陽の光に黒光りする。ゆつくりとグリップを握り、引き金に手をかけると指先が震えた。おそらくこの武器にかんする知識はあの旅の女の足下にも及ばない。それでもこれがとてつもなく危険なものだという事は分かる。

「……父上」

目の前には、死んだように眠り続ける父……国王の姿がある。白髪まじりの髪、痩せこけた頬、皺の刻まれた目元。上下する胸だけが生きている証と言えるのかもしれない。兄のボルドーに次期国王選出の権限を譲った日から、父はまるで生きた屍のように、眠り、最低限の食事をし、また眠ることを繰り返している。今では昔のように饒舌に言葉を交わす事もなくなり、大好きだった葡萄酒さえも口にしない。

「父上……余は……」

ヒュペリオンを握る手は、テレジアよりも、フリッツよりも、ジャンよりも小さい。自分自身、無力な事は分かっている。三大戦士の力がなければ、自分は何も出来ないただの王子だ。

まるで伝説の魔獣の呻き声のように、風が音をたてて吹き付ける。それを聞きながら、もう一度ヒュペリオンの引き金に手をかけた。

「……」

闘うこと。それは何よりも恐ろしい。目の前にある安寧を拒否し、その上で求めるこの国の平穏と繁栄。時折、このままアクロスの思い通りになってしまった方が幸せかもしれない、と思う事もある。闘い続けることは、痛みと苦しみを続けること。これから自分はこの国の全ての人間にその痛みと悲しみを背負わせることになるの

だ。

椅子から立ち上がると、ノックの音がして背後の扉が開いた。

「兄上」

扉から顔を出したのは、腹違いで一番上の兄。国王から王座を譲り受けた後継者ボルドー・マルスだった。面差しは自分と似ているいや、自分が兄に似ているのかもしれないが。

兄上は何かを気にするようにキョロキョロと部屋の中を見回し、そして安堵のため息をついた。自分の兄だが、この臆病な性格は気に入らない。この男が、父上の跡を継ぐのだと思うと、特にそうだ。

「な、なんだ……話とは」

「……兄上。余は、兄上に聞きたいのだ」

ヒュペリオンを後ろ手に隠し、歳の離れた兄を見上げる。それだけで兄は一步、片足を後ろへと引いた。臆病のせいだけではない。後ろめたいことが……心の中にあるからだ。

「兄上は……あのディーターという男に王位を譲るつもりなのか？」
「！」

すつと、兄上の顔から血の気が引いた。分かりやすい。余も嘘は上手くないが、兄上はそれ以上だ。そのうえ顔に出ていることに気が付いていない。

「そ……んな、ことが……あるわけ……」

「フリッツ達から聞いた情報なのだ、兄上。本当のことを話して欲しい」

冷静に。そう、極めて冷静に。父上は難しい話をするとき、いつも冷静だった。動揺を顔に出したりはしない。ただ真つすぐに相手の目を見つめて、それだけで相手を黙らせることが出来る人だった。今はもう、耄碌してしまつてそんな面影は全くなつてしまつたが。

「……そ、そんなことを知つてどうする、フェオール」

兄の顔に汗が浮かぶ。たかが歳の離れた、しかも子供の弟に真実を聞かれただけだ。きつとディーターはこの性格を利用して脅かしたのだらう。

そう思えば思うほど、ふつふつと胸の奥底から、いいよのない悔しさがこみ上げてきた。自分が、兄上の立場ならば。自分がかつと早く生まれていれば。

「……」

余が何も言わないのをいいことに、兄上は弁解し始める。

「し、……知らない方が幸せだと、私はそう思つてだな……」

知らない方が幸せ。そんなことがあるはずがない。少なくとも、この状況では。怒りに任せてぐつと拳を握りしめる。駄目だ。ここで怒りを表せば、事態は悪い方向へと進んでしまう。ぐつと喉を突いて出そうになつた言葉を飲み込み、顔をあげた。そのとき。

「ボルドー王子……ふざけるのいい加減にするのんね」

壁を蹴るような音が、入り口から響いた。

「はいはい、逃げない逃げない」

ひよいつと襟を掴まれて、フリッツ先生の見た目からは全く想像出来ないほど強い力で僕は捕まった。僕はレイテルパラッシュを抱えた状態で先生を見上げる。

ルクスブルムにいた頃から、僕とフリッツ先生の関係はこんな感じだった。剣の訓練で2人一組になるときも、僕は一人タイミングを逃して独りぼっちになってしまう。するとすぐ先生はそれに気付いて声をかけてくれた。もちろん、先生の相手はハードだし怖いから、全力疾走で逃げようとするんだけど。

「本当に、クリフ君は相変わらずだなあ」

「ふ、フリッツ先生……」

やっと地面に下ろしてもらうと、僕は安堵のため息をついた。こつそり城の中を眺めてたことを怒られるかと思っただけ、そんなことはないみたいだ。

先生はニツコリ笑って僕の肩を叩く。

「丁度良かった。街の方で少し食事をしよう。……実はまだ朝食を

とつてないんだ」

「あ、はい……」

城門が派手な音をたてて閉じていく。僕は先生の後を追って、まだ人気の少ない街の中へと歩き出した。実は僕もまだ朝ご飯を食べてない。それを思い出すと、まるで謀ったようにお腹が小さく鳴いた。

朝靄がやっと晴れて、街は乾いた空気に包まれる。フリッツ先生は少し遅れて追いかけてくる僕を振り返って笑った。

「それにしても……ちょっと意外だったなあ。クリフ君が1人で街に出てくるなんて」

クリフ君のことだからきつと宿に籠ってるかなと思ったんだけど、と先生は言う。

「あ、それは……そ、その……この時間帯なら、安全かなって……」

僕は慌てて思いつくかぎりの言い訳をし始める。フレイさんにはったり会わないように逃げてきた、だなんてとても言えない。昨日の今日だとまだ根に持つてる可能性もあるし……それに、昨日の夜のシルヴィのこともちょっと気になってたんだ。

先生はクスッと笑って、大通りから少し細い路地へと曲がった。

「そうなんだ？……てつきり、彼女に言われて来たのかなと思ったんだけどね」

「えっ……彼女って、サーシャさん……ですか？」

路地を曲がって少し歩くと、こじんまりとした喫茶店が見えてきた。どうやらまだ開店したばかりのようで、人気は少ない。店員さ

んも1人か2人しか見当たらず、入り口付近の観葉植物の向こうに客の影が一つあるだけだった。

フリッツ先生は扉を開けると、辺りを見回して、店の奥のテーブルに座る。しばらくすると店員が水を運んできてくれた。僕と先生はテキトウに朝食代わりになりそうなものを注文する。

「……先生。サーシャさんからって、どうゆうことですか？」

「ん？ああ……いや、彼女は随分勘が良いみたいだから、この一件に噛んでくるんじゃないかなって思ってたね」

この一件……それって多分、ネオ・オリの暴動とか、王位継承のこととか、色んなことが『過去の預言書』に繋がってることだ。昨日の夜のことには誰にも言っていないけど、シルヴィがこの街にいたことを考えるとそれは確実なんだと思う。

でも、サーシャさんは今回、特別な指示を僕らに出してこない。

「あ……いえ、その……」

言葉を探す僕に、先生は笑う。

「大丈夫、大丈夫。彼女だって偵察にクリフ君を選ぶとは思えないしね。ほら、どっちかって言うത്自分でやってしまいそうな感じがするし」

……。先生、それフォローじゃないです……。

そんなことを話していると、店員さんがパンとコーヒー、ホットミルクを持ってきてくれた。もちろんコーヒーは先生なので、ミルクは僕の。

「……それにしても、本当にここでキミに会えるとは思ってなかつ

たよ」

フリッツ先生はパンをちぎりながらそう呟く。火傷しそうなくらい熱いホットミルクに息を吹きかけていた僕は、その一言にヒヤリとした。次に続く言葉がなんとなく予想出来てしまったからかもしれない。多分焦りはそのまま顔に出ていたと思う。

「あ、あの……」

「実際、僕たちも随分心配していたんだよ。あちらからの手紙を見て初めて知ったくらいだったしね」

「っ……」

僕はカップを両手で包んだまま俯く。先生と会った時から、その話が出てくることは分かっていたことじゃないか。僕は皆や、先生達に問いつめられるのが怖くて、ルクスブルムに近寄れなかった。だからネオ・オリでフリッツ先生に出会ってしまったときも、内心焦っていたんだ。

カップを持つ手に、じん、と熱さが伝わってくる。僕は俯いたまま、ぼつりぼつりと話し始めた。

第4章 2

それを渡されたのは、数年前。春が訪れるより少しだけ前のこと。冬の空気が暖まって、森も平野もゆつくりと新緑に移り変わるようになっていた、あの頃。

僕はレイテルパラツシユを片手に、1人平原の中に立っていた。澄んだ風が通り抜ける、故郷があつたはずの場所で。

- 数年前の記憶 -

『クリフ、忘れ物はない？ほら、ちゃんと荷物の確認して。あれとこれと、それと……』

『わ、わわわっ……ちよっ、全部出したらまた荷物詰めなきゃいけなくなるよ』

『おにーちゃんんっ、お弁当忘れてるー！』

バタバタと走り回る声が小さな村に木霊した。村、なんて言ってもここは本当に数軒の家が寄せ集まった、本当に小さな集落。都会から遠く離れた山奥に人が住み着いたのは、この辺り一帯が肥沃な土壌を持っているかららしいけど、トウアス帝国を失って以降、積極的に開拓をしようとする人間なんて殆どいなかった。だから、この村の近くに同じような村はほとんどない。一番近くの村は、山を

越えたあたりに一つだけあるくらいだ。

目の前に広がる平原を見渡して、僕は深いため息をついた。するとお弁当を持ってきた妹が不安そうに首を傾げる。耳の下で2つに結んだ髪が揺れた。

『おにいちゃん……本当に大丈夫？』

『大丈夫だよ。学校の人も良い人だと思うし……』

お弁当を受け取って荷物の中に入れると、その様子を隣で見ている姉が額を押さえて深いため息を吐いた。シヨールの先っぽを弄るのは、イライラしていたり不安なときの癖だ。

『違うわよ。学校まで辿り着けるか心配なのよ、私達は！この間、アルナンドおじさんに街に連れていってもらった時も、アンタ、ぼけーっとして道順覚えていなかったじゃない！！』

『うっ……そ、それは……』

言葉に詰まる僕に、姉さんはグチグチと説教を始める。どうしよう、これが始まったらしばらくは抜け出せない。今日中に、なるべくルクスブルムの近くまで行きたいのに、これじゃあ隣町に行くことすら危ういよ。

嫌な汗をかき始めた僕に、その様子を遠くから見つめていた隣のおばさんが笑う。洗濯物を干しながら、姉の背中に声をかけた。

『マリーちゃん、あんまり引き止めると野宿することになったちまうよ』

『あ……そ、それもそうね。……分かったわ、さっさと行ってらっしゃい！』

どん、と背中を押され、僕はつんのめって転びそうになった。そ

して隣のおばさんに頭を下げ、もう一度生まれ育った故郷を見回す。

小さな畑が点在し、家畜も数頭しかいないような小さな集落。数軒しかない家々の後ろには小さな林があるだけだ。そして砂利道が続く先には、果てのない平原が広がっている。

『おにーちゃん！頑張つてねーっ！……いじめられないようにねっ！！』

妹の叫び声。姉と、おばさんの笑い声。僕は照れくささと、一抹の不安と、そしてそれ以上の期待を胸にして、此処を立ち去った。

「……ああ、覚えてるよ。キミは確か、特別枠で入学したんだ。3年に1人、出るか出ないかっていう特別生だった」

先生の言葉に、僕は頷いた。

前々から剣を振るのが好きで、いつか剣士になれたらって思いながら、姉や妹の目を盗んで練習をしていた。でもうちは元々お金がなかったから、半分は諦めてたんだ。でも15歳のときにそれを近所のおじさんに見つかって……腕試しにルクスブルムの特別枠を受けてみたらどうか、って言われた。

今思えば、始まりはそんなものだった。

「でも本当に、キミには素質があったと思うよ」

「……………そう、ですか……………?」

僕はカップをテーブルに戻してそう言った。どんなことばをかけられても、あの頃のようには……………剣を振るえない。あの頃は本当に何の迷いもなく、剣を振るっていたのに。こんなに悲しい気持ちにはならなかったのに。

先生は頷いて、窓の向こうに視線を向ける。

「うん。まあ、ちょっと臆病なところがあるけど……………特別枠で入って、最後まで首席でいられたのはクリフ君だけだよ」

「……………」

温くなったミルクがカップの中で揺れる。思い返せば思い返すほどに、あの頃の記憶が蘇ってきた。学校を卒業して、仕える人も決まっただけ。全部が順風満帆に思えた。だから仕事を始める前に一度だけ、故郷に報告に行こうと思ったんだ。

学校にいる間、姉からは手紙が来ていた。といつても、姉も一番近くにある街まで下りてきた時しか手紙を出せなかったから、手紙を受け取るのは年に一通だった。もちろんこちらから手紙を出すことは出来ないの、近況はいつも一方通行だった。

『……………はあつ、はあ……………』

一年と少し前。僕は学校を卒業したことを報告するために故郷へと戻った。平野から続く長い坂道を駆け上がって、僕は故郷を目指していた。早くみんなに報告したくて、近くの街に泊まらず、そのまま家を目指した。

きつとそれを知ったら、皆呆れた顔をするだろう。でもきつとす

ぐに笑って迎え入れてくれる。背中を叩いて、温かな家の中へ。そうしたら、この胸に抱いたレイテルパラスシュを自慢するんだ。

『……はあ……』

僕は足を踏み出して、そして息を飲んだ。一晩中歩き通したせいで空はもう白くなり始めている。背中から差し込む仄かな光を感じながら、僕は呆然と立ちすくんだ。

『え……？』

唇から漏れたのは、息とも声ともつかない音。足下に伸びた影がキョロキョロと辺りを見回し、僕の目は錯覚を起こした。

風がゆっくりと大地を這っていく。伸びた草が見慣れない人間の姿にざわめき、まるで波のように雑草がなびいている。

(……え……?)

背中越しの太陽が、辺りを照らし出していく。そこは草原。まるで平野から繋がっているかのように、雑草が辺りを埋め尽くし、集落にあるただ一つの砂利道を覆っている。

膝が崩れた。何が起きたのか、僕には分からなかった。道を間違えた？そんなわけない。だって草の中に埋もれた砂利道は、たしかにここに集落があったことを物語っている。なら、みんな一斉に引っ越した？そんなわけない。ここには畑がある。それを捨ててすぐ別な場所へ移ることはできないはず。

(……畑……)

木は雑草を踏みつけて、記憶を手繰り寄せながら畑のあった場所

を目指した。集落の入り口にあるはずの畑。雑草に覆われた畑を見直し、僕はふと形の違う葉が寄せ集まっていることに気付いた。

『これって……姉さん達が育ててた……』

草を避けてそれを引っ張り出すと、根っこについた芋が顔を出す。でもそれは萎んでしまっていて、新たな芽を出していた。僕はもう一度立ち上がって辺りを見回す。ふらふらと覚束ない足取りで、家のあった場所を目指した。

砂利道を目印に、僕はある場所で足を止めた。はたから見れば、そこはただの草原の一角所にしか過ぎなかったけれど。

(……)

僕は記憶をたぐりながら、玄関があつたはずの場所を探す。屈んで草を分けると、中からは炭のようになった木片と乾いた粘度のような土が現れた。それは自分の家を形作っていたものだと思付くまで、時間は掛からなかった。

『あ……あ……』

何があつたのか、何が起つたのかは分からない。けど一つだけ分かるのは、ここに自分の帰るべき場所がないこと。ここにいたはずの愛しい人たちはみんな、何かの、予想も出来ないアクセシントに見舞われて、ここから消えてしまったんだ。

此処から……もしくは、この……大地の、上、から。

『あ……』

涙が出たかは覚えていない。ただ、僕にはそれが信じられなかつ

た。実感も湧かなかった。きつと嘘なんだと、何かの夢なんだと信じたかった。

そして、あの日から……僕は、旅に出ることを決めた。

カラン、と音をたてて喫茶店の扉が閉まる。店員の声に送られて、クリフ君は外へと出て行った。僕はテーブルの上に置かれたお代を見つめながら小さくため息をつく。

丁度一年と少し前。ルクスブルム傭兵学校に送られてきた一通の手紙が、校内に波紋を呼んだ。手紙によると卒業したばかりの1人の生徒が、いつまで経っても仕え先に現れないのだそうだ。それが他の誰でもなく、首席で卒業したはずのクリフ・パレスンだと知った時は、誰もが耳を疑ったくらいだった。

「よいしょつと……」

僕はティーカップを持って席を移動した。そして観葉植物の影に隠れるように座っていたもう1人の客に話しかける。

「やあ、今度は本当に『偶然』だね。……向かい側、いいかな？」

「……」勝手に

対して気に留める様子もなく、彼女はそう言った。クリーム色の髪を耳にかけ、興味なさそうにコーヒーを口にしている。パンを千切って口に運ぶ彼女……名前もたしかサーシャさんだったかな……に、僕は笑って見せた。

「……もしかして、聞いていたかな？」

「いえ。聞いていたというより聞こえてきたと言った方がいいでしょうね」

もくもくと朝食を食べながら、彼女は顔色一つ変えずに言う。僕は苦笑を浮かべて、そしてため息を吐いた。いくら国の政策のためにルクスブルムに追い出されていたとはいえ、未来ある青年がああゆう道を歩かなければ行けなくなったことは、心苦しい限りだ。

「……それじゃあ、キミは知ってたのかな？」

「……いえ。『ついていきたい』と言われただけなので、それ以上のことは知りません。ただ……」

ふと、何かを思い出したように彼女は顔をあげて、続く言葉をパ\nンで塞いだ。

「……ただ？」

「いえ。……私が言うべきことではありませんね。聞きたければ本人からどうぞ」

最後のヒトカケラを口の中に放り込むと、彼女はコーヒーでそれを飲み下した。店員を呼びつけてお代を渡すと、一息はいてテーブルから立ち上がる。すっと背筋を伸ばしたその姿は、やはり普通の女性とは違う空気を纏っていた。やっぱり……この人もただ者ではないんだろう。

店から出て行くこととする背中に、僕は問いかける。

「……一つ、聞いてもいいかな？」

入り口の扉に手をかけて、彼女はこちらを見た。人を射るような碧色の瞳。僕は座った状態のまま、頬杖をつけて彼女を見上げた。

「キミは……もし、クリフ君が足手まといになったら、どうする？」

クリフ君は彼女についていくと決めた。それは傭兵学校を出て、偉い人に仕えることとは意味が違う。彼女に仕えることは、僕たち三大戦士が国王の為に命を賭けるのと同じ。臆病な彼が選んだ道はもつとも険しく、そして恐ろしいもの。

彼女はふつと笑った。そしてこちらに背を向ける。

「状況と彼の価値を天秤にかける……それだけのことですよ」

では、とだけ言って、その姿が扉の向こうに消える。僕は肩をすくめて呟いた。

本当に、彼は大変な人の仕事を引き受けてしまったようだ。

「……それで？他に隠し事あるなら、ささーと話すのんね」
「なっ……そ、それ以外には、何もっ……かはっ！！」

スツと、テレジアの髪が揺れた。少なくとも、自分にはそれしか認識出来なかった。次の瞬間、派手な音をたてて兄の身体が弾き飛ばされる。壁に衝突すると、まるで人形のように身体から力が抜けたようだった。

ボロ雑巾のようになった兄をテレジアが氷のような瞳で見下ろす。

「……ホントはもと力入れてやりたいところよ。王子の御前だから手を抜くね」

「く……わ、私に……そんなことをして、どうなるか分かっているのか！？」

兄は額を切ったのか、顔半分が血に濡れている。呆然としている余の前でテレジアは兄の胸に右足を置いて蹴り倒した。そしてじわじわと踏みつける。その顔に浮かんでいるのは怒り。しかしそれは自分を叱る時とは全く違う、殺気を帯びた憤り。

「分かてるね。人払いはとくの昔に済ませてあるのん」

「っ……フェオールっ！！」

兄の視線がこちらを向く。その表情に余は息が止まった。恐怖を浮かべた人の顔。死にたくない、助けて欲しいという顔。生物の欲望の根本にあるものが顔に出るだけで、こうも人は醜く恐ろしくなれるのだろうか。

咄嗟にテレジアに制止の声をかけようとした瞬間、テレジアはそれを兄には見えないように、後ろ手で制した。

「……言えはいいだけの話よ、ボルドー王子」

テレジアは兄の髪を掴み、見た目からは想像の出来ない力でそれを持ち上げる。足を宙に投げ出した兄は本当に人形のようにだ。

窓から吹き込む風は冷たく、カーテンが心のざわめきを代弁するかのよう揺らめいている。テレジアは顔を近づけて、低い声で言った。

「吐け。……それだけがアンタが生き残るただ一つの手段だ」
「ひっ……！！」

兄の身体が硬直した。見開かれた目はテレジアの鋭利な視線から離せなくなっている。これが、三大戦士。戦いの中で生きてきた人間の、恫喝の瞳。

テレジアが急かすように髪を掴む手を揺らすと、兄は顔を引きつらせ、口はまるで別の生き物が乗り移ったかのようにぺらぺらと喋り出した。

「みつ……み、三日後！三日後だっ。メーリング家の、あ、あの女がアクロスに到着次第、あちらからアクロスの軍が攻め入ってくるっ……！」
「……！？」

余が顔を上げると、テレジアは兄の身体を壁に叩き付けた。そしてもう一度相手を見下ろす。

「軍の侵入経路は？」
「く、国の東っ……こ、国民は殆どがディーター派だから後に回しっ……し、城に突入、するっ……！あ、あの男はっ、わ、私に……逃げ道をつ、用意すると……」

テレジアの目が細くなる。兄の襟首を掴んで持ち上げると、そのままう片方の拳を鳩尾に叩き付けた。まるで締められた鳥のような顔で苦しそうに息を吐いた兄は、そのままその場に倒れ込む。テレジアはそれを見下ろすと、ふん、と鼻息を吐いた。

「国を渡して自分だけ生き残るなんて下衆のすることね。全部終わるまで黙って寝てるといいのん」

「……………」

ボロボロになった兄の姿を見下ろしながら、余は小さく身震いをした。自分の考えでやったこととはいえ、やはり振るった力を目の前にすると足がすくむ。めまいを起こした時のような感覚だ。

「……………王子？」

「あ……………いや……………なんでも、ない」

自分でも自覚するくらい、見た目は似たところの多い兄。それが今、父上の部屋の床でボロボロになって気を失っている。自分も、もしも国民に反発されれば……………やがてはこのように砂と埃にまみれて命を落とすことになるのだろうか。

「……………王子」

ふと、両肩に手を置かれてやっと我に返った。いつの間にかテレジアの顔はいつもの表情に戻っている。テレジアは少しだけ悲しそうに笑うと、余の頭を撫でた。

「怒るの、罵るの……………全部アタシ達の役目ね。……………王子はただ、前を向くの良しよ」

「……………」

余はじつとテレジアの目を見つめる。この者達は本当に強い。それは体のことではなく、心のことだ。屈強な戦士とは、体よりも心の強い人間をいうのだと、改めてそう思った。

コク、と頷いて余はテレジアを見る。願わくば、太陽神バルトロから受け継ぎしこの瞳に、彼ら三大戦士と同じ力が籠っているように。

「テレジア。ジャンとフリッツを呼べ。アクロスが攻め入ってくるのは三日後……。……迎え撃つぞ」

第4章 3

窓をカーテンで覆う。月光が遮られた部屋の中は闇の色に溶けた。壁際に寄せたテーブルから蝋燭を掴み、床にそれを置く。スツと指先で白い円柱のふちをなぞると、ゆっくりと小さな火が浮かび上がってきた。やがてその仄かな光に誘われるように、溶け入っていた部屋の家具が微かに視界に見えるようになる。

俺は床に置いた5本の蝋燭に火をつけ、深く息を吸い込んだ。

- 祖父の影 -

準備は完璧だ。俺は床に広がる魔法陣を目の前にしてそう1人こちた。五芒星と、それを囲う一つの円。場所が場所だけに簡単な陣しか作れないが、実際は祭壇で行うのが普通だ。クリフに使いっ走りを見せて買い集めた薬草や鉱石を定められた場所に配置し、俺は魔法陣の前に座る。

あとは頭の中に叩き込まれた呪文を、口にすればいいだけ。俺はポケットに忍ばせていた小型のナイフを手に取ると指先でその刃をなぞった。スツと鋭利な痛みがはしり、指先から鮮血が滴り落ちる。

「……………」

水滴が床ではねて音を立てる。微かに部屋を包む空気が変化した。血は木の床板には染込まず、少し浮いた状態で横に広がり、まるで別な空間に吸い込まれていくかのように消える。

部屋の籠った空気が緊張する。ふと、どこからともなく風が吹いた。もちろん窓は閉まっている。

（かかった……か？）

俺は血液がゆっくりと空気中に染込んでいくのを見つめ、そして大きく息を吐く。記憶を手繰り寄せながら、紡ぐべき言葉を口にしようとした。

そのとき。

「……フレイさん、起きていますか？」

廊下から声が聞こえて、扉が開いた。無遠慮に開かれた扉から光が差し込み、先ほどまで部屋の中を包んでいた緊張感が一気に緩む。扉から顔を出したのは、やはりサーシャだった。サーシャは俺と、目の前に広がる魔法陣を目にして顔を顰める。

「……ああ、取り込み中でしたか」

魔法陣と蝋燭、そして配置された薬草や鉱物をしげしげと見回して、サーシャはドアを締めようとした。緊張感が脱力感に代わり、ふつつつと怒りが込み上げてきた俺は、そそくさと立ち去ろうとするサーシャを怒鳴りつける。

「てめっ……こちら取り込み中だっ！勝手にドア開けんなっ！
っ！か、ノックくらいしろ！」

「フレイさんには必要ないかと思っただんですが……そこまでいうの

なら、気をつけることにしましょう」

「フレイさんには必要ないって……『には』ってなんだ『には』って！」

深く深くため息をつく俺に、サーシャはもう一度魔法陣を見回した。何が珍しいのかわからないが、陣の手前で座り込むと、薬草や鉱物を見つめている。手を伸ばさないのはおそらく、崩してはいけないと無意識に悟ったからだろう。

「それで……」

ふと気付くと、サーシャの視線は魔法陣から俺へと向けられていた。

「……フレイさんは魔法陣で、何を？」

蝋燭に照らされたサーシャの目が、答えを要求している。別に答える必要はないんだろうが……俺は視線を逸らしてため息をついた。睨み合いでコイツに勝てるなら、俺は最初からここにはいねえよな……。

「……召喚だ。召喚の儀式」

「召喚……アイルークさんがやっていた、あれですね」

サーシャの言葉に俺は曖昧に頷いた。まあ、あれは契約したうえでの召喚だから、こんな面倒くさい準備は何も必要ない。そもそもあいつは『フィオ』を召喚したときもこんな儀式全部省略して喚び出しちまったんだが。

魔法陣を見つめ、サーシャはドアを締めた。また先ほど同じように部屋の中が闇に包まれる。蝋燭が仄かな光で辺りを照らし、微

かに空気が変わった。さつきと違つのは、部屋の中にサーシャがいることだけだ。

じつと陣を見つめるサーシャに、俺は口を引きつらせる。

「……で、お前。何、当然のように居座つてんだよ」

「興味が湧きました。私は武術の知識はありますが、魔術に関することはあまり詳しくないので」

座らせてもらいますね、とサーシャは俺の背後にあるベッドに腰掛けた。おい、せめて俺に了承を求めろよ、この女。

「気が散るっつーの！出てけっ」

「この程度で気が散るようでは召喚も上手くいかないのでは？それは私のせいではなく、フレイさんの実力のせいだと思いますが」

べらべらと背後で痛いところをグサグサと突いてくるサーシャ。

ああくそ、口喧嘩でもコイツに勝てねえ自分がむかつく！

「あーあー、分かった！口出すんじゃねえぞ！？失敗したら全部お前のせいだからなっ」

もし失敗したら薬草その他もろもろの代金を払わさせる、と心に決め、俺は魔法陣に向かい合った。集中が乱されたが、どうやらまだ続ければなんとかかなりそうだ。滴り落ちた血の雫が、また空気の中に溶けていく。

俺はゆっくりと息を吐いた。目を瞑り心を静め、そして利き手を差し出す。指先で空中を切ると、微かに床に描かれた陣が光を放ち始めた。同時に部屋の中を包む空気が重みを増し、体に強い圧力がのしかかってくる。

「……っ」

集中を切らしてはいけない。これは俺たちの……いや、あの一族が今まで使役してきた精霊『蛉人』が喚び起こされる前兆だ。やつらは自分より強い人間にしか従おうとはしない。こんなところでくたばる魔術師に、従う気はないということだ。

重圧は時間が経つ毎に増していく。その力は幼い頃の記憶を呼び起こした。まだガキだったアイルークが、簡素な魔法陣一つで喚び出した精霊『フィオ』。ジジイの持つ精霊の後に続く力を持ったフィオを、アイツは自力で召喚した。

真っすぐに陣を見下ろし。重圧などもろともせず。

『……カナル・エミナ・ラ・フィリオネ！汝、我の使役に下れ』

脳裏に言葉が浮かぶ。俺はただ、それを叫ぶ。

「アイデア……アイデア・トゥルーン・レ・ヴァルナ！」

あれは……そう、アイルークが『フィオ』の召喚に成功して間もない頃だった。まだガキだったアイツが今までに例のない偉業を成

し遂げたせいで、アイツに向けられる尊敬や敬意の視線は更に色濃くなっていた。ジジイもアイツの才能に喜んだが、その一方で他の子供達にはしばらく召喚の儀式は行わないように釘を打った。もともとガキが儀式を行って無事でいられたこと事態が奇跡だったんだ。

『良いか、アイルークは特別なのだ。お前達は間違っても儀式を行ってはいかん。大丈夫、お前達も大きくなれば精霊を召喚することも出来るであろう』

白い髭をさすりながら、ジジイは俺たちを見回した。その横で満げな表情をしているアイルークを見るのが、俺はとてつもなく嫌だった。あてつけのようにこちらを向いて無邪気に笑うアイツが。

『……………』

だから俺はある日、オフクロやジジイ、そしてアイツ等の目を盗んで、一度だけ召喚の儀式を行った。どうしてもアイルーク以上の『蛉人』を召喚したかった。今思えば、ただアイツの才能に嫉妬していただけだ。

ジジイの書斎から一冊の本を盗み出した。埃を被っていて読みづらかったが、魔術以外の本も読んでいた俺には、それを解読するのは朝飯前だった。

『……………えっと……………ウ……………じゃない、「ヴァ」？……………ヴァ、ルー……………ナ』

俺は蛉人のナンバー2『フィオ』以上の力を持つ精霊を探していた。もちろん、普通に考えればそれ以上の精霊はジジイの持つナンバー1の『デルヴァ』以外にいない。それでも俺は奇跡的に最後にジジイの手で走り書きされたメモを見つけたのだ。

『アイデア・トゥルーン・レ・ヴァルナ……』

聞いたことのない名前だった。下級の精霊かと思ったが、そんなものをジジイが書き留めておくはずがない。俺は不思議に思いながらも、そのメモを片手に殆ど見よう見まねで召喚の儀式を始めるところにした。

あれは家から少し離れた林の木陰。木々がざわめき、足下に光の斑点が揺らめいていた。草花の香りと、少し湿った地面。俺はそこに簡単な召喚の魔法陣を描き、アイルークのやっていたことを真似た。本格的な魔法陣にしなかったのは、あくまでアイツと同じ状況にしたかったからだ。

『アイデア……アイデア・トゥルーン・レ・ヴァルナ……』

風が背中から森の奥へと吹き付ける。体を揺らす森の木々は、まるで無謀なことを試す俺に制止の声をかけているようにも思えた。やがてざわめきが止まると、ひっそりとした森の中に一筋の光が差した。光の斑点が吸い寄せられるように魔法陣に集まっていく。それは異様な光景だった。まるで光を喰らい尽くすかのように、魔法陣の中に消えていく。

『……アイデア・トゥルーン・レ・ヴァルナ』

光が喰い尽くされ、ふっと目の前が暗くなった。背中に冷たい感触が通っていったのを覚えている。もしかしたら、儀式に失敗して一瞬で命を奪われたのかもしれない。本気でそう思った。

それでも不思議なことに、俺の叫び声は自分の耳の中に届いた。

『アイデア・トゥルーン・レ・ヴァルナっ！！……』

肩にのしかかっていた圧力は、私の息を詰まらせた。全てを押しつぶすような力。私はかろうじて息をしながら、フレイさんの背中を見る。同じ圧力を受けているのだらう、何かに耐えるように時折肩が揺れる。

しかしその圧力が緩んだのは、フレイさんが何かを叫んだ直後だった。

「……！」

私はハッと顔をあげた。何かの気配を悟ったからだ。それは人ではない……人のように質量のある気配ではなかった。

フレイさんは大きく息を吐いて顔をあげる。そして魔法陣の上にぼんやりと浮かぶ人影にため息を吐いてみせた。

「……」

人影は人間の男、という感じだった。アイルークさんの使役する『フィオ』が女性の形をしているのならば、今目の前に浮かぶ彼が男性の形をしているのもなんとなく頷ける。彼は腰の辺りまである長髪に、鋭い瞳をしていた。人間の歳で表すのならば……30前後といったところだらう。前空きの襟を重ね、胸の辺りを帯で留めた

姿はやはり普通の人間と少々違った雰囲気醸し出している。

浅黒い肌、左頬の下に刻まれた深い傷痕。鋭い視線で足下にいるフレイさんを睨みつける。煩わしいものを見るような視線で。

そしてその唇が開いた。

『また……オマエか』

「……！」

声、と呼ぶには相応しくない。それは彼の口を通して発しているものというより、直接頭の中に響いているように感じた。まるで思考の中に何か別な意識が割り込み、集中を乱そうとしているかのよう。

フレイさんはその声に動揺することなく、顔をあげる。

「またつてなんだよ……。10年近く前の話だぞ」

『人間の感覚と我々は違う。小国の誕生と争い、文明の発展、帝国の栄枯盛衰を知る我からすれば、オマエの10年など足下にも及ばない』

私は鈴人については詳しいことを知らない。いや、それは魔術師以外の人間にとって当然のことだろう。彼らは数多い精霊達の中でもっとも高い位置にいる高貴な種族と言われている。

高貴にして巨大な力を持つ精霊。神と同等、時にはそれ以上に崇められることもある者達。そして彼らを唯一使役することのできる魔術師一族。

ふと、鈴人は私の姿に気付いたように顔をあげた。

『……この女は？』

「？ああ、コイツは……」

鋭い視線が私を射抜く。答えようとするフレイさんを遮って、私は座ったまま答えた。

「……サーシャ。サーシャ・レヴィアスといます」
『主か』

フレイさんと私を見つめるその瞳は、先ほどから色を変えない。それは考えが読めないことを表していた。やはり魔法や精霊といったものは分かりにくいと私は思う。人間の思考は突詰めれば理解出来るが、それを超越した力は、超越出来る者にしか理解することを許さない。だから……正直なところ、私は魔法の類いは好きではない。なるべく敵に回したくないというのが本音だ。

鈴人の言葉にフレイさんは苦虫を噛み潰したような顔をする。

「なわけねえだろ、なんで俺が……」
「ええ。フレイさんの方から頭を下げられたので、仕方なく」

正直にそう答えると、フレイさんは物凄い勢いで振り向いて私を睨みつけてきた。嘘偽りない事実を答えたというのに随分な反応だ。しかし鈴人は面白いものを見るようにふと口元を緩める。

『あの餓鬼が女に仕えるとはな。……それで我の力を借りたいというわけか』

「あのなあ！仕えてるんじゃないやなくて、単に目的が同じってだけで……。ああもう分かった、勝手に言ってる！兎に角、力を貸せ！！使役に下れ！！」

ものを頼むとは思えないほど横暴なフレイさんの様子に、鈴人は深いため息をついた。そしてじっとフレイさんを見下ろし、首を左右に振る。その表情はまた先ほどの鋭い瞳に戻っていた。

彼は言う。

『足りぬ。……オマエには足りないものがある。いや、理解していないというべきか』

「……どうゆうことだ」

鈴人はフレイさんを見つめて静かに呟く。世界の盛衰を見てきたというその瞳の奥には、おそらく私達では到底考えることの出来ない深い思考を持っているのだろう。

『以前のオマエには覚悟と理由が無かった。そして今のオマエにはその資格が無かった。それだけのことだ』

「！」

資格、という言葉にフレイさんの肩が揺れた。動揺は跳ね返って増幅し怒りに変わる。彼と旅をしてきて知ったことだが……それはおそらく、フレイさんの中の一番のコンプレックス。過剰な期待に答えることの出来なかつた虚しさ、そして自分の目指していたものを簡単に実現させたアイルークさんへの劣等感。

そして一番大きいのはおそらく、稀代の魔術師と呼ばれた祖父の……。

「……資格って……資格ってなんだよ！」

フレイさんはかぶりを振る。背後にいる私にはその表情は見るこ
とが出来ないが、どんな顔をしているのかは分かった。

「力か？才能か！？んなもん……どうにか出来るならとつくにして
んだろ！」

人間にはどうしようもない、どうにも出来ないものが必ずある。それは力も然り、才能もまた然り。限界という二文字は何よりも重く、自身を傷つける。鋭利なナイフのようにその痛みは体の内側を抉っていくのだから。それは……私にも、分かる。

「……一つ尋ねても良いですか？」

「……なんだ」

私はフレイさんの背中から視線を移した。そして鈴人を見上げる。

「私は魔術について詳しいことを知りません。ですが……貴方はこの場に喚び出され、今こうして私達の目の前にいる。2人の会話を聞く限りでは以前一度喚び出されたことがあるようにも思えます。

……使役に下るに足る『資格』をフレイさんは既に持っていると思えますが」

フレイさんの擁護というわけではないが、それは事実だ。フレイさんの言っていることが本当ならば、約10年前……つまりフレイさんがまだ子供の頃に鈴人を喚び出している。彼の性格から考えるに、それはアイルークさんが『フィオ』を使役に下したすぐ後だろう。

鈴人は私を見下ろしてため息をついた。

「……。……資格、とは力でも才能でもない」

「では、何が足りないか？」

「……それは言えない」

パッとフレイさんが顔をあげた。何かを言おうとするフレイさんを肩を私は掴む。ベッドから立ち上がると、私は魔法陣の前に立った。そしてゆっくりと陣の上に浮かぶ相手を見上げる。

言えない、という言葉は、言わないという言葉とは随分と意味が違う。その理由は大きく分けると2つだ。内因的な理由と外因的な理由。つまりこの場合、単に相手が気に入らない為に言いたくないのか、誰かに口止めなどをされていて言えない理由があるのか。しかし彼はこうやって2度もフレイさんの前に現れている。

「その資格は随分と重要なもののようにですね。……ならば一つだけ教えて下さい。それはフレイさんだからこそ必要なものなのではありませんか？」

『……………』

彼は表情を変えない。それでも微かに瞳の色が変わったのを私は悟った。答えとするには少々曖昧ではある。それでもそれは一つの可能性のようなものだった。

彼の言う資格とは、力でも才能でもない。おそらくそれは手に入られないものではないのだ。だからこそ彼はフレイさんの前に現れる。そしてその資格とは、フレイさんだからこそ必要なもの。

これは本当に憶測に過ぎない。それでもフレイさんが魔術師の中で底辺の人間だと、私には思えなかった。城や貴族に仕え、自堕落に暮らす魔術師など腐るほどいる。プライドと自尊心と欲の塊になった人間の方が『資格』があるというのならば、それはどう考えてもおかしい。ならば最初からその『資格』がフレイさんだけのものと考えた方が良いのではないか。

『話がすぎたようだな……………我はもう行く』

鈴人は息をつく、身を翻した。闇の中に背中が消えていく。その後ろ姿が完全に闇の中に溶ける一瞬、微かなため息にも似た呟きが聞こえた。

『……たいそうな人間に仕えたものだな……』

第4章 4

どうしてこんなにこの国に執着するのか。それは自分にも分からない。この国は、生まれた時からずっと此処にあった。此処で沢山の人々の命を抱えていた。この国に生まれ生きる全ての人々の為にそれは理由の一つだが、答えじゃない。本音をいえば、ただこの国が好きなのだ。それ以上の理由は無い。必要ないと、そう思っている。

- 芽生え -

街は騒然とした。突如として現れたアクロスの国旗を掲げた軍隊が街に入り込み、大通りを駆抜けていったらだ。

アクロスの硬質な黒い甲冑を着た騎兵隊が砂漠の向こうから見えてきたとき、街の人々は目を疑った。そして彼らがまるで自分の庭のように人々を蹴散らして大通りを駆抜けていく姿に、やっと気付いた。この国がアクロスに奇襲を受けていることに。アクロスは自分たちの国を貿易国としてなんかじゃなく、利用価値のある隣国としか思っていなかったことに。

多分、それほどまでに街の人たちは宰相の術中に嵌っていたんだと思う。

「さ、さささささサーシャお姉ちゃん！たたたた大変大変！！」

メイの情報はこの時ばかりは遅過ぎた。奇襲の情報は風のように国中を駆け巡っていたから、メイが情報を持って来たのと僕たちが宿の店主から伝え聞くのが前後してしまったんだ。

でもサーシャさんの反応は僕らに比べて薄かった。

「ええ、奇襲ですね。この場合、一方的な戦争とでも呼ぶべきでしょうか」

宿の一階にあるテーブルに座ってサーシャさんはコーヒーを飲んでた。殆どパニック状態になっていた店主を宥めて入れさせたコーヒーだ。僕とフレイさんの目の前にも同じものがあるけれど、僕もまた混乱していて口をつける気にはなれない。

「な、なんでサーシャお姉ちゃん、そんなに普通なの！？」

「なんとなく予想をしていました。むしろ遅いと思っただけです」

僕らが異変に気付いたのは、朝早くのことだった。ざわめき始めた街の様子に最初はまた何処かで暴動が起きたのかと思っただけ、事態はもつと悪い方向へ運んでいったんだ。

メイは金髪を揺らしてサーシャの隣に座る。

「ど、どうするのサーシャお姉ちゃん！！このままだとメイ達、街の人と一緒に奴隷にされちゃうよっ！！」

サーシャさんはコーヒーを飲み干すと、一息ついて街の外に視線を移した。大通りから細い路地へとアクロスの兵士達が走り回っている。噂によると各家庭に押し入って脅し、抵抗する者は痛めつけられるらしい。おとなしくしていればそのうち船に乗せられてアク

ロスへ連れていかれるという噂もある。

「奴隷が目的なら好都合ですね。多少抵抗しても殺されはしないということでしょう。……タダで船に乗れますね」

サーシャさんの言葉にフレイさんは盛大にコーヒートを噴いた。

「おまつ……まさか、それ利用して船乗るつもりじゃねえだろうな!?」

「ええっ!」

僕たちの反応にサーシャさんは呆れた冷たい瞳を向ける。

「冗談です。お二人は迎えの船が着くまで静かにしていればいいでしょうが、私とメイは場合によっては貞操の危機なので」

「す、すみません……」

僕はとりあえず謝った。もちろん、いつもは『お前等に手出したら殺されるだろ』とか言うフレイさんも、この時ばかりは冗談を冗談で返すことはしなかった。ううん、出来なかった。恐くて。とても恐くて。

サーシャさんは呆れたようにため息を吐くと、テーブルの足下に置いていたメイの荷物を手渡す。

「あ……」

「アクロスの兵士が宿に入って来たら、その隙を見て逃げます。道案内をお願い出来ますか」

僕らはサーシャさんの指示で荷物を纏め終わっていた。メイは自分の荷物を抱えると、きよとんとした様子でサーシャさんを見上げ

る。

「い、いいけど……何処まで？」

サーシャさんは自分の荷物の中から世界地図を出すと、簡単に目を通した。そして地図の南西を指し示す。その指がなぞって辿り着いた場所には小さく『アンブロシア』と書かれていた。

その瞬間、フレイさんの表情が凍りつく。サーシャさんはその表情を横目で見やり、メイに視線を向けた。

「南西の村……アンブロシアまで」

ずっとずっと遠い場所。ずっとずっと遠い街。私がふと目を開くと、辺りは真っ暗になっていた。窓はカーテンで覆われていて、隙間から日の光が差し込んでいる。私は私の中の時計に語りかけた。今は……まだ花の刻。人々が働き出す時間。体に巻き付けられた無数のコードを一本ずつ抜いて、私は椅子から立ち上がった。

窓際に近づくと、下から人々の喧噪が伝わってくる。カーテンの隙間から覗くと、歩き回る人の群れが見えた。露天商の老人、子供と歩く母親、旅人達。殆どの人間が誰かと一緒に歩いている。それ

を見つめていると、この暗い部屋の中に独りぼっちでいるのが変な気分になってきた。

「……………ジェイ……………アイルーク……………」

私はカーテンを掴んだまま、暗い部屋に視線を向ける。でも2人ともいない。時刻はまだ花の刻。ジェイ達は此処とは別に宿を取っているのだから、来ているとしてもまだ一階だ。

「……………ジェイ……………アイルーク……………」

何故だろう。此処にいないことを知っているのに、来ているとしても一階に知っていることを知っているのに、どうして私は2人の名前を呼ぶのだろう。

ふと、この部屋に一つしか無いドアが開いた。向こうから光が差し込んでくる。私はその眩しさに目を細めた。

「……………シルヴィイ？」

女の声だった。扉を開けて部屋の中を覗き込んだ彼女は、私が勝手にコードを外していることに気付くと、慌てて近づいてくる。

「シルヴィイ、駄目じゃない！勝手にコード外しちゃ。私達がやらないと、バグが発生するかもしれないんだから……………」

女はそう言っただけで私の右手を取った。そして私の状態に異常がないか、顔を覗き込んでくる。

彼女は、ジュリア。フルネームはジュリア・カルセラ。登録番号は一桁で、私が作られた当初からメンテナンスを担当している。身長はイルークより小さくて、私より大きい。髪は茶色で、シヨール

トカットという形をしている。

そういえば以前はイルークが挨拶の代わりに『今日も豊満な胸ですね』って言うていたけれど、一回レンチで殴られてから言わなくなつた。何故だろう。

目の中や手の開き具合、腕の連結を気にするジュリアに、私は言う。

「シルヴィ、大丈夫。……ジエイとイルークは？」

「ん？2人ならさつき工房に来て、下でコーヒー飲んでるわよ？」

ジュリアの言葉に私はありがとう、と呟き、部屋から駆け出した。吹き抜けの構造をしているこの建物からは、一階にある工房の様子がよく見える。でも何故か、『見る』だけでは私は満足出来なかつた。

階段を駆け下り、私のいた部屋の下にある簡単な来客スペースに視線を向ける。そこにはソファに向かい合わせて座っているジエイとイルークの姿があつた。イルークは私に背を向けているから気付いていないけれど、ジエイはすぐに気付いたようだった。

「ジエイ！イルーク！」

私は叫んで、とりあえず目の前に背を向けて座っているイルークに抱きついた。加減するのを忘れてしまったせいかわ、イルークはぶつかった衝撃にうめき声を発して、右手で顔を覆いながら苦悶している。

ジエイは私に視線を向けると、一言、おはようと言つた。

「……随分と早いようだな」

「シルヴィ、ジュリアが来るより先に起きたつ。ジエイ達待つてたつ」

何故だろう。足がぴよんぴよん跳ねる。何故だろう。なんだか…
…体の中が温かいもので満たされていく。私はきゅっとアイルークの首に回っていた腕に力をいれた。人肌の感触に胸の中がいっぱいになる。

「シルヴィったら、嬉しそうね」

後ろから階段を下ってきたジュリアがそう言った。嬉しい。嬉しいという気持ちは、これを指すのだろうか。私はアイルークの首に抱きついたまま、少し首を傾げた。

さっきまで、ジェイ達が近くにいないという状態に不快感を覚えた。そして2人の名前を呼んだ。でも2人に会えたら…嬉しく、なった。

「うれ、しい……？」

「そう。今のシルヴィ、とっても嬉しそうよ」

でもそろそろ離してあげないと、アイルークが死んじゃうわよ？とジュリアが笑う。アイルークを見やるとギブアップの意味なのか、顔を真っ青にしてソファの背もたれをバシバシ叩いている。

私はアイルークを解放すると、ジェイに視線を向けた。ジェイは呼んでいた本から顔を上げると、ふと笑う。その笑顔に私の表情は自然と緩んだ。

私は言う。私の中の事実を。

「シルヴィ……シルヴィ、嬉しい」

第5章 1

高みを行く者。現在の己に甘んずることなく、超然として生きる気高き魂を持つということ。しかしそれを持つことは同時に、誰かを傷つける覚悟をしなければならない。我を通せば火の粉は舞い上がり、僅かでもその足を引けばやがて己を失ってしまう。だからこそ、高みを行く者に逃げ道など許されない。

- 戦いと覚悟のとき -

動の刻、ネオ・オリエントの北東よりアクロスの軍が侵入、ゲートを突破し大通りを占拠。軍隊は中枢部隊のみを残し、他は蟻が巣を這い回るように路地から路地へと回り込み、住民の動きを封じる。花の刻、ネオ・オリエント城下の半数がアクロス軍により占拠。数力所で住民の抵抗があつたが、軍によつて鎮圧される。

暖の刻、城下の八割が占拠される。同時刻、ネオ・オリエント軍が城下にてアクロス軍への出撃を開始。しかし、体勢の立て直しに戸惑つたことは歴然であり、対応の遅さが露見する。

風の刻、ネオ・オリエント軍との衝突を避け、中枢部隊が城へ侵入作戦を開始する。同時刻、アクロス軍、ネオ・オリエント城の城門を突破。

『勝機は得たり!』

誰が叫んだ声かは分からない。聞き覚えのある声のようだったが、この騒ぎの中では誰の声とも判別がつかない。鬨の音が響き渡り、城は騒然としていた。逃げ惑う召使い達、そして無遠慮に踏みつけられる美しい庭園。アクロス軍が目指すのはおそらく、最上階の国王の私室。床に臥せった国王の首を獲ることで、この大掛かりな奇襲に幕を下ろすつもりなのだろう。

もはや誰の目にも、勝利は見えている。

『相手は老いた頭目のみ!最上階を目指せ、其処に我らの勝利がある!!--』

数多の足音が石造りの階段を踏みつける音がする。耳障りな音だ、と誰かが呟いた。たしかに、自分の庭を土足で歩き回られるのは快いものではない。いや、むしろ不快と言うべきか。

足音は階段を上がり、やがて大きな扉の前へと辿り着くだろう。

この城は特殊な造りをしている。最上階の王族の部屋に行く為には、一つの部屋を通らなければいけない。

そう、それは此処……公務に使われる謁見の間。

『国王の首を獲れ!アクロスの勇士として、この国を我らのものに!!--』

叫び声と同時に、両開きの扉が音をたてて開かれた。なだれ込もうとした第一陣が、敵の気配に緊張する。謁見の間の左右に位置する最上階へと繋がる扉の前に人影があつたからだ。

西側に立つ人影はアクロスの中枢部隊を見渡し、その真ん中に見覚えのある顔を見つけて嘆息する。

「聞き覚えある声すると思たら、やつぱりね。エロオヤジ」

人影がゆつくりと前へ歩み出る。窓の光に照らされてそれが女であることが分かった。アクロスの軍隊はその姿に警戒の姿勢を取る。彼らに守られながら、宰相……ディーター・エデュロイは下卑た笑みを浮かべた。

「やはり此処にいたか……」

口髭をさするディーターに、彼女は言う。

「おうよ。他の国の軍が城の中入ってきて黙てられるほど、寛容なのん。相棒もそう思てるね」

「……そうだな」

ずっと、東側の扉の前からもう1人が姿を現した。窓を覆うような大きな体、そして長身。ディーターはふと眉間に皺を寄せた。

紳士に飾った顔から、徐々に本性が見え隠れし始める。

「テレジア・ケベリにジャン・ユサクか……。ふっ、お前達がいかに足掻こうとも、指導者のいないこの国をどうすることが出来る？ それともまだあの屍のような老いぼれに全てを背負わせる気か」

ずっと軍人達の目に殺気が宿る。テレジアは肩に担いでいたメイスを構えた。ジャンも同じようにコルセス力を侵入者達に向ける。一触即発の中、不快な笑い声が謁見の間に響き渡る。

本当にこの男は人間の醜さを寄せ集めたような男だ。ディーターはもはや宰相という皮を拭い去り、アクロスに加担するただの首魁と成り果てている。欲に溺れた人間はやがてこうなるのだ。そしてこれが……これが、我々の敵。

テレジアがふと口角を上げた。

「……その馬鹿笑い止めた方良いね。国王さまなら此処にいるよ」

その場が静まり返る。データーの声すら一瞬にして止めてしまふほど、その言葉は意外なものだった。侵入者達の間には戦慄がはしる。年老いた国王の命さえ奪えばこの国を我がものに出来るはずが、指導者が他にいたとなると面倒なことになるのだろう。

「なつ……！？馬鹿な、ボルドー王子は今頃、国を逃げ出しているはずだぞ！？」

データーの声にテレジアとジャンが目配せをした。おそらくデーターは逃がすフリをして彼を殺すつもりだったのだろう。しかしあの人は今、この城の地下に捕らえてある。ある条件を付けて。

「……ああ。逃げるはずだった。でも少々用があったのでな……もう少し此処に残ってもらうことにした」
「……っ！？」

すつと、余は謁見の間の中央にある国王の椅子の後ろから立ち上がった。階段の上にあるこの席からは、下にいる侵入者達の顔、そして憎きデーターの表情も全て見下ろすことが出来る。

データーは余を見た瞬間、ぼかんとした表情を浮かべた。そしてすぐにその意味を察したかのように笑い始める。下品で低級で、紳士という言葉などもう欠片も感じられない。

「はっ……ハハハハ！とんだ茶番だ、小さな王子よ！まさか貴方が国王だとも言うつもりか？」

「……」

ディーターにつられるように、アクロスの兵士達もまた、同じように笑い始める。つまらない人間たちだ。人を悪く言いたくはないが、目の前で群れるこやつらこそ、人間と同等に扱うべきものだとは思えない。

誇りなどという信念を雀の涙ほども持ち合わせていない、ただの下衆。

「少年王でも気取るつもりか？……それこそ笑止千万、笑わせるのも大概にしていたきたいぞ、フェオール王子！」

刹那、ゲラゲラと笑い続けるアクロス兵達の声が少なくなった。同時になにか重いものが次々に倒れる音が響き、その場が瞬時に凍りつく。

じわりと、彼らの足下に赤い血液が広がった。

「少年王ですか。それもなかなか格好良いですね。……ああ、臆病な兎の説得に時間をかけてしまつて遅くなりました。申し訳ありません、国王陛下」
「っ!?!?」

ディーターの表情が驚愕の色に変わった。それもそのはずだ、奴が引き連れて来た何千という中枢部隊が、奴の背後にいるたった一人の男にすり替えられているのだから。そして、代わりに謁見の間の廊下には咽せかえるような鉄錆びの臭いが漂っている。

誰かが、ひつ、と声をあげた。余の立っている場所からも見える。回廊に転がった幾つもの『人であったモノ』が。

男……いや、フリッツは赤く染まった右腕と剣を一振りすると、左手で懐から一枚の紙を取り出した。そしてそれをディーターの目

の前に突きつける。

「貴方の失敗は前国王からボルドー王子に王位を継承させてしまったことですよ。捕まえて『説得』したところ、しっかりとこちらにサインをいただきました。……王位を末弟フェオール・マルスに譲る、と」

フリッツの差し出した紙にはしっかりと兄上の字でサインがされていた。字は震えていて、端には血液の飛び散った跡がある。フリッツがただの『説得』をしたわけではないことは明らかだったが。

(だが……こちらには分はある)

謁見の間にいる兵士達が剣をフリッツに向ける。フリッツはサインを奪い取るうとするディーターの手を避け、素早くそれを懐に戻した。

ディーターは余を睨みつけて叫ぶ。

「くっ……お前のような子供に何ができると言うのだ！何も知らずのうのうと生きてきたお前にっ！」

「……そちの言いたいことはよく分かるぞ、ディーター」

余は椅子の前に立つ。此処に立つ父上の姿を見たのは何年前のことだろう。三大戦士や、軍の上層部の人間たちに語る父の姿は力強く、そして何よりも勇ましかった。あれこそが太陽神の子孫、バルトロの血と誇りを受け継ぎし者なのだ、誰もが思うほどに。

「余は無知だ。国を統べる術など知らぬ。国を傾けるかもしれぬ。だが……」

父上と違って余は若い。あんなに強い眼差しも持っていない。それでも、父上と同じものが一つだけある。それは、この国を思う心。そして父上の息子としてこの国に生まれた誇り。

それは太陽のように明るく、この国を照らし出すもの。

「この国に生きる者はみな、誇りを持つている。太陽神バルトロの子孫として、都に住まう者も、砂漠に生きる者もそれは同じだ。…見よ」

余は東の窓を指差した。最上階に近いこの謁見の間からは砂漠の様子を見ることが出来る。アクロス兵の1人が窓に歩み寄り、そして愕然とした表情をした。

「この国を支えるのは余であり、そして余ではない。その意味すら解することの出来ぬお前に、この国を渡すことはできぬ」

ジリジリと体を焼くような太陽の下、国を囲むように丸い輪が出て来ている。目を凝らして見えるのは、ネオ・オリエントの旗を掲げた我が軍の姿と、その後ろに並ぶ黒い馬に乗った者達。彼らは黒い布に体を包み、ネオ・オリ軍の指示に従って都へと突入してくる。

この国を支えるもう一つの柱。メティスカ、ルウ、ア、ゲイツの3つの部族。

「……計画を知たのが奇襲の前で良かったね。戦力になりそなの全員揃えるの大変だったのん」

テレジアが窓から外の様子を眺めてそう言う。脂汗を浮かべて唇を噛み締めるディーターに、フリッツは口端を上げて言った。

「僕らをあまり馬鹿にしないで下さいね。力だけでこの地位にのし

上がったわけではないんですから……」

「ちっ……！お前達、さっさとこいつらを殺すのだ！！早く、早く……っ！！」

ディーターは周りにいる兵士達を見渡し、そう叫ぶ。殺気立つ侵入者達に三大戦士達の目の色が変わった。余はため息をつき、そして深く息を吸い込んだ。

「ジャン、テレジア。この者達を排除しろ！生死は問わない」

一喝はおそらくディーターにも負けていなかったと思う。テレジアとジャンは頷き、侵入者たちに武器を向けた。いくら多少の人数差があるとはいえ、相手は士気が落ちたうえに孤立無援となった者達だ。三大戦士の2人が負けるはずが無い。

余の一言に、扉の前に立っていたフリッツがぼかんとした顔をする。

「あれ……陛下、僕は？」

「あれだけ暴れておいて何をいうのだ。……これを返してこい」

余は懐に入れていたヒュペリオンをフリッツに向けて投げた。フリッツは慌ててそれを受け取ると、安堵のため息をついてこちらを見上げる。

「……いいんですか？返しても」

「よい。……余には必要の無いものだった。そう伝えておけ」

父上の部屋に戻る、と余はそれだけ言って謁見の間に背を向けた。断末魔や血の臭いに満たされたこの空間の向こうで、フリッツが苦笑しているのがなんとなく、分かった。

僕らは走っていた。後ろからはアクロス軍と三大部族の衝突する音が聞こえてくる。剣の交わる音や、人の倒れる音、うめき声。恐くて恐くてたまらないけど、兎に角逃げないと僕もとばっちりを受けてしまう。

メイの道案内でまだ安全そうな細い路地を走る僕ら3人。静かに逃げたいんだけど、さっきからフレイさんがやけにサーシャさんに噛み付いている。

「サーシャ！てめえっ、なんで次の目的地がアンブロシアなんだよ！！！」

「何か不都合がありますか。私は単に預言書の情報を求めてアンブロシアを希望しただけですが」

前を走る僕とメイの後ろで、サーシャさんとフレイさんがそんなことを言っている。どうやら次の目的地がフレイさんには気に食わないらしい。

フレイさんは眉間に皺を寄せながら、隣を走るサーシャさんを睨みつける。

「ふ・ざ・け・ん・なっ！！絶対昨日の夜のこと根に持ってんだろ！！」

「いえ。根に持っているというより呆れているだけです。さつさと召喚くらい出来るようになって下さい」

「やっぱ根に持ってんじゃねえかっ!?!」

てめえ、ふざけんなこの野郎、とフレイさんの罵詈雑言は止まらない。こうゆう時は関わらない方が無難だと学んだ僕は、とりあえず隣を走るメイに問いかける。

「ね、ねえ……本当にこっちの道で大丈夫……?」

「うん。今の部族の人たちが押ししてるから、ゲートの近くまでいけば安全だよ。……ふふっ」

メイはワンピースをヒラヒラとはためかせながら笑った。状況違いな笑い方に僕は首を傾げる。後ろではまだ2人の会話が続いている。

メイは路地を左へと曲がる。僕たちもそれを追って更に暗くて細い路地へと曲がった。足下に転がる樽や木箱に足を取られそうになったけど、すぐに体勢を立て直す。

「ど、どうしたの……?」

「ん?ううん。……なんか、楽しそうだなあって」

そう思っただけ、とメイは笑う。僕はなんのことかよく分からなくて、もう一度後ろに視線を向ける。2人の言い合いは……あ、いや、フレイさんの怒りはどんどんエスカレートして、今ではなんだか別な方向に話が進んでしまってる。

「だいたいな!お前、俺を差し置いて蛉人と話をつけんなっ!!俺の立場ってやつを考えろっ、少しは!」

「立場立場と言うのは魔術師の悪いくせではないですか?そんなプ

ライドは捨ててしまった方が楽ですよ」

「余計なお世話だっ！！」

た、楽しそう……？ど、どっちのことを言ってるのかな。どっちのことでもないような気がするんだけど……。

ふと前に視線を戻すと、目の前に僕らが入ってきたあのゲートが見えた。部族の人以外に人気は無い。まあ、僕らはアクロス軍の格好をしているわけじゃないから、警戒されたりはしないだろうけど。

「はあ、はあ……や、やつと着いた……」

僕はゲートの近くまで行くと、大きく息を吐いた。流石に全速力で走ったから息が切れた。辺りを見回すと、メイがゲートの前にいる部族の人たちのところに行つて、事情を話してる。

遅れて追いついてきたサーシャさんは、メイの様子を横目で見つめながら僕の方に歩み寄ってきた。

「……街の外は安全でしょう。今から出れば近くの集落で一泊出来ると思います」

「い、いいんですか？ 預言書の件は……」

次いで走つて来たフレイさんは、僕達が立ち止まっているのを見てパタリとその場に倒れた。一番体力が無いのに喋りながら走つてたんだから、まあ仕方の無いことだと思う。サーシャさんは呆れた表情でそれを見下ろし、そして僕に視線を戻す。

「ええ。……預言書を巡る勢力図が見えてきましたから、それを掴んだだけでも十分でしょう」

勢力図。きつとそれは預言書に最も近づいている人たちのことだ。

蒼天の書を持つジェイロードさん達、過去の預言書を所持している可能性の高いアクロス国、そして……。

「そして……そうですね、アクロスを裏で動かすメーリング家。彼らが独自に預言書を持つ可能性もあるのではないかと思います」

「じゃあ、どうしてアンブロシアに？」

預言書のある場所が分かっているのなら、どうして直接そっちに向かわないんだろう。それにアンブロシアはこの大陸の南西。僕らが出会ったグロックワースの反対側で、遠回りであることは明白だ。話をつけたメイが疲れを見せない表情でこちらへと駆寄ってくる。

「それは……。……いえ、口にするのは止めておきましょう」

サーシャさんは倒れたままのフレイさんを見下ろし、そう言った。

「何が得られるかは、行ってみるまで分からないと思いますから」

第5章 2

今日も砂漠から乾いた風が吹く。空中庭園の花々はジリジリと照りつける太陽に負けること無く、色とりどりの花弁を空へと向ける。時折、庭園に小鳥が舞い降りては強い風に驚いて、蒼天の空へと飛び上がった。

太陽の色をした大輪の花が咲き乱れる。其処は誇りに支えられた国の、強く逞しい信念の象徴とも言える場所。

- 立ち止まったままの自分 -

「あ、いたいた。クリフくん！」

フレイさんの回復を待つて街を出ようとしていた僕は、まだ激しい攻防の続く街の方から聞き覚えのある声を耳にした。ふと顔を上げると、大通りの隣の路地からフリッツ先生が顔を出す。僕は驚いて、こちらへ歩いてきた先生を迎えた。

「せ、先生！だ、大丈夫ですか！？」

僕が慌てたのは他でもない。先生の右腕はなんだか赤いものに濡れていて、腰から下げた剣からも何かが滴っていたからだ。でもそ

れを間近で見て、僕はつい意識が飛びそうになった。これは多分、先生の血じゃない。

「ん？ああ、大丈夫大丈夫。……それより、探したんだよ。宿の方にいなかったから、もう此処を出たのかと思った」

先生は目を細めて僕らを見つめる。表情はいつもと変わらないのに……そう考えると、やっぱり先生もこの国の、三大戦士の一人なんだと実感する。

顔を真つ青にする僕に、慌ててメイが駆寄ってきた。先生は苦笑を浮かべ、少し離れたところにいるサーシャさんに視線を向ける。

「忘れものだよ。……キミのね」

先生はそう言って懐から布にくるんだ何かを取り出した。サーシャさんは顔色一つ変えずにそれを受け取る。でも僕とフレイさんは意味が分からず、顔を見合わせて首を傾げた。

「こんな大事なもの、うちの陛下に渡さないで欲しいな……いつ暴発させるかヒヤヒヤしてたんだ」

「ふっ……少なくとも彼はそんな馬鹿には見えませんでしたか？」

サーシャさんはそう言って布を開いた。するとそこから、太陽に黒光りするリボルバー『ヒュペリオン』が姿を現す。それを目にした僕はいつも通りに叫び、倒れ込んでいたフレイさんはムクツと起き上がり、メイは両手を頬に当てて驚きの声をあげた。

「さっ、さ、さ、さ……サーシャさんっ!？」

多分思ったことはみんな同じだったと思う。でもサーシャさんは

いつも通りに余裕の笑みを浮かべてヒュペリオンを手にとった。

「貴方がたの出方次第で私達の動きも決めようと思っていました。……いつまでもウジウジ悩まれるよりは、背中を蹴り飛ばしてみようかと思ひまして」

サーシャさんはそう言つて微笑む。その笑顔は、美貌の女神フィオレンティーナと並び称されるトウアス帝国のカタリナ嬢の血を引いているだけあつて、どんな女性よりもとても魅力的だ。……勿論、その台詞を聞かなかつたことにするなら、の話。

先生はサーシャさんの言葉にきよとんとして、そしてふと笑みを漏らした。

「……やっぱりキミは、一筋縄ではいかないみたいだ」
「褒め言葉として受け取っておきます」

サーシャさんはそう言うと、ヒュペリオンを服の中に隠した。そして身を翻すと、ゲートの方へと歩いていく。

フレイさんは大きいため息をつくと、荷物を背負い直して立ち上がった。メイもまた、何も言われずともサーシャさんの後についていく。

僕もまた皆の後を追おうとしたとき、ふと先生が後ろから声をかけた。

「クリフ君」

「！……はい」

まるでルクスブルムの、あの傭兵学校にいた頃のような声だった。僕はつい、あの頃のように足を止めて振り返る。きつとそれに気付いたんだろう。先生は僕の顔を見ると、また困ったように苦笑を浮

かべた。

何処か遠くから、乾いた風が吹き込んでくる。

「僕はもう、こんなことを言う立場じゃないけれど……キミは、あの頃を思い出すべきだ。最初に剣を握った、最初に剣を振るった、あの頃を」

「……！」

僕は胸に抱いたレイテルパラツシュに力を込める。

「キミがルクスブルムで一番になれたのは、才能でもなんでもない。キミは誰よりも純粹に、剣を振るうのが好きだった。……それは周りの誰もが知っていた」

乾ききった石畳の上を、砂利が飛ばされてつむじ風の形に動いている。やがて枯れた葉が巻き込まれて、丸い円を描いた。

風の音は、まるで雑音のように耳の中で反響する。

「きついことを言うようだけど、囚われてしまった過去を振り払うことはキミにしか出来ない。だから……僕に出来るのは、先生のようにならぬこと。それだけだよ」

じゃあね、と先生は僕に背を向ける。僕はレイテルパラツシュを握りしめたまま俯いていた。このままサーシャさんと過去の預言書を求めて旅をしていけば、いつか先生とも衝突することになるのかもしれない。先生の実力は生徒である僕が一番良く知ってる。だから……それはとても恐い。

でも……。でも、今は。今だけは。

「せ、先生！あの……あの……か、考えて、みます……」

叫んだ言葉は後半が尻すぼみになってしまったけれど、聞こえただろうか。きゅっと剣を抱きしめると、後ろからメイの呼ぶ声が聞こえてくる。

「クリフお兄ちゃんっ、そろそろ行くよー！」

「あっ、うん……」

急かす声に僕はパタパタと走り出す。ゲートを潜ると、まっさらな大地が目の前に広がった。炎熱の砂漠には蜻蛉が揺らめき、真っ青な空が僕らを新しい旅へと誘っている。

部屋の中に入ると、思いがけず爽やかな風が通っていた。風に暴れる白いカーテン、そして干涸びてしまった花瓶の花。持って来た新しい花瓶と取り替えると、部屋の空気が少しだけ変わったように思えた。

「……父上」

ベッドの上には、顔の上に薄い布を被せられた父上の姿がある。枕元には数多くの香華が添えられている。どれも父上の好きな花だ。庭園で育てていた花が殆どで、これらは皆、城の者が持って来たも

のだ。

父上の死は、つい昨晚のこと。本当ならばすぐに弔いの鐘を鳴らすべきだったが、状況が状況だけにそうはできなかった。兄上は王位継承のサインを渋り、実質上数時間はこの国のトップが不在という形になってしまったのだ。これを国民に知らせてしまえば、混乱することは目に見えていた。

「余は今になって父上の苦勞が分かった」

本当ならば、ベッドだけではなくこの部屋が埋まるくらいの花が国中から寄せられるはずだった。でもそうできなかったことは父の最後の不幸だろう。

でも……父上はきつとお許しになる。余にはそう思えてならない。

「やはり考えていた苦しみや辛さではあるが……こうなってみないと本当のことは分からないのだな」

何が出来る、とディーターは言った。そんなことはまだ分からない。何も出来ないかもしれない、もしかしたら事態はもつと悪い方向へと進んでしまうかもしれない。

それでも父の志を受け継ぎ、この国を守ることこそが今の自分のやるべきこと。そして成し遂げなくてはならないこと。

冷たくなった父の手を握る。泣くことはしない。父の無くなった晩、泣いてもいいのだとテレジアに言われたが、泣かなかった。

「父上……心配することはありません。余は……余は……」

それはアクロスを迎え撃つ大事な時だったからではない。弔いの花を捧げにきた三大戦士達の顔を見た瞬間、込み上げてきた涙はいつの間にか引いていった。

「……泣くことも、嘆くことも……いつでも出来るのです。ここに
はそれをぶつける相手もいる。」

そのとき、やっと分かったような気がした。部族の信頼は自分に
向けられているものではなく、自分もまた彼らを信頼しているのだ
ということ。考えてみるまで、その当然の事実気付かなかったこ
とを。

「だから……静かにお眠り下さい」

貴方の心は私が受け継ぐ。そして二度と、こんなことが起きない
ような国に……。

葉の刻、三大部族と伏兵の出現によりアクロス軍孤立。アクロス
本国からの支援を断たれ、やがて戦況が逆転する。同時刻、城下の
四割をネオ・オリエント軍が取り戻す。

針の刻、ネオ・オリエント城に侵入していたアクロス中枢部隊が
全滅。十数人を重要参考人として捕らえる。城下の八割をアクロス
から取り戻すことに成功。被害状況が確認される。

鳴の刻、アクロス軍を捕虜として捕らえ、鎮圧に成功。三大部族
の素早い行動によって被害は最小限に抑えられる。

それから3日後、風の刻。前王崩御の鐘が国中に鳴り響いた。ア
クロスから国を守った英雄の大往生に国民は誰もがその死を悼み、
それ以来、国内での暴動は途絶えることとなる。

そして同日、鳴の刻。フェオール・マルスが王位継承を表明。彼
こそが太陽神バルトロの誇りの名の許に国を守った英雄だといふこ
とを知る者は、城の関係者を除いて他にない。

Stage of extra

Stage of extra

(第3部予告)

爽やかな風が吹き渡る。真っ白なシートがはためき、緑豊かな庭木のなかでそれはとても映えていた。胸一杯に吸い込みたくなるような、暖かな光と澄んだ空気。今日もこの村は静かで、それでいて平和。

庭を囲む柵の向こうでは、小さな子供達が集まって遊んでいる。無邪気な顔をした子供が一本木の葉を千切り取って、それを空中に投げた。次の瞬間、微かな風が出現して、その葉を空へと舞い上がらせる。

庭で洗濯物を干すメイドは、子供達の楽しそうな様子を微笑ましく見つめていた。

「……ファリーナ。楽しそうね」

ふと家の中から声がする。ファリーナと呼ばれたメイドは振り返ると、慌てて声の主に駆寄った。

「エメリナ様！もう、あまり家の中をウロウロなさらないで下さい。何かに足を取られては危険です」

「あらあら……私も一介の魔術師。そんなに簡単に転びませんよ」

エメリナと呼ばれた声の主は、40前半の女性だった。白髪にまだ薄い笑い皺をほころばせて、ファリーナが持ってきた椅子に腰を

下ろす。そして外へと視線を向けると、静かに目を細めた。

「今のは……ジャックかしら？エルマーかしら？」

ファリーナはエメリナの髪を一つに結び、そしてまた洗濯物を干す作業へと戻る。

「エルマーですよ、エメリナ様。最近やつと風の魔法を覚えたみたいで、よくああして遊んでいますから」

「ふふふ。……いつの時代も、魔術師の子供達は一緒ね……」

エメリナの呟きに、ファリーナの手がふと止まった。エメリナは膝の腕で両手を組むと、うたた寝でもするように顔を下に向ける。ファリーナは残りの洗濯物を手早く干すと、エメリナの隣に駆寄っていった。

そしてゆっくりと彼女の手を握る。エメリナは微かに顔を上げると、懐かしそうな表情で呟いた。

「あれから随分と経つけれど……あの子は元気かしら……」

Next Story

[Wizard's hometown]

そこに、残された想いと願いがある。

第1章 1

全ては一つの棺桶から始まった。あの日、貴族以外に使用されることのない馬車が村の前に止まり、ある魔術師の亡骸が村に帰ってきた。雨に打たれながら粛々と運ばれていく漆黒の棺桶。降りしきる雨の中で、俺たちはまだ、これから始まる運命など知る由もなかった。

- 魔術師の故郷 -

あの頃の記憶は曖昧で、俺の中では形のない思い出になっている。おぼろげながらその光景を覚えている気がするの、後で他の奴らが話していた言葉を継ぎ足して作り上げた幻想なのかもしれない。それでも一つだけ言えることがあるとすれば、あれは確か、雨の降る夏の夕方。

「……フレイ、今日はお客様が来るの。だから……ちゃんとした服を着て、お家にいるのよ?」

顔をあげると、おふくろがハンカチを片手にそう言っていた。俺は何故来客が来るのにおふくろが泣いているのか分からなかった。ただ来客と聞いて、あのジジイが来るんだとばかり思っていた。…

…あの頃の俺は、まだジジイに懐いていたからだ。

その期待は、あながち外れてはいなかった。ジジイは雨が激しくなつて、雷鳴が鳴り始めた頃に家に来た。数人の、見たことのない顔の男たちを連れて。

おふくろはジジイと男たちにふかぶかと頭を下げると、ジジイに背中を押されて玄関から外へと歩き出した。俺は何が始まるのか分からず、ただ呆然とした顔で2人の背中を追う。

ジジイはおふくろに向かつてこんなことを言っていた。

「……エメリナ。お前には本当に……苦勞をかけたとしか言えんな……」

「いえ……良いのです、ファーレン様。……あの人のことは……分かっていましたから」

目尻を抑えながら雨の中を歩く2人。後追いのガキみたいにそれを後ろから追う俺は、おふくろの言葉に何故か泣きそうになった。今でもその理由は分からない。ただ、おふくろのその一言に、計り知れない何かが詰まっているような気がしたからだ。

先を歩く男たちに、1人、また1人と里の人間が集まってきた。どれも申し合わせたように黒い服を身に纏っていて、誰1人としてジジイとおふくろに口を聞こうとしない。それでも、遠巻きに見ていた数人がこちらをチラチラと見つめながら話をしていたのは分かった。

「フォルカー様……まだ25だったのにねえ……」

「何やらせても完璧で、人当たりもよくて……良いお嫁さんにも恵まれてファーレン様の自慢の息子だったのに」

「……お仕え先でも仕事が出来るって評判だったみたいね……勿体ないわ」

「ほら、よく言うじゃない。よく出来た人ほど短命だって……」

その時の俺には、それが何のことだか理解出来なかった。葬式というものも初めてで、何が起っているのかも分からない。ただ俺たちは村の外れにある墓へと向かっている。それだけはなんとなく理解出来た。

フレイ、とおふくろに呼ばれて、俺は2人の隣へと駆寄る。ジジイは俺の頭を撫でて抱き上げると、そのまま墓地へと歩き出した。視点が高くなって喜ぶ俺に、おふくろは雨に濡れて意味のなくなつたハンカチで涙を拭つた。

墓地は雨で薄暗くなつていた。俺たちはその中央へと歩みを進め、一つの大きな穴の前で足を止めた。それはまるで何処までも続いているんじゃないかと思うくらいの、でかい穴だった。

「……………」

ふと顔をあげると、穴の向こうには黒く細長い箱が置かれていた。ジジイとおふくろはその箱の前に歩み寄り、上の方に取り付けられた小さな扉を開けた。

「……………」

ジジイが俺の顔を扉へ近づける。扉の向こうに微かに見えるのは、血の気のない人形のような男の顔。茶色の髪に中肉中背の体……今思えば、それは皮肉なくらいに『誰か』に似ていた。

「フォルカー……………」

ぼつりと、背後で聞こえたジジイの呟きに、俺は首だけで振り返った。そして俺はふとそこで動けなくなつてしまったのを覚えていく。

いつも厳格で、里の人間からも恐れ敬われるあのジジイの顔には、一筋だけ雨とは違うものが流れていた。

「……………」

俺はもう一度箱の中で眠る男に視線を向ける。男の正体がかつたわけじゃない。この男が、ジジイにとって泣くほど大事な人間だったんだと、幼心にそう思ったからだ。

あの日降り出した雨は、それから2、3日は止まなかった。それはまるで、これから始まる出来事を意味するかのような長雨だった。

「……………何をしているんですか？」

私は何度目かも分からないため息をついて、後ろを振り返った。隣を歩いていたクリフさんは首を傾げながら同じ方向に視線を向ける。

「う……………うるせえな！いいから先歩けっ！！」

真つすぐに続く緩やかな下り坂。小さな丘の頂上付近に私達は立っていた。振り返っても前を向いても、続いているのはなだらかな平野。澄んだ空気が東へと駆抜けていく。

フレイさんは先ほどから私達の少し後ろで、辺りを気にしながら歩いている。その挙動不審な様子に、いつもは逆の立場のクリフさんは苦笑気味だ。私は大きいため息を吐く。

「本当に故郷に帰るのが嫌なようですね……」

「言い出したのがお前じゃなければ蹴り倒してたところだっ！」

キョロキョロしながらも苛立った表情を浮かべるフレイさんに、それはどうも、と私は言い返した。

ネオ・オリを出てから約2ヶ月。私達はグロツクワースの西に位置するアンブロシアという村を目指している。途中まで道案内をしたメイとはグロツクワースの国境付近で別れ、そこからはフレイさんの案内でようやく村の手前まで来た。

「で、でも……良いところじゃないですか？空気もきれいだし」

隣を歩くクリフさんは、下手にフレイさんの地雷を踏まないように気を配りながらそう言う。私はもう一度道の向こうに視線を向けて頷いた。

「そうですね。思っていたより閑散とした村ですが……」

道の先には点在する家と林、そして向こうには森が広がっていた。丁度丘と丘の間の窪地なのだろう。村の中心から少し離れたところに小さな湖が見える。近くでは子供達らしき影が数人、集まって何かをしていた。普通の村と違うのは、子供達の遊んでいる場所で時折何かが光ることだ。赤い光、白い光、青い光……やはりここは魔術師の村なのだと実感させられる。

丘から下ってきた私達は、窪地の丁度中心に存在する巨木の前で足を止めた。

「とりあえずファーレン様の屋敷に行きましようか。フレイさん、案内を……。……。？」

ふと私は後ろを振り返る。そこには立ち並ぶ他の家よりも少し大きめの家が建っていた。周りは木々と柵が覆っていて、私達のいるところからは家の庭先が見て取れる。

丁度私が振り返ったとき、そこにはシーツを干す若い女性の姿が見えた。彼女は洗濯物を腕に掛けながら一つ一つ干していたが、私達の姿に気付くと、バサツとそれを落としてしまった。

「ぼ……。ぼ……。ぼ……」

驚愕の表情を浮かべている彼女に、私はすぐにフレイさんに視線を向ける。おそらく知り合いか、それともこの家がフレイさんの家なのか……。フレイさんも彼女の顔を見て、一瞬で顔色を真っ青に変化させる。

「坊ちやまー!!」

不覚にも彼女が叫んだ言葉に、私もクリフさんも思考を停止させてしまった。

「エメリナ様！エメリナ様！！坊ちゃまですよ、坊ちゃま！坊ちゃまがお帰りになられました！」

「『坊ちゃま』言うな！俺はもう18だっ！！！」

俺たちを玄関に置き去りにして階段を駆け上がっていくファミリーナに、俺は後ろからそう怒鳴りつけた。苛立ち紛れにため息をつく、背後にいたサーシャが納得したように頷く。

「……ああ、そういえばフレイさんは曲がりなりにもファーレン様のお孫さんでしたね」

今更気付いたとでも言わんばかりの口調に、俺はサーシャを睨みつける。しかし俺の威圧はサーシャではなく、クリフに効果をもたらしただようだった。ひっ、と息を詰まらせて、クリフがサーシャの影に隠れる。

サーシャは息を吐くと、玄関から家の中を見渡した。

「それにしても、かなり大きな家ですね……。ファーレン様もこちらで？」

玄関の目の前には、壁沿いに上の階に繋がる階段がある。1階の部屋はリビングをあわせて3つ。2階は吹き抜けになっていて、壁の両側に2つずつ、更に奥に1つ扉がある。扉を開けると屋根裏部屋に続くようになっていて、そこはこの家のメイドをしているファミリーナの部屋だ。

2階建てでも部屋数の少ない家が主流のこの時代に、これだけの家は確かに大きい部類に入るのかもしれない。まあ、生まれた頃から住んでいる俺には分かんねえけどな。

「いや……ジジイン家はもつと先だ」

「そ、それじゃあ、フレイさんのお爺さんの家ってもつと大きいんじゃない……」

家の中を見回して頭を回すクリフ。サーシャもまた、興味深げに頷いている。俺はため息をつくと、冷静に周りを見渡して右手で部屋数や敷地の大きさを数えた。

「まあ、そうだな……敷地で言えばこの家の3倍つてところか」

「さ、さん……っ!？」

「……なかなかの広さですね」

クラクラしているクリフの隣でサーシャはそう言った。おそろくコイツには家つて観念がなんだろう。俺が言うのもなんだが、一般人の反応として正解なのはクリフだ。大抵の人間はあのジジイの家の広さや敷地面積に驚く。聞いた話によると、中流貴族と並ぶ程度の屋敷らしい。

サーシャは何かを考えるように辺りを見回し、そしてふと顔をあげた。

「では、この家は……」

「あら。お客様ね」

サーシャの言葉はそこで遮られた。階段の上に視線を向けると、手すりを掴みながらゆっくりと下りてくるファリーナとおふくろの姿がある。俺は顔を顰めてため息をついた。するとおふくろは階段の上から俺を見下ろして笑う。

「あらあら……おかえりなさい」

おふくろの微笑みははつきりと俺に向けられているが、その視点は合っていない。サーシャはふと首を傾げ、俺に視線を向ける。俺は何か言いたげなその視線を無視して上を見上げた。

「……………ああ」

「お客様も一緒なのね。今、お茶の用意をするわ」

おふくろは後ろからついてきたファリーナに視線を向ける。頷いて下へと下りてきたファリーナに俺はため息をついた。

「別にいらねえよ。用事を済ませたらすぐ出てく」

「あれ……………坊ちゃん達はお急ぎなんですか？」

ファリーナの声に頷こうとしたとき、背後でサーシャが苦笑した。首を左右に振って、階段の上にいるおふくろに視線を向ける。

「いえ。少々、この里に長居させていただこうかと思っていましたので」

きっぱりと言いきったサーシャに、俺とクリフが驚愕したのがほぼ同時だった。

波音が絶えず響き渡る、ある港町の一画。赤茶けた煉瓦造りの建物が両側に立ち並ぶ街並。私は帽子を目深に被り、前を歩くアイルークの背中を追う。アイルークもまたロープで顔を隠しながら坂道を下っていた。

私が船に乗るのはこれで3回目になる。船は浮力を利用した乗り物で、人の知恵が作り出した産物だ。トウアス帝国と共に知識を無くしたこの世界には、どうやら残された『知』と消え去った『知』があるらしい。私にはその違いが分からないが、それはきつと人間の生活の基盤となるものと、それ以上のものとの違いなのだろう。私は少し顔をあげてアイルークの背中を見る。先ほど街に入ってから、その足取りは早まっていた。下り坂のせいかと思ったが、それ以外の何かが速度を速めさせているのだろう。

「……………アイルーク」

ロープの裾を引っ張ると、アイルークはハツとしたようにこちらを振り向いた。しかしその表情もすぐにいつもの少しふざけた顔に変わる。

「あ、悪い……………って、ああっ!?!この俺が、女性のエスコートを忘れるとは!」

「……………」

私には最近覚えたことがある。アイルークの冗談には、真顔で視線を逸らすことだ。ジュリアもジェイもよくそうしている。だからそれがきつと正しい反応なのだと私は思った。

私はアイルークのロープを掴みながら、隣を歩き始める。人ごみを避けながら坂を下ると、向こうに港が見えてきた。私は帽子が潮

風に飛ばされないように押さえながら言う。

「……アイルーク、何か考えてる。さっきから、ずっと」
「……」

今度はアイルークが沈黙する番だった。アイルークの表情はロ―ブで見えないけれど、何かしらの反応をしているはず。彼は人間だから。私みたいにプログラムされた殺人人形ではないから。

しばらく言葉を発しなかったアイルークは、ふと緊張を解いたようにため息をついた。

「……なんか見透かされてるような感じだよなあ……」
「？」

首を傾げる私に、アイルークは帽子ごと私の頭を押しつけた。帽子のつばから上を見上げると、一瞬だけ風のいたずらでアイルークの表情が見える。

「……！」

さあ行くぞ、とアイルークは私の頭をぼんぼんと叩いて、先を歩き始める。私はその場に立ちすくみ、そしてその背中を見つめた。

私が見たアイルークの表情を、上手く言い表す言葉を私は知らない。なにものにも形容しがたく、それでいて様々な感情の入り交じった複雑な感情。いつもの軽薄な笑みとはかけ離れた表情に、私は胸の奥がざわめくのを感じた。

それは私には到底理解出来ないもののように思えてならなかった。

第1章 2

故郷というものを、私は知らない。特別な者達と、特別な場所と、特別な記憶と……。そういった諸々のもので出来上がった場所は、人に心地よい安らぎを与えてくれるのだろう。

私にはそれが無い。それを不便に思ったことはなく、やるせなさを感じたことも無い。きっとそれで良いのだ。私を縛るものは、たった一つで十分なのだから。

- アンブロシアの風 -

「……で、なんでお前らは勝手に人ん家にあがりこんでんだ？」

この家のメイドだと言うファリーナさんからお茶を受け取り、私はリビングの長テーブルに座っていた。私とクリフさんが隣同士に座り、反対側にはフレイさんの母エメリナさんと、ファリーナさんから無理矢理隣に座らされたフレイさんが不機嫌そうに腰を下ろしている。

ティーカップを口に運ぶ私に、エメリナさんがクスリと笑う。

「あらあら……いいじゃない、急ぎじゃないって仰ってるんだから。……そういえば、お二人とも宿は？」

「あ、いえ……そ、その、フレイさんが、お爺さんの家の鍵が開けば屋敷の中に泊まればいいって……」

ビクビクしながら答えるクリフさんに、フレイさんがギツと睨みつけた。慌てて背中を丸くするクリフさんに、菓子を運んできたフリーナさんが首を傾げる。

エメリナさんは微笑みながら私に視線を戻した。しかし、やはり……先ほど玄関で顔を合わせた時から気付いていたことだが……彼女の視点ははつきりと合っていない。おそらく盲目なのだろう。私の位置やクリフさんの反応が分かるのは、盲目故に敏感になった感覚のせいだ。

彼女はティーカップをテーブルに置くと、フリーナさんと呼ぶ。

「それならこの家に泊まってはいいかがかしら……客室は2つあるし、少なくとも手入れのされていない屋敷の中よりは良いはずよ」

「ちよっ……おい！別に俺は泊まるつもりで戻って来たわけじゃ……」

「……！」
「ありがとうございます。お言葉に甘えさせていただきますでしょうか」

俺の話を受け、とフレイさんが左斜めの席から叫ぶ。エメリナさんは顔を顰めるでもなくそちらに顔を向けると、笑い皺のある目でこう言った。

「あらあら……久しぶりに帰って来たんだから、自分の家に泊まって悪いわけがないわ。たまの帰郷なのだから、母親のそばにいてもいいじゃない？」

柔らかく微笑むエメリナさんに、フレイさんは何かを言いかけてグツと堪えた。怒鳴り散らすものと思っただけビクビクしていたクリフさんは、意外にも萎んでしまったフレイさんの様子に首を傾げる。

フレイさんの後ろでは、トレイを抱きかかえてファリーナさんが苦笑していた。

エメリナさんはそれを知ってか知らずか、クスツと微笑んで視線を戻す。

「それで……あなた方はファーレン様の予言書を探していらっしやるのよね」

「はい、少々事情がありまして……何か知っていることがあれば聞かせていただけると助かります」

私がそう言うと、エメリナさんは何かを考えるように目を細めた。何処か遠い昔を『見つめる』かのように。私とクリフさんの視線がエメリナさんに向けられる中、彼女は1つ1つ、思い出すように口を開いた。

「……ファーレン様があれを創ったのは……たしか、15年前だったかしら。突然何かを思い立ったように屋敷に籠られて……しばらくは外に出てこれなかった」

「15年前……あ、結構最近なんですな。僕、てつきりもつと昔のものかと……」

クリフさんの言葉にエメリナさんは頷いた。たしかにクリフさんの言葉も分からなくはないが、それは逆に過去の預言書の力を物語っていると言ってもいい。今や裏世界だけではなく表の世界でも、その魔法の書の名前は人々の口に上る。

エメリナさんは珍しく静かにしているフレイさんに顔を向けると、苦笑しながら言った。

「……ファーレン様の遺言には、あれをフレイに任せるとあったのだけれど……予言書の噂はこの里に留められるものではなくなって

いたわ。まだこの子も子供だったから……私があれをエレンシアに渡したの。10年前よ」

こう言ってしまうと、予言書の混乱は私のせいかもしれないわ、とエメリナさんは俯いた。私は首を横に振る。母親として彼女の取った行動に間違いはない。たとえフレイさんがそのまま持ち続けていたとしても……おそらく、ジエイロードやライラ・メーリングのような人間が奪いに来るはずなのだから。

「賢明な判断だと思います。……エレンシアには、全ての予言書を持って？」

「?……全て、ですか？」

ふと後ろにいたフリーナさんが首を傾げた。空になったクリフさんのティーカップにお茶を注ぎながら、私に視線を向ける。すると先ほどまで黙っていたフレイさんが頭をかきながら答えた。

「……あの予言書、全部で5冊あるんだと。つたく、俺は知らなかったぞ、んなこと」

「そうだったんですか？私も小さかったからよく覚えてないんですけど、なんだか大きな宝箱みたいなものが屋敷の中から運ばれていたのだけは覚えてますよ」

坊ちゃん達も見てたじゃないですか、とフリーナさんは笑い、フレイさんは逆に顔を顰めた。やはり坊ちゃんという言葉が気に入らないのだろう。

クリフさんはフリーナさんから新しいお茶を受け取ると、私に視線を戻した。

「あ、それじゃあ……エレンシアは一時的に全部の予言書を持って

いたことになるんですね」

「そうですね。……ただ、その効果が発揮出来なかったことを考えると……本国に持ち帰る前に何らかの形で消失したのでしょうか」

おそらくは、他の国や予言書を狙う者達の襲撃を受けたのだろう。それとも蒼天の書のみを自国に持ち帰ったのか、それは定かではない。しかし預言書がコロッセオにあったこと、あれがジェイロード達の仕組んだ罠だったとするとその可能性は少ない。

私はお茶を飲み干すと、エメリナさんに視線を向けた。

「……今からファーレン様の屋敷を見ることは出来ますか？」

「ええ。案内はフレイに任せましょう。客室に荷物を置いて来るといいわ。……ファリーナ」

はい、とファリーナは頷いて私とクリフさんを2階へと促す。フレイさんは苦虫を噛み潰したような顔でこちらを見ていたが、エメリナさんはそれを見て苦笑を浮かべていた。

「……うわぁ……」

一度荷物を置いて、フレイさんのお爺さんの家に向かった僕たちは、その家の大きさに改めて驚愕した。いや、家って言うよりも屋

敷に近いと思う。お城とまではいかないけど公共の建物みたいに大きくて、夕方の榛色の空を覆うように立ちはだかるその姿は、ちょっと幽霊屋敷にも似ていた。

突然風が首筋をなぞって、僕は体を震わせる。

「あ、あの……べ、別に今日じゃなくてもいいんじゃない……。ほ、ほら！明日のお昼頃にでも……」

「いえ、下見は必要ですから。……フレイさん」

僕の言葉はサーシャさんの一言によって却下された。フレイさんは不機嫌そうにため息をついて、僕らの前に立つ鉄の扉を開け放つ。歩き出す2人の後ろを、僕はビクビクしながらついていく。

「ず、随分庭が広いですね……」

庭は丸い円を描くように作られていて、その部分だけは下が石畳になっていた。中央には翼を生やした男の人の石像がある。野ざらして汚れたその姿は、背中から夕日を浴びていて表情が見て取れない。

サーシャさんは石像を見上げて首を傾げた。

「これはファールン様の趣味ですか？」

「……ん？ああ、まあな。帝国時代の石像だ」

フレイさんの言葉に僕は驚きの声をあげる。

「て、帝国時代ですか！？」

「……かなりの値打ちものになりますね」

サーシャさんは感心したように目を細める。それもそのはず、こ

ういう文化とか芸術関係の作品作りは帝国時代には盛んだったけれど、現代に残っているものは数少ない。それは『知』と共に重要な作品の殆どが消え失せてしまったこと、そして現在は誰もが生きること必死で、芸術なんてものに目を向けなくなったことが原因だと考えられている。……こう考えると、昔は知識とかお金とかだけじゃなくて、心も豊かだったんだと思う。

「そうなのか？」

フレイさんは首を傾げる。普通なら考えられない感覚だけど、生まれた時から毎日こんな値打ちものを見ていれば、有難さって分からなくなってしまうものなのかもしれない。サーシャさんはため息をついて、フレイさんに視線を戻した。

「そうですね。普通は野ざらしにはしないでしょう。……そうすると、屋敷はファーレン様がお亡くなりになったままですか？」

僕は玄関の方に視線を向ける。お城の入り口みたいに大きな扉の両脇には、女の人の姿の石像が2つ、ちよつと汚れた状態で並んでいた。

フレイさんはそつちに視線を向けて頷く。

「ああ……朽ちるに任せるのがジジイの遺言だからな」

「……………そうですか」

サーシャさんはそう言うと、入り口へ向かって歩き始めた。僕は慌ててその背中を追う。値打ちものの石像でも、暗くなり始めた時間帯に1人で見つめているのはちよつと怖い。野ざらしで黒く汚れている状態だと特に。

フレイさんは扉の前に取り付けられた大きな錠に鍵を差し込むと、

鎖で閉ざされていた扉がゆっくりと開いた。僕はフレイさんとサーシャさんの後ろから、そつと中を覗く。

「く、暗いですね……」

「お前な……鍵かかった屋敷の中に灯りがついてたら、そつちのが怖いだろ」

フレイさんの呆れた視線に、僕はグツと言葉に詰まる。た、たしかにそれはそれで怖いかも……。

サーシャさんはため息をつくくと、フレイさんの家から借りてきた蠟燭に灯を点した。そして一歩、二歩と薄暗い家の中に入っていく。

「え、ええっ!?!は、入るんですかあっ!?!」

「……残りたいならそこで待っていて下さい。行きましょう、フレイさん」

サーシャさんはそう言うと、フレイさんを連れて歩き出した。僕は半分朽ちかけたような屋敷の庭と、こちらを見つめる2つの石像を見回す。急に入り口の近くからカラスが飛び立って、西の空へと飛んでいった。風が木々を揺らし、冷たい風が体を包む。う……こ、怖い……。

振り向くと、屋敷の中に入っていった2人の影が小さくなっていった。僕は慌ててそれを追いかける。

「ま、待ってくださいよーっ!?!」

屋敷の中は暗く、薄い西日が微かに足下を照らしていた。窓の棧に溜まった埃を見れば、どれくらい長い間この屋敷が捨て置かれていたかが分かる。私は階段の前で足を止めると、廊下……否、回廊と言った方がいいかもしれない……の中央に置かれた石像を見上げた。これは妖精かなにかを象ったものだ。

「……フレイさん。ファーレン様が主に使っていた部屋の場所は分かりますか」

「使っていた部屋あ？……書斎が寝室だな」

フレイさんは少し考えてそう言う。これだけ部屋数がある屋敷ならば、使っている部屋と使っていない部屋があるはずだ。私は頷いてフレイさんに視線を向ける。

「なら、今日は書斎に。寝室は明日にしましょう。……もうすぐ日が暮れますし」

私はそう言ってフレイさんの後ろに視線を向けた。まるで背後霊のようにびったりとくっついたクリフさんが、何かを訴えるような表情でこちらを見つめている。おそらく暗い中を歩き回るのが嫌なのだろう。

「んじゃあこつちだ……っておいクリフ、いい加減離れる！歩きづらいっ」

「ふええ……だって……」

フレイさんのローブをしっかりと握ったまま、クリフさんが歩き出す。私は呆れてため息をつく、クリフさんの後ろを歩き出した。屋敷の廊下には、一定の距離に石像が配置されていた。人の形をしたもの、鳥の形をしたもの、妖精や天使の形をしたもの、そして……悪魔や獣の形をしたもの。

石像が見えてくる度にクリフさんは奇声をあげる。私は悪魔の石像を見上げながら呟いた。

「写実的ですね」

私は1つ1つに足を止めて、それをじっくりと見上げる。ファールン様がこういったものに感心を持つのは、やはり魔術師として普通の人間とは考え方が違うからだろうか。悪魔の形をした影が、西日に照らされて壁に浮き上がっている。

「さ、さ、さ……サーシャさぁん……、つ、ついたみたいですよお
「お」

ふと廊下の向こうからクリフさんに呼ばれて、私はそちらに視線を向けた。見ると、フレイさんが鍵を片手に扉と格闘している。どうやら鍵は開いたが、扉が開かないらしい。

「ちっ……錆びてやがんのか？」

「立て付けが悪いようですね。……クリフさん」

「ええっ！？ぼ、僕ですかっ」

クリフさんは困ったような表情を浮かべながら扉に手を伸ばした。両開きの扉に力を入れるが、扉は微かに向こう側に動いただけで開こうとしない。フレイさんならまだしも、クリフさんでも開かない

のは相当だろう。中から何か仕掛けがされているのかもしれない。

「開きませんか……仕方ないですね」

私はクリフさんの方を叩いて避けさせると、扉の前に立った。そしてもう一度フレイさんに視線を向ける。

「……フレイさん。『朽ちるに任せる』ということは、少々無茶をしても良いということですね？」

「はあ？ああ、まあ……そうゆう意味だろうな」

フレイさんの言葉を聞いた私は、失礼します、と扉に軽く頭を下げた。扉と水平の状態に立ち、腰を捻りながら右足を扉と扉の隙間に突き出す。刹那、向こう側から木材の裂ける音と感触が響いてきた。やはり、向こう側にかんぬきがされていたらしい。

扉が蝶番ごと弾け飛ぶ音を聞きながら、私は言う。

「……さあ、行きましょうか」

何故か凍りついているフレイさんとクリフさんから蝋燭を受け取り、私は薄暗い部屋の中へと歩き出した。

「よいしょつと……」

夕日が山の向こうに消えて、夜が海からやってくる。私は歩く度に音を立てる荷物を背負い直して、キョロキョロと辺りを見回した。酒場つてたしかこつちだつたはずなんだけど……あ、あつたあつた。酒場の中はどの国も同じ空気に包まれてる。沢山の人の喧噪と、お酒臭さ。カウンタに歩み寄ると、ちよつと細めのおじさんが私の姿に気付いた。店主のおじさんだ。

「おや……セルマさんとこの嬢ちゃんじゃないか。今日は一人かい？」

「うん。今日はちよつと別のことで来たんだ」

辺りを見回すと、おじさんは気を使って私を奥のカウンタに座らせてくれた。まだ近くにお客さんが少ないから、ここなら話しやすいかも。この街はいつもお母さんの担当だからこの店に来ることは少ないんだけど、流石、おじさんも分かっている。

「ジュースがいいかい、と言われて私は頷いた。準備を始めるおじさんに私は問いかける。

「あのね、おじさん。メイ今日はちよつと調べものがあつて来たんだ」
「ほう、情報屋かい？」

うん、と頷いて私はコップに注がれるジュースを見つめる。深い紫色の葡萄ジュースはこのお店のが絶品なんだよね。お母さんに連れられて来る時はいつもこれだもん。

私はそれを受け取つておじさんを見上げる。

「……ええとね、聞きたいのは魔術師の人のことなんだけど……知

「……ってる？アイルークって人」

アンブロシアの出身らしいんだけど、と言いながらジュースに口を付ける私。甘酸っぱい香りと味を堪能しながらもう一度顔をあげると、そこにはさつと血の気の引いたおじさんの顔があった。

「？……おじさん？」

私がそう言うと、おじさんはハツとしたようにこっちを見た。どうしたんだろ、なんだか顔色がいつもと違う。

「あつ、ああ……すまんね。そいつのことは……」

おじさんは辺りを見回して、声が届く範囲に人がいないことを確認したようだった。カウンタ 越しにメイに顔を近づけると、内緒話でもするように小さな声で言う。

「……嬢ちゃん、この街でその魔術師のこと不用意に聞いちゃいけないよ」

「……どうして？」

私も自然と前屈みに、こそこそと話す。おじさんがこんな表情してるってことは、けっこう危険な話だったことだね。私も周りを気にしながら首を傾げる。

おじさんは口元を隠すようにしてこう言った。

「どうしても何も……この街じゃ、そいつの扱いは難しいんだ。……奴は『殺し』をやったんだよ。しかもただの殺しじゃあない、自分の主人を、だ」

「！」

私はパツと顔をあげた。おじさんは神妙な顔で頷いて、ぽつりぽつりと語り始める。

「そいつがこの街に来たのは3年前。あのファーレン様の孫で15で天才とか呼ばれてた餓鬼だったから、よく話のたねになったもんさ……」

第1章 3

誰もいない屋敷を少年は一人見つめていました。まるで何処かの貴族の家のように大きな大きなお爺さんの家。子供達の憧れ、そして自分の憧れであるお爺さんは、しかし、いつの間にか何処かへ逝ってしまったのです。

残されたのは大きな家と、そして……。

- 封印された書庫 -

「……さあ、行きましようか」

そう言つて書庫へと歩き出したサーシャの背中を、俺とクリフはただ呆然と見ているしかなかった。あの女、たしかに治癒能力も体力も脚力もバケモンだと思つてはいたが……かんぬきで封じられた扉を吹っ飛ばすとは、バケモンより凶悪だな。

それでも以前より随分慣れてきた俺たちは、我に返るのも早かった。

「さ、サーシャさん……ま、ままま待つてくださいい」

サーシャの姿が闇の中に消えていくのを見て、クリフが慌ててそ

れを追う。俺もその後をついて歩きながら辺りを見回した。

この家の書庫は特殊な造りになっていて、円柱の部屋の壁にずらりと文献が並んでいる。ハシゴを使って上に登れば2階を行き来することも出来る。出入り口はさつきサーシャが蹴破った場所だけで、窓は天井に申し訳程度のものがついているくらいだ。

サーシャは部屋の中央に来ると、蠟燭を掲げて辺りを見回した。

「随分沢山の文献がありますね……全て魔術関係のものですか？」
「フ割はな」

サーシャは壁に近づくと、並んだ引き出しの1つを開けた。中から色あせた紙が出てくる。サーシャはそれを手に取ると、光に翳す。

「これは生物に関するものですか……それと、こちらは……」

「あ、こっちは魔術関係のものみたいですね」

クリフとサーシャは物珍しそうに引き出しを開けては中身を確認する。だが、幼い頃からこの家の中を他の子供達と駆け回っていた俺にとっては、珍しいものは何もない。

昔……まだ俺が魔法も覚えられないくらいガキだったころ、俺たちは毎日のようにジジイの家に忍び込んでいた。特に俺やアイルークみたいなジジイの孫は、それこそジジイの寝室以外好きなところを走り回ったもんだった。

『フレイ！こっちこっち！！凄いの見つけたんだよ、ほら！』

あの頃はまだ、誰が一番か、誰が優秀か……そんなつまんねえこと考えていなかった。毎日のようにあいつらと一緒に走り回って……俺はどっちかっていえば振り回される方だったと思ってる。

そして俺を振り回すのは、ほとんどあいつだった。

『……どこに?』

書庫の2階に一定の間隔で置かれた小さめの石像を指差してあいつが笑う。それは天使か女神か、とにかく翼を生やした髪の長い女の像だった。

あいつはニコニコとそれを見上げる。

『どこに……って、ほら目の前! ビジン! ビジョ!! ボンツキュッ
ボン!!!』

『……』

……。……今思い出したが、あいつは昔からああだったな……。ガキのくせになんつーことを口走ってたんだ。親の顔が見てみたい。俺はそこまでつつこんで、ふとあることを思い出す。

「……そっいや、見たことなかったな……」
「何がですか」

俺のひとりごとに、奥で引き出しを漁っていたサーシャが振り向いた。なんでもない、と首を横に振って俺はサーシャに視線を向ける。クリフは控えめに引き出しを開けて中を眺めているのに対して、サーシャは中身を外に出したり、まさに『漁っている』状態だ。クリフがサーシャの散らかした文献を慌てて拾ってまわる。

「さ、サーシャさん、いくらなんでも散らかし過ぎですよ……」
「ああ、すみません」

反省した様子のないサーシャは、そう言って引き出しを押す。おい、せめて中身を元に戻してから……ん?

ふと、サーシャは次の引き出しに伸ばしかけた手を止めた。何か気になることでもあったのか、先ほど押しやった引き出しをもう一度引っ張り出し、そしてまた押す。

俺とクリフは顔を見合わせて、サーシャに問いかけた。

「サーシャさん、ど、どうかしましたか？」

「……」

サーシャは無言のまま、並んだ引き出しの1つ1つを右手で触れていく。ぐるりと囲むように作られたこの部屋の引き出しは、サーシャの身長では届かないものもあった。

サーシャはふと振り向くと、俺に視線を向けてくる。

「フレイさん、この列の上から2番目の引き出しを『押して』いただけますか？」

「……はあ？」

押すってどうゆうことだ、と言う俺に、サーシャは何も言わずに視線を上に向ける。こいつ、さっさと言う通りにしろってか。

首を傾げつつ上を見上げるクリフと、何かを考えるように腕を組んだサーシャを後ろへ下からせて、俺は言われた通りに上から2番目の引き出しを『押す』。……チツ、背伸びしねえと完全には届かねえな……。

グツと指先に力を込めて引き出しを押すと、思った以上にそれが奥へとスライドした。その途端、カチツと何かはまる音が指先に伝わる。

「!？」

微かな反応だったが、何かの振動が伝わってきた。俺はハッと辺

りを見回す。何も変わったところは……ねえ、よな。

サーシャはテーブルに体を預けながら俺に視線を向けた。

「……どうやら、何かの仕掛けでしょう」

「ええっ!?! し、仕掛け、ですか!?!」

俺たちは改めて書庫の中を見渡す。ぐるりと囲まれた文献や資料のための本棚。変わったところは特にない……それでも、さっき感じたあの音と振動。あれは普通の引き出しにしてはおかしい。

クリフは驚いた表情で、奥に入り込んだ引き出しを見上げる。

「で、でも一体、なんの仕掛けが……」

サーシャは腕組みをしながら天井を見上げる。いつの間にか空は暗く、闇が世界を覆っていた。サーシャはさっき自分が蹴り飛ばした扉を見つめながら呟く。

「おそらく……いえ、やはり止めておきましょう」

まだ確信と呼べる状況ではありませんから、と蝋燭を手に呟く。しかし薄暗い光の中で見るその顔には、何か面白いものを見つけたような笑みが浮かんでいた。

その日は辺りが暗くなってきたせいもあって、僕たちは一度フレイさんの家に戻るようになった。あの書庫の仕掛けは凄く気になっているんだけど、やっぱり暗い中での作業は怖い……じゃなくて、もしかしたら危険かもしれないっていうサーシャさんの判断だった。でも、どうして書庫に仕掛けなんてされているんだろう。フレイさんのお爺さん……ファールン様が造ったものなのかな……？

「あ、お帰りなさいませ！」

さつき荷物を置いた部屋に戻ると、中ではファリーナさんがベッドにシーツをしいていた。広げられた真っ白なシーツからは太陽の光を吸い込んだ優しい香りがする。

ファリーナさんは慣れた手つきでベッドメイキングをしながら、レイテルパラッシュを抱えた僕に問いかける。

「ファールン様のお家、どうでしたか？」

「こ、怖かったです……少し」

帰りの道も、僕は半泣き状態だった。だってあの石像、暗い中で見ると怖さがアップしてて今にも動き出しそうだったから……。思い出しても寒気が起きる僕に、ファリーナさんは苦笑する。

「私も昔は怖かったんですよ、あれ。でも坊ちやまや従兄弟のアイルーク様なんかは全然恐がりもしなくて……ちよっと羨ましいなと思っていました」

にこ、と微笑みかけられて、僕はきよとんとした。坊ちやまって、フレイさんのことだけど……そういえば、アイルークさんもアンブロシアの出身、なんだよね。

「アイルークさん……は、フレイさんと仲良かったんですか？」

ファリーナさんは枕にカバーをかけながら、少し驚いた様子で振り向く。

「あら、お知り合いだったんですか？……そうですねえ、小さい頃は何かと一緒に走り回ってましたよ。同じくらいの年齢でしたし、アイルーク様はファーレン様の長女の息子ということで……何かとファーレン様ともお付き合いのある方だったみたいですから」

私はまだ小さかったので、婆やに聞いた話ですけどね、とファリーナさんは笑う。その笑顔に僕も微笑み返ししながら、ふと胸の奥で何か違和感を覚えた。

フレイさんはアイルークさんを嫌って……と、いうより劣等感やコンプレックスみたいなものを感じているのは鈍い僕にも分かる。でも、どうしてもアイルークさんはエレンシアのコロッセオで、フレイさんを畏にけるようなことをしたんだろう。アイルークさんにとっては、フレイさんなんて気に留める必要のない存在かもしれないのに。

ファリーナさんは枕を整えながら、少し寂しそうに呟く。

「でも……いつからですかね、お二人の仲が険悪になってしまったのは……」

こんな小さい里の中じゃ、子供の数なんてそんなに多くない。きっと生まれてから十数歳までは一緒に暮らしていく間柄になると思う。僕もそうだったから、なんとなく分かるんだ。小さな箱の中で決められた顔ぶれと暮らしていくことは……素敵なことでもあ

り、気を使っただけでもある。僕はそうゆうのも好きだけど、ぎくしゃくした関係の中じゃ辛いだけなのかもしれない。

ファリーナさんは言う。

「魔術師は……やはり才能重視のお仕事ですから、子供達の間でも才能に対するコンプレックスは大きかったんだと思います。ファレン様に気に入られることだけを考える親達もいましたし……」

「そう、なんですか……？」

僕の言葉にファリーナさんは頷いた。

「はい。預言書を創るより以前から、ファレン様は名の通った方でしたから。エメリナ様はファレン様に媚びを売って坊ちゃまを出世させるようなことはお考えにならなかったですけど……坊ちゃまは、母親思いですから」

エメリナ様には文句を言わないでしょう、とファリーナさんは笑う。たしかに、僕もエメリナさんと顔を合わせたときに少しだけ驚いたんだ。いつもなら『うるせえ』『黙れ』くらい言うフレイさんが、急に黙り込んでしまったから。

「だから……逆に、歳若くして才能を開花させたイルーク様の傍にるのが辛かったんでしょうね……」

「……そう、かも……しれないですね……」

どんな気持ちだったんだろう。問いかけたりなんてしたら拳骨どころじゃない話になりそうだけど……きっと、凄く辛かったと思う。期待されるのは嬉しいことだけど、それに答えられないまま、皆が離れていってしまうのは……僕でも怖い。

ふと黙り込んでしまった僕に、いけないいけない、とファリーナ

さんは両手で軽く頬を叩いた。

「すみません、暗い話をしてしまって。貴方がたのお顔を見たらちよつと前のことを思い出してしまったものですから……」

「？」

ファリーナさんは窓のカーテンを締めながら苦笑する。

「少し前に、とても綺麗な顔つきの方がイルーク様を訪ねて此処にいらつしゃったんです。その時はもうイルーク様もアンブロシアを出ていたので、エメリナ様がそうお伝えになつたんですが……」

ふと僕は表情を強ばらせた。『綺麗な顔つき』という言葉と、アイルークさんの名前……それだけで1人の人のことを思い出したからだ。

ファリーナさんは僕の様子に気付かないまま、喋り続ける。

「男性だったんですけど……クリフさんより少し年上ですね。サーシャさんを見ていると何故かその人のことを思い出してしまつて……。どうしてですかね」

ふふ、と笑つてファリーナさんは部屋を出て行くこととする。僕は慌ててそれを呼び止めた。

「あ、あの！ファリーナさん。お、お、お願いがあるんですけど……」

「はい」

振り返って首を傾げるファリーナさんに、僕は言葉に詰まりながらうろこつ言った。

「あの……そ、その人の話、サーシャさんにはしないでもらえますか……？」

唐突なお願いにフリーナさんは目をパチパチさせながら頷く。

僕ありがとうございます。とだけ言っただけで頭を下げた。理由は……もちろん言えない。一言じゃ言えないことだし、フレイさんだけじゃなくてサーシャさんのプライベートなことだから。

後で……もう少し落ち着いた頃に話そう。僕はそう考えて、部屋を出て行くフリーナさんの姿を見送った。

第1章 4

奴がこの街に来たのは3年前、あのファーレン様の孫で、天才と呼ばれてた餓鬼だったから、よく話のたねになったもんだ……。カウンタに肩肘をついたおじさんは、そう言って1つ1つを思い出すように話し始めた。

- 哀しき少年の影 -

奴が『お勤め』した家は、ここらじゃ古くから続く旧家だった。地主って分かるかい？ここから少し南に行つたところに広い土地を持つ家さ。他からの国や街から流れてきた奴らに土地を貸して、それでちよつとした儲けを得ていた。名前は、ボードワール家。この国じゃあ、ちつたあ名の通つた家柄さ。……勿論、良くはない意味でな。

ボードワール家は性根腐つたような奴が多かつた。血筋なんだかなんなんだか知らねえが、当主をはじめとして、血族も、部下も、みんな金の亡者さ。だから他の国から流れてきて土地を借りてしまつた奴は、毎日のように金に困つていた。田畑をやるにしても、商売をやるにしても、毎月ボードワール家に納める金が馬鹿高い。すかんぴんってやつだ。

ん？なんだ、嬢ちゃん。顔顰めて。……ああ、なんで先にそれを

調べておかないんだって？そこが奴らの上手いところさ。最初は甘い条件を出してよそ者呼び寄せ、徐々に首を絞めていく。もちろん俺たちのような街の人間が忠告をすることもあったが、当時のポードワール家は全盛期。何処の店にも金を貸してやっていたし、俺たちも自分の仕事で精一杯、よそから来た奴に忠告するだけの余裕がなかった。つまりは……そうゆうことさ。

まあ、話を戻そう。大人には大人なりの残酷さと事情があるってことさ。……まあ、とにかくそんな性悪金持ちの家に勤めることになった天才魔術師様。嬢ちゃんなら可哀想だと思ukai？……ああ、もちろん最初は賛否両論だった。天才なんて口クな奴はいないって言う奴、そして嬢ちゃんみたいに可哀想だと思う奴……だが奴が来て一ヶ月で、天秤は片方に傾いた。

どうゆうことかって？……奴は『天才』という言葉に相應しい、実に『有能』な人間だったってことさ。

朝の光が窓から差し込んでくる。私はゆっくりと体を起こし、カーテンを開いた。朝靄のかかった閑散とした村の風景が、私の頭を覚醒させていく。此処は魔術師の里、アンブロシア。

少し深く眠りすぎてしまった。私はそう思いながら、枕元に置いていたクロノスに手を伸ばす。ヒュペリオンは常時身に付けているが、やはり警戒を失っては武器を持っていても意味がない。私は小さくため息を吐き、そしてじっと自分の手の中にあるリボルバーを

見つめる。

平和過ぎることはいけないことだ。感覚が知らず知らずのうちに麻痺してしまう。それは何かが起った時に悔いても、もう遅い。そう……始まってしまったてからは、後の祭り。

私は着替えを済ますと、眠気覚ましに外へ出た。入り口の鍵は掛かっていない。もしかするとフリーナさんか誰かが、既に起きているのかもしれない。

「……ふう……」

玄関を出ると、私は丁度道を挟んで反対側にある一本木の前まで来た。そして改めて辺りを見回す。平野の小さな窪地に作られた村はとても長閑な雰囲気を感じ出していた。雑然とした街や都とは違う、まるで時間の流れがゆつたりとしているような、そんな感覚。私は木の幹に背中を預けると、深く息を吸い込む。済んだ空気は、肺の中に淀んだものを押し出していく。

ふと頭上に視線を向けると、そこには鳥の巣が出来ていた。子供達に荒らされない高い場所から、茶色の翼をした鳥がこちらを窺っている。卵でもあるのか、それとも雛がいるのか。警戒の視線でこちらを見つめるその視線。

「……あら、サーシャさんね」

ふと、聞こえてきた声に私は視線を移した。見ると、道の向こう側からエメリナさんがゆつくりと歩いてくる。盲目とは思えないほどの正確な足取りは、やはり魔術師ゆえといったところだろうか。

私は木から背を離し、エメリナさんに頭を下げた。

「おはようございます」

「おはようございます。……あら、そこにいるとビルギットの標的

になるわ」

目を細めて微笑むエメリナさんに、私は再び上を見上げる。早く立ち去れと言わんばかりの鳴き声をあげる鳥に、私はゆっくりとその場を離れた。

エメリナさんは私の隣で木を見上げる。

「子供達があの子の鳥のことを『ビルギット』って呼ぶのよ。フェアレン様が昔、子供達に話してくれた物語の中の登場人物」

とつても意地悪なお婆さんなの、とエメリナさんは言った。私は泣き止んだ鳥の巣の辺りから、茶色の羽毛が3つほど忙しく動き回っているのを見る。やはり雛がいたのだろう。どれも母親の傍に寄り添って、時折一匹が大口を開けて餌をねだっている。

「……………」

「……………」

私達はしばらくそうやって、無言のまま鳥の巣を見つめていた。エメリナさんはそちらに顔を向けながら、目を開かずただ微笑んでいる。

涼しい風が通り抜ける。顔をあげるといつの間にか朝靄が晴れ、空は済んだ水色へと変化していた。ふと私は視線を感じ、隣に立つエメリナさんに視線を向ける。彼女は目を瞑ったままこちらに顔を向けている。

彼女は私を見て微笑んだ。

「サーシャさんは、魔術師……………いえ、魔術の類いはお嫌いかしら？」
「……………そうですね」

私はさほど驚かなかった。私の居場所、行動、すべてが分かっているのならば、こちらの顔色が気付かれることもあるだろう。私は頷く。

「私は剣術も体術も、身を守るために必要なものは全て学びましたが……魔術に関しては才能がないので」

出来ないものが嫌いになるのは人間として当然のことではないかと思う。下手の横好きという言葉も存在するが、それはある程度出来てこそその話。かぎりなく0に近い成功率を好むものは、宗教者が道化くらいのもだろう。

ふふ、とエメリナさんは笑う。

「……正直な人ね」

「そうですね？」

私の問いにエメリナさんは頷いた。そして草原の広がるならかな斜面に盲目の瞳を向けて、柔らかな口調で語る。

「最初に『見た』ときは、貴女の心の『色』が分からなかったけれど……一日過ごして、少しずつ見えてきたような気がするわ」

「……『色』？」

「そう、『色』……」

地上から離れた太陽は雲間を過ぎてやがて空へとぼってゆく。その変化は微細なものだが、半日が過ぎれば太陽は私の背中を照らすようになるのだろう。世界は闇色に変わり、そしてまた朝がやってくる。その単調な時間が、この村ではゆっくりと過ぎていく。

エメリナさんはフレイさんによく似た口元で、彼とは全く違う微笑みを浮かべた。

「人の心には『色』がある。喜び、悲しみ、憎しみ……でもそれは複雑に混じり合っていて、同一のものは一つもないの。例えば……あの剣士の方のように」

エメリナさんは自分の屋敷に視線を移す。私もまた、それに釣られて屋敷を見た。1階の窓の前をフリーナさんが横切っていく。

「……クリフさんのことですか？」

「ええ……。彼の心は『優しさ』と『臆病』で混じり合っているようにも見えるけれど、そうじゃない。『罪の意識』と『後悔』、『憧れ』、『取り戻したいと思う何か』……」

少し憶測が過ぎたかしら、とエメリナさんは振り返る。私はその見えない瞳をじっと見つめた。あの一本木からは雛が母鳥に餌をねだる賑やかな声が聞こえてくる。

私はエメリナさんに問いかけた。

「なら、私は……。私はどのように見えますか？」

心の『色』。自分の心に対して興味を抱いたわけではなかったが……あえて言うのなら、私は人の心を見ることが出来るという力に興味を持ったのだらう。しかしその心さえも見抜いたのか、彼女は苦笑を浮かべていた。まるで小さな子供を宥めるように。

「……そうね……。貴女の心はフレイヤクリフさんのように読み取れることは難しいわ。『憎しみ』と『警戒心』、『罪悪感』、そして……『嘘』。……いえ、でもそれだけじゃないわ」

「……？」

風が丘からこの窪地へと通り過ぎていく。波のように一直線に揺れる草原。朝の香りをもたらず、青空と太陽。ジリジリと照りつけるような日差しが今日も私達を照らすのだろう。

エメリナさんは私の顔を見つめて呟いた。

「貴女は、貴女すら知らないずっと奥深いところで望んでいるものがある。でも、それを知るのは今じゃないのね……」

少し昔話をしましょうか。そう言ってエメリナさんは話を変えて歩き出した。木から少し歩いたところにある小さな泉に向かって歩きながら、彼女はぼつりぼつりと話し始める。

昔々、あるところに……と、まるでおとぎ話のように始まった話に、私はその背中を追いながら、耳を傾けた。澄んだ風が村を駆抜けていく。

「あるところに、とても母親思いの少年が1人。心優しくて勉強熱心な男の子で、彼は、天才と呼ばれた彼のお爺さんが大好きだった……」

泉はさほど深くはなく、子供達でも安心して水遊びが出来るくらいの深さだった。澄んだ水面を覗き込むと、驚いた小魚の群れがパツとその影を散らす。じつと水中をみつめると、水が噴き出している場所がいくつも見つかった。おそらく湧き水なのだろう。

「……少年はお爺さんに好かれたくて、沢山勉強をしたわ。最初は純粋な気持ちからお爺さんに好かれようとしていたけれど、時間が経つにつれて、それは母親の為に変わっていった」

「……それはフレイさんのことですか？」

私の問いにエメリナさんは微笑む。彼女は何も言わずに笑うと、

続きを話し始めた。

「やがて『お爺さんに好かれること』は少年の『全て』へと変わっていった……だから必死になったの。純粹な気持ちは建前へと変換し、心の奥底では全く別な本音を持つようになった」

水面に私達の姿が映っている。エメリナさんは水の流れを確かめるように右手を浸すと、小さな小石を一つ、手に取った。水気を払い、彼女は私を見つめる。

風が、ただ静かに通り過ぎていく。

「そして仲の良かった友人とも不仲になって……でもそんな矢先にお爺さんは突然亡くなってしまった。少年は呆然とするしかなかったわ。『全て』だったものが、急にこの世から姿を消してしまったのだから……」

彼女が放った小石は泉の中央に波紋をつくり、やがてそれはゆっくりと普段の流れへと変化していった。

今日の屋敷荒らし……じゃなかった、屋敷の中の捜索は、僕の意見で朝食後すぐに行われることになった。暗いとどんな危険がある

か分からない、っていうサーシャさんの言葉もあったおかげだけど……とりあえず僕としては一安心。
でも、ことはそんなに上手くは運ばなかった。

「フレイさん。ファーレン様の部屋を見てみたいのですが……場所はどこですか？」

「あ？……ジジイの部屋なら、その廊下の奥だ」

ファーレン様の屋敷の書庫。サーシャさんが前日蹴り飛ばした入り口の前に僕らはいた。サーシャさんは窓から光の射す廊下の奥をじっと見つめ、そしてフレイさんに視線を向ける。

サーシャさんは右手を差し出して言った。

「……少し調べて来ます。鍵を」

「え？し、調べるって……ファーレン様の部屋を、ですか？」

僕は慌てて廊下に視線を向けた。僕らの声を除けば、シンと静まり返った屋敷の中。明るいところでも、やっぱり何か出て来そうでちよつと怖い。その……ゆ、幽霊、とか……。

でもサーシャさんは気にする様子もなく頷く。

「はい。お二人は昨日に引き続き、仕掛けの解除をお願いします。

……今日中に」

「ああ……って、今日中かよー！」

「ええ。そんなに難しい仕掛けではないはずですから、全部の引き出しを押ししてみれば分かるでしょう」

それではよろしく、とサーシャさんは鍵を片手に部屋の奥へと歩き出した。僕は呆然として、フレイさんはサーシャさんが見えなくなったのを確認して一言、『面倒なこと押しつけやがったな……』

と呟いた。

そんなこんなで、今僕はフレイさんと一緒に仕掛けの解除をしている。下から上に奇数列を僕、偶数列をフレイさんが順に押し確認するっていう、とっても地道な作業だ。

「サーシャのやつ、なんで面倒なことばっか俺たちに押しつけるんだよっ」

作業中もフレイさんの文句は尽きることがなかった。よく話題を変えずに言い続けられるなあと思うくらい、ペラペラとサーシャさんに対する不満が出てくる。

「ま、まあまあ……ほ、ほら！あれじゃないですか？高いところのはサーシャさんじゃ届かないし……」

思えば昨日、この仕掛けに気付いたときにサーシャさんがわざわざフレイさんと呼んだのは、自分じゃあの引き出しに手が届かないと思ったからなんだと思う。そう考えると、ちよつと頼ってくれるようになったのかなあ、なんて嬉しく思ってしまったりするんだ。

その考えを伝えると、フレイさんは眉間に皺を寄せて僕を睨んだ。

「お前……あの引き出し、俺でもギリギリだったんだぞっ。それに椅子でもなんでも持ってきてくりゃいい話じゃねえか！」

「た、確かに……」

僕は手を止めてそう呟いた。フレイさんはまたブツブツ言いながら作業に戻る。僕はまたしゅんとしながら引き出しを確認する作業に移る。

単調な作業を続けていた僕は、僕の身長より少し高いところの引き出しを押ししていたときにふと違和感を感じた。今まで何個か仕掛

けらしいものを見つけたけど、これはなんだか感触が違う。不思議に思って引き出しを開けると、その側面に一枚の紙が挟まっていた。

第2章 1

ねえ、こっちを見て、こっちを見てよ。新しい魔法を覚えたんだ、誰にも負けなくらい凄いやつ。絶対あいつには負けない、見たら絶対驚くよ。だから、ねえ、こっちを見て……。お願いだから……。

- 過去の幻影 -

ファーレン様の寝室には鍵がかかっているだけで、書庫のようにかんぬきがされた様子はなかった。

「……………」

室内は薄暗かった。死人の部屋だからだろうか、窓には黒い布地のカーテンが閉じられている。微かな光が漏れるそれを開け放ち、窓を開くと部屋の中に澄んだ空気が舞い込んでくる。

寝室は、書庫とは違いこじんまりとしたものだった。ほぼ正方形に近い部屋の中、入り口から見て左側に出窓があり、正面にバルコニーが見える。他の部屋と雰囲気が違うのは角部屋だからだろう。出窓の隣には本棚が1つあり、入り口の右側にはベッドと、古い机が1つ。机の前には村の風景らしき一枚の絵。本棚の前に置かれた

1人用のテーブルとソファの上には埃が積もっていた。

「……………」

私は再び辺りを見回した。本棚の本はそのままだがベッドは整理されている。朽ちるに任せるとはいえ、ファーレン様が亡くなった時のままにされているはずがない。もしそうなら……………それを知ったクリフさんが明日から此処に来なくなるに違いない。

「机はそのまま、ですか……………」

私はゆっくりと机の前に立つ。その引き出しを開けると、意外にも中身は雑然としていた。天才と呼ばれる人間でも片付けに自身はなかったのか、それとも……………。私は中身を1つ1つ確認することにしました。

古びた羽ペン、魔法陣のような奇妙な模様の書かれた紙。時折書庫にあったような文献も顔を出す。おそらくファーレン様は亡くなる直前まで書庫と寝室を行き来する生活を送っていたのかもしれない。

一通り見終えた私は、次の段へと手を伸ばす。中身はどれも似たようなもので、乾いたインクや、帝国時代の珍しい本らしきものが一、二冊見つかったただけだった。やはり、此処には何もないのだろうか。

「……………？」

ふと最後の段に手を伸ばしたとき、私は違和感を覚えて首を傾げた。何かが指先に触れる感触。微かに嫌な予感を感じて手を離れた。その時、開け放しておいたはずの扉が開く音がした。

「!？」

確かに、扉は開けておいたはずだった。部屋の中に籠った空気を入れ替えるために、廊下の窓を開けて風を通していたはずなのだから。

人の気配に私は咄嗟にクロノスへと手を伸ばしていた。気配は1つ。相手はおそらくあの二人ではない。クリフさんならば1人で歩き回りはしない、そしてフレイさんならばこんな風に……こそそ入ってくる必要はないからだ。

「！」

クロノスを構えかけた私は、机の影から現れた影に手を止めた。そこから現れたのが、思いもよらず小さな人間だったからだ。茶髪に赤っぽい瞳をした小さな少年。息を切らしながらも辺りをキョロキョロと見つめて、先ほど私が開けようとした一番下の引き出しへと手を伸ばす。

「……私が見えていない……？」

少年は何度も私を視界に入れながらも、目をあわせることはなかった。私はハツと顔をあげて辺りを見回す。先ほどまで埃だらけだったテーブルの上には数枚の紙とペンが乗り、ベッドの上には綺麗にシートが敷かれていた。開け放した窓はそのままだが、そこにはたしかに人が生活をしている空気が残っている。

「これは……」

『過去の幻影だ、トウアスの子孫』

背後で聞こえた声に、私は咄嗟に振り返る。するとそこには、ベ

ツドに腰掛けた状態でこちらを見つめる男の……いや、ネオ・オリ
でフレイさんが喚び出したあの鈴人の姿があった。左頬の深い傷痕
が、私の記憶の中から彼の記憶を呼び覚ます。

私は振り返って彼を睨む。

「……そう呼ばれるのは好きではありません。どこからそんなこと
を？」

『フツ……我ら精霊は人と何ら変わらない。住う世界が違うだけで、
人と同じように群れをなして暮らす……風の噂を耳にしただけだ』

私は額を抑えてため息をついた。魔術さえ理解に苦しむ私が、精
霊達の噂にのぼるといふのは滑稽な話だ。大体私の想像力がついて
いかない。

ふと視線を机に戻すと、先ほどの少年が引き出しの中から何かを
見つけ出したようだった。少少り目で、ひねくれたような顔つき。
私の予感を代弁するように鈴人は言う。

『そいつは10年前のあの餓鬼だ』

「餓鬼……フレイさんのことですか」

少年は引つ張り出した一枚の紙を見つめ、何かを唱え始めた。イ
デア・トゥルーン・レ・ヴァルナ……、彼はそれを繰り返す。これ
はフレイさんが唱えていたあの言葉。鈴人はそれを冷めた目で見つ
めながら呟いた。

『その餓鬼は10年前、此処で俺を喚び出した……他の魔術師に先
を越された屈辱と勢いのみでな』

少年は何度も何度も呪文を唱える。こちらに背を向けた彼の背中

からも、焦りや悔しさのようなものが滲み出ているようだった。子供らしい、子供っぽい、幼稚な感情。それでいて何よりも純粹なやりきれない思い。

ふと、少年の目の前に人影が現れる。それはベッドに座っているあの蛉人だった。これが過去の記憶と言うのなら、今この場に現れた彼もまた過去の記憶の一部なのだろう。

私はベッドに視線を戻した。蛉人はこれといってめばしい表情も浮かべずに、淡々と語る。

『……深い眠りを妨げるようにその餓鬼が名前を呼んだ。あまりの五月蠅さに殺してやろうかと思ったが……』

「止めたんですか」

私の言葉に蛉人は頷く。それはフレイさんがファーレン様の血縁だからなのか、それとも彼の気分だったのか。再び少年に視線を戻すと、蛉人と少年の会話が聞こえてきた。

『なんでだよっ！』

地団駄を踏む少年、冷酷に見下ろす蛉人の瞳。

『同じことを言わせるな。全ては魔力の一言だ。オマエには我の力に耐えうる魔力も、我を使役する理由も何もない。ただ屈辱なだけだ。……違うのか』

拳を握りしめ唇を噛む。それは本当のことを見透かされた悔しさなのだろう。しかし相手が子供であろうと容赦なく降り注ぐ、残酷な現実という言葉の雨。

過去の彼の瞳は、弱いものを見る目ではなく、ただの1人の人間を見る目だった。

『オマエには資格がない。我を使役するだけではなく、魔術師として在ること自体だ』

『その歳で何を理由に力を望む……くだらないもののために使役される精霊など、低級精霊であろうとも存在しない』

ふと背後に鈴人の……『現在』の時を生きる鈴人の気配を感じて、私は振り返った。指先がクロノスを弾く。やはり機械人形や人間と違う気配は読みにくい。ついとっさに指がバレルに伸びてしまう。

彼は私の様子を冷静な瞳で見つめながら言った。

『……もうすぐ幻影が消える』

「そうですか」

私は頷き、そして引き出しに視線を向けた。過去の幻影がゆつくりと薄れていく。悔しそうに拳を握りしめた少年の後ろ姿、開放された引き出し、生活感のある寝室。それはまるで寝室のうえに重ねられたもう一つの寝室の風景が、風に流されていくかのよう。

鈴人の気配が動く。私は顔をあげると、誰もいなくなった部屋の本棚の前に立つ彼の背中に問いかけた。

「1つ……いえ、2つほど聞きたいことがあるのですが」

『……答えを保証はしない』

背を向けたまま彼はそう言う。十分です、と私は答えた。彼が『言えない』ことは十分理解している。それは時に『言える』ことよりも正直に物事を教えてくれるからだ。

開け放された扉から風が通るのを感じながら、私は問いかける。

「では、1つ……この幻影は、誰が、何のために仕掛けたのですか」

引き出しに触れた指先に、微かに赤黒い液体らしきものがついていた。フレイさんが鈴人を喚び出す時に自分の血を使っていたことを考えると、あれは誰かの仕掛けた幻影の魔術としか考えられない。しかし、誰が、何のために？

鈴人は首だけを少しこちらへ向ける。

『……我が答える必要があるのか』

「……。……では2つ目です。貴方は何故、私の目の前に？」

私の言葉に彼の口元が緩んだ。しかしそれは安心できるような笑みではなく、気の抜けない食えない人間の浮かべる微笑み。

『……トウアスの子孫よ、この世界はオマエが見ている世界だけではない。我ら精霊の世界はこの世界と共に存在し、人間の干渉を許さない。しかし……』

鈴人は本棚に手を伸ばす。しかしそのしっかりとした腕は本棚を通り抜けた。まるで彼の体が透き通っているかのように。

『世界には幾つか、我らの住う世界との接点がある。この村が良例だ。特に、此の屋敷はな』

「……接点」

私は呟きながら、先ほど少年が開けたあの引き出しに手を伸ばす。開け放されたはずの引き出しは再び締められた状態に戻っており、私はもう一度慎重に中身を確認する。しかし中に入っていたのは、どれも重要性のなさそうな小物ばかりだった。

『他に聞くことがないのならば……我も行こう』

鈴人は振り返ると、そう言った。その姿が微かに翳り、確かにそこに在った気配が風によって流されていく。私はその姿が完全に消え去ったのを確認してため息を吐く。

やはり魔術や精霊といった類いのものは、慣れない。

「『清き水の流れに耳を寄せ……龍神の心臓に光の矢を放つ？さすれば……』……あれ？文字が消えかかっている……」

僕は紙を陽の光に透かすように、天井からの光が差し込む書庫の真ん中へ後ずさった。なんとなく、筆圧の跡で読めそうな気がするんだけど……。『さすれば』の跡がはっきりと見えてこない。

「ええと、『さすれば』、『さすれば』……」

「テメ、クリフ！勝手にサボるんじゃ……っ！？」

椅子に乗って高い所の引き出しを押していたフレイさんが、上から怒鳴りつけてきた。僕は吃驚してそのまま後ろへと転びそうになる。バランスを崩した瞬間、立て直すことが不可能だと瞬時に理解した僕は、手をつこうと右手を後ろへと回した。

でも、転ぶ刹那の時間は、思ったよりずっと長かったんだ。

「っ!?!?」
「!」

僕らはそれぞれ全く違う反応をしていた。フレイさんは伸ばした右手が思ったよりも奥に入っていたことを驚き、僕はいつまで経っても床にぶつかる感触がないことに驚いていた。

「!クリフ!」

先に状況を悟ったのはフレイさんだった。フレイさんが引き出しの仕掛けを解いた瞬間、書庫の床の中央部分が突然欠落したんだ。丁度中央に経っていた僕の体は、床の欠落と共に闇の中へと放り出された。お、落ちる!

闇に飲み込まれるように、視界がどんどん狭まっていく。咄嗟にフレイさんが何かを唱えたのは見えたけれど、僕が落ちるスピードは恐ろしく早かった。

耳元で風を切る音が聞こえる。天井が一気に遠ざかっていく。いつまで経っても訪れない床との接触到、僕は背筋がヒヤリとした。もし硬い地面や瓦礫にぶつかれば……恐ろしいことになる。

「……っ!」

僕は声を詰まらせた。その瞬間、風が僕の体を包む。遠い書庫の風景に、フレイさんの姿が見えた気がした。そして次の刹那、今度は冷たいものに体を覆われて、僕の意識は遠ざかりそうになった。響き渡る水音。何か重いものを放り込んだ時のような、そんな音だった。

「クリフっ!」

耳に響いたのはくぐもったフレイさんの声。薄れた僕の意識が微かに戻りかけた。そして。

「ッ！ゴホッ、ゲホッ！……み、水！？わぷっ……！」

暗闇の中で、僕は溺れそうになっていた。遠い書庫から照らし出される光はここまで届かない。辺りは真っ暗で、支えるものが何処にあるかも分からない状態。水面から顔を出して呼吸するのが精一杯な僕は、水が鼻に入ってくる不快感に耐えながら叫んだ。

「ふ、フレイさっ……うぷ、お、……溺れ……ッ！」

混乱と溺れかけているせいでフレイさんの姿をはっきりと捉えることが出来ない。でも何かが上がから下りてくるのを見て、僕は右手を強く掴まれたのを感じた。

第2章 2

我ら精霊の住う世界と人間の住う世界。それを繋ぐ場所が所々に存在する。それは『接点』。かつてこの地に生きた人間達は精霊との交わりによって特殊な能力をあみ出し、やがて『魔術師』と呼ばれるようになった。あの魔術師の生きた地、その接点を我らは『ナラカ』と呼ぶ。

- 接点『ナラカ』 -

「ゲホツ、ゴホツ……あ、ありがとうございます……」

僕は咳き込みながらそう言った。目の前に立つサーシャさんは、いえ、とだけ答えて辺りを見回す。

地下に落ちた僕を助けてくれたのは、床の落下音を聞いて書庫に戻って来たサーシャさんだった。よく見ていなかったけど、もしかすると書庫から飛び降りて、僕を水の中から引き上げてくれたのかもしれない。

サーシャさんは上を見上げてフレイさんに言う。

「フレイさん、ランプをお願いします。暗くて周りがよく見えないので。あと、ロープのようなものがあれば」

「あ、ああ。ちょっと待ってる……」

フレイさんはそう答えて姿を消した。僕は上着を脱いで水を絞り出す。服が体に張り付いてなんとなく嫌な感じだ。体が冷たく感じる。

改めて上を見上げると、抜けた床がずっと高い位置にあった。濡れた服のせいだけじゃなく、体がぞつと震えた気がした。サーシャさんは僕の視線を追って上を見上げると、髪をかきあげて言う。

「それにしても落ちたのがクリフさんで良かったですね。フレイさんなら水面まで上がってこれるかどうか」

「サーシャさん……それ、どっちのフォローにもなっていないです……」

サーシャさんは上着を脱ぐと、同じように水を絞り出して近くにあった岩に掛けた。そしてもう一度水の溜まっている場所に歩み寄り、片手を水面に伸ばした。上ではロープを見つけてきたフレイさんがランプをくり付けて下ろしてくれる。水滴を払ってランプをつけると、辺りの様子がはっきりと見えてきた。

「！サーシャさん、あんなところに扉が……」

僕らのいる場所の向こうには川のようなものが通っていて、その向こう岸に1つの扉が取り付けられていた。お屋敷の中みたいにしつかりした扉じゃなくて、どこかの安宿にありそうな扉。よく見ると、石で出来た簡単な飛び石がある。

サーシャさんは水滴を払うと、書庫からフレイさんが下りてくるのを確認して歩き出した。飛び石がしっかりしているかを確認して、向こう岸へと渡ってしまふ。

「さ、サーシャさん!？」

「面白そうですし、奥へ進んでみましょうか」

この状態で、と言いつうになつたけれど、僕はその言葉を飲み込んで歩き出した。こつこつ不穏な場所に限ってサーシャさんがやけに生き生きしてるように感じるのは気のせいなのかなあ……。僕とフレイさんは互いに深々とため息をついてしまった。

波の音は1つとして同じものがない。風も、空の色も、人の会話も、空気の流れも。私なら、それはきつとエラーという部類に入ってしまう危険なもの。同じものばかりの、変わらないものばかりの世界で造られた私には、それがとても危険で、恐ろしい。今はまだジュリアのメンテナンスによって幾分改善したけれど、やはり定期的な点検は必要不可欠。

日暮れの港町を見下ろしながら私は外を見ていた。正確にいうならば、アイルークからしばらく休んでいるように言われて、宿の窓から外を眺めることでこの街の周辺マップを記憶装置の中に作成していた。人のように休むことは私には出来ない。完全停止か、他に何かをするか。だから周辺地図を頭に入れていたのだが、宿の窓から見える範囲はたかがしれてしまっていた。すぐに私のマップ作成は終わってしまったからだ。

「シルヴィ、ジェイロードから連絡が……。……。何してるんだ？」

振り返ると、アイルークが扉から顔を出していた。この街で落ち合う予定が長引いているのだ。少し遅れるかもしれないとは聞いていたが、やはり計画は順調にはいかないらしい。

私は出窓から離れる。

「……。シルヴィ、日照時間計ってた」

日照時間を計るのはエネルギーを節約出来る行動の1つだ。周辺マップより使用用途は少ないが、それでもそこから翌日の天気やこの周囲の地形を知ることが出来る。

アイルークはなんともいえない表情をしていた。私はアイルークの目の前まで来ると、ジェイからの指示を促す。

「アイルーク、ジェイは？」

「あ、ああ……。随分長引いたけど二、三日中にこっちに着くそうだし船の予約を取っておけて」

「……。うん。シルヴィ、分かった」

私は頷くと、改めてアイルークを見上げた。こちらの視線に気付いたのか、アイルークは首を傾げる。

「ん？顔に何かついてるか？」

頬をかくアイルーク。私はその顔をじっと見つめ、そして首を傾げた。

「……。アイルーク、へん」

「えっ、顔が!？」

それは大変だ、と慌てて部屋の鏡で顔を確認し始めるイルルク。私はそのローブを掴んだ。私が言いたいのは顔の形の話ではない。いつもなら自由行動中に嬉しそうな顔で街へと繰出していくイルルクが、珍しく宿にこもりきりでいることだ。本人曰く『一日3人の女性に声をかけないと死んでしまう』のに、ここ数日は私としか会話を交わしていない。

「違う。イルルク、そわそわしてる。……調子悪い？」

人は体調に異変をきたすと、普段の様子から変化する。顔が青くなったり、フラフラしたり。イルルクはどの症状とも違うけれど、たしかに以前とは違う。

振り返ったイルルクは困ったような笑みを浮かべると、私の頭をぼんぼんと撫でた。

「……大丈夫だって」

「……」

苦笑するその笑顔に、私は体の何処かが締め付けられるような感覚がした。何か、コードばかりが収められた胸の奥に、わだかまりがある。私……嫌ダ、この感じ……。

不快、という二文字が弾き出される。でも何故。相手はイルルクなのに。ジェイとイルルクは、私の中に位置づけられた、最も重要で大切な人間なのに。

分カラナイ……クリフの時みたい……。分カラナイ……分らない？どうして、分からないの。本当は分かっているのに。

『……それは、シルヴィがそれを知りたいから』

どこかで声が聞こえる。でも耳に取り付けられた聴覚機器は反応を示さない。誰の声……？聞き覚えのあるような、ないような。それでも、その言葉は私のわだかまりを言い表すにはあまりにも的確だった。

「……シルヴィ、知りたい。知りたいのは、いけないこと……？」

分からない。だから知りたい。知るということは理由と要因を求めること。知ることのでられるのは答えとは限らないと理解しているけれど。

でも、知りたい。

アイルークはふと顔から笑みを消して、額を抑えて俯く。

「……。……ちよつと昔のことを思い出してた。それだけ」

「昔のこと……子供のときのこと？」

昔というのは大体10年以上前のことを指すとジエイが言っていた。けれどそれは人によつて差があり、5年前を昔と呼ぶ人もあれば、3年前を昔と言う人もいる。それなら造られてまだ1年の私には『昔』はない。もちろん造られた時からこの形の私には、子供のころ、など存在しない。

アイルークは部屋の扉を閉めると、ベッドに腰を下ろして苦笑した。もう少しこの部屋にいてくれるのだろうか。私はなぜか嬉しくなつて、その隣に座つてアイルークの話に耳を傾けた。

「俺の子供の時は……まあ、あんまり可愛い子供じゃなかったな」

ま、女性に対するマナーは昔から身につけていたけどな、と何故かアイルークは胸を張ってみせる。良くは分からないけれど。

子供、というのは生まれてまだ何も分からない小さなもの。私は

大きいからだがあるけれど、まだ子供だってジュリアが言っていた。私はアイルークを見上げる。

「……ジエイ言ってた。ヒトは小さいとき、親に守られて育つんだって。ヒトは動物とは違っていているけれど、その習慣だけは変わらななんだって。……アイルークも、そうだった？」

「……」

また、だ。私は瞬きを繰り返す。この間、街を歩いている時に見せたあの表情。いつもと違う、形容出来ないような複雑な表情。私はまたアイルークのローブを掴んだ。そうしないと、またアイルークが話を変えてしまいそうな気がした。

アイルークは頭をかくと、大きく息をついて呟いた。観念したかのような、そんなため息にも思えた。アイルークは口を開く。

「……ああ。たしかに、いた。でも……」

「でも？」

膝の上で手を組んだまま、アイルークは俯いた。その横顔は私が今まで見てきたどの人間よりも、哀しい瞳の色をしていた。

「『あんな奴最初からいなければ』……何度も、そう思ってた」

地下空洞とでも呼ぶべきか……そこにあつた扉は、多少歪んでいたもののサーシャの力で簡単に開いた。ランプを掲げて中を照らすと、意外にも中は何処かの神殿のように飾りのついた支柱が立ち、壁はしっかりと補強されている。石畳が続く通路は、まさに回廊だった。

「凄い……何処かのお城みたいですね」

俺の前を歩くクリフが辺りを見回してそう呟いた。サーシャは石畳の脇に座り込んで、端を流れる水を見つめている。俺はなんとなく嫌な予感を感じて辺りを見回した。さっきから感じていたが、なんとなく空気が重い。水によって清められた空気が、肩にのしかかってくるようだ。

「……どうかしましたか？」

サーシャが立ち上がってこちらに視線を向ける。俺は首をかきながら呟いた。

「……どうやらここ、『ナラカ』の中心部らしいな」
「ナラカ？」

首を傾げるクリフ。俺は頷いて、近くにあつた支柱に視線を向けた。そこに刻み込まれた飾りは、人ならざるものを描いているように見える。

「ナラカっつーのは……まあ、いわばこつちの世界とあつちの世界の交わる地点、みたいなもんだ。先に言っとくが『あつち』っつーの

は死後の世界じゃねえぞ」

悲鳴をあげかけたクリフが、ふと瞬きをする。ランプを片手に戻ってきたサーシャは支柱の飾りを見つめて呟いた。

「あちら、とは精霊の世界ということですか」

「ん？ああ、まあな。もともとこの村はこのナラカから吹き上がる魔力を利用しようと作られた。この屋敷はその真上に立っているってガキの頃に聞いたことがある」

だが、強過ぎる魔力は力を持たない者には危険になることが多い。だからこそこの屋敷はジジイにしか使うことが出来ず、ジジイの力の象徴みたいなもんだった。ガキのころおふくろに言われたことがある。ジジイの家で遊ぶのを咎めはしないが、接触点ナラカに近づいてはいけない、と。そのころはナラカの場所すらもよく分からず、探し出そうともしなかったが……。

俺は肩にかかる圧力を感じながら言う。

「あつちの世界と交わる場所を接触点つーんだが、ナラカってのはこの土地の接触点の名前だ。村に住む奴なら知ってるが、正確な位置までは……」

「……そうですか」

サーシャは頷いてランプを掲げる。通路の奥にはもう一つ扉があるようだった。今度は割としっかりした、石造りの扉。いったいこの地下通路、何処まで続いているんだ。

サーシャは俺たちに背を向けると、扉の方へ歩み寄っていった。慌てたようにクリフがそれに続き、俺は辺りを見回しながら呟く。

「あんまり近づかねーほうが良いぞ。間違っであつちの世界に迷い

込むと、魔術師でも戻ってくるのは……」

精霊の住む世界はこちらとは違う神聖な場所。人間を不浄の者として扱う精霊や蛉人は、人間に自分たちの住処を干渉されることを嫌う。まだここは入り口に過ぎないが、あの支柱とこの石畳……城でもないところにこんなもんがあるってことは、これはおそらくあちらの世界のモノだ。奴らの癩に障ってしまえば普通の人間なら一発であの世往きだろう。

しかし俺の忠告を聞いていないのか、サーシャは扉に手をかけると、あっさりこう言っただけだ。

「……開きました」

コイツいつか痛い目を見る。

第2章 3

良いか、アイルークは特別なのだ。お前達は間違っても儀式を行ってはいかん。大丈夫、お前達も大きくなれば精霊を召喚することも出来るであろう。だから他の者達は決して、真似をして召喚の儀式を行ってはいけない。

分かったか？

- 暗黒の迷宮 -

「有能って……どつゆつこと？」

私は葡萄ジュースを飲み干すと、カウンタ の向こうでカクテルを作るおじさんに聞き返した。おじさんは口端を片方だけあげて苦笑すると、店員にグラスを渡して、もう一度私に視線を向ける。

「あんまりこんなこと嬢ちゃんに話すのはあれだがね……奴は主人によく従ったんだ。金が納められないやつは次の月まで待つ代わりに、利子を引き上げる。それでも払えない奴はちよつと裏の世界へご招待、さ」

嬢ちゃんならなんとなく分かるだろう、そう言われて私は随分前

にお母さんが言っていたことを思い出した。世界にはお金に困った人や、貧乏でどうしようもない人を高額で買い取る場所がある。メーリング家の農園みたいに死ぬまで働かせ続けたり、エレンシアのように殺し合いをさせて賭博をしたり……。そんな場所が、この世界には沢山あるんだって。

そしてそこへ売られた人たちはボロ雑巾のように使い捨てられて、屍の山をつくる……。

「あの辺りの土地の人間は3、4年で半数が知らない顔に変わった。もちろん、代わった奴らがどうなったのかなんて、俺たちには見当もつかない」

「う……」

飲むかい、とおじさんに葡萄ジュースの瓶を差し出されたけど、私は顔を顰めて首を横に振った。そんな話を聞かされちゃうと食欲も失せちゃうよ……。

そのアイルックって人は、あの『魔術師サマ』の従兄弟で、同じあのファールン様の孫で……。それでいて誰よりも優秀だった人。でも魔術師で優秀ってというのは、良い面も悪い面もそのままってことなのかな。まだ調べ始めて日が浅いからなんとも言えないけど、そんな人が優秀って言われるのは、なんだか違う気がする。

小さい子は、自分より出来る子がいると無意識に嫉妬する。それで喧嘩したり、徒党を組んでいじめたりする。でも根が良い子ならいつかはきつと認めてもらえるものだと思ってるんだ。家でカレンやダン達の面倒を見ると、なんとなくそう思うから。

でもマイナス面が多い子ほど、苛め続けられたりする。それは本当に些細な理由だったりするんだけど……。マイナスから見る人間は、悪い所が更に悪く見えてしまうもの。だったら、このアイルックって人も最初からこんなに性格が悪かったわけじゃないんじゃないかな。そうじゃなければ、誰も嫌いな人を『天才』なんて呼ば

ないもん。

「その人、このお店に来たことないの？」

私はカウンタに齧りついておじさんに言う。おじさんは髭を触りながら天井に視線を向けた。

「ん？ああ……そういえば一度だけあったな。まだボードワール家に来たばかりの頃だ……」

そう言っておじさんは、古い記憶を手繰り寄せるように、1つ1つを思い出しながら説明してくれた。

あれは小雨の降る夜だった。天気の良いか客足が伸びず暇をしていたとき、がやがやと団体の客が入って来た。すぐに分かったよ。ありやボードワール家に勤める奴らだってな。魔術師連中が鼻を高くして入ってきたのを見て、それまで飲んでいた奴らは勘定を払ってそそくさと帰っていったり、急に酒が不味くなったような顔をして困っていた。

当主は居なかったが、店に入ってきたのは魔術師から下働きまで、16、7人つとところかな。奴は一番後ろで、最後に店の中に入ってきた。やつは栗色の髪を肩の辺りまで伸ばしていて、最初は顔が

よく見えなかったな。酒の席でも何も言わず、他の魔術師連中がこぞって酒を勧めるのを首を横に振って断っていた。

『……まだ、子供なので』

酒を持っていった俺はたまたまその声を聴いた。はつきりとはしなかったが、15のガキにしちゃ可愛げの無い、感情も起伏もないしけた返答だった。

『ははっ。またまた、厳しいのはファーレン様の教育ですか？』

同じ魔術師らしいローブを着た男がそう言っても、奴は

『別に……』

と言ってそれ以上を語らなかった。周りの奴らは肩を竦めて苦笑すると、奴のことは放って自分たちで騒ぎ始める。奴はしばらくその場で軽い食事をとって、そして騒ぎが終盤に差し掛かって来た頃に椅子から立ち上がった。

外は雨が本降りに代わって、車軸を流すような大雨と、何処か遠くで響く雷鳴の音が轟いていた。

『おや、アイルーク様。お帰りですか？』

『……ええ、先に屋敷の方へ戻ります』

『しかし外は雨ですよ』

『構いません』

奴はさっさと立ち上がると、仲間がいるテーブルから離れていった。カウンタの前を……そうそう、丁度この辺りを通っていったんだ。あの頃はまだチビで、背も嬢ちゃんよりちょっと高いくらい

だったかな。まあ、テーブルにいた仲間も奴が帰ることを知って、ほくそ笑んでいるようにも見えたがな……。

扉を開けると、雨音がいつそう激しく木霊してきた。うちの店員が止めようとしたが、奴は雨も気にせずに街の中へと消えていった。あとで来た客によると、雨宿りもせずにボードワール家の方へ向かうガキを見た、と……。

街の人間も、同じボードワール家に仕える仲間達も、奴のことは誰も好いぢやいなかった。唯一奴を手なづけていたのは当主一人だったからな。……ん？じゃあなんで当主を殺したんだって？……残念ながらそれは俺には分かりかねるな。

当時あの騒ぎは街中を駆抜けた。色んな奴が色んな推測を立てたもんさ。奴は気が狂ったんだとか、当主からも見放されて自暴自棄になったんじゃないか、とか。本当のところは本人しか知らないだろう。ただ1つ言えることは……そうだな。

奴が主人を殺す直前、見慣れない男が此処の街を訪れた。切れ長に、身なりの良い金髪の男だったって話だ。ウチの店じゃないが、ここら辺の店の何軒かに奴の居場所を聞いて回ってたらしい。……どうした？嬢ちゃん。顔色が悪いように見えるが。なんでもない？ああ、ならいいが……。

『……アイルーク・ハルトという男を捜しているんだが、彼の居場所を知っているか』

その男は宿の女主人にそう問いかけた。この店の真向かいにあるあの宿さ。未亡人の女主人が1人で切り盛りしてるんだが、噂でその男のことを知ってた彼女はこう助言をしたらしい。

『あんたかい？あの男を捜してるってのは……。こう言うのはなんだがね、近づかない方が身のためだよ。奴はボードワール家に仕える魔術師だからね』

当時は奴がいるせいかわどわい家の権力が更に増していた頃だった。誰もその言葉を口にしないようにしていたから、彼女も適当にあしらおうとしたが、男が随分しつこく聴いてくるからついでに言っちまっただ。

『そんなこと言われてもねえ……そんなに会いたければ南街の外れにある、門の前に大きなトネリコの木が植えてある家の前で待つと良さ。……今日はその人間が連れていかれる日だからね』

それで、その男はそこへ行ったのだった？……さあ、どうだろうな。その男のことはそれ以来噂にならなかった。まあ、あのファール様の孫みたさでここに来る人間もいないわけではなかったし、珍しい話じゃなかったからな。

俺が知ってるのはこれくらいのもんさ。……葡萄ジュース、おかわりするかい？嬢ちゃん。

「……扉が、3つありますね」

扉の向こうは正方形に近い形のデカイ部屋だった。四方を4つの支柱が囲み、前後左右に扉がある。サーシャは3つと言ったが、俺たちが入ってきた扉も含めれば4つだ。

サーシャは真つすぐ前方の扉を確認し、クリフは右方向の扉に手をかける。

「……真つすぐに繋がっていますね」

「あ、こつちも通路みたいになってます」

どうやら扉の向こうは更に奥に続く通路になっているらしい。この分だと左方向も同じようになっているんだろう。俺は頭をかきながら左の扉を開ける。確認してみると、こつちも同じように通路が先へと繋がっていた。妙な作りだ。全く同じ方向に続くのならば、サーシャのいる扉だけでいいんじゃないかねえのか？

クリフは通路の向こうに目を凝らして言う。

「んー……あ、これもしかしたらサーシャさんのところに繋がってるかもしれないです。左に曲がるようになってる」

「あ？……そっついやこつちも右に曲がれるようになってるな」

クリフの言った通り、通路は繋がっているように見えた。クリフの声が通路から反響して聞こえてくる。それにしてもなんつー造りをしてるんだ此処は。迷路じゃねえんだから。

サーシャは俺とクリフに視線を向ける。

「面白そうですね……では分かれて進んでみましょうか」

「ええっ！！」

クリフの顔色がさっと青くなる。一人で歩き回るのが怖くなったんだろう、咄嗟に抗議を口にしよつとしますが、サーシャが先手を打つ方が先だった。

「すぐそこですから」

「う……」

よろしいですか、とサーシャは俺に視線を向ける。俺が頷くと、サーシャはさつさと奥の扉へと入っていった。俺は半泣き状態のクリフを無視して扉の中へ入る。向こうからも扉が閉まる音が聞こえてきた。おそらくクリフも観念したんだろう。

通路はとてつもなく長い箱の中を連想させた。此处には支柱も何もなく、壁には燃え尽きることのない炎が足下を照らしている。これもナラカに漂う魔力を利用しているのか……？

通路には足音と、1人ぶつぶつ呟くクリフの音が響いていた。あいつの独り言でけえな……それともこの通路自体が響きやすく造られているのか？

「うつつ……サーシャさあん、フレイさあん……」

「お前はガキか！」

この分だと合流した時点で抱きつかれそうだ。あいつちゃんと周り見て歩いてんのか？

合流地点は思ったよりも遠かった。それでも近づくとつれてこっちの足音もはつきりと響いてくるようになってきたらしく、クリフも徐々に慣れてきたようだ。あっちの方が俺より早いのか、曲がり角から声が聞こえてくる。

「あ、着きましたよ二人とも……って、ああーっ!!」

耳を劈くような叫び声に、俺は拳を作って曲がり角を曲がる。前から我慢していたが……こいつ、一発殴って根性叩き直してやる。いちいち叫ぶんじゃない……。

ない、と怒鳴ってやるうとした時。俺は合流地点に座り込んで呆然としてるクリフの姿を見た。その指先が真っすぐに中央の壁へと

向けられている。壁……かべ!?

「なっ……!?!?どうゆうことだ、サーシャはっ!?!?」

「そ、それが僕にも……!」

どうゆうことだ。3つの通路は全て繋がっているはずだった。合流地点がどうしてサーシャの部分だけ塞がってやがるんだ!?!?クリフは壁に手をつけて軽く叩く。しかし伝わってくるのは厚い壁の感触のみ。俺は俺とクリフが来た通路を確認するが、サーシャの姿はない。

「もしかしたらさっきの部屋に戻ってるかも……っ!」

「ちよっ……待て!」

駆け出そうとするクリフの襟を俺は掴んだ。この通路に入る直前、俺とクリフは両端の通路が繋がっていることを確認した。その時にこの通路が塞がっていたのなら、サーシャはそこで気付くはずだ。ちよっとしたことにも人を使うサーシャが、労力を使ってまで塞がった通路を確認しに行くわけがない。

俺は辺りを見回す。すると俺たちのいる中央の石畳が軽く浮き上がっていた。俺はそれを掴んで外し始める。焦っていたクリフも冷静になったのか、俺を手伝って石畳を外し始めた。

石畳の下は土が敷いてあった。俺はそれを払う。するとそこにあったのは……一枚の硝子。クリフがハッと声を上げる。

「フレイさん!サーシャさんが下に……」

「!?!?」

硝子の下には別な通路が通っていた。サーシャの姿が俺たちのいる場所の下を通っていく。合流地点に着かないことが気にかかるの

か、時折辺りを見回しては顔を顰め、奥へと進んでいく。

「サーシャさんっ」

クリフが硝子を叩く。薄い硝子はクリフの手で微かに揺れるものの、サーシャは気付かない。チツ、魔力が掛かってやがんのか。この通路の反響具合を見る限り、こちらに反響して下は防音になっているとしか思えない。

俺はクリフを下がらせ、親指に歯をたてて滲んだ血を硝子に押しつけた。描かれた魔法陣は、物質に影響を与える力。はつきり言ってこうゆう繊細な魔術は最も苦手だ。

「クリフ、叩き割るぞ！」

「えっ！？で、でも……」

「俺が硝子の強度を弱らせる。お前はそれを割れっ」

通路を一度戻ってサーシャの入った扉から追いかける方法もなくていい。とはいえ、そこまで戻っているうちにサーシャは先に進んでいくはずだ。

クリフはいつものように嫌がったりはしなかった。しつかりと頷いて、剣の鞘の方を掴むと柄を下へ向ける。やけに聞き分けが良いのは相手が殺人形じゃないからか、それとも緊急事態だからか。

陣を書き終えて指先に力を込める。微かな光の粒子が集まり始め、硝子の表面が波うち始める。俺がクリフに合図を送ると、クリフはレイテルパラッシュの柄を硝子へと打ちつけた。

第2章 4

二人の気配はない。真つすぐに続く通路には終わりが見えなかった。かすかに聞こえてくるのは水音のみ。向こうにまた川が通っているのだろう。私は真つすぐに進んでいく。

やがて通路の終わりに階段があった。これが二人の言っていた合流地点ではないと理解していたが、私は興味と好奇心で階段を下った。

- たくらみ -

「JJJJは……」

階段を下った先には、先ほどの部屋と同じような正方形の部屋があった。しかし先ほどと違うのは、部屋の奥の壁から水が湧き出ている、それが水路を伝って壁際から外へと吐き出されていたことだった。朝に見たあのわき水から考えるに、この地下道は水脈の枯れた部分を利用して造られているのかもしれない。

「水は汚れを払うとも言いますし……ナラカの接点としては絶好の場所、ですか……」

部屋はとても豪華な造りをしていた。水路だけではなく、壁にはびっしりと古い文字や伝説の野獣の絵が彫り込まれている。

「……精霊も趣味は人間と似通っているということですか……」

私は階段を下りて、水が噴き出す場所へと歩み寄る。何段かに分かれて水が下へと流れ落ち、段の中央には大きな水瓶が置かれていた。私はその前に立って上を見上げる。

水瓶の置かれた後ろの壁には、二人の人間のような絵が書かれていた。片方はいかにも健康そうで屈強な男、そしてもう1人はしなやかな体が美しい女……何処かで見えたことがある気がする。ふと私は記憶の糸をたぐり寄せる。たしか……そう、コロッセオでアイルークさんが使役していたあのフィオとかいう蛉人によく似ている。

「となるとこれは蛉人の絵……」

フレイさん曰くあの蛉人は精霊の中でもナンバー2の強さを持つのだという。人間で言えばいわば王妃という位らしい。そして最高位に君臨するのは、ファーレン様が喚び出し使役したという蛉人。名前まではつきり覚えていないが、あのフィオが王妃ならばこちらが王というところなのだろう。

「……」

ふと私の脳裏に、フレイさんが喚び出したあの蛉人の姿が思い浮かぶ。彼は蛉人の中でどんな位置にいる者なのか……辺りを見回した私は、何かが水瓶の中で光ったのを見た。

「これは……？」

それはまるで闇夜へと誘う蛍のように仄かな光。

「っ……サーシャはっ!？」

割れた硝子の隙間から下へと下りた俺は、通路を見回してそう言った。クリフもすぐに上から飛び降りてくる。

「サーシャさんっ」

辺りを見てもサーシャの姿はない。戻った可能性は低いだろう……そうなると、向かった方向は奥。俺とクリフは駆け出した。二人分の足音が響く。しかしそれは地面に吸収されているのか、足音も、サーシャを呼ぶ声も遠くまでは届いていないようだった。クリフは俺の後ろを走りながら言う。

「で、でもっ……ど、どうして……サーシャさんの通路が下につ?」「地面の傾斜だ……俺たちの通路は上り坂になってやがった。こっちは下り坂になってるらしい」

なだらかな傾斜は歩くだけでは分からない。それでも長く続けば続くほどに、それは大きな誤差を生んでいく。いかにも繋がっているように見せかけて、実は1つだけ別なルートになっているという

罨。いや、それくらいなら罨と呼べない。気付いた俺たちが戻ってサーシャの入った通路を通ればいいだけのこと。
なら、これは。

「時間稼ぎ……？」

一体誰が。何のために。

一瞬ジジイの顔が思い浮かんだ。いや、んなわけねえよな。だいたい理由が分からない。預言書はエレンシアに持っていかれた。預言書を入れた箱は屋敷の中にあっただ。じゃあ、何だ。何なんだ……。

「……！階段！」

やがて俺たちの前に階段が現れた。駆け下りた俺とクリフは、巨大な部屋の中央で何かに手を伸ばそうとしているサーシャを見つける。サーシャの指先にあるのは大きな水瓶、そして……。

「止めるっ、サーシャ！！」

サーシャの伸ばした両手が水瓶の水面を揺らす。その瞬間、水路の中から何かが飛び出した。それはサーシャの体を鞭のように弾き、その手足に絡み付く。

「っ！？」

罨だ。それに気付いたサーシャは咄嗟に力を込めてそれを振りほどこうとした。しかし巻き付いた罨は腕に食い込み、サーシャの力などもろともしない。

咄嗟にクリフが階段を駆け下りる。

「サーシャさんっ!!」

レイテルパラツシュを抜いたクリフが巻き付いた蔦を切るうと駆寄る。しかし蔦はサーシャに近寄らせないように、無数の蔦を生やしてクリフを弾き飛ばした。俺たちは再び階段の前へと追いやられる形になる。俺は奥歯を噛んだ。この気配……!

サーシャは抵抗を止めると、射殺するような視線で隣を睨んだ。するとそこから1人の蛉人が姿を現す。あれは……ヴァルナ。アイデア・トゥルーン・レ・ヴァルナ。ネオ・オリで俺が呼び出した、あの蛉人。

「ヴァルナ! テメエいつたいなんのつもりだっ!!」

「……魔術師は契約者以外、蛉人の名前を口にしてはいけない。もう忘れたのか餓鬼よ」

ヴァルナはそう言ってサーシャへと視線を向ける。危険を察知したサーシャは臆することなく相手を睨みつけた。それだけで人を殺せそうな、冷たく鋭い眼差し。

「また貴方ですか……今度は何を? 私はあまりおふざけに付き合っていないほど寛容な人間ではありませんが」

「フツ……トウアスの血族はまともなものがおらぬな。獣よりもタチの悪い、冷酷な眼だ。まさかお前が掛かるとはな……」

ヴァルナはそう言うと、俺たちに視線を戻した。そしていつも感情を見せない顔に薄ら笑いを浮かべて言う。

「餓鬼……ファールンの孫よ。この女、我の力を使えば一瞬で殺すことが出来る。たとえトウアスの子孫であれ、首を飛ばせばそこで

命が終わる。……だがそれではつまらぬ』

ヴァルナが右手を上げると、まるでそれに答えるかのように地面が揺れ始めた。そして次の刹那、中央奥の水が流れ出ている部分が決壊し、水路が処理出来ないほどの水が流れ込んでくる。足下を覆い始める水の流れに、俺たちは眼を疑った。サーシャは舌打ち一つしてヴァルナを睨む。

『遊戯に興じようではないか、ファーレンの血を受け継ぎし者よ。水流がこの女を殺すまでに、この呪いを解く方法を探すがいい。鍵は屋敷の中にある』
「なっ……!!」

俺は咄嗟に構えた。しかしヴァルナは嘲笑の笑みを浮かべたままこつちを見る。水は床全体を覆い始めていた。

『この呪いは我のものではないから……我を此処で殺しても止まることはない』
「サーシャさんっ」

クリフの言葉にも、サーシャは動じなかった。ただヴァルナを睨みつけている。怒りは顔に出ていないが、おそらく気分は最悪といったところだろう。あいつは自分の力でどうにかならないものが嫌いだ。嫌いというより憎いと言った方がいいだろう。

俺は舌打ち一つしてサーシャに視線を向けた。

「サーシャ。すぐ戻ってくる……必ずっ」
「……」

サーシャは答えの代わりに大きいため息をつく。俺はそれを確認

してヴァルナを一瞥すると、クリフを引きずるようになってしまうと来た通路を駆け戻り始めた。

くそっ……、くそっ！

水の音を背に駆け戻る通路は、心無しか来たときより遠いように思えた。

第3章 1

記憶の糸をたぐれば、そこにマシな思い出なんて殆ど存在しなかった。何処から俺は間違っていたのだろう。どこで俺は取り返しのつかない罪を犯してしまったのだろう。これが罪や罰でないというのなら……この世界は、どれだけ残酷なのだろう。

- 記憶の螺旋 -

「ねえ、今度はこっちだよ！」

「違うわよ、今度は私たちの番っ」

見せ合いででもするように、子供達が魔法を使って遊んでいる。まだ引き出す魔力が弱いせいでそれは小さなつむじ風に過ぎなかったけれど、俺たちにとってそれは玩具のようなものだった。それでも玩具と唯一違うのは、それが自分の『力』を見せつける唯一の方法だということ。

「見て見て！」

ふと隣にいた奴が風を動かした。強い風が真っすぐに俺たちの前を駆抜け、少し離れたところに立っていた子供を驚かせる。伸びた

髪を後ろでくくったそいつは、咄嗟に体を硬くしたようだった。

「っ！」

子供達は無邪気にそいつを指差す。

「あいつ、怖がってやんの！」

「仕方ないわよ、だって『できそこない』だもの」
「！」

そいつはパツと顔をあげて、そしてまた顔を逸らした。怒りっぱいは昔からだ。一瞬怒りかけて……そして何かに耐えるようにこちらに背を向ける。幼心に知っていたんだ、この村の中ではたとえ子供であれ魔術師という枠の中にくくられてしまうことを。

たとえ子供であろうと、なかろうと……この村で大事なものは『魔力の才能』。だから俺たちにとって友人とは、いつ抜け駆けするか分からない、気の抜けないライバル。そしてその全ては……この人のためにあつた。

「おや、次に呼んでいたのは誰だったかな？ フリオか、ジエステインか……それともミハイルか？」

魔術師ファールン。世界中にその名を轟かせる、天才魔術師と呼ばれる俺の爺ちゃん。血縁で言うならば爺ちゃんの長女の息子が俺だ。でも爺ちゃんの後を継いだのは長女ではなく長男……フォルカー・リーシエンという叔父。5年前に病気で亡くなったが、爺ちゃんの跡継ぎとして同等、いやそれ以上の力を持つ人だったという。

「はい。……僕だよ、お爺ちゃん」

俺はパツと手をあげた。今度は俺が爺ちゃんに魔法を見せる番。爺ちゃんは俺の顔を見ると、口元を緩めた。周りの奴も俺に視線を向ける。それもそのはずだ、俺はあの中で一番の魔力を持っていた。そして、爺ちゃんのお気に入りだった。爺ちゃんは言う。

「おや、お前か。……聞いてるよ、お前は毎日しっかりと勉強をしているそうじゃないか」

「当然だよ！ 僕お爺ちゃんみたいになるのが夢なんだもん」

爺ちゃんみたいになりたい。その言葉は子供達の合い言葉のようなものだった。子供の頃はそれがいかにも自分の本当の気持ちのようについていたが、今はその言葉の嘘が分かる。あれは俺たちの本当の気持ちではなかった。生まれてからの数年間で刷り込まれた、出世への合い言葉。

でも爺ちゃんはそれを聞く度に嬉しそうに笑った。それは本当に、嘘っぱいくらい嬉しそうな顔だった。

「おお、そうかそうか。流石にお前は言うことが違うな、フレイに爪の垢でも煎じて飲ませたいところだ」

「！」

少し離れたところでこつちを窺っていたあいつが肩を震わせた。その両手に抱えているのは、爺ちゃんの部屋から持ち出してきた植物の本。本なんて最近では滅多に出回らないから、この村にとっても貴重なもの。爺ちゃんはよく俺たちに魔法の本を貸してくれたけれど、あいつはいつも魔術とは関係のない本を読んでいた。

爺ちゃんは眉間に皺を寄せて言う。いかにも由々しきことだ、といった表情で。

「……なんだ、フレイ。また植物の本なんぞ読んでいるのか？」

「えっ、あつ、これは……その……」

爺ちゃんはいいつのことが嫌いだった。他の誰にもそんな目をしてないのに、あいつの時だけ違っていた。笑いかけない、頭を撫でない。……同じ孫で、従兄弟の俺が見る限り、そんなことをしていたのは本当に小さな頃だけで、魔力の差が出始めてから爺ちゃんはいいつを嫌っていった。

でも、時々俺はいいつが羨ましかったんだ。

「爺ちゃん爺ちゃん！もー、今は僕の話でしょ」

俺は爺ちゃんの服の袖を引っ張る。少しイライラした気持ちを抑えて、爺ちゃんを引っ張っていった。爺ちゃんは子供達を引き連れて村の方へと歩いていく。

「おお、そうだったな。どれどれ、見せておくれ。お前の成長が僕には一番の楽しみだからな」

なあ、爺ちゃん。ならなんで……あんたは時々フレイの方を見てたんだ。蔑むような、煙たがるような表情を浮かべて、どうしてあいつを見てたんだ。

嫌いなら、見なければいい。嫌いなら、適当にあしらってしまえばいい。その歳で大人げない苛立ちを感じる人間じゃないことぐらい、孫なんだから知ってたさ。……知ってたんだよ。

爺ちゃんは、あいつのことを『できそこない』だと言った。周りの子供達はその意味をはつきりと理解せずに、あいつを指差して笑っていた。それでもその意味を知っていたのは……おそらく俺とあいつだけだったと思う。その言葉の残酷さを知っていたのは……。

「お母さん、お母さん！今日も爺ちゃんに褒められたよ！お前の成

長が楽しみつて、爺ちゃん言ってくれたよっ」

俺の母は、綺麗な人だった。フレイのところの母親とさほどかわりない歳で、周りの子供達も羨むくらい綺麗で、美しい人だった。爺ちゃんによると、婆ちゃんそっくりな美人だつて話で、それは俺の自慢の1つだった。料理が上手で、彼女も魔術師として申し分ない才能に恵まれ、父も宮廷仕えのエリート。形だけならどこにも負けない、最高の家庭。

でも、彼女は女性としては魅力的でも、母としては最低だった。

「あらそう……ならもつと、もつと頑張りなさい。お爺様に沢山褒められるようになりなさい。間違つても……できそこないになつてはいけないわ。フォルカーの息子のように」

彼女の口癖は、それだった。頑張りなさい、もつと頑張りなさい。お爺様に気に入られなさい。フォルカーの息子のようになつてはいけない。『できそこない』に、なつてはいけない。

「う……うん……」

俺は彼女と話す度に、自分が犬かなにかのように思えてならなかった。いや、犬の方がまだいい。頭を撫でて『良くやった』と褒めてくれる分だけ。『頑張つたね』と声をかけてくれる分だけ。

「……お母さん、僕、頑張る、よ……」

俺の母は、褒めてくれたことがなかった。頭を撫でてくれることも、抱きしめてくれることもなかった。父は宮廷に仕えているために滅多に帰ってくることがなく、俺は常に愛情のない母と共に暮らしていた。

俺は、ただ愛されたかった。あの人に褒めて欲しかった。ほんの少しでもいい、優しく微笑んで頭を撫でてくれるだけで、俺の生き方は変わったはずなのに……。

「……うっ……ひっく、……っ」

母は失敗に厳しい人だった。魔法の覚えが悪かったり、他の子供に追い抜かされたりすると、容赦なく外へ叩き出された。雨の日であるうと、雪の日であるうと、一晩中。それは幼い子供の心を押しつぶすのには十分な仕打ちだったと思う。

俺はよく村の入り口にある一本木の前で夜を明かした。ひどい時は夕方に追い出され、翌日の夕方に頭を下げた家に入れてもらったこともある。許した後も、彼女は慰めの言葉すらかけてくれなかった。

あの日も、俺は夕方に家を追い出されて、一本木の下に膝を抱えて座っていた。日が暮れるまで声を殺して泣いて、その後は泣きつかれてぼうつとしていた。まだ眠気はおきず、夕食時の温かい光が村のあちこちで灯るのを恨めしく思った。

どうして俺だけ愛してもらえないのだろう。どうすればあの人に愛してもらえるのだろう。どうして皆、あの温かい光の中に触れることができるのだろう。どうすれば自分もあの温かい光を手に入れることができるのだろう。

俺は泣き腫らした目で村を見つめていた。するとふと、優しい声がかから降ってきた。

「あらあら……大丈夫？」

顔をあげると、そこにはフレイの母親が立っていた。エメリナ様だ。周りの子供達がみんな『様』をつけて呼ぶから、俺も同じようにそう呼んでいた。

エメリナ様は魔術師としては中級の、さほど有名ではない人だった。もともと目が悪かったけれど、叔父と出会って結婚して……叔父が亡くなった後もしっかりと家を切り盛りし、爺ちゃんに再婚を勧められても絶対に首を縦に振らなかったという。

見目麗しい美人ではないけれど、優しい眼差しをした人だった。

いじめられて帰ってきたフレイに、苦笑しながら頭を撫でてやっているところを見たことがある。あいつがいくらいじめられてもやり返さないのは、全てエメリナ様のためだ。いじめられて泣くことはあっても厄介ごとは絶対に起こさない。

『できそこない』の気持ちなんて分からないけれど、エメリナ様のためを思う気持ちはなんとなく俺にも理解出来た。

「なっ……なん、でも……なんでもないです」

俺はそっぽを向いて目を擦った。弱いところを見せてはいけない。母にまた家の中に入れてもらえなくなる。しかも相手はエメリナ様。フレイの母親。

でもエメリナ様は全て分かっているようだった。それもそのはずだ、この木はフレイの家の目の前にある。なるべく気付かれないように夜を明かしていたつもりだったが、エメリナ様は気付いていたんだろう。

エメリナ様は申し訳なさそうに言った。

「いつも此処で夜を明かしているのを見ていたわ。けれど、ごめんなさい……家の中に入れてあげたいのだけれど……」

その言葉の続きを、俺は理解していた。誰かの家の世話になったことを母が知ったら、もつとひどい罰が待っている。俺はまた、あの人に愛されなくなってしまう。それにもかしたら母が文句を言いにくるかもしれない。そうならエメリナ様にも迷惑がかかる。

「……ごめんなさいね。代わりに、なんて言うとおかしいのだけれど……」

エメリナ様はそう言って目の前に皿を差し出した。そこにはパンと温かなスープが一杯乗せられている。スープの湯気を見た瞬間、腹の虫がせわしなく泣き始めた。一日分食事を口にすることはないだろうと、そう思っていたのに。

遠慮をすることも、エメリナ様の前だということも忘れて、俺は乞食のようにパンに齧りついていた。温かなスープは舌をやけどしそうなくらい熱くて、食べ物を中心に含んだまま息をする。どうしてだろう、母が作った料理の方が美味しいのに、エメリナ様の作ってくれたスープは体の奥まで染込んでくる。……涙が出そうになってくる。

「あらあら、慌てなくても大丈夫よ」

エメリナ様は俺が舌をやけどしそうになっていることに気付いたようだった。微笑みながらこちらを見つめる目。くすんでしまった瞳は俺を映さないけれど、この人はちゃんと俺を見てくれていた。

俺はなんとなく恥ずかしくなってパンを齧る。エメリナ様はそんな俺を見て、優しく頭を撫でてくれた。

「今の時期は寒いから、毛布を持ってきてあげるわ。……大丈夫、朝にその柵に掛けておいてくれればいいから」

朝食も、皆に気付かれないように持つてくるわね、とエメリナ様は笑ってくれた。その時ふと思ったんだ。この人が自分の母親なら、つて。けれどすぐにそんな夢みたいなことは忘れることにした。考えれば考えるほどに虚しくなっていく気がしたから。

でもあの微笑みは誰よりも優しくて……あたたかかった……。

「……まあ、初恋の人の話ってやつかな」

アイルークはそう言って笑った。私は『ハツコイ』の意味が分からず首を傾げる。それでもアイルークにとってその人がとても意味のある思い出だったことは分かった。でも……なぜだろう、私の予測機能が不穏な感覚を伝えようとしている。

私は立ち上がるうとするアイルークの腕を掴んだ。

「その後は……？」

「！……はあ、それは……」

アイルークは首をかきながら、大きくため息をついた。私はアイルークの腕を掴んだまま、じつとその顔を見つめる。その微細な変化を見落とすことのないように。

アイルークは再びベッドに座り直すと、扉の方を見つめて続きを話し始めた。

「……何度かそうやって夜を明かした。でもやっぱり母さんに気付かれて、今度は庭先に繋がれた。あれは本当に犬みたいだったなあ

……」

笑い話のように済ませようとするその横顔が、時折歪む。私はふとその情景を想像してみた。犬のように庭先に繋がれた少年。空腹に耐えながら、じつと一本木のある方向を見つめている。柵に両手をついて、人の心の温かさを感じたその場所を見つめて。

そう考えると、胸の奥がキュツと締め付けられるような感じがした。

「母さんがエメリナ様のところに文句を言いに行ったらしい……誰もそれを見ていなかったから詳しいことは分からないけれど、あのとき物凄い剣幕だったから……」

私は腕を掴んでいた指先に力を込めた。どうにかしなければと思うけれど、どうすればいいのか分からない。人はこうゆうとき、どう行動するのだろうか。どうすれば人の心の溝を埋めることが出来るのだろうか。

また、何処から声が聞こえてくる。

『体が動くままに……感情にまかせてみればいいの』

私は掴んでいた腕に両手を回した。アイルークの肩に額を押しつける。なんでそうしようと思ったのかは分からない。ただ……そう、そうしたいと思ったから。もっと近くにいることが、一番の方法ではないかと思ったから。

「シルヴィ……?」

「アイルーク。シルヴィ……シルヴィ、ジュリアに料理習う。スープとパン、作れるようになる。だから……だから」

密着していると、相手の心が伝わってきそうだった。それならば

逆に私の、この言葉では表現出来ない気持ちも伝わるのだろうか。データにはないこの感情。まるで胸の中にイルークの苦しみが伝わってくるような……。

イルークはふと笑って私の頭を撫でた。ジエイにされるのと同じくらい、イルークに頭を撫でてもらうのは嬉しい。

「……分かってる。今は1人じゃないって……そう、分かってるから……」

でも、とイルークは呟く。その表情は前髪に隠されてよく見えなかった。ふと、こちらへ寄りかかる力が増す。

「でも……もう少しだけ……」

そう呟いたイルークは、もしかしたら泣いていたのかもかもしれない。

第3章 2

水の音は激しく、足を濡らしていく。近づきつつある死の感覚とでも呼ぶのだろうか。私はゆっくりと顔をあげた。人に命を預けるのは好かない。しかしこれが魔術の類いであるのなら、私に出来ることは皆無と言っていい。奥歯を噛み締めると、腕に巻き付いた蔦が腕に食い込んだ。

- 真実という名の鍵 -

ナラカから書庫へと戻った俺たちは、分かれて屋敷の中を探し始めた。とはいえ、こんなただっ広い屋敷の何処にあの呪いを解く方法があるんだ。1つ1つの部屋を探していたら間にあわない。

俺はクリフを書庫に残し、一旦廊下へと出た。どの部屋を探せばいい……ヤマを張って探したとしても、それが外れてしまったら洒落にならない。ちくしょう、どうすれば……。

『遊戯に興じようではないか、ファーレンの血を受け継ぎし者よ。水流がこの女を殺すまでに、この呪いを解く方法を探すがいい。鍵は屋敷の中にある』

ヴァルナの言葉が脳裏を過る。あいつ、資格だの何だの言った次

は、人の命を賭けての遊戯かよ。ふざけんな……ふざけんなっ！

『この呪いは我のものではないから……我を此処で殺しても止まることはない』

いつそのことあいつが呪いの根源ならば、まだ方法はあった。俺の力があいつに敵うか、ただそれだけの問題だった。くそっ……。……？

「あの呪いは……ヴァルナのもんじゃない……？」

サーシャを水の中に繋ごうというあの罠、そしてナラカでのあの時間稼ぎ。全てを仕組んだ奴が他にいた……それは誰か。理由や動機を取っ払うのならば、それが出来る人間は1人しかいない。

……ジジイだ。

「！」

仕掛けはジジイの書庫にあった。そしてあの引き出しの位置。男にしか届かない場所に仕掛けがされていた。ヴァルナは呪いを仕掛けた奴の意思を尊重して動いている。蛉人が契約者以外のために動くことなどほとんどない。あるとするならば、蛉人の王すら使役したあのジジイのため。

そう考えるなら……。

「クリフっ、俺はジジイの寝室に行く！何かあったらそっちに来いっ」

「は、はいっ……！」

俺はサーシャが探っていたはずの寝室へと向かう。一定間隔に設置された悪魔を象った石像が、必死な俺を嘲笑っているように見え

た。もうすぐ日が暮れてくる。石像は廊下に不気味な影を伸ばし、俺はそれを横切っていく。

ジジイの寝室は、昔の俺の記憶通りになっていた。本棚と机、ベッドに窓……。違うのは、そこに住んでいた人間の気配が消え去っていること。ただそれだけ。

「呪いを解く方法……本棚か何かか!？」

俺は本棚にきつちりと並べられた本を手に取っては床に投げ出す。どれも使えそうなものはない。何か隠されているわけでもない。魔術に関する本が並んでいるが、どれも俺が小さい頃に借りて読んだことがあるものばかりだ。中身に呪いを解く方法など書かれていないことは知ってる。

本棚を散らかし、ベッドの下を探り、窓を開く。しかし何処にもそれらしきものは見当たらない。ふと開いた窓から外を見ると、村の泉の様子が下に見えた。いつもならば沸き上がってくる水が池を潤しているはず。しかし泉の水は三分の一ほど減っていて、逃げ遅れた魚が地面を飛び跳ねていた。

「くそっ……!」

俺は窓を離れて、机へと向かう。上から順に引き出しを開けながら、必要のなさそうなものをバラまいた。これも違う……これも、これもっ。

床から埃が舞い上がる。俺はそんなこと気にせず引き出しを荒らす作業を続けた。そして最後に一番下の段に手をかける。その瞬間、奇妙なぬめりを指先に感じた。

「……………」

俺は座り込んで引き出しの取っ手を睨みつける。取っ手の裏側には、赤黒いものがついていた。血液……これも何かの仕掛けか？破れた跡を見ると、掛かったのはサーシャか……。

人指差しについた赤黒い血。俺はそれをじっと見つめる。これがジジイの血だとするならば、手がかりになるものを『見る』ことが出来るかもしれない。

俺は目を瞑り、そして唱えた。

「……………一つ、聞いてもいいですか」

水が膝の辺りを濡らし始めた。徐々にはあるが確実に水位が上がって来ていることを確認して、私はあのヴァルナと呼ばれた蛉人を睨みつける。彼は私を振り返ると、あの無表情な瞳をこちらへ向けた。

『……………なんだ』

先ほどフレイさんに向けていた、あの嘲笑は消え失せ、今はどちらかというと気怠そうな表情をしている。その表情の変化に、私はなんとなく状況を理解したような気がした。

足と腕に食い込む蔦は外れない。私は強い力を込めてそれを引く。

しかしやはり魔術の力によるものか、蔦はビクともしなかった。
私は言う。

「貴方は先ほど、この呪いを仕掛けたのは自分ではないと言いました。ではこの呪いは、最初から此処にあったものだと？」

『ふっ……どうだろうな』

鈴人は深い傷のある左頬を緩ませた。ギリギリと蔦が両腕を引っ張ってくる。余計な動きをするなど言わんばかりの力。私は顔を顰めながら続ける。

「先ほども思っただのですが……先ほどの幻影といい、この呪いといい……気になりますね」

あの過去の幻影。あれはフレイさんが初めてこの鈴人を喚び出した時のもの。彼を使役する資格はないと、初めて言われた時の記憶だ。しかしそれを知っているのはフレイさんとこの鈴人のみ。……否、あの部屋の持ち主もまた、何かを介して知っていたのかもしれない。

私には魔術のことは分からない。しかしあの寝室にそんな仕掛けが出来るのは、あの部屋を使っていたファーレン様だけだ。

「あれはあの印に触れたものに過去の幻を見せるもの……ならそれは誰に向けての仕掛けなのか」

『……………』

最初は、フレイさんだと思った。しかしすぐに疑問は湧いてきた。何故、何のために？あの記憶を持つフレイさんにもう一度過去を見せる必要があったのだろうか。

そしてもう一つの疑問は、私を捉えているこの呪い。私は腰の辺

りまで水が上がってくるのを見つめながら言う。

「この呪いが貴方が仕掛けたものではなく、ファーレン様が仕掛けたものだとするのなら……気にかかる点がいくつかあります」

呪い、そしてここに来るまでのあの通路。まるで、誰か1人をここに誘き出すかのような仕掛け。もしも此処に来たのがフレイさんのみだったらどうなっているだろう。私とクリフさんと出会わず、フレイさんが1人でこのナラカに入り、この仕掛けに嵌ってしまったとしたら？

鈴人は階段に腰をかけながら言う。

『ほう？……それは？』

「もしも、ここでこの呪いを受けるのがフレイさんだったら、の話です」

この呪いは強力なものなのだろう。鈴人の彼でも解くことが出来ないような。ならばフレイさんもまた、この呪いから脱出することは不可能。誰かが共に行動していなければ、フレイさんはここで命を落とすことになる。

なら、『誰か』とは誰のことなのか。

「おそらくフレイさんも1人の力ではこの呪いから助かることはできないでしょう……誰かに呪いを解いてもらわなくては」

『……』

サツと鈴人の顔色が変わった。曇った顔に浮かぶのは、軽い不快感とでもいうところだろうか。私は気にすることなく話し続ける。

「貴方は先ほどこう言いました。『遊戯に興じようではないか、フ

アーレンの血を受け継ぎし者よ』……私達は3人、もしもその呪いが普通の人間にも解けるのならば、ファーレンの血を受け継ぎし者である必要はなかったのでは？」

あの言葉を聞いたとき、私は理解した。この蛉人は、ずっと待っていたのだ。ここにフレイさんが来ることを。いや、フレイさん達と呼ぶべきだろうか。

私ははつきりと蛉人を見つめる。

「本当は、罫にかかるのはどちらでも良かったのではありませんか？それがフレイさんでも……アイルークさんでも」

もうすぐ日が暮れる。書庫の天井から見える空が微かに夕日の色を醸し出していた。僕は慌てて書庫のものをひっくり返した。人の命が掛かってる以上、片付けなんて気にしてられない。しかも危ない目に遭っているのはサーシャさんなんだ。助けなきゃ……絶対に、助けなきゃ。もう、誰かがいなくなるのは嫌なんだ。僕が無力なせいでこんなことになるのは……。

「ない……ないっ……」

引き出しの中を探っても、出てくるのは関係のなさそうなものば

かり。空になる引き出しが増えていくほどに、僕の心も焦りを増していく。何処かに、何処かにないのか……呪いを解く方法は……っ。高い所の取っ手に手を伸ばして引き出す。けれど中身が沢山入っていたのか、引き出しはグラツと傾いて、勢い良く下へ落ちてきた。僕は吃驚してそれを避ける。でも他の引き出しに足を引っかけて、盛大に転んでしまった。

「うわぁっ!!」

引き出しの山が崩れ、紙が舞い上がる。数枚が中央に開いたナラカへの穴へと落ちていった。僕は転んだ拍子にぶつけた腰を押さえながら立ち上がる。すると僕の上着のポケットから、見慣れないクシャクシャの紙が落ちた。

「?……これ……」

引き出しの隙間に挟まっていたあの紙だ。水に落ちたせいで少し滲んでしまっているけど、読めないことはない。そう、たしか水と龍神とか……。

「!……」

クシャクシャになった紙には、こう書かれていた。『清き水の流れに耳を寄せ、龍神の心臓に光の矢を放つ。さすれば汝、解放の時を見ん』……これだっ!

「フレイさ……」

僕は咄嗟に書庫を飛び出そうとした。でもその足にブレーキがかかる。清き水は良いとしても、龍神の心臓に光の矢って……?」

僕は辺りを見回した。龍神の心臓、光の矢。でもこんな引き出ししかない場所にそれらしいものは存在しない。そうするとフレイさんのいる寝室なのかな……でも、もうそろそろ時間がない。ナラカから聞こえてくる水の音も更に激しくなってきた。

ここで見落としていたりしたら、サーシャさんの命に関わる。

「龍神の心臓……光の、矢……」

僕は引き出しを見回す。ここにあるのは引き出しと、天井の窓と、ナラカへの入り口。あと……書庫に置かれた不気味な石像。

「石像……光の矢……？」

書庫の2階に置かれた長髪の女の人の像が視界に入った。凄くスライルのいい石像だ。翼を生やして、右手に弓を持っている。ここからじゃよく見えないけど、背中に片手を伸ばしてるってことは、そこに矢があるのかもしれない……！

僕は2階へよじ登ると石像の裏へと回る。思った通りだ、いくつか矢がある。

「！あつたっ」

女の人は幾つかの矢を背負っていた。目を凝らすと、その中に一本だけ不自然に短い矢がある。引き抜くと、それは鍵だった。金で出来ているように重くて、夕日を受けてキラキラと光る。僕はそれをにぎりしめると、1階へと下りた。

龍神の心臓は見当たらない。そうするとあとはフレイさんのところだ。

僕は書庫から駆け出す。夕日を受けて怪しげに笑う石像も、今は怖がっている暇すらなかった。

第3章 3

あの子は昔から優秀だった。魔術師としての才に恵まれながらもそれをひけらかさず、それでいて真つすぐに生きる優しい子供だった。私の自慢の息子だった。ああ、愛しき我が息子よ。私の罪を告白しよう。全てはあの日、あの時から狂ってしまったのだ……。

・ ああ、愛しき我が息子 ・

「お父さん。僕、今日やっと召喚が出来ました」

「おお……召喚の儀式が行えたのならば、お前ももう立派な魔術師だ。何を召喚したんだい？」

茶色の髪に、優しい瞳をした息子だった。昔から兄弟達の中でも聞き分けが良く、村の子供達をよくまとめ、幼い者の面倒をよく見る子供だった。

魔術師としては早熟な方だったが、息子より早く魔術師として独立した者も数人いた。

「アイデア・トゥルーン・レ・ヴァルナ。……ヴァルナです、父さん」
「ヴァルナ……！？まさかお前は、それを知っていて召喚したのか？」

息子は素直にはい、と頷いた。まるで悪戯をした子供のような瞳だった。私が何かを言おうとすると、息子は苦笑を浮かべて私を見上げる。

「墮落した蛉人、イデア・トゥルーン・レ・ヴァルナ。……知つてますよ、蛉人から追われた孤高の精霊。説得するのに一晩使いました」

「そ、それでフォルカー……お前は無事だったのか？」

「はい。だつて彼なら……いえ、なんでもありません」

首を横に振つてフォルカーは笑った。そしてまだ妹達には話さないでくださいね、と言つて去つていった。始めは私にもその意味が分からなかったのだが……息子や娘を見ているうちに、やがて気が付き始めた。

ああ、そうか。子供達は常に互いを敵視しているのだ。魔術師として、互いに互いを蹴落とす競争をしている。向上心の賜物と言えば聞こえは良いが、それはひがみや嫉妬という負の感情を巻き起す。

「お兄様、ヴァルナを喚び出したつて本当？なんだつてそんな！お兄様ならフィリーネ……フィオを喚び出すことだつて出来たでしょうに」

「契約者以外があんまり名前を呼んじやいけないよ……。でも、いくらなんでもフィオは無理かな。話をしてみても、ヴァルナが一番合つてゐるつて思つたんだ」

もっと怖いかなと思つていたけど、そうでもないよ、とフォルカーは笑つていた。私はその言葉を聞いて気付いたのだ。フォルカーがわざわざ墮落した蛉人を選んだのは、子供達の競い合いに加わり

たくはなかったからなのだ。私は知っていた。あの子の力でならば、フィオだけではなく私が使役するデルヴァですら、従わせてしまうことができるのだと。

あれは心優しく、そしてよく出来た子供だった。幼い頃に魔術師としての才に気付いた私は、フォルカーに大きな期待を寄せて育ててきた。そしてあの子もまた、それに答え、想像以上の成果を見せてくれた。魔術に没頭し、魔術師として最高の人生を歩いてきた。

やがて息子は、華やかではないが穏やかでよく気が回る嫁を貰った。嫁は魔術師としては位が高いものではなかったが、春の和やかな空気を身に纏ったような人だった。

だが曇りのないその生き方に影が差し始めたのは、嫁に子供が生まれてしばらくした頃。

「ゴホツゴホツ……それじゃあ、父さん。僕はそろそろ」

「フォルカー、顔色が悪いぞ？帰って来たばかりなのにもう行くのか。……のう、フォルカー。しばらく休みを貰って、エメリナとフレイの傍にいたらどうなのだ。フレイも父親の傍にいた方が……」

「はは……大丈夫。今度のフレイの誕生日には帰ってくる予定ですから。それじゃ……」

そう言って、フォルカーは村を出て行った。その年の孫の誕生日、息子は村に帰ってくることはなく、嫁のもとに孫の誕生日を祝う一通の手紙が送られてきただけだった。

それから数回、近況を知らせる手紙が嫁の所に来た。嫁はそれを見る度に悲しい顔をして、それでも誰かと会う時にはそれを見せようとはしなかった。

そして孫が3歳を過ぎたある雨の日。フォルカーは物言わない姿で村へと戻ってきた。死因は過労と、流行病だったという。

「……エメリナ。お前には本当に……苦勞をかけたとしか言えんな

「……」
「いえ……良いのです、ファーレン様。……あの人のことは……分かっていましたから」

ひどい雨の中の葬式だった。里の者達は皆、ひそひそと息子の棺桶を見つめながら言葉を交わしていた。そのどれも、フォルカーの出世をよく思っていない者達だった。

「フォルカー様……まだ25だったのにねえ……」

「何やらせても完璧で、人当たりもよくて……良いお嫁さんにも恵まれてファーレン様の自慢の息子だったのに」

「……お仕え先でも仕事が出来るって評判だったみたいね……勿体ないわ」

勿体ない。人の命に、生き方に、勿体ないという言葉があるだろうか。息子は短い時の中を精一杯に生きてきた。魔術師として……。ふと、誰かの言葉が耳についた。

「ほら、よく言っじゃない。よく出来た人ほど短命だって……」

良く出来た人間ほど短命。たしかに、フォルカーは良く出来た子供だった。手もかからず、常に優秀。私の期待に答え、そして誰に対しても優しい。本当に……思い返せばあんなに優秀な人間は、1人もいないだろう。

「……」

雨に濡れながら歩く私の後ろを、まだ小さい孫がついてきていた。おそらく父の顔など忘れ、葬式の意味すら知らないのだろう。ただ涙を拭う母を気遣いながら後を追う。

ああ、これもまた優しい子なのだ。

「……フレイ」

息子の棺の前で、私は孫を抱き上げる。はしゃぐその姿はもうフォルカーには見えていないのだろう。棺の扉を開け、その向こうにある冷たい肌の色をした息子を覗き込む。動くことも話すこともない、あの子の抜け殻。息子は……フォルカーは、生きていて良かったと思えたのだろうか。私が敷いてしまった魔術師としての道を、魔術師としての人生を、後悔しているのではないだろうか。

眠る息子の表情は、どことなく孫に似ていた。

「フォルカー……」

何かに驚いたように、孫がじつとこちらを見ている。涙が珍しいのか、それともこの棺の主が父だと悟ったのか……。

ああ、フォルカー……愛しき我が息子よ。すまなかった。本当に、すまなかった……。

やがて私は『過去』に思いを馳せるようになった。初めはフォルカーの生きていた頃から始まり、私の思いは果てしない時空の奥底へと向かっていった。

過去の間違いを正すことができるならば……この世に苦しみなど生まれることはない。愛しき息子もまた、あのような形で逝かせることもなかったのだろう。ああ、間違いを正すことでこの未来を変えることができるのならば……。

そして私は過去を預言する本を創った。過去に学び未来を変えられるのならと、そう思っていた。……だが、やはり運命というものは人が望むほどに簡単ではなかった。

「……なんだ、フレイ。また植物の本か？」

「あつ……」

「お前には魔術師になる気はないのだな。アイルークは毎日勉学に励んでいるというのに……」

孫は悲しげに目を伏せ、持っていた分厚い本を抱く手に力を込める。ああ、そうだ。そうやって私を嫌えばいい。私を……そして魔術師としての生き方を、自分で壊していけばいい。魔術師になどならなくても人の生き方は無限に存在する。たとえこの里の人間がお前を蔑もつとも、お前のことを支える者がいる。エメリナがお前を支えているだろう。

「ファールン様……あの」

だがしかし、運命というものは逃れようとすればするほど追いかけてくるもの。

「どうした、エメリナ」

「実は……1つだけ、お話ししたいことがあるのです」

ある日嫁が告げたのは、子供達の中でもひとときわ才能を持つ孫のことだった。

『当然だよ！僕お爺ちゃんみたいになるのが夢なんだもん』

前々から気付いてはいた。アイルークと名付けられたあの孫……フォルカーを常に敵視していた娘の子。あの子が私に気に入られようと、常に子供達の中央に陣取っていた。そしてその裏で、母親から愛されない生活を送っていたことも。

あの子にとって私に愛されることは、母に愛されることだった。

魔術師として生きるとは、母に愛されることだった。

運命とは、人生とは、何故こうにも複雑なのか。フレイもアイルークも、フォルカーの二の舞にするべきではないと思いつつも、二人は確実にその道を歩んでいく。

「爺ちゃんっ！！爺ちゃんっ、大変だよっ！！召喚の練習してたら……だれが一番強い精霊を使役に出来るかって話になって……」

あの日、子供達の言葉を聞いて私はやはり、と思った。絡み合った歯車が動き出し、やがて運命はまだ小さな子供達を飲み込んでいく。

「カナル・エミナ・ラ・フィリオーネ！汝、我の使役に下れっ！

！」

「アイデア・トゥルーン・レ・ヴァルナ！頼む、出て来てくれよっ！

！」

アイルークは私がフレイのことを心の奥底で気にかけていることを知っていた。そしてフレイもまた、アイルークが話の引き合いに出されることを良く思っていなかった。

アイルークはフォルカーが使役することのなかったフィオを召喚することに成功し、そしてフレイのヴァルナ召喚は持ち越された。召喚を失敗した理由は、その幼稚な動機。私はそれに気付いて安堵しつつも、いつかは消え去るだろう要因に不安を抱いていた。

だから私は、生きているうちにとヴァルナを喚んだ。

「……のう、ヴァルナ。私は生きているうちに何人も人間を不幸にしてきた。息子、孫……いや、この里に住う者みな、力によって尊い人生を曲げられてしまった」

『フン……人間とはいつの時代もそんなものだろう。力に溺れ、力

によって死ぬ』

「ふっ……そうだな。そうかもしれん」

病床の枕元に立ったその蛉人は、無表情に私を見下ろした。フォルカーはこの蛉人を一晩かけて説得したと言っていた。気難しい孤高のヴァルナを、よく手なづけたものだ。

私は深い傷のあるヴァルナを見上げ、そして呟いた。

「……1つ、頼みがある。ナラカへの道にちよつとした仕掛けを施してある。もしも、フレイカイルークが此処へ来た時は……」

『我にはそれすらお前の我が俣にしか見えん』

ヴァルナは机に腰をかけてそう言った。いかにも理解しがたいものを見る目でこちらを見つめる。私は笑った。笑ったのはいつ以来だったか。

それくらい、私は清々しい笑みを浮かべることが出来た。

「ああ、……我が俣なのだよ。だが、私の我が俣が少しでも孫達に伝わるのなら……それで十分なのだ」

そう、もしもフレイカイルークが……いや、『二人が』あのナラカの仕掛けに気付いてくれたなら。私があ場所に秘めた思いに気付いてくれたなら。

私はそれだけで、それだけで良い……。

「ふ、フレイさんっ、フレイさんっ！見つけましたよ、サーシャさんを助ける方法っ！！」

転がるようにしてクリフが駆け込んでくる。相変わらずうるせえやつだ。やっぱり一発殴って根性入れ替えてやった方がいいかもな……。

慌てふためいて走ってきたクリフは、俺の後ろで首を傾げた。

「?……フレイさん？」

どうかしましたか、と挙動不審な声が聞こえる。うるせえよ、馬鹿。……本当に。本当に、どいつもこいつも……。

「……どいつもこいつも、馬鹿ばっか」
「えっ……ええっ!？」

意味が分からず、クリフが声をあげる。俺は指先についた赤黒い血液を払い落とした。

ああ、本当に今更過ぎる。今更あれは全て俺たちのためだったって？親父を亡くしたことへの罪滅ぼしだったって？馬鹿だよ、ジジイ。魔術師になんたって一言言えいいだけの話じゃねえか。親父と同じ生き方をさせたくないって、そう……言えいいだけの話じゃねえか。

俺はクリフから紙を奪い取ると、軽く目を通してため息をついた。過去視の中でこれの存在は確認済みだ。

「あ、あの……フレイさん？」
「……クリフ、鍵は」

俺がそう言うと、クリフは慌ててポケットから鍵を取り出した。俺はそれを奪い取って、机の目の前に掛けられた一枚の絵に手を伸ばす。

さっきの過去視で解除方法は見えた。思えば、昔はここに絵なんて飾られてなかったよ……。どうして気付かなかったんだ、俺。

「……『清き水の流れに耳を寄せ、龍神の心臓に光の矢を放つ。さすれば汝、解放の時を見ん』」

清き水、それはこの部屋の窓から見える、あのわき水の泉のこと。そして龍神の心臓は……。

「あっ……」

絵を外すと、そこには龍神を象った飾りが彫り込まれていた。中央には鍵穴のようなものがある。俺はそれにクリフから受け取った鍵を差し込むと、ゆっくりと回した。

彫り込まれた龍の瞳に光が宿り、次の瞬間ガコン、と何処かで大きな音が聞こえた。龍神を象った飾りはまるで笑うように目を細めると、ゆっくりとその姿を消していく。

「……。……行くぞ、クリフ」
「えっ？あ、は、はい」

俺はクリフを連れて、ジジイの部屋を後にした。

第3章 4

嗚呼、幾許かの月日を経て彼らはこの道を辿るのだろつ。それが何時のことなのか、私には想像することができない。だから私は願うのだ。ただただ願うのだ。

彼らの旅路に、幸運を。

- 今は亡き貴方へ -

「サーシャさんっ」

「サーシャ！……って、なんだよ、これ……！？」

呪いの解除に成功した俺たちは、足早にナラカの最深部へと向かった。しかし、俺たちが目にしたのは水の中に沈んだ部屋と、水位を増やし続ける水、そして部屋の前に立つヴァルナの姿。

その顔に浮かんだ薄ら笑いを見た瞬間、俺は頭の中で何かがぶち切れる音を聞いた。

「てめえっ！！サーシャはどうしたっ！」

『……水の中だ』

「っ！」

クリフは咄嗟に水没した部屋へ視線を向ける。俺は怒りに任せてヴァルナに殴り掛かる。しかし召喚していない鈴人は靈魂か何かのようにその体を通り抜けた。

俺は齒噛みをしてヴァルナを睨みつける。

「ふざけんやつ！！サーシャを殺したってんなら、てめえを此処で……っ！」

俺は咄嗟に利き手に力を込めた。ヴァルナはまだ笑いを浮かべている。その体ごと焼き殺してやるうかと思つた瞬間、部屋の中から聞き慣れた声が聞こえた。

「……勝手に殺さないでくれませんか」

「あつ……さ、サーシャさんっ!？」

視線を部屋の中へと戻すと、水の中から顔を出したサーシャの姿がある。クリフは一瞬俺の方に視線を向けて、どうフォローしたものかという顔をしたが、俺と視線が合うとわざとらしく顔を逸らした。

ヴァルナもまた、笑いを堪えているのか口元を抑えて苦笑している。俺はギツとそれを睨みつけた。

「てんめえ……騙しやがったな……!!」

『我は、水の中と言っただけなのだがな……』

サーシャはこちらまで泳いでくると、大きく息を吐いて階段をあがってきた。

「いないくらいで死んだと思わないで下さい。そんなことでいちいち勘違いされては面倒です」

「お・ま・え・なつ！！助けたやつに礼も無しかつ！」
「私は一応契約者ですから。救出するのは当然の行為だと思いますが」

サーシャは濡れた髪をかきあげて、さも当然といった様子でそう言う。この女……やっぱりもう少し呪いの解除を遅らせてやればよかった。痛い目にあつたかと思っていたが、気分的に俺の方が痛い目にあつた気分だ。

今にも喧嘩を始めそうな俺たちに、クリフが慌てて止めに入る。

「ま、まあまあ……で、でもサーシャさんはどうしてまた水の中に？」

ん？たしかに、そう言われればそうだ。なんでこいつ、俺たちが来たとき下に潜ってたんだ？

サーシャは大きく息を吐くと、ヴァルナをチラと横目で見て、そして呟いた。

「呪いに掛かる少し前から気付いていました。……だいたい、何故私があの水瓶の中に手をいれようとしたのか、分かりますか？」
「……？」

首を傾げる俺とクリフに、サーシャは右手に握っていたものを俺たちの目の前に突き出した。握られていたのは一冊の本。深い紺色の表紙で綴じられたその本は、水の中から引き上げられたわりには濡れた様子が全くなかった。

「……え」

そう呟いたのは、俺か、それともクリフか。サーシャは髪を耳に

かけると、呆れたようにため息をついてみせた。

サーシャの手の中にあるその本に書かれていたのは < P a s t
p r o p h e c y b o o k > の文字。俺もクリフも声を失った。

「過去の預言書『原初』の章、だそうですね」

彼が言うんですから間違いはないでしょう、そう言ってサーシャはヴァルナに視線を向ける。ヴァルナはいつも通りの無表情に戻り、確かに頷いた。

「……ああ」

サーシャはパラパラと中身を捲ると、すぐに預言書を俺たちの方に放った。水に濡れた様子さえない皮の表紙が、空中で弧を描いてクリフの手元に収まる。クリフは慌てながら改めて表紙の文字を確認し、自分の手の中にある預言書に声を上げた。

「え、ええっ!? だ、だつて屋敷にあつた預言書は全部、エレンシアが持つていったはずじゃ……!」

俺はクリフから預言書を取り上げ、そしてパラパラと中身を捲る。表紙に触れた瞬間に伝わってくるのは懐かしいあの感覚。ガキの頃に肌で感じた、ジジイのあの魔力だ。

死してなお残る、本当に力を持った人間の成せる技。サーシャは呆れたような視線をクリフに向ける。

「フアリーナさんの言葉を覚えていますか? 何か大きな宝箱のよ
うなものが運ばれていった」と。……もしもそれが施錠されたもの
であったと仮定するなら、エレンシアの人間が預言書の冊数を把握
していないことも理解出来るでしょう。現に、フレイさんでさえ預

言書が5冊あることを知らなかったんですから」

預言書の入った施錠済みの箱が屋敷にあったとして、ジジイの死後、それを引き取りにエレンシアの人間が来る。死ぬ直前に誰かに箱の場所さえ教えておけば、誰もそれを疑う人間はいないだろう。大体、そんなことをする必要はない。

「それに……」

サーシャは髪の水を絞り、上着を脱ぐと、俺の手の中にある預言書に視線を向けた。深い紺色の表紙に金色の文字が踊る表紙。サーシャは不敵に笑う。

「……それに、もしも此処がフレイさんとアイルークさんを誘う罠だとするならば、それ相応の餌が必要ですからね」

俺は呆然と手の中にある硬い本の感触を握りしめる。厚い表紙は多少色あせているものの、しっかりとした作りになっていた。

これが、預言書。強大な国も、大地も、世界も、全てを揺り動かす過去の知識を秘めた、あの『過去の預言書』。そんなものがジジイの亡くなったあの日から、ずっとこの村に眠り続けていた。アイルークが村を出て、俺が旅に出るその時も。

……。……いや、ちよつと待て。

「……お前、いつからそのことに気付いてやがった!？」

俺の言葉にサーシャは微笑んだ。いや、あいつの微笑みはただの微笑みじゃないことくらい、もう言わずもなだろう。

「もしかしたらと思ったのはネオ・オリでフレイさんが蛉人を喚び

出したとき、確信したのは書庫で仕掛けを発見した時です。……無駄足にならなくて本当に良かったですね」

ふつと不敵に笑うサーシャに、クリフが体を震わせる。俺までその顔を見て寒気がしてきた。サーシャは上着を肩にかけると、俺たちの間を通って歩き出す。

ヴァルナは難しい顔で腕を組み、俺とクリフを見下ろしてしみじみと呟いた。

『本当に、たいそうな人間に使えたものだな』

他人事にしか聞こえない台詞に、俺はヴァルナを睨みつける。てめえ、俺たちの苦勞をひと欠片も理解してねえだろ。

俺は振り返って拳を握りしめた。サーシャに振り回された分、そしてジジイの罠に嵌められた分、このムカつきを全部コイツにぶつけてやるうか。

「テメエな、一回痛い目に……っ!？」

俺がそう言った瞬間、まるで岩が割れるような音が響いて、水を吹き出していた壁が崩れた。そこから滝のように水が溢れ出し、先ほどまでとは比べ物にならないスピードで水面がせり上がってくる。驚いたクリフが、腰を抜かしたように床に倒れた。しかしすぐに俺たちの足下にも水が迫ってくる。

「なっ……!？」

「……。おそらく壁が崩れ始めたんでしょう。もともと水脈の近くにある場所ですから、地盤も脆いはずですよ」

サーシャはクリフに手を貸すと、慌てる様子のないヴァルナを見

上げる。涼しい顔をしているのは、俺たちが水死しようが何しようが、蛉人は水によって死に至るような危険はないからだ。

俺は通って来た通路を振り返る。しかし俺たちが走ってきたあの通路からも水が流れ込み始めていた。何処かで壁が破損したのか、水は徐々に量を増やしていく。

サーシャは冷静に口を開いた。

「出口へ案内していただけませんか？」

「ふっ……我が手を貸すとも？」

ヴァルナは口元を歪めてそう答えた。その絶望的な答えに、立ち上がったクリフが悲痛な声をあげる。

「そんな……！」

言葉の続きを、サーシャが左手が制した。サーシャはじつとヴァルナを見上げ、無言のまま蛉人のその瞳を見つめる。サーシャのその瞳は、何者にも真似出来ない強い意志の籠った色をしている。

ヴァルナは俺とサーシャ、クリフの顔を見回すと、肩を竦めて苦笑した。

「……良いだろう。ついてこい」

第4章 1

ずっと……ずっと、欲しいものがあつた。それを求めて彷徨い続け、結局少年達は手に入れることが出来なかつた。望まれたつた一つの幸福は、手に入れるべき人間を間違え、やがて彼らの道を大きく変化させた。

やがて彼らは気付くのだろう。望むべきものを手に入れる人間など、この世には一人として存在しないということ。

- 水中庭園 -

「てめっ……、行き止まりじゃねーかつ!!!」

鈴人に案内された地下通路の奥で、フレイさんは盛大にそう叫んだ。愕然とするクリフさんの後ろで、私は辺りを見回す。通路の様子は他の場所と変わりない。ただ1つ違うことは、そこが行き止まりである点と、天井の色が微かに違っていることだけだ。

私はじつと目を凝らす。長方形の1つのブロックが、そこだけ白っぽい色になっていた。人1人が通れそうな大きさだ。私は鈴人に噛み付かんばかりのフレイさんの肩を叩く。

「あ?……なんだよ」

「フレイさん、上に……」

上を指差すと、クリフさんもまた気付いたように声をあげた。

「……あ、たしかに、あの場所だけ色が違う……」

クリフさんは右手を伸ばしてそのブロックに触れようとする。しかし私とそんなに身長の違いがないクリフさんでは、天井に触れることが出来ない。

私はフレイさんに視線を向けた。

「フレイさん、押せますか？」

「馬鹿言うなっ！俺でも届かないことくらい見りゃ分かんたろっ！」

フレイさんは私に確認させるように右手を伸ばしてみせる。その手は空を切り、上のブロックには届かなかった。私は足元を濡らし始めた水を確認し、クリフさんに視線を移す。

「……ならクリフさん」

「え、ええっ!?!」

届きませんよ、と呟く声を無視して、私は彼の持つレイテルパラッシュを手に取った。鞘の部分を持ち、天井に柄をぶつける。何度かそのブロックを退けることが出来ないかと試したが、剣から伝わってきた感触はあまり良いものではなかった。

私が顔を顰めると、目聡くクリフさんが気付いたようだった。

「さ、サーシャさん？」

「……。……。おそらく、特殊な石が使われていますね」

下手に力を入れると剣の方を曲げかねない。私はため息を吐いた。足元を覆い始めた水はいつの間にかくるぶしの辺りまで水位を上げている。そのスピードは恐ろしいほどに早い。クリフさんはパニックを起し始め、フレイさんは苛立ちを募らせていた。普通の人間ならば不安と恐怖に押しつぶされる感覚に陥るはず。

私はレイテルパラッシュをクリフさんに返すと、もう一度フレイさんと呼ぶ。

「フレイさん、魔法を」

「はあ！？ちよっ……てめえに退かせらんねえもんが俺に出来るかっ！」

フレイさんは私の声に顔を顰めて声をあげた。

「出来ますよ。……ファールン様が自分の孫を水死させるような、悪趣味な人間でないのならば」

私はそう言っただけ振り返る。その視線の先には、かつてフレイさんの父親が使役したというあの蛉人の姿があった。フレイさんは私の視線の先を辿り、そしてヴァルナを見上げる。

「……………」

ファールン様は自分の息子を亡くしたことで、魔術師としての生き方に疑問を持った。そしてフレイさんをあえて突き放して育ててきた。自分の敷いたレールによって苦しむことがないように。しかし、その願いに反してフレイさんも……アイルークさんも、『魔術

師』という生き方に固執していった。

叶えたかった願いも、叶わなかった願いも、全てを彼は知っている。……知っているからこそ。

『足りぬ。……オマエには足りないものがある。いや、理解していないというべきか』

長髪の間から覗く鋭い眼差しを持った瞳。彼にとって、たった3代の魔術師達の生き方はどう映ったのか。小国の誕生と争い、文明の発展、帝国の栄枯盛衰を知る彼にとって、フレイさんは取るに足らないものの一つなのかもしれない。

「……んだよ……」

フレイさんはそう言ってガリガリと頭をかいた。水はやがて膝の辺りに達しようとしている。もしかしたら何処かでまた壁が崩れたのかもしれない。流れが早くなってきた。これ以上水位が上がれば足をとられる可能性も出てくる。

「資格だの何だの言っという……」

水音にフレイさんの呟いた声がかき消される。クリフさんは不安そうな顔でフレイさんを見つめる。

「フレイさん……」

「うるせえ。……うるせえよ」

フレイさんはゆっくりとため息を吐き、頭をかいていた右手を見つめた。何も言わなくともフレイさんの考えはこちらにも伝わってくる。それは接触点のナラカという特異な場所にいるためか、それ

とも彼の見た過去を、私も同じように見てしまったためか。

何処かで壁の崩れる音がした。爆音にも似た激しい音と共に、天井が揺れる。今にも崩れそうな状態にクリフさんが引きつった声を上げる。

そんな中、ぽつりと隣でつぶやく声が聞こえた。

「…………ジジイのことは…………分かった。知らねえふりをしてただけだ」

私はふとフレイさんを振り返った。しかし私がその言葉の意味を聞くより先に、彼は言った。仕方ねえな、といつもの口調で天井を仰ぎ。

水音、轟音、そんなものに負けない力強い声で。

「アイデア・トゥルーン・レ・ヴァルナっ！！我らを光の許に導けっ！！」

太陽は平野の端に傾き、横向きに差し込む光が橙色に染まる。くすんだ色の光が草原を包み、平野はまるで秋の稲穂を思わせる色へと変化した。頭上の空はまだ仄かに青く、交じり合った二つの色が闇を引き寄せている。やがて来る夜を思わせるように、空に透明な月が浮かんでいた。

「……はあ、はあっ」

俺は寝転んだまま、空を見上げて肩で息をしていた。くそ、ヴァルナを使うつてのはこんなな魔力がいんのかよ。たった一言命令しただけなのに、魔力の大半をこっそり持っていかれたような気分だ。

「ふ、フレイさん、大丈夫ですか？」

クリフが俺の様子に気づいたように近寄ってくる。俺は手をヒラヒラさせて答えた。顔を覗き込むクリフに、寝転んだまま言う。

「俺のことはとにかく……クリフ、家に戻ってお袋にこの状況を伝える。ジジイの家をこんなにしたって分かったら、今夜は飯抜きだ……」

「え、ええっ!？」

俺はゆっくりと起き上がって、目の前に広がる風景に視線を向ける。

ジジイの屋敷の門の前に俺たちはいた。地下で俺たちが見つけた出口は、どうやらここに来たときにクリフが怖がっていたあの石造の真下だったらしい。サーシャが動かすことが出来なかったのはジジイの特殊な魔法がかけられていたせいもあるが、石造自体の重みもあつたんだろう。

少し離れたところに座っていたサーシャが立ち上がり、こちらへ近づいてくる。

「夕食抜きは避けたいところですね」

サーシャはそう言うと、門の中へと足を踏み入れた。屋敷の前に

広がる庭園は、ヴァルナの力によって退けられた石造の真下から水が噴出す形になっている。水はやがて庭園の石畳の上に溜まり始めていた。

サーシャは靴を脱ぎ、庭園内に入っていく。バシャバシャと水音が響く。

「おい」

俺が声を上げると、サーシャは庭園の端のほうで何かに気づいたように水の中に手を突っ込んだ。水の中から木の葉を払うと、何かを確信したような顔でこっちを振り向く。首をかしげるクリフに、サーシャはふつと笑った。

「やはり、ファーレン様ほどの方になると考えることが違いますね。

……クリフさん、とりあえずエメリナさんを」

「え？あ、はいっ」

クリフが家の方へと駆け出していく。サーシャはそれを見送ってこっちへ戻ってきた。素足で地面に上ると、俺の隣に立って屋敷を見つめる。

夕日に照らされた横顔で、サーシャは言った。

「どうやら私たちは、まんまとファーレン様の我俣に踊らされたようですね」

「……まあな」

俺は怒る気力もなくして、ただぼうつと庭を眺めていた。このままいけば収まりきれなくなった水が溢れ出し、水脈が枯れるまでこの辺りは水浸しの状態になるはずだ。本気で切れた時のおふくろの雷を想像しつつも、俺は何をする気にもなれずに、庭園を見つめて

いた。

サーシャは立ったまま俺に問いかける。

「……ひとつお聞きしてもいいですか」

「んだよ」

面倒くせえ話なら答えねえぞ、と付け足すも、サーシャは苦笑を浮かべて言った。

「先ほど口にした『分かってた』という言葉の真意を……お聞きしてもいいですか」

思い切り面倒くせえ話じゃねえか。俺はそう思いつつも、つつこむだけの気力を失っていた。俺は再び寝転がって空を仰ぐと、目を瞑る。

いつもならこんな話、死んだってしねえけどな……。こうなりゃ話してしまったほうが楽か。どうせコイツの話術に乗せられて話すことになるんだろっしな。

「別に……言っただまの意味だろ。はっきりと自覚してたわけじゃねえが……ジジイが大人気ない人間じゃないことくらい分かった。それだけだ」

ジジイはいつも、俺を目の敵にしていた。何かにつけて小言を言い、何かにつけて優秀なやつらと比べたがった。俺だって最初は分かってたんだ。ジジイがそんな人間じゃないことくらい、な。それでも……やっぱり俺には耐えられなかった。

「……全てジジイのせいにしちまうのが楽だったんだ」

辛くあたられて、そのせいで周りからも孤立した。全てをジジイのせいにしてしまえば、俺は目の前に突きつけられた『才能』という言葉から逃げる事ができた。逃げてしまえば、俺は楽になる事ができたからだ。

結局は、俺はそうやってずっと逃げまわっていた。周りが一人前になっても、召喚ひとつ出来ない自分から。

「……………そうですか」

サーシャはそう言うと、地面に置いていた上着と預言書を手にとって屋敷に背を向けた。クリフの後を追って歩き出そうとする姿を見上げながら、俺は言う。

「おい」

少し離れたところでサーシャの足が止まる。俺は大の字に寝転がったまま、群青色に染まり始めた空を見つめた。

何処へ行くのか、飛び去っていく鳥が頭上を横切る。薄く千切れた雲が空の彼方へと流れていった。こうしてまた、夜が来る。幾度も同じような時間が過ぎ去り、過去の過ちはいつかまた別な人間によって繰り返される。

俺は深く息を吐く。

「先に言っとくが……………俺にアイルークほどの力はねえぞ」

サーシャは立ち止まったまま、日の沈み始めた地平線を見つめる。そしてふと背中で笑ってみせた。

「フレイさんにしては随分弱気な発言ですね」

「茶化すな……………俺は」

起き上がってその背中を睨み付けると、サーシャは振り返って俺を見下ろす。

「ふっ……構いませんよ」

サーシャの手の中にある預言書が夕日に照らされる。日が暮れた後の夜空の色を思わせる深い紺色の表紙、そして金色の文字が躍る『過去の預言書』。ナンバー1が示すのは、それが始まりの一冊『原初の章』であるということ。

サーシャはひらひらと手を振って背を向ける。

「私には魔術に関する知識も教養もなく、フレイさんにはそれがある。……ただ、それだけのことですから」

縦に伸びた影が去っていくのを見つめながら、俺は夕日の眩しさに目を細めた。水に濡れたせいでびしょ濡れになった服が生暖かくて不快な気分だ。俺は結んだ髪の水を絞りながら、大袈裟にため息をついた。悪態をつきながら立ち上がる。サーシャの姿は、ゆっくりと遠くなっていく。

「……本当に。本当にこの女は。」

「……たいした奴だよ……」

打算的で利己主義で、ムカつくほどに頭がキレる。必要以上のことを口にせず、味方を騙すことさえ日常茶飯事。そんじょそこらの悪人より、ずっとタチが悪い。ああ、タチが悪すぎる。だが、まあ……落ちこぼれ魔術師にや、似合いの契約者なんだろうよ。

ふと何処かで、誰かが笑ったような気がした。

「……ああ、そういえば最後にもう1つだけ」

言い忘れていた、といった表情でサーシャは振り返った。俺は顔を顰める。こいつと一緒にいると本当に、うっかり心の中を読まれたかと思うから心臓に悪い。

「んだよ、俺はもう疲れて……」

「その庭園、すっかり排水設備が整っているようですね？」

「何いつ!？」

俺が咄嗟に振り向いた時、強い風が地平線から屋敷の向こうへと吹きぬけた。

水面が風に揺れ、鏡のように映った夕暮れの橙と群青色が乱反射するように波打つ。開け放たれた門から庭園の石畳の部分は水の中へと消え、段差のつけられた両側の花壇の部分だけが取り残されている。

水に覆われた中央には翼を生やした男の石像が立っていて、水面を見つめるように下を向いていた。水面には現実世界の全てが溶け入ってしまったかのように、庭園の緑、空の青、夕日の色、夜の闇が交じり合っている。

「……!」

朽ちかけた屋敷を背に、石畳に溜まった水が風に揺れる。それは巨大な水中庭園のようだった。噴水のように吹き上がる水と共に、ナラカの澄んだ空気が湧き上がっている。

サーシャは庭園を見つめながら言う。

「あの脱出口を見つけないければこのような形にはならないでしょう」

ね
「

落陽を受けたその光景は、俺が今まで見てきたどんな風景よりも、強く強く印象に残るものだった。

第4章 2

シルヴィ、分からないことがある。どうしてアイルークはジェイと一緒に旅をしようと思ったのか。どうしてジェイはアイルークを連れて旅をしているのか。二人はシルヴィに教えてくれない。もしかしたらそれは、二人にしか分からないことなのかもしれない。

- それでも、知りたいこと -

「…………ふう」

私はカウンターに肘をついてため息をついた。

やっぱり、メイに分かるのはこれくらいなのかな。魔術師サマが必要としてそうな情報はそんなに集まらなかったけれど、とりあえず報告できるだけ報告しなきゃ。

私はコップの中の葡萄ジュースを飲み干すと、パッと椅子から降りておじさんに頭を下げる。

「おじさん、ご馳走様！」

「…………おや、メイちゃんもう行くのかい？」

おじさんは慣れた手つきでコップを手にとると、カウンターの

に置いた。私は頷いて窓の外を見る。時間はもうそろそろ深夜だし、あんまり夜遅くまでいると危ないよね。メイだつて一応、女の子なわけだし。

美味しい葡萄ジュースの代金を払おうと思って、私は荷物の中に手をつ込んだ。するとその時、お客さんがまばらになってきた店内に、一人のお客さんが入ってくる。

ちよつと待つててくれ、とおじさんは私にそう言うと、新しいお客の方へと近づいていった。

「いらつしゃい。……注文は？」

「……いや、知人と待ち合わせているんだが」

なかなか出てこない財布と格闘しながら、入ってきたお客さんに視線を向ける。声は男の人みたい。頭まで布を被っているところを見ると、旅の人かな。声はまだ若い感じ。観葉植物のせいで顔がはつきりと見えないけど……あれ？

おじさんは少し首を傾げて、そしてふと思いついたように手を叩いた。

「ああ、あのお嬢さんかな。珍しい緑の髪をした……そのお嬢さんなら2階の奥の部屋にいるよ。野郎ばかりの席じゃ悪いと思ってね」

「済まない。……階段は？」

おじさんに案内されて、お客さんが入り口を横切っていく。私はその顔を見た瞬間、咄嗟にカウンターの下に体を隠した。

一瞬だけ見えたあの金髪の髪、碧眼の鋭い視線。どこにいても目を引くくらい、整った顔。チラツとしか見えなかったけど、腰に下げられたあの銀のリボルバーは……私の見間違いやなければ、サイヤお姉ちゃんの持つ『クロノス』の対になる『カイロス』。

ジェイロードさんだけが持っている、リボルバー。

「?……メイちゃん?」

おじさんはジェイロードさんを上に通した後、私の様子に気づいて首をかしげた。私はカウンターの下に隠れたまま、ジェイロードさんが戻ってこないのを確認して代金をカウンターの上に置く。

そして顔だけを出しておじさんに行った。

「お、おじさん。メイ……用事を思い出しちゃった。あははは……きよ、今日はこの辺で!それじゃっ!」

私は荷物を手にしてそそくさと酒場を出る。おじさんは私の慌てように、ぼかんとした表情で首をかしげていた。それもそうだよ、だっておじさんは数年前のジェイロードさんを見たわけじゃない。見たのは向かいの宿の奥さんで、おじさんじゃない。

でも、ジェイロードさんがここにいるってことは、魔術師サマの言ってたあの人ももしかして……!?

「はあっ、はあっ……」

私は夜の人ごみから逃れるようにして走る。後ろから人がついてくる気配はない。多分ジェイロードさんには気づかれていないし、気づかれていたとしてもきつと追ってきたりはしないと思うんだけど……うつつ、怖かったよう。

何処からか喧騒に混じって潮騒の音が響いてくる。私は路地に捨て置かれた木箱に腰掛けて、安堵のため息を漏らした。忍び込んだ裏路地の間から、港に停泊する船の灯りが見える。物凄い早さで脈打つ心臓とは真逆に、船はゆらりゆらりと波に揺れている。

部屋の扉がノックされた。私はその音にパツと椅子から立ち上がる。向こうから聞こえてきた声に、私はなんだか体が軽くなったような気がした。

「ジェイ！」

パツと部屋に入ってきたジェイに抱きつく。最近ではこれが私の日課になっていた。誰がインプットしたわけでもないのにね、とジュリアは苦笑していたけど、私にはこれが何故かとても心地がよいのだ。

ジェイは抱きついた私の頭を優しく撫でると、辺りを見回した。きつとアイルークの姿がないことに気づいたんだろう。

私はジェイを見上げて言う。

「アイルーク、宿で待つてるって。外に出たくないって」

私にはどうしてか分からなかったけど、ジェイはなんだか納得したように頷いた。

「……そうか」

ジェイはそう言うと、テーブルの上に置かれた葡萄ジュースに視

線を落とした。私は機械だから、人間のように食べたり飲んだりすることが出来ない。店の店員がサービスだと言って置いて行っただけ、私は一口も口をつけていなかった。アイルークがいたら代わりに飲んでくれるのに。

私はジェイに抱きついたまま、頭を押し付けた。アイルークがそうしていたように、私もジェイに体を預けてみる。

「？」

「ジェイ……ジェイは、どうしてアイルークと一緒にいるの？アイルークはどうして、ジェイと一緒にいるの？」

ジェイは被っていた布を取ると、その髪の色では目立ち過ぎると言っ、私の頭に被せた。私は布の間から顔を出すと、窓辺で何かを見つめるジェイを見上げた。

「……」

ジェイは、あんまり喋らない。アイルークみたいに女の人に笑顔を振りまいたりもしない。でも何故か、アイルークより女の人が寄ってくる。

誰かが入れたデータの中に、人は、顔立ちの整った人間と性格の良い人間を好むと書かれている。ジェイは……性格はよく分からないけれど……顔は左右対称で、整った顔立ちをしている。瞳の色は私の造られた眼球よりもずっと澄んだ色をしているし、身長も男の人の平均よりも少し高い。

きっと、ジェイは外見で人に好かれるのだと思う。でも、私はジェイの外側も中身も好き。ジェイは、いつも私に最優先の命令をくれる。私を実際に造ってくれたのは別な人だけど、ジェイはそれを決めてくれた。

ジェイは、私のマスター。私が存在する理由をくれる。命令とい

う、行動を示すことで。

「……ジェイ」

でも。アイルルークの様子を見て、聞きたいと思った。

「ジェイはどうして私と一緒にいるの？私はどうして……ジェイと一緒にいるの？」

私の言葉に、ジェイはふと窓から視線を話した。私の表情はジェイにどう見えているのだろう。少なくとも、殺人人形でしかない私にインプットされた表情は限られている。

「……」

ジェイは窓のカーテンを締めると、布の間から顔を出した私の頭に手を触れた。そして何も言わないまま、その手を離れた。すれ違ふときのジェイの表情は、よく見えなかった。

「……明日の朝、ここを発つ。アクロスを経由して東南にある『微睡みの庭』へ」

背を向けたままジェイはそう言う。

期を待っていた計画が、もうすぐ始まるうとしていいる。預言書を巡る勢力図が明らかになり、同時に相対するべき敵が見え始めた。アクロス国、メーリング家、そして私達。各々が一冊ずつ預言書を所持しているという均衡を、崩す時。

「戦争処理に手間取ったネオ・オリよりも先に、メーリング卿のい

る『庭』を叩く」

「……でも、ジェイ。そう仮定した場合、アクロスの預言書は90%の確率でネオ・オリの手に落ちる」

私の中に組み込まれた予測システムがあらゆる状況を計算して、その結果を叩き出す。戦争の処理に手間取ったとはいえ、ネオ・オリがまず押さえるのはアクロスの持つ預言書。それを押さえられれば、アクロスの国力も全て泡となる。

ジェイは振り返ると、私に向かって言う。これは最優先の命令。他のどんな命令よりも一番高いところに位置しているもの。私が……私が、ジェイの傍にいられる理由。

「今現在の最も危険な相手を早々に討つ。彼らが力を蓄えるのを待っている必要はない」

「……了解しました」

私は機械的な声を出して頷く。ターゲット順位の変更、ライラ・メーリング及び、メーリング卿ことラフィタ・メーリングを危険度Maxへ。同時に彼らが飼いならした冒険者達を危険度順に並べ……変更完了。

ジェイは私の確認音声を聞き、口を開く。

「おそらくあちらも同じ魂胆だろう。ぬかりのないように」

「了解しました、マスタ」

私はそう言うと、ジェイの後を追って部屋を出た。頭から被った布がはためく。新しい命令によって私は稼働モードを切り替えた。警戒度が上がり、いつどこで戦闘を行うことになっても対応できるように体が緊張を帯びる。

そう、これが私の……私の、理由。わたしノ、りゆう。

『シルヴィ。本当にそれでいいの……？』

酒場を出ると強い風が頬を掠めた。

ノイズの向こうで囁いた声は、私の聴覚装置では察知することが出来なかった。

カーテンの隙間から街を見下ろすと、見覚えのある店が建ち並んでいる。生きる意味すら持たなかった割に、どうでも良いことを覚えていたものだ。俺は自嘲の笑みを浮かべた。

街の中心部から少し離れた宿を選んだのは、この街がたった二年前まで俺が暮らした街だったからだ。はつきり言ってしまうと、この街には一生近づきたくはなかった。けれどこの街にしかアクロス方面へ向かう船はない。ネオ・オリを経由するにも、あちらはアクロスとの戦いで未だ緊張状態が続いている。

「……………」

この風景を見ていると嫌でも思い出す。何もかもを見失って、彷徨っていたときのことを。

『……………アイルーク。お爺様のお知り合いの方から紹介を頂いたわ。』

良かったわね』

爺さんが亡くなって7年後、俺は爺さんの最も優秀な跡取りとして、この街を治めるボードワール家に仕えることになった。どうやら爺さんの葬儀に来た人間に、母さんが顔売っていたらしい。15歳の誕生日を迎えたその日、俺はボードワール家でも最年少の魔術師として異例の貴族仕えとなった。

『……………ありがとう、母さん』

はつきり言っつて、俺にとってそんなことはどうでも良かった。爺さんが死んでから7年間、俺の心の中はまるで空洞だった。愛されべき対象は永遠にこの世からいなくなり、母さんのスパルタも少し和らいだけれど、それが彼女の愛情に繋がるわけではなかった。

『……………さようなら、母さん』

俺は何処か遠い所へ行つてしまいたかった。この村の中では、平原の風の冷たさが体に染みる。痛いほどの風を受けながら上を向いて生きていくことが出来るほど、俺は強くなかった。

だから、俺は逃げた。周りに羨まれながら、周りの尊敬の視線を集めながら、悲しみや空虚な心を隠して逃げ出したんだ。

「……………はあ」

俺はため息をついてカーテンを閉めた。ベッドに腰を下ろすと、食べかけの食事を見つめる。二年前によく口にした、近くの漁港で穫れる魚。畑で穫れた芋をペースト状にしたもの。味は悪くないが見ると胸焼けがした。目の前に別なイメージが重なり、見たくない顔がいくつも過る。そのどれもが、生きている人間の顔ではなかつ

た。

吐き気を覚えて俺は口元を押さえる。出てくるものは噎せた咳だけだったが、痙攣する胸に反して心の何処かでもう一人の自分が咳いた。

馬鹿みたいだな。人を殺すことなんて今じゃ表情一つ変えないくせに、初めて殺した奴らの顔は思い出したくないのか。

「げほっ、……っ……っ」

そうだ。今じゃどんな汚いことだって平気で出来る。飄々と人の心に付け入って、笑みを浮かべて裏切ることだって。

『そ、それは……』

『……おや、アイルーク様。いかがいたしましたかな？』

『特別扱いは出来ない決まりなんですよ』

『あ……あ……』

『あれだよ、……新しく来た……』

『お、お止め下さいっ！どうか、これ以上は……っ！！』

『さすがアイルーク様、理解が早い』

『っ、……くそ、畜生っ！！』

頭の中を声が過る。いくつもの記憶が混在してしまったかのように反響して耳鳴りを起こす。俺は呻きながらシーツを握りしめる。まるで過去の亡霊にでも取り憑かれてしまったかのように、数えきれない声が言う。

やがて波が引いていくように言葉は去り、誰かのクリアな声が響いた。

『……アイルーク様、ご覧になられますか？此処が貴方様がお仕え

する方の街ですよ』

あれはそう、初めてこの街に来た時のこと。馬車を操る従者が、高らかな声で俺にそう言った。街並など興味がなかった俺は、馬車から少し顔を出して街を見る。

海に隣接したこの街は、青々と茂る草原の向こうに喧噪を響かせていた。あの時微かに胸をついたのは、仄かな期待だったのだろうか。

第4章 3

初めて目の前で真っ赤な鮮血が流れる様を見た。思考が停止し、膝が震え、胃の奥底がその事実を吐き出そうとした。足下に転がった肉片から骨が覗き、人としての形を失ったモノ。いや、もっと恐ろしかったのは、それを見て薄笑いを浮かべるヤツら。そして今は、俺もまたヤツらと同じ……。

- 残酷な太陽 -

俺が仕えた主は、新しく主人となつたばかりだという若い男。歳はまだ30前、それでも自分より一回りも二周りも年上の部下達を従えた、存在感のある男だった。蛇のように鋭い瞳は部下達の反発を無言で押し止めることが出来、彼が低い言葉で呟けば、たとえば長年一家に仕えてきた執事でさえクビを切られた。まだ15歳だった俺は、彼の直属の部下として常に付き従う立場に立たせられた。

「……アイルーク。ヴァレリオはまだか」

主はいつも大きな椅子に腰掛け、肘をついた状態で人を見下ろした。俺はその椅子の横で抑揚の無い声で呟く。

「徴収に手間取っているんでしょ……あの辺りは誰が向かっても、いつもそうなります」

この街一帯は全て、俺の仕えるボードワール家が権利を持っている。新しく流れてきた者たちを甘い言葉で誘い込み、高い金を要求する。それがこの一家のやり方だった。爺さんがこの家の人間に仕えていたときはまだマシなやり方をしていたようだが、俺が仕えるようになった頃には内部の者達の殆どが腐りきっていた。

「……」

主は不機嫌そうに眉根を寄せて、背もたれに体を預ける。俺はそれを横目で見ながら、足下に視線を落とす。

初めて、この家の後ろ暗いところを見たときも、俺は絶望すらしなかった。世の中なんてこんなもんだ。金という権力を掴んだ人間の中に、形のない幸せなど求める心はない。そして逆に、権力を持たない弱者に与えられた道はただ一つ。

不幸という、二文字。

「……アイルーク。ヴァレリオ達の様子を見に行け」
「！」

あの日、何があったのか主人の顔は、いつもより機嫌が悪いように思えた。そうでなければ、俺に様子を見に行かせるなんてことを口にしない人間だったから。

少しだけ驚いた表情をする俺に、主人は睨みつけるような視線を向ける。早く行けと言わんばかりの表情。俺はすぐに頭を下げて、彼のもとから離れた。

「西街の端、陸橋の手前の農園、か……」

ボードワール家を出た俺は、下働きの男たちに聞いた情報を頼りに部下の一人を捜した。ヴァレリオという名前のその男は、俺がある家に仕えるよりずっと昔から部下として働いていたらしい。皺を深く刻ませていやらしく笑う顔が印象的な男だった。

その日の天気は快晴。青々と茂る草原とは真逆に、西街の農園付近は悲惨な状態と化していた。一ヶ月ほど前に街全体を襲った大雨が農作物を腐らせ、畝を洗い流した。道に転がる砂利は畑から流れ出たものなのだろう、道の両側に広がる畑を見回しながら、今年の収穫は期待出来ないだろうと心の中で呟く。農作業に詳しくない俺でも、それははっきりと分かった。

ふと、人の気配に顔をあげた俺は、思わぬ叫び声に驚いた。

「お、お止め下さいっ！どうか、これ以上は……っ！！」

それは女性の声だった。同時に悲鳴と激しい打音が聞こえてくる。火が付いたような子供達の泣き声。何が起っているのか理解してしまった俺は、足を止めて視線を落とした。

「出すものを出してもらえりゃ、これ以上傷をつけるつもりはないんですがねえ……俺たちとしても仕事が出来ない体にならたら飯の食い上げだ」

囁れた男の声。ヴァレリオだとすぐに分かった。顔をあげると、畑の向こうにある家の前で夫婦らしき二人の男女が男たちに囲まれている。後ろでは子供らしき姉弟が怯えながらも泣き声をあげていた。。

「で、ですから……今お渡しした分で全てなんですっ。お願いしま

す、それ以上されたら主人の体が……」

「どうやら今月分の徴収料が足りないのか、夫がヴァレリオの持つ鞭でめった打ちにされている。もうほとんど意識がないのだろう、地面に突っ伏した男は白目をむいていた。」

しかしヴァレリオ達は手を休めない。

「いやあ、困りますなあ。近所の人間だって苦しいのは同じ……特別扱いは出来ない決まりなんですよ。それに貴方がたは先月も、先々月も徴収分に足らなかつた」

「そ、それは……」

「それに不思議なことに、貴方がたは痩せ細っているわりに、この坊ちゃんや嬢ちゃんは随分と健康そうに見える。何故なんでしょうねえ……」

ハッと、何かに気付いたように女性が子供達を抱きしめる。ヴァレリオはニヤリと口端で笑うと、辺りの人間に目配せをした。周りの男たちも分かりきつたように頷く。男の一人が母親の髪の毛を掴み、子供達を引き離そうとした。その時。

「ヴァレリオ！」

咄嗟に口をついて出た自分の声に、俺は驚いていた。ヴァレリオは俺の姿に気付くと、先ほどまで浮かべていた嫌な笑みをサツとかき消して、上の者に向ける顔をつくりあげる。

「……おや、アイルーク様。いかがいたしましたかな？」

「あ……いや、……主人がお前の帰りが遅いとお怒りになっている。早く屋敷へ戻るように、と」

突然現れた介入者の姿に、男達は一様の反応を見せ、母親と子供達はさすがのような視線をこちらへ向けた。

ヴァレリオの態度から、俺が彼らより上の立場にいることは明白だった。母親は助けを懇願するような目で俺を見つめてくる。土色に乾いた頬を流れる涙。おそらくこの人は、自分たちの食事を疎かにして子供達を養ってきたのだろう。両親よりも血色の良い顔をした姉弟。姉は10歳、弟は6歳といったところだろうか。二人もまた、同じようにさすがのような視線を向けてくる。俺は耐えきれなくなって、反射的に視線を逸らした。

ヴァレリオは俺の反応に気付いているのかいないのか、笑いながら男達に言う。

「主人がお待ちならば仕方がない。しかも魔術師様ご自身が迎えに来てくださるとは、さぞお怒りなのだろう。ならば仕方がない」

その言葉に、母親が安堵の表情を浮かべた。しかし、ヴァレリオの言葉は更に残酷に、俺の耳に焼き付いた。

「……事は早く済ませてしまわなければ、な」

その後の記憶は、酷く曖昧で断片的なものでしかなかった。家族を取り囲んでいた男の一人が、畑に転がっていた鍬を手に取り、殆

ど虫の息だった父親の頭に向けて振り下ろした。石を叩くような音と共に粘着質な液体が弾け、泣き喚いていた子供達の声が一瞬にして止まった。その瞬間、人を凍りつかせるような静寂が辺りを包み込み、そしてやがて時間が動き出したかのように母親の悲鳴が上がった。

男は5、6度鋏を振り下ろし、辺りに赤い塊を散らした。頭だけが跡形もなくなった人の体は、首から液体を垂れ流し、まるで絞り出されるかのように心臓の動きにあわせて血を吐き出した。

「あ……、つあ……！」

本能的な恐怖が足下から這い上がってきた。まるで体の中を虫が這っているかのようにザワザワと。

悲鳴を上げる母親。泣く事すら忘れて、変わり果てた父親の姿を凝視している子供達。男は頭を潰すのに飽きると、今度は子供達を母親から引き剥がした。お母さん、と掠れた声で子供が叫ぶ。ヴァレリオは母親と子供達を交互に見て、そして母親の髪を掴んだ。

「アイルーク様、こつゆうときはどちらを先に制裁を加えるか分かりますかな？」

ヴァレリオは日常と変わりのない声でそう言う。けれど俺にはそれに答える余裕すらなかった。一步も動く事も出来ず、声すら出せずにいたから。

「子供達を殺すところを母親に見せつけるのも面白いですが……その逆の方が何かと都合がいい」

「ひっ……！」

男の一人が縄を持ってきて母親の首にかけた。逃れようともかく

体を押えつけ、犬のように首に回した紐を締め上げる。

「あまり遊びすぎると片付けるのも大変なのですよ……。もう少し若ければ娼館に売れるんですが、残念でしたねえ」

「……ひうつ、ぐ……っは、あ！」

締め付けられた喉が空気を求めて動き、やがて母親は口の中に溜まった涎を垂らして白目をむいた。体から力が抜けてゆき、肺は動く事を放棄する。男達は母親が地面に崩れ落ちたのを見て、トドメを刺すように懐から取り出したナイフで左胸を貫いた。死の境を彷徨っていた心臓は、まるで一生分の働きをするかの如く大きく痙攣し、その体は一瞬だけ緊張状態に達して時を止めた。

二人分の血が足下まで流れてくる。けれど俺は停止した思考の中で身動きすらとることが出来ずにいた。ヴァレリオはそんな俺を嘲笑い、男たちに捉えられた姉弟に視線を向けた。

「さて、お嬢ちゃん、お坊ちゃん。俺たちはキミたちまで殺すほど鬼ではない……。頭を下げればキミたちのうちどちらかを助けてあげよう。……どうするのかね？」

母親の心臓を貫いた心臓を鼻先に向けられて、子供達は体を震わせた。弟は恐怖に耐えきれなくなったのか、言葉にならない悲鳴をあげて泣き始める。おそらく本能的に恐怖を感じているのだろう。死に抗う姿は子供と言えど、動物と同じようなものだった。

ナイフから滴る赤い血を見つめていた姉は、弟の叫びに、一欠片の正常な思考を取り戻したようだった。震えながら、乾いた唇が掠れた言葉を紡ぐ。

「り……リウ、を……た、すっ……けて、下さ……いっ」

リウというのはどうやら弟の名前らしかった。ヴァレリオは眉根を上げて、少女の健気な願いに驚いたような表情をしてみせた。

「おやおや……これはしつかりとしたお姉さんだ。どれどれ、顔をよく見せておくれ……本当に良いのかな？」

「リウ、は……っ、リ、ウは……ち、小さいから……おか、あ、さん……そうっ、言っ……る、から……っ」

おそらく少女は、お姉さんだからと弟の世話を見ながら育ってきたのだろう。弟は姉の言葉など理解出来ないほどに混乱している。弟を殺さないで欲しいと涙ながらに懇願する姉に、ヴァレリオはいやらしく笑ってみせた。

……そして。

「そうかそうか。……だが、残念だねえ」

「!?!」

男の一人が、叫び喚いている少年の腹を蹴り倒した。小さく柔らかい体が地面に転がり、恐怖を理解した瞳が空を見上げる。その瞳に、大きな石を振り上げた男の姿が映った。そしてそれは、慈悲すらないスピードで振り下ろされた。

鈍い音に、少女の悲鳴があがる。

「……男は自分で金が払えるようになるまで時間がかかるのだよ、お嬢さん。その点、キミは下働きならば出来そうだ。それにあと2、3年で娼館にも出れる。……幸せだねえ」

少なくとも坊ちゃんよりは生きていられるんだから。耳元でそう囁く声に、少女の絶望的な泣き声が上がる。男たちは暴れる少女を動けないように縄で括ると、殆ど担ぎ上げるような形でその場を去

り始めた。

ヴァレリオは残された親子の死体をじっくりと見下ろし、そして背中を向ける。死体をそのままにするのは、周辺に暮らす者達への見せしめだ。

「……お待たせ致しました、アイルーク様。共に屋敷へと戻りましょうか」

「……」

俺は声すら出せずにいた。目の前に散乱した肉片や骨、流れ出す血液から。ヴァレリオは何度か俺の名前を呼んだようだったが、俺にはそれに答えるだけの言葉が出てこなかった。

ただ、何かを理解した瞬間、肺の奥からせり上がってくる胃液を感じて、肩に触れたヴァレリオの手を払いのけていた。

「うつ……、さ……先に屋敷へ、戻れ。俺に……俺に、構うなっ」

血溜まりの中に蹲り、俺はただそう叫んでいた。ヴァレリオは肩を疎めるフリをしてその場を去って行く。

死体しかなくなった家の前に、離れて行く少女の音が響いてくる。男達を、ヴァレリオを、俺を、呪うかのような恨みの言葉。まるで死体が喋っているかのように生々しい残酷な言葉を耳にしながら、俺は体の奥底に溜まったものを吐き出していた。

「げほ、っ……かはっ」

吐瀉物は血と混じり、俺は痙攣する体に息苦しさで涙を流していた。

分かっていたつもりだった。徴収分を払う事の出来ない者達の末路を。女は娼館に売られ、男は殺される。それは理解していた。

奴らは人間として生きていくための努力すらせず、世界を彷徨い……金に困って甘い誘いの言葉に乗る。それはこの人間達の生き方が全て返ってきた、いわば相応の罰。魔術師として、ファーレンの孫として別の次元に生きて、努力してきた自分には関係のないこと恨まれようと、呪われようと、関係のないこと。理解していた。…理解していた？

白目をむいた死体達がこちらを見ている。誰でもなく、俺だけを。

「っ、……くそ、畜生っ！！」

俺には関係ない。俺がやったわけじゃない。俺はただ、主人の言葉を伝えにきただけだ。何故恨まれなければいけない？俺が恨まれる理由などない。ただ、居合わせただけのこと。

俺は違う、俺は違う。……そう、違うんだ……。

(俺はただ……ただ……)

蒸し暑い空気に異様な臭いを発しながら、3つの死体に蠅がたかりはじめ。俺は吐き出すだけ吐き出すと、フラフラと立ち上がった。俺を責めるかのように太陽が背中から照りつける。

15歳の夏。俺はその日から、愛情を求める事だけではなく、考える事すら放棄した。

第4章 4

愛されなかった。けれど愛してもらえなかった。俺は自分を不幸だと思った。そして俺は更なる不幸を呼び寄せた。絶望という沼の淵で、俺は泣き叫ぶ。

やがて俺の前に一人の男が現れる。助けを求めても、男はその手を差し伸べようとはしなかった。

- 地獄という場所 -

それから1年の月日が流れた。俺は主人の下で確実に仕事をこなし、信頼を得て、屋敷の中で確実に敵を作っていった。傍目から見れば尊敬を集めているように見えても、嫉妬深い魔術師達の本心など最初から分かりきっていたことだった。

そして1年前と大きく違っていたのは、俺自身がヴァレリオと同じ役目を持たされたことだった。いわば、徴収役。もとは下っ端の仕事だったが、下っ端よりも仕事が出来るということでその任を任された。担当場所は南街の外れ、もともと土が良くないせいで毎年確実な収穫を望むことの出来ない場所だった。

そこに割り当てられる人間は頭の弱いヤツばかりだった。だから大体数ヶ月ごとに人が入れ替わり……俺はその度に、ヴァレリオと同じように人を殺した。自分の手を染めたりはしないが、殺し方も

全て指示をした。2回も3回も同じことを繰り返せば、もう俺の心の中に罪悪感など残らなくなっていた。

毎日がつまらなかつた。主人の命令を聞き、人を脅し、殺し、仲間内からも人からも恨まれ、街の人間からは恐れられる。唯一面白かつたのは、新しく俺の部下となった人間に、人を殺すところを見せる時だつた。初めて死体を見たやつは1年前の俺と同じように吐き散らし、やがては慣れて、どれもボードワール家の傀儡へと化した。傀儡になればつまらないものになってしまうが、涙を流して嫌がる様は楽しかつた。唯一俺が面白いと思えることだつた。

そんな生活を送っていたある日。俺はいつものように徴収のために部下を連れて南街の外れへと向かつた。その日の徴収は先月の徴収分を基準の額より少なめに出した家で、今回基準に達しなければ殺してしまおうと思っていた。

部下達の中には、目新しいヤツは一人もいなかった。つまらない徴収になりそうだと思いつながら、俺はいつも通りに人を殺す指示をし、少ない徴収額を理由に家の男を殺し、女はまだ若かつたので娼館に送ることにした。

なにもかもがいつも通りだつた。一生続いていくのだろうと思つていた、繰り返しの一欠片。しかしその歯車が狂つたのは、その後だつた。

「……アイルーク・ハルトというのはお前か？」

トネリコの植えられた家の前に金髪の男が立っていた。仕事を終えて返ろうとしていた俺たちは、やけに整つた顔をした男に顔を顰める。俺は訝しげな表情で、俺よりいくつか年上であろう相手を見た。

「……なんだ、冷やかしか？」

俺が爺さんの孫と知つての冷やかしは多かつた。そのどれもが流れ者の旅人で、この男も携えた剣を見る限り、ただの旅人にしか見えなかつた。

けれどその男は冷やかしとは違つ表情を浮かべて、切り捨てた。

「フツ……どんな男かと思えば、ただの下衆か」

「!?!」

部下達が顔を顰める。余所者とはいえ、ボードワール家の人間に汚い言葉を吐けばどうなるのか、この辺りを通る旅人達は知つていた。

部下の一人が眉間に皺を寄せて口を開く。俺はそれを片手で制した。

「止せ。……人の名前を聞いておいて下衆とは随分じゃないか。お前は?」

俺がそう言うと、男は確かに、と納得したように頷く。そいつは俺の後ろで睨みつけてくる部下達に表情一つ変えず、こつ名乗つた。

「ジェイロード・レヴィアス。……魔術師ファーレンの血をひくというお前に話があつて此処まで来た」

「話……?」

俺は顔を顰めた。爺さんの名前を出すということは、おそらく過去の預言書目当てなのだろう。そういえば何処かの国で預言書が見つかったという噂も耳にする。近頃は預言書に関するガセネタがあちらこちらに溢れ、トレジャーハンターだけではなく、強国も小国もその噂に振り回されているらしい。

あの村のことも、爺さんとの関係も全て忘れかけていた俺には、

関係のないことだった。主から預言書の話を何度か聞かれたこともあったが、幸いにも俺の主人はそんな不確かなものより目の前にある財に重きを置いていた。

「『過去の預言書』について……知っていることを話してもらいたい」

やっぱり、と心の中で呟きつつ、俺はこのやけに顔の良い男を見つめる。

預言書などというもののことなど、噂で耳にする以外、殆ど記憶の中から消え去りかけていた。だからだろうか、俺にその存在を問いかけてきたこのジェイロードとかいう男に、俺は興味を持った。

「へえ……『過去の預言書』、か。……分かった、知っていることを教えてやってもいい」

「アイルーク様！」

後ろにいた部下達からそんな声が飛ぶ。俺はヘラヘラと笑って見せて、男達に言った。

「お前達は屋敷へ戻れ。俺は少しこの男と話をしてから戻る」

「ですが、お一人では……」

「危険じゃないだろ。……曲がりなりに、俺は魔術師だ」

俺がそう言うと部下達は互いに顔を見合わせ、アイルーク様がそう言うのなら……と渋々その場を去っていった。

残された俺は改めてジェイロードを見つめる。金髪をしたその男は腰に剣と、見たことのない筒状の形をした鉄の塊を装備していた。何かで見たことがあるが、思い出せない。それでも漠然と武器だということとは分かった。

ジェイロードは気がなくなったのを確認すると、俺に向かって口を開く。

「単刀直入に聞こう……預言書の在処を、知っているか？」

「ハッ、在処を知ってたらもつとマシな人生を過ごしてるだろうな」

俺は口端でそう笑って、ジェイロードに視線を向けた。ジェイロードは訝しげな表情でこちらを見つめている。

「それにアレは、エレンシアにあるって話も聞けば、ネオ・オリにあるって話も聞く。アンタの欲しい情報はなんだ？証拠のないネタならいくらでも提供できる」

「……」

ジェイロードは眉を顰めたまま、俺の言葉を聞いていた。挑発を理解しているのかいないのか、いまいち反応の薄い男だ。女に好かれそうな顔のわりにニコリともしない。

「なんだ、からかいがないのヤツだな。ちょっとは楽しめるかと思っただのに。」

「大体、預言書を探し出してどうするんだ？エレンシアやアクロスのような強国ならともかく……はつきり言って一人の人間に何が出来る？」

過去の預言書。『過去』の全てを知りつくすための書物。けれどそんなもの、あっても俺にはどうしようもなかった。『過去』を変えられるわけじゃない。時間は後戻りを許さないのだから。

俺はジェイロードを見つめた。面白い理由でも口にすれば、傑作だと腹を抱えて笑ってやろうと、そう思っていた。

「……」

しかし相手はため息をついてこちらに背中を向けただけだった。

「話をしても無駄のようだな。……手間をかけた」

呆れたような声でそう呟き、ジエイロードは去っていく。俺はその背中につまらそうに肩を竦めると、反対方向へ向けて歩き出した。なんなんだ、あの男。屋敷に戻りながらそう呟いたとき、空はもう日暮れが迫ってきていた。

「……？」

一人遅れて屋敷に戻って俺は、ふと屋敷の裏口の辺りで下男達がかそこそと何かを離しているのを見た。召使いや下男達が、主や魔術師達の機嫌を確認し合い、時折仕事の愚痴を交わす……そんなことは日常茶飯事だった。ただしそれが目上の者に対する発言ならば、少々状況が違ってくるが。

「だから……に、……が……」

「……でも、そんな……」

「待て、……だとしても……に、……」

奴らはいつもひどく暗い顔で、まるで鼠が囁き合うような声で話をしていた。しかしこの日は何故か、どれもみな一様に真剣な顔で額を突き合わせている。

俺は不審に思いながらも、面白いものを見つけたように笑った。どうやら下男達は話に夢中でこちらの存在に気付いていないようだ。俺は気配を悟られないように近づいていく。するとあとちょっとというところで、一人がハツとしたように顔をあげた。

「あ、……アイルーク様！」

うわずった声に皆が一斉にこっちを向いた。さっと顔を青ざめる者もいる。よからぬ算段だろうと、俺はニヤリと笑った。

「……何の話だ？」

俺はわざとそう聞いた。すると男たちは首を横に振りながら、なんでもありませんよ、と顔を見合わせた。いかにも怪しい仕草だったが、少し脅しておいた方が面白いかもしれない。

俺はそんなことを思いながら男たちに言った。

「それならいい。……よからぬことは考えない方が身のためだからなあ？」

「ま、まさかそんな。は、ははは……」

空笑いを始める男達の横を通り抜けながら、腹の底から笑いが込み上げてきた。きつと奴らはこれから、主に悪巧みがバレるのではないかという恐怖を抱えながら生きていかなければならない。この屋敷の中で少しでも反抗心を抱いた奴は、目上の者達によって手が下される。一瞬にして首が飛ぶか、一生生死の境を彷徨い続けるの

かは、痛めつける者の自由だ。それはこの屋敷の中の暗黙の了解であり、いわば絶対的な規律。

笑いが止まらなかった。どうしてこんなに、この世の中は単純なのか。強いものは生き残り、弱いものは虫けらのように死んでいく。残忍な殺され方をした彼らを慰めるのは、蛆や蠅だけだ。幸せなどというものは、結局誰かを踏み台にして築き上げるものでしかない。

「ふっ……はははは……」

俺はすれ違ふ召使い達の不審な視線を受けながら、笑いを押し殺すのに苦労していた。階段を上りながら数人とすれ違ったが、どれも皆異様なものを見るような表情でこちらを見ている。

廊下を歩いていくと、ふと後ろから誰かが俺の名前を呼んだ。足を止めて振り返ると階段を駆け上ってくる子供の姿がある。まだ13にも満たない下働きのガキだ。変声期すら迎えてない高い声が俺を呼ぶ。

「アイルーク様！」

「……ジヨットか。屋敷の中を走り回るなど、何度言えば分かる」

ジヨットは数ヶ月前に自分で志願してこの屋敷の下働きとなった子供だった。他にも同じくらいの年齢の下働きはいたが、ジヨットは他の子供より大人っぽく、中性的な顔立ちをしている。顔には最近出来たものらしい大きな傷痕があったが、それを除けば男色を好む者たちにはウケそうだった。

おそらく上の者達をそんなことを考えて雇ったのだろう。男に興味の無い俺には分かるはずもなかったが。

「言う事を聞かないようなら主のところ連れていくことになるな……」

俺はわざとそう言って肩を竦めてみせた。ボードワール家の主人が相当の男色だということを、屋敷の中で知らない者はない。ジヨットは俺の言葉にパツと視線を逸らすと、ごめんなさい、と呟いた。そしてもう一度顔を上げると、メモらしきものを俺に差し出す。

「これ、ヴァレリオ様からです。中身を絶対に見るなと言われたので、言いつけられてすぐにお持ちしました」

「……ヴァレリオが？」

「はい。火急の用事だと言われて」

俺はメモを受け取ると、それを広げた。文字は確かにヴァレリオのものだ。詳しく中身を読もうとした俺は、ジヨットがじっとこちらを見つめていることに気付く。

「……ジヨット、仕事へ戻れ」

「あ、はい。分かりました」

俺はジヨットが去っていくのを確認すると、廊下の奥にある自室の扉を開けた。そして鍵を閉めてからベッドに腰掛ける。魔術師用の広い部屋の中は、質素だったアンブロシアの家よりもずっと快適だった。

俺はヴァレリオからだというメモを手を取って、中身を見る。そこにはたしかにヴァレリオの古くさく律儀な字で、こんなことが書かれていた。

第5章 1

このような形でのご報告をお許し下さい。唐突な話ではありませんが、屋敷の中に反逆を企てる者がいるのです。主の寛大なお心の許でこの屋敷にお仕えする身でありながら、その御顔に泥を塗る者。彼らの罪を裁くべく、一度話し合いの機会を設けたいと思いたった次第であります……。

- 絶望へのハジマリ -

手紙には、用件の他に時間と場所が指定されていた。場所はボードワール家の敷地の南側にある建物の一室。たしかに、そこにはヴァレリオと数人以外に寝泊まりする者たちはおらず、下男もあまり近づかない場所だ。そして時間は、日が沈み、召使いが食事の片付けを始めた頃。たしかに、人目を避けるには丁度良い時間帯かもしれない。

俺はいつも通り主と同じ時間に食事をとった。魔術師達は仕事の都合で食事の時間が前後するが、俺が食事をしているときにヴァレリオの姿は見当たらなかった。

「……………」

食事を口に運びながら、俺はふと視線を感じて扉へと視線を向ける。仕事を終えて戻って来た者、食事を運ぶ召使い達。食事を運ぶために開け放されたままの扉の向こうに、あの男達の姿が見えた。俺の視線に気付くと蜘蛛の子を散らすように逃げていく。

今回のことで一体どれだけの使用人達の顔が変わるのか、俺はそんなことを想像していた。5人……いや、もう少しそんな気もする。処罰が誰の手に委ねられるかが楽しみだった。どうせなら、生とも死ともつかない永遠の苦しみを与えてやった方が良い。

「……」

ニヤけ顔を表に出さないように笑いを噛み殺しながら、俺は席を立った。使用人達の間をすり抜けて指定された場所へと向かう。

けれど俺はまだ知らなかった。誰よりも早く夕食を済ませて密会へ向かう俺の後ろ姿を、ジョットが見つめていた事を。

召使いの一人が人目をはばかるようにジョットを隅へと連れていく。

「……ジョット。……が、……に」
「うん、……にも、協力を……」

ジョットは何かに頷きながら、集まってきた数人に視線だけで頷いた。思えばその時にはもう、取り返しのつかない時間が、俺を飲み込もうとしていたのかもしれない。

夕日が山の稜線に消えゆき、辺りは薄暗く虫の音が響いていた。俺は南の棟の階段を上がり、メモに書かれた部屋を目指す。南の棟は俺が使っている部屋よりも広く、贅沢な部屋のようにも思えたが、辺りが木々に囲まれているせいで暗く陰鬱とした空気を放つ場所だった。

そういえば、爺さんの家もこんな感じだったと、俺は心の中で呟く。ガキの頃……まだ何も知らない子供だった頃には、爺さんの家は遊び場のようなものだった。けれど爺さんの葬式の後からは、俺にとってあの屋敷はそう、こんな暗澹とした場所が変わった。

「……廊下の端の部屋か」

俺はメモをポケットに入れると、ヴァレリオの部屋の前で足を止めた。二度ノックをして中に声をかける。しかし返事は返ってこなかった。

食事から帰ってこないのか。俺はふとそう思った。しかし夕食をとっているのならば、何処かですれ違うはず。俺は首を傾げながらドアノブに手をかけた。

……開いている。

「……ヴァレリオ、いるのか……？」

扉を開けて中を覗き込むと、部屋の中は真つ暗だった。カーテンも締められ、籠った空気と共に別な臭いが鼻についた。これは……。

「っ……」

もう一步、部屋の中に足を踏み出した時だった。俺は突き飛ばされた感触と共に、扉が閉まる音を聞いた。バランスを崩して床に転がった俺は、ハツとして扉を見やる。ガチャン、という音と共に錠が落ちる音が響いた。

「何っ!？」

俺は咄嗟にドアノブに手を伸ばした。開かない。開ける、と声を荒げながら扉を叩くも、応じる声はなかった。ドアの向こうにはたしかに、誰かの気配がある。くそっ、一体誰だ……!

気配はパタパタと足音を立てて去っていった。階段を下りていく音が聞こえる。俺は扉を蹴り飛ばし、そして奇妙なものを見つけた。

「何だ……?」

異様な臭いが部屋の中に漂っていた。何か薬品を燃やした後のような、そんなキツイ香り。頭がクラクラしてくる。俺は窓を開けようと、カーテンに手を伸ばした。まだ薄暗い外の風景が目に入ってくる。

薄明かりが部屋の中に差し込み、俺はふとヴァレリオのベッドに視線を向けた。そこには、真っ赤に染まったベッドと床、口から血を滴らせ倒れ込んだヴァレリオの姿……。

「!？」

その死体には深々とナイフが差し込まれていた。それは一度だけではない。何度も背中から突き刺した痕がある。そのナイフは何処かで見覚えがあるような気がした。刃の長い、特殊なナイフが月光を受けて赤く煌めいている。

俺は凍りついた瞳で辺りを見回した。ベッドの周りには何か争った

ような形跡が残されている。そして俺は気付いた。ヴァレリオの死体の傍らにある魔法陣。そしてその上に盛られた、何かを焼いたこの灰。これは確か……。

「うっ……」

ぐらりと視界が揺らいだ。途端に永遠の眠りに落ちるのではないかと思うほどの睡魔が襲ってきた。何処かで誰かが自分の名前を呼んでいる。それは冷静な自分の声か、それとも深層から語りかけるフィオの声か。どちらにせよ、それは眠ってはいけないということを警告していた。

そうだ、こんなところで眠ってしまったては……。

「っ……く、そっ……」

けれど俺は、特殊な魔法によって作り出された協力な睡魔に勝つ事は出来ず、死人のように眠りに落ちていた。

次に目を覚ましたとき、俺は南の棟を取り囲む林の中にいた。一部の木を切り取って作られた、楕円形の広場のような場所。此処もあの陰鬱とした空気のせいで人が寄り付かない場所だったが、何故かこの時、この場所には賑やかすぎるほどの人が集まっていた。

目を開き、そして俺は気付く。主の冷たい視線が、少し離れたところからこちらを見ていた。

「っ！」

俺は一瞬にして状況を理解した。慌てて立ち上がろうとするが、両足がまるで地面に掴まれているかのように動けない。俺は前のめに倒れて、やっとそこに人を縛り付ける魔法が張られていることに気付いた。

「ご主人様」

ふと、少し離れたところから、聞き覚えのある幼い声が聞こえてきた。見やると、ジヨットが赤く染まった布の中から一本のナイフを取り出す。神に捧げるように主に向かってそれを差し出すと、主は柄を手にして俺に刃先を向けた。

「……アイルーク。先ほどヴァレリオが部屋で死んでいるのが見つかった」

「……っ」

俺は何かを言おうと口を開く。しかし、思ったように声が出てこなかった。辺りを見回すと、俺を囲むように十数人の魔術師達が立っていた。どれも低級な奴らだったが、互いに互いの魔力を重ね合わせ、俺を縛り付ける魔法を構成している。

主はナイフを舐めるように見つめながら、あの蛇のような目で俺に言った。

「証言した者によれば、死因はこのナイフだそうだ……そして、その部屋にはお前が転がっていた」

このナイフを持ってな、と主は信じられない事を口にした。俺は咄嗟に身を擦る。倒れ込んだとき、ナイフはヴァレリオの背中に刺さったままだった。主は氷のような瞳で俺を見下ろした。

「違うと言いたいのか」

「っ……………」

俺は微かに首を縦に降った。主は俺の目を覗き込んだ後、ジョットにナイフを手渡し、フン、と冷たい視線を浴びせる。

「ヴァレリオと争っているところを見た者が数名いるのだ。……………アイルーク、お前には失望した」

「!?!?」

スツと俺の視線を避けるようにジョットが主人の後ろに隠れた。そしてその背中から顔を出し、子供とは思えない恐ろしい表情でニヤリと笑う。それは……………そう、ヴァレリオにも、そして今の俺にも、そっくりの笑い方で。そしてその瞳は、一年前の記憶を呼び覚ますものだった。

『り……………リウ、を……………た、すっ……………けて、下さ……………いつ』

今でもはつきりと覚えている。潰され粉々にされた父の死体を凝視する姿、母と弟を無惨に殺されあげた悲鳴も。俺やヴァレリオを呪う声も。

俺は自分の愚かさに気付いた。何故今まで気付かなかったのか。少年の格好をしているが、顔の作りもそのままあの子供じゃないか。顔の傷のインパクトが強過ぎて、まさかそうだとは思わなかった。

「……っ！」

俺は叫ぼうとした。そいつが、全てやったんだと。主すらも騙し、そいつはおそらく俺の次に主人である貴方を殺そうとしているのだと。しかし弁解は全て息になって消える。

ふと、魔術師の中の誰かが呟いた。

「アイルーク様……往生際が悪いですね。許しを請うつもりですか？……あのファーレンの孫である貴方が」

「ファーレン様も嘆いておられるでしょうなあ。手塩にかけた孫である貴方が、まさか人殺しとは……」

「！」

俺は辺りを見回した。誰もが残念だ、残念だ、と口々にそう言っている。誰も反論する者はなく、同じ事を言う者しかいない。ふと、嫌な予感が頭の中を過った。

ジョットが下働きとして志願してきて、おそらく使用人達の多くが溜まった鬱憤を晴らすべきではないかと、ジョットにそそのかされた。だとすると、ヴァレリオの部屋の中で見たあの眠りの魔法陣。あれは下男達に出来る芸当じゃない。

「ああ、尊敬していたアイルーク様に我々が手を下す事になるとは……悲しい限りだ」

俺は睨みつける気力すら失って、ぼうっと浴びせられる言葉を聞いていた。中身のない罵り、皮肉、罵倒、呆れたため息。俺は何処か空虚な目でジョットを見た。甘えるフリをしながらこちらを嘲笑うその表情。その残酷さはまるで、いつか見た母の笑い方にも似ていた。

俺は声にならない声で呟く。

(……ああ、そうか。ヴァレリオのあのメモは、主人に向けたものだったのか。……それなら『反逆を企てる者』は、使用人だけじゃなく……)

全てはひどく単純だった。強いものは生き残り、弱いものは虫けらのように死んでいく。幸せは、結局誰かを踏み台にして築き上げるものでしかない。自分のうえに邪魔な者がいるならば、排除するのが当然のこと。

そうじゃないか。俺が歩いてきたこの世界は。いつだって……そうだったじゃないか。

主はこの世で一番残酷な一言を口にする。俺は何の感慨もなくそれを聞きながら、ただ……ぼうつとしていた。

「やれ」

一斉に魔術師達が何かを唱え始める。その呪文を聞きながら一思いに殺す気が、と少し残念に思った。そうか、邪魔とはいえ怖いのか。ファーレンの孫という肩書きを置いても、俺は低級な奴らより遥かに強い。だからこそ弱い者達が群れて反逆を企てる。

一人一人の魔力が、まるで一本の縄のように俺を縛り付けていく。俺はそれを確かに感じながら目を瞑った。

「……」

一人なら何も出来ない者達。束になれば、と安心でもしたのか。甘い考えの奴らばかりだ。もしここで俺を殺したとしても、次に立つ者はまた、下の者に羨まれ、恨まれ、同じ運命をたどる。誰かを蹴落として、蹴落とされて存在する世界。

この世はどれだけ醜いのか。この世界はどれだけ悲しいものなの

か。

『……お嘆きですか、アイルーク』

ふと、耳元で懐かしい声が聞こえた。俺は声にならない言葉で応える。おそらく発せられずとも、相手はしっかりと聞いているはずだ。

『……ああ。久しぶりにその声を聞いた気がする。フィオ』

目を瞑りながらも、その姿は見えた。いつもは言葉を発することのないフィオの姿。灰色の体に翼のような両腕。思えば爺さんの次に出来る魔術師になりたくて召喚する相手をフィオに選んだけれど、実を言えばもう一つ理由があった。

『俺も……フィオのようになりたかった』

翼があれば、あんな場所旅立っていったのに。こんな場所に、……こんな地獄のような場所に囚われることもなかったのに。

『貴方が望むのなら……私は貴方の翼になりましょう。全ては……貴方の望むがままに』

フィオは俺の体をその翼で覆うと、静かに呟く。憂いを秘めた瞳を閉じて。

思えばフィオはどうだったのだろう。召喚された精霊は、魔術師の生が終わるその時までずっと傍にいる。魔術師の心の奥深くに潜むのだという。フィオはずっと、そこで見ていたのだろうか。何も言わず、ただ、俺の全てを。

魔術師達の詠唱はあと少しで終わりを迎えようとしていた。それ

が終われば、おそらく刹那の間も与えずに体が砕け散るだろう。俺は目を閉じたまま呟く。

「……あの時、ただ自尊心のためだけにフィオを喚び出した俺でも？」
「ええ」

ふっと、俺は見えない目でフィオが微笑うのを見た気がした。

第5章 2

なあ、爺さん。あんたは今の俺を見たらなんて言うだろうな。……いや、昔からあんたのあの言葉は、嘘ばかりだった。全ては俺ではなくフレイへ、そして母に厳しく接せられる可哀想な『俺』への言葉ばかりだった。

でも爺さん。ひとつだけ感謝するよ。俺は、翼を手に入れたんだ。自由になるための翼を。……自由を得るための翼を。

- C r a w l u p -

真つ赤なものが飛び散って、辺りは騒然とした。闇の中に灰色の鳥が浮かび上がり、俺に術をかけていた者達が一人、また一人と、内側から破裂した。それは生々しい光景だったけれど、この1年で慣れきってしまった心臓は、吐き気すら催さなかった。

灰色の鳥はくるりと広場を一周し、そして今度は辺りに集まっていた使用人達に視線を向ける。召使い達は悲鳴を上げ、下男達は我先にと駆け出そうとした。しかし、その足はまるで骨を抜かれたかのようにもつれ、やがて足先から砂へと変わっていく。

ボードワール家の敷地は、今までにない異様な空気を放っていた。俺は魔術師達の魔法が解けたのを確認して、フラフラしながら立ち上がる。

フィオはゆっくりと俺の前に降り立つと、今にも逃げ出そうとしていた主に向かって右手を一閃させる。するとまるで見えない刃で斬られたかのように、その体の上半身と下半身がスライドした。後ろに隠れていたジヨットが、恐怖に息を詰まらせる。

フィオはジヨットを見つめると、再び片手を上げた。俺は咄嗟に言う。

「……………フィオ」

制止の言葉に、フィオはふとこちらを振り向いた。もういいのか、と視線で問いかけてくるのが分かった。俺は頷いて、広場から屋敷の裏口へと身を翻す。フィオに無理をさせすぎたか……………体に思うように力が入らない。

覚束ない足取りで、他の者達の視線を避けるように裏門を目指した。幸いなことに南の棟は裏門に一番近い道がある。両端を木々が覆っているために、血まみれの姿を見られる心配もない。

「……………はあつ……………」

俺は時折木々に体を預けて休みながら、裏口を目指した。広場の方では惨状を目にした他の使用人達が声をあげている。追いつかれる前に逃げ切れるか……………。

フラフラと歩みを進めていくと裏門が見えてきた。畑へ繋がる道の向こうは真っ暗で、逃げるには好都合だ。しかし俺は裏門に視線を向けて、ふと顔を顰めた。そこに思いもよらない人の姿を見つけたからだ。

フィオの体に緊張がはしる。俺は切れ切れになった息でそれを制止すると、裏門に背を預けて立っているジェイロードに向かって口を開いた。

「なん、だよ……また、……お前かよ……」

ジェイロードは静かにこちらを見下ろしていた。俺は額を流れる汗を拭って、息を整えながら言う。

「昼間も……言った、だろ。預言書の場所なんて……もう、誰もっ

……」

「……そうだろうな」

じゃあ何で、と俺はジェイロードを見上げた。その時。森の奥の方から、小さな影が飛び出してきた。月光に照らされて、その顔がはっきりと見える。それはあのナイフを手にしたジヨットだった。

逆手に持ったナイフの先が、月の光を反射させる。

「テオの……みんなの、仇いー!!」

俺は咄嗟にその場を除けたが、フィオの召喚で力を持っていかれた俺と、子供とはいえナイフを手にしたジヨットでは、勝敗は見えているようなものだった。倒れ込んだ俺はジヨットの腕を掴みながら、胸の前で震える刃先を見つめる。

「アンタが……アンタがいけないんだっ！あの時、あのジジイを止めていればっ！……止めてくれれば……あんなっ、あんな死に方っ……」

ジヨットの腕が震えているのは、人を殺す恐ろしさからだろうか。それとも、仇を目の前にした武者震いだろうか。俺は力の入らない手でそれを押さえながら、ぼろぼろ涙をこぼすジヨットを見ていた。

「お母さんもお父さんも……あんな殺され方されるような人じゃな

かったっ！テオだつて……私だつて！！」

刃先が服を裂く。俺はその腕を押さえながら、ジヨットのその後を思い出そうとしていた。けれどいくら考えても、思い出せない。そして気付く。……そうだ、思い出せないんじゃない、気に留めようともしなかったからだ。ヴァレリオが娼館の話をしていたことは微かに覚えている。そうすると、ジヨットはそこから逃げ出してきたのだろうか。

ふと、上を見上げると、こちらをじっと見つめているジェイロードの姿があつた。ジェイロードはゆっくりと口を開く。

「……どうする？」

まさに目の前で人が殺されそうになっているときに、問いかけられた言葉はそれだつた。助けるでも、手を貸すでもなく。ジヨットは仇を目の前にした興奮からか、ジェイロードの存在は見えなくなっているらしかった。

俺はジェイロードを見上げる。そして、言った。

「助け……て、くれ……っ」

掠れた声で、俺は助けを求めた。初めてのことだつた。不思議なことに、今までどんなに絶望しても、どんなに世の中を恨み、憎んだとしても、俺は誰かに助けを求めたことなんてなかった。

でも……なぜだろう。今は、言える。何の抵抗もなく、はっきりと。

「助けてくれ……っ！」

そう叫んだ次の刹那、俺に覆いかぶさってナイフを向けていたジ

ヨットの体が弾き飛ばされた。俺は呆然として、寝転んだままジェイロードの顔を見上げる。

「……いつまで寝ている気だ？」

「えっ？あ、ああ……」

俺は門に手をついて立ち上がると、後ろを振り返った。弾き飛ばされたジヨットは起き上がると、後ろから走ってきた他の使用人や魔術師達に向かって叫ぶ。いつの間にか殆どの使用人達が、この騒ぎを聞いて駆けつけたようだった。

「あの人たちです！あの人達が、ご主人様を……！！」

俺は門に体を預けながら苦い表情を浮かべた。この人数を、ジェイロード一人でどうにか出来るはずがない。しかしジェイロードは表情一つ変えず、見慣れない鉄の武器を片手に使用人達に向けた。

「もしも、と静かな声が響く。」

「……もしもこの場を引くならば、命の保証はしよう。必要以上の殺生は好かないからな」

「なっ……！！？」

ジヨットをはじめとした数人の目に殺気が帯びる。俺が制止の声をあげるより早く、奴らはジェイロードに向かって襲いかかってきた。ジェイロードは武器を敵に向けると、引き金に指をかける。それはまるであらかじめ決められたもののように自然で、なめらかに。まるで伝説や神話に聞く戦神のようだった。

始まってから終わるまで、時間はかからなかった。

ベッドに座つてため息をついた俺は、ふと宿の扉を叩く音に気付いて声をあげた。すると扉からシルヴィが顔を出す。シルヴィはいつもより少し嬉しそうな顔で俺を見た。

「アイルーク、ジェイ到着したっ。今夕食食べてるっ」

跳ねながらそう言うシルヴィに、俺は苦笑した。どうやらジェイロードに会えたのが嬉しいんだろう。最近のシルヴィは喜びが顔や行動に出るようになってきた。メンテナンス担当のジュリアは毎回メンテナンスをする度に変化があると言っている。

「そうか……良かったな」
「うんっ」

思えば、あれから約二年。逃げるようにしてこの街を出て、ジェイロードと共に旅をした。そして数少ない預言書の手がかりを辿り、蒼天の章を手に入れた。人が作り上げた機器およびシステムプログラムに関する知識が書かれた蒼天の章。それを利用して作られたのがシルヴィだ。

試作品は失敗ばかりだったが、ようやく成功例が出た。あとはその量産が当面の目標だ。今ジュリア達が骨身を削って研究に励んでいる。

「……アイルーク、これ冷めてる」

ふと顔を上げると、シルヴィがテーブル上の食事を見つめていた。俺は頷くと、左手で下を指差した。

「ああ……ちょっと食欲がないからさ。下に戻してもらっていいか？」

「……」

シルヴィは俺の言葉に少し戸惑った表情を見せると、今度は少し唇を尖らせた。

「好き嫌いいけないって……ジュリア言った」

「いやあ、麗しのジュリア嬢の言葉なら聞かなきゃ罰が当たるな……でも、今回だけ。頼む」

両手を合わせてそう言うと、シルヴィは仕方なさそうにトレイを手にした。渋々といった表情で部屋を出ていく。いつの間にか、人間とそんなに変わらない表情を浮かべるようになったもんだなあ。そう思いながら、俺はベッドに横になった。

二年。あのままアンブロシアにいれば恐ろしく長く、そしてボードワール家にいれば恐ろしく短い時間だっただろう。けれど俺は今、全く別な場所にいる。爺さんの孫という肩書きは、未だに消すことが出来ない。そこに生まれてしまった以上、避けられないレットルなのかもしれない。

それでも、今はそれでいいんだ。此処が……俺にとっては一番の場所だから。

『……なあ、一つ聞いていいか』

ふと脳裏に、あの後の会話が浮かんでくる。追っ手を倒し、俺はジエイロードの肩を借りながら街の外へと歩いていった。街に潜伏するのは危険だと意見が一致し、強行突破で隣町を目指していたときだった。

辺りは真っ暗だった。ただ月の明かりだけが、俺たちの道を微かに照らしていた。

『昼間も言ったけど……あんた、預言書を集めてどうする気なんだ？』
『……』

ジエイロードは何も言わず、黙々と歩いていた。ここまで来て無視かよ、と心の中で俺は呟く。するとふと、ジエイロードは道の向こうを見ながら言った。

『……を、……するためだ』
『は……？』

俺は思わずそう聞き返していた。風の音で聞き逃したせいだけじゃない。微かに聞こえてきた言葉が、想像とは全く違っていったからだ。

ジエイロードは俺の方を振り返ると、いたって無表情のまま口を開く。同じ言葉が繰り返され、俺は返事が出でこなくなつた。それはあまりに唐突で、想像を絶する答え。人によつては……コイツ馬鹿なんじゃないかと言いたくなるような、そんな目的だった。

俺はどう答えるべきかと考えを巡らせ、そしてふと笑いが漏れた。少し皮肉混じりでアナーキーな笑い方。笑って初めて、俺は昔こんな笑い方をしていたんだと気付いた。そうか、そうだったな……。本当に心から笑うことなんて、久しぶりだ。

愛情も、権力も……全部捨ててしまつても、人はこんなに笑える

ものなのか。

『ふっ……男についてくのは趣味じゃないけどなあ……』

聞いているのかいないのか、ジェイロードは黙々と歩みを進める。俺はそれが面白くて、また笑いをこぼした。ああ……楽しい。

『……分かった。あんたについてってやるよ、ジェイロード』

ジェイロードは呆れたようなため息をついて言った。

『ならば早く自分の足で歩いて欲しいものだな』

「……ふっ……」

俺は思い出して口元を押さえた。あの後、俺は楽しくて、おかしくて、ジェイロードの肩を借りながらいつまでも笑っていた。おかげで、頭がおかしいのかと毒舌で言われてしまったけれど。

自由な翼を望み、見つけた宿り木。爺さん、一つだけ感謝するよ。俺は最後まで間違い続けるなんて馬鹿な真似はしなかった。それだけだけは……俺の唯一の救いだ。

どんなに汚いことに手を染めても、そのせいで地を這ったとしても、これ以上絶望することはない。俺はやっと足の踏み場をならして、立ち上がったんだ。

これが、俺の……ファールンの孫としてじゃなく、アイルーク・ハルトとしての生き方。そして此処が、俺の生きていく場所。

第5章 3

違ってしまった道は、もう戻ることはない。だから人は過去に想いを馳せるのでしょうか。懐かしき日々を恨み、羨む。二度と戻ることはない追憶の日々を思いながら、人は明日を生きていかなければいけないのだから。

だから……そう、行ってらっしゃい。過去を背負い、そして未来へ。

- 彼女の優しい瞳 -

光は眠気の覚めやまない目には眩しく、刺激のある色で煌めいている。フレイさんとクリフさんよりも早く朝食をとった私は、またあの一本木の前に来ていた。あの『ビルギット』と名付けられた鳥が忙しなく雛に餌をやっている。茶色の羽毛から白い翼へ変化したところを見ると、もう少しで巣立ちの時期なのだろう。ふと私は足下に視線を向ける。

「……………」

そこには、弱々しい声で鳴く小さな白い雛の姿があった。巣から落ちたのだろうか。私はそっと雛を手取る。

「……怪我は……なさそうですが」

人間に拾われたことが怖いのか、雛はピーピー鳴くのを止めてじつとこちらを見つめている。巣に帰しても良いかもしれないが、人間の臭いがついていないことに気付いて『ビルギット』が餌を運ばなくなってはとうしようもない。

どうするべきかと、巣と雛を交互に見つめていると、後ろから声をかけられた。

「あら……早いよね」

「おはようございます」

私はこちらへ歩いてきたエメリナさんに頭を下げた。盲目とはいえ、私の行動は気配で分かっているのだろう。彼女は私の隣まで来ると、手の中の雛に顔を向ける。

「あらあら……拾ってしまったのね」

「ええ。今どうするべきかと悩んでいたところです」

エメリナさんは私の言葉に微笑むと、人差し指で雛の頭を撫でた。雛は撫でられて巣の中の感触を思い出したのか、指先に擦り寄ってピーピーと鳴く。特に怪我はなさそうね、とエメリナさんは微笑んだ。怪我が無いと判断したのは、彼女の魔力だろうか。それとも鳴き声を聞いての判断だろうか。

後でファリーナに世話を頼んでみましょう。そう言ってエメリナさんはビルギットを見上げた。青空にビルギットの翼が羽ばたいていく。

「……ねえ、サーシャさん。貴方はどうしてその雛を拾ったのかし

ら？」

ふとエメリナさんはそんなことを呟いた。私は少し考え、そして呟く。

「そうですね……深く考えていませんでした」

「ふふっ……そうかもしれないわね。でも……」

エメリナさんはそう言っただけ空を見上げる。今日は快晴だ。フレイさん達と話をして、朝食を食べ終わった後にアンブロシアを出ることに決めている。エメリナさんは止めるかと思ったが、どうやら一人息子を引き止める気はないらしい。

ただ彼女は言った。いつてらっしやい、と。

「貴方は……それが雛だと気付いて、心の中で可哀想だと思った。違つかしら？」

ふと盲目の視線を向けられて、私は足を止めた。手の中の雛が小さな声で答える。私は大きく息を吸った。

「違いますね。……私はこんなもの、いつでも見捨てる事が出来ますから」

「あら……じゃあ、フレイと剣士さんも？」

ピヨ、と雛がこちらを向いて鳴いた。まだ柔らかい茶色の羽を散らしながら、飛び立つフリをするように翼を震わせる。私はそれをじっと見つめた。

弱くて小さな命。私のような特殊な体とは違っ、ましてや人間でもない命。見捨てようとするだけでも出来る。ここで撃ち殺すことだって出来るだろう。現に、食事に困れば鳥でも兎でも殺して食

べることもある。

その命を、フレイさん達と比べる……？そんなこと、考えるまでもない。

「ええ。私は、情に流されるような人間ではありませんから」

私は頷いてみせた。状況が変われば、いつでも切り捨てることは出来る。私は、やらなければいけないことがあるのだ。そのためになら……。そのためにはならば、どんなモノでも犠牲に出来る。

エメリナさんはこちらを見つめながら、悲しげに笑って見せた。

「そう……。……貴女は正直ね」

「そうですか」

私は少し前に同じ会話を交わしたことを思い出しながらそう言った。エメリナさんは一歩こちらへ近づくと、私の手から雛を受け取る。手の大きさのせい、温かさのせい、雛は所在無さげにパイパイと鳴き始めた。

エメリナさんは顔をあげる。

「貴女は……とても冷静で、理知的な人だね。そんな『色』をしている」

雛はエメリナさんの手の中で暴れると、翼をはためかせてこちらへ飛び移ってこようとしたりした。しかし、まだ飛ぶことに慣れない翼はその体重を支えきれず、エメリナさんの手の中からバランスを崩す。私は咄嗟に地面に落ちそうになった雛の体を片手で受けとめた。

雛は自分が再び地面に叩き付けられそうになったことを知っているのかいないのか、機嫌を直した様子でぬくぬくと指先に擦り寄ってくる。

私はため息をついた。エメリナさんは苦笑する。

「でも……貴方は心の奥底で、誰よりも……そう、言ってしまえばフレイよりも、情熱的で激しい性格を隠している。まるで赤と青が混じり合いそうで混じり合わない、そんな『色』よ」
「あの二人が聞いたら、揃って否定するでしょうね」

雛を両手で包んだまま、私はそう言った。エメリナさんはそうね、と微笑みながら私の顔を覗き込む。彼女の瞳は機能していないが、もつと他の、別な部分を覗き込まれそうで、私はすつと視線を逸らした。雛が落ちそうになったフリをしながら、朝焼けに染まる草原に視線を向ける。

「エメリナさんは先日……私の中に4つの心があると仰いました。憎しみ、警戒心、罪悪感、嘘……それだけではないと仰っていました、そのことですか？」

「ええ。でも……詳しくは言わないでおくわ。貴女は否定するでしょうから」

エメリナさんはそう言って笑った。私は大きく息を吐いて、ファーレン様の屋敷の方を見る。あの庭園水没からかなりの時間が経った。しかし庭園の水は決して濁らず、最近では村の子供達が水遊びに使い始めていた。この風景は、おそらくファーレン様の望んだものなのだろう。

私の視線の先にあるものに気付いたのか、エメリナさんは言う。

「ああ……今日も水が綺麗ね」

「……。……最初から、知っていたのではないですか？」

エメリナさんに視線を向けると、エメリナさんは悪戯が見つかった

た少女のような微笑みを浮かべてみせた。

フレイさんから、ファーレン様の死後、この村を取り仕切る仕事は全てエメリナさんに任せられていたと聞いた。屋敷の管理から、預言書をエレンシアに渡すまで。預言書の冊数が足りないことを、エメリナさんは気付いていたのかもしれない。

ファーレン様が亡くなった後、部屋は簡単に片付けられていた。本や机の中身はそのままに、散らかっていたものだけエメリナさんが片付けたのだろう。ならば、あの仕掛けにも気付くはず。全てはあの蛉人に聞けば分かることだが。

「ふふ……やはり、気付いていたのね」

「ええ。屋敷の管理は貴女が行っていたと聞きますし、もしやと思ひまして」

私がそう言うと、エメリナさんは頷いて見せた。

「最初は……フレイが連れてきたのが貴女達で、どうしようかと思つたわ。でも……おそらく違ってしまった道は、もう戻らないだろうと思つたの」

フレイさんとイルークさん。同じ状況に生まれながら、互いに互いの持たざるものを羨み、そして道を外れた二人の魔術師。

私が頷くと、エメリナさんは苦笑して見せた。

「でも……そうね、ファーレン様の思い描いた未来とは違うけれど、彼らはいつまでも巢の中の雛ではないわ。飛び立つ時を迎えれば、全く別の空へと去っていくもの……過去を背負い、そして未来へ……」

エメリナさんは草原の向こうに視線を向ける。二羽の鳥が競うよ

うに地平線の向こうへと飛び立っていった。眩しい太陽の中に、その姿が小さくなって消えていく。

全ては、過去の思い出。そして……そこから繋がる今という未来。一人の祖父が願った結末は、向かえることが出来なかった。しかしそれを悲観する者はない。

「おい、サーシャ！」

ふとフレイさんの声が聞こえて、私は振り返る。見ると、家の窓から身を乗り出して声を張り上げるフレイさんの姿があった。

「早く仕度しろって言ったの、お前だろっ！！さっさと準備しろっ」「私はもう出発出来る状態ですが？」

そう言い返すと、中で癪癪を起こしているのが伝わってきた。クリフさんの慌てる声と、ファリーナさんの苦笑がこちらまで聞こえてくる。私は雛を持って玄関へと歩き出した。

再び、旅立ちの時が来る。過去の預言書を求めて私達の旅が、再び始まるうとしている。……そう。

過去を背負い、そして未来へ。

番外編 1 (前書き)

Extra chapter

サーシャの秘密

誰にでも弱点はある。しかしそれが『弱点』と認識されるのは、平均的な能力よりも下だと考えられる場合のみである。下には下があり、上には上がいるのがこの世の摂理。しかし不思議なことに、全てにおいて完璧な人間など一人も存在しない。

……というのが、俺、フレイ・リーシエンの持論だ。

- サーシャの秘密 -

「あつ、ペペロンチーノ！」

ふと何かを思い出すようにそう言って、ファリーナがパタパタとリビングから出ていった。俺の隣に座るクリフは首を傾げながらその姿を目で追い、オフク口は微笑んでみせる。いつもの通り、俺の向かいに座るサーシャは無表情だ。

クリフは皿の上のコーンスープとパンを見つめながら呟く。

「ペペロンチーノ………?」

今日の食事にペペロンチーノは出ていない。ファリーナのやつ、作っという料理を出し忘れたのか？

「あらあら……ファリーナは忘れっぱいわね」

クスクスと笑って、オフクロは席を立った。どうやら食事は終わったらしい。慣れた手つきで皿を重ねると、盲目にもかかわらずはつきりとした足取りでキッチンへと向かった。

「……ふう」

しばらくして、ファリーナが玄関の方から戻ってきた。俺は椅子を後ろへと傾けてファリーナを見上げる。ファリーナの手には皿に載せられたペペロンチーノ……ではなく、植木鉢用の小皿があった。

「それ、何だよ？」

「何って……やだなあ、坊ちゃん。ペペロンチーノですけど？」

ファリーナがそう言うのと、無言で食事をしていたサーシャが微妙に咳払いをした。立ち上がった皿を手にすると、オフクロの後を追ってキッチンへ逃げようとする。

クリフがまた首を傾げた。

「あれ……？サーシャさん、具合でも悪いんですか？」

サーシャの皿はまだ半分しか飯が減っていなかった。サーシャは足を止めると、振り返ることなく

「いえ」

とだけいって、そそくさとその場を後にする。俺とクリフが顔を見合わせると、ファリーナが『ペペロンチーノ』だという小皿を片

手に肩を震わせて笑い始めた。

俺は顔を顰めてフアリーナを見上げる。

「……………お前、何笑ってんだよ」

「い、いえ……………ふふつ、なんでもっ……………」

首を振るフアリーナに、クリフがふと座ったまま小皿を見上げた。

「そういえば、ペペロンチーノって？」

「ふふつ、これのことですよ」

フアリーナは目尻の涙を拭くと、小皿を俺たちの目の前に差し出した。そこには、白く柔らかい翼をした一匹の雛の姿。見覚えのある姿に、俺はリビングの窓から外を見る。……………そういや、これに似たのがあの『ビルギット』とかいう鳥の巣にいたな。

「はい。巣から落ちてしまったこの雛を、サーシャさんが見つけて

……………」

「サーシャが？」

「はい、それで巣立つまで私が面倒を見ることになったんですが……………。その、エメリナ様が、『サーシャさんが拾ったのだから、サーシャさんに名前を付けていただいたらどうかしら』と」

いかにもオフクロの言いそうなことだ。小皿の上の雛は見慣れない人間の顔を見て驚いたのか、小さな羽根に顔を隠している。

クリフは雛の頭を撫でながら、思い出したように顔を上げた。

「それで、名前はどなたですか？」

「『ペペロンチーノ』です」

「え？」

「正式名称は『ペロンチーノ・竜五郎』、だそうです」

俺とクリフの思考回路が完全停止したのが数秒間。そしてその後、俺はフリーナの腕を掴んでこう言った。

「フリーナ。……ちよつとサーシャ捕まえてこい」

「坊ちゃん。これはセンスの問題ですから、どうこういっては可哀想……」

「いーから、さつさと捕まえてこいっ！ペロンチーノって、どうゆうネーミングセンスしてんだあの女っ！！しかも竜五郎って、コイツ鳥じゃねーかっ！！」

叫び散らす俺の隣で、未だ信じられない表情でクリフが呟く。

「……さ、サーシャさんにも弱点ってあったんですね……」

何も知らないペロンチーノ・竜五郎が、首を傾げてピヨ、と鳴いた。

FIN .

番外編 2 (前書き)

Extra chapter

Top secret

番外編 2

誰にでも不得意なことはある。けれどそれが『弱点』と認識されるのは、平均的な能力よりも下に位置した時だけだ。下には下が、上には上がいるのがこの世界の摂理。でも不思議なことに、全てにおいて完璧な人間は一人も存在しないんだ。

……ってというのが、俺、アイルーク・ハルトの持論さ。

- T o p s e c r e t -

たとえば、俺なら美しい女性には花の名前をつける。ヴィオラ、マンジェリカ、ローズマリー……花というものは大抵美しい。美しくなければ生き残れなかったものが多いからさ。男という蝶を引き寄せる魅惑の花……。

「というわけで、プリムラというのはどうだろう？小さくて白い可憐な花を咲かせる……おチビちゃんにはぴったりじゃないかな？」
「駄目よ。この子はシルヴィって決めたの。そっちの方が可愛いじゃない」

見たことも触ったこともない『機械』とかいう道具が並ぶ工房で、俺とジュリア・カルセラはある案件を話し合っていた。

内容は、新型の殺人人形につける名前。ミス・ジュリア曰く、初めての成功例とも言えるこの緑髪のおチビちゃんに、ナンバーではなく名前を付けてやりたいらしい。

目を閉じたまま、眠っているかのような少女。一度起動させて俺とジェイロードの顔を覚えさせたことがある。成功例と言っても、他の殺人人形と同じように、事務的なことしか口にしない人形だった。まあ、多少の自立した思考能力はあるようだけれど。

一度『ご主人様』と呼ばせようとしたら、ミス・ジュリアにレンチで頭を殴られた。……ふふっ、あれは強烈な一撃だった……。

「なに一人でニヤニヤしてるのよ。もうっ。……ねえ、ジェイロード。貴方は良い案ないの？」

「……」

ソファに座って興味なさそうに俺たちの話を聞いていたジェイロードが、少しだけ顔をあげた。俺とミス・ジュリア、そして眠ったままの人形を目にして、そして首を横に振る。

俺は少し意地悪を思いついた。

「……なら、今までアンタが落とした女の名前を順々に挙げていくってのはどうだ？アンタぐらいの顔ならいっぱいいるんだろ？」

「……」

「な……っ！」

すかさず反応を見せたのはミス・ジュリアだった。言葉に詰まったような顔をして、そしてすぐ眼鏡を押し上げるフリをして横を向く。……あれ、少しやりすぎたか。

ジェイロードはテーブルの上に乗せられた珈琲を口にすると、静かに俺に視線を向ける。

「その人形の名前を考えると……少し待っている」

珍しく、ジェイロードがそう口にした。あれ……怒ってる？いや、この男と旅を始めてからけっこうな月日経ったが、この男が本気で怒ってるところを見たことは……あれ？

ジェイロードはしばらく何かを考えるように珈琲を嚙ると、目を閉じて思索し始めた。これは考えるときの癖だ。

「……いくつか案を出す」

ジェイロードはそう言って、口を動かした。

いや、実際にはいくつか名前らしきものが言葉として発せられたはずなんだけれど、俺とミス・ジュリアの耳にはなんだかとても衝撃的な言葉の羅列が続いただけで、どこをどう区切るのかとか、どこからどこまでが1つの案なのか分からないまま、ジェイロードは口を閉じていた。

「……」
「……」

とりあえず、顔を見合わせた俺たちの意見は一致した。

「そ、それじゃ……シルヴィで決定にしましょう」

「ん、あ、ああ……ミス・ジュリアに任せるよ。はは、はははははは」

……」

乾いた笑いを浮かべる俺たちの後ろで、シルヴィは何も知らないまま静かに眠っていた。

FIN .

Stage of extra

Stage of extra

「第4部予告」

「……ねえ、お兄様。とても楽しい情報が手に入ったわ」

女は薄暗い部屋の中で、男の座る椅子の手すりに腰掛ける。手にしているのは、何かが走り書きされた手紙だった。

男は反対側の手すりに肘をついたまま、何も言わない。眠っているように目を閉じているが、それが癖だということを女は知っていた。

女は漆黒の闇のような黒髪を耳にかけ、手紙を口に出して読み始めた。

「今から4、5年前……レヴィアス氏が母親らしき女性と、妹らしき少女と旅をしている姿を見た者がいるらしいの」
「……それで？」

ふと男が呟く。やはり目は開いていない。女はふふふ、と豊かな赤い唇を微笑んで、続きを読み始めた。

「面白いのはその後よ……母親らしきヒトの行方は分かっていないのだけれど……どうやら妹は、2人の連れと一緒に旅をしているみたいなの。その、名前がね……」

くすくす、と面白いことを見つけたように、女は笑う。その笑い声は品性な笑い方からやがて、見た目とは想像もつかない、狂った笑い声へと変わっていく。

「クスつ、ふふ……あはは……はははははっ!!……聞いてよ、兄さまっ!その妹、どうやら最近、預言書を探す冒険者の間で噂の、あの『サーシャ』とかいう少女らしいわ!」

「……サーシャ?」
「そう、サーシャ・レヴィアス!!嗚呼……運命ってどうしてこんなに素敵なのかしら……」

女はまるで愛おしいものを抱くように、手紙を胸に押しつけた。そして兄の背中に甘えるように腕を伸ばす。そしてその頬に軽くキスをすると、耳元で囁いた。ねっとりとした声で女は言う。

「ねえ、お兄様……可哀想な兄妹だと思わないかしら。互いに敵同士なのよ……? 私達のように愛を知らないなんて、悲し過ぎるわ。理も規制もない……それが本当の愛と思わなくて?」

男はまた興味なさそうに目を瞑る。そしてそのまま、静かに口を開いた。

「……我々の庭を壊しに来ると言うのなら、お前の好きなようにしていい。ライラ」

「ふふっ……ありがとう、ラフィタお兄様!」

きつと美しい実験人形になるわ、と呟いて女は去っていく。足取り軽く、扉を開けて去っていく女を見送って、男はゆっくりと椅子から立ち上がった。窓を覆う黒いカーテンを少しだけ開ける。

窓の向こうには、広大な麻薬畑と重労働に励む奴隷達の姿があっ

た。男はそれを見つめながら呟く。

「理なきこの庭に来るつもりか……。ふっ……。預言書は、誰にも奪い取らせはしない……」

N e x t S t o r y

「 T h e w o r l d w i t h o u t t a b o o [l o o

壊れているのは、誰。

第1章 1

星は際限なく輝く。その光が何故、輝き続けることが出来るのか、幼い頃の私には不思議で仕方なかった。何故、人の命は息絶えるのに星はその光を失わないのか。何故、私達は人とは違う体を持ち、戦うことを定められているのか。

幼い頃の……本当に幼い頃の、思い出だ。

- 理なき世界 -

風が吹き付ける。緑のない大地に砂が舞い上がり、薄っぺらな壁のような状態になって私を襲う。母に着せられた上着のフードを深くかぶり、私は砂の壁をやりすごした。それでも目に入ったのか、ゴロゴロと違和感を感じる。

空を見上げると、月がまるで自分が神だといわんばかりに光り輝いている。静かな砂漠の上の月。辺りに輝く星が、決まった形に並んでいることを知ったのはつい先日のことだ。

「……………」

短い足で私は砂漠を駆抜けた。軽い足音が砂を踏みつけ、向こうにいる人影へと走り寄る。影は振り向くことすらせず、ただじっと座っていた。

私は足を止めると、彼が見ている方向を見上げた。西に輝く大きな星……彼はスツと右手でそれを指差す。13歳の、少年の指先。

「あの星は……歯車を表す。歯車の中心にあつて、西の方角を確かめるのに役立つ」

「……はい」

私は目を擦りながら隣に座る。彼が指差した星を見上げて、彼が言った言葉を繰り返した。

「歯ぐるまの、中心……西の方」

言われたことを繰り返すのは、殆ど母からしつけられた癖だった。彼もまたそれが分かっているのか、何も言わずに私の言葉を聞いていた。

私は改めて辺りを見回す。不思議なことに、星はきっちりと同じ形に並んでいるのだという。季節によって違ふと私は思っていたが、どうやらそれは私の立っている場所や時間によって変わるらしい。

私は辺りを見回し、そして前々から疑問だったことを問いかけた。

「兄さま……星はどうして、光続けられるのですか？」

「……」

彼……否、『兄』は静かに空から視線を外した。吐いたため息が白く染まり、風に流されていく。

「……なぜ？」

どうしてそんなことを聞くのか。そんな意味だろうと私は理解した。長い時間を共に過ごしてきた人間というのは恐ろしい。全てを

説明することなく、言葉の裏にあるものを察知することができる。時として言葉ではなく、行動や顔ですら。母はその良い例だった。私はしばらく考え、そして口を開いた。考えてから喋るのは癖というよりも遺伝に近いのかもしれない。母も兄もそうだった。

「兄さまは……前に、星はずっと昔にできたといっていました。母さまが生きているよりずっと昔のことだと」

「ああ……」

兄もまた、私の言葉の意味を悟ったようにそう呟いた。どうして星は死なないのか、私が質問に込めた裏の意味はそれだ。

兄は静かに口を開く。まだ青年とは言いがたい容貌をした彼は、見た目とは正反対に知識に関しては博学だった。私よりも母と長く生活してきたのだから、仕方のないことだろう。母はまさに生き字引という言葉が似合う人間だった。

「……星は太陽の光に反射するものと、太陽と同じで自ら光るものがある」

「反射するものと、光るもの……」

繰り返す私に、兄は月を指差した。見事なまでに丸みを帯びた球体が、こちらをじっと見つめている。時折目のようなものが見えて、私には気味が悪かった。

兄は言う。

「星の寿命はそれぞれ違う。……今も終わりゆく星があるかもしれない」

「終わりゆく……星」

私は首を傾げた。兄はため息をついて足下の砂を手で払う。する

とそこから、小さな石が現れた。兄はその石を掘り出すと、私達の間置き、今度は砂の一粒を石の上に置く。

「この砂の粒が『人』、そしてこの石が『世界』……」

兄はそう言うと、石を半分まで砂の中に押し込めた。砂に覆われた場所に、拳に収まるくらいの石が一つ。まるで砂の海を彷徨う小舟のように。

子供の指先が周りの砂をつまみ上げる。サラサラと落ちる砂粒が指の間から崩れ落ちていった。

「そしてこの砂の一つ一つが、星……『惑星』」
「『惑星』……」

私は辺りを見回した。私が踏みつけている砂も、兄が腰を下ろしている所も、母が商隊を捕まえにいった地平線の彼方も、辺りを見回せば全てが……惑星だった。

ふと、私は理不尽な気持ちで呟く。

「兄さま……数えきれない」
「ああ……数えきれない」

無限の星が『人』を、『世界』を取り囲んでいた。兄曰く、この砂粒もまた、この小石に置き換えることが出来るらしい。

砂の一粒にも『世界』がある。『人』がいるとは限らず、命があるから定かではない。それでも『世界』は無数に存在し……その中には終わりゆくものも、必ず存在している。

生と死。それが世界の約束。それは平等に、時として不平等に与えられた命の権利。しかしそれをも超越しようとした、遙か昔の王族達がいる。

「兄さま。星もいつかは光を失うのに、……鳥も獣もいつかは命を失うのに、どうして人は抗おうとするのですか？」

兄はふと、こちらに視線を向けた。澄んだ色の碧眼に、金髪。私もまた、骨格は違えど似たような姿をしている。同じ色の碧眼が私を射抜く。何故か聞いてはいけないことを聞いてしまったような、そんな気持ちになった。

膝を抱えた状態で最初と同じように空を見上げる。彼は長い時間考え、そして口を開いた。

「……生きたい、から」

「生きたい……？」

生への執着。死への恐怖。それは強くなる上で何よりも必要なことだと、母はそう言っていた。しかし私は時折こう思うのだ。死への執着、生への恐怖もまた、同じ意味なのではないかと。

兄は首を傾げる私を振り返り、私の頭に手を置いた。私は驚いて顔を上げる。頭を撫でられるのは慣れていなかった。相手が母であれ、兄であれ、撫でられた覚えがなかったからだ。

「死にたくない、生きたい……それが、死を許容しない理由。トウアスが不死を作り出した理由……」

死に抗い不死をつくろうとした人がいた。終わりに抗い光り続けた星があった。そんな抵抗が、この世界には数えきれないほど存在している。

静かに辺りを見回す私に、兄は片手を差し出した。

「……サーシャ」

差し出された右手を、私はしっかりと掴む。立ち上がるとまたあの砂の風が私達を襲った。私はフードを目深に被り、兄は俯いて風が通り過ぎるのを待つ。

ふと、私は向こうで母の呼ぶ声を聞いた。

「ジエイ兄さま。……母さまが」

兄は頷き、そして歩き出す。私は兄の後ろを歩きながら、もう一度砂の宇宙を見回した。数多の『世界』、果てしない那由他の『惑星』。兄の言葉が私の脳裏を駆け巡った。

しかし、私は思うのだ。終わりに抗う星は美しい。もしその輝きを人の命に置き換えるのなら、最も光り輝くのは、生きながらにして死ぬことを否定し続ける姿だろうか。それとも死に直面した時なのだろうか。

幼い私の頭では、答えを出すことは出来ない。……否、答えを出す資格を持った命など、たとえ太陽と月であろうとも持ち合わせていないのかもしれない。

「……」

体を起こすと、カーテンが風に揺れた。差し込む光が真っすぐに

ベッドの上に線を作っている。私はベッドから降りるとカーテンの向こうに広がる風景に視線を向けた。

小さな窓枠の外に広がっているのは、真つ青な大海原。果てしなく続くこの海は大陸と大陸の間に横たわり、人の行き来を阻んでいる。連絡船は一日に一本、私達はその船に乗り、反対側の大陸を指していた。

潮風が頬を撫で、髪を弄ぶ。爽やかな風を感じながら私は数日前のやりとりを思い出していた。

『……微睡みの庭、ですか？』

地図を広げた私に、クリフさんが首を傾げる。私は頷き、テーブルの反対側に座っているフレイさんとクリフさんをしっかりと見つめた。

『ええ。メーリング家の所有する麻薬畑「微睡みの庭」を目指します』

『メーリング家……ネオ・オリとアクロスに茶々入れてきた、アレか？』

フレイさんの言葉に私は頷いた。そして地図に書かれた平野を指し示す。

アクロスの東南にあるメーリング家の所有する麻薬畑。これを人は『微睡みの庭』と呼ぶ。かつて帝国が栄えていた時代に貴族としてかなりの力を持っていたとされるメーリング家。彼らは奴隷を用いて『リル・イン』と呼ばれる麻薬を生産して富を得ていた。

ハマってしまったえば最後、薬を断つより方法のない『リル・イン』。だが薬を断つのは容易なことではなく、禁断症状が起りやすいことで知られている。

『メーリング家は過去の預言書を手に入れるために、かなりの数の冒険者を集めて手懐けていました。……場合によってはジェイロードよりも危険な相手かもしれないですね』

アクロス国によるネオ・オリの征服作戦時、メーリング家は一枚噛んだ形をとっていた。しかも戦いが激化する直前の、ライラ・メーリングの訪問。

『随分悠長なことだと思いませんか？』

アクロスに預言書があることは、ネオ・オリの三大剣士の反応で確信できた。もし私がメーリング家の立場ならば、アクロスから預言書を奪い取るか、もしくはそちらに従属するかのどちらかを選ぶ。フレイさんは地図上の麻薬畑を見つめながら呟く。

『たしかに……預言書争いの首魁つーほど偉い奴らなら、従属するのはないな。それに……』

『あ、奪い取るなら、もつと他の方法……ありますよね』

クリフさんの言葉に私は頷いた。テーブルの上に広がった地図を畳み、そして2人の目を見る。

『ここからは私の考えですが……あなたが間違っではないでしょう』

おそらく、メーリング家は既に預言書を所持している。冊数までは分からないが、持っていることは確かだろう。そうでなければアクロスをそそのかしてネオ・オリを潰すという悠長なことは出来ない。あわよくば互いに戦力を削ぎ落とした後にアクロスの預言書を手に入れるつもりなのかもしれないが。

『預言書は五冊……一冊は私達、一冊はジェイロード達、そしてもう一冊はメーリング卿が所持しています。そしておそらく、アクロスにあるという一冊は間もなくネオ・オリに渡るでしょう』

対アクロスの戦争はネオ・オリ優位に傾きつつある。おそらくアクロスは預言書を差し出すことで、恩赦を請うだろう。おそらくそれ以外にも必要とされるものはあるが……それほどに預言書は重みある書物だということだ。

私は顔を上げる。

『……メーリング卿を叩きます』

『……！』

おそらくメーリング卿にとって一番の脅威はジェイロード達。そしてそれはジェイロード達も同じはずだ。そう説明すると、クリフさんが慌てたように口を開く。

『え、でも……フリッツ先生達や僕らはどうなるんですか？』

『我々が預言書というカードを手に行っていることを知る人間はいませんから……殆ど除外されていると考えていいでしょう』

ファーレン様の屋敷で預言書を手に入れることが出来たのは幸運だった。相手に手の内を見られることなく、ワイルドカードを手に行うことが出来たのだから。私はチラ、とフレイさんに視線を向けた。預言書の扱い方や解読はすべてフレイさんに任せてある。

『……ネオ・オリは今警戒態勢が敷かれています。旅人すらも入ることの出来ない状態で、軍の士気も上がっていますからね……アクロスとの勝敗が決まるまでは手出しをしないほうが無難でしょう』

預言書を手に入れた後、あの少年王がネオ・オリの軍や民族を全て残りの預言書確保に向かわせるとは考えづらい。アクロスの攻撃によって疲弊した後、自由に動くことが出来るのはやはり三大戦士のみだろう。

『そしてもう一つ理由を述べるのならば……』

私はテーブルに肘をついてクリフさんを見る。

『ジェイロードはおそらく、バックに何処かの国……もしくは集団をつけている可能性があります』

『集団、ですか……？』

クリフさんの言葉に私は頷いた。私達を襲ってきた戦闘用機械人形、そしてジェイロードの連れている高性能の機械人形……おそらく、それを作ることの出来る技術を持った集団が何処かに隠れているということだ。

フレイさんは納得したように私を見る。

『たしかに、あれだけのモンをあの男とアイルークだけで造れるワケがねえな。……見当はついてんのか？』

『いえ……。ですが、帝国時代の技術をすぐに使いこなすことが出来るのならば、噂になるはずです。それがならないということは、国と呼べるほどのレベルではない……』

『それで「集団」か』

はい、と私は首を縦に振った。帝国の文明が廃れ、各地の状況が把握しづらくなってしまった今、何処にそんな技術を持った人間達が潜んでいるのか見極めることは難しい。

やはり実体も力量も理解しているメーリング家を叩くのが先決だ。
おそらくジェイロード達も同じことを考えていると思うが。

「……」

私はカーテンに伸ばした手を下ろし、ベッドから立ち上がった。
上着を脱ぐと爽やかな風が背中に当たる。船体が海面をかき分ける
音を聞きながら、私は着替えを手を取った。

第1章 2

例えば貴方が喋ってくれるのなら、聞きたいことは沢山ある。どうやってイルルクみたいな魔術師を従えさせたの？貴方を慕ってるシルヴィのことをどう思ってるの？どうしてそんなに預言書を欲しがるの？

そして私は今日も、何も言わずに貴方を見送るの。

- ある一途な思い -

あれは少し前の話。ネオ・オリで負傷したシルヴィの腕の損傷を直していたときのことだった。

私はいつものように数日間工房に詰めていて、時折邪魔しにくるイルルクをどうやって追い払うか悩んでいた。シルヴィの修復と同時にやらなければいけないことがあるのに、イルルクが工房に入ってくるといつも作業の邪魔をされる。今度来たらガツンとやってやらないと、と私はそんなことを考えながら作業をしていた。

傍らのシルヴィはエラー処理のために眠ったまま、昔話に聞くスパゲティ中毒者のように沢山のコードが彼女の体を囲んでいる。私はデスクから立ち上がると、夕日の差し込むカーテンに手を伸ばした。

もうすぐ夜になる。向こうの山の端から紺色の夜空が迫ってきていた。

「……ふう」

私はカーテンを締め、そして工房内を振り返る。工房……と呼ぶには小さな敷地。数年前まで時計職人として生計を立てていた祖父が遺した場所だ。父も若い頃は祖父と同じ時計師を目指したそうだが、やはり今では部品をつくる技術を持った人もいなくなってしまった。祖父の時代も、古い時計の修理が殆どで、時計を一から作り上げることなど皆無だったらしい。

それでも私は祖父と父を……時計師として尊敬してきた。

「……」

ふと、一階から足音が聞こえてきた。階段を上ってくる足音は、聞き慣れた父のものではない。数年前に怪我をした父は足を引きずるのが癖になってしまっていたから。

またアイルークか、と私はレンチを構える。以前から私のことを豊富な胸だの、美しい足だのと、顔を会わせる度に口にしてくる。下心みえみえの褒め言葉を言われても、こちらとしては気に障るだけ。以前はラチェットレンチで一発お見舞いしたが、今度は特大のモンキーレンチでもくらわせようか。

私はレンチを振りかぶった状態で扉の前に立つ。コンコン、と反対側からノック音が響いて、私はどうぞ、と声をかけた。扉が微かに開く。

振りかぶったレンチが弧を描いた。

「アイルーク！また私の研究を邪魔しに……っ！？」

多少手加減しつつ顔を狙ったレンチが簡単に受けとめられた。相手はレンチを片手で掴んだまま、顔を顰めて私を見下ろしている。

「……殴るなら相手を確認してからにしてほしい、ジュリア」
「ジェイロード！……」「ごめんなさい。まさか貴方だとは思わなくて……」

碧眼に見下ろされて、私は慌てて頭を下げた。けれどジェイロードは気分を害した様子もなく、部屋の隅にある椅子に腰を下ろす。……この人はいつもそう。あまり感情を表に出さないというか、表情を変えることが少ない。だから怒っているのか分からないし、笑っているのかもいまいち分かりにくい。

私はレンチをデスクに置いて、ジェイロードに問いかけた。

「……コーヒー、飲む？ちょっと待ってて、今お湯を沸かしてくるから……」

「……いや、いい」

ジェイロードはそう言うと、静かにシルヴィに視線を向けた。私はやる事がなくなってしまうって、デスクの椅子に腰掛ける。

「……」

こちらが無言になると、この人は気を利かせて話しかけてきたりはしない。だから沈黙がずっと続く。そうゆうところはアイルークの方が幾分マシなのかもしれない。

私はシルヴィを見つめながら言った。

「シルヴィの状態も戻ってきたから、もう少しで動けるようになるわ。……あと、貴方から頼まれたものも揃ってる」

「……ああ。数は？」

私は机の上に広がった資料の中から、一つの束を取り出した。設計図や報告書がまとめられた紙束にはシルヴィと同じ機械人形の研究内容が書かれている。私は何枚かを捲って、赤く印がついた紙を見つめた。

「WE18mY451型が12体、WE89D110型が20体、MP56fL353型が3体……」

ふとジェイロードの視線を受けて、私は慌てて口を押さえた。

「あ、ああ、ごめんなさい。ええと……銃器搭載の女性型モデルが21体、近距離戦型無形態モデルが20体。あとこの間新しく作った男性型にした人工知能入りプロトタイプが3体。あとはWP25mL661型……シルヴィを含めて36体」

彼は私の話を聞きながら、何かを考えるようにシルヴィに視線を向ける。私は紙をもう一枚捲って、工房を利用する仲間達の報告書に視線を向けた。エラー、予期せぬバグ……失敗の原因が書き連ねられた報告書を見ているとため息が出てくる。

「シルヴィと同じタイプも、何班かに分けて製作したんだけど……全部失敗に終わったわ。未だにどうしてシルヴィが出来たのか不思議よ。人工知能も、シルヴィ以上のものが作れない」

シルヴィはこの工房で生まれた。アイルークが預言書の中から導き出した過去の知識を利用して、この街の様々な職人達で額を集めて、作り上げたのがWP25mL661型。もちろんその前に幾つか試作品で銃器搭載型も作ったけれど、これは本当に防御か攻撃かしか出来ない極端なものだった。

「……シルヴィは『人形』だなんて思えないわ。旧式と違って、自分で学ぶし、自分で答えを出せる。まだ少し理解に乏しいところもあるけど、本当に『人間』みたいよ」
「……そうだろうな」

無表情にそう呟くジェイロード。私はその横顔を見ながら笑った。

「この間、ネオ・オリに向かわせたでしょう？帰ってきたとき大変だったのよ」

こうゆうとき彼は、何が、と問いかけることすらしない。気を使わなくて済む相手には特にそう。だから私は話し続ける。壁に向かって話している気分にならないか、なんて口の悪い仲間は言うけれど、私は平気よ。

だって、そこにいるって分かっているもの。

「何を言われたかは分からないけど、『ジェイの悪口、シルヴィ許さない』って、そればかり。あんまりプンス力怒るから、何処かショートしちゃわないか心配になったわ」
「……そうか」

ジェイロードはただそう言った。私はため息をついて、報告書の束をテーブルに置く。

まあ確かに、もう少し微笑んでくれれば話し甲斐があるとは思ってわ。綺麗な顔も台無し。……まあ、いまさらそんなこと言っただって仕方ないわね。もう1年の付き合いだもの。

私は自虐的な言葉を発しながら、ジェイロードを見る。

「……それで？貴方がここに来たのは、別に私に会いに来てくれたわけじゃないでしょう？」

「……………旧式を数体利用したい」
「旧式？」

私達はシルヴィを新式と呼んでいるから、自動的にそれ以前に製作した機械人形は旧式にあたる。銃器搭載の女性型モデル。あれがそうだ。

私はデスクの引き出しから、データを羅列した紙を引き出した。そこには数人の名前と顔が書かれたものが載せられている。それは過去の預言書を狙う冒険者達のリスト。一応、殺人人形達に覚えさせる為に、程度の低い人工知能を搭載したプロトタイプ達に冒険者達の顔のデータを集めさせた。

私は一枚一枚の冒険者達の名前を見ながら呟く。

「誰かのところに向かわせるの？」

「ああ。設定を頼みたい」

了解、と頷いて、私は転がったペンと適当な紙を手にとった。ジエイロードを振り返ると、彼は椅子に座ったまま何かを思索するように目を瞑っている。きつと彼の中で何かシミュレーションされているに違いない。でも……………。

(悔しくなるくらい綺麗な顔……………)

長い睫毛が伏せられたまま、しばらく動かない。整った輪郭も、細長の目も綺麗なのに、女が付かないのは性格のせいだと私は思う。寄ってきてもすぐ去ってしまうのは、その無表情のせい。

だって、貴方は見えないもの。貴方と同じ世界を見れる人なんていないもの。……………貴方は口にしてくれないから。

(……………本当に、綺麗な顔)

例えば貴方が喋ってくれるのなら、聞きたいことは沢山ある。どうやってアイルークみたいな魔術師を従えさせたの？貴方を慕ってるシルヴィのことをどう思ってるの？どうしてそんなに預言書を欲しがるの？

(……貴方が警戒してる『サーシャ・レヴィアス』ってどんな人？)

一度アイルークを問いつめてみたけど、ヘラヘラ笑って誤魔化された。気にしなくていい、なんて言われたけど、気になるじゃない。だってファミリーネームがあの人と同じなんだから。

じつとジェイロードの顔を見つめていると、ふと視線がこちらに向けられる。私は慌てて椅子を回して、背を向ける。

「……で、どうするのっ？」

机に向き直ったフリをして、私は問いかける。もちろんジェイロードが気付いたわけはないと思うけど。

「旧式を5体準備して欲しい。ターゲットはフレイ・リーシェン、クリフ・パレスン……サーシャ・レヴィアスの、3名だ」

冷静な声で彼はそう言う。私は走り書きしていたペンを止めると、見えないようにため息をついて頷いた。

「……了解」

甲板に出ると、爽やかな風が吹いていた。私は辺りを見回してふと、フレイさんとクリフさんの姿に気付く。あの2人が揃って一緒にいるのは珍しい。大抵フレイさんは船室にいて煙草を吸い、クリフさんは柄の悪い旅人に絡まれないような場所にいることが多い。私が近づいていくと、フレイさんがこちらに視線を向けた。

「……んだよ、サーシャ。今起きたのか？遅っせえな」

ふと空を見上げると、太陽が高い場所で輝いている。確かに少し寝過ぎてしまったようだ。クリフさんがレイテルパルッシュを抱いたまま笑う。

「あ、珍しいですね。サーシャさんて、結構早起きなのに……」
「そうですね。少し眠り過ぎてしまったようです」

お二人は何を、と問いかけると、クリフさんが頷いた。

「あ、フレイさんに会ったのはたまたまなんですけど……あっちの大陸の話になったら、フレイさんが、その……あんまり土地勘がないみたいなのであっちのことを教え」

フレイさんの鉄拳が飛んだ。どうやら土地勘がない、という言葉が癪に障ったらしい。ガツン、という良い音と共にクリフさんの潰れた悲鳴が響く。

「馬鹿言つな、行ったことねえんだから土地勘も何もあるかつ！」

半泣きのクリフさんにフレイさんが怒鳴りつける。私は呆れて溜め息をついた。

「……まあ、どちらにしてもあちらの地理を頭に入れておいた方が良いでしょう。『微睡みの庭』では何が起るか分かりませんから」

後で世界地図を貸しましょう、そう言おうとした瞬間。私達の足下に一本のナイフが向かってきた。私は咄嗟に後ろに飛び退る。クリフさんとフレイさんも何とかナイフを避けたようだった。鋭利な刃が床に突き刺さる。

甲板にいた船員達も、旅人達も、一様に何事かという表情を浮かべた。私は船室の地下に繋がる扉の前にいた一人の女性に目を留める。作られたような左右対称の顔。

「殺人人形……」

私が瞬時にそう判断したのは、その顔形がグロツクワースで襲撃してきた殺人人形と同じだったからだ。フレイさんもハツとした表情でそちらに視線を向ける。あの時パニックを起こして顔まで見る余裕のなかったクリフさんは、まだ状況が判断出来ていない様子でキョロキョロと辺りを見回している。

「ちっ……」

思わず舌打ちをしたのは私だっただろうか、それともフレイさんだったのだろうか。

殺人人形は黒い布を被り、静かにこちらを見つめていた。しかし、

よく辺りを見回すとそれは1体ではない。

(ドアの前に一体、甲板の奥に二体、二階に一体……4体か)

私は指先でクロノスを弾いた。クリフさんも顔を顰めている。

船の上という状況下では、容易にリボルバーや魔法を使うわけにはいかない。流れ弾で他の乗船客に被害が出れば面倒なことになりかねないからだ。誰かが死のうが私には関係ないが、船という閉鎖空間から逃げることはできない。

魔法も同じだ。下手に動いて船を壊すわけにもいかない。

(このタイミングで狙ってくるということは、やはり……)

私は静かに息を吐き出す。フレイさんがチラ、とこちらに視線を送ってきた。

「……オイ、どうすんだよ。俺もクリフも使えねえぞ」

横目でクリフさんを見ると、案の定足が震えはじめていた。レイテルパラッシュを抱きしめたまま、鞘から引き抜く様子すらない。私はため息を吐いた。相変わらず、肝心なところで使えない護衛だ。やはり近距離戦を戦える人間がこうではいざとなったとき苦勞する。私は口を開いた。

「私が行きましょう。フレイさん、援護をお願いします」

フレイさんは眉を顰めた。

「援護つて……本当に援護しか出来ないからな？」

「構いません。さほど期待してませんから」

私はそう言うと、向かってきたナイフを避けて扉の前にいた機械人形の前に転がり出た。甲板の奥にいた他の人形達が寄ってくる。フレイさんが後ろの方で文句を言いながら、魔法を発動させた。空中で小さな爆発音が二つ鳴り響く。

機械人形は爆風に体を揺らされたようだった。私は踏みとどまり、視界が悪くなる一瞬を狙ってその体に蹴りを入れる。人間の腹とは思えない硬質な感触が足に伝わった。

私は爆風に身を隠しながら再び距離をとる。久々の戦いに背中がゾクゾクとスリルを感じていた。

第1章 3

腰に隠し持った短刀を逆手に構える。後ろで纏めた茶色の髪が揺れる。頬の辺りで揃えられた鬢髪が微かな潮風を受けた。右目には女の顔に似合わない眼帯。

彼女は手慣れた動作で足を踏み込む。太陽に反射した刃が弧を描いて相手の額に突き刺さる。その流れるような動作、まさにグロックワースの戦鬼。その名は、セルマ。セルマ・レディンス。

- 隠密部隊の女 -

「構いません。さほど期待してませんから」

「おまつ……援護するの止めるぞ!?!」

サーシャの言葉に俺はそう叫ぶ。だからといって本気でそんなことをするつもりはなかった。万が一にサーシャがやられれば、俺にとっても不利になる。人間との拳の喧嘩ならまだしも、機械人形と接近戦なんて魔術師の俺に出来るわけがない。

サーシャは素早く扉の前の敵に接近した。それを待っていたかのように、甲板の奥にいた2体が動き出す。おそらく挟撃するつもりなんだろう、俺は両手をヤツらに向けて力を込めた。このスピードじゃ小細工なんて出来やしねえ。爆発させるしかない。

「！」

突然発生した爆発に、2体の人形がバランスを崩した。爆風に身を隠し、サーシャは扉の前の敵の背後に回り込む。ほんの数秒間のスキを利用し、腰のリボルバーを手に取った。

人形の頭に銃口を押しつけ、斜め上に向けて引き金に指をかける。しかし次の瞬間。

「サーシャさんっ！！」

叫んだのは俺の後ろで震えていたクリフだった。ハツとしてサーシャは銃口を押しつけていた人形を蹴り飛ばした。刹那、サーシャがいたところに別な人形が飛び降りてくる。手にしているのは長剣だ。バランスを立て直すことが出来ないまま、紙一重で刃を避ける。

「ちっ……」

俺は舌打ちした。さっき時間稼ぎをしておいた2体もサーシャに接近している。爆発を起こせば、おそらくサーシャも巻き込むことになる。

どうする、と自分に問いかける。ヴァルナを喚び出すか……ヴァルナを使えば、サーシャの身を守ることには出来るだろう。ただし、船の状態にまで気を回すことは俺には無理だ。

サーシャを取り囲みつつある殺人人形。ジリ、とサーシャは周りの様子に警戒しながら、左手を上着の中に潜ませた。

しかし。

「！」

丁度扉の前に陣取っていた人形の体が傾いた。まるで突然力が抜けたかのように、直立不動のまま倒れ込む。サーシャは顔を顰め、そして倒れた人形の向こうに女の姿を見た。

真つ黒な服に身を包み、右手には逆手に持った短刀。30後半にも関わらず、老いた様子のないしなやかな体つき。

「ほう……話には聞いていたが、これが噂に聞く『殺人人形』か」

俺のローブを掴んでいたクリフが驚いた声をあげる。

「せ、セルマさんっ!？」

サーシャと殺人人形との戦いに割って入ったのは、武器商人で情報屋でもあるセルマだった。よくよく見ると、あの憎らしいガキ……メイがドアから顔を出してこちらを伺っている。メイは俺と目が合うと、まるで疫病神でも見るような目で舌を出した。

あのガキ……あとでシメてやる。

「セルマ」

警戒の姿勢でセルマを見つめる人形達。セルマはサーシャを見ると、羽織った丈の長いコートの中からもう一本、左手に短刀を取り出した。2人は互いに背を預け合うと、周りを取り囲む3体に向き直った。互いの行動まで理解しているかのようなその動き。

セルマは口端を上げて背後のサーシャに囁く。

「……特別料金だ。良いな？」

「仕方ありませんね……。早く終わらせましょう、騒がしくなる前に」

セルマが頷くとサーシャは右足で強く踏み込んだ。2体の人形に接近し、振り下ろされた剣をリボルバーで弾き返す。普通の人間なら出来るはずもない技だ。

サーシャはそのまま人形の腕を蹴り飛ばす。人形の手から滑り落ちた剣が床に落ちて音を立てる。

「メイ」

サーシャはドアから顔を出しているメイの名を呼ぶと、両手に持っていたクロノスとヒュペリオンを放り投げた。

「えっ、ちよっ、わ、わわっ！」

突然投げられた二丁のリボルバーに、メイは慌ててそれを受けとめた。間違つて地面に落とせば暴発の危険がある。なんとか二丁ともキヤッチしたメイは、ほっとした表情を見せた後に、危ないから投げないでよ、と口を尖らせた。

メイの文句が聞こえているのかいないのか、サーシャは身を低くして人形の攻撃をかわした。そして転がった剣を手にする。そしてそのまま、武器を失った人形の額のだ真ん中に刃を突き刺した。

サーシャは剣を引き抜き、剣を8の字を描くように回した。慣れた様子はまさかガンズリンガーとは思えない。体術、剣術、そしてリボルバーの扱いまで……コイツはどれをとっても化け物並の実力だ。

「す、すっい……」

後ろにいたクリフが掠れた声でそう呟いた。援護の必要がなくなった俺は、呆れた声でつつこむ。

「んなの前からだろ」

「そ、そうじゃなくて……せ、セルマさんが……」

クリフは俺のローブを引っ張り、空いた手でセルマを指差した。俺は首を傾げてそつちを見る。

セルマは2体の殺人人形と向き合っていた。相手は剣を手にしている。リーチで言えば完全に不利だ。

片方はどうやら俺の起こした爆発で配線か何かが狂ったようだった。カタカタと口を開いたり閉じたりを繰り返し、フラフラと刃が揺れている。人形はしばらく狂ったように頭を揺らした後、突然はつきりとした攻撃を繰出して来た。

「!!」

突きを繰り返すように、剣がセルマの体のすぐ脇をすり抜ける。最初は狙いが定まらないのかと思ったが……違う。セルマがギリギリのところまで避けているのか。

目の前から突き出される刃。セルマは短刀を握りしめた両手を突き出し、右脇腹に逸れた攻撃を弾き飛ばした。次の瞬間、攻撃を弾いた方向からもう一体の機械人形が飛び込んでくる。セルマは左手の短剣をその額に投げつけた。

「……っ!」

上着が風に揺れた。セルマは右足を軸にすると、壊れた人形の後頭部に後ろ蹴りを食らわせる。強い力で蹴りを入れられた機械の体は弾け飛び、そして甲板に衝突して海に落ちた。

静かに凧いでいた海に波紋が起きる。泡が湧き上がり、やがて人形の体が見えなくなると、まるで何もなかったかのように海は平穏を取り戻していた。

「サーシャお姉ちゃん」

甲板は静まり返っていた。船員達は目の前に転がる、人の形をした精巧な人形に釘付けになっている。私に任せてくれ、とセルマは呟いてサーシャから離れた。

扉から出てきたメイは、サーシャにクロノスとヒュペリオンを差し出した。サーシャはそれを受け取って腰に収める。そしてもう一度、人形が装備していた剣を手にした。

「……何してんだ？」

俺は後ろに引っ付くクリフを引きずってサーシャに声をかけた。サーシャは俺の方に目を向けると、溜め息をついて口を開く。

「この剣に、あの人形達の装備……これで殺人人形を作った人間が特定出来るのではないかと思っていたところです。……メイ」

サーシャは転がった人形から鞘を取ると、剣をメイに手渡した。メイは納得した様子でそれを受け取る。

「少し時間かかるかもだけど、いい？」

「構いません。船があちらの大陸に着くまで待ちましょう」

サーシャは頷いてそう答えた。俺はふとセルマが歩いていった方向に視線を向ける。セルマはどうやら船員と話をしているようだった。それも下っ端じゃなく、結構地位のある奴だろう。

クリフが俺の代わりに疑問を口にする。

「ね、ねえ、メイ。セルマさんは何をしてるの……？」

「ん？ああ……お母さん、この船の人と知り合いだから。多分騒ぎが大きくならないようお願いしてるんだと思うよ」

クリフと俺は甲板に転がった人形とその部品を見回す。これだけのモンを見せられて騒ぎが大きくなるはずがない。俺たちは慣れているが、普通の人間は見たこともない精巧な技術。何処かの国がこんな技術と知識を持っている、などと噂になれば、おそらく混乱が起きるはずだ。

サーシャはため息を吐いて言う。

「騒ぎが大きくなるのは止められないでしょう。ただ、これが何処から来たもので、どうして私達が狙われたのか……その辺りを追及されないための口止めです」

セルマは何かを告げると、懐から何かを取り出して相手に握らせる。やっぱあの女、裏の人間だな。

「……」

ふと横を見ると、クリフが何かを考えるようにセルマを見つめていた。

サーシャはセルマの交渉状況を見て、早々に船室へと戻っていく。

騒ぎが大きくなる前に部屋に帰るんだろう。メイはその後を追って歩き出す。俺は溜め息をついて役立たずの襟を引いた。

「人が集まってくる。……戻るぞ」

夜の海は静かで、船が海面を滑る水音だけが木霊する。時折響いてくるのは、風を受けた帆がはためく音。山育ちのメイだけど、海は静かで大好き。安らげる、なんていったら子供らしくないってお母さんに言われちゃうかな。

「んー……」

船室の廊下を歩きながら、私は大きく伸びをする。昼間の事件はすぐに乗客に広まって、食事のとき以外、外に出る人は少なくなっちゃった。サーシャお姉ちゃん達が関わっていることは漏れずに済んだようだけど、やっぱりずっと隠しておくのは難しいかも。

私は廊下の真ん中にある部屋の前で足を止めた。ノックして扉を開けて、中を覗き込む。

「おかーさ………あれ？」

部屋の中は真っ暗だった。さっき夕食前に部屋を出た時のまま。

食事の後に情報収集ってことでお母さんと別れたけど、まだ帰ってないのかな。

「うーん……どこ行っただら」

探しに行こうかな、とそう呟いたとき、丁度廊下の向こうの方から誰かが出てきた。見覚えのある顔と魔術師のローブ。私は顔を顰めてわざと嫌そうに呟いた。

「げっ、『魔術師サマ』……」

「てめえ……聞こえてるぞ」

茶髪を一つに纏めながら、魔術師サマはこっちに歩いてきた。私が出発の扉を開けた扉から中を覗き込もうとするから、私は慌てて扉を閉める。

「あつ、見ないでよエッチ！」

「誰がガキの部屋なんか見るか。……セルマはいねえのかよ？」

魔術師サマに関係ないでしょ、と反射的に顔を逸らす。すると魔術師サマはイラッとした表情をした。でもすぐに溜め息をついてことうとう言う。

「はあ……まあ、いい。それよりアレだ、この間頼んだやつは何か分かったか？」

ん？なんだ、お仕事の話か。それならこの意地悪で口悪くてレベルな魔術師サマであろうと相手にしないわけにはいかないよね。うん。メイってお仕事のできる女の子だから。

そうゆうことなら、とメイはもう一度扉を開けた。はっきり言っ

て部屋の中に見られて困るものなんてないんだけどね。船とか宿では荷物を広げないようについてお母さんの口癖。だって緊急の時に大変になるから。

「それじゃあ中で話そうよ。……ちょっと長くなりそうなのがするから」

私がそう言うと、魔術師サマも頷いた。やっぱりなんとなく分かるのかな。だって、自分の従兄弟のことだもん。メイは従兄弟とか親類とかいないけど、小さい頃から一緒に育ってきた血の繋がらない兄弟のことなら、離れてたってなんとなく分かる気がするから。

第1章 4

何処かで大きな出来事がある。沢山の人が死んで、沢山の人が悲しむ。言葉にってしまうと、どうしてこんなに軽いんだろう。きつと耐えきれないくらいの苦痛なのに、言葉はどうして上っ面しか表現してくれないんだろう。

なんだが、悲しくて寂しい。大人になったら、こんな気持ち忘れてしまうのかな？

- Like the child -

魔術師サマは部屋の中の椅子に腰を下ろした。私は荷物の中から一枚の紙を取り出して、自分のベッドに腰掛ける。この紙は魔術師サマから頼まれた『アイルーク・ハルト』って人に関する情報を書いたメモ。

「とりあえずアンブロシアを出た後から調べていったんだけどね、やっぱりジェイロードさんと会った後の消息ははっきりしてないんだ。それだけ、覚えておいてね」

私はちゃんと前置きしてから、メモに目を通した。しっかり言うておかないと、魔術師サマのことだから文句を言うと思うし。

コホンと咳払いをして私は続ける。

「ええと……アイルークって人が村を出て、貴族仕えになったのが3年前。15歳かな。魔術師でもこの年齢で貴族に仕えるようになったのは異例だったみたいだね。どうやらこの人のお母さんがお爺さんの名前を使って裏で手回しをしてたようだけど」

しつかり者の私はちゃんとこの貴族の家の下働きさんを捕まえて確認を取ってきました。だって、酒場の噂はデマや誇張が多いからね。確認しないと。

でもやっぱり、この人のことはあんまり語ってくれなかった。当時の使用人も皆死んじゃったっていうし。

「……」

魔術師サマは珍しく真剣に話を聞いている。無駄口挟まないなんて、なんか魔術師サマっぽくないや。

私はメモに書かれた事実を一つ一つ読み上げていく。アイルークって人がお金の徴収や、時には……人殺しの仕事をさせられていたこと。本人は喜んでやってみたいけど、本心がどうなのかはメイにも分からない。もしかしたら嫌々やってたのかもしれないけど……そう考えるのは、私の勝手な想像。

情報屋は常に中立でなきゃいけない。偏った情報は噂話であって、正確なものとはいえないから。

「……それで街の人が言うには、アイルークって人が主人を殺したのが二年前。丁度同じ頃にジェイロードさんが街で目撃されてる」「……つまりは、それがあの男とのファーストコンタクトだったところか？」

私は頷いた。

「うん。……でも、色々話を聞いてて思ったんだけど、そのアイルークって人がジェイロードさんに従う理由が分からないんだよね。だってその人は魔術師サマと同じフアーレン様の孫だけど、預言書に執着があるわけじゃなかったんでしょ？」

メモから顔を上げてそう問いかけたら、魔術師サマは黙っちゃった。もしかしたら同じ疑問を魔術師サマも持ってたのかも。

一応私も気になって調べてみたんだけど、アイルークって人が預言書に興味を持って情報を集めてたわけじゃないみたい。預言書に関わる冒険者が接触してきても『知らない』の一点張りだったらしいし……。

しばらく言葉を探すように窓の外を向いて、魔術師サマは言う。

「……まあ、理由なんつーもんは、後から幾らでも付け加えられんだろ。ただ……」

「ただ？」

首を傾げると、魔術師サマは座ったまま足を組んで溜め息をついた。

「あいつが納得出来る……いや、面白がるだけの目的がそこにあっただんだ。じゃねえと魔術師は普通動かねえ」

「面白がる……？」

魔術師サマは私の呟きには答えてくれなかった。ただジツと何かを考えるように視線を落としてる。

私はその人じゃないからそれがどんな答えか分からない。それに答えをポンと目の前に出されても納得出来ないと思う。同じ考えを

持つ人間なんていないし、同じ考えになんてなれないから。でも『何か』があったことは確かだと思う。

私はメモを畳みながら言う。

「どうする？もう少し調べてみていいけど……」

「いや、いい。調べてみたところで、同じ理由に俺が納得出来るとは思えないしな。……ようは人殺しを繰り返して、頭ん中逝っちゃまったんだよ。アイツは」

「……うん」

残酷な言い方だけど、魔術師サマの言う通りだ。その場にいなかった私達からすれば、それはたった一言の出来事ではない。

人殺し。

とても重いことだと思うけど、それはもう戻らない過去。同じ痛みを感じることもなんか出来ないんだ。

(……)

なんだか寂しくなって、涙が出そうになって、慌ててメモに顔を押しつけた。なんだろう。なんか……悲しいや。変なの。

「……んだよ、泣いてんのか？ガキは面倒くせえな」

憎たらしい声で魔術師サマがいう。ホント、デリカシーないよねこの人。気付かないフリするとかさ、話題変えるとかないのかな。そんなんだからいつまで経ってもサーシャお姉ちゃんに馬鹿にされるんだ。

本当に憎たらしいけど、魔術師サマの目は笑ってなかった。

「まあ、泣き止んだら昼間のやつの鑑定に戻れよ。船が着くまでに

調べ終えないと後が怖いぞ」

「……………なんか魔術師サマが言つと実感が湧いてくるね」

いつも怖い目にあつてるからかな、つて言つたら睨まれた。なんだよう、サーシャお姉ちゃんか、なんて一言も言つてないじゃん。

それじゃあな、と言い残して魔術師サマは部屋を出ていった。静かになった部屋の中に波の音が聞こえてくる。

寂しいと思うのは……………涙が出ちゃうのは子供だからなのかな。早くお母さんみたいな立派な情報屋兼武器商人になりたいと思うけど……………。

メイ、やっぱりもう少し子供でいたいや。

雲間から時折顔を出す月が、船の行く先を示している。僕は甲板の端でぼうつと真つ暗な海を見ていた。視線を落とすと、海に落ちた月の片割れが水面で歪んでいる。風の音が波音にさらわれて、僕は少し目を細めた。

暗い海はちよつと怖い。でも船員さん達が近くを通つていくし、機械人形も多分もう出てこないと思う。

「はあ……………」

溜め息は静かに夜の海へと消えていく。甲板に立てかけたレイテ

ルパラッシユが鞘とぶつかってカタカタと音をたてた。

「こつやって溜め息をつくのはいつものことだ。でもちよつと違うのは、僕の心の問題。」

「……………やっぱり、ちゃんとしなきゃ……………」

昼間の騒動でも、結局僕は剣を振るうことが出来なかった。鞘から引き抜くことも出来ず、ただ震えるしかなかった。フレイさんやサーシャさんは呆れを通り越して諦めてるみたいだけど……………セルマさんの姿を見ていたら、なんだか虚しくなってきた。

『ターゲットの排除優先順位は、戦闘能力順にサーシャ・レヴィアス、フレイ・リーシェン……………2つ飛んでクリフ。一番最後』

ふと、ネオ・オリで聞いたシルヴィの言葉が蘇る。たしかに特殊な体を持つサーシャさんや、一族の中では優秀ではなかったとはいえ、あのフアーレン様の孫のフレイさんに敵うはずがない。でも、一番最後って言われると、やっぱり……………。

「……………」

じつと水面を見つめていると何処からか足音が響いてきて、僕はハッと顔をあげた。慌てて振り返ると、セルマさんが立っている。

僕は慌てて言葉を探した。

「あつ……………あつ、あの……………せ、船室に戻ったと思ったんじゃない、なかっただけですわね」

「……………ああ」

セルマさんは両手にホットミルクの入ったティーカップを持って

いた。飲むか、と問いかけながら片方を差し出してくれる。僕はブンブン頷いてそれを受け取った。熱の籠ったカップがあつたかい。あれ……もしかしてセルマさんは僕がずっと甲板にいたこと、知ってたのかな。

「……………随分意外だな」

セルマさんは甲板から海を見ながら静かにそう言った。茶色の長い髪が風に揺れている。いつも一つに纏めている髪は、今はそのままになっていた。

僕が首を傾げると、眼帯をしていない左目がこちらを見る。

「お前やあの魔術師が、サーシャと共にいることだ」

「え、あ……それは、その……………へん、ですか？やっぱり」

僕はおずおずとセルマさんを見上げる。セルマさんは僕より身長が高い。よく考えてみるとメイもあの歳にしては高い方だと思う。生まれつき身長の高い僕には本当に羨ましい。

セルマさんはテークアップに口をつけると、肘をつきながらフツと笑った。

「……………ああ。サーシャが人を連れてくるだけで妙だ。初めて会った時も、すぐ契約破棄になるだろうと思っていた」

「あ、あははは……………」

そういえば少し前にメイにも同じことを言われた気がする。『魔術師サマは我が強いし、クリフお兄ちゃんは臆病だし、絶対サーシヤさんにはついてけないと思っただけだね』、なんてズバツと言われたからちよつと落ち込んだ。

でも、僕等がここに居るのは、僕等自身の意思なんだ。

「……あ、あの。……セルマさんは、カタリナさんと知り合いだったって聞きました……」

カタリナ・リドル・トゥアス・ブレイス。トゥアス帝国の第18王女。美貌と呼び声高いその人はサーシャさんの母親だ。……そしてジェイロードさんもまた、カタリナさんの子供。

淵霊嶺を出た時以来、サーシャさんはあまりカタリナさんの話をしない。でも、すごくすごく強い人だったらしい。身体的にも精神的にも。

「カタリナさんって……どんな人だったんですか？」

カタリナさんの名前を出すと、ふとセルマさんは肩を竦めて息を吐いた。そして遠くを見つめるように、真つ暗な海に視線を向ける。何処までも続く闇の世界。波の音だけが船を囲んでいるように思える。

白い息を吐きながら、カタリナさんは懐かしむように呟いた。

「あいつは……そうだな、サーシャの頭をもう少し固くしたような人間だった」

「え、ええと……サーシャさん以上に、ですか……？」

僕が困ったような顔をしていると、セルマさんは続けてこう言う。

「ああ。カタリナ、ジェイロード、サーシャ……あの中で柔軟性があるのはサーシャだろう。カタリナもジェイロードも、サーシャ以上に頭が固い。融通が利かない性格だな」

「えっと、その……や、やっぱりいいです」

サーシャさん以上の頭の固さを想像出来ません、と言おうとして、僕は口をつぐんだ。多分この話は僕の考える次元とは違うんだと思う。ジェイロードさんが頭が固いつていうのは少し意外だけど。

セルマさんはカップを置くと、静かに呟いた。

「……カタリナは仕事を任せれば、非の打ち所もないほど完璧になす人間だった。ただ、サーシャを見れば分かるように妥協が出来ない性格だったからな」

強い風が吹き抜けていく。湿った感触に、微かに雨の匂いが混じっていた。もしかしたら、少し雨が降るのかもしれない。

「こうと決めれば変更は一切認めない。相手にも、自分に対しても

……だからこそ、苦しみながら逝ったのかもしれないがな」

「……強い人だったんですね……」

僕はぼつりとそう呟いた。サーシャさんをあそこまで強く育てた母親。射撃も体術も剣術も、全てを教えてくれた強い人。僕ならきつとすぐに根を上げてしまはずだ。

ふと、セルマさんの瞳がこちらを見ていることに気付いて、僕は慌てた。セルマさんは訝しむような目でこっちを見る。

「……強かったと思うか？」

「えっ……？」

僕は驚いて首を傾げた。

「……それが、本当の強さだと思つのか？」

「え、でも……」

セルマさんは僕の言葉を遮って、海の方こうへ視線を向ける。ふとカップの中に波紋が広がって、僕は空を見上げた。寒いなと思っ
ていたら、小雨が降ってきてる。

セルマさんは構わずに続ける。

「カタリナはな……弱くて、残酷な人間だった」

パラパラと降り始めた雨が音をたてて激しくなった。

第2章 1

この世界に、正しいことは一つも存在しない。個が集まり複数を形成するという概念すら、人が決めた規則に過ぎないからだ。時として人を殺める行為ですら、正当な意味を有することもある。

この世界に成否など存在しない。正しい答えなど存在していない。成否なきこの世界をどう生きるのか、その答えは己の中にしか存在しない。

- 正否なき世界 -

死というものを強く意識したのは、初めてのことではなかった。ただ、あの時、あの瞬間、私の中に溜まったすべての感情が流れ出し、体は強く死を求めたのだ。まるで乾いた喉が水を欲するように、それはごく自然の成り行きのようなようだった。

「……………」

私は地下室にいた。正確に言うのなら、地下の武器倉庫の中で、私は確実に自分を殺すことのできる武器を選んでいった。まるで他人事のように、ナイフと剣を選別する私の腕。銃器にも一度手を伸ばしてみたが、それを使うにはまだ私の心が静まっていなかった。

「……」

静かに指先がナイフの刃をなぞり、その切れ味を確かめる。赤く染まった一筋の傷跡が、赤く冷たい液体を垂れ流していた。慣れた手つきで逆手に持ち直し、刃の先を自分に向ける。

確実に死ぬ方法は分かっている。数年前まではグロックワースの暗躍部隊として幾人も人間を手にかけてきたのだから。まさか自分がこんな静かな死に方をするなど当時は微塵も思っていなかったが。

「……」

深く息を吐き、ナイフの柄を握る手に力を込めた。その瞬間はまるで永遠のように長く感じられた。刹那に通り過ぎるいくつもの記憶。それはどれもが、あの人を思い出させるものばかりだった。

この刃が皮膚を貫き、赤い血が流れ出す頃には死神の顔を拝むことが出来る。深い深い溜め息が、まるで耳元に響いてくるようだった。

刃が皮膚の上を滑る直前、私の手はまるで錆び付いたように動きを止めた。

「っ!？」

微かな人の気配を、私は感じ取った。それは上手く気配を隠すようにして近づいてくる。まさか軍部の人間が異常事態に気付いたのか。私はナイフを首筋から放した。

こちらの様子に気付いたのか、相手は気配を消すことを止めて、地下室の扉を開いた。

「……誰だ」

「ただの通りすがり……と言っわけにもいきませんね」

扉を開けたのは女だった。歳は40過ぎといったところだろうか。乾燥し日焼けした肌、潤いのない三つ編みの髪、歳の割に締まった体……一目で旅人だと分かった。整った顔立ちと切れ長の目が印象的な女。それがカタリナだった。

「少々水を分けていただければと思って立ち寄ったのですが……上の階に子供が一人いるだけで、親の姿がないようなので家の中にあがらせていただきました」

カタリナは見なかったようにそう言った。私は顔を顰めて立ち上がる。苛立ちの籠った声が、彼女の言葉に応えた。

「……水なら今はない。少し下った所に川があるはずだ」

私は服の埃を払い落とし、ナイフを鞘に納めた。すると、カタリナの後ろから小さな影が二つ、顔を出す。

「！」

まるで私が武器を仕舞うのを待っていたようだった。それまでカタリナの気配しか感じていなかった私は、現れた2人の子供に目を奪われる。子供はどうやら兄妹のようだった。

カタリナは振り返ると、子供達に視線を向けた。

「ジェイロード、サーシャ。……水を汲みに行ってもらえますか？」

カタリナの言葉にサーシャは素直に頷き、ジェイロードは少し考

えたうえで、こちらに背中を向けて歩き出した。サーシャがその後を追って歩き出す。

気味の悪い子供だ。私ははっきりとそう思った。2人とも、完璧に気配を消していた。子供達の背中を見つめる私に、カタリナは口角を上げる。

「……………気になりますか？」

「別に。……………それより、お前も子供達についていったらどうだ？川辺はまだ賊が多いぞ」

早く出ていけ、という念を込めて私はそう言った。賊が多いのは本当のことだ。子供が2人で川辺に現れれば、すぐに目につくだろう。たとえ自在に気配が消せるのだとしても、あの兄らしき子供でもまだ13にも満たない。

しかしカタリナは後を追うことはしなかった。

「構いません。それより……………ここは随分と寂れた場所ですね」

「！」

カタリナは扉の横の壁に背中を預ける。私は奥歯に力を込めた。

ここは中立国グロツクワースが隠し持つ唯一の剣、国王直属の暗躍部隊が暮らす小さな村だった。帝国時代に武器保管庫として利用されていた施設を改良したもので、帝国終焉の混乱に乗じてグロツクワースが大量に手に入れた兵器が納められている。

しかしそれは、つい先日までの話。今ではここはただの武器の墓場でしかない。

「外の風化具合は実に奇妙……………最近作られた建物が風化しているように見えますが」

「……………」

「人の気配があるようでない。貴女と、上の階の子供以外には」

まるで全てを見透かすような透き通った青い瞳。乾いた肌や髪に不釣り合いなほど、強く美しい瞳だった。もしかしたら彼女が死神かと思うほど……人間に必ずあるはずの未熟さが、彼女には見当たらなかった。

私は彼女との間合いを計算しながら口を開く。

「……数日前に、全てが風化した。信じないとは思うがな」

「……」

「私と娘は都に出ていた。……帰ってきたらこの有様だ」

たった一夜だった。全てが消えてしまったのは。其処にあったはずの仲間、生活……たった1人の、娘の父親も。全てが灰になってしまったかのようにだった。

暗躍部隊の私達はその存在さえ国家機密。此処には花を供える者すらない。……誰一人として。

「ここもですか……」

カタリナは足下を見つめながら静かに呟いた。

これに似た現象は、私も幾つか伝え聞いたことがあった。もちろん、当時は国家同士の緊張状態が高まっていた時代。国家に揉み消され、その情報は一般の人々には届かなかったのだが。

「……お前にとっては他人事だろうな」

私は苛立ち紛れにそう言い放つ。仲間と大切な人を失い、死を望んだ私にも怒りという感情はあった。何も言わないカタリナに、この無念を、この絶望を、叫び散らしてやろうかとも思った。しかし

生来の性格か、それとも私の何処か……普通の人間が持つはずの感情が死んでしまっているのか、唇はそれ以上を吐き出すことなく閉じられた。

そう、どれだけこの苦しみと悲しみを語ろうと、この女は他人。口にするのが言葉ならば、その時点でもう、痛みは客観へと変化する。命の重みと、命という言葉の重みは絶望的な差があるのだから。カタリナは息を吐くと、壁から背中を放した。そして静かに私を見下ろす。

「ええ。他人事です。……私達はただ水を貰う為に立ち寄っただけですから。貴女が死を選ぼうが、私には関係のないこと」

カタリナの青い瞳はまるで鋭利な刃のようだった。嘘のない瞳と彼女のことを言うのではないかと思うほどに。

「ですが、もし気が削がれたというのなら……」

こちらに背を向けると、カタリナは静かに呟く。

「子供達の食事をお願い出来ますか。ここ数日、まともに食べさせていないので」

静かな雨音が船を包み込んでいる。私は船内から甲板を見つめながら、溜め息をついた。この状態では航海も少し遅れが出るだろう。微睡みの庭に着くのも遅くなるかもしれない。そうになると、預言書を手にするのはジェイロード達か、メーリング卿か……。

船の中は酷く静かだった。おそらくもう真夜中を過ぎたのだろう。船員の姿もほとんどなく、窓硝子には冷たい空気が漂っている。私は船室の扉が立ち並んだ廊下を見つめ、静かに壁に背もたれた。

「サーシャお姉ちゃん」

ふと聞き覚えのある声に視線を向ける。見ると、少し離れた船室からメイが顔を出していた。私は窓硝子から外を確認してメイに近づく。

「メイ。……もう子供の寝る時間では？」

月並みな言葉に、苦笑が込み上げてきた。メイは頬を膨らませると、キョロキョロと辺りを見回す。

「だって……お母さんまだ帰ってこないんだもん」

「セルマが？」

私はもう一度廊下を見渡した。しかし人の気配はない。セルマに心配は無用と思うが、やはりメイは不安なのだろう。しきりに母の姿を探しては、寂しそうな顔をしていた。

『……貴女とメイは母娘という感じがしませんね』

ふと、私の脳裏に母の……カタリナの言葉が過る。それは随分前の記憶だ。まだ私がセルマ達と出会って間もない頃。暗躍部隊とし

て生きてきたセルマの情報収集能力を買い、カタリナがよく彼女の元を訪れるようになった時のことだ。

『そうか。……そうだろうな』

その日、あの家の居間には私とカタリナ、セルマしかいなかった。ジェイロードは地下から取引の商品を持ってくるように言われて席を外し、まだ4歳ほどだったメイはジェイロードの後を追って地下の階段へと消えていった。

母はソファに腰を下ろしたままのセルマを見下ろして、静かに呟いた。

『地下室で出会った時……貴女はメイを置いて死のうとしてしましたね』

『……』

私は客用のソファに座ったまま、母とセルマの会話を聞いていた。口を出すべきではない雰囲気、2人の間に漂っていた。もちろん私は何かを問われるまで口を開くことはしなかったけれど。

セルマは武器庫のリストを確認しながら、溜め息をついてペンを下ろした。その時の彼女の横顔は、不思議と私の中で強く印象に残っている。まるで懺悔をする人間のような……そんな顔だった。

『私は……メイを母親として愛せない』

『……』

当時まだ幼かった私も、セルマの言葉に衝撃を受けた。愛情といった言葉はなんとなく理解していたが、母と子の間にあるものを、否定する人間は初めてだったからだ。それは必然的に……絶対的に存在するものと、幼かった私はそう思っていた。

しかしそれは、小さかった私の視界で見ることのできた範囲の話。

『あの日……全てが消え去ったあの日、メイがいなければ私はこの場所に留まっていたはずだった』

メイを連れて武器庫を離れた理由。それは実に些細なものだった。辺境特有の冷たい風に体調を崩したメイを、セルマはグロックワースの都の医者のところへ連れていったのだ。

当たり前で、些細な理由。それでも、それはセルマにとって最悪なまでのタイミングだった。

『……………』

私は静かにカタリナを見上げた。何故そうしたのかは、自分でもよく分からない。ただ私は、カタリナが次に何かを言うであろうと、そう思っていた。

しかし、私の思う通りに事は進まなかった。

『……………サーシャ』

兄の声が、地下室の方から響いてきた。手伝ってくれ、という言葉に、私はソファから飛び降りる。地下室へ続く階段から2人の姿を振り返った時、カタリナはじつと足下を見つめていた。

あれ以来、セルマとカタリナの間でその話は交わされなかった。問いかけることも憚られ、結局私は未だにセルマの気持ちを知ることが出来ない。

ただ分かることは一つだけある。セルマがメイを本当に愛しているようがなかるうが、セルマがメイの母親であることに間違いはないのだ。

「?……サーシャお姉ちゃん?」

ふと下から顔を覗き込まれ、私は我に返った。メイが不思議そうな顔で首を傾げている。私は息を吐くと、メイの顔を見て言った。

「考え事をしていただけです。……セルマに会ったら、早く部屋に戻るように伝えましょう」

「うん。ありがとう」

メイはセルマに似た目元で、彼女には出来ない笑顔で笑って見せた。

第2章 2

真実とは時として残酷であり、優しさは時として嗜虐である。人は誰もがそれを知っているながら、どちらを選ぶことも出来ない。覚悟することが出来ないからだ。それが大切な者に対することであるならば、尚更のこと。

それは、誰もが持つものであり……カタリナの、唯一の弱さだった。

- 彼女の3つの罪 -

「あの……!!」

語られていくカタリナさんの記憶。その途中で、僕はセルマさんの言葉を遮った。まだ雨は降り続き、いつの間にか船員の影は室内に消え去っている。ここにあるのは雨粒が甲板の上で踊る音だけ。

セルマさんは静かに僕に視線を向ける。

「あ、あの……カタリナさんの、弱さって何なんですか……?」

僕には、セルマさんの言う『弱さ』が分からない。サーシャさんやジェイロードさんを見れば、カタリナさんという人のイメージは

なんとなく分かる。でも、浮かんでくるのは強靱な体と強い意志を持った女性だけ。弱さなんて欠片も想像出来ない。

セルマさんは、湿った木の床板を見つめた。

「……お前は、自分を弱いと思ったことはあるか？」

「え？……あ、あの……いつも思うんですけど……」

僕が下を向いてそう言うと、セルマさんは微かに笑った。

「自分の弱さを認めないのは自信過剰な人間だけだ。サーシャでさえ、自分の弱点を理解している」

分かるか、と問いかけられて、僕は考え込んだ。サーシャさんの弱点。ふと、僕の脳裏にアンブロシア村での言葉が浮かんできた。

過去の預言書を手に入れて、屋敷から脱出するとき……サーシャさんは頭上の出口を塞ぐ石を見てすぐにこう言ったんだ。フレイさん、押せますか、って。

僕は恐る恐る口を開く。

「ええと……し、身長、ですか？」

「そう、リーチだ。足の長さは自分でどうなるものでもないからな」

そういえば、コロッセオで僕とサーシャさんが戦った時、サーシャさんの攻撃は比較的読みやすかった。操られていたせいかと思っていたけど、よくよく考えてみればリーチが短いと間合いも違ってくる。

……でも。

「あの……カタリナさんはどうだったんですか？」

セルマさんは僕を横目で見ると、闇の向こうに視線を向けた。

「あいつは女としては大きい方だったな。子供を産んだことで不老不死の力を無くしているとはいえ、あいつの戦闘能力は今のサーシヤやジェイロードに劣らない」

「じゃあ、弱さって……」

問いかけようとした僕の言葉に、セルマさんは口を開いた。降り続ける単調な雨音、そして波をかき分けて進む船の音。

セルマさんの一言は、まるで闇の中に放り出されてしまったかのようにだった。

「カタリナは……3つの、罪があった」

風が強く吹き付け、雨粒が散らばって霧へと変わる。

「罪……？」

「負い目と呼ぶべきかもしれないな。……カタリナは、自分を許すことが出来なかった」

サーシャさんよりも、ジェイロードさんよりも融通が利かない。

こうと決めれば、自分にも相手にも変更は一切認めない。……さつき交わした言葉が脳裏を過る。

セルマさんの横顔を僕は見る。その遠くを見る横顔に、僕はヒヤリとした。もしかしたらこれは……サーシャさんさえ知らないことなのかもしれない。

「あ、あの……！」

サーシャさんは言っていた。カタリナさんは、帝国が滅びたあの

一夜を生き延びてしまったのだと。セルマさんの言葉が本当なら、それは罪の一つに過ぎない。

僕の制止を遮って、セルマさんは言う。

「カタリナは自分を許すことも、自分の否を認めることも出来なかった。……最後に会った時、あいつはこう言っていた」

眼帯で隠されていない方の瞳が、僕を射る。セルマさんの言葉を聞いた瞬間、何故か僕の中に後悔が押し寄せた。

「……『私の死は、おそらく我が子によってもたらされる』、と」

朝がやってくるのは早い。私は船の進行方向に見えてきた大陸を見つめながら、そんなことを思っていた。

数日間船の進行を妨げていた雨も通り過ぎ、今は青空が大海を覆っている。私は荷物を降ろすと、甲板から陸を眺める。否、私が見つめていたのは港街の向こうに広がっているはずの微睡みの庭だった。

預言書争いの首魁、メーリング家。そこにジェイロード達がいるのは確実だろう。私とフレイさん、クリフさんの3人でどれだけのことが出来るのか……。

「おい」

ふと後ろから声をかけられ、私は振り返った。どうやらフレイさんの方が先に準備を済ませたらしい。荷物と預言書を手にして、フレイさんが近づいてくる。

「……………どうですか？」

私は預言書に視線を向けた。

「お前の中に挨拶してもんはないのかよ。ったく……………」

フレイさんは呆れた顔をして預言書を私に差し出してくる。私はそれを受け取ると、フレイさんを見上げた。

預言書は中身が真っ白になっている。フレイさん曰く、ある一定の手順に従って魔力を注ぎ込めば、そこに求める答えが浮かび上がってくるらしい。ただ、慣れるまで多少の時間を要する。

「……………使い方は分かった。ただ、使い道が分からねえ」

苛立った様子でフレイさんは頭をかく。私は肩を竦めてみせた。ある程度、予感はしていた。私達が手に入れたのは『原初の章』。ヴァルナによれば、これは全ての始まりを記した章。人の作り上げたシステムに関する『蒼天の章』からすれば、実用価値は見込めない。

そこまで考えて、ふと私は顔を上げた。

「私達が持っているのが原初、ジェイロード達が所持しているのが蒼天……………」

「あ？」

「フレイさんが顔を顰めてこちらを見る。私は振り返り、大陸に視線を向けた。」

「もしもの話です。メイリング家が預言書を手に入れていると考えたと、それはどの章になると思えますか？」

私の言葉に、フレイさんは腕を組んで上を見上げる。雲一つない真つ青な空。少し前の、あの新型の機械人形が言っていた言葉が蘇ってきた。

フレイさんは一つ一つを思い起こすように指を折る。

「原初、蒼天、あと……」

「万物、大地、終焉です」

原初の章が始まりを記すのならば、終焉は恐らく終わりを記すのだろう。そう考えると、残りの2つも言葉通りの内容になるはず。

私はネオ・オリでの出来事を思い出した。部族によって成り立っていたネオ・オリの繁栄。アクロスがもたらしたという豊かさ。あれが預言書絡みだというのなら、アクロスが所持していたのは万物の章より、大地の章の可能性が高い。

「……なんだよ」

首を傾げるフレイさんに私は言う。

「メイリング家が持っている預言書です。預言書は持っている章によって、実用性が出てくるのはフレイさんも分かるでしょう」

「……アイルーク達と一緒にいた、あの緑頭の機械人形か？」

私は頷いた。本物を手にしてみない限り、実際のところは分からないが……メーリング家が所持しているのが万物の章だとしたら、背中を滑る冷たい感触に、私は深く息を吐いた。

フレイさんを見上げて、私は言う。

「メーリング家が万物の章を所持していると考えて下さい。財力もある彼らが実用性のある章を所持していると考えらるなら……」

やっとその意味に気付いたように、フレイさんは眉を顰めた。しかも、微睡みの庭はあちらのテリトリー。簡単に事を済ませるのは難しい。私は腰から下げたクロノスを指先で弾いた。

おそらく……否、必ずそこにはジェイロードがいる。あの男は何を勝算にあちらへ向かっているのか。アイルークさんの持つ力か、それともあの機械人形か。……いや、違う。

(……自らが動く可能性が一番高い……)

3年前のあの日。カタリナが殺されたあの日から、ジェイロードの行方は掴めなかった。それはジェイロード自身が派手な行動を起こさなかったからだ。あの男が動けば……必ずその情報は私の耳に入ってくる。

相手はあのメーリング卿。ジェイロードはおそらく、自らが動くことで均衡を崩そうとしている。

「……」

海風が首筋をなぞっていく。その冷たさに私は寒気を感じた。本気で手合わせをしたときでさえ、私は一度もジェイロードに勝つことがない。剣術、柔術……そして銃撃戦。あの男の持つリボルバ……『カイロス』の銃口を、私は何度も目にしてきた。

寒気を追い払うように荷物を背負い直し、私は大陸に視線を向ける。私が緊張と恐怖を覚える相手はただ一人、憎き兄ジェイロードだけだ。死を近くに感じたとしても、私の足が恐怖に止まることはない。恐れよりももっと鋭利で、汚く、熱く煮えたぎった憎悪が、私の胸の中に渦巻いているのだから。

「……サーシャ？」

ふとフレイさんが首を傾げたとき、船室に繋がる扉からメイが顔を出した。

「あ、いたいた。サーシャお姉ちゃん」

メイは私のところに歩み寄ってくると、フレイさんの方を向いて挨拶代わりに舌を出してみせた。フレイさんはムツとした顔をする。メイは私の方に向き直ると、おはよう、とだけ言っ、本題に入った。

「ええと、お姉ちゃんから頼まれていたアレ。どこのものか分かったよ」

私は無言で頷き、言葉の続きを促す。メイは船の進行方向から光の刻の方向を向いた。

「剣の素材はね、ある島から取れる特殊な砂を使ってたんだ。今はあんまり使われないけど、トゥアス帝国時代はかなり利用されてた素材だよ」

「島あ？んなの、その素材だけそこで採って、別な場所で造ってる可能性もあるじゃねえか」

フレイさんの言葉に、メイは馬鹿にするような表情でフレイさんを見上げた。

「魔術師サマ、今この世界にいくつ鍛冶屋があると思ってる？……
クリフお兄ちゃんなら一言で答え出るよ？」

メイの言葉に、フレイさんは舌打ちして私を見る。まだ甲板にクリフさんの姿はない。おそらくいたとしても、後でフレイさんの八つ当たりには遭うだろう。

私は溜め息をついた。

「帝国時代、鍛冶屋のような職人達はギルドを作って共存共栄をしていました。もちろんトウアス帝国の息がかかっていましたから、彼らは帝国が管理しやすいように生活場所を定められていたんです」「つまり……拠点が決められてたから、場所が絞られるわけか」

フレイさんの言葉に私は頷いてみせた。複数のギルドが寄せ集められた地域は、どれも帝国の近くに存在していたらしい。しかしその殆どが、帝国の消えたあの一夜に巻き込まれた。

私の説明を聞きながら、メイは上着のポケットの中から取り出した部品を片手に、自慢気に言った。

「私達が必要最低限の生活を送っていられるのは、生き残ったギルドのおかげなんだよ。だってほら、下手をしたら造船技術だって消えてたかもしれないんだから」

メイはそう言って、靴のつま先で甲板を叩いた。

生き残ったギルドは数少なかった。帝国から遠くにあったギルドが残るかたちとなったが、そうだったギルドは人も資料も少なく、結果的に私達の生活水準は『最低限』まで落とされた。

私は改めてメイに向き直る。

「……それで、その場所というのは？」

「あっ、そうだった。ええとね……エンディア諸国っていう、複数の島国を統括してる国」

あまり耳にしない国名に、私は腕を組んで足下を見つめた。カタリナと共に様々な国を旅してきたものの……エンディア諸国を訪れたことはない。

「その国はね、トウアス帝国の近海にあるんだけど……海を挟んでいるからか、風化しなかつたみたいなの。もとは時計産業で栄えてみたいんだけどね。でもやっぱり、ギルドは廃れていつちゃって……」

それとね、と言ってメイは利き手で遊んでいた部品を差し出した。

「こっちは機械人形の部品の一部んだけど……お母さんが言うには、時計の部品に似てるんだって」

差し出された部品は、3つの歯車が噛み合うような形をしていた。1つを動かせば、自動的に他の2つも回り始める。

今の時代、時計は地図に告ぐ高級品とされている。時間の流れを正確に分けるこの装置は、今では王族の元にしかない。

「時計か……たしか、ジジイが昔言ってたな。仕組みは分からねえが、無限に動き続ける時計があったとか」

「技術的な面で確証を得るのは危うい気もしますが、それだけの証拠が重なれば十分でしょう。……メイ」

私はメイに視線を向ける。メイは背筋を伸ばすと、私を見上げた。

「了解。エンディア国内でジェイロードさんに協力してる組織の発見と、経過だね」

私は頷き、広い海原に視線を転ずる。

おそらくあの男……ジェイロードに協力しているのはアイルークさんと、殺人人形を造る技術者達だけと考えていいだろう。多くの人間を飼いならして部下とするには預言書の存在は魅力的過ぎる。下克上を避け、従順かつ使い捨てのし易い人形達を利用することは、あの男にとって一番の好条件。それに……。

(……ジェイロードは、人を信用する人間ではない。……私と、同じように)

第2章 3

微かに薫る刺激臭。煙った視界を揺り動かすのは、陥ってはいけない甘い誘惑。口元を覆った瞬間にぐらりと世界が傾いた。ふわりと風に体を包まれ、辛うじて正常な意識で叫ぶ。

体を包む感じたことのない浮遊感、それこそがリル・インの力。

- 麻薬リル・イン -

「ふふっ……やっぱりいらしたのね、レヴィアス氏」

風が吹き渡る麻薬畑。夕日が照らす畑の中央には、馬車を通ることが出来るくらいの幅の広い道が真っすぐに伸びていた。ただ、そこに立ちはだかる人影が数十人。

ターゲット……ライラ・メーリングは背中から夕日の光を浴びながら、赤い唇で微笑んだ。私は立ちはだかる冒険者風の男たちを見回した。おそらく彼らはメーリング家が過去の預言書を探し出す為に飼いならした手駒だろう。数は57人、得物の半分は剣。

「ジエイ」

私が後ろからそう呼びかけると、ジエイは静かに頷いた。アイル

「クも同じように周りの男たちを見て、残念そうにため息をつく。

「美女と名高いメーリング嬢にお会い出来て嬉しいところだけど……お出迎えは女性の方が良かったなあ」

「あら、それは残念ね。『微睡みの庭』には奴隷以外に女はいないのよ」

男たちを従えて、ライラ・メーリングはそう言った。たしかに、敵の中に女の姿は1つもない。アイルークは警戒の態勢をとりながら、ライラ・メーリングに向かってわざとらしい笑みを浮かべて見せた。

「へえ……まさに紅一点。でも周りが周りだと貴女の美しさも半減かな。……これだけ野獣ばかりじゃ、貴女も野獣に見えてくる」

そう言って周りに視線を向けると、何人かがアイルークの挑発に乗ったようだった。怒声を上げ始める部下達。ライラ・メーリングは片手でそれを静めると、動じた様子のない艶めいた微笑みを私達に向けた。

「随分なことをおっしゃるのね、魔術師様。私のような女は好みではないと？」

「そんなことはないよ、ミス・ライラ。まあ、どっちかというと男慣れしていない女性の方が好みっただけさ」

「それは残念。……でも、私の目的もレヴィアス氏だけです」

不敵に口端を吊り上げるライラ・メーリング。私はハツとしてアイルークとジェイの前に飛び出した。途端、背景の夕日を切り裂くように大鎌の刃が振り下ろされる。私はそれを掌で受けとめた。

切り裂かれた皮膚から痛みの信号が脳に伝わる。普通の人間なら

手を切り落とされるほどの斬撃。それでも、機械で組み上げられた体はこの程度の力では壊れない。

「ジエイ……！」

命令を、ジエイに求める。この行動はマスターであるジエイとアイルークを守るために体が反応しただけ。攻撃命令が下らなければ、守りに入ることしかできない。

ジエイはスツと剣の柄に手を伸ばした。顔を上げ、辺りの敵を見回して言う。

「アイルークは男たちの相手を。……シルヴィ、援護しろ」

はい、と頷いて私は攻撃パターンを選別する。ギリギリと刃を押しつけてくるライラ・メーリングの映像に、攻撃パターンを計算するディスプレイが表示された。何百通りにも計算された彼女の行動パターンから、最も有効な攻撃が弾き出される。

やがて1つの答えが弾き出されて、私は刃を弾き返した。

「攻撃パターンDに移行。……援護します」

メイやセルマとは港で別れ、俺たちはメーリング家の『微睡みの

庭』を目指すことになった。……とはいえ、地図上で見てもかなり
広大な麻薬畑だ。侵入するのは簡単だが、目的の奴らがいる屋敷ま
ではかなり遠い。港で一泊して、朝に街を出ようというサーシャの
意見に、俺もクリフも賛成した。

「……にしても……」

俺は街の様子見ながら、呆れた溜め息を吐いた。

「麻薬畑の隣だけあって、この街もなかなかヤバいな……」

港の周辺は船が行き来するとあって、まだまもとな奴が多かった。
しかし街の奥に足を踏み入れるほどに、頭のイっちまった奴が目につくようになる。ボロ家の壁に背を預けて寝ている者、道端で寝転びながら呻いている者、すれ違う度に訳の分からない呪いの言葉を
呟く者……エレンシアの闇市より、荒んだやつが多そうだ。

前を歩いていたサーシャが振り返る。

「たしかに廃人の多い街ですが……一応、麻薬畑で倒れた奴隷を介抱する病院があるそうです。さほど大きくない施設のようですが」「
「んでも治療ってわけじゃねえんだろ？」

うす汚れた布を被って歩き回る老人。何かを一心不乱に貪っている
ようだが、その手にあるものはとうに腐っていて蠅が飛んでいる。

「そうですね。あくまでも『介抱』するだけです。帝国時代の技術
ならば、治す術もあるでしょうが……」

ふと、サーシャが会話を止めて視線を横に向けた。後ろを歩いて
いたクリフが俺たちの横を通り過ぎていく。

「……」

何か考えるように下を向いて歩くクリフ。

「……クリフさん？」

どうかしましたか、とサーシャは怪訝そうな顔でそう言った。そりやそうだ、エレンシアン時もネオ・オリン時も、治安が悪いだの暴動が怖いだの言っただけでビクビクしてたやつが、珍しくぼつっとしながら歩いてんだ。しかもこんな頭イカれてる街で。頭でもぶつけたのか、と俺も後ろから問いかける。

するとハツと我に返ったように、クリフは辺りを見回した。

「えっ……あ、あ、あれっ？……あ、よ、呼びましたっ？」

慌てて振り返るクリフに、サーシャは溜め息をつき、俺はクリフの頭を拳で殴った。どこかでアイルーク達と出くわす可能性もあるのに、コイツは何ぼーっとしてやがんだっ。

「いっ……いっ……」

ゴン、と小気味良い音をたてて拳が炸裂すると、サーシャは髪をかきあげて呆れたように言った。

「先が思いやられますね……」

こちらに背を向けて歩き出すサーシャ。ホラ行くぞ、と俺は悶絶しているクリフの襟を引っ張る。クリフは頭を右手で押さえながら、慌てたように声を上げた。

「あつ、あの……フレイさんっ」
「?なんだよ」

振り返ってそう言うと、クリフはビクッと肩を震わせて、宙に視線を泳がせた。右上を見て、左下を見て、しばらくオロオロとした後、ふと離れていくサーシャに目を向ける。サーシャはもちろん俺たちを待つ様子は全くなかった。

「?」

クリフの視線を追って俺はサーシャの背中とクリフを見比べる。するとクリフは慌てて首を横に振った。

「あつ……え、あ……な、なんでもないです……」

肩を竦めてそう言うクリフに、俺の拳がもう一発炸裂したのは言うまでもない。

「あらあら……私は貴方を歓迎するつもりでしたのに、残念ですわ」
ライラ・メーリングは艶のある笑みで笑う。けれど、ジエイはも

ちろん動じない。ゆっくりと剣を引き抜くと、静かに刃が空を切った。

ジェイは、いつもカイロスというリボルバーを持つてる。でもそれを使うことは滅多にない。どうしてかはわからない。それでも昔の……帝国時代の武器を簡単に扱っていると、私達の情報が他の預言書集めの冒険者達に伝わってしまうからかもしれない。

私は一度ジェイの後ろに下がった。ジェイは引き抜いた剣を構えて、ライラ・メーリングとの距離をはかる。彼女はまるでダンスに誘うかのように大鎌・メタトロニオスを一回転させると、

「ふふっ、それなら、死なない程度にお相手するしかないですわ」といって踏み出した。

弓のように反った刃が夕暮れの空気を切り刻む。刹那の速さで迫ってきた大鎌が、激しい音をたてて弾かれた。金属と金属の触れ合う心地よい響き。抵抗する力では、こんな音は響かない。ジェイは自然な動作でメタトロニオスの刃を剣で押さえ、そして力の流れに逆らわず、無駄のない動きで弾き返した。そのしなやかな身のこなしはいくら私が真似をしようとしても真似ることの出来ない才能。

ジェイが戦うとき、私はいつもその姿に見蕩れそうになる。

「……………っ！……………さすが、レヴィアス氏」

ライラ・メーリングはメタトロニオスが弾かれたことに多少の驚きを感じつつも、計算内のようなだった。弾かれた力でクルクルと回転させると、振り下ろされたジェイの刃を受けとめる。

私はその様子を見て、移動速度を超音速状態に切り替えた。ジェイの攻撃を受けている今、彼女の背後には隙が出来ている。私は彼女の死角に潜り込み、左脇腹に蹴りを放った。

「！」

ライラ・メーリングの情報はネオ・オリでの一件で更新されていた。もちろん、彼女には音速状態で接近しても攻撃をかわされる。だからこそ、ジェイは私に援護の命令を下したのだ。

ライラ・メーリングは私の蹴りに気づいたようだった。咄嗟にジェイの刃を押し返し、体を擦って攻撃をやり過ごす。高速で放った蹴りに彼女のドレスの脇腹が露になる。

私達と距離を置いて、ターゲットは困ったように肩を竦めた。

「あら……こつゆつことはどちらかと言うなら殿方の役目よ、お人形さん」

「……。……シルヴィ、あなた嫌い」

私は静かに拳を握る。ライラ・メーリングはフツと口元を緩めると、メタトロニオスの柄で地面をトントンと叩いた。

「クスッ……ご主人様を取られると思っているのかしら？」
「……」

拳を握ったまま、追撃モードに移行する。速度は超音速状態へ。ターゲット……違う、この『女』と戦うためには、手を抜くことは許されない。

真正面から飛び込んできた私に、ターゲットは大鎌の柄で突きを放ってきた。私はそれを直前で交わす。すると今度は、彼女が私の腕を掴んだ。体を捻って避けながら、掴んだ腕に自分の腕を巻き付ける。まるで蛇のような動きだった。

絡まった二つの腕。風が耳元を通り過ぎる感覚と共に、私は強い力を感じた。

「……お人形さん。私、貴女も気に入っているのよ？」

ねえ……貴女は泣けるのかしら。

残酷な声と共に、絡み付いた腕が私の腕を違った方向へと捻りあげた。それは私を停止させるためのものではない。完璧に私の動きを止める為の、強い力。肩の接合部分が軋み、私は声をあげていた。

「シルヴィー!？」

アイルークの声が少し離れたところで響く。けれど、私は今まで感じたことのない強い衝撃と痛みによって、それ以外の思考を邪魔されていた。攻撃を受けたのならば、守りに入るはずのプログラムが……作動しない。相手の次の動きを予測するはずのシステムさえも。

痛みが体を支配する。体が情報を受け付けない。何が起ったのか把握できない……把握出来ない!!

「ふふつ……お人形さんに私の一番嫌いなものを教えて差し上げましょう」

破損部分はおそらく右腕……違う、肩との接合部分。信号を伝えるコードが殆ど全て外され、部品が曲がってしまっている。自動修復は反応を示していない。

計算ディスプレイの映し出される映像。私の顔を覗き込むターゲットは、私の曲がった右腕を持ち上げている。それだけで私の足は地面から浮いていた。

ライラ・メーリングの目はまるで、人ではないような色をしていました。

「私……ルールが一番嫌いなんです」

右腕を支える部品の一部が肘から飛び出している。私は齒を食いしばって掴まれている腕に触れた。左腕はなんの損傷もないはずなのに、体が思うように動かない。痛みの信号がノイズを起こしているのかもしれない。

「1と1が2を形成する世界……馬鹿馬鹿しいと思わなくて？同じ個が存在しない世界で、何故それを同一としなければいけないのかしら……」

「……っ！」

痛みによって私の命令情報は殆どフリーズしてしまっていた。それでもかろうじて意識だけは保っている。何処かに残っている冷静な処理能力が、自分でも意識の存在に驚いていた。

でも……何故分かる。ここで完全停止してしまったら……私は、終わりだ。

「分かったでしょう？お人形さんは好きですの。でも、……貴女の中身は嫌い」

第2章 4

振り向いた瞬間に響き渡ったシルヴィの絶叫。ミス・ライラは楽しそうにその姿を見つめていた。その笑みに、俺はゾツとする。そして同時に、もう1つ背筋を凍らすようなことが目の前で起った。俺は確かにこう思ったんだ。ミス・ライラは人間じゃない……化物だ、って。

- 獣の美女 -

私を片腕で持ち上げていたライラ・メーリングは、ジェイの攻撃に気づいて私を離れた。左手で大鎌を振り回し、その攻撃を弾く。上手く着地出来ないまま、私は地面を転がった。そして自分の腕から飛び出した、掌ほどの長さの部品を引き抜く。何処かでまた信号が行き届かなくなった。

「シルヴィ。……状態は」

ジェイはターゲットを私から離して、静かにそう言う。反対方向へと曲げられた腕を戻し、私はノイズに霞む視界の中で計算した。

「右、ウでの破ソン……9.2…パーセント……っ」

損傷は右腕のみ。それでも体が上手く動かないのは、中枢回路にも影響が出来てしまったからだろうか。私は酸素を求めるように息をしながら、何処からか響いてくる声を聴いていた。

『痛い……いたいよ……』

泣きじゃくりながら、あの声がそう言っている。私は首を振った。違う、痛くない。痛いのは右腕だけのはず。体が動かないのは、情報が上手く行き届かないだけ。ターゲットを倒してジュリアに直してもらえばいつものように動くようになる。……そう、それだけのこと。

『そうじゃない、そうじゃない。本当は……分かってるんでしょ？』

ジェイが再びターゲットに攻撃を仕掛ける。私はヨロヨロと立ち上がり、フリーズしようとする体にむち打って構えた。

ライラ・メーリングはジェイの攻撃をかわしながら、私に目を向ける。

「あら……まだ動けるんですの？案外しぶとく出来ているようですね、この機械は」

「……………」

左手でグツと部品を握りしめる。首を振って、顔にかかる緑の髪の毛を払う。アイルークの制止の声が聞こえたけど、私は止まらない。ジェイの……マスタ の声じゃないから、止まらない。

『……………本当にそう？』

(ッ、……………話シカケテコナイデ！！)

私は、私の中でそう叫んだ。私の中の私は何故かいつも……無表情で冷たい。問いかけてくるこの声に、貴女は誰、と聞き返すこともしない。

……違う、したいのに出来ない。

『……ねえ、シルヴィ……』

こっちを向いて、と声は言う。でも『こっち』とは何処なのか。私の範囲の何メートル先？角度にするならどの辺り？どうしてだろう、私はいつも……こんなことしか考えられない。

『そんなことはないよ』

単位も、数式も、規律も、制限も、命令も、情報も……機械も、人間も、関係ない。でも、そう考えるとノイズが頭を覆ってしまう。シャツトダウンしてもう一度目が覚めると、何だか凄く悲しい気分になる。どうしてなのか、貴女は知っているの？

(私八……私八……)

『ねえ、これは誰の声？』

数えきれない疑問が頭の中を覆い尽くして、私という意識が遠ざかる。私の中の私と、私の中の貴女。二つの声が終わらない木霊のように響いた。もう、どれが私の声なのか分からない。どっちが私で、どっちが貴女なのか。

『……貴女は……誰？』

スツと、目の前を覆っていた影が消えた。辿り着きそうだった答

えが、次の瞬間に目の前から消え失せる。アイルークが何かを叫ぶ声が聞こえて、私の思考は現実へと引き戻された。……ううん、違う。『現実』じゃなくて、そこはライラ・メーリングが言うところの規律の世界。

いつそう激しい金属音が辺りに響き渡った。顔をあげると、ジェイがターゲットの大鎌を受けとめたところだった。まるで猫でもあやすような表情で口元を吊り上げるライラ・メーリング。でもジェイの表情は変わらない。

「……っ」

「……ねえ、レヴィアス氏。私、知っているのよ」

刃を弾き飛ばし、再び攻撃が繰り返される。ジェイはそれをギリギリのところで避けて、メタトロニオスの攻撃範囲より更に深く潜り込む。でもターゲットも簡単にジェイの斬撃を受けない。軽いステップで受け流すと、柄でジェイの剣を受けとめた。

ライラ・メーリングは艶めいた笑みで言う。

「貴方の……いえ、貴方の『妹』の秘密を、ね」

ハツとした表情で、アイルークが振り返る。ジェイは表情を変えなかつたけれど、微かに険しい目になった。私は意味が分からず、二人の顔を見つめる。

ライラ・メーリングは剣を受けとめた柄を片手で持つと、もう片方の手でジェイの頬に触れる。

「私達兄妹と、貴方達……きっと上手くやれると思うのだけれど……考える気はないかしら？レヴィアス氏」

ジェイはその手を払いのけると、険しい表情でターゲットから距

離をとった。

「……それは預言書の力か？」

メーリング家が持っているであろう預言書はおそらく、万物の章。それがどんなことに利用出来るのかは分からない。それでももし……万物の全てを把握するものだとしたら、こちらには分が悪過ぎる。私は上手く信号の届かない足に力を入れて、次の攻撃に入ろうとした。状況が飲み込めないけれど、今はターゲットを倒すことにのみ集中した方がいい。

踏み出そうと体を傾けた時、大きな手が肩を叩いた。そして次の瞬間、影が私の脇を横切る。突然のことに、私はその背中を見上げるしかなかった。

「……ミス・ライラ。知り過ぎることは死期を早めるよ」

ふとライラ・メーリングが視線をこちらに向ける。彼女の目が向けられたのはアイルーク。……そしてその隣に浮かぶ、灰色の体に翼のような両腕をした女の姿。

それは鈴人・フィリオネ。アイルークに忠実に使える最高精霊の鈴人。鳥と人を足して割ったようなその姿は、何度見ても奇妙で恐ろしい。そして同時に、私も人知を越えているという意味では同じであると感じる。

「あら……魔術師様。そんな恐ろしいものを使って、何をするおつもり？」

微笑みかけるライラ・メーリングに肩を竦めてみせて、アイルークは深く息を吸い込んで両手を合わせた。ふわりと地面から風が起り、足下には紫の文字が浮かび上がり始める。突然の突風と共にア

イルークの足下だけを覆っていた光が広がり、辺りにいる人間全てを陣の中に閉じ込めた。

「闇の許、我が力に応えよ……カナール・エミナ・ラ・フィリオ―ネ！」

フィリオ―ネの腕が軋み、翼が更に大きくなった。途端に風が竜巻のように辺りに吹き荒れ始める。私は咄嗟に付せてイルークとフィオを見つめる。

まるで風が刃のように、目に見える形になって人を襲っていく。透明な刃は刃物よりも鋭利で、斬りつけられた者は体の一部を失った。首が落ち、腕が落ち、足が落ち……あちこちで奇声上がるなか、イルークはターゲットに視線を向ける。

フィオは風に舞い踊るように、その両方の翼を動かした。幾つもの刃が彼女の体を襲う。

左足が落ち、そして大鎌を握っていた右腕が落ちた。金属が地面に落ちる音。それでも彼女の表情は、恐ろしいほどに変わらない。

「……フィオ」

パン、とイルークが両手を打った。瞬間、フィオの片腕が翼から人間の腕のように変化し、もの凄く早さでライラ・メーリングの左胸に迫る。そして次の瞬間、掌の全てが、まるで水に手を差し入れるかのように食い込んだ。

「ふふ……っ……」

笑みは途切れなかった。それでも微かな咳払いと共に、口元から赤いものが流れ出る。フィオがそこにあるものを確かめるように腕に力を入れると、片足で支えていた体がふと傾いた。フィオはゆっ

くりと手を放し、ライラ・メーリングの体が倒れるのを確認する。アイルークは振り返って残っている人間達を見回した。陣の中にいて、生き残っているのは数人。それでも片足や片手を奪われていて、反撃出来そうな人間はいない。

「俺たちもここで止まってるわけにはいかないんだ。……引きたきや引け、二度と目の前に現れるな」

アイルークがそう言って睨みつけると、生き残っている者達は這々の体で逃げ出していった。私は辺りに生存反応がないことを確認して、ジェイのところへ駆寄る。

「ジェイ……！ 怪我、ない？」

ジェイもアイルークの攻撃を予想して伏せていたようだった。あの攻撃は私達には当たらないようになっていたけれど、強力な魔術だから、やっぱり危険なことに変わりはない。

ジェイは膝の砂を払い落として立ち上がると、私の問いかけに頷く。服はさっきの攻撃の返り血を浴びていたけれど、どうやらジェイ自身の怪我はないみたいだった。ほっとする私に、後ろでアイルークがぐくりと肩を落とす。

「俺も頑張ったのに……俺に対する心配はなしだって、フィオ」

フィオは一度だけ首を傾げると、すぐに陣と共に風の中に消え失せた。灰色の姿が透明になり、やがて見えなくなる。

アイルークはしばらくそうやって文句を言っていたけれど、私もジェイも聞いていないことに気づくと、埃を払うように手を叩いてこちらを見る。

「それにしても、随分手間を取らされたなあ……まさか妹の方がこんな強いとは」

「……………」

私はふとライラ・メーリングを見下ろす。黒い髪を振り乱して倒れてこんだその体は、まるで人間ではない別の生き物のようだった。もともと今回の戦いでフィオは対メーリング卿のための戦力だった。そのカードをこんなに早く切ることになるとは、ジエイもアイルークも考えていなかった。

ふと、私はターゲットの亡骸を見つめながら言う。

「ジエイ、イルーク。……サーシャ・レヴィアスの秘密って、何？」

「えっ……………」

後ろでイルークが微かにそう言ったのが聞こえた。ジエイはもちろん、無言のまま剣を鞘に納めようとしている。私はイルークの方を向くと、両手を握り締めて言った。

「どうして、教えてくれないの？」

なんだか胸の中がざわざわした。ノイズが響いて、体の中が何故か熱い。イルークは困ったような顔でジエイに視線を向けた。二人の間の微妙な空気。また……私だけ、知らないことがある。船に乗る前のことだってそう。

シルヴィ、知りたい。知りたいのに……………！

「シルヴィのデータ、そんなの1つも入力されてない！」

「あ、いや、その……………それは」

アイルークに詰め寄っても、まともな答えは帰ってこなかった。ジェイに視線を向けるけど、ジェイはこちらを見ることもなく、ただ黙々と散らばってしまった荷物を拾い上げている。

その冷静さに、私はただの『機械人形』なのだとされているように……そう思ってしまった瞬間に、胸の奥に渦巻いていたものはっきりと顔を出した。

それは多分、怒りと……悲しみだった。

「ジェイ！」

喜びや幸せとは違う感情だった。覚えたばかりの感覚をどう表せばいいのか分からなくて、私は子供のように地団駄を踏んだ。アイルークは戸惑いの表情を浮かべて、ジェイは何も言わずにこちらを見つめている。

どうして、どうして私には教えてくれないの？ 私は、マスターのことを……大好きな人たちのこと、知っちゃいけないの？

言葉が口をついて出て来そうになった。少し遅れて、規制の警告音が頭の中に響く。多分、今私は言うてはいけないことを言いそうになってる。でも……止められない。止めちゃダメだと、警告音とは違う何かがそう言ってる。

「シルヴィ、……いい」

服の裾を掴んで、呻くようにそう呟いた。はっきりとジェイ達を見る。

「シルヴィ……そんなジェイ達、きらいっ！！」

強い風が目指していた先から私達の方へと吹き付けた。突然の言葉に、アイルークは驚いた顔でジェイと私を見る。でも……ごめん

なさいを言う気はない。言いたく、ない。

ジェイは静かに私を見つめていた。何を考えているかは分からなかったけれど、重い空気が辺りに満ちている。けれど、その空気を打ち破ったのは……思いもかけない笑い声だった。

「ふふっ……貴女、思ったより大きな声で泣くのね……」

振り返った私とアイルークの視線が、凍りついた。

第3章 1

赤い炎が燃え上がるのを、私はただ見ていた。足が思うように動かなくて、ただただ……認めたくない出来事を、認めたくない現実を、見つめていることしか出来ない。

泣きたかった。涙があるのなら……枯れるまで流しつくしてしまいたかった。

- 不老不死 -

「ふふっ……、貴女、思ったより大きな声で泣くのね……」

亡骸がそう呟いて、振り乱したままの黒髪を白い指先がかきあげた。赤い唇の端からは血液が筋になって流れ、フィオによって貫かれたはずの心臓の部分は真っ赤に染まっていた。

私はただ呆然とするしかなかった。先ほどまで生存反応はなかったはず。確認もしたはずなのに、何故。

後ずさることすら忘れていた私は、彼女の腕の筋肉が微かに動いたことに気づいた。左手に掴んでいたメタトロニオスが地面から離れる。私は咄嗟に、ジェイの目の前に飛び出していた。

「シルヴィっ!!」

アイルークの声が聞こえたけれど、ターゲットの大鎌はまるでスローモーションのように遅かった。残った力でジェイを庇った私は、その鎌が振り下ろされる軌跡を、ただ見ているしかなかった。

「っあ、あああっ！」

上手く声にならない絶叫が、私の耳の中に響く。それが自分の叫びだと自覚するのに、かなりの時間を要した。激しい痛みとの信号と目の前でニタリと笑う化け物の顔。

「う、あ……っ」

メタトロニオスは、私の右肩から左脇腹を抉るようにして振り下ろされていた。コードしかない体の中が、斜めに切り裂かれた痕を残していた。

足が崩れ、私はその場に倒れ込んだ。セキュリティが突然の異常に反応して自己修復を量っている。それでもこれは自分でどうにか出来るレベルの怪我ではない。

コッソ、とメタトロニオスの柄が倒れ込んだ私の首筋に当たった。ライラ・メーリングは口端を吊り上げて笑いながら言う。

「魂のない可哀想なお人形さん……貴女ももう少し聞き分けの良い子なら、実験に使ってあげたのに」

「……っ、……」

抗うことすら出来ない体。私は緊急のシャットダウン信号に抵抗しながら、ライラ・メーリングを見た。

「っ、……ミス・ライラ。アンタはどうやら、獣に見えるんじゃない

く、本物の『野獣』らしいな」

アイルークが瞬時にフィオを喚び出した。けれどターゲットの余裕の笑みは消えない。唇から血を滴らせる姿は、まるで何処かの言い伝えの魔物のようだった。

ライラ・メーリングはアイルークを見る。

「貴方も頭の悪い方ね、アイルーク・ハルト。……私達が持つのは万物の章と言ったはずよ？」

彼女は嘲笑を浮かべながら、胸元から何かを取り出した。真っ赤な赤い紙が、白い手と手の間に挟み込まれる。ライラ・メーリングはパン、と強く両手を打ち、そして低い声で唱えた。

「……紅蓮の炎纏いしカーディナル、我が血より出よ！」

彼女はそう言うのと左胸に紙を押しつけ、そして離れた。その刹那、赤い紙が炎のように燃えあがり鳥の形を形成する。鷲のように大きな翼は赤く燃えていて、私達の上をゆっくりと旋回すると、その嘴から劫火の炎を吐き出した。

「な……っ！」

ターゲットは狂ったように笑いながら、アイルークに視線を向けた。

「預言書を扱うことが出来るのは、魔力を持つ人間のみ。そうではないっ？」

激痛の中、思考回路の何処かでこの状況の矛盾が叩き出された。

アイルークも同じことに気づいたみたいに、眉間に皺を寄せた。

「……情報じゃ、魔力を持つのはメーリング卿のはず……っ」

事前に集めたメーリング家の情報によれば、預言書を扱える人物は当主のメーリング卿のみとされていた。それが何故、妹のライラまでが扱えるのか。私は痛みの中でじつとターゲットの姿を睨みつける。

先ほどまで生存反応すらなかった彼女の心臓。どうして、止まっていたものが再び動き出したのか。離れた場所にいる人間の心音を、私の聴覚が拾い上げる。

その刹那。

「……!？」

それは微かなズレだった。はっきりと聞こえていたライラ・メーリングの心音が僅かにブレる。まるで二つのものを重ね合わせたような、そんな僅かの違い。

ライラ・メーリングはアイルークに妖艶な笑みで謳うように語る。

「ふふふっ……私と愛しいお兄様は2つで1つの存在。同じ瞳、同じ心臓、同じ力、同じ魂を共有する……」

「魂の共有……!？」

ターゲットは空を煽ぎながら、血に濡れたドレスをふわりと揺らして笑う。それはまるで地獄に棲む悪魔が妖艶な人の皮を被ったような姿。

ライラはジェイに視線を向けると、赤い唇を吊り上げた。

「私達の愛は究極の愛。重なり合うのではなく解け合う愛ですわ。」

その血肉を共有し、永遠を謳う……。……ほら」

黒髪をかきあげて、ターゲットはジェイに近づいた。触れてしま
うんじゃないかと思うほど近くでジェイの顔を覗き込み、顔の右半
分を手で隠して左目を見開く。

その瞳の色は、女性とは言い難く。

「微睡みの庭の先で……。ラフィタお兄様は貴方達を見ていらっしや
る」

夕方の日差しが、屋根と屋根の間から差し込んできた。今回の宿
は路地裏にあるせいでいつもより環境が悪い。窓を開ければ腐った
臭いがするし、廊下に出ればガラの悪い人たちがたむろしてる。僕
が割り当てられた部屋は窓硝子の端に石かなにかをぶつけられた後
が残っていた。

いつもなら、ベッドに潜り込んでビクビクしているんだけど、今
日は少し違った。ベッドに潜り込んでひたすら考え事をする。考え
ても考えても、答えの見つからない問いがあるから。

『カタリナには、3つの罪があった』

脳裏に響くのはセルマさんの言葉。何度も繰り返し聞こえてくる、

最初の言葉だ。

『罪、ですか……？』

『ああ。……カタリナは、あの夜に生き残ってしまったことを悔いていた』

サーシャさんから聞いたことがある。カタリナさんは、トウアス帝国が一夜にして消え去ったあの日を生き延びたのだと。でも彼女はそれを後悔していた。……どうしてかは、僕にも分からない。

あの一夜を生き延びたカタリナさんは、それから数百年生き続け、そしてジェイロードさんとサーシャさんを生んだ。トウアス帝国の王族達に受け継がれた不老不死の力で。

『……妙に思ったことは無いか？』

『え？』

トウアス帝国の不老不死の力は子供を作ることによって失われてしまう。子供に力が受け継がれ、母体は力を失っていく。不老不死は完全ではないとサーシャさんが言っていた気がする。

でも。……セルマさんはあの時、暗い海を見つめながら呟いた。

『不老不死は子供に受け継がれる。……つまり母体の性質がすべて子供に奪い取られるという意味だ』

もしそうならば、と闇の中から声が聞こえてくるかのようだった。

『ジェイロードはまだしも……サーシャにまで不老不死の力は受け継がれるのだろうか』

「ジエイ！」

炎が辺りを包み込む中、私は咄嗟にターゲットに飛びついていた。しかし体の損傷は激しく、ライラ・メーリングは私の体をするりと避けて笑う。

「ふふっ……」

まるで風を相手にするように、ライラ・メーリングは私の手をすり抜けた。その皮肉のような微笑みに私は胸の中がざわつく感覚を覚える。

「どうかしら、お人形さん？ 貴女はやはり人形でしかない……ご主人様に突き放された感想は？」

「ふっ……ふざけない、で……っ！！」

体を擦って再び飛びかかると、突然彼女の顔が迫ってきた。白い腕がまるで蛇のように私の首に巻き付き、そして私はやっと理解する。彼女の言う、魂の共有。女性のものではありえない力が、首に圧力を加えた。巻き付く腕に、指先を食い込ませて空気を求めた。

「うっ……く……」

首を掴まれたまま、体が宙に浮いた。スピードを重視して軽量化されている私の体。それでもこれだけ軽々と持ち上げることが普通なら出来ない。

轟々と炎の燃え上がる音が木霊している。

「ふふふ、……可愛いお人形さん。ご主人様に捨てられて悲しいのかしら？」

「ふ、うつつ……!!」

身を擦ると、更に首が絞まった。首には重要な伝達回路が通されている。命令が行き渡らなくなれば、体の維持が出来なくなる。それはおそらく、人でいう死を意味している……。

「シルヴィっ！」

アイルークが叫ぶ声がする。私はライラ・メーリングの腕に指を食い込ませながら、必死の抵抗をした。それでも彼女の表情は変わらない。

ライラ・メーリングは私の体を持ち上げたまま、ジェイに視線を向けた。

「ねえ、レヴィアス氏……このお人形さんと貴方の身柄、交換しないかしら？」

「……」

ジェイは剣に手をかけたまま、じっとライラ・メーリングを睨み続ける。

「私が欲しいのは貴方のみ。危害は加えないと約束しますわ。……」

一度ゆっくり話をいたしましょう?」

誘うようにターゲットは赤い唇で誘うように笑う。私は巻き付いた腕に抵抗しながらジエイを見る。ジエイは何かを考えているようだった。私は声帯を押さえられた状態で、声にならない声で言う。

お願い、ジエイ。……そんな約束に乗らないで。

「……………」

私は、ジエイを、マスターを守る為だけの人形。私の命とマスターの身柄を交換することは、私の存在意義に反する。私は結局のところ、オトモダチと何も変わりのない機械人形。機械人形でしかないモノ。血の通っていないこの体は、マスターに与えられた情報と命令によってしか働かない。

必要以上を、望んではいけない。

「ジエイ、イ……………」

頷かないで。答えなくていい。私の……私の『意味』がなくなってしまう……。

「……………」

ジエイは表情を変えずに、ライラ・メーリングの顔を見つめ返した。そして大きく息を吐くと、剣先を地面へと向ける。

それは、条件をのむという証だった。

「!」

巻き付いていたターゲットの腕が離れると、私はガクンと地面に

崩れ落ちた。その感覚は本当に人形そのもので、私はカクカクと震えていた。隣でライラ・メーリングの高笑いが聞こえてくる。絶望的なその響きは、記憶したくないのに私のメモリーにしっかりと記録されていた。

「ジェイロード！」

アイルークが制止の声をあげた。ジェイは一步步ターゲットに近づいていく。ジェイはライラ・メーリングの隣に来ると、私を見下ろしてこう言った。

「……シルヴィ。ジュリアの元に戻って待機している」
「……っ……」

地面に崩れ落ちたまま、私は砂利を握りしめた。何に苛立ちと悲しみを感じているのか分からない。唯一つだけ分かるのは、データによって作り上げられてきた機械人形としての人格に、エラーが起っていること。

燃え盛る火の中でライラ・メーリングはジェイロードの腕に絡み付くと、アイルークに視線を向けた。

「魔術師様も一度戻られては？……この庭は普通の人間には地獄」
「なに……っ！」

ふと、燃え盛る煙の色が変わった。炎から燻る煙が膨れ上がり、嗅覚を刺激する臭いが漂う。アイルークは咄嗟に手で口元を追おうと、顔を顰めた。

ライラ・メーリングはクスリと笑う。

「此処が何の畑なのかお忘れかしら？ここはリル・インの畑。……」

大量に吸うのは毒よ、魔術師様？」

「っ、……くそ……っ」

フラ、とアイルークの体が傾いた。その瞬間、煙の中から現れたファイオがその体を抱きとめる。ファイオはターゲットを睨みつけると、吹き始めた風と共に煙の中に姿を消した。おそらくアイルークを安全な場所へと移したのだろう。

私は地面に倒れたまま、去っていくジェイとライラの姿を見つめていた。轟々と燃え盛る火が私を包み込もうとしている。砂を掴んでいた手を開くと、熱された砂利がバラバラと地面に落ち……その色を変えていった。

第3章 2

彼は全てを見ていた。微睡みの庭の中心で、静かに笑う。そろそろこの暗い暗い部屋を出なければいけない。待っていたもう一つのモノが、自分の屋敷を指しているのだから。

それが手に入った時、彼の願いは叶う。

- 彼は見ている -

太陽が照りつける草原。林も森もないまっさらな大地では太陽から隠れることが出来ない。陽光の集中攻撃を受けるように、俺たちは麻薬畑の広がる道の上を歩いていた。

「その屋敷ってどこまで、どれくらいかんだよ？」

俺はいつこうに見えてこない目的地を探しながら呟く。朝早くに街を出たが、畑の中に入ってからずっと同じ風景が続いている。どれだけ歩いても同じ風景ってのは、考えているよりもずっと人を苛立たせるもんだ。

横を歩くサーシャは、歩いてきた道のりを振り返り、そして太陽の位置を確認した。

「……あと2、3時間といったところでしょうか」
「の割に、全く見えてこねえぞ。屋敷」

遠くを見つめる俺に、サーシャは道の傍らに生えている細い葉を
引き抜いてみせる。

「おそらくこのリル・インの葉に隠れて見えないんでしょう。……
思ったよりも背の高い植物のようですし」

そう言つてサーシャは俺の鼻先にリル・インを突き出してみせた。
俺はそれを受け取つて、葉の一枚をむしり取る。微かに鼻孔に薫る
この香りが、この麻薬の特徴だ。

俺は葉を裏返し、しみじみとリル・インを見つめた。

「どんな麻薬かと思つてみれば……そこら辺に生えてる草の変形種
か」

葉脈の形や根が複雑に絡み合つた様子をジジイの本で見たことが
ある。思えばあの野草も、干して粉々にすれば特殊な薬になったは
ずだ。サーシャは俺の手の中のリル・インからもう一枚葉を千切り
取ると、くしゃくしゃと手の中で揉んで、葉の香りを嗅いだ。

「噂によれば……干した葉を粉状にして、火で燃やすとその効果が
現れるそうですね」

「ああ。干さない状態で燃やすと、効果は少ないな」

俺は根のついた茎の部分を畑の中に放り投げた。そしてふと隣を
見ると、サーシャがこちらを見ていることに気づく。

「……何だよ」

「いえ。やはりファールン様に反抗して植物の勉強をしていただけ
のことはあると思っただけです」

俺は眉間に皺を寄せた。誰だ、コイツに俺の子供時代を話したのは。ファリーナか、それともオフクロか？それに大体、褒めるならもっとマトモに褒められないのかコイツは。

サーシャはふう、と息を吐いて後ろを振り返った。少し離れたところをクリフが歩いている。徐々に俺たちから遅れていくクリフ。あいつ、チンタラ歩いて何考えてやがるんだ？

「……」

様子がおかしくなったのは、船の上で機械人形に襲われたときだった。あの時はいつも通り足を引っ張っているように見えたが……もしや、久々に機械人形に襲われて怖くなったのか？

「オイ」

俺がそう呼ぶと、クリフは少し遅れて顔を上げた。

「あ……は、はいっ！な、なんですか？」

慌てて駆寄ってくるクリフに、俺は大きく溜め息をつく。そして先を歩くサーシャの背中に問いかけた。

「……コイツ連れて来て正解だったのか？」

「さあ？」

サーシャは振り返ることもなく、そう答えた。ふと振り返るとクリフがじっとサーシャの背を見つめている。なんだ？コイツ、この

化け物女に惚れやがったか？

俺が口を開こうとしたとき、唇を結んでいたクリフが何かを決心したような顔で声を投げた。

「あ、あのっ……僕、サーシャさんに、聞きたいことが……っ！」

クリフの言葉に、サーシャがふと足を止めた。クリフの話を書くのかと思いきや、続けて口を開いたクリフを左手で制止する。

「？……サーシャさん？」

「ちよつと黙って下さい」

俺はサーシャの見ている方向に視線を向けた。道の向こうで、黒い影がぐるりと背を向ける。遠過ぎてはつきりと顔までは見えなかったが、奴隷には見えない服装をしていた。

サーシャは素早くクロノスを手にすると、その影を追って走り出した。

「ちよつ……オイ！」

制止の声をあげたが、サーシャが立ち止まるはずもない。しかもアイツは体力も化け物なら、足の速さも人より上。追いつくはずもない。

俺がもう一度サーシャの名を口にしようとしたその時、真後ろにいたクリフが引きつったような声をあげた。振り返るとクリフが口をパクパクさせながら、何かを訴えている。

「うるせえっ、今それどころじゃ……っ！？」

俺はクリフが指差した方向に視線を向けて、そして凍りついた。

「……………」

俺は後ずさり、そして辺りをもう一度見回す。クリフもまた、カタカタと震えながら視線を巡らせている。

背中をぞくぞくと駆け巡る、本能の警告。俺は声を失ったように、ただ突然現れたモノを見つめていた。状況を飲み込むまで要した時間に比例して、サーシャの姿は小さくなっていく。

「……………んだよ、コレは……………」

俺はもう一步後ずさりながら、たった一つだけ理解した。

過去の預言書に記された『万物の章』の意味を。

影のように見えていた姿が、徐々に大きくなってくる。私はクロノスを片手に逃げていく影に照準を合わせた。そしてそこから少し下へと狙いを下げる。空に向かって威嚇射撃をしたところで、相手の足は止まらないだろう。私は相手の地面に向けて、2、3発の銃弾を放った。

「……………」

狙いは狂わなかった。相手は足を止めると、こちらを振り返る。私はクロノスを構えたまま、一步、二歩と近づいていった。やがて影にしか見えなかった相手の姿がはつきりと浮かび上がる。それは漆黒の正装を纏った男だった。黒髪に、長い前髪……かすかに見える瞳もまた黒く、白い肌がまるで石膏か何かのようだった。体は細いものの、虚弱な印象は見受けられなかった。私は目を細め、クロノスの銃口を向けた状態で口を開く。

「ラフィタ……ラフィタ・メーリング卿ですか？」

男は黒い手袋で顔の右半分の前髪をかきあげた。闇のような漆黒の瞳が笑う。一度息を吸い、そして吐き出すと、ハスキーな声で応じる。

「……いかにも」

「……私のことはご存知で？」

ラフィタは頷くと私の方に一步一步近づいて来た。私はクロノスを構え、指先に力を入れる。撃つことはいつでも出来た。それでも実行に移さなかったのは、今すぐこの男を殺すよりも、必要な情報を搾り取ることの方が重要に思えたからだ。

ラフィタは私の空いているほうの手を取ると、手の甲にキスをした。

「勿論。……『サーシャ・レヴィアス』嬢」

「……そうですか。その名を呼ぶということは、随分色々と知っておられるようですね」

私は手を離すと、ラフィタを睨みつけた。彼はフツと笑って私を見下ろす。前髪で見えない表情は、彼のすぐ近くにくるとはつきり

と見ることが出来た。

私は静かにクロノスの照準を目の前のラフィタ・メーリングに合わせた。この距離ならば、外すことはまずない。

「ならば、単刀直入に話していただきましょう……わざわざこちらを出迎えた理由と狙いは？」

「……」

ラフィタは静かにこちらを見つめる。クロノスを目の前にして、微動だにしない様子はさすがメーリング卿といったところだろう。答えて下さい、と再び銃口を近づけると、ラフィタは焦る様子もなく両手を上げて見せた。

「……私には、貴女が必要だ」
「必要？」

前髪に隠れた瞳と、私の視線が混じり合う。私は即座に顔を顰めた。この男……何か違和感を感じる。

クロノスはいつでも撃つことが出来るようになっていた。私は静かに相手の目を睨み返した。ラフィタは瞳の奥で笑うように、こう言った。

「有史以前の歴史、トウアス帝国が生んだ『ルミナリイ』……研究者としては是非見ておきたい。それに……」

つ、とクロノスの銃口に指を滑らせ、ラフィタは私の右腕を掴んで引き寄せる。私はその手を見つめ、そして眉間に皺を寄せた。

ラフィタは囁く。

「……貴女と私はよく似ている」

地面に爪をたてる。畑の肥えた土は爪の跡を残し、そして麻薬の畑は静かに揺れた。

僕たちはただ呆然としていた。そこに現れたものが、今まで見たこともないほど奇怪で、グロテスクなものだったから。恐怖は背中を駆け巡り、力を忘れた腕からレイテルパラッシュが落ちた。

「……んだよ、コレは……っ」

フレイさんでさえ、そう呟くのが精一杯だった。

「……っ」

僕は震える足で一步、後ろに下がる。その瞬間、その奇妙なモノはチラ、と僕に視線を向けた。

「ひっ……っ」

その目は真っ赤に充血していて、牙の見える口からは涎が滴っていた。獅子を思わせる上半身は肩の辺りから2つに分かれていて、2頭分の頭は互いにこちらを睨みつけている。

背中には鳥の羽根を思わせる翼があったけれど、一枚一枚の羽根はまるで金属の刃で出来ているようだった。下半身は波を描くように動く、蛇のような体。

「……っ！」

それはまるで、ありとあらゆる生物、無生物を無理矢理繋ぎ合わせたような体。魔物とか、悪魔とか……例える言葉は何でもいい。兎に角、僕等の目の前に現れたのは、自然界では有り得ない生物。その魔物は鋭い爪を畑に突き刺し、そして威嚇するように高く咆哮した。その恐怖に、僕は足がガクガクと震え、立っていることさえ容易ではなかった。

チツ、とフレイさんが舌打ちをする。相手がこちらを狙っているのは明白だった。そして先に行ってしまったサーシャさんがこちらの状況に気づいている可能性は低い。

フレイさんは言う。

「俺たちをサーシャから引き離すのが目的か……。クリフ！」
「は、はいっ」

僕は慌ててレイテルパラッシュを拾い上げた。フレイさんは魔物に視線を向けながら言う。魔物はお預けをくらう犬のように涎を垂らしながら、地面を何度もかいていた。

フレイさんは真剣な面持ちだった。

「……剣を抜け」
「！」

僕は驚いてフレイさんを見る。そんな、こんな訳の分からないものに……剣を向けることなんて、出来ない。

「いいから、剣を抜け！お前も一応剣士なら、俺一人でどうにか出来る相手じゃないことくらい、分かんたろっ」

「で、でも……っ」

「早くしろ！」

フレイさんが叫ぶ。その声に魔物が反応を示したようだった。地面をかいていた前足に力が入る。きつとこちらに接近しようとしているんだ。

僕は泣きそうだった。レイテルパラツシユの柄を握る利き手に、迷いが生じる。駄目だ、やっぱりあの頃のように剣を振るうことが出来ない。

臨戦態勢のフレイさんが、僕に最後の一声をぶつける。

「さっさとしろ！死にたいのか!？」

「っ、死にたくないです!!」

僕は叫んだ。詰まっていた何かを吐き出すような一言だった。死にたくない。死にたくないなら、剣を抜くしかない。

戦うしかない。

「……っ」

僕は鞘から剣を抜いた。鞘と刃が擦れる静かで澄んだ音。少し前までは、なんて綺麗な音だろうと思っていた。でも……これは同時に、大切な何かを奪う予兆。その殆どは命であり、『生』なんだ。それを奪うことはこの世界を形作る幾重もの生物にとって、絶望でしかない。

今になって、僕は後悔してる。サーシャさんについてきたことと

か、そうゆうことじゃない。もっともつと昔……剣士に憧れて、剣の道を目指そうとしたときのことを。

もし僕がその道を目指さなければ、今僕はどうしていただろう。

家族と共に、あの場所で幸せに暮らしているんだろうか。それとも……。

「我、汝が主の名を受け継ぎし者。汝、この声に答え、我らの道を阻むものに制裁を……」

フレイさんの声が木霊する。あの鈴人を喚び出すつもりなんだ。

僕はスツと剣を構える。ここのとこるまともに剣を振るっていないのに、傭兵学校で染み付いた動作は消えていなかった。

ヴァルナの名を、フレイさんが口にすする。

「イデア・トゥルーン・レ・ヴァルナ！」

刃の震えは、まだ止まらない。

第3章 3

人は死を嫌い、ひたすらに生を望む。誰一人として、生ける者が死を体験することは出来ないから。僕はもしかして安堵しているんだろうか。これは恐怖ではなく、願いではなく、罪悪感なのだろうか。あの時、何があったのかは分からないけれど……僕は運良く生き残ってしまった。

そう。僕だけが、今此処にいる。

- 生への執着 -

魔物はフレイさんの気配に気づいて動きを見せた。不穏な気配を見せるフレイさんをターゲットにしたのだろう。地面に突き刺さっていた爪がフレイさんに飛びかかる。

僕は咄嗟にその攻撃の下に入っていた。まだ心の中はモヤモヤしていたけれど、これだけははっきりと分かる。僕一人ではこの魔物をどうすることも出来ないし、フレイさん一人でも倒すことは出来ない。

「っ、……っ」

剣に衝撃が伝わってくる。それは重い攻撃だった。飛びかかった

わけでもなく、ただ前足を振り上げただけなのに、この力は体なんなんだろう。下半身を蛇の体で支えているのに、どうしてこんな攻撃が出来るのか。

攻撃を阻まれた魔物は、片方の頭で僕を睨みつけた。息が詰まるような、殺気の籠った目。

「クリフ、離れろっ」

フレイさんの言葉に僕は剣を相手側へと押しやった。本当に僅かな隙を縫って、僕は魔物の後ろへと転がり出る。勿論、今まで体験したこともない状況に、心臓から今までにないスピードで脈打っていた。

次の瞬間、フレイさんの足下に大きな魔法陣が現れた。白い光を放つ陣に、魔物が一瞬身構える。強い風が陣の中につむじ風を起し、巻き上げられた砂が人の形を作り出した。

褐色の肌に、左頬の傷痕。フレイさんの前に現れたヴァルナは、僕等の前に立ちただかる魔物を見て、憂いのこもった目をした。

『……獣とはいえ、生を弄ぶか……やはり人に知など無い方が良いでしょうだ』

「ワケ分からねえこと言っていないで、なんとかしろっ！」

フレイさんは上を向いてヴァルナにそう叫んだ。僕らにとつての要はヴァルナしかない。本当ならば、対メーリング卿のための力だったんだけど。

ヴァルナはチラ、とフレイさんを見下ろすと、溜め息を吐いて右手を差し出した。

『よく聞け、ファーレンの血を受け継ぎし者。……その獣は人の手によって縫合された命。しかしどうやら失敗作と見える』

「失敗……?」

僕はそう呟いて、魔物に視線を向けた。心を落ち着けてよく見てみると、たしかに獅子の上半身、刃の翼、蛇の尻尾……それぞれが微妙に別々の動きをしている。上半身の2頭分の頭は互いに別な意思によって動いているらしく、互いに互いが疎ましそうに見えた。

フレイさんは言う。

「つまりは……繋ぎ合わせたそれぞれの体に別々の意思があつて、思った通りに動かないってことか」

『いかにも。しかし、不完全ではあるが生命の縫合……その技術と知を持った者がいるようだ』

フレイさんが舌打ちをした。メーリング家が沢山の冒険者を集めていることは知っていたけれど、まさか預言書を使ってこんな技術まで持っていたなんて、思いもしなかった。

でも……どうしてメーリング家は、こんなことを……。

「んなことどうでもいい……さつさとコイツを片付けるぞ。クリフ！ 援護しろっ」

フレイさんの一喝で、また柄を握る手に力が入った。ヴァルナがしっかりと獣を見据えている。

魔物と対峙しながら、背中に汗が流れていく。僕は思った。サーシャさんは何故、あの影を追ってってしまったのだろう。サーシャさんらしくない行動だった。

剣が力チャリと鳴る。一瞬浮かんだ疑問は、また恐怖と罪悪感の中に消えていった。

「『ルミナリイ』……?」

私はラファイタの体を引き離してクロノスを構え直した。『ルミナリイ』とは初めて聞いた言葉だった。しかし彼の言葉から察するに、不老不死の技術のことを差しているように思える。ラファイタは黒い瞳を細めた。

「メーリング家は代々、トウアス帝国のルミナリイを再現するために独自の知を積み重ねていた」

「第二の帝国となる為……ですか」

私はクロノスの引き金に力を入れた。発砲はしないものの、メーリング家の愚行が癪に障っていたことはたしかだ。不老不死などというものに左右されなければ、カタリナはあんな風に死んでいくとはなかった。実の息子に殺され……娘に嘘をつかれながら、死んでいくことも。

私は嘲笑の表情で口を開く。

「……その『ルミナリイ』としての実験体が必要ならば、私よりジエイロードが適任では?彼は不老不死の力の他に、預言書の蒼天の章と、科学技術も持ち合わせていますよ」

あえて私達が持っている原初の章の話は口に出さなかった。しか

しラフィタは私を見つめ、口元で笑う。そして彼は、違和感のある瞳で私を見た。

強い風が麻薬煙を揺らして去っていく。

「ジェイロード・レヴィアスは……『ルミナリイ』ではない」

私は目を見開いた。ジェイロードが、ルミナリイではない……？ かき消そうとしていた幼い記憶の中から、いくつかの思い出を呼び起こす。ジェイロードは確かにカタリナの血を受け継いで不老不死の力を持っていた。互いに訓練を繰り返す中で、私はそれを知った。

「……っ！」

一瞬、頭の中に1つの答えが浮かんできて、私は息を詰まらせた。そしてその言葉を導き出した自分自身を呪った。

無意識に足が後ろへと下がる。ラフィタはクロノスを持つ腕を掴むと、逃げる事が出来ないように力を込めた。強い力に私は顔を顰める。細い体の何処にこんな力があるのか。

「もう一度言おう。ジェイロード・レヴィアスは『ルミナリイ』ではない」

「……、黙れ」

私はクロノスの引き金を引いた。しかし、ラフィタの力によって照準を逸らされていた銃弾は、虚しく煙の向こうに消える。

ラフィタが近づくと同時に、私は後ずさった。それ以上言っな。その言葉を、私は聞きたくない。

「黙れと言って……っ！」

やろうと思えばすぐに出来ることだった。しかしこの男の前では何故か、そうすることすら無意味に思える。目の前にいる敵は一人のはずだ。それが何故か……2人いるように思える。

ラフィタは私の手を捻りあげた。クロノスが虚しく地面に落ちる。

「そして……ジェイロードがそうでないように、彼の母カタリナもまた……ルミナリイではない」

顔を近づけて彼は囁く。私は顔を逸らしたまま、動けずにいた。

「聡明な貴女が気づいていないはずはないのだが……それとも、その真実すら放棄したのか」

「……っ」

私は渾身の力でラフィタの腕を振り払った。

そうだ、気づいていないはずはない。本当は分かっていた。分かっていたことを、私は全て閉却した。否定することも肯定することも放棄し、私の中でその真実は零になった。

カタリナは不完全ながら不老不死の力を持っていた。ジェイロードを生むことで不老不死の力を失い、彼女は老いていくこととなった。

ならば、私は？

ラフィタは優しく、労るように囁きかける。

「真実を知ること恐ろしい。……サーシャ・レヴィアス、貴女は」

私はラフィタと顔を合わせないまま、静かに、そしてはつきりとした声で言った。言ってしまった言葉は、おそらくもう隠すことは

出来ない。それでも、構わない。……もう、構わない。
それはもう、陽の下に晒されてしまったのだから。

「……私は……」

土を押し上げる、微かな揺れ。僕はレイテルパツシユを構えたまま、突然の地震に耐えた。次の刹那、魔物の四方から植物の蔦が這い出てきた。アンブロシアでサーシャさんを捕らえた、あの蔦だ。蔦は獅子の前足を拘束し、体のバランスを崩す。2本の前足と蛇の尻尾で支えられていた体は、簡単に体勢を崩した。

「クリフ！」

フレイさんの言葉に僕は一度だけ躊躇した。でも……ここで僕が動かなければ、負けるのは僕たちだ。あの魔物の餌になるのか、それとも単に引き裂かれて終わるのかは分からない。

勝たなければ……殺さなければ、殺される。それが全ての、単純過ぎる摂理。殺したくないけど、殺されたくないなんて、そんな都合の良いことは通らない世界。

僕は歯を食いしばった。そして叫んだ。

「ああああーっ！ー！」

レイテルパラッシュを持つ手に力が入った。鳶を切るうともがく
獣めがけて、刃が近づいていく。しかしその瞬間、もがくのやめ
た獣がこちらに向き直った。

「！」

ストツと、風を切って何か突き刺さるような音がした。次の瞬
間左腕が熱くなって、僕はとっさに左腕を見る。そこにはあの獣の
羽根……刃のように鋭いあの羽根が一枚食い込んでいた。じわりと
滲み始める血を見た瞬間、僕はやっと痛みを覚える。

「うっ……」

咄嗟に深く食い込んだ刃を抜くと、零れるように血液が流れ出し
た。血の臭いに、魔物はまた咆哮する。

「クリフ！」

フレイさんの叫び声で、僕は左腕を押さえたままハツとした。獣
が鳶を喰い破り、こちらに飛びかかって来ようとしている。逃さな
いようにとヴァルナの鳶が絡み付くけれど、蛇の下半身はそう簡単
に捕らえることが出来なかった。

噛み付くように伸びてきた蛇の尻尾が足を捕らえる。地面に転が
された僕の背中に、魔物の鋭い爪が突き刺さった。引き裂くような
爪の動きに、僕は声にならない悲鳴をあげる。流れ出す血の臭いが
更に魔物を興奮させているようだった。

「くそっ」

フレイさんは舌打ちをして、口の中で何かを唱えた。その瞬間、獣めがけてカマイタチが起った。強い風が獣に絡み付き、その体に無数の傷を追わせていく。

僕は近くに落ちていたレイテルパラッシュを拾ってフレイさんを見た。本当なら、フレイさんもヴァルナの召喚だけでかなりの魔力を使っているはずなんだ。

突風によって砂が巻き上がり、砂嵐となる。僕等を隠すように吹き上がる砂の壁。視界が悪くなる中で、僕はフレイさんの声を聞いた。

「クリフ、ここは一旦引いて、サーシャを探すぞっ」
「っ、はいっ」

獣の姿は見えなくなっていた。でも同時に、フレイさん達の姿も見えない。僕は後ろに警戒しながら走り出した。流れ出した背中と腕の血は止まることなく、僕は歯を食いしばる。

滴り落ちる血の後が点々と僕の足跡に続いていた。

第3章 4

赤。その色を人は、誰かの教えによって知る。その色が赤なのだと、深紅の薔薇の色であり、人の体内を流れる血の色なのだ。しかし、知の根源たる教えが違っているとしたら、どうなるのだろうか。

それは悪意の有無に関わらず……こう呼ぶべきではないだろうか。

- 嘘 -

知らなかったわけでも、考えなかったわけでもない。ただ、私はその真実を見ようとしなかった。口に出せば何かを失い、考えてしまえば私の根本にある全てを壊してしまうと気づいていた。

カタリナは何も言わなかった。私は赤子の頃から彼女に育てられ、生きていく方法を学び、身を守るために戦う術を叩き込まれた。そこに疑問は感じなかった。そう、カタリナが普通の人間だったならば。

「……私は」

最初の記憶など、持ち合わせていない。それは誰でも同じことだろう。この世に生まれ落ちた時の記憶がある者など、いたとしても

殆どは何かの間違いか、後から刷り込まれた記憶だ。

私はただ、物心ついた時から旅をしていた。カタリナと……ジエイロードの3人だけだった。父の記憶は全くない。カタリナは父の存在しか語らなかった。

「……私は……」

私は、クロノスのバレルを握りしめる。

例えば赤という色を、人は誰かの教えによって知る。その色が赤なのだと、深紅の薔薇の色であり、人の体内を流れる血の色なのだと知る。しかし、知の根源たる教えが違っているとしたら、どうなるのだろうか。青を赤と刷り込まれた人間は、誰かに教えを指摘されるまで気づくことはない。

それが何かの間違いであれ、悪意の有無に関わらず人はこう呼ぶ。

嘘、と。

私は大きく息を吐き出した。そしてラフィタ・メーリングの前髪に隠れた目を睨み返す。そして私は口にした。もう戻れない1つの真実を。

「私は……カタリナの実子ではありません」

ラフィタは唇を笑みの形に歪めると、それを隠すように片手で覆った。私はクロノスを握り直してラフィタに銃口を向ける。この男の笑い方は私を怒らせるには十分だった。

「……これで満足ですか？」

ラフィタは銃口を目の前にして恐怖した様子すら見せなかった。

ただ静かに私と銃口を見つめ、そして右手を差し出す。自然な動作で……そう、吐き気がするくらい自然な動作で。

「満足？……いや、満足したのは貴女の方だろう。自身の歪な存在をはつきりとさせることが出来た……いや、歪んでいるのは貴女ではなくこの世界」

その手が訴えているものに、私はすぐに気づいた。この男は『ルミナリイ』を求めている。私がそれに該当すると考え、そして手に入れようとしているのだろう。

彼の手は静かに訴えかける。口にする言葉よりも多いものを。

「此処は理なき庭……歪んだ答えを真とするこの世界を、貴女は間違っているとは思わないか？」

同時に脳裏を過る母の顔。ヒュペリオンを手にして、どんな屈強な人間を相手にしても軸のぶれない立ち姿、あの精悍な表情。時にこちらに剣を向け、銃口を向け、私達を育ててきた『母親』。

思えば、最初は純粹に憧れたのかもしれない。嫌なら逃げれば良かったのだ。生きる為の術、戦う為の術、そんなものが無くても生きていく方法は数えきれないほどあった。もつとも……青を赤と教えられた人間には、逃げるとい言葉すら与えられていなかったのかもしれないが。

『立ちなさい、サーシャ。早くクロノスを取りなさい。……一秒の遅さが、一時の迷いが、自分の命を脅かします』

過去の言葉が蘇る。それでも、立ち上がれない時はあった。足が棒のようになり、立ち上がれない時もあった。私は……ジエイロードのように強くはなかった。

母と兄が私を見下ろしている。カタリナは私を急かし、兄は立ち上がらない私をただ見つめていた。

『足があるのならば立てるはずでしょう、サーシャ。立ちなさい』

そう、私は立つしかなかった。立ち上がるという道しか敷かれていなかった。物心ついた時から私の生き方はすべて決められていた。それを憎むことも、嘆くことも教わらなかった。それが真なのだと、当然なのだと思うされていたのだから。

「……」

此処は理なき庭。差し出された手はそう言っている。頑なに歪んだ真実に固執することはないと、白い指先がそう語っている。

目眩がした。そして吐き気がした。私は何に嫌悪しているのだろう。私自身か、それとも……私自身か。

「サーシャ・レヴィアス」

いつの間にか、利き手が伸びていた。私は、私の手が彼の手を取るのをただ見ていればよかった。そう、その手を取った瞬間に、まるで憑き物が取れるように体が軽くなった。軽くなったのを通り越して脱力した。

「そう……それでいい」

ラフィタは私の手を取り、唇だけで微笑んだ。

左腕が痺れてくる。血の気が引いて、指先の感覚が曖昧になっていく。僕は血を滴らせながら走った。フレイさんとははぐれてしまったけれど、サーシャさんのところに辿り着けば合流出来るはずなんだ。押さえた左腕の傷から血が滲み出して、服の袖を汚していく。どれくらい彷徨ったんだろう。ただひたすらに走っていた僕は、小さな小屋のようなものを見つけた。麻薬畑の端に作られた木造の建物は、農作業用の蔵のようにも見える。

ふと僕はその小屋の入り口に探していた人の姿を見つけた。

「サーシャさん！」

安堵して、僕は声をあげた。サーシャさんは入り口の前で足を止める。こちらに背中を向けたままのサーシャさんに、僕は駆寄っていった。

「サーシャさん！良かった……無事だったんですね」

僕は振り返らないサーシャさんに、さっきのことを話した。魔物のような化け物に襲われたこと、フレイさんとはぐれてしまったこと……サーシャさんは何も言わずに、ただ足を止めていた。

「フレイさんとは会いましたか？あの、僕、サーシャさんと合流しろって言われて……あ」

ふと僕の後ろで、小石を蹴る音が聞こえた。フレイさんかと思つて振り返つた僕の思考は、そこで停止する。

ポタ、ポタ、と滴り落ちる、透明な液体。その赤く濁つた目は僕等を餌として認識しているようだった。僕はハツとして自分の左腕を見る。指先から落ちた血液が、僕の立っている場所まで点々と続いていった。

「……自分で自分の居場所を知らせているようなものですね、それでは」

振り返つたサーシャさんは、溜め息をついて冷たくそう言い放つ。魔物のような姿に驚いた様子すら見せずに、ただ鬱陶しいといった表情だった。クロノスを持った腕が気急げに上がっていく。

銃口は静かに真つすぐに、『敵』へと向けられた。迷いもなく、躊躇いもなかった。真つ黒な銃口は確かに……僕を見ていた。

「え……？」

引き金が引かれる。その瞬間、僕は咄嗟に飛び退っていた。

轟音はただの一発。興奮した魔物が呼応するように咆哮した。僕は腰を抜かしたまま、サーシャさんを見上げる。

「な……っ」

僕は、撃たれそうになったのか。今、あの銃口は僕を狙っていたのか。まさか……そんな、はずは……。

サーシャさんは顔を顰めて僕を見た。その冷たい瞳……ぞつとするような殺気を、僕は全身で感じた。いつもジェイロードさんに向けている、足を動かすことさえ難しいあの殺気。それが、僕に向けられて……？

「外しましたか……一発で仕留めようと、配慮したのですが」

サーシャさんがそう呟くのを、僕は信じられない気持ちで見つめていた。何故、どうして。ありきたりな僕の疑問に、サーシャさんは全て理解したような表情で堪える。

「……少々、気が変わりました」

「き、気が変わったって……ど、どうゆうことですかっ」

クロノスの銃口が再びこちらに向けられる。僕は腰を抜かしたまま後ろへと後ずさった。サーシャさんは僕の惨めな姿を目の前にして、冷たい瞳を変えない。

もう一度引き金に指が伸びたその時、小屋の扉が音をたてた。サーシャさんは視線だけでそちらを見る。そこに現れた男が誰なのか、僕は臆げにだけど理解した。

黒髪の男は銃声に気づいて扉を開け……クロノスを構えたサーシャさんと、力なく座り込んでいる僕を見て、唇をあげた。

「……ほう、まさか生き延びてくるとは。いや……」

男は漆黒の瞳で向こうにいる魔物を見る。僕がああ場所から逃げてきたのは、それで一目瞭然だった。サーシャさんは銃を下ろしてその男に近づく。無警戒の様子に、僕はまた声をあげた。

「サーシャさん!？」

その人は、おそらく……いや、きっとラフィタ・メーリングだ。

僕等が敵とするはずだった相手。刃を向けるべき、この『微睡みの庭』の主。奴隷達に麻薬を作らせ、裏では預言書を我がものにしよ

うとしてる人間。

サーシャさんはまるで従属するように彼の隣に立つと、僕の方を振り返ってこう言った。

「……ここは見逃して差し上げましょう。フレイさんにも伝えて下さい」

ラフィタ・メーリングは少し眉を動かしたけれど、サーシャさんの言葉に反論する様子は見られなかった。生かしても殺してもさほど変わりはない。そう言われているかのようで、僕は一気に頭の中が真っ白になった。

だって、サーシャさんはいつも強くて、自分の信念を持っていて……それが復讐っていうドロドロしたものだっただけで、その背中に僕は憧れたんだ。たった一つの、己の目的のためだけに生きるその姿。崇高で、荒野に咲く一輪の花のように気高くて。

だから。

「サーシャさんに……サーシャさんにとっては、僕らはまだ『契約』の関係なんですね……」

何も考えられなくなった頭の中に、初めて自分のことを話してくれたサーシャさんの背中が浮かび上がる。カタリナさんのこと、ジエロードさんのこと……この人と一緒なら、僕は何かが変わえられるような気がしたんだ。

あの時から……きっと僕だけじゃなくて、フレイさんだって……契約なんか、とつくに辞めていた。

「それは……逃げてるんじゃないんですか……」

僕はレイテルパラツシュを強く抱いたまま、メーリング卿の隣に

いるサーシャさんにそう言った。サーシャさんがこんなことを言い出した理由……そんなの、たった一つしかない。嫌な予感がしていたんだ。けど、その理由を口にするなんて、僕には無理だったから。僕が口にしちゃいけないことだったから。

「自分がカタリナさんの子供じゃないから、自分が一番信じていた人に『嘘』をつかれていたから……っ」

僕はサーシャさんを睨みながら、同時にメーリング卿を睨みつけた。どうしてそれを知ったのかは分からないけれど、きつとサーシャさんにその真実を教えたのはこの人だ。

サーシャさんは顔を顰めて僕を見ていた。僕は叫ぶ。

「だから、……だからっ！！」

サーシャさんにとってカタリナさんは絶対だった。それはきつと優しい記憶だけじゃない。厳しく、辛く、憎い時だってあったかもしれない。そんな全てが絶対だった。

だから、カタリナさんの命がジェイロードさんの手で奪われたとき、サーシャさんは復讐だけの人になった。カタリナさんに対する全ての感情が、全て復讐へと色を変えたんだ。

でも……一欠片も曇りのなかった信念に、カタリナさんの罪が、傷を付けた。

「……」

地面に向けられていたサーシャの視線が上がった。僕を見つめ、そして抱きしめたままのレイテルパルツシュに向けられる。

「……いつも逃げてばかりの貴方に言われたくはないですね」

サーシャさんの言葉は極めて冷静だった。僕の言葉に怒る様子もなく、ただ冷静に事態を見つめている。言葉が届かないことを、僕は悟った。

サーシャさんは続ける。

「戦うことも守ることも出来ない。過去にばかり囚われて、前に足を踏み出そうともしない。……その魔物に襲われて、私の所にくれば助かると、そう思ったのでは？ 違いますか」

「っ」

僕の腕の中でレイテルパラッシュがカチャリと鳴った。滴り落ちる血液。指先から力がなくなって、僕は自分の体が死んでいくような錯覚をおこした。

いや、違う。サーシャさんの視線に……微かに殺気が帯びた。僕は恐怖している。

「警告はすでに終わりました。私としては情けをかけたつもりでしたが……それでも引かないというのならば、引導を渡して差し上げましょう」

サーシャさんはそう言うと、クロノスの銃口を僕へと向けた。はつきりと定められた照準、そしてこの距離。間に合わない。足が動かない。

「サーシャ、さ……っ」

銃声が轟く。背後で魔物が咆哮している声だけが、痛みに悲鳴をあげる体の中に残った。

第4章 1

吸い込んだ重い空気が肺に迷い込み、錯覚を起こさせる。此処は何処なのか。フィオが導くように俺の手を取った。微かに聞こえる呼び声が、他の誰かの声と重なる。これは、リル・インの錯覚か。吐き気を訴える体が、助けを求めるように昔の記憶を引きずり出していく。

- 踊り狂う者達 -

『……あんだ、預言書を集めてどうする気なんだ？』

あれはそう、俺があゝの貴族の家で策に嵌って殺されかけたとき。殆ど初対面だったジェイロードに助けられた俺は、あいつの肩を借りて歩きながらそんなことを聞いた。

聞けば、ジェイロードは過去の預言書を扱うためには魔術師の力が必要だと知って、適任と思われる術師を探していたらしい。そこで白羽の矢が立ったのが俺だった。爺さんのお墨付きで、最年少で鈴人を喚び出した孫。真実と随分ズレはあるが、当時の周りの評価はそんなもんだった。

『……………』

ジェイロードは何かを考えるように黙々と歩いていった。無視されたのかとムツとしたが、やがてジェイロードは口を開いた。

そこから語られる言葉は、一瞬聞き違えたかと思うくらいに意外なものだった。

『知を、救済するためだ』

『は……？』

冗談かと思つて見上げた顔は無表情で、それが嘘でも冗談でもないことを悟るまでかなりの時間が必要だった。

言葉は随分と遠回しな言い方だったが、その意味は明瞭だった。

知とは、言ってみれば帝国時代に繁栄した文明を指す。その救済とはつまり、その文明をもう一度復活させるという意味だ。

『知を救済する……聞こえなかったのか』

「ご丁寧に二度も繰り返してそう言われ、俺は返事が出てこなくなつた。こいつ馬鹿なんじゃないかと、本気でそう思つた。」

文明の復活。何処かの国から命を受けているならまだしも、ジェイロードはただの旅人だった。勿論、トゥアス帝国の王族の子孫であることを知つたのはしばらく経つた後のことだったが……それも500年も前の話。今のジェイロードには殆ど関係がないと言つてもいい。

『あなた……第二のトゥアスを作る気なのか？』

『……作るとしたらもう少しまとまなモノを作るだろうが』

ジェイロードはそう言つて一度言葉を切り、そして俺に視線を向けた。

『国にも王にも興味はない。……ただ、それが私の成すべきことだからだ』

『成すべきことって……』

ジェイロードは道の先へを見る。

『そのために……邪魔になるものは排除してきた。必要なものは過去の預言書、そしてそれを扱うことの出来る人間だけだ』

その瞳の色は深い海の色だった。俺なんかじゃかなわないくらいの整った顔が、微かに曇るのが見えた。何を考えたのか、何を思っで一瞬の躊躇いを見せたのかは分からない。それでも、はつきりとして己が目的を言いきったこの男を、そんな馬鹿な目的を掲げた男を、俺は信じた。

『男に従うのは趣味じゃないんだけどなあ……分かった、あんたについてってやるよ、ジェイロード』

そうだ、あの男の目に嘘偽りはない。シルヴィを逃がし、ライラ・メーリングに下ったのも、全ては策があつてのこと。疑うな。あの男は強い。信念を曲げる人間じゃないことを、俺だけは疑ってはいけない。

さつさとこの錯覚を振り払わなければ。俺は、俺が今出来る最善を尽くす。フィオ、もう一度俺を呼び戻してくれ。今の俺には、やらなきゃいけないことがある。

屋敷の中は薄暗く、まるで幽霊屋敷のように人気がない。ただそこにあるのは、息をすることも言葉を発することもない存在。地面に転がった『ソレ』は、2つの足音を聞く。

2人が足を踏み入れた時から、出迎える姿は1つとしてなく、彼は静かに辺りを見回した。古いシャンデリアが頭上高く揺れている。

「あら……どうかいたしまして？レヴィアス氏」

先を歩くライラ・メーリングが、ふとその様子に気づいて振り返った。招かれた客は、一度足を止めて彼女を見る。

「……メーリング家といえば古くから続く貴族だと聞いていたが」

続く言葉を察して、ライラは微笑んだ。そう、ここには使用人の姿が無い。リル・インの畑で働く奴隷は目にしたが、この屋敷の中に人気は全くなかった。

「ふふふ……私達に使える使用人は、みな必要な時に現れ、必要がなくなれば去ってゆくものなのですわ」

ライラの言葉に、客人は静かに顔を顰めた。

彼女は階段を上り、長い廊下の奥へと彼を案内する。そこは古い貴族であるメーリング家が客人を迎え入れる客間。バルコニーに続く窓辺には紫のカーテンがかかり、足下には異国の絨毯が敷かれている。

ライラ・メーリングは部屋のあるソファに彼を座らせると、怪しい笑みで微笑んだ。

「そろそろ……貴方の預言書を見せてはいただけないかしら？ 蒼天の章……とても興味がありますの」

帝国時代の科学技術を知る本、蒼天の章。それを手に入れることはメーリング家の悲願だった。客人の男は目を閉じて溜め息をついた。

「……目にして分かる代物ではないが？」

「あら……ならば特別に、私達の預言書も見せて差し上げましょう。貴方にとって一番興味があるのは蒼天よりも万物……我々の持つ預言書ではなくて？」

彼女は彼の背後からもたれかかるように近づいた。自分が持っていた預言書を手渡しながら、耳元で愛を囁くように一言、呟く。ルミナリイ、と。しかし彼は表情を変えることなく、静かに荷の中から一冊の本を取り出した。背後のライラ・メーリングの鼻先に突きつけると、彼女は笑う。

「ふふっ」

まるで少女のようにライラはくるりと回ると、客人から離れてその本を右手に乗せた。その瞬間、まるで突風が巻き起こったかのようにながら本が開き、バラバラとページがめくれ始めた。

それは客人の持つ本も同じだった。彼は冷静な瞳で見つめながら、魔法が収まるのを待つ。稀代の魔術師ファーレンが創りし過去の預言書は、魔力を持つ者によってしかその力を発揮することが出来ない。

「……」

浮かび上がる文字の羅列を、彼は静かに見つめていた。時折浮かび上がる、螺旋状の図形。この時代に生きる者には到底理解出来ない技術が、そこには平然と並んでいる。500年という時間によって失われた知識、そして技術。

静かにページを捲る彼の後ろで、ライラは言う。

「……ふふ、それは『生命を司り、生きとし生けるものの全てを暴く万物の章』。いかがかしら、レヴィアス氏。それがあればルミナリイの中身を暴くことすら可能になる」

そう言いながら、彼女は少し不満そうに方を竦めた。

「お兄様はどうしても本物を手にしたいと仰っていたのですけれど……」

客人はその言葉にページを捲る手を止めた。

「……サーシャ・レヴィアスを？」

「ええ。お兄様は私と違って研究熱心ですから。ああ……勿論、貴方が望めば会わせて差し上げますわ。兄妹ですからね……ふふっ」

まるで嘲るように微笑んで、彼女は笑った。揺れる黒髪に漆黒の瞳。悪魔のような微笑みが高笑いに変わるのを、『ソレ』の気配は床に平伏したまま聞いていた。

体には疲労感が溜まっていた。まるで鉛を背負っているかのように体が重い。これが単に魔力を使い過ぎただけだってんだから、自分でも笑えてくる。

あの化け物から逃れて畑の横にあった林に逃げ込んだ俺は、細い木々に掴まりながら歩いていった。化け物はまいたみたいだが、サーシャの行方が分からないことには合流出来ない。

「くそっ……」

一度何処かで体を休めた方がいい。下手に動き回って、体力を消耗させても仕方ないだろう。派手に人の魔力を使ってくれたヴァルナに悪態をつきながら、俺は林の奥へと足を踏み入れた。

太陽は暮れかけていた。この地方特有の赤い夕日が斜めに差し込んでいる。ふと、道なき道を進んでいた俺は奇妙なものを見つけた。

「なんだ……？」

それは井戸か何かのようだった。石で積まれた円形の上に、木の板が乗せられている。枯れ井戸か何かか？

「……ん？」

近づいていった俺は、微かに板がズレていることに気づいた。最近誰かが動かしたかのように、地面の上に板を引きずった跡がある。

夕日が隙間から差し込み、微かに中を照らしていた。

「井戸じゃねえな……階段？」

俺は木の板を足で退かし、中を覗き込んだ。井戸に見えていたものは、どうやら階段のようだ。真っ暗な地下へと続く階段。俺は残った魔力で火を喚ぶと、足下を照らしながら足を踏み入れる。

化け物が徘徊してる麻薬畑の中で夜を越すくらいなら、ここに身を隠した方がまだマシだよな。

「っ、げほっ……んだよ、なんか臭うな……」

階段が半分のところまで来たところで、俺は異様な臭気に顔を顰めた。色んなものが混じり合った臭いが鼻につく。空気の循環が少ないのか、俺は鼻を摘んだまま辺りを見回した。

階段の下は部屋のようになっていた。下りたところには何かの作業用らしい長机と椅子、そして壁には古い本が並ぶ。ジジイの部屋みてえだな……。

机の上の壁には肖像画が張られていた。十数人の人間が描かれている。どれも金持ちっぽい正装を着込んで、ステッキなんか持っているやつもいた。

どこにでもある、貴族の肖像画。だつてのに、俺はこの絵を見て顔を顰めざるを得なかった。

「なんなんだ、いったい……」

絵の中央には、周りの年寄りに囲まれるようにして2人の兄妹の姿が映っていた。メイくらいの年のガキだ。妹はまるで貼付けたような笑みをしていて、兄の方は……。

「……」

俺は壁に突き刺さったナイフを取り、兄が描かれていたであろう部分を覗き込んだ。まるで狙ったかのようにそいつの部分だけ、ナイフが深々と突き立てられていた。

絵の状態を見るかぎり、そんなに昔に書かれたモンじゃない。そう考えると、この兄妹はサーシャの言ってたライラ・メーリングとラフィタ・メーリングか。だとすると、このナイフは……？

俺はふと部屋の奥に扉があることに気づいた。扉にはまるで爪で引っかいたような痕が無数に残っている。微かに開いた隙間から、異様なまでの濃い臭気が漂ってきた。

「一体、何が……っ!?」

扉に手をかけて中を覗き込んだ俺は、一瞬中を見ただけで身を引いた。寒気が体を駆抜ける。吐き気が込み上げて、俺は口元を押さえた。

部屋の中は、真っ黒に染まっていた。壁に物のように吊り下げられた、動物の死骸。切り貼りするかのように繋ぎ合わされた、もはや生命とは呼ぶことの出来ないモノ。腐りかけているのか、骨がちこちから見えていた。

「っ……」

ふと俺の中に、ついさつき戦った魔物の姿が浮かぶ。ヴァルナが言っていた、生命の縫合。種を越えて作り出された、あの獣。あれは此処で作られてるってことか。

いや、だとしたら、あれは……。

「……」

俺は口元を袖で覆いながら、もう一度扉を開けた。そして火で部屋の奥を照らす。俺は顔を顰めながら、それをはつきりと見た。失敗作の並ぶその奥、壁に掛けられた白い骸骨。下半身から動物のようなものに縫合されたそれは、確かに人の屍だった。

第4章 2

トウアス崩壊から長い年月が過ぎた。世界は知を失ったことにより寂れ、今や秩序は言葉だけを残し、消え去った。かつての強国もなりを潜めた……我らが大願を果たすのならば今が好機といえよう。実験の成功例から共通点を見だし、次こそは此処に我らが研究の成果をあげてみせようではないか。

- 日記は語る -

500年前、トウアスの力に屈した我らは、保有していた技術の全てを帝国に持ち去られた。当時の生命維持……後の不老不死に繋がる、我らが研究の芽を彼らはいとも簡単に摘んでしまったのだ。そして我らが余儀なくされたのは帝国への従属の道……しかしそれはリル・インの密輸によって完全なる支配を免れた。

そしてあの一夜の出来事から、我らは再びこの世を手に入れる力を求めてきた。帝国と共に消え去った知識を再び蘇らせるために、欠片を拾い集める日々。しかし、足りない、これでは何年経っても帝国の文明には辿り着くことができないのだ！

我らメーリング家の血筋も時によって衰え、同志ももう数えるほどしか残ってはいない。次の世代にこの研究の芽が出るのだろうか。嗚呼、何故世界は我々に祝福の光を与えて下さらないのだろうか。

「……」

巷では何処かの魔術師が、過去を知るための預言書を創ったという。馬鹿げた者がいたものだ。過去など知ってどうするのだろうか。トウアスが残した負の遺産は消えることはない。残された国々は第二の帝国の立ち場を巡って争いを続け……やがて共に疲労して幾つもの国が消えた。過去などくだらぬ。過去を知るくらいならば、未来を知る預言書を作れば良かったものを。

「……」

とうとう同志もいなくなり、我ら一族だけが残された。我らが持つのはこの麻薬畑と奴隷と、この研究のみだ。

先日、妻が子を生じた。兄と妹の双子だ。男が生まれてきたことに、我らは安堵していた。これで我らの大願は次へと繋がるのだ。

「……」

『飼い犬』が、かの預言書を手に入れてきた。エレンシアが手に入れんとした預言書の1つであるという。幸運なことに、かつて我らの祖先が帝国時代に築いた生命に関する知を持つ本。嗚呼、神よ。奴隷達の間には流行病が広がっている。丁度良い、この預言書を使う好機ではないか。放っておけば消えていく命。我らに管理された犬にもならぬ者達。其の命、使われてこそ意味を成そう。

「流行病……？」

……しばらく間が空いてしまった。いや、それもそうだろう。奴隷達の間には流行していた病が我ら一族をも襲ったのだ。あの犬ども

「ああ、くそ……吐き気がするな……」

足下が覚束ない。苛立ちを抱えながら、俺は大きく溜め息をついた。壁にもたれかかって息を吐くと、後ろに控えていたフィオがこちらの顔を覗き込む。気にするな、という意味を込めて手を振るものの、肺の中に澱むリル・インは簡単に抜けるはずがない。それよりも、と俺はもたれかかった壁から背を浮かせた。

「……フィオのおかげで見つけたものの……人気がないな」

メーリング家の屋敷は、まるで隔離されているかのように麻薬畑の真ん中に建っていた。道は一本、屋敷の正面に繋がっている道だけだ。

屋敷の周りには柵もなく、爺さんの屋敷よりも一回り小さかった。話に聞くメーリング家のイメージとは異なる、少し古ぼけた建物。どちらかといえば、幽霊屋敷というイメージが似合いだ。

「さて、これからどうするか……。……っ!？」

ふと、人の気配を感じて、俺は畑の中に忍び込んだ。丈の長い草の間に身を潜め、急に現れた人影を見つめる。フィオは姿を隠すように風の中に溶けて消えた。

(あれは……)

見覚えのある金髪、海の色をした碧眼。腰に収められたバレルが歩く度に腰からチラついている。険しい表情を浮かべたままの彼女は……サーシャ・レヴィアス。後ろには見慣れない男の姿がある。姿を消したフィオが警戒を促している。俺は無言のまま頷いた。彼女の後ろから姿を現したのはおそらくメーリング卿と呼ばれる、ラフィタ・メーリングだろう。話には聞いていたが、たしかに妹そっくりの顔だ。中性的な表情、男にしかくのは勿体ないくらい黒が似合う。まあ、勿論俺にそんな趣味はないし、中身が妹と一緒になら遠慮したいかな。

(フレイとあの剣士は……いない。……となるとあの兄妹の狙いはジェイロードとリリイなのか?)

彼女はラフィタに何かを問いかけ、ラフィタは何かを口にしていく。話の内容までは聞き取れない。リリイは少々不機嫌そうな表情をしているものの、殺気立った様子もなく、2人は屋敷へ入っていく。これはもしかすると、もしかするのかもしれない。

(下衆だなあ……あの2人を合わせるつもりか)

俺は2人の気配が屋敷の中に消えていくのを待つて、麻薬畑から顔を出した。屋敷の外壁から室内を覗き込む。2人は屋敷の奥へと去っていった。今が好機。

人気のない屋敷をもう一度確認し、俺は窓に手をかけた。目を閉じ、ガラスの表面を撫でる。するとまるで水が油を弾くようにそこに丸い穴が出来上がった。

「……よっ、と」

村にいた頃の俺は、フィオのおかげで召喚魔術の印象が強かった

ようだが、どちらかというところゆう細かい魔法の方が得意だ。魔術師ってのは細かいことに異常なまでにこだわる。その異常さが異常であればあるほど優秀であり、有能とも言われる。逆を言えば、大雑把なのは魔術師に向かない。

俺は硝子に開いた穴から手を伸ばし、窓の鍵を外した。音を立てないように窓を開け、屋敷の中へと侵入する。考えてみると魔術師は泥棒つてのも天職かもしれないな。

窓枠に足をかけて廊下に足を下ろすと、俺は目の前の部屋に忍び込んだ。あのリリイのことだ、俺の気配に気付くまでさほど時間はかからないだろう。サーシャ・レヴィアスとラフィタ・メーリング……あの2人からは距離を取りつつ、後を追わなければいけない。

人気のない部屋に足を踏み入れると、爪先が何かにぶつかった。カラン、と床に何かが転がる音が響く。一瞬背筋が凍ったが、どうやら2人には聞こえなかったようだ。

俺は胸を撫で下ろして、足下を見やる。すると今度は、寒気とは違うものが体から吹き出て体を冷やした。気配を消してついて来ていたフィオも、微かに顔を顰めている。

「……ちつ、事態は思ったより深刻そうだ……」

足下には骨になった人の屍が転がっていた。肋骨の辺りを剣で一闪されたかのように、その体は真っ二つに切れたまま。

何も語らない屍は、使用人というよりも執事のようなボロ布を身に纏っていた。

狂人は悪魔を作り、悪魔は悪魔を作り続ける。500年の長きにわたり、続いてきた狂気の実験。命と命の接合、種族の壁を越えた生殖。生まれていく歪なものたちは、そのどれもが短命だった。彼ら『研究者』達は、確実性を求め続け、大願成就の時を成した。いや、正確には成すはずだった。しかし希望の光と言える、次世代の『研究者』は病に倒れ、彼らは絶望したのだ。

「誰……?」

やがて彼らの実験は方針を変えた。途絶えた未来を繋げるために、未来を作ろうとし始めた。それも人間として、生き物として間違った方向に。

「ここは、ここは……何処?」

亡くなった光の名……それはラフィタ・メーリング。500年の妄執を受け継ぎ、『研究者』となるべき少年。メーリング家の子息生まれつき体が弱く、病に免疫を持たない彼の人生は15にも満たない年月で幕を下ろした。

「……鉄の、臭いがする」

妄執者達は彼を作る為に様々な材料を集め始めた。材料集めは専ら、麻薬畑で働く奴隷達の住処だった。

「誰か……そこにいる?」

それは悪魔を喚び出す儀式のようだった。部屋の真ん中には連れてこられた一人の子供の姿。子供には奴隷として、首にメーリング家の所有物の証である首輪が付けられていた。古い文字でそこに彫り込まれた言葉はサンダルフォン。

目隠しをされた子供は、ボロ布を纏ったまま辺りを見回していた。異臭の立ちこめる『研究室』、その壁際にはラフィタ・メーリング存命時に描かれたメーリング家の肖像画がかけられていた。

「あつ……」

どこかから伸びてきた手が、子供を手術台に押しやった。両手足を縛られ、拘束された小さな体。闇の中に光るメスだけが、全ての始まりと終わりを意味していた。

そして『彼女』の悲鳴が悪魔の儀式に木霊する。

扉が開く。私はただ他人事のようにそれを見ていた。客間と呼ばれたその部屋は、斜めに差し込む夕日を受けて仄暗く私達を迎え入れた。長く伸びる2つの影。部屋の中央にあるソファに後ろからもたれかかる黒髪の女の姿と、碧眼にあの人と同じ髪色をした男。

ケバケバしい色の絨毯に足を踏み入れて、私は部屋の中に足を踏

み入れた。彼は私を見ている。私もまた、彼を見ている。こうやって相手の前に立つのはエレンシア以来。

「……」
「……」

紫のカーテンが微かに風に揺れている。やがて私達の沈黙を破るように、ライラが口を開いた。

「……初めまして、かしら？サーシャ・レヴィアス」

私は視線を外して彼女を見た。よく見ると、確かにラフィタ・メーリングに瓜二つの顔だ。違っているのは、その手に握られた死神のような鎌……メタトロニオス。

私は口を開きかけて、そして辞めた。言葉にするのが億劫になった。

「あら……貴方の妹は声を持たないカナリアかしら。レヴィアス氏」

美しいだけで何も喋らないのね、と皮肉るようにライラは笑う。ジェイロードは反応する様子もなく、ラフィタは静かに入り口の扉を後ろ手に閉めた。

私は溜め息をつく。吐いた息は重く、客間の空気の中に落ちていく。

「……そうゆう貴女はカラスのようですが。それも五月蠅いぐらいに鳴く」
「……っ！」

私の皮肉はどうやらライラに勝ったようだった。彼女は整った顔

を歪ませ、こちらを睨みつける。握りしめられたメタトロニオスが怒りに揺れた。彼女の反対側の手には、預言書が握られていた。万物の章……そう書かれた背表紙に、私は後ろのラフィタを見やる。大鎌が空気を切り裂いた。くるりとジェイロードの横を一閃したメタトロニオスが、私の方へと向けられる。

「……お兄様。そろそろルミナリイの力とやらを見てみたいとは思いませんこと？一番楽しみにしていましたもの。ねえ？」

「……」

私は大鎌を見ていた。研ぎすまされた弧を描く刃。おそらく彼女はその鎌で私の体を切り刻んでやろうというのだろう。

ラフィタは妹の言葉に答える代わりに、ゆっくりと私から離れた。私は溜め息をついた。そしてジェイロードに視線を向ける。

「……」

メーリング家の目的は、私達の不老不死。おそらくジェイロードもまた同じように実験の研究対象としてここにいるのだろう。いや、預言書の所有者としてかもしれないが。

彼の碧眼は、何も語らない。ただその色がひどくカタリナに似ていて、私は腹の奥底に閉まった感情がふつふつと湧き上がるのを感じた。

吐き気が、した。

「……サーシャ」

ジェイロードが私の名前を呼ぶ。声を聴いたのも、私の名前を呼んだのも……全てカタリナの死んだあの日以来。低く響くような、『兄』の声。

ジェイロードは言った。

「……リボルバーを捨てる」

私は何も言わず、クロノスをジェイロードの前に放った。ライラが待ちきれないという様子でメタトロニオスをくるりと回す。今にも飛びかかってきそうな彼女を片手で止めて、ジェイロードは更にこう言った。

「ヒュペリオンもだ」

「っ」

無情な響きだった。それでも私は、舌打ち1つだけして、背中から取り出したヒュペリオンを投げ捨てた。夕日の照らし出す床板に、2つ目のリボルバーが投げ出される。

ジェイロードの視線は私を見ていた。その青い瞳だけで会話が出来たのは、遠い昔の話だ。正も否も、全てこの目で理解した。それも……憎しみの向こうに忘れ去った、幼い頃の話だ。

「……ふふっ、無様とはこのことかしら、サーシャ・レヴィアス」

2つの目が私を捉える。私は部屋の中央で静かに目を瞑った。ライラの高笑いの中で、メタトロニオスが風を切る音。

第4章 3

わたしはただ、連れてこられて何も教えられずに部屋に運ばれた。わたしは何も知らなかった。わたしはただ、何も知らずにされるがままだった。わたしはただ、時間が過ぎていくのを待った。天井を見つめながら待った。わたしにはただそうしているしかなかった。わたしは、その時まで確実にわたしだった。そのときまでは……。

- m a d t o o b s e s s i o n -

大鎌の一閃は一度きりだった。弧を描いて振り下ろされた刃が、途中で阻まれる。ライラはハッとして私を見た。驚くのも仕方ない。先ほどまでそこにあっただ姿が、間合いの更の中に入り込み、ライラの眼前で振り下ろされるメタトロニオスの柄を掴んでいるのだから。肩で揺れる金の髪。夕日に鈍く光る鎌を掴んで、私はライラを見上げる。

「……実験とはいえ、痛めつけられるのは御免被りたいですね」

私はそう言うと、柄を思い切り腕で弾いた。尋常ならざる技を持つライラ・メーリングとはいえ、所詮は女。私の力に軽くバランスを崩して後ずさる。

「それよりも私は『魂の共有』とやらを見てみたいものです」
「も、モルモット風情が何を……っ！」

彼女がそう騒ぎ立てたとき、その脇腹を轟音が駆抜けた。ライラ・メーリングの体が弓なりになり、力が抜ける。赤い血が噴き出し、床板を濡らした。咄嗟にメタトロニオスを杖にして踏みとどまった彼女は、驚いたように後ろを振り返る。

振り返る彼女の視線と反対に、銀色のバレルが放物線を描いて私の手元に落ちてくる。私は力チャリと音を立てて銃口をライラに向けた。そして背後では全く同じ体勢で、ジェイロードがヒュペリオンを手にしている。その照準は私の後ろにいるラフィタだった。

「……どうやら悪趣味という点では我々の方が上手のようですね」
「なっ……！いつから協力関係に……!?」

ライラが目を見開いてジェイロードに視線を向ける。しかし彼の視線がライラに向けられることはない。彼の照準は、ラフィタ・メーリング。敵と決めた人間から視線を外してはいけない。それが私の……私達の、ルール。

「協力関係になったつもりはありませんよ。……モルモットになる気はないという意見が一致しただけです」

私はクロノスを構えたまま言う。

「私達は互いが憎い以上に、自分のことが大事な人間ですから。……インセスト的な愛情を持つ人間は見ていただけで吐き気がします」
「……ふっ。ふ、……ふふっ……」

ライラは脇腹に広がった血の染みを抑えながら、私を睨み返した。ジェイロードは自分の懐から愛用のリボルバー、カイロスを取り出し、クロノスを私の方へと投げた。これを返して寄越すということは、おそらく注意を促しているのだろう。

ジェイロードの考えが分かかってしまふ自分に苛立ちながら、私はライラの言葉に耳を傾ける。

「貴女達も……ルールなんてものに縛られてるのね……可哀想な人たち」

フラフラとライラはラフィタに近づいていく。ジェイは静かにカイロスの引き金に指をかけた。見ると、ラフィタの手にはいつの間にか双剣・サンダルフォンが握られている。私は右手にクロノス、左手にヒュペリオンを構えたまま、メーリング兄妹の動きを警戒する。

「お父様は、おっしゃったわ……。この世界に、タブーなどない……不可能などないのだと」

ライラは天を仰ぐようにそう呟く。私はチラ、とその後ろにいるラフィタを見やった。

タブー、ルール……その全てをライラ・メーリングは否定している。確かに、その言葉の全てが間違っているわけではない。人を殺してはいけないというルールがある一方で、人殺しはこの世に数えきれないほど存在している。そして人殺しを裁くために死刑という言葉もまた、存在している。

タブーなどというものは、個人個人の割り切る場所で変化する。その曖昧な値が重なり合う部分をそう呼ぶのだ。少なくとも私はそう思っている。だが……この、違和感は何なのだろう。何かが引っかかるこの……感覚は。

「そんなもの、に……囚われている貴女達は……っ、……可哀想ね」

ライラは兄に同意を求めるように後ろを向く。しかしラフィタは何も言わず、ただ静かにサンダルフォンを握りしめる。

ラフィタの視線は、静かに私達を見ている。ジェイロードがふと、何かに気付いたように眉を動かした。

「っけれど……、それが分からないというのなら……」

この者達に死を。

そう聞き取れた言葉は、僅かだった。

たとえば、生きながらにして自分の墓を見た人間の気持ち、君は知るだろうか。墓を目の前にして泣き崩れる母、その肩を抱く父、手向けの花を握りしめたまま唇を噛み締める少年。夕日に長い影を作る墓石は、静かに彼らを見守っている。たとえその下に、あるべき遺骨がなかったとしても。

「あ……」

呟いた言葉はそれだった。耳障りな、他人の声だった。何かを言わなければと、喉元まで出かかった言葉は温い風が攫っていった。麻薬畑の草原が揺れる。

やがてこちらの気配に気付いたように、父が振り返る。その目は悲しみから、すぐに畏怖の色に変わった。

「あ……っ!!」

慌てたように、両親は地面に額を擦り付けた。少年もまた、2人を習って同じように頭を下げる。大人と違い、彼はどこか納得出来ない表情を浮かべていた。

「い、ご病気から回復されたのですねっ……。わ、我々も、喜んで……っ」

母はそう言いながら、言葉に詰まった。頬を流れる涙が、悲しみのものだと気付くのは簡単だった。

私は、必死に頭をすりつける両親の肩に手を伸ばそうとした。違う、その子は死んではいない。その下に遺骨も何も存在しない。していたとしたら、それはどこか別なところから持ってきた、別な者の骨。

肺の奥底に、モヤモヤとしたものが溜まった。吐き出したいのに吐き出せないのは、何故なのだろう。この体が……自分のものではないせいだろうか。

「も、申し訳ございません……」

怒っているように見えたのか、父がこちらを見上げて、再び頭を下げた。それを隣で見ていた少年が、堪えきれなくなったように立

ち上がる。

「なんで……なんで謝るんだよ、おじさんっ」

こんなやつに、と少年はこちらを指さした。思わぬ行動に、母が少年の腕を掴んで頭を下げさせようとする。

「どうしてだよっ、なんでだよっ!!こいつも同じようなもんじゃないか!こいつらが、連れていったんじゃないか!」

母の手を振り切り、少年はこちらに駆寄った。忘れ去られた手向けの花が、地面に落ちる。

次の瞬間、子供ながらに鋭い拳が左頬を打った。バランスを崩して倒れる体。私を追ってきた者達が、すぐに気付いて少年を取り押さえた。

「絶対許さねえ……」

少年はもがきながら、ひたすら吠え立てる。最後に叫んだ言葉が、私には一番深い傷を追わせた。

「ラファイタ・メーリング!」

私を捜しに来た使用人が、私の体を抱き起こした。私はしばし呆然としていた。いや……呆然とていたが、口は全く違う言葉を吐き出していた。胸の中に溜まったものを全て、別な色へと変えて。

聞き覚えのない、自分の声言う。

「目障りな奴らだ。……殺れ」

世界が、壊れる音がした。

空気を吐き出す音だけが、その場に響いた。次いで聞こえたのは、転がり落ちた首が床にぶつかる音。噴水のように吹き出した血の雨が、銃口を濡らした。

私は目を見開き、そしてジェイロードは眉を顰めていた。今、目の前で起ったことをただ言葉にするのなら……二本の刃が、後ろからライラ・メーリングの首を飛ばした。それだけだった。

驚きを隠せない私の横で、ジェイロードが言う。彼のカイロスを持つ腕もまた、ライラの返り血で真っ赤に染まっていた。

「……錯乱したか、ラフィタ・メーリング」
「ふっ……」

状況を理解したかのように、血を噴き出していたライラの胴体が崩れ落ちる。その後ろで返り血を浴びた男……ラフィタは、静かに私に視線を向けた。

「種明かしをしようか、サーシャ・レヴィアス嬢」
「……！」

名前を呼ばれ、私は我に返ってクロノスとヒュペリオンを握り直

した。生暖かい血液が指先を滑って落ちていく。ラフィタは私に向かつて苦笑すると、ジェイロードにも視線を向けた。

「……ラフィタ・メーリングは十数年前に既に死んでいる」

私は顔を顰めた。ラフィタ・メーリングが既に死んでいるとはどうゆうことなのか。ジェイロードはカイロスの銃口を相手に向けたまま、静かに問いかける。

「……どうゆうことだ」

「言ってしまうえば簡単だろう。此処にいるのはラフィタの偽物……いや、ラフィタの皮を被った別人ということだ」

2つの声のやり取りを聞きながら、脳裏には私に『真実』を教えた時の彼の言葉が蘇っていた。歪んだ答えを真とする世界、歪んでいるのはこの世界。

先ほど感じた違和感はこれだったのだろうか。ライラの謳う言葉とラフィタの発した理想には、微妙な差異があった。タブーを否定する妹と、歪んだ世界すべてを否定する兄。いや、兄の偽物。

「父は幼くしてなくした息子を、実験によって作り出そうとした。材料になったのは同じ年の奴隷の少女。実験は成功したが、別の意識が入り込んだこの体では『魂の共有』など出来るはずもなかった」

淡々と語られていく彼の言葉。私は改めて彼を見る。確かに、最初に見た時は中性的な顔つきだと思ったが、体つきも骨格も、全て男だ。ならばメーリング家は、時の止まったラフィタの体に、まだ機能の死んでいない少女の臓器を繋げたのだろうか。預言書……万物の章によって得た知識で。

「……『魂の共有』は、父の理想だった。物心つく前から何度もその理想を聞かされたその女は、妄執者どもと同じ人間でね。兄に溺愛し、兄が死んだことを認めず……そして私と魂が繋がっているのだと言い出した」

最初から、その女は壊れていた。そう言いながら、ラフィタの皮を被った何者かは、赤く染まったライラの体を爪先で軽く蹴った。

「ジェイロード・レヴィアス。君が見た『魂の共有』は、私の魔力と彼女の自作自演で出来ていた。……どうだったかな、偽りの『魂の共有』は？」
「……」

ジェイロードは相手を睨みつけた。殺気がその場に満ちる。それは合図だった。戦いの火蓋が切つて落とされるサイン。
しかし私は、それを無視して呟いた。

「あなたは……貴方は、取り乱すことをしないのですね」

二人の目が私に向けられた。ラフィタは微笑む。冷たい表情で。

「狂っている……」

「ふっ……それなら取り乱すのが正常な人間だろうか。もしかしたら狂っているのは貴女の方かもしれない」

「！」

「考えたことはないか？サーシャ・レヴィアス。……貴女はなぜ兄であるジェイロード・レヴィアスだけではなく、『過去の預言書』をも追うのか」

微笑むその漆黒の瞳が、私に寒気を起こさせた。

ラフィタはそれ以上のことを言わなかった。それでも彼が伝えようとした言葉は私の中に響いてきた。此処は理なき庭。正も否も分らない闇の中。何が間違っていて、何が正しいというのだろうか。

「……それでは始めようか、レヴィアス兄妹？」

左手に握りしめたヒュペリオンが揺れている。

第4章 4

ラフィタが双剣を床板に突き立てると、仄暗かった屋敷の中に炎が燃え上がった。紅蓮の炎が鳥の形を作り上げる。そして地面を突き上げるような振動に誘われるように、黒い影が現れた。クリフさんを追ってきたあの異形の生き物。

カーディナル、そしてキメラとラフィタは呼んだ。魔物という言葉の相応しい、実験体。私はその醜さに苛立ちながらも、同時にその美しさ后感嘆していた。

- メガロマニアック -

私の行動はすぐに決まった。キメラと呼ばれた魔物の攻撃を避けながら、こちらに向かってくるカーディナルに向けてクロノス方向ける。ジェイロードは勿論私の助太刀をすることなく、ラフィタだけをターゲットと決めたようだった。

キメラの鋭い爪が私の横を通り過ぎる。私は舌打ちをした。間合いが近過ぎる。銃弾一発程度で死なないこの獣を相手に、この距離は危うい。

「っ……」

私は巨大な獣の体の下に入り込み、背後へと抜け出した。しかしそこには謀ったようにカーディナルの姿がある。劫火の炎が目の前を覆う。攻撃を避けるだけで精一杯だった。

本来、剣のような武器がなければ近距離戦は私の担当ではない。

私は辺りを見回し、窓際へと転がり込む。バルコニーに続く大きな窓。キメラがこちらに突進してくる。私は直前でそれを避けた。窓硝子が衝撃で散乱し、窓枠が音を立てて外れる。

「くっ……」

キメラの巨体はバルコニーの手すりを半分破壊した状態で止まっていた。私はクロノスを腰に収め、散乱した窓硝子の中の1つを手に取る。細長く、鋭利な硝子。暮れ始めた夕日を反射する、透明な光。

クリフさん達を襲ったというその魔物は、獅子の2つの頭、そして金属で出来た羽根を持っていた。下半身は蛇を思わせる。これが創られたものだというのならば、急所はおそらく……それぞれの結合部。

私はしっかりと硝子の破片を握りしめる。血が流れ落ちると、キメラが呼応するように低く威嚇の唸り声をあげた。

部屋の中にはキメラが出現した大きな穴が空いていた。まるで地獄へと続くかのような巨大な空洞を避け、ラフィタはジェイロードへと斬り掛かる。二本の剣をジェイロードはカイロスで受けとめた。

「……っ」

攻撃を弾き返し、ジェイロードは眉を顰めた。ラフィタは一度体勢を立て直すと、息つく暇もなくジェイロードに斬り掛かっていく。攻撃を避けながら、彼は後退していた。

ジェイロードは顔を顰め、そして最後の一撃を再びカイロスで受けとめる。金属の耳障りな音が部屋の中に響いた。ジェイロードは相手を睨みながら、静かに言う。

「……下は地下道か」

足下にはキメラが這い出てきた巨大な穴が空いていた。その下から微かに空気の流れが感じられる。

思えばシルヴィ、アイルークと共にライラの襲撃にあったとき、彼女達が何処から現れたのかという疑問があった。しかし、農耕用の地下通路があったと考えれば合点がいく。この庭に足を踏み入れるから奴隷の姿を見ないのも、そのせいなのだろう。

「ふっ……半分は正解というべきかな」

ラフィタはそう言って笑った。

「正確には其処は奴隷用の通路とは別なもの。……妄執者達の失敗作の墓場、というべきだろうか」

漆黒の瞳で空洞を映す。その視界にはジェイロードの姿も映り込

んでいた。一度剣を離して距離を取るとラフィタは不気味な笑みを浮かべた。

「……『ルミナリイ』になることのできない君には似合いの場所ではないかな？」

「！」

次の瞬間、ジェイロードの足下に細長いものが巻き付いた。穴から伸びるそれは、蛇の胴体で、ジェイロードを空洞の中に引きずり込もうとするかのように、闇の中へと引き寄せていく。

ジェイロードはカイロスの銃口を足下に向けた。1発、2発と銃声が響き渡る。しかし蛇の体はびくともせず、徐々に彼の体を穴へと引き寄せていった。どうやらこの蛇はキメラやカーディナルとは違い、魔術によるものらしい。

床石の破片がパラパラと空洞から下へ落ちていく。

「……私に必要なものが、これで全て揃う……」

ラフィタの眩きに、ジェイロードは顔を上げた。横目でバルコニのサーシャを見やる。

「……あれも、お前にとって必要なものか」

サーシャは散乱した硝子の中から一番長く、鋭利な一欠片を手にして立っていた。その背中は夕日に照らされ、キメラを前にしても物怖じする様子すら見えない。しかし次の瞬間、その姿を隠すように彼女の背後にカーディナルが襲いかかった。

ジェイロードは再びラフィタを見る。ラフィタはくつくつと笑った。

「彼女が何なのか、君は少なくともライラよりは知っているはずだ」
碧眼で睨みつけ、ジェイロードは無言のままラフィタを見る。ラフィタは鼻で笑って見せた。

「君は彼女を利用しようとは思わないのか？ジェイロード・レヴィアス。……『兄』という権限を使えば、いくらでも服従させられたものを」
「……」

ジェイロードは無言のまま足下を見やった。ずるずると蛇の体が穴の底へと彼を導いている。何かを考えるようにジェイロードは目を閉じると、カイロスの銃口を下ろした。ホルスターにカイロスの銀色の銃身が収まる。

すう、と息を吸う。そして静かに吐く。

「……どうやらお前は既に壊れてしまっているようだな」

夕焼けが斜めに差し込んでくる。ジェイロードの横顔を照らすその光は、その影をはっきりと映し出した。その次の瞬間、床に映し出された影の後ろに、もう一つの影が現れる。

「……っ！」

影は風に舞うように、ジェイロードの周りを1周した。その刹那、切り裂かれたかのようにその足を縛り付けていた蛇がかき消える。ふわりとその場に姿を現したのは、フィオの灰色の体。ジェイロードの前に立ちはだかった鈴人は、冷たい眼差しで壊れた人間を見つめていた。

ジェイロードは深い溜め息をついて呟く。

「随分遅くなったな。どこで道草を食っていた、アイルーク」

戦いに身を投じることに恐れを抱かなくなったのは何時だっただろうか。私はそう思いながら硝子の剣を握りしめた。傷を負ってもやがて消える、特殊な体。不完全だと思っていたこの不老不死。それが完全なものだというのならば……私は人ですらなくなるのだろうか。

「……馬鹿らしいですね……」

私はそう呟いた。呟きながら、何に対して馬鹿らしいと感じているのか分からなかった。

なぜジェイロードではなく、『過去の預言書』をも追うのか。ラフィタの発した言葉が、まるで呪いの言葉のように頭の中を巡っていた。

それは、預言書を追っていった先にジェイロードがいると信じていたからだ。あの男が簡単に死ぬわけがない。預言書を手に入れるのはジェイロードをおいて他にないと……そう、知っていた。それは客観的な目で見ても明らかなこと。だからこそ、私は預言書を追った。

キメラの体が跳躍し、バルコニーに転がり出た私に襲いかかる。私は後ろに下がると、剣を構える姿勢になる。

「……」

狙いは2つに分かれた獅子の頭。つなぎ目を睨みつけ、私は一気に距離を詰めた。鋭利な硝子の破片を縫い付けられたつなぎ目に食い込ませる。力を込めて斬りつけると、縫合された場所が大きく開いた。しかし、足りない。

キメラは咆哮しながら前足を振り上げる。私は咄嗟に後ろへ引こうとしたが、その足が止まった。背後に赤く燃える炎の鳥、カーデイナルが現れる。私は再びキメラへと視線を戻した。この攻撃、受けるしかない……！

「……っ」

その刹那、微かにある記憶が脳裏を擦った。果てなく続く荒野を歩く親子。見覚えのある光景だった。今まで何度も見てきた、母と兄との旅路。それでも違和感を覚えるのは、そこにある何かが違うからだろうか。

少し先を歩く、幼い日の兄……ヒュペリオンを腰に下げ、長い髪を揺らす精悍な顔つきの母……そして、遅れて歩く私に気付き、振り返って手を伸ばす黒い影。

あれは……。

「サーシャ……！」

聞き覚えのある声に、私は我に返る。ハッとしてキメラを見ると、バルコニーを這うようにして伸びてきた太い蔦が、その体を縛り付けていた。私は咄嗟にバルコニーの手すりへ転がる。次の瞬間、力

ーディナルの吐き出した紅蓮の炎がキメラを襲った。

私はバルコニーから背後を見やる。そこには、屋敷の前に立つフレイさんの姿があった。隣に浮かぶのはヴァルナだ。だとすれば、この鳶は彼の力によるもの。

フレイさんはいつもの様子で私に怒鳴りつけてくる。

「てめ、この……っ、一人で何処行ってやがった、サーシャ！」
「……」

その台詞を聞くかぎり、どうやらクリフさんのことは知らないのだろう。私は背後に背を向けて、そして言った。馬鹿らしい、と小声で呟いた後。

「……ヴァルナにカーディナルを任せます。あれは私では倒すことが出来ませんから」

「反省の言葉もなしか！オイ！」

鳶によって拘束され、炎に妬かれた魔物は、のたうち回るようにして暴れていた。私は体勢を立て直し、硝子の剣を握りしめる。

叫び声をあげたくなった。しかし声は私の喉で止まったまま、空気にもならなかった。

夕日がやがて夕闇に変わり、部屋の中には白く浮かび上がる灰色の体の女の姿が浮かんでいた。鳥のような両腕が羽ばたくと、血の雨が部屋の中を濡らしていく。俺は静かにジェイロードに歩み寄ると、膝が抜けたラフィタ・メーリングを見下ろした。

「理なき庭、か……」

一階で殺された使用人の屍を見つけた後、廊下に潜んで話の大部分は聞いていた。理とか、正否とか……まあ、分からなくもない話だ。何が正しくて、何が間違っているのか……そんなものを考えれば考えるほどに、人は壊れていく。

虫の息になったラフィタの前に佇んでいたフィオが、俺の横へと戻ってきた。あとは全てジェイロードの命令次第だ。俺に殺せと言うならそうするし、自分で殺すのならばカイロスを手にするはずなのだから。

ふと、暗くなった部屋の中に、硝子を踏む音が響いた。俺はハツとしてそちらを見やる。そこには、手にしていた細長い硝子を放ったサーシャ・レヴィアスの姿があった。血に濡れた硝子の剣は、強度が限界まで達していたのか、床に落ちると同時に砕け散る。

彼女の足取りはしっかりしていた。腰のホルスターからクロノスを取り出すと、手の中で一回転させて銃口をラフィタに向ける。

「歪んだ世界に固執することはないと、貴方は言いましたね。ラフィタ・メーリング」

「……」

言葉を発することなく、ラフィタは視線だけで彼女を見つめていた。夕日の最後の光を背にして銃口を向ける彼女は、なんの感慨も持たないような顔で口を開いた。

「この世界は歪んでいる。……ですが誰にも、この世界が歪んでいるのか、私が歪んでいるのか推し量ることは出来ないのです」

誰にも。そう言いながら、ルミナリイは笑っていた。それは慈愛の笑みでも、嘲笑の笑みでもなく……背筋の凍る、意味のない笑い。微かにフィオが警戒を示す。それでも俺は既視感を覚えていた。彼女……サーシャ・レヴィアスは銃口を構え、そしてラフィタを見下ろした。最後の一瞬まで、その笑みは消えることなく。

クロノスの鋭い銃声が、メーリング家の妄執に終わりを告げた。

第5章 1

息を切らしながら階段を駆け上がり、サーシャのいる部屋を目指した。人気のある部屋の扉を蹴り開けると、そこには4つの影がある。ジェイロードとアイルーク、血を流して倒れた男……そして俯いたままのサーシャの姿。
闇が、辺りに満ちていた。

- 深淵の闇 -

「っ！」

部屋に足を踏み入れた瞬間、俺はそこに満ちた気配を察知して咄嗟に身構えた。フィリオオーネ……ジジイの召喚する蛉人の次に強いと言われる、あのフィオの魔力が部屋の中に残っている。

万物の章を手にしたジェイロード達を見て、思わず臨戦態勢をとった。するとサーシャが俺の名前を呼ぶ。

「フレイさん」

「っ……なんだよ、コレはどつゆづことだよ？」

サーシャは俯いたまま、隠すように片手で顔を覆う。大きくため

息を吐くと、静かにクロノスをホルスターに収めた。

「互いにイレギュラーがあったということです。……ここはお互いに引くべきということで意見が一致しました」

全然理解出来ねえっつーの。俺はサーシャに歩み寄り、床に倒れた男とバルコニーに転がった2つの獣の死骸を見つめる。

ふと視線に気付いて顔を上げると、サーシャが無表情のままこっちを見つめていた。

「?……なんだよ」

「いえ……その分ではクリフさんの件を知らないようですね」
「はあ？」

俺は首を傾げた。そういや、クリフのやつは何処にいったんだ。あの実験室のような場所からこの屋敷まで、クリフの姿を見かけなかった。サーシャはそれ以上何も言わず、ジェイロード達に視線を向けた。

ジェイロードとイルークは俺たちに背を向けて部屋を出ようとしている。イルークは俺と目が合うと、あのムカつく笑みを浮かべた。

「……んだよ？」

「んー?……リリーのナイトにしちゃ、随分遅い登場だなあと思っ
てさ」

「!てめえっ」

キレる俺を横目に、イルークは廊下へ消える。そしてジェイロードもまた、一度だけサーシャを見たものの、興味を示すことなく去っていった。

俺は拳を握りしめながら、アイルーク達が去っていった方向を睨みつける。しかし頭に血が上ったのも一瞬だった。俺はふとサーシヤに視線を向ける。いつもなら毒舌の1つや2つ口にするはずのサーシヤが、何も言わない。

俺は苛立ち混じりに言う。

「……で、万物の章をあいっ等に渡して良かったのか？」

「……」

俺の言葉を見無視して、サーシヤは部屋の真ん中に空いた巨大な穴を見つめていた。暗闇の中にぽっかりと浮かんだ空洞は、そこが見えないくらいに深い。サーシヤはじっとそれを見つめていた。その横顔は髪に隠れて見えない。

「おい、黙ってないで何か……っ!？」

そう言いかけた瞬間、サーシヤの体が斜めに傾いた。まるでそうあるべきであるかのような、自然な動作だった。足を滑らせるのではなく、意図的に倒れ込むような、そんな倒れ方だった。

何をどうしたのかは覚えていない。咄嗟に体が動いた。何かを考えるより先に、俺はサーシヤの手を掴んでいた。

右手に重い負荷がかかった。それでもなんとか落下の勢いで手を滑らせることなく、サーシヤの手を繋ぎ止めることが出来た。

「ばっ……何やってんだ、この馬鹿!!」

サーシヤの体が闇の中に揺れている。この空洞は、一体何処まで深いのか。落ちたらひとたまりもない。

長い沈黙。もしや意識を失ったのかと思ったが、サーシヤは長い長い溜め息を吐いた。そして足下に広がる深淵の闇を見つめながら

呟く。

「……………別に落ちたくらいで死にませんよ」

「んなこと最初から知ってる！」

コイツは斬られても死なないバケモンだから、俺みたいに落ちて即死なんてことはまずないだろう。それでも、自分から飛び込もうとするのは馬鹿だ。いつもは俺の方が馬鹿だの何だのと言われているが、今回ばかりはコイツが馬鹿だ。

「なら、さっさとその手を離してくれませんか」

「馬鹿言うな！ふざけてる暇あったらさっさと登ってこいっ」

俺の力では、引き上げることは難しい。何よりサーシャに登ってくる気がなければ。

「ルミナリイ……………『先覚者』、『知の申し子』か……………」

「何ワケ分からねえこと呟いてんだよ！早く……………」

穴の中に浮かぶ白い体は、すぐに闇に絡めとられてしまいそうだった。繋ぎ止めている手が痺れる。徐々に手と手が滑り、俺はサーシャの指を掴む形になっていた。

それでもサーシャに焦る様子は微塵もなかった。むしろ、生気のない様子で呟く。

「フレイさん……………私はどうやら、カタリナの子ではないそうです」

「ハア！？お前、何言ってる……………」

俺がそう言った瞬間、握りしめていた手が微かに握り返してきた。俯いていたサーシャがはつきりと俺を見る。闇に浮かぶ碧眼。そし

てサーシャは言った。

「……しばらく、一人にしてもらえませんか」
「！」

手が。

手が、振り払われた。

「っ、……サーシャっ！！」

白い体が深淵の闇に落ちていく。振り払われた腕が、虚しく宙をかいた。叫んだ声は漆黒の闇の中に消え、そしてサーシャの姿も見えなくなる。俺は何度も、その名前を叫んだ。

……そしてサーシャは、俺の前から姿を消した。

Stage of extra

Stage of extra

「第5部予告」

夢を見た。それは温かな家族の夢。

小さな畑に種を蒔く姉、庭で洗濯をする妹。姉は家の前を通りがかった近所の住人と会話を交わし、妹は近くに寄ってきた野良猫に向かつて手招きをしている。誰かの鼻歌が聞こえてくるような、長閑な田舎の集落の午後。

空から照らし出す太陽は柔らかい光を地上に送ってくれる。秋色に染まった草原が、黄金の穂並みのように揺れている。

僕は草地に転がって、ウトウトと空を見ていた。姉さんの世間話は絶え間なく、野良猫と遊ぶ妹は楽しげに声をあげている。草木が揺れる音が耳に心地良い。そんな……夢を、見た。

「……………」

目を覚ますと、そこは薄暗い部屋だった。カーテンの隙間から白い光が差し込んでいる。僕はベッドの横の窓を開けて、そして外を見つめた。暗くて、空気の悪い街。下を見下ろすと昨日から裏路地に住みついた老人が、ぼろぼろの布を頭まで被って眠っている。

僕は空を見上げた。夢の中のような温かな太陽はそこにはない。

「……………」

ふと、ドアをノックする音が聞こえて、僕は振り返って応えた。扉が開いて、廊下からも朝の光が差し込んでくる。

「おはよう、クリフ」

部屋の中を覗き込んで、彼女は笑った。その笑顔は夢の中の姉さんにも妹にも似ていなかったけれど、何故か少しだけ懐かしいような感じがした。

陽が昇れば、この街にもあの太陽の香りがするかもしれない。そんなことを考えさせてくれるような笑顔だった。だから僕も笑って答える。

「おはよう。……シルヴィ」

Next Story

「Sanatorium」

僕等は叶わない夢を見る。

第1章 1

砂埃と塵の舞う街。道にはごろごろと浮浪者が転がり、世も末の風景が日常だった。汚い空気に海の匂いが混じって、鼻孔に残る。旅人も長居を避けるこの街。

それでもこの場所が、この街が、僕の……僕等のひとときの居場所だった。

- 戻らない幻影 -

灰色の建物を白く染める朝焼け。僕はこの街でも一等大きな建物の前で箒を片手に大きく深呼吸をした。まだ辺りに人の影はなく、浮浪者達もまだ毛布に包まったまま眠りにについている。僕は箒を門の裏に立てかけると、白い息を吐きながら建物を見上げた。

石造りで少し古びたサナトリウムは、朝の光を真正面から受けて輝いている。反射する窓の光が眩しい。上の方を見上げていると、建物の影から足音がしてきた。

「おはよう、クリフ」

「ガセトさん」

顔を出したのは、ガセト・パンドロスという、このサナトリウム専属のお医者様だ。白髪に恰幅の良い格好をしていて、常に白衣を

身に纏っている。ニコニコと笑う顔には笑い皺がしつかりと刻まれている。

ガセトさんは門の前に立っていた僕と立てかけられている筈を目にして、苦笑してみせた。

「……何も、無理をして此処の手伝いをせんでも良いのだよ」

「いえ、でも……危ないところを助けてもらったのに、何もお返しが出来なくて……」

僕はそう言つて視線を落とした。ガセトさんはフフ、と笑う。

「そんなことを言つたら、私は此処の患者全てから謝礼を貰わなければいけないなるな」

「あ……。……えつと」

僕は建物の窓に視線を向け、そして言葉を無くした。

そう、あの日、サーシャさんの弾丸を受けて倒れた僕は、運良く通りかかった奴隷達に見つかった。そして此処に運ばれたんだ。此処は港の近くにある、奴隷専用の病院……。その療養所。ガセトさん曰く、本当は普通の病院だったらしいのだけれど、畑の付近で倒れている奴隷達を助けたことがきっかけで、病気や怪我をした奴隷達の駆け込み寺になつたらしい。

「良いのだ。私が好きでやっていることなのだから」

何度も言われたその言葉に、僕はジンとしてしまった。旅をしてから、殺伐としたものばかりを見て、残酷なものに触れてきた。だからこんな優しい人に出会えるなんて、思いもしなかつたんだ。

「それに……。私が救える人間は、あの『庭』で亡くなる奴隷達のほ

んの一握りでしかない」

ガセトさんはそう言って畑のある方向を見つめる。まだ薄暗いリル・インの畑が、建物と建物の隙間から広がっていた。

此処に運ばれる奴隷達は殆ど働けなくなつた者が多い。原因は怪我、病気、過労……放つておいてはただ飯食いになると、メーリング家から追い出されて此処に来る。健康な者はあの『理なき庭』で働き続けることを運命づけられる。逃げ出すことは……許されない。僕は朝の光に目を細めた。メーリング家……今、あの『庭』はどうなっているのだろう。いくら悪名高い彼らとはいえ、何事も起らないわけがない。あの2人が、あの場所で再び出会つたとするならば。

ふと、僕は昇り始めた太陽を見てハツとした。いけない、食事の時間になつてしまう。

「あつ……僕、行かないと……っ！」

慌てて走り出した僕に、ガセトさんは苦笑した。

「彼女なら、二階の個室だ。……早く行ってあげなさい」

サナトリウムの中は、療養所とは思えないほど汚れている。病室には収容可能人数を越えた患者達が転がっていて、廊下には比較的軽傷の奴隷が治療を待っている。朝も晩も、この施設にはあってないようなもの。医師達は常にあちらへこちらへと走り回っている。でも……ここで助かる命はほんの一握りでしかない。

僕は廊下に寝転がった患者達を避けて歩きながら、二階の個室へと向かった。あそこは病室ではない。彼女のために、ガセトさんが貸してくれた物置のような場所。僕は部屋の中に駆け込むと、息を切らしながら言った。

「す、すみませ……！下で玄関の掃除をしてたら、遅くなっちゃって……っ」

はぁ、と大きく深呼吸をして部屋の中に視線を向けると、病室で使わなくなったベッドの上に1人の少女が座っていた。緑色の長い髪が胸の辺りまで伸びている。白い両手は食事のトレイを持ったまま、瞳はじっとその中身をみつめていた。

少女の目の前に立っていた男の人が言う。

「……ああ、やっと来てくれた。やっぱりキミがいないと食事をしないんだ、彼女は」

「すみません、レンナートさん。あの、……知らない人ばかりで、緊張してるみたいで」

僕は2人に近づくと、少女の方に視線を向けた。皿に乗せられたパン、そしてミルク。静かにそれを見つめる目は、人形みたいに穏やかだ。……そう、人形みたいに。

男の人はガセトさんと同じ白衣を身につけていた。彼の名前はレンナート・ラハティ。医師の中でも最年少で、ガセトさんから信頼の厚いお医者様だ。僕とは歳が近いから、何かと話もしやすい。

レンナートさんは苦笑してみせる。

「そうか……まあ、少々言語障害のようなところもあるから仕方ないんだけどな」

「そ、そうなんですよね……はは、ははは……」

話がしやすいと言っても、彼女のことはやっぱり話せないんだけど……。

「……」

ふと下を見ると、食事を見つめていた彼女の目が、こちらを見ていた。透き通った硝子玉のような瞳。僕は息を吐いて、レンナートさんに視線を向ける。

「……すみません、ちょっと2人にしてもらってもいいですか？」

「ああ。じゃあ、食事が終わったら下に食器を持って来てくれ。…

…それじゃあな、シルヴィ」

レンナートさんはぼんぼん、と彼女の頭を撫でると、部屋から出ていった。僕はそれを見送って、改めて後ろを振り返る。物置の小さな部屋に申し訳程度に置かれたベッド。その上に座っている彼女の姿はどうしても違和感があった。

彼女は食器のトレイを自分の隣に置くと、僕を見上げる。

「……クリフ、遅い。シルヴィ、待ってた」

朝の光が開かない窓から差し込んでいる。彼女……シルヴィは眩しさに目を細めることもなく、そう言った。

どうして僕がシルヴィと一緒にいるのか……それは本当に、偶然としか言いようがない。時々ポツリポツリと呟くシルヴィの言葉を繋いでいくと、どうやらシルヴィはあの麻薬畑で襲撃に遭い、ジェイロードさん達とはぐれてしまったらしい。

重症で動けなくなっていたところを、シルヴィもまた奴隷達に発見された。運が良かったのはそれが夜で、比較的人目につかないうちにこの療養所に運ばれたこと。そしてシルヴィを担当した医師がガセトさんただ1人だったこと。

「レンナート、食べないと怪我治らないって言う。……シルヴィ、食事出来ない」

「ごめん」

僕はシルヴィの分の食事を口にしながら謝った。シルヴィは食事をすることが出来ないから、僕と2人の時にしか食事をしないことにしている。勿論、シルヴィの分まで食べるのは僕なんだけど。

この病院の中で、シルヴィが『人』ではないことを知っているのはガセトさんだけだ。運ばれてきたシルヴィを見て、ガセトさんはいち早く奴隷達に口止めをした。信頼の厚いガセトさんからの言葉に奴隷達は頷いてくれたらしい。それでも衝撃的な事実というものは、いつかは何処かから漏れていくもの。ガセトさんもそう言っていた。

「……シルヴィ、怪我の具合はどう？」

僕はおそろおそろそう聞いてみる。シルヴィの右腕には包帯が巻かれていた。ガセトさん曰く、右肩から左脇腹にかけても刃物のようなもので切り裂かれた痕があるらしい。

シルヴィは食事をする僕の隣で、右手を握ってみせた。

「右腕の破損、47パーセント……腹部の破損、4パーセント。……これ以上の自己修復、出来ない」
「えっと、よく分からないんだけど……自分ではこれ以上治せない
ってこと？」

人に自然治癒の力があるように、シルヴィにも自己修復機能というものがあるらしい。シルヴィは静かに頷く。

「右腕、上手く動かない。でも、お腹、縫えば治る。ガセト言った
た」

「そっか。……じゃあ、ガセトさんに治してもらえるね。良かった」
僕はほっとして笑った。僕みたいな人間と違って、シルヴィはお医者様でも治せない。それはやっぱり、シルヴィ自身が預言書の……過去の知識によって造られた存在だからだ。

「……」

ミルクを飲んでみると、シルヴィがじっとこちらを見つめてきた。何か言いたそうな視線。僕は首を傾げる。

「?……どうかした？」

「……。……なんでも、ない」

シルヴィはそう言って窓の方に顔を向けた。端正に造られた表情が少し翳って見えたのは……僕の、気のせいかもしれない。

人には眠りというものがある。眠ることで人は夜に行動を制限することを覚えた。食事の回数を減らし、体力を回復する手段。生き物が寝静まる時間帯に、人もまた眠る。

夜のサナトリウムは少しだけ静かになる。患者達の大半が眠っているから。けれど治療を待つ患者達に時間など関係ない。そして治療に追われる医師達もまた同じ。

バタバタと廊下で人が駆け回る音がする。新しい患者が運ばれてきたか、それともまた誰かが命を落とそうとしているのか……私はベッドに座ったまま、静かに月を見上げていた。

「……………」

私の正体が殺人人形だと知っている人間は、ガセト・パンドロスとクリフだけ。2人は何故かそれを隠そうとしている。私にとって隠しても、隠さなくてもいい事実。たとえそれを隠匿しても、私が『人形』であることは変わらない。

私は、人形。動くだけのただの人形。マスターを助け、マスターを守る為の人形……………」

「……………」

なのに時々、私は夢を見る。

最初はクリフに言われて、眠る真似事をしていた。消費を抑える為にシャットダウンすることも考えた。それでも、そうすると私は

人形と……人でいうところの死んでいる状態と同じことになる。
眠る真似事は、不思議だった。目を瞑り、闇の中に落ちる。全てが漆黒に解け合い、意識もまた消えていく。やがてそれが、眠りに変わった。機械であるはずの私に……必要としないはずの眠りが訪れた。

「……………」

眠りにつく瞬間は、まるでエネルギーの補充をしているときのよ
うに安らかだった。意識がふわりと霧に包まれ、何も分からなくな
る。何も考えなくなることが最初は怖かったけれど……やがてそれ
も心地良さに変わった。

闇の中にただよう意識。時折、私は夢を見る。

『シルヴィ』

誰かが私を呼んでいる。今まで何度も聞いてきた、あの声。声は
いつも私に呼びかけ、毎晩違うことを言う。私を困らせるようなこ
とばかり言つて、そして気付くと朝になっている。
最初、彼女はこう言った。

『シルヴィ。……貴女はだあれ？』

次の日、彼女はこう言った。

『シルヴィ。……貴女はどうして此処にいるの？』

次の日、彼女はこう言った。

『シルヴィ。……貴女は私を知ってる？』

私はいつも彼女の言葉に答えることは出来ない。彼女は質問をするだけすると、消えていく。手の届かない月のように、彼女は何もかも知っているかのように、私に問いかける。そして自分のことは何も語らない。

ふと気付くと、また彼女の声がする。

『シルヴィ。……シルヴィ』

どうして貴女はいつも私を困らせるの？どうして貴女は私のことを知っているの？どうして貴女は……。

『シルヴィ。……さっき何を言おうと思ったの？』

あれは……別に、重要なことじゃない。どうしてクリフが私の怪我が治ることを喜ぶのかと、そう思っただけ。クリフは敵で、私のメモリには排除対象として記憶されていて、それで……。

でも、私は……。

「……あ……」

気付くと、夜が明けていた。私はベッドに横になっていて、いつの間にか眠っていたらしい。何処かで鐘の音が聞こえる。また誰かが死んでいったのだろう。今日も少しだけ落ち込んだレンナートが食事を運んでくる。少し遅れてクリフがやってきて、そしてまた一日が始まる。

「……」

私も、私に問いかけた。

……シルヴィ、いつまで此処にいるの？

第1章 2

初めて目を開けたとき、私は必要な全てを知っていた。必要な全てとは、マスターに従う上で必要な情報。殺人人形として生まれた私は完璧だった。……少なくとも、欠陥を自分で認める機械は存在してはならないのだから。機械は完璧でなければいけない。でも……。なら、マスターに……。ジェイに、見放された私は、存在してはいけないのだろうか……。

- 人形の戸惑い -

「よいしょつと……」

視界を覆い隠すような大きな紙袋を抱えて、僕は辺りを見回した。ガセトさんに頼まれて街におつかいに出ただけ……。あまり馴染みのない通りだったから、少し迷ってしまったみたいだ。左右には細い路地、そして前方は行き止まり。荷物を抱え直すと、小さく溜め息をついて僕は呟く。

「こつちでもない……。どの辺りから間違っただろう……。」

オロオロと左右を見回していると、向こうから歩いて来た2人組の男達とぶつかりそうになった。

「あつ……、す、すみません……」

僕は咄嗟に謝った。こうゆう街で、しかもこうゆう路地裏。大体こんなところを歩いている人はまともな人じゃない。

先に謝罪したのが功を奏したのか、男達は舌打ち1つだけして、擦れ違いざまに僕を睨みつけただけだった。これでもし、謝るのが遅かったら、難癖をつけられるところだった。

「……こ、怖かった……」

僕は2人の姿が遠ざかっていくのを確認してそう呟いた。今日はレイテルパラツシユを持ってきていない。……というか、ここ最近剣を持ち歩くことはなくなっていた。フレイさん達と一緒にだった時とは違って、あのサナトリウムに居る間は、剣は必要ないから。

でも、と僕は自分の手を見つめる。今この手にあるのは大きな紙袋だ。こんな風に物を抱えて歩いているのは変わりない。レイテルパラツシユも腰から下げているというより、ただ抱えているようなものだった。

大層なものを持っていても、使わなくては意味が無い。そう言ったのはフレイさんだっただろうか……サーシャさんだっただろうか。

(そういえば……2人はどうしているんだろう)

脳裏に銃口を向けるサーシャさんの姿が浮かぶ。あの時、僕に銃弾を浴びせたサーシャさんは、今まで見せたことの無い残酷な瞳の色をしていた。フレイさんも、あの化け物のような生き物から逃げることが出来たのだろうか。

(それに……シルヴィがああ庭にいたってことは、ジェイロードさ

ん達もあの場所に……)

「……クリフ、発見」

ふと後ろからそう声をかけられて、僕は振り返った。するとそこには長袖の質素なワンピースを着たシルヴィイの姿がある。シルヴィイは僕を見つけると、いつも通り変化の無い表情で近づいてきた。

そして僕の前で足を止めると、紙袋を見上げて言う。

「シルヴィイ、ガセトに迎えに行くように頼まれた。……クリフ、帰ってくるの遅い」

「えっ、あ、ご、ごめんっ」

道に迷ってて……と、言い訳を口にしようとする、シルヴィイはそれを遮って続けた。

「シルヴィイ、ガセトに『頼まれた』。『頼まれた』……『命令』じゃない」

「へ？」

シルヴィイは僕から紙袋を奪い取ると、軽々とそれを抱きかかえた。僕より小さなシルヴィイだから、袋を抱えると胸から頭まですっぽりと隠れてしまう。

シルヴィイは僕に背を向けると、迷いのない足取りで歩き始めた。どうやら帰り道を覚えてるみたいだ。

「ガセト、頼み事は命令じゃないって、言った。……命令じゃないから、シルヴィイ病院にしようと思った。でも……」

前が全く見えていない状態なのに、シルヴィは前から歩いてくる人や道端の障害物を避けて歩く。

「でも？」

「……。……。クリフ、放っておくと旅人にかられる。クリフの戦闘能力、普通の人と大差ない」

シルヴィの言葉に僕はがっくりと肩を落とした。一応傭兵学校の出なんだけど……。いや、やっぱりやめておこう。その情報を知ったうえでそう言われてるんだとしたら、悲しくなるから。

それに……。

「え、えっと……。心配してくれた……。んだよね？」

僕が後ろからそう言うと、シルヴィは突然立ち止まった。そしてくるりと振り返ると、僕を見上げて言う。

「……。クリフ帰って来ないと、ガセト達が治療道具なくて困る。シルヴィも、手当て出来ない」
「手当て？」

首を傾げると、シルヴィはまた前を向いて歩き始めた。ついでにと言いたげな動作に、僕は疑問を持ちながら歩き始める。

「遅かったな。……もしかして道に迷ってたか？」

シルヴィに導かれてサナトリウムに帰ると、レンナートさんが入り口で僕等を迎えてくれた。僕は慌てて頭を下げ謝る。でも彼は気にするなと言って笑ってくれた。

「クリフ、路地裏で迷ってた。……レンナートの言った場所だった」

シルヴィは紙袋を渡すと、そんなことを言った。レンナートさんは片手でそれを受け取ると、シルヴィの頭を撫でながら僕を見た。

「ハハツ、この街は入り組んでるからな。……かくゆう俺も、この街に住みついた当初はあの辺りで迷った」

「あれ……レンナートさんはこの街の出身じゃないんですか？」

僕がそう言うと、彼はシルヴィから手を離して街の方を見やった。夕暮れの橙色を受けた街並が向こうまで広がっている。

「ああ……話してなかったか。俺は元々メーリング家の奴隷だった。子供の頃に色々あってな……殺されかけたところをガセットさんに助けてもらった」

殺されかけたというより、もう殺されていたようなもんだっただけだな、とレンナートさんは苦笑してみせた。シルヴィから受け取った紙袋の中を探りながら、彼は続けた。

「俺の場合は少々特殊だが……同じような状況で此処に来る子供は

多い。それに生まれたばかりの赤ん坊が此処に捨てられたりもする」

レンナートさんは袋の中から出した消毒薬と包帯をシルヴィに渡すと、僕の方を見た。

「……西側の病棟に、子供達を集めた病室があるんだ。さながら孤児院のような状態でな……もし暇なら、シルヴィと一緒に相手してやってくれないか？」

クリフを連れて西の病棟に足を踏み入れると、階段の前で座っていた数人の子供達がこちらに気付いたように振り返った。するとまるで木の上で鳴く鳥達のように、来た、みどりの髪のお姉ちゃん来た、と騒ぎ始めた。

「……シルヴィ、知り合い？」

横に並んだクリフは子供達のはしゃぐ様子を見ながらそう問いかけてきた。私は消毒液と包帯を持ったまま、まわりついてきた数人に目を向ける。

「……クリフを迎えに行くまで、ここにいた。全員、顔覚えた」

私がそう言うと、集まってきた1人が嬉しそうに笑った。

「えー、じゃあ、おねえちゃん。ぼくの名前はあ？」

見ると、そう言い出した少年以外にも何人かが同じような表情をしていた。私は指をさしながら言う。

「ミリアム、ヘラ、クリメネ、アタラ、ヘルダ、セリュタ、コルガ」

一人一人の名前を言い当てると、子供達から感嘆の声が漏れた。必要ならば、それぞれの年齢も言い当てられる。といっても、ここにいるのは赤ん坊から4、5歳の子供だけなのだが。

私がミリアムと呼んだ少年は、手の中の消毒液と包帯を見ると、思い出したように手を出した。

「あつ、そうだった！おねえちゃん、包帯！」

貸して貸して、と子供達がわらわらと手を出してくる。私は先の手を出したミリアムに消毒液と包帯を渡した。すると子供達は一斉に2階の病室へと駆けていった。クリフは首を傾げながら、階段を上っていく様子を見ている。

「…………ケガしてる子がいるの？」

「治療中の子供、3階から上の病室に収容される。…………2階と1階、軽傷の子供がいる」

「じゃあ、なんで包帯が…………？」

私はクリフの方をちら、と見て歩き出した。2階へ続く階段を上ると、その先で子供達が輪を作っている。最近知ったことだけれど、

人というのは何か注目するとこのように輪を作って野次馬になるらしい。子供でもそれは変わらない。

人垣になった子供達を避けてその円の中心に行くと、ミリアムが包帯と格闘していた。私はミリアムの手からもう一度包帯を受け取ると、足下に置いてあった消毒液に手を伸ばす。

少し遅れて、クリフが近づいてきた。

「それ……野良犬？」

私は頷きながら、膝を折って目の前の犬に視線を向けた。子供達に囲まれて、痩せ細った犬が細かい呼吸を繰り返している。足には大きく裂かれた傷があり、まだ血が止まっていなかった。

「うん。シルヴィ見つけた。クリフが包帯買ってくるまで、此処に」

消毒液と包帯を見比べて、私はそう呟く。治療の仕方はインプットされている。けれど……犬の手当ても人間の方法と同じで良いのだろうか。

治療道具とにらめっこを続ける私に、隣に腰を下ろしたクリフが言った。

「貸してもらっていいかな？……こうゆづの、慣れてるから」

ハイ、と手を出されて、私はクリフに全てを任せることにした。クリフは服のポケットからハンカチを出すと消毒液で湿らせて、傷口にあてる。痛みがあるのか、野良犬は時折体を震わせ、こちらを睨みつけた。

クリフの手さばきは無駄がなかった。足が折れていないかを確認して、止血をして、包帯を巻いていく。集まっていた子供達も、じ

つと静かにその手際を見つめていた。

「……お兄ちゃん、上手ね」

近くまで寄ってきていた1人の少女がそう言った。この少女はたしか……二二ナだ。クリフは苦笑しながら答える。

「昔、姉さんや妹が同じように怪我した野良猫とか、野良犬を拾ってきてたから……。……それに」

傭兵学校でも人の治療の仕方とか教わったし、とクリフは小声で言った。

「……クリフ、兄弟いるの？」

ふと私はそう呟いた。兄弟、姉妹……言葉とその意味は分かるけれど、それはなんだか不思議な存在だった。自分と似た顔の者が、自分以外にも存在している。それは自分とよく似ているのに、自分とは違う思考を持つもの……。

クリフは手当てを終わらせると、血のにじんだハンカチを畳みながら私の方を見た。

「うん。でも……。ううん。何でもない」

クリフはそう言って視線を落とした。どうしたのだろう。何か良くない思い出でもあるのだろうか。そういえばジェイも、命令以外でサーシャ・レヴィアスの名前を出すことはなかった。

「兄弟、姉妹……。シルヴィ、よく分からない」

自分と同じで、でも違うもの。殺人人形の私とは違い、人は不思議な関係を沢山持っている。家族、友人、恋人……言葉と意味でしか知らない、様々なもの。

ミリアムがハンカチを洗ってくると言い出して、クリフはそれを彼に任せた。子供達の輪がバラバラと散っていく。立ち上がるようにしたクリフは、まだ座ったままの私に首を傾げた。

「?……どうかした?」

「……クリフは……自分と同じような存在があるの、怖くない?」

私の言葉に、クリフはきよとした顔をした。しばらく困ったような表情をしていたけれど、すぐ私が辿ってきた思考が分かったらしく、苦笑いを浮かべた。

「兄弟姉妹のこと?……怖いと思ったことはないけど」

「でも……シルヴィ、シルヴィと同じWP25mL661型がもう1つ出来たら、怖い」

そうしたら、私はどうなるだろう。今までジュリア達は私と同じタイプを作ろうとしていたけれど……もしそれが成功していたら。私はジェイとアイルークの……マスター達の傍に、いられただろうか。

1体だけならいい。量産されればされるほど、私の存在理由もまた減っていく。ジェイとアイルークの傍にいらなくなる……。

「シルヴィ、怖い……ジェイ、シルヴィいらない……なる?」

肩が震えた。まだ何処か壊れているのだろうか。ただでさえ起動しているのが精一杯の、この機械の体が。

クリフは私の顔を覗き込んで、そして怪我をしていない方の肩に手を置いた。

「シルヴィ……………」

存在理由以上のものを、求めてはいけない。私はジェイ達の傍にいたかった。ジェイを守るといふ使命が、いつのまにか傍にいたいという願いに変わっていた。

でも…………それは人形には許されない。

「シルヴィ…………怖い」

ジェイの命令は、ジュリアの元に戻って待機することだった。でも体が動くようになった今でも、私はこのサナトリウムから出られない。それはきつと…………私自身が、怖がっているのだ。

「怖い…………怖いよ…………クリフ……………」

私は『使えない機械』と、見放されてしまったのだから…………。

第1章 3

全てを語るとするならば、始まりは500年前に遡る。とはいえ、そこから話せば途方もない。だからこそ、全ての始まりは1人の男と1人の女の出会いだったでしょう。そこに詩人が謳うような愛があつたかどうかは定かではないが、2人は夫婦となり、そして子を生じた。全ては、そこからだった。

- 全ての始まり -

「……………で？そろそろ俺も色々と事情を知りたいところなんだけどもあ、ジエイロード」

船の甲板に立ち、アイルークはそう言った。あの『理なき庭』でライラ・メーリングと戦った時から、どうも機嫌が悪い。おそらくシルヴィに対する扱いが気に食わなかったのだろう。最善の判断だと思っただが……………私の判断は人の考えから少々外れているらしい。

「……………」
「……………また黙るか」

アイルークは静かに苛立った溜め息をつく。甲板の手すりに背をもたれて、曇り空1つない空を見上げる。真上を飛行する鳥達の影

をアイルークは眩しそうに見つめた。

「……あんたを選んだことは、間違っただけで今でも思ってる。知の救済なんて、馬鹿らしくて仕方ないけどさ」

「……馬鹿らしいと思っていた、というのは初耳だな」

私の言葉にアイルークは吹き出したように笑った。太陽を覆い隠すように、空に向かって手を伸ばしながらアイルークは呟く。冷たい風が耳元で音をたてていた。

「普通、尋常じゃないって思うだろ。……そんな尋常じゃない奴についてけるのは俺くらいのもんさ」

海上は風が強い。晴れ渡っているにも関わらず、船は時折大きな波に揺れた。アイルークは視線をこちらへと戻すと真剣な表情を見せる。この男は、ふざけたふり、狂っているふりをしながら中身は腰が据わっている。そうゆう男だ。

アイルークは言う。

「あんたの妹がルミナリイで、あんたはそうじゃない……それ以外で俺が知っているのは、シルヴィに与えた情報と同じものだ。それ以上のことは俺も、ジュリア嬢も知らない。いや……知らされてない」

「……それ以上のこととなると動機くらいしかないが？」

私がそう言い放つと、アイルークは額を抑えて大げさに溜め息をついた。そして顔を上げると、少し苛立った様子で叫んだ。

「俺達を知りたいのはそこだよ、馬鹿」

子供のように苛立っているアイルークを尻目に、私は船の進行方向へ視線を向けた。船が目的の場所に着くまで丸一日の時間がかかるだろう。私は太陽を見上げる。冷たい風の吹く海上に、ジリジリと照りつけるような太陽が浮かんでいた。

動機。過去の預言書を手に入れようとする、その動機。知の救済を行おうとする、その動機。私は口を開いた。

「……全てを語るとするならば、始まりは500年前に遡る」

「……は？」

アイルークが、驚いたような目で見返してきた。私は続ける。

「とはいえ、そこから話せば途方もないだろう。……全ての始まりは1人の男と1人の女の出会いだったとしようか。そこに詩人が謳うような愛があったかどうかは知らないが、2人は夫婦となり、そして子を生じた」

全ては、そこから始まった。

父は学者、そして母は旅人だった。表向きには、2人はそういった夫婦だった。父の名はアダン。アダン・レヴィアス。おそらく私

が知る中で、誰よりも博学であり……誰よりも英明な人間だった。

「アダン。日が暮れるまでにアルジェンナの砂漠を越えた方が良いのでは？……あの辺りで部族と接触すると面倒なことになると思うのですが」

カタリナはまだ幼い私の手を引いてそう言った。吹き上がる熱風が体を焼くように体力を奪っていく。ジリジリと目の前に広がる陽炎を見つめながら、私は2人の会話を聞いていた。

「いや、そんなことはない。この辺りの部族は比較的温厚な性格さ。それに、砂漠越えはジェイにも辛いだろう」

アダンはいたって普通の人間だった。おそらく旅や戦いの知識、経験はカタリナほどではない。ただ1つだけ違うのは、アダンはカタリナよりも知に長けていたことだった。各国の情勢から歴史、海洋の地理、草木の種類から星の見方まで……彼は帝国時代に散っていた知識の欠片を集め、自らを『学者』だと名乗っていた。

アダンとカタリナの出逢いは私の知るどころではなかったが、2人は武と知という点では釣り合いの取れたパートナーだった。

「……そうですか。貴方がそう言うのなら、休めるところを探しましょう」

「ああ」

私はアダンに抱き上げられ、高くなった視点で砂漠を見渡した。荒れ果てた大地に岩肌がむき出しになっている。遙か彼方を移動する野生の馬の群れ。アダンはそれを見つけると、水源が近いな、と低い声で呟いた。

「しばらく行つたところにオアシスがあるはずです。……今日は、そこに」

カタリナはそう言うと、私達の先を歩き始めた。背中を見つめながらアダンは苦笑する。

「人の記憶には限りがあると思つていたんだが……キミを見てるとそうでもないんだな。此処を通つたのは何年前だい？」

「……。……少なくとも450年以上前でしょうね」

カタリナの事情をアダンは知っていた。今思えば、父にとって一番興味深いものは、歴史でも地理でも草木の知識でもなく、カタリナという存在だったのかもしれない。帝国崩壊を生き延びた、半不老不死の王女。長い時間によつて生きる術を身につけ、衰えることのない永遠の旅人となった彼女は、何よりも魅力的だったのだろう。

「450年前……オリエント国の部族抗争の辺りかな？」

「いえ、当時は既にオリエントからネオ・オリエントに変わった後です」

まだ意味も分からない言葉のやりとりを聞きながら、私は砂漠の向こうを見つめた。

この時から遡ること数ヶ月、アダンが急にトウアス帝国の遺跡を見てみたいと言い出した。カタリナは渋っていたが、アダンの説得の末に折れ、私達3人はアルジェンナ砂漠を通過してトウアス帝国を目指すことになった。

「……」

トウアス帝国の遺跡は、今は人が寄り付かない死んだ土地となっている。砂漠の果てに存在する風化した場所。地形と気候が相まって、そこは旅慣れた旅人達でも近づくことの難しい土地だった。

オアシスの近くで一夜を過ごした私達は、トウアス帝国へと近づいていた。乾いた砂漠の中に徐々に現れる、煉瓦で敷かれた道の残骸。時折石像のようなものが立っていたが、どれも風化して形が分からなくなっていた。

「……とうさま」

私は道端に見慣れない透明の石を見つけて、父のところに持って行った。砂に混じって白く傷ついてはいるが、中には黄色の石が入っている。どうやら外側は硝子のようなだった。

アダムはそれを受け取ると、珍しそうにそれを太陽の光に透かした。

「これは何かのエネルギー体かな？……そういえば何処かで聞いたことがある。こんな感じのものを高いところから吊るして、明かりにしていたとか」

こぶし大の大きさの石は、中でカラカラと音をたてた。カタリナは特に珍しがる様子も見せず横をすり抜けていく。

「半分正解ですね。それは光を発生させる道具であって、それ一つで明かりになるわけではありません。エネルギーを中継させ、それによって光ることが可能になります」

「へえ、エネルギーの中継か。それなら、いくつかの中継地点を作つて、多くの場所で明かりを作つたという可能性も……」

アダムはまるで子供のように、過去の高度な技術に感心していた。

知らない知識を得るとき、彼はいつも生き生きとしていた。もうそこにはない技術だとカタリナは呟いたが、そんな言葉が耳に入らないくらいに、アダンは興奮していた。

ぶつぶつと帝国時代の文明を想像しているアダンを放って、カタリナは私の手を掴んだ。私はふと母の顔を見上げる。目を輝かせて遺跡を見るアダンと違い、カタリナの目は風化した土地のように死んでいた。

帰ってきてしまった。そう小さく呟いた声は、熱風にかき消された。

帝国の遺跡は殆ど砂に埋もれた状態だった。かろうじて城下町と城の区別がつく程度で、そこに在った人々の生活の跡は消えてなくなっていた。道に並んでいたであろう建物も、いまでは壁の下部分だけが残されていて、動くものといえば蛇や虫、陽炎くらいのもだった。

門らしき場所をくぐると、カタリナは少し足早に歩き始めた。あちらこちらで足を止めるアダンを放って、私の手を引くように歩き始める。迷いなく彼女の足は城へと向かっていた。

「かあさま……っ」

手が痛かった。カタリナは手をつないでいることすら忘れていたのか、半分引きずるように私を城の方へと引っ張っていく。敷き詰められた煉瓦の道の上を、大小の2つの影が横切っていく。

「……………」

城の前には、錆びた鉄格子の門があった。半分開けられたままの門に手をやり、カタリナは深い深い溜め息をつく。錆びて固まった門は動かなかったが、カタリナはそこでキツく目を瞑った。握った格子は錆びて脆くなっているのか、カタリナの手の中で崩れていく。少し遅れて追いついてきたアダンが首を傾げた。

「どうしたんだ、急に……………」

「いえ。……………なんでもありません」

カタリナは目を開くと、格子から手を離した。そして私の手を話すと、振り向くことなく呟く。

「少し……………先に行きます」

カタリナはそう言うと、アダンの制止の声も聞かずに走り出した。何かに導かれるように、何かに呼ばれるように、カタリナは今にも崩れそうな城の中へと向かって行く。その後ろ姿に500年前の彼女の姿を見た気がして、私もその後ろを追って走り出した。

「ジエイ！」

後ろでアダンの声が聞こえる。それでも立ち止まらなかったのは、おそらく私も何かの予感を覚えていたからなのかもしれない。

城の中は外と同じように、殆ど形しかない状態になってしまっていた。階段らしきものが入り口のすぐ目の前に存在していたが、カタリナの姿はどこにも見当たらない。私は勘だけを頼りに階段を上る。しかし階段もあちこちに穴が出来ていて、下はどこまで続くか分からない奈落のようだった。

「……っ」

本能的に恐怖を感じて、私は手すりにすがるように階段を上った。あちこち崩落している床が、パラパラと砂を落とす。階段を上った先には回廊が続いていた。回廊の横には甲冑が落ちていて、近くには剣が置かれていた。足下で反射している細かい砂粒は窓硝子の成れの果てだろうか。帝国が風化した夜……何かしらの混乱がここで起ったのだろうか。屍すらない遺跡は何も語らなかったが、幼い私にも何となくそれが分かった。

転がった剣には、帝国の紋章が彫り込まれていた。柄の裏には何かが彫り込まれている。家柄だろうか。剣を手を取ろうと甲冑に近づくと、足下の床にヒビが入った。

「！」

声を出すのが遅かった。気付くと床が崩落し、私は空中に投げ出されていた。真っ暗な闇に吸い込まれるように、小さな体が落ちていく。

刹那のようで、長い時間だった。しかし不思議なことに体が地面に激突する感覚はなく、気付くと私は砂の中に埋もれていた。気を失っていたのか、私は砂から顔を出して上を見上げる。

落ちてきた穴はもはや見えなくなっていた。口の中に入った砂を吐き出し、私はキョロキョロと辺りを見回す。どうやら此処は地下室かのようなだった。ぼんやりと青い光が部屋を照らしている。膝が笑うのを抑えながら、私はふらふらと歩き出す。

「……」

そこは異様な場所だった。円柱型の硝子の機械が幾つも存在し、中には青い液体が入っている。中には太い縄のようなものが上と下から伸びていた。硝子は割れているものが殆どだったが、時折傷のないものも存在している。

円柱型の硝子の下には何かの番号の見覚えのない文字が書き込まれていた。私は一つ一つを見ながら、奥へと歩いていく。一体どれだけ同じものが存在しているのか。異様な光景は何処までも続いていた。

「……？」

ふと、水の中で気泡が放たれる、小さな音が聞こえた。私は微かな音に耳を澄ませながら歩き出す。彷徨うように硝子の間をすり抜けていくと、傷一つない機械を見つけた。中には青い液体が揺れている、他と同じように太い縄が伸びている。

「……………！」

ただ違っていたことは、そこに1つだけ赤子の姿があったことだった。赤子から吐き出される気泡がコポコポと音をたてている。私は言葉を失った。手を伸ばして硝子に触れる。厚い硝子の向こうにあるその赤子は、握ったままの拳を小さく動かした。目を開いていないものの、確かに生きている。

「……………5512……………5551……………5578……………」

ふと向こうからカタリナの声があった。何かを探すように数字を口に出している。カタリナを呼ぼうと口を開けた時、彼女もまたこちらに気付いたようだった。

「5589……………！」

カタリナの目は赤子に釘付けになっていた。口の中で何かを呟き、そして私と同じように硝子に手を伸ばす。静かに気泡の音だけが木霊していた。青白い光を放つその機械の中で、赤子はゆりかごに揺られているかのように眠りについている。

コツ、と遅れて足音が響いてきた。アダンの足音だと気付いた私は、呆然としたままのカタリナの隣で振り返った。アダンもまた幾つもの機械に驚きながら、私達のところへ歩み寄ってくる。

「カタリナ、ジェイ。……………此处は、もしや……………」

カタリナは背を向けたまま振り返らなかった。アダンは彼女の肩越しに赤子の姿を見つけ、そして驚きの声をあげた。その視線は遺跡に散らばった過去の産物を見ているときと同じ、驚喜の色に輝いていた。

「これは……もしや、『ルミナリイ』か……！」

聞き覚えのない単語にただ首を傾げるしかなかった。硝子に触れたカタリナの手が微かに震える。その指先が握りしめられるのを、私は見ていた。

「素晴らしい……素晴らしいぞ！帝国の研究は実を結んでいたんだ。不老不死の力は、確かに此処で生きている……！」

第1章 4

不老不死の先覚者、それを帝国はルミナリイと呼んだ。彼らの完全なる不老不死の研究は多くの犠牲の上に作り上げられ、帝国の崩壊によつて、その研究も忘れ去られたかに思われていた。しかし、朽ち果てた遺跡の中に1つだけ生き延びた命は、たしかにルミナリイの完成を意味していたのだつた。

- 与えられ、奪われるもの -

サーシャ、と。カタリナは赤子にそんな名前を付けた。カタリナが名前をつけることにアダンは少々渋っていたが、カタリナは頑として譲らなかつた。

そしてその日から、サーシャと名付けられたその子供は私の妹になつた。

「……サーシャ」

奇妙なものだつた。名前を呼べば犬のように後をついてきて、幼さ故に言葉を理解しない。何かの拍子に泣き出すのも不思議だつた。驚いては泣き、悲しくなつては泣き、空腹になつては泣き……私も昔はそうだつたのだとアダンに教えられても、あまり信じられな

った。

サーシャは常に私の後ろかカタリナの後ろについてまわった。覚えのない足取りで私達の後ろを追ってきては、服の裾をしつかりと握りしめた。

「サーシャ」

サーシャはあまりアダンには懐かなかった。いや、懐かなかったというよりも、カタリナが常にサーシャを傍に置いて離さなかった。そしてサーシャも、アダンと接する時間は殆どなかった。

そう、あれはサーシャを遺跡で発見してから、一年ほど経ったあの日のこと。

珍しく私はサーシャのお守りを任された。カタリナはアダンと共に水を汲みに行くと言い、2人だけで川辺へと歩いていった。いつもならば水汲みは私の仕事だったのだが……当時の私はなんの疑問も抱くことなく、地面に座って遊ぶサーシャを見つめていた。

「にいにい」

サーシャは手をバタバタさせながら何かを訴えていた。どうやら辺りを飛ぶ蝶々が気になるらしい。捕まえようともがいては、空を切る両手。不思議な生き物だと私は改めてそう思った。カタリナに似た面影、まだ何も理解出来ない妹。食べ、眠り……そんな日々を続けていけば、今の私のように言葉を覚え、そして自分の足で歩くようになるのだろうか。

「……」

ただ1つだけ分かったことといえば、この妹は、どうやらアダンよりもカタリナに似た性格だということだ。子供らしく騒ぎ回るこ

とは少なく、どちらかというと言葉数も少ない。

「……」

諦めたのか、サーシャは蝶を目で追いながら欠伸をした。うとうとと船を漕ぎ始める。そういえばカタリナ達の帰りが遅い。水を汲みに行くのにこれほど時間がかかるだろうか。

私は立ち上がると、今にも眠ってしまいそうなサーシャを放って坂を下り始めた。水場はすぐそこにあるはずだ。私は坂を駆け下りると、向こうに見えた人影に声をかけようとした。

その時。

「……！」

銃声が鳴り響いた。詰まるような唸り声が聞こえて、そして人影が倒れる。私の足は止まっていた。

倒れた人影の向こうから見たのは、しっかりとヒュペリオンを構えたカタリナの姿だった。銃口からは硝煙があがっている。獣のように鋭い視線がはつきりと相手の姿を見つめていた。

呆然と、私は足下に転がった人の姿を見た。それは確かに、私が父と呼んだ人の姿だった。

「母、様……？」

アダンの体から血液が広がっていく。立ちすくんでいると、微かにアダンが血の流れる脇腹を手で覆った。

「……っ、……カタリナ……！」

カタリナは静かに彼を見下ろしていた。

「手が、狂いましたか。……せめて苦しまないようにしようと思っ
たつもりでしたが」

カタリナはアダンの傍に膝をつくと、フウ、と息を吐いた。アダ
ンは呻くようにカタリナを睨みつける。

「一体、何を……っ」

「……。……貴方の理想は、確かに素敵なものでした」

クルリとリボルバーを回転させ、今度は左胸に銃口を押しあてる。
アダンの体は一瞬震えたが、抵抗するだけの力は普通の人間である
彼には残っていないかった。

カタリナは静かに目を閉じる。

「しかし貴方には分からなかったようですね……。理想は、理想で
しかなく……。全ての幸せなど何処にもないのだということ」

「っ、……。カタ、リナ……。！」

引き金に指が伸びる。私は咄嗟にそれを止めようと口を開いた。
しかし私の制止が届くことはなく。

「愛しています。……。貴方の愚かさも、全て」

波の音しか聞こえない船の上で、俺はジェイロードの口から語られる物語を聞いていた。いや、聞いていたというよりも……ただ呆然としていただけなのかもしれないが。

つまりカタリナは、自らの夫であるアダンを殺した。ジェイロードはそれを目の前で見ていたことになる。母親が父親を殺すその瞬間を。

「じゃあ……じゃあ、あんたがカタリナを殺したのは、その復讐なのか……」

俺は上擦った声でそう呟いた。するとジェイロードはこちらに視線を向け、そして考え込む。

「……そうゆうことになるのか」

まるで聞き返すようにそう言われて、俺は溜め息をついた。ジェイロードはしばらく沈黙すると、腰から下げていたカイロスを手にする。

「いや……半分は復讐でも、半分はそうではない……」

手元に落とした視線。俺は首を傾げ、そして問いかけた。こちらが問いかけなければ、相手は答えを返してこない。この男はそういった男だ。

「どつゆうことだ？」

ジェイロードはこちらに視線を向ける。

「……カタリナは憎しみによってアダンを葬ったわけではなかった。私もまた同じだということだ」

「……？」

憎しみではない。俺は手すりに背中を預けながら考える。憎しみ以外で人を殺すとすれば、そこにあるのは意見の相違、もしくは相手が自分にとって邪魔になった時ではないだろうか。カタリナが言った言葉を頭の中で繰り返す。理想、幸せ、愚かさ……愚かさ。俺はふと、顔をあげた。ジェイロードは呟く。

「もしも……カタリナが今生きていたとしたら、確実に私を殺そうとしているだろうな」

「それは……つまり、アダンもあんと同じように『知の救済』を行おうとしていたってことか……！？」

眩しいくらいに照りつける太陽を見上げて、ジェイロードは頷く。

「ああ……救済にとってルミナリイは重要な研究材料。……アダンにとってサーシャは人ではなく観察対象でしかなかった」

木に背中を預けて眠る。短い夢が私の中を過ぎ去って消えていく。そのどれもが、数少ない父の思い出だった。はつきりした顔も声も覚えていない。ただ私はいつもカタリナに手を握られていて、父とは言葉を交わすことも少なかった。

「……………」

焚き火の燃えカスが燻っている横で、私は眠っていた。声が聞こえる。夢の中で私を呼ぶ声が。それはおそらく父のものだろう。少ない記憶の中で、父は私を呼ぶ。

「……………サーシャ」

「……………ばあばあ」

言葉すら知らない私は、呼びやすい発音で彼を呼んでいる。いつも父を呼ぶと何故か先にカタリナが現れて私を宥めていた。しかしこの時は珍しく、父が私の傍に寄ってきて私を抱き上げた。

大きな手に抱かれながら、私は辺りを見回す。気付くとそこは何処かの宿だった。兄がベッドに座ってこちらを見ている。母は何処へ行ったのだろうか。

「サーシャ、見てご覧……………この街はこの間より大きくて人も多いだろうっ。」

父に言われて窓から外を見ると、そこには大きな街並が広がっていた。幾人もの人が行き来し、露天商がものを売り、旅人が足を止めてそれを見つめている。まるで蟻の行列のように続く人の群れ。父はそれを見下ろしながら、静かに呟いた。

『数えきれないな……一体この大地の上に、どれだけの人が生きて
いるのか』

私は父の腕の中で下の通りを見つめている。

『そして今この瞬間に、どれだけの人が死んでいくのか……』

露天の横には浮浪者らしき人影もあつた。眠っているのか死んで
いるのか、ピクリとも動かない。父は兄も窓の近くへと呼び寄せる。
兄は返事をするところらへと歩み寄ってきた。一瞬だけ抱き上げら
れた私を見上げて、そしてまた下へと視線を向ける。

『もしも死というものがなくなつたなら……どうなるんだろうな』

ふと父がそんなことを呟いた。私は意味が分からず、首を傾げる。

兄は父の目を見つめて、そして考えるように空を見つめた。

父は言う。

『ジエイロード。生きるということは素晴らしいことだ。……そうは
思わないか？どんな生にも必ず意味がある。どんな運命にも必ず安
息がある』

『……………』

『少し難しかったか？』

片手で兄の頭を撫でると、父は私の頭にも手を伸ばした。

『ぱあぱあ』

『ん……なんだい？サーシャ』

大きな手は心地良かった。ただそれだけを覚えている。彼にとって私がルミナリイでしかなかったとしても……そこにあったのは確かに安息だった。

たとえそれが気まぐれなものだったとしても。

「……」

ふと短い記憶から引き戻されて、私は舌打ちをした。焚き火の燃えカスに砂をかけて光を消すと、辺りは夜の闇に包まれる。クロノスに手を伸ばすと、闇の中から聞き覚えのある声が聞こえてきた。

「……流石、って言った方がいいのかな？」

「闇に乗じてとは卑怯ですね……三大戦士の名が泣きますよ。フリッツ・コール」

雲間から三日月が顔を出す。私は後ろを振り返った。いつの間にか気配が背後に移動している。剣はまだ鞘に納められたままだが、気を抜くことはできない。

一族特有の体を隠すような服を身に纏い、彼は苦笑した。

「闇討ちも仕事のうちだよ。……それより、魔術師の彼とクリフ君の姿が見えないようだけれど？」

「……言っただけです。状況と価値を天秤にかける、と」

私はクロノスを構えた。フリッツさんは困ったように頬をかくと、剣に手を伸ばした。私はジリジリと距離を離しながら、辺りに警戒する。他の2人が何処かに潜んでいるとも限らない。

ある意味三大戦士はメーリンググ卿と同じくらい厄介な相手。彼らは近距離の攻撃を得意としている。あまり距離を詰められたくはな

い。いくら私とはいっても、あの三人を同時に相手にすることは出来ない。

フリッツさんは剣の柄を握り、そして溜め息をついて手を離れた。

「……！」

「やっぱり、やめておこう。本当のところ、今回は牽制が仕事だしね。それに……」

彼は私を見つめて、そして苦笑する。

「どうやら今のキミは預言書を持ってない。下手に突つくよりは賢明だと思うけど」

下手に出ているように見えて、彼は案にこれ以上こちら側に深入りするなど言っている。それもそのはず、ここはネオ・オリの国境内。私が預言書を狙って此处に来たことに彼らも気付いているのだろう。

私はクロノスを下ろした。

「忠告、ですか」

「まあね。……それじゃ、今日はこの辺で」

彼はそう言うと、闇に乗じて姿を消した。気配が去っていくのを確認しながら、私は舌打ちをした。1人である3人を相手にする方法を考えなくてはいけない。どんなに最悪な状況であろうと、勝たなければ預言書を手に入れることは出来ないのだ。

クロノスが鈍く月明かりを反射している。再び眠る気にはなれず、私は燃えカスの焚き火の上にもう一度火を放った。

第2章 1

もしも、過去のあの一瞬をもう一度繰り返すことが出来たなら。もしも、この時間をやり直すことが出来たなら。例えの話をしても仕方ないことは分かっている。戻って来ないものをいくら願っても、それは永遠に失われてしまったものだから。

だから今日も、逝く人に願うのは唯1つ。安らかに、と。

- The godless world -

日が暮れていく。窓から見える麻薬畑の向こうに太陽が沈むのを見つめながら、僕はそう呟いた。今日はこのサナトリウムの中もやけに静かだ。僕のためにと、ガセトさんが用意してくれた部屋は、小さいながらも大きな窓がある部屋だった。メーリング家の所有する『微睡みの庭』の畑に夕日が沈んでいく様子は、美しいながらも少し悲しい。窓辺に立ったまま、僕はじっと窓の外を見つめていた。

「クリフ。いるか？」

ふと声が聞こえて、僕は振り返った。見ると、風通しのために開けておいた扉からレンナートさんが顔を出している。

「はい。……どうかしたんですか？」

まだ夕食には早い。僕は窓を閉めると、困った表情を浮かべているレンナートさんに首を傾げた。

「先生にクリフとシルヴィを呼んでくるように頼まれたんだが……シルヴィの姿が見当たらなくてな」

ここには来てないか、とレンナートさんは溜め息をついた。そういえば、今日は昼頃からシルヴィの姿を見ていない。僕が病院の手伝いをしていたせいもあるけれど……。

でも、ガセトさんが僕とシルヴィに話って、なんだろう。

「自分の部屋にもいなかったし……ここにもいないとなると、子供達のところか」

「あ、それなら僕が探して、一緒にガセトさんの所に行きますよ」

レンナートさんは夕食が出来たら、各病室に食事を運ばなければならぬ。もちろんそれは他の人達も手伝ってくれるけれど、ここでは医師より患者の数の方がはるかに上回っている。そのため、彼らはこういった食事の世話まで行わなければいけないんだ。

僕がそう言うと、レンナートさんはほっとした表情を浮かべた。

「悪いな。……2人の食事は後でシルヴィの部屋に運ぶことにするよ」

「えっ、あ、……は、はい……」

2人分ということとは、今日も僕はシルヴィの分まで食べなければいけないということだ。ここにお世話になり始めてから、運動量は減っているのに食事の量は増えていく一方。太らないかな、僕……。

仕事が残っているから、と去っていくレンナートさんを見送って、僕はふと首を傾げた。

「それにしても、ガセトさんの話って……?」

首を傾げながら。僕は部屋から出る。とりあえず、シルヴィを探して来なければいけない。多分居場所は子供達のいるあの病棟だ。随分懐かれていたみたいだから、もしかしたらまだあそこで遊んでいるのかもしれない。

西の病棟は、さながら子供達の王国だった。シルヴィがああ病棟に出入りするようになってから、子供達はシルヴィを『おねえちゃん』と呼んで慕うようになっていた。大人から見ると少し機械的に思える仕草や表情も、子供達にとってはさほど気にならないものらしい。

そしてシルヴィも、約束した、と言って昼頃から夜まで子供達の相手をするが多くなっていた。

「約束、か……」

病棟の渡り廊下を渡り、西の病棟に入る。扉を開けると、すぐに子供達の視線がこちらに集まってきた。1、2階は軽傷の子供達が多いせいか、何かとこの病棟を訪れる人にちよっかいをかけたがる。……多分、寂しいんだろう。

「あつ、おにいちゃんだ」

見覚えのある男の子が僕のところを駆寄ってきた。ええと、たしかミリウムだったかな。

「こんばんは。……シルヴィ来てないかな?」

「みどりの髪のおねえちゃん？おねえちゃんなら、3階だよ」

ミリアムは天井を指さしてそう言った。3階は治療中の子供が収容される病室だ。僕はミリアムが指さした天井を見上げて、そして首を傾げる。

「3階？」

「そう。ニナが病気にかかって、3階にいつちゃったんだ」

ニナはたしか、いつも子供達の集団の後ろにいた女の子だ。大人しくて体が弱いと聞いたことがある。僕も何度か顔を合わせたけれど、最近は見なくなっていった。

ミリアムは僕の手をひいて階段前まで連れて行ってくれた。

「病気、うつらないけど、ぼくら3階に行っちゃダメなんだって」

レンナートに言われた、とミリアムは頬を膨らませた。僕は階段を見上げる。3階へ続く階段は少し暗くて、ひっそりとしていた。

「そっか……じゃあ、ミリアム達はここにいて。ちょっと行ってくるよ」

わらわらと集まってきた子供達に手を振って、僕は階段を上がっていく。まるでそこに見えない壁があるかのように、階段の前で立ち止まる子供達。その様子を不思議に思いながら、僕は上を目指した。

「……むかしむかし、あるところに……」

階段を上がって聞こえてきたのは、シルヴィの声だった。絵本でも読んでいるのだろうか、童話を語るような言葉が廊下に響いてくる。僕は階段を上ると、辺りを見回した。ひっそりとしていて、静かな廊下。人の気配はあるのに……。

「……小さな少女が、おりました……」

聞こえてくる声を頼りに、僕は二二ナの病室を見つけ出した。半開きになった扉から、シルヴィの声がしてくる。扉に手をかけると、夕日の緋色の光が廊下に差し込んでくる。

ふと人の影が僕の足下まで伸びて、僕は顔をあげた。

「シルヴィ……？」

「！」

窓際にイスを置いて、絵本を片手に座っていた彼女は、僕の気配に気付くと驚いたような顔をした。しかしそれもすぐにいつもの表情に戻る。

「クリフ。……夕食の、時間？」

シルヴィは緑色の髪を耳にかけると、僕を見上げてそう言った。

僕は首を横に振る。

「ううん。そうじゃなくて、ガセトさんが……」

呼んでたんだ、と言いかけた僕は、病室内に足を踏み入れてすぐに凍りついた。

薬とは違う、腐った何かの……臭い。僕はふとシルヴィに近づいた。シルヴィは何も感じないのだろうか、表情一つ変えずに椅子に座っている。

「……シルヴィ、これは……」

問いかけようとした瞬間、僕はシルヴィの目の前にあるベッドに目を奪われた。目を閉じたまま眠っているのはニナだ。毛布から突き出た二本の足。その片方は……くるぶしの辺りから下がなくなっていた。

切断部分には包帯が巻かれていたけれど、そこから見える皮膚の色は生きた物の色ではなくなっていた。僕は咄嗟に口を押さえる。シルヴィも人差し指を唇に添えた。どうやら、今眠りについたばかりらしい。

「……シルヴィ、ニナは……」

僕が問いかけると、シルヴィは本を閉じて立ち上がった。椅子の上に本を置くと、ニナに気付かれないように病室を後にする。僕もその後を追った。

シルヴィは階段の前まで辿り着くと、振り返って静かに言った。

「……ニナ、ここに来たときから足の指、なかった」

下から子供達の声が響いてくる。元気に走り回る音、騒ぎ合う声。一方、こちらの階はまるで生気を失っているかのようなだった。たった階段1つなのに、ことと下とでは世界が違うような気がした。

シルヴィは僕を見上げたまま、淡々と続ける。

「でも……傷口から、皮膚、壊死してきて……ガセト、悪化しないように足切った」

でも、とシルヴィは俯いた。その後続く言葉は恐らく、僕が目にしたものと一緒だろう。皮膚の壊死が広がっている。ガセトさんたちじゃ……治せないんだ。

「……」

シルヴィは長く俯いていた。僕も何も言えずに沈黙に沈んでいるしかなかった。きつと、この3階から上に收容された子供達は同じように病気や怪我に一生苦しんでいかなければいけないんだろう。下で元気に駆け回る友人達の声を聴きながら。

このサナトリウムにいる患者達は、みんな同じようなものだった。傷つき、苦しむ人たちしかいない。回復する人は少なく、いてもすぐにあの『微睡みの庭』へと戻されていく。

「……このままだと、危ないってレンナート言った」

シルヴィは静かにそう呟く。

「クリフ……二二ナ、死ぬ……？」

「それは……」

僕は否という気持ちを込めて首を横に振ろうとした。でも、あの一瞬、目に焼き付いたあの皮膚の色。僕だって、一応戦いの中に身を置いてきた人間だから分かる。……『助かる』なんて、軽く口にすることは出来ない。

死。生と同時に、人に与えられた絶対的な運命。人は誰でもいつかは死ぬ。早いか遅いかは誰にも決められず……誰にも分からない。僕だってもしかしたら明日運悪く死ぬかもしれない。二二ナだって、明日運良く治るかもしれない。

ふと脳裏に、懐かしい人たちの声が響いた。

『いつてらっしやい！』

『おにーちゃん！頑張つてねーっ！』

僕を笑顔で見送った妹、心配しつつもいつもの調子で背中を押してくれた姉。いつまでもそこにあると信じていた人たちでさえも……いつ奪い去られるか分からない。

僕は拳を握りしめた。いつも僕の思いを受けとめてくれるレイテルパラッシュはここにはない。ただ固く握りしめた拳だけが震えた。

第2章 2

離れた手は空を切り、全てはそこで断ち切られた。あいつが簡単に死ぬような女じゃないことは分かつてる。それでも、サーシャがこれからどこへ向かうのか、俺には全く分からなかった。クリフとも合流することができず、俺の手元に残されたのは預言書の原初の章、ただ一冊のみ。

- records the first -

「ああ、クソッ！」

俺は八つ当たりで砂利を蹴りあげた。焚き火の脇を通り越した小石が雑草の影に消える。あの一方的な別れから数週間、俺は苛立ちの収まらない日々が続いていた。

焚き火の傍に腰を下ろすと、手元にある荷物に目を向ける。ゴチャゴチャと詰め込んだ荷の中にあるのは、預言書の原初の章だ。使い方を調べるように、とサーシャから手渡され、そのまま俺の手の中に残っている。

「ルミナリイ？ 知の申し子？ …… 何だっつてんだ」

舌打ち1つして、焚き火を見つめる。真っ赤に燃える炎は何も語らず、ただゆらゆらと揺れ動いている。俺はそのまま後ろへと寝そべると、星の見えない夜空を見上げた。

サーシャの言った言葉も、目の前から消えた理由も……全て分からないことだらけだ。ただ1つ、なんとなく理解出来たのは、別れの間際に聞いた台詞。

『……私はどうやら、カタリナの子ではないそうです』

カタリナの子じゃない。それがどうゆうことなのかは分からない。カタリナ以外に、半不老不死の人間なんて存在しないだろ。それじゃあお前は何者なんだよ。

炎が揺らめき、俺の影が後ろの木に映し出される。ふと気配を感じて顔を上げると、影が1つ、俺の真正面に現れた。姿のない影だけが焚き火の向こうに座っている。

『……知の申し子……それはかつて、トウアスが求めた理想だ』

現れた影は、いつも通り俺を見下すようにそう言った。炎を挟んで反対側に座っている影は、俺より一回り大きな体で背後の樹に寄りかかっていた。

俺は顔を顰めてヴァルナを見る。このタイミングで出てくるとは、お前は俺の八つ当たりの餌食になりたいらしいな。

「トウアスの理想だ？知るか、そんなもん」

『完璧なる不老不死……それを創る研究を、帝国はルミナリイ計画と呼んだ』

ヴァルナは炎を見つめているのか、ただ静かに語り続ける。……そうか、こいつも墮落した蛉人とはいえ、悠久の時を生きてきた精

霊。トウアス帝国が存在していた当時のことも知ってるってことか。俺は薪を放り込むと、ヴァルナに視線を向けた。

「不老不死を創る、か。……馬鹿げてんな」

『ふっ……魔術師ならば分かるだろう。その計画事態が狂気の沙汰だ』

ヴァルナの言葉に俺は頷いた。

魔術師は本来、世界の均衡を重視する。簡単に言うならバランスだ。人も獣も虫も植物も、全て均衡の上に成り立っている。どれかが欠けることは許されず、またどれかが力を持ち過ぎることも許されない。

精霊と魔術師の関係も同じだ。契約上、魔術師が主となり精霊は使役される側になるが、互いに等価交換の理が働いている。魔術師は精霊を使役することでその力を得、そして精霊は魔術師の死後、その魂を供物として再び精霊に転生するために用いる。つまりは、どちらかに力が偏ることは禁じられているってことだ。

力が偏れば、世界は均衡を取り戻す為に偏ったものを排除しようとする。まあ、こつからは神だとか信仰だとか、そうゆうもんが絡んでくるから割愛する。

「完璧な不老不死……」

俺はそう呟いて、焚き火に視線を落とした。

『ルミナリイ計画は、身分の低い人間達の赤子を利用したと聞く。何千、何万という命がそこで研究に利用され、そして消えていった。あの女がルミナリイだとするならば……』

「サーシャもその計画に使われていたってことか」

そしてサーシャがルミナリイと呼ばれるということは、不老不死を創る研究は成功したということだ。俺は頭が痛くなってきた、ガシガシと頭をかく。答えが見えてきたようで、まだ霧の中にある。

つまり……つまり、何なんだ？ルミナリイのことは分かった。サーシャの知った事実も分かった。それでも此の先が見えない。サーシャが何をしようとしているのか、俺はこれからどうすればいいのか。

ヴァルナの影が炎に照らされて揺らめいている。俺の苛立ちを感じているのか、ヴァルナは静かに口を開いた。

『ファーレンの血をひく者。……お前はどつするのだ』
「……………」

どつするって？勿論、あいつを追うに決まってるんだろ。なのに、あいつが何処に行つて、これから何をしようとしているのかが分からない。……分からねんだよ。

『……………』

言葉にしなくても、ヴァルナには伝わったようだった。魂を賭けて契約してるだけあって、鈴人は魔術師の感情の機微に敏感だ。それが鬱陶しい時もあるが、余計なことまで口にする必要がなくて助かる。

ヴァルナはゆっくりと左手で何かを指さした。影だけで具現化した姿ではその表情も読み取れないが。奴は静かに言う。

『ならば……預言書を使え、ファーレンの孫よ。其処にあるのは最初の章。……この世の全ての始まりが其処に在る』

ガセトさんに呼ばれて、僕とシルヴィは2階にある医務室の前まで来ていた。思ったよりも時間に遅れてしまった気がする。廊下には夕食の片付けをしている人たちの姿が目立った。シルヴィは医務室の扉をノックすると、中からの返事を確認して扉を開ける。

「ああ……入りなさい、2人とも」

ガセトさんは僕等に椅子をすすめてくれた。患者用の小さな椅子だ。僕等は並んで椅子に座ると、机の前で難しい顔をしているガセトさんを見た。シルヴィがふと首を傾げる。

「……ガセト、どうかした？」

シルヴィの言葉に、ガセトさんはふう、と重い溜め息をついた。僕はふと嫌な予感を覚える。

ガセトさんはチラ、と窓から下に視線を向けると、改めて僕等を見た。木製の椅子がギシ、と音を立てる。

「つい数時間前だが……『微睡みの庭』から男たちが来た」
「！」

ふと僕は顔を上げた。

「……メーリング家の屋敷が何者かに襲われ、当主と妹君が亡くなっていたそうだ」

血の気が引いた気がした。当主と妹君……おそらくそれは、ラフイタ・メーリングとライラ・メーリングだろう。2人が亡くなっていたということは……つまり、サーシャさんがジェイロードさんが屋敷に辿り着いたということだ。そしてどちらかが……預言書を手にした。

「近くにはこの世のものとは思えない化け物の死骸もあつてな……」

ガセトさんの話を、シルヴィは真剣な表情で聞いている。けれど僕は話の半分も耳に入っていなかった。あの2人が『微睡みの庭』を目指していたのは確かで、どちらかが預言書を手にしたということとは……最悪の場合の可能性もある。

「……メーリング家の使いの者達が、犯人を血眼になって探し始めている」

「……。ガセトのところ、来た？」

シルヴィがふと、そう呟いた。おそらくガセトさんの言葉の意味に気付いたのでろう。メーリング家の使いはおそらく、最近『微睡みの庭』から出た人間の情報を探している。勿論それは僕等のことだ。正確に言うなら、サーシャさんとジェイロードさんを指す。

ガセトさんはじつとシルヴィの澄んだ瞳を見つめ、そして溜め息をついた。

「……ああ。勿論、知らないとは伝えたが……」

「シルヴィ、奴隷に此処、連れてこられた。クリフも同じ。……奴

隷、シルヴィ達のこと知ってる」

例えばガセトさんが隠し通そうとしても、奴隷や街の人たちは見慣れない僕等のことを知っている。情報は、いつか何処からか漏れ出すもの。僕等もいつまでもこの場所にいることは出来ない。

ガセトさんは薄暗くなつた紺色の麻薬畑を見つめる。その瞳は何処か、物悲しい色をしていた。僕はふと首を傾げる。『微睡みの庭』がなくなれば、苦しむ人はいなくなるはずなのに。

声を掛けると、ガセトさんは困つたように視線を落とした。

「『微睡みの庭』の終わり、か……」

「どうかしたんですか……？」

いや、とガセトさんは首を振り、そして僕等を見た。さわさわと麻薬畑を駆抜ける風の音がする。重い口を開いて、ガセトさんは呟いた。

「あの庭がなくなることは……メーリング家が断たれることは、本当に良いことなのだろうかと思つたんだよ」

「ガセトさん……？」

薄暗い闇の中で、『微睡みの庭』はまるで海のようにだった。風に靡く草原がうねりを起こして、街へと襲いかかる。強い風がカーテンを揺らした。

このサナトリウムにいる沢山の人々が、その終わりを願っている。きつと当主の死の一報を聞けば、みんな喜ぶはずだ。虐げられることも、苦痛に耐えることもなくなる。平和が彼らに訪れる。でも。

「……クリフ君。キミにとってこの街はどう見える？」

「え？あの……」

この街。麻薬畑の隣にあつて、空気は汚いけれど栄えている港街。優しい先生のいるサナトリウムがあつて、街は入り組んでいるけれど様々な店が並んでいて……。良い所と悪い所を思い浮かべて、そして僕は気付いた。

この街は……『微睡みの庭』によつて存在している。

「旅人のキミには分かるだろう？グロツクワースやルクスブルムから比べれば、此処は猥雑で低俗だ。大国の都のように自身で栄えてきたわけではない……全ては、あの庭によつて形成された」

そして、とガセトさんは僕等を見る。

「あの庭がなくなれば、奴隷達は職を失う。……少ないながらもメーリング家から与えられていた供給が止まってしまう」

麻薬畑が機能を果たさなくなれば、街は衰退し、数多くいる奴隷も職を求めて彷徨うようになる。荒んでいた街が更に荒んでいく様が脳裏を過つて、僕は俯いた。

ガセトさんは窓を閉めると、カーテンに手をかけた。

「『微睡みの庭』は此処に住まう者にとって地獄だった。しかし……地獄がなければ天国もなく、天国もまた地獄になるかもしれない……」

僕とガセトさんを交互に見ながら、シルヴィは首を傾げていた。しかしすぐに、何かに気付いたように後ろを見やる。蝶番が音を立てて、扉が内側へと開いた。

ガセトさんが驚いた顔で立ち上がる。

「レンナート……！」

そこにいたのは、2人分の食事を手にしたレンナートさんの姿だった。白衣を羽織っているところを見ると、食事の介護の後に僕等を探していたのかもしれない。レンナートさんは夕食のトレイをテーブルの上に置くと、真っすぐにガセトさんに歩み寄った。

「お前、まさか聞いて……」

「大体の話は聞きました。先生……本当にそう思っているんですか？」

レンナートさんの目は真剣だった。いつもガセトさんの右腕として働いている彼がこんな険しい表情を浮かべているのは始めて見た。ガセトさんも困ったような顔を浮かべている。

「庭さえなければ……メーリング家さえいなければ、失われることもなかった命。貴方はそれを誰よりも見てきたはずだ！」

このサナトリウムで亡くなる人は数知れず。その一人一人をガセトさんは看取ってきた。そして経験は少ないものの、それはレンナートさんも同じ。真っ白な白衣を血で濡らして、病院中を駆け回って看病をする。助けを求められても、助かる人は一握り。

「街の衰退より、奴隷達の未来より、もっと大きなものをあいつ等は奪っていった」

多分、レンナートさんの怒りは、この街に生きる人の怒りなんだ。でも……だからと言って、ガセトさんの考えが間違っていないわけ

じゃない。僕は今にもガセトさんに掴み掛かってしまっそうなレンナートさんを慌てて押さえる。

「あいつ等さえいなければ……カロラだって!!」

「レンナート……」

ガセトさんは悲しそうに目を伏せた。レンナートさんも誰かの名前を呟くと、体から力が抜ける。僕はレンナートさんを押さえていた手を離すと、沈黙に目を伏せた。シルヴィだけがキョロキョロと僕等を見回している。

暗く沈んだ夜の出来事だった。

第2章 3

預言書は真っ白なページで埋め尽くされている。指先で触れれば、微かに光が宿った。バラバラとページが捲れていき、そして白紙のページに文字が浮かび上がる。全ての始まり、原初の章。事の発端を暴く過去の預言書。

始まりが、ここに記される。

- Her destination -

フレイさんの手を離れた後は、全て簡単なことだった。地下通路に着地した私は、そこから脱出口を探し外へ出た。後は船に乗りながら情報を集め、ネオ・オリとアクロスの停戦を知った。どうやら戦いはネオ・オリ優勢のまま、アクロスが親書を送ったことにより終決したらしい。事実上のアクロスの敗北だ。

おそらく、ネオ・オリは大地の章を手に入れている。あの少年王が何を考えるかは分からないが、預言書を国という大きな組織が手に入れた以上、他国からの警戒が強まることは目に見えている。

「……」

私はネオ・オリの北東にある峰にいた。ネオ・オリの都が一望出来る崖の上。砂漠が見渡せるこの場所なら、部族の居場所も街の地

形も頭に入る。

ここ数日ネオ・オリの周囲を歩き回って、情報収集は万全だった。フェオール・マルスは現在、戦いによって疲弊した国力を立て直すべく、自国の強化に取り組んでいる。彼の傍には常に三大戦士の1人がつき、補佐及び警護を行っているという。

1人は他国に対する牽制を行い、もう1人は表には姿を現さない。恐らく、預言書絡みで動いているのだろう。先日私に忠告に来たフリッツ・コールのように。

「巧妙ですね。……彼らだからこそ、手を出しにくい」

あの3人はそれぞれ得手不得手を補うことが出来る。スピード、パワー、コントロール……どれを取っても隙のない完璧な壁。打ち破るには……壁が少しでも薄い場所を探すしかない。私は目を細めて城下を見やる。

三大戦士と戦うことは最初から覚悟している。しかし確実に勝利するには、狙いを定めなければいけない。誰から潰すのか。それが重要事項。

（士気を手折るにはジャン・ユサク）

彼を潰せば確実に事は進めやすくなる。しかし彼はあのメティスカの人間。戦いにおいて彼が優位に立つのは目に見えている。

（謀を断つにはフリッツ・コール）

参謀役でもある彼を消す事が出来れば、奇策にかかるともない。しかし彼は私の存在を警戒している。彼に戦いを挑むにはこちらもそれなりの戦略を立てなければ。

(……………そうになると、残るは……………)

テレジア・ケベリ。部族の中でも1、2を争う強力な戦士。得物はメイスだが、魔術をある程度使用する事が出来る。だが彼女は女性。2人に比べれば、多少戦闘能力に差が出る。

しかし、問題は、本人も、そして他の2人もそれを十分承知の上だということだ。おそらく私が彼女を狙う事も全て読まれているはず。

「……………」

私は静かに溜め息をついた。三大戦士は強い。しかし、ジェイロードはその更に上に行く。こんなところで……………足止めを食らうわけにはいかない。

全ては、ジェイロードを殺すこと。唯1つ、唯そのためだけに。

今ではもう通い慣れた、小さな工房の一室。エンディア諸国と呼ばれる群島の1つにこの工房はある。ミス・ジュリアを筆頭とした時計職人の子孫達が集まって出来た、小さなギルド。此処で殺人形は作られている。

俺は工房に足を踏み入れると、麗しのミス・ジュリアのいる2階に向かった。ジェイロードはいつも通り、一階のソファに座る。…

…相変わらず、愛想がないな。

「ミス・ジュリア！戦いから生還した俺に美しいその姿を見せて…」

おくれ、という俺の台詞は、突然開け放たれたメンテナンス室の扉の音にかき消された。派手な音をたてて、ジュリア嬢が外に出てくる。彼女は俺には目もくれず、2階の吹き抜けから1階のソファに座っているジェイロードに向かって怒鳴り声をあげた。

「ちょっと、ジェイロード！！どうゆうことなのか、説明してっ！！」

ミス・ジュリアの剣幕は相当なものだった。普段、俺に向かってこれくらい怒鳴りつけることはあっても、ジェイロードに向かってこれだけの態度を見せるのは初めてだった。

頭上から響く声に、ジェイロードは溜め息をついて見上げた。

「騒々しいぞ、ジュリア」

「っ、あのねえ！」

ジュリア嬢は吹き抜けの手すりから身を乗り出し、下にいるジェイロードを睨みつけた。その目は赤く、目尻に涙が溜まっているのが、横にいる俺からははっきりと見えた。

ふと俺はメンテナンス室の中を覗き込む。中央に設置された椅子は、シルヴィの為のエネルギーの充電装置だった。このメンテナンス室自体も、殆どシルヴィの調整用にジュリアが倉庫を直して作ったものだ。

それが今は、誰の姿もない。あるのはただ、椅子だけ。

「シルヴィがっ……シルヴィが、戻ってこないのよ!!」

どうして2人が戻って来て、シルヴィは戻ってこないの、と、ジュリアは枯れた声で呟いた。俺は呆然としたまま、部屋の中の椅子を見つめる。いつも任務を終えたあとは誰より早くこの椅子に座って眠っているはずのシルヴィ。その姿が、此処にはない。

ジェイロードは、ジュリアのところへ戻れと命令した。ここに戻り、待機しているのがシルヴィの最優先事項のはずだ。それがここに居ないということは、考えられる可能性は3つ。

俺達と離れた時点で、既にシルヴィは動くことの出来ない状況になっていたか。戻る途中で何かあったか。……シルヴィがマスターであるジェイロードの命令に背いたか。

「……シルヴィが？」

どれも状況としては最悪だった。ジュリアを見上げていたジェイロードは、視線を持ち帰ってきた預言書へと落とす。

俺は涙を拭うジュリア嬢の肩に手を置くと、1階のジェイロードに声を投げた。

「俺が探しに行ってくる。……しばらくはリリイ達の動きを見ることになるだろうし、いいだろ？」

ジェイロードはしばらく考えるように目を瞑ると、階段の上の俺を見上げた。

「アイルーク。……お前も此処に待機だ」

「！」

その言葉に、俺は驚いた。ジェイロードは荷物の中から預言書を

2冊取り出すと、奥の部屋へ向かって歩いていく。そこはジェイロードの寝室がある部屋だった。

ジュリアが抗議の声をあげようと、顔を上げる。しかし先手を打つようにジェイロードは言った。

「シルヴィには戻ってくるよう命令した。……戻ってこなければ、それまでの話だ」

「最低……っ、最低よ!」

ジュリアは俺の手を振り払うと、メンテナンス室へと駆け込んだ。大きな音を立てて扉が閉まる。一拍置いて、涙を流しているだろうミス・ジュリアの声が微かに聞こえてきた。

俺はギリ、と奥歯を噛んだ。ジュリア嬢の気持ちも分かる、そして……ジェイロードの言うことも正しいと分かる。

戻って待機しろと。そう言われた時のシルヴィの顔を今でもはっきりと覚えている。愕然としたあの表情は、今まで見たことのない顔だった。確かに、シルヴィは人形だ。俺達が、目的を果たす為の助けとなるように作った、殺人人形の1つ。

それでも……。

『シルヴィ……シルヴィ、嬉しい』

ああやって純粹に、俺達を慕う彼女を、人形と割り切ることが出来るだろうか。

「……ジェイロード」

寝室へと向かっていくジェイロードを呼び止める。その足は一度止まったが、俺の方を振り返ることも、言葉を発することもなく……その姿は扉の向こうに消えた。

夕日を見つめながら、私はふと思う。何故此処にいるのだろう、と。私には帰るべき場所があり、そして帰れと命令されている。それでも私が此処に留まっているのは……怖いから、だろうか。

「っ、ニ二ナ……」

あれから数日後、ニ二ナは静かに息を引き取った。皮膚の壊死は留まらず、弱い体は耐えることが出来なかった。私は毎日ニ二ナのために絵本を読みにきて、クリフもニ二ナのことを知ってからはいつも顔を出してくれていた。それでも、彼女は逝った。

「……クリフ？」

ニ二ナの病室には、レンナートとクリフと私が出た。レンナートはいつものように泣いていて、クリフは呆然としたまま、動けなくなっていた。

泣きながらも慣れてしまった手つきで処理を行うレンナート。クリフは私の言葉に答えることなく、ふらりと病室を出た。

今日は病棟全体が静まり返っているかのようだった。いつも聞こえてくる下の階の子供達の声も聞こえない。お葬式なのだ、ミリ

アムがそう言っていた。

「クリフ、どこ行くの？」

クリフの足は、まるで逃げるように上の階へと向かっていた。上へ、更にも上へ。私も入ったことのない階の、もっと上へ。

やがて階段は終わり、屋上に出た。柵すらなく、ただ強い風が吹き付ける、サナトリウムの屋上。メーリング家の麻薬畑が、夕日の向こうに輝いていた。

「……クリフ？」

クリフはただ、夕日を見つめていた。その背中が小さく見えて、夕暮れの中に消えてしまふのではないかと、私らしくないことを、考えてしまった。

静かに、風が通り過ぎていく。畑から抜けてきた空気はこの街の塵を含んで、海へと消える。

「人は死んだら星になるって……小さい頃、そう聞いたんだ」

私はクリフの隣に並び、空を見上げる。夕暮れの空にはまだ月すら浮かんでいなかった。それでもクリフは空を見上げて、そして呟く。

「だから、星の並びが昨日と変わらないなら……誰も死んではいないんだって信じてた」

「クリフ。それ……」

人の生と星の並びが関係するはずがない。人が死ぬと星になるという考えは、昔の誰かが生み出した愚かな思想。人は死ぬと、体は

腐り、やがてその屍は土に還る。ただ、それだけ。

でも。違う、と言いかけて、そんな非科学的なことは有り得ないと言いかけて、私の声は出なくなつた。

「誰もいなくなつてなんかいないって……信じていたかつた」

言葉を失ってしまったのかと思つた。データが破損して、何も言うことが出来なくなつたのかと思つた。思うように言葉が出てこない。どうすればいいのか分からない。こんなところで、エネルギーがつきてしまったのかと一瞬だけそう思つた。胸が痛いのも、体が動かないのも、全部そのためか、と。

けれど、そうではなかつた。

『シルヴィ』

あの声が、何処かで私を呼んでる。

「……」

私はクリフの右腕を掴んだ。どうすればいいのか分からなくて、何かしたいのに、どうしたらいいのか……思いつかなくて。

胸が痛い。そして、悲しい。これは、何。この気持ちは、何？

「……リ、フ」

クリフは泣いていた。空を見上げたまま、頬を伝う涙。何故だろう。それを見た瞬間、思考も言葉も、全てが止まってしまった。そして……何故だろう、そこにある涙が、全ての答えのような気がした。

苦しい。でも、そう感じているのは体じゃない。コードと信号で

作られた体じゃない。

『シルヴィ、泣いてる……？』

あの声が、まるで私のような口調でそう言う。そう、私みたいに。

(わ、た、し……？)

痛い。悲しい。そう悲鳴をあげているのは……わたし……。

『……シルヴィ』

うん。分かった。シルヴィ、やっと……分かった。痛いのも、怖いのも、嬉しいのも、悲しいのも、どうしていいのかわからないのも、声が出ないのも。

嬉しいという気持ちを理解したのも、悲しいという気持ちを理解したのも、全部同じ場所だった。機械の体を巡っても見えてこない、1と0が意味を成さなくなるほど深い深い奥底にあるもの。

そう。貴女は、私。私は貴女。シルヴィの……ココロ。

「クリフ……」

クリフまでいなくならないように、と私は両手を回して抱きしめた。慰めの言葉も、何も浮かんでこない。今までならただのエラーだと思っていたけれど、違う。

声が出ないなら、出さなくていい。喋ることだけが正しいことじゃない。だって、今、シルヴィはとても悲しい。クリフと同じように、シルヴィも……泣いている。

「はは……ごめん、シルヴィ」

クリフは目尻に溜まった涙を擦ると、悲しそうに微笑んだ。私はただ首を横に振る。私の様子がクリフがまた俯くと、冷たい風が屋上を通り過ぎていった。

私達は無言のまま、ただ麻薬畑に日が暮れていくのを静かに見つめていた。

第2章 4

再び朝が来る。昨日までいたはずの一人が欠けても、太陽はまた天に君臨する。今まで何とも思わなかったけれど、そんな世界の理に初めて疑問を抱いた。しばらく考えて私は納得する。

私は数字によって作られたけれど、世界は数字のうえに成り立っているわけではなく……1と0で計れないものがこの世の全てだということ。

- ガラスの瞳 -

日々が過ぎていくのは驚くほど簡単で、世界が元通りになるのも早かった。サナトリウムには新しい患者達が今日も運び込まれて、明日にはまた命を落とす者がいる。ニナナの死にショックを受けていた西の病棟の子供達も、しばらくするといつも通りの賑わいを取り戻していた。

でも、変わらないものも1つだけある。

「……………」

私は小走りに、街中を歩いていた。浮浪者がごろごろとしている道を見回して、ふと細い路地に目を留める。黒猫が顔を洗っている

小道は、たしか港の脇に出る近道だ。いつだったかレンナートがそう教えてくれた。

ガセトからもらった白い帽子を目深に被って、私は小道に足を踏み入れた。両脇に続く煉瓦の壁。その向こうから差し込んでくる光は、海の反射だろうか。

「……」

足下にいた黒猫が逃げるように道の先へと去っていった。私はその後を追って歩き続ける。

「クリフ……？」

視界が開けた。目の前に防波堤が広がる。北の方へ進めば、定期船が出ている港が見えてくるはずだ。

けれど私は、反対側へと足を踏み出した。防波堤の端に、探していたクリフの姿がある。クリフは腰を下ろして膝を抱えたまま、じつと海の向こうを見つめていた。

「……クリフ」

後ろから声をかけると、ふとクリフが振り返った。

「あ……ごめん、もしかして、ガセトさんに呼ばれた……？」
「ううん」

私はクリフの隣に座ると、首を横に振った。ガセトに呼ばれたわけじゃない。むしろ、ガセトもレンナートもシヨックを隠せないクリフの為に、しばらく暇を出そうと言っていた。

もともとクリフは患者の1人で、客人なのだから病院の手伝いを

する必要もない。それでもクリフは何かしら仕事を見つけて働いていた。私には今までそれが不思議だった。

「クリフいないから……探しに、来た」

「そっか……ありがとう」

力なく笑う横顔を見つめながら、私は考えていた。クリフがああやって忙しそうに働いていた理由は、もしかしたら私と同じなのかもしれない。何かしらの役目があれば、あの場所にいられる。何かしらの理由をつければ……元いた場所に戻らなくてすむ。

考えてみればクリフはサーシャ・レヴィアス達と行動していたはずだった。しかしあの『微睡みの庭』で発見されたということは、きっとあそこで何かあったのだろう。

『……クリフは何故、旅をしてるの？』

ふと、随分前に聞いたクリフの身の上話が蘇る。初めてクリフと出会い、ジェイの命を受けて暗示をかけたとき。アイルークは魔術によって暗示をかけると、あとは興味がなくなったようですぐにその場からいなくなった。

だから私は、残されたクリフにいくつかの質問を投げかけてみた。敵の情報を引き出してインプットするために。

『僕は……僕には、帰る場所がないんだ』

帰るべき場所は失われてしまったのだと、クリフはそう言っていた。その時は考えもしなかったけれど、それはどんなに心苦しいことなのだろう。私がジェイ達を失うのを恐れる気持ちと同じなのだろうか。

「……」

私はクリフの視線を追って海を見つめた。今日の海は静かで、風も強くない。空から降り注ぐ太陽の光が眩しい。水面が反射してキラキラと光る。

クリフはふとこちらを振り向くと、困ったように笑ってみせた。

「シルヴィ。……ごめん」

悲しい表情に、胸が痛んだ。クリフは二二ナの死の向こう側に、失った帰るべき場所を見ているのだらう。愛すべき家族と、それを失ってしまった不甲斐ない自分を。

私は唇を尖らせて、首を横に振った。

「……シルヴィ、今の言葉きらい」

自分でも何を言っているのか分からない。それでも少しだけ、心の中がざわついたのを感じた。

なんのために笑うのか。なんのために謝るのか。……どうして自分は謝らなければいけないのか。

「……シルヴィ？」

「シルヴィ、謝られたくない」

子供のようにそう言って、私はプイ、と顔を逸らした。そんな行動をとってから、どうしてこんなことをしているのだらうと、疑問に思う。自分でもよく分からない。分からないけれど、体が勝手にそう動いた。

クリフは本当に困ってしまったようだった。あたふたと、私の様子に慌て始める。

「あ、えっと、その……ごめん」

「……クリフ、また謝った」

「う、ごめ……あ」

慌てて口を押さえるクリフに、私は顔を横に向けた。クリフはしゅんと萎れてしまう。横目でクリフを見つめながら、私は一拍遅れて自分の行動の意味に気付いた。

謝られたくない。謝られてしまったら、自分は蚊帳の外になってしまう。関係がないのだと、関係がないから迷惑をかけてはいけないのだと、……そんなこと、思われたくない。

「……」

私は立ち上がって、そしてクリフの手を取った。そしてズルズルとその体を引きずって歩き出す。クリフはつままれた猫のような状態でこちらを振り返った。

「えっ、ちよっ……し、シルヴィ？」

「シルヴィ、やっぱりクリフ連れて帰る」

一人でぼつんとしていると、沢山の考えが頭の中に浮かぶ。そうゆうときは大抵良くない考えばかりが巡る。私も……同じだから。引きずられていたクリフは、手を離さない私に観念したのか、ゆっくりと歩き出した。少し遅れて私の後を歩く。2人分の影が手をつないだまま、小道の中に溶けていった。

ふと、クリフが呟く。

「シルヴィの手は…… あったかいんだね」
「……」

人形の指先に、温度はあるのだろうか。私は握っていない左手を見下ろして、そして静かに思った。きつとそこに温度などない。それでもクリフが言うのであれば……きつとそうなのだろう。

小道の黒猫が私達の姿に気付いて顔をあげる。硝子のように澄んだ瞳が、私達の姿をじっと見つめていた。

「……」

真っ白なページを捲りながら静かに溜め息をつく。窓から差し込む光が、変色した表紙を照らした。

稀代の魔術師ファールレンが創りし、過去の預言書。トウアスの崩壊と共に消え去った過去の文明の全てが詰め込まれた書。その背表紙には、古い文字で『3』という巻数が表示されていた。

「……陛下、いかがなされましたか？」

椅子に座りながら嘆息すると、フリッツが部屋の中に入ってきた。

「いや……」

首を横に振り、そしてもう一度手元にある書物に視線を落とす。過去の預言書、大地の章。アクロスとの戦いで手に入れた、唯一の戦利品だった。

アクロスとの戦いは海上戦こそ手間取ったものの、上陸さえしてしまえば制圧は簡単なものだった。また、アクロスを押さえたことでルクスブルムを牽制することも出来た。

フリッツは苦笑しながら窓の1つを開け放した。此処は余が昔から使っている寝室。当時、王位継承権の認められなかった余に与えられたのは、バルコニーすらない小さな部屋だった。窓の外には国が支配するネオ・オリの街並ではなく、部族が暮らす広大な砂漠が広がっている。

「……大地の章が5冊ある預言書のうちの3冊目というのは、考えさせられるものがありますね」

フリッツは外を見つめながら、ふと目を細めた。砂漠を見つめるとき、三大戦士は皆、同じ表情を浮かべる。今はネオ・オリという住処があつたとしても、やはり彼らの故郷は其処にあるのだ。

「何故だ？」

「『大地は全ての中心にあり、この地に立たずして生きるものなし』……砂漠に生きる全ての部族の、教訓のようなものですよ」

まるでジャンのようなことを言う。そう言いかけて、そして止めた。フリッツもゲイツ一族とはいえ、やはり砂漠に生きる者なのだ。厳しい暑さ、草木の育たない砂漠。そんな環境だからこそ、強靱な部族の誇りが生まれてきた。

余はもう一度手元の預言書に視線を落とす。フリッツ達によれば、

預言書は他に4冊あり、それぞれが違った情報を所有者にもたらすらしい。5冊揃えることができれば、それは過去に繁栄したトウアスと並ぶ知を手に入れることも容易い。

しかし、同時にそれ相応のリスクを覚悟しなければ。

「……………」

「……………。……………最近の陛下は考え事が多いですね」

フリッツが苦笑を浮かべた。余は肩を竦める。仕方がないことだ、余が考えるべきはこの国の未来、そしてこの国に生きる全ての者の幸せなのだから。

フリッツが続けて何かを言おうとしたとき、激しい音をたてて寢室の扉が開いた。急な物音に驚いてそちらを見る。

「フウ！一体、どゆことねっ」

「……………ああ、やっぱり来ましたか」

余の寢室だということを忘れていいのか、蹴破る勢いで入ってきたテレジアにフリッツは笑って見せた。テレジアはズカズカとフリッツに歩み寄っていく。

「こつなるだろうから、わざわざ文書で送ったのになあ」

「おうよ！ふざけた文書だから、わざわざ馬走らせて来たのん。

……………きちり説明してもらおうよ！」

ギツとフリッツを睨みつけるテレジア。余は話が分からず、ただ首を傾げる。テレジアがフリッツに食いついているのはいつものことだが……………。

余は椅子から立ち上がると、テレジアに問いかけた。

「何かあったのか？」

「何かあっても何も、フウが私に暇を出したねっ。この忙しい時期に！この大事な時に！」

返答によつてはメイスを振り回しそうな険相のテレジアに、フリッツは苦笑した。

「暇というか、暗に囿役になってくれと書いたんだけど……」

「囿役なんて暇与えられたのと同じねっ！アタシはあの女探し出して、一度殴らないと気が済まないのん！」

「ご立腹のテレジアと、困ったように笑っているフリッツを見比べて、余は首を傾げる。テレジアが囿役？あの女？殴る？話の意味が分からずポカンとしていると、フリッツがこちらに視線を向けて、なんでもありませんよ、と笑った。

「フウ、聞いてるね！？」

「はいはい。文句は後でジャンと一緒に聞くよ。……それでは陛下、失礼致します」

フリッツは余にそう言うと、暴れ出しそうなテレジアの背中を押して寝室を出ていった。しばらくテレジアの声が廊下に響いていたが、その姿が消えるとやっと城の中が静かになる。

余は首を傾げ、そしてもう一度窓の外から砂漠の果てに視線を向けた。

「大地は全ての中心にあり、この地に立たずして生きるものなし、か……」

ネオ・オリに必要なものは何か。今のままでは、いつかアクロスと同じように他の国に攻め込まれてしまう。今、この国の王として成すべきことは何なのか……。

荒れ果てた荒野の果てに、鷹が飛んでいくのが見えた。

第3章 1

どうするべきかなんて、最初から分かっているのかもしれない。逃げて、逃げて、逃げて……前に進もうと決めても、その足は動かなかった。ただ、目の前に突きつけられた真実を肯定すればいい。それだけのこと。

でも、肯定してしまえば……何かが音をたてて崩れていってしまふ。そう、僕は思った。

- 避けられない事実 -

また時は過ぎて、やがてまた新しい朝を迎える。サナトリウムの庭を掃除しながら、僕は麻薬畑の方向から昇る太陽を見つめていた。冷たい風が頬を撫でていく。今日もまた、早くに目が覚めてしまった。寝不足なのか風が目にしみる。

僕は深く溜め息をついて箒を動かした。木の葉が風に舞って、一度掃いた場所に広がる。それをもう一度かき集めては、風に遊ばれて……単調な作業を繰り返していると、考え事も頭から離れていく。

「……おはよう、クリフ」

ふと後ろから聞こえた声に、僕は驚いた。掃除に没頭していたと

ころだったから、誰かの気配に気付かなかった。振り返ると、レンナートさんが苦笑している。その手には一輪の花があった。

「驚かせたな。また掃除をしてるのか？」

「あ、はい。……レンナートさん、早いですね」

掃除に気を取られていたとはいえ、まだ日が出始めたばかりだ。レンナートさんは欠伸1つして、目を擦ってみせた。

「ああ。……というより、寝ていないんだ」

「え？夜に何かあったんですか？」

また患者が運び込まれたんだろうか。メーリング家の支配が崩れつつある今、奴隷の患者は以前より少なくなっているけれど……それでも病気や怪我を負う人は世の中にいっぱいいる。だからこの病院に休みはない。

レンナートさんは困ったように笑った。

「街の子で、何年前に流行病で治療した女の子がいるんだ。……その子が昨日の夜に体調を崩したとかで、家まで診にいつてきた」

ガセトさんもレンナートさんも、時々こうやって街の人のところへ出向いて診察したり、治療したりしている。普段は病院が忙しくて訪問もなかなか出来ないらしいけど、今はメーリング家の件があつてか仕事も少し落ち着いている。

「レンナートさんも、ガセトさんも、ゆっくり休んでもいいのに……」

「ははは、それはありがたいな」

いつそクリフが医者になってくれれば、もっとゆとりが出来るんだけどな、とレンナートさんは笑う。僕はその言葉に曖昧に笑った。ガセトさんたちのお仕事は本当に素晴らしいと思う。患者が医師に向ける信頼の眼差し。それを僕はここで何度も見てきた。

でも……多分、僕には真似出来ない。だってここは、何処よりも一番『死』に近い場所だから。

「……あの、ところでその花は……？」

暗い考えを振り払うように、僕は話題を変えた。

「ああ……その子の母親が帰り際にくれたんだ。いつもなら礼は断るんだけどな……」

ふと手元に視線を落として、レンナートさんは溜め息をついた。

レンナートさんが持っていたのは、この辺りではさほど珍しくない一輪の花だった。街から少し外へ行けば、麻薬畑の横に点々と咲いているのを見ることが出来る。

「……そういえば、手向けそびれていたな……」

レンナートさんは何かを思い出すように、目を瞑ったまま静かに呟いた。夕焼けの色をした花は彼の手の中で小さく震えている。それが風のせいではなく、レンナートさん自身のせいだと気付いたとき、僕はこの間から気になっていたことを思い出した。

『あいつ等さえいなければ……カロラだって!!』

元は奴隷の出身だとレンナートさんは言っていた。それが今はこ

の街で医者として働いている。詳しいことは分からないけれど、おそらく奴隷として生きていたレンナートさんはもう既に死んでいることになっているんだろう。

レンナートさんは花から視線をあげると、向こうに見える麻薬畑を眺めた。

「まだ俺が子供の頃、メーリング家の奴隷だった時にな……幼なじみの女の子が突然行方不明になった」

麻薬畑はどこまでも平坦で、緑の絨毯を敷いたように広がっている。僕もこの患者さんに聞いた話だけど、この畑で行方不明者が出ることは殆どないらしい。メーリング家の敷地は確かに広いけれど、生まれてからずっと其処で生きてきた奴隷達にとっては自分達の庭のようなもの。微睡みの庭で迷うのは大抵、新参者の飼い犬が、僕等のような旅人らしい。

だから……奴隷の中で行方不明者が出ると、『連れていかれた』ことになる。

「二日経って、三日経って、四日経って、五日経って……俺もその子の親と一緒に探しまわった。畑の西南の川、メーリング家の庭園近く、子供達の秘密基地、あの子が好きだったコスモスの花が咲く場所……」

朝日が緑の草原を照らし出し、レンナートさんは目を細めた。沢山の人生を生き、そして殺す、メーリング家の庭。麻薬畑がもたらすのは甘く混沌とした……永遠への微睡み。

「……1週間経って戻ってきたのは、見るも無惨になった屍だった。俺は彼女の両親が小さな墓を作るのを、ずっと見ていた……」

手の中で揺れる、小さな花弁。手向けそびれた花というのは、もしかしたらこのコスモスの花だったのかもしれない。秩序を意味する夕焼け色の花……。

レンナートさんは深く溜め息をついた。そして、ふ、と微かに苦笑した。

「あとは以前話した通りだ。メーリング家にたてついたことが原因で殺されかけて……俺はここでガセトさんに助けられた」
「……」

僕は何も言うことが出来ずに、ただレンナートさんを見つめる。本当は、簡単に言葉で片付けられた部分に一番重要なことが隠れている気がした。メーリング家に逆らうとどうなるか、僕にもなんとなく分かる。たった1人がやったことでも、その家族、関係者全てが責任をとることになる。責任とはつまり……。

レンナートさんは静かに朝日に視線を向ける。そこに広がる過去を見るように。そして微かに呟いた。

「人というのは薄情なものだよな。自分が死にそうなときは何も考えていないくせに……今頃になって思い出すなんて……」

扉を開ける音がして、私は溜め息をついた。ノックを無視すれば諦めてくれるかと思っただけで、どうやら彼は私が思っていたより紳士ではないみたい。私は大きく最後の息を吐いて、椅子から立ち上がった。目尻を擦って明かりをつけると、入り口に経っているジエイロードに視線を向ける。

「……………頼んでいたものは？」

弁解の一言もなく、彼はそう言った。言い訳を望んでいたわけじゃないけど、ここまで冷静だと怒りを通り越して呆れてくる。

私は無言のまま机の上に置いていた小瓶を手にとった。透明なガラスの瓶の中には微かに紫がかった液体が入っている。私は泣き腫らした顔を隠しもせず、ジエイロードに歩み寄る。

「……………はい。これでしょ、目的のものは」

「ああ。……………効果は？」

私は肩を竦めてジエイロードを見上げた。

「残念ながら即効性ではないの。でも……………そうね、貴方くらいなら1週間で『殺せる』わ」

精一杯の嫌味を込めて私はそう言う。ジエイロードは端正な顔を曇らせることもなく、私から小瓶を受け取った。本当に……………その顔を見ていると悔しくなるわ。

「……………」

彼はじっと小瓶の中の液体を見つめる。これは、ジエイロード達が持ち帰ってきた万物の章を利用して、私が作った毒薬のようなも

の。毒、と呼ばないのには理由がある。

私は机の上に散らばった資料の1つをつまみ上げた。

「生物実験は分野じゃないから、なんとも言えないけど……一応、成功と呼べる程度の結果は出てるわ」

それにしても、と私はジェイロードを見上げる。今日はなんだか全てが静かな気がする。いつもは五月蠅いアイルークも何処かにいったのかしら。それとも……この人と2人きりだから、そう思うのかしら。

「貴方は眠り姫でも作るつもり？……急にこんなもの作れだなんて」

小瓶の液体は、人の心臓を止める遅効性の薬。勿論、私みたいな人間には普通の毒薬だけれど……ジェイロードのような人間にとつては、心臓の動きを止めることは死ではなく眠りを意味する。

永遠の眠りを生む薬。言葉だけはロマンティック。

「……随分刺のある言い方だな」

珍しく、ジェイロードがそんなことを口にした。私は彼の手の中にある薬を奪い取ると、机の上に戻す。貴方は本当に、仕方のない人なのね。アイルークだったら一発殴るわ。

私はまた目尻に溜まってきた涙を拭いた。ごめんね、シルヴィ。

貴方の大好きなご主人様に一言だけ言わせてもらっわ。

私は彼の碧眼を真つすぐに見た。

「ジェイロード。貴方って馬鹿ね」

きっと思いきもしない言葉だったんだと思う。彼は瞬きをすると、

少しだけ首を傾げた。

「……初めて言われたな」

「でしょうね。だから言わせてもらおうわ」

アイルークからジェイロードの過去は聞いた。本人の口から聞かせてもらえなかったことは腑に落ちないけれど……でも、そんなことはどうでもいいの。

「ジェイロード、貴方は分かってない」

「……」

そうやって考えるのは、多分別のことでしょう。きっと貴方には私の言葉なんて理解出来ない。そう、貴方は頭が良過ぎるから。だからきつと、単純で簡単で、普通の人なら分かるべきことが分かっていない。

でも……誰にも、貴方の馬鹿さ加減を口に出来る人はいないわ。

「何のことか分からない？」

「……ああ」

私は肩を竦めてみせた。言葉で教えることは簡単だけど、それは本当に理解したことになる。だから……私の口から答えは言わないわ。貴方自身が気付かなければいけない。それを彼が気付くかどうかは別の問題としても。

私は窓から外を見る。もうすぐ夜が来て、そしてまた朝が来る。あと何回か同じことを繰り返したら、また彼はここから出ていくのだらう。

「悩んでみればいいのよ。……答えは、次に戻って来た時に教えるわ」

きっとその時には、彼は過去の預言書を全て手に入れるだろう。その時に彼が此処に戻ってこようとするかどうかは分からないけれど。

夕焼けが街並に沈んで、夜の風が窓を叩いていた。

第3章 2

祈り。神に加護を請い願うこと。存在しないものに向かって人は祈る。そこにどんな願いがあるのか、私には分からない。でももし、私が祈りを捧げるとするならば……神という偶像は、人形の私の声を聴いてくれるのだろうか。

- フェイル・セーフ -

サナトリウムの患者の中には、信仰心に厚い者達が多い。彼らはいつも決まった時間に祈りを捧げ、決まった文句を口にする。それが生来の習慣なのか、それとも九死に一生を得て生まれた信仰心なのかは分からない。彼らの習慣は私にとってはとても奇妙なものに見えた。

「?……シルヴィ?」

ふと、病室の前で立ち止まった私に、前を歩いていたクリフが気付いて振り返った。私はじっと病室の中を見つめる。中では1人の患者が昼食を目の前にして何かを呟いている。十字を切る手の動きを見て、私はまた祈りの時間なのだと思う。

「どうかした？」

クリフが戻って来て、私は首を横に振った。なんでもない、ただ祈りの動作が物珍しくて眺めていただけのこと。

私はふとクリフを見上げた。

「クリフは……神って、いると思う？」

「神様？」

唐突な質問にクリフは首を傾げた。思えば、クリフがあのお客様のように習慣的な祈りを行っている様子を見たことはない。

クリフは少し困ったような顔をして、そして視線を落とした。

「昔はいると思ってたよ。でも……今は分からない、かな」

神というものは、禍福を霊的なものとして神格化したものだ。そもそもそんなものが存在したという証拠も、情報も全くない。魔術師が使役する精霊は霊的な力を持っているけれど、彼らは人と同じように得手不得手があり、欲を持つ。そこから考えると、神というのは非現実的な存在でしかない。

「……」

そんなものはない、とそう言いかけて私は口を閉じた。私の考えは間違っていない。間違っているとは思わない。けれど……あの患者のように、何かを信じようとする心を否定することは出来ないのだと、胸の中でそう感じた。

そして同時に、クリフが『分からない』と言った言葉の重みも感じた。切なく、そして悲しい記憶が詰まった答え。

「……………」

ふと、私は違和感を感じて胸を押さえた。なんだろう、一瞬だけ体の奥に走った痛みは。私は胸においた右手を握りしめる。微かに感じる違和感、そしてチリチリと痛む体。

「シルヴィ？」

私の様子に気付いたのか、クリフが顔を覗き込んでくる。私は激しく首を左右に振った。大丈夫、大丈夫……。クリフに、そして自分にそう言い聞かせながらも、私は心の何処かで分かっていた。

この痛みは、違う。ココロの痛みではない。これは……これは……。

「……………シルヴィ、ガセトに呼ばれてるから……………行く」

振り絞るようにそう呟いて、私は駆け出した。後ろでクリフが叫ぶけれど、私はそれを無視して廊下を走る。追い越した数人の患者達が不思議そうな顔で私を見ている。

気付かれたくない。気付いて欲しくない。握りしめた右手に力が入る。

「……………ヴィ、……………、シル……………」

雑音に紛れた向こう側で、私を呼ぶもう一人のワタシ。人形の……作られた機械のワタシが、私を呼んでいる。

階段を駆け上って、自分の部屋へと私の足は向かっていた。自分の声を振り払うように走る。けれど胸の奥から広がり始めたエラーが完全に思考を奪って……。

私は、体の制御を失った。

目を覚ましたとき、私は診察室のベッドに寝ていた。意識が再び私の中に戻ってきたかのように、体がスツと軽くなる。私は再び自分の胸に手をおいた。そしてほっと安堵する。まだ……大丈夫。

ふと物音に気付いて、私は入り口の方に視線を向けた。扉の近くにある机で、ガセトが何か作業をしている。私は体を起こすと、その背中に声を投げた。

「…………ガセト」

机が体に合わないのか、丸くなりながら書き物をしていたガセトが、私に気付いて振り返った。

「ああ、シルヴィ。…………気がついたのか」

「…………うん」

私は視線を落として頷いた。ガセトは椅子から立ち上がって私に近づいてくると、頭を撫でながら優しく笑う。

「もう少し横になっているといい。…………具合は？」

診察室のベッドを占領するのはガセトに悪い気がした。自分の部屋に戻ろうかと思ったが、窓から外の様子を見て納得する。先ほどまで天高く昇っていた太陽が、もう街の中に沈んでいる。橙色の光が診察室を満たしていた。

「体、ちよつとだけ痛い。それより……」

ガセトに促されてベッドに横になると、私は腕で顔を隠した。体から込み上げる何かを感じながら、それが形として現れない悲しさ。人形の私には涙が出ない。

震える体を慰めるように、ガセトは私の頭を優しく撫でる。

「ガセト……クリフに、言った？」

「いいや、言っていない。クリフにも、レンナートにも」

ガセトはもしかしたら、分かっているのかもしれない。神がこの世に存在しないのと同じように……心を持つ人形が存在し続けることが、どれだけ非現実的で不可能なことをか。ガセトは医者だ。人の皮を被った人形に心が宿ること自体、信じられないのが本音だろう。

それでも、クリフやジェイとは違う大きな手に、私は静かに泣いた。

「シルヴィ……シルヴィ、やだ……」

子供のように、駄々をこねる。口から流れ出ていくのは、自分でも信じられないくらいに、単純で滑稽な我が侷だった。

それでもガセトは何も言わずにそれを聞いてくれる。

「シルヴィ、戻りたくない……消えたくない……」

だって、まだ分かりはじめたばかりなのだ。数値化された世界が1つ1つ色を与えられて、私の前に色鮮やかに浮かび始める。硝子の瞳に映る全てのものがあたたかくて、時に冷たくて、そして優しく。

1と0で表すことの出来ない世界。そして、それを感じる『私』という心。

「……此処にいたい……」

ジェイロード達のいる場所も好きだけれど、私はこのサナトリウムも好きだった。生と死がめまぐるしく訪れる、出会いと別れの場所。ガセトがいて、レンナートがいて、あの病棟の子供達がいて……クリフがいる。

胸が痛い。体の痛みに反応するように、バグを起こしたシステムが警告を伝えている。このままでは、メモリーに損傷を与える、と。

「シルヴィ……、まだ……」

体の制御機能が、不安定な体を守る為に一時的に意識を断ち切ろうとする。それはまるで眠るような感覚に似ていた。ぼんやりと霞む意識の中で、クリフのことが浮かぶ。

港で、悲しそうに海を見つめていた横顔。忙しく振る舞いながら、大切な何かを忘れようと必死になる姿。

「……リ、フ……」

あのとき、謝って欲しくない、と私はクリフを困らせた。あの時は自分でも何故心の中がざわついたのか、分からなかった。でも、今なら分かる気がする。

私の心にクリフのことがあるように、クリフの心の何処かに私がいてほしかった。

意識はやがて途切れ、そして体の機能が再起動される。今まで幾度となく体験してきた感覚なのに、それが気持ち悪くて仕方なかった。それはまるで、お前はただの人形でしかないのだと……そう私に伝えているかのようだった。

砂を踏む音が辺りに木霊している。一人分の足音を聞きながら、私は岩場の影に身を潜めた。

ネオ・オリから離れたアルジェンナ砂漠の一画に、遊牧民族の占有牧地が存在する。三大戦士を有する一族の中でも一番アクの強い、ルヴァの生活地域だ。灌木が疎らに存在するカンポに生きる彼らは、一年を決まったルートで移動する。彼らの行う牧畜は自らの生活の為であり、実際は岩塩による交易や、少数民族とネオ・オリの定住民との間で行われる交易の護衛を行うことで生活している。

「……」

馬を引いてきたテレジア・ケベリが、辺りを警戒するように見回した。私は小さく溜め息をつく。どうやら彼女は数週間前に暇を出されたらしい。ルヴァ一族の牧地で1週間を過ごし、ネオ・オリへ

戻ろうとしている。一族のもとにいる時も、彼女の警戒は途切れなかった。やはり、こちらが誰に狙いを定めるか、相手は分かっているらしい。

私は岩場に腰を下ろすと、静かに息を吐いた。テレジアさんに強襲をかけるには、これが最後のタイミングになる。彼女が城に戻れば、状況は一変して不利になることは明確だった。しかし、畏だと分かっている飛び込むのはあまりにも危険が多い。

（随分と慎重ですね……）

クツ、と私は自嘲の笑みを漏らした。視線をあげると、砂漠の向こうにネオ・オリの城が見える。城塞のような城が見下ろす大地。

（不利……ですか）

おそらくこの状況を作ったのは、フリッツ・コールの策だろう。わざとテレジアさんを泳がせ、私が攻撃してくる隙を狙う。姿こそ見えないものの、近くにジャン・ユサクかフリッツ・コールが潜んでいる可能性もある。

私はふと、握りしめた拳に力を入れた。

（関係のないこと、ですね）

不利だから何だと言うのだ。私に死なない命があるとすれば、どんな状況であれ好機に変えてみせる。たとえ三大戦士を……このネオ・オリという国を敵に回しても。

そう、私が抱くのは恐怖ではない。

「……」

立ち上がるのと、岩場に手をついた。もう片方の手でクロノスを手にする。ヒュペリオンを使うまでもない。相手はテレジア・ケベリ。三大戦士を同時に相手するよりも、一対一の状況を作り出すことが先決。

砂漠特有の砂を含んだ風が吹き荒れた。ふと、彼女が何かの気配に気付いてメイスに手をかける。馬の手綱を離し、そして視線をネオ・オリの都の方へと向けた。

「……！」

片足を立てた私は、咄嗟に岩陰に戻った。そこに思わぬ第三者の姿が現れたからだ。テレジアさんは風が止むのを待って、呆れたような表情でメイスを担ぎ直す。

「……兄さん。奇襲はもと密かにやるものね」

向こうから現れた人影は、目深に被っていたローブを下ろした。脇に抱えた本は預言書の原初の章。私は額を押さえて溜息を漏らした。

フレイさんは大袈裟に溜め息をついて首を鳴らすと、テレジアさんに向き直った。

「別に、奇襲をかけたわけじゃねえっての」

「それならデートお誘いのん？」

くしし、とテレジアさんはからかうように笑った。それでもその瞳には警戒心が露になっていた。フレイさんは預言書を手に取ると一瞬だけ辺りを見回し、鼻を鳴らした。

「馬鹿言うな。……外野が三人もいる状態でデートもクソもあるか」

「！」

次の刹那、私は殺意のある視線を感じて飛び退った。いつの間に現れたのか、大きな影が岩陰を黒く覆っている。振り下ろされるコルセス力を辛うじて避けた私は、テレジアさん達の前に躍り出る。

小さく舌打ちをして、私はジャン・ユサクを睨みつけた。よく見ると、離れたところにフリッツ・コールの姿もある。故郷と呼ぶこの地ではやはり彼らの方が一枚上手のようだ。

「サーシャ！」

いきなり現れた私に、フレイさんが叫ぶ。私は苛立ちを覚えながらそちらに視線を向けた。預言書を手にしているということは、それを使って私の居場所を探し出したのだろうか。

「フレイさん。……私は1人にして欲しいと言ったはずですよ」

言葉が理解出来ないんですか、と毒を吐く。よりにもよって、ネオ・オりに預言書を持つてくるとは。これでは獲物が敵の巣穴に自ら入りにいくようなものだ。

「あんな急な別れ方で納得出来るか、馬鹿女！」

フレイさんはいつも通り、眉間に皺を寄せて叫ぶ。私は溜め息をついて彼の言葉を見殺した。そして利き手に持ち替えたクロノスを三大戦士に向ける。

状況は最悪に近かった。最も相性の悪いこの3人を、フレイさんという厄介者付きで相手にしなければいけないのだから。

向こうから歩いてきたフリッツ・コールが自然な動作で剣を抜く。

「楽しそうだね。痴話喧嘩もほどにしないと、痛い目を見るよ？」
「ご忠告ありがとうございます。貴方がたを駆逐したら、コレも解雇することになりますよ」

私は親指で後ろのフレイさんを指さすと、戦闘態勢をとった。乾いた太陽に照らされ、クロノスが鈍く反射している。

第3章 3

走っても走っても、目の前に広がるのは炎だけだった。激しい音を立てて燃え上がる建物を見つめて、僕の手から剣が滑り落ちる。頭の中は真っ白だった。やがてそれが目の前の建物が崩れ落ちるのと共に、僕の頬を涙が伝った。

神様、神様、お願いです。僕はもう人を傷つけることはしません。だから、返してください。僕の大切な、大切な人達を。

- アポカリプス -

激しいノック音に眠りを妨げられ、僕はベッドから体を起こした。考え事をしながら横になったせいも、深く眠れなかつたらしい。僕は首を鳴らしながら、絶え間ないノック音を響かせる扉へと向かった。

「クリフ、いるか!？」

レンナートさんの声だ。鍵をかけたドアノブがガチャガチャと動いている。僕は慌てて鍵を外すと、レンナートさんを迎え入れた。

「ど、どうしたんですか……?」

レンナートさんの背後にある窓は、まだ夜の色に染まっていた。どうやら眠れなかったというよりも、横になってからさほど時間が経っていないらしい。

レンナートさんは強ばった表情で僕の腕を掴むと、窓際へと引張った。

「メーリング家の使者だという男が来た」

「え……？」

よく見ると、廊下では何人も病人達が様子を窺うようにして窓から下を見つめていた。患者達に混じって、僕も入り口に視線を向ける。十数人の男たちを前にして、ガセトさんが何かを話しているようだった。表情から察するに、あまり良い話ではないらしい。

レンナートさんは僕の隣で、師であるガセトさんを心配そうに見つめながら言う。

「……どうやら奴らはキミ達を探しているらしい。街の誰かが、キミ達がここにいることを喋ったんだ」

「で、でも、どうして僕たちを？」

僕たちはメーリング卿から過去の預言書を奪いに来た。それは確かだ。でもここ数日の『飼い犬』達の動きを見る限り、犯人の特徴は掴めていないようだった。それがどうして、僕とシルヴィをターゲットとして追い始めたのか。

それに、メーリング家の人間はメーリング卿と呼ばれたラフィタ・メーリングと、その妹ライラ・メーリング以外に存在しない。

「奴らは、メーリング卿が殺された日に、あの庭から助け出された人間に目星をつけたらしい」

「でも！『微睡みの庭』はもう機能を果たしていないはずじゃ……」

僕の言葉に、レンナートさんは首を横に振った。そして視線をガセトさん達へと向ける。いつの間にか、十数人いた男たちバラバラと散っていき、ガセトさんの前には2、3人が残された。

レンナートさんは呻くように言う。

「おそらく……『飼い犬』達が勝手に動き出したんだろう。仇と称して犯人を捕らえ、あの庭を支配すれば……メーリング家の富も名声も手にすることが出来る」

くそ、と壁を蹴る音。僕は愕然としたまま、サナトリウムの門を見つめていた。廊下には患者達のざわめきが木霊している。不安と恐怖が入り交じる中、ふと病院の扉を開けて出てきた人の姿に、ざわめきが色を変えた。

僕は驚いて窓に手をつく。

「……シルヴィー!？」

少し重い扉を押し開けると、冷たい夜の空気が首筋を通り過ぎた。私は一步、一步とサナトリウムの門へと近づいていく。最初は私の姿に気付かなかった『飼い犬』達が、ふと口元に笑みを浮かべて私

を見た。振り返ったガセトが驚いた顔で言う。

「シルヴィー！」

「ほらな、先生。……やっぱりアンタが匿っていたわけだ」

私はじつと飼い犬達を見る。どうやらライラ・メーリングと戦った時にいた者とは違うらしい。私はメモリを遡りながら、相手を確認した。

ガセトは私の肩を掴むと、強ばった表情を浮かべた。

「何故出てきたんだ、シルヴィー」

「……」

私は何も言わなかった。飼い犬の判断はあながち外れていない。見ていたわけではないが、おそらくメーリング兄妹を殺害したのは、ジエイカ、サーシャ・レヴィアスのどちらかだ。なら、私とクリフが追われるのも当然といえば、当然のこと。

私は飼い犬達に視線を向ける。

「シルヴィー、ちゃんと出てきた。……ガセトも、病院も関係ない」

「シルヴィー！」

ガセトの手を振り払って、私は男たちの前に立つ。彼らは私が近づくと、それぞれの得物に手を伸ばした。やはり私の情報も飼い犬達に伝わっているらしい。

リーダー格らしい男が、私を見て不敵に笑う。

「さて、どうかな……此処にいるやつらが共謀してやった可能性も
少ない」

私はハツとして辺りを見回す。思えば、十数人いた飼い犬達は何処へ散つていったのか。嫌な予想が頭を駆抜ける。男たちの嘲笑を目の当たりにして、私は振り返った。

刹那、私の前に浮かび上がった光景に、私は強い衝撃を覚えた。

「！」

まるで合図でもしたかのように、病院の左右から炎が燃え上がった。病棟から悲鳴と、恐怖の叫びが聞こえてくる。真つ赤な炎は操られるかのようにサナトリウムを囲つていった。

私は飼い犬を睨みつける。

「これは……」

「勿論、俺達の庭にまで火が回らないように、少々細工をさせてもらったぜ、先生。おかげでご訪問が夜中になつちまった。なァ？」

男たちの笑い声が、ふつふつと私の中の何かを煮え滾らせる。体の中に、コードを溶かすような熱があるのが分かる。この人たちはサナトリウムを壊そうとしている。麻薬畑の隣に存在する、奴隷達の唯一の救いを。地獄の中にある小さな安息の場所を。

自分達のくだらない欲のためだけに、人の命を奪おうとしている。

「……………シ」

私は左手で顔を覆った。男たちの表情がサツと曇る。メーリング家の犬として使われてきた彼らなら分かるはずだ。私が創られた人形であること。

コードの何処かがスパークする音が聞こえた。電流の衝撃がはしる。

本当は、無謀なことだと分かっている。もう存在するだけで精一杯の体を動かすことは。それでも……私は私の気持ちに嘘をつきたくない。だから、呼ぶ。

「状態異常、損傷26パーセント……システム移行します。25パーセント、50パーセント、75パーセント……」

来て、人形のワタシ。

「……攻撃パターンR、起動します」

火の手があがったのは、患者達の混乱ですぐに分かった。僕は自分の部屋からレイテルパラッシュを手にとって走り出す。レンナートさんもまた、ただならぬ気配を察して僕と一緒に階段を駆け下りる。

入り口から外に飛び出すと、炎で照らし出された門の前に人影が見えた。

「っ、シルヴィー！」

僕は咄嗟に叫んでいた。シルヴィーは自分より大きい男の首を掴ん

で持ち上げ、苦しむ様子をただ見つめていた。周りには数人の屍が倒れている。シルヴィの腕には血液が飛び散った跡が残されていた。シルヴィの目は虚ろだった。生気のない瞳が、死にいく人間の最後を見つめている。

「駄目だよ、シルヴィー！」

駆寄るのが遅かったのか、それとも止めるのが遅かったのか。僕の目の前で、人の皮膚が千切られた。腐った果実を握りつぶすように、首の皮膚の中に指が食い込み、骨を砕き、胴体と頭部を繋ぐものは皮だけになる。

嫌な音をたてて血と、肉と、骨の一部が地面に落ちた。胴体からは微かに空気を求める音が続いていたけれど、しばらくするとそれも止んだ。

「うつ……」

僕はそれ以上シルヴィに近づくことが出来なかった。シルヴィは男が絶命したのを確認すると、まるでゴミでも放るような動作でその体を投げる。

「……」

シルヴィは男たちに反撃する力がないことを確認すると、ゆっくりとこちらに視線を向けた。色のない、ガラスの瞳。僕等が今まで相手にしてきた、殺人形達と同じ目だった。

後から走ってきたレンナートさんが、辺りの惨状を見て顔を顰めた。ガセトさんはシルヴィの背中を悲痛な表情で見つめている。

「……」

僕の頭の中は混乱していた。更に燃え上がる炎に照らされる、鮮烈な赤。体が間違った方向へと折れ曲がった屍、首を握りつぶされた男。千切られた誰かの腕が微かに痙攣している。そして血溜まりの中に散乱する、人を作る内容物。

思考は意味を成さなかった。こんなに酷い惨状を目の当たりにして吐き気が起きないのは、もしかしたら頭が正常に動いていなかったからかもしれない。天と地が分からなくなるくらいに、僕は何も分からなくなっていた。

死んでいる。殺された。足下に転がる、人だったものの屍。

「……シルヴィ」

沈黙の中で重い口を開いたのはガセトさんだった。医者として見慣れているせいか、この状況の中で冷静に言葉を発することができ

る。シルヴィはガセトさんに呼ばれると、すぐにいつもの瞳の色に戻った。けれど頬に飛び散った返り血は消えない。

「シルヴィ、クリフ。よく、聞きなさい」

ガセトさんは僕等を見て、静かにそう言った。僕は名前を呼ばれて初めて、死体に釘付けになっていたことに気付く。

「東の病棟に行きなさい。裏の林を抜ければ、港に抜けられる」
「……ガセト」

シルヴィが、掠れた声で呟く。ガセトさんは首を横に振ると、僕に視線を向けた。

「港の漁師とは顔見知りだ。……私の名前を出せば、船に乗せてもらうことも出来るだろう」

「でも、それじゃあ……！」

ガセトさんたちはどうなるのか。火の手は早く、徐々にサナトリウムを飲み込みつつある。患者達の悲鳴が木霊するこの状況で、僕たちだけ逃げ出すなんて……。

ガセトさんはレンナートさんに視線を向けると、目で何かを訴えた。小さく頷き、そしてレンナートさんは僕等の背中を押す。

「……おそらく、さっき散っていった奴らは此处を囲んでいる。見つかからないようにな」

「レンナートさん！」

僕の言葉に、レンナートさんは肩を叩いた。

「大丈夫だよ、クリフ。病院のことは任せてくれ」

ガセトさんが火の周りの激しい西の病棟へと向かって行く。レンナートさんはそれを確認しながら、炎に照らされた顔で笑った。

「死にはしないさ。……こつゆう場面は二度目だからな」

第3章 4

気がかりなことがいくつも頭を過ぎ去っていく。1つ1つの問題を吟味することもなく、ただ流れていくだけの項目。掴もうと手を伸ばすのに逃げていく答え。問いがなければ答えも紡ぎ出すことは出来ない。

私は、一体何を願っているのだろうか？

- アベンド -

炎が燃え盛って、行く手を阻む。それでも僕等はガセトさんに言われた港へと向かって疾走していた。病棟を抜け、裏の林へ。徐々に遠のいていく混乱のざわめきに後ろ髪をひかれながら、僕はシルヴィの背中を追っていた。

道なき道を走りながら、月が照らし出す斜面を駆け下りる。冷たい風が焦げ臭い匂いを運んできては、僕の心に後悔と悲しみ、そして恐怖を生まれさせた。

「……っ」

いつもそうだ。肝心なところで踏みとどまる勇気がない。そして後になって後悔する。後悔は1つ1つ積み重なって行って、その重

みに僕は押しつぶされそうになる。

『……いつも逃げてばかりの貴方に言われたくはないですね』

サーシャさんの言葉が脳裏に響く。逃げてると、サーシャさんを非難しながら、逃げ腰だった僕。レイテルパラッシュを抱えたまま、鞆から抜くことも出来ずに。

これを抜けば何かを失うんだと、そう思って……思い続けて。

「……ハア、ハア……」

息を切らしながら、ただシルヴィの背中を追う。その服に飛び散った鮮烈な赤。乾き始めた血液が、徐々に変色していく。どうしてだろう、その姿はまるでシルヴィではない別物のように思えた。

本音を言うならば、僕は恐怖していた。あの時、飼い犬達をあんな風にしてしまったシルヴィに対して。人の命を、何の感慨もない顔で奪ってしまう小さな体。その横顔は、僕等が戦ってきた殺人人形だった。

「クリフ」

「っ！」

急に名前を呼ばれて、僕は思考が読まれてしまったのかと肝を冷やした。けれど、振り返ったシルヴィの表情はいつも通りの顔で、右手が林の先を指さしている。

木々の間から見えるのは、月が照らし出す港の風景。林を抜けたんだと、僕はやっと気付いた。

「ハア、ハア……っ、とにかく、船を探さない……！」

林を抜けたからといって、まだ気を抜くことは出来なかった。僕の隣で足を止めたシルヴィは、汗1つかいていない顔で、息を整える僕を見つめている。その瞳が何かを訴えていることに気付いて、僕は首を傾げた。

「……………シルヴィ？」

「……………クリフ。クリフは……………」

シルヴィが何かを問いかけようとしたとき、林の向こうから足音と人の声が聞こえてきた。数人の気配が近づいてくる。

「いたぞ！」

「おい、こつちだ！」

松明の光が徐々に僕等を包囲していった。僕は体を強ばらせる。シルヴィは口を真一文字に結ぶと、一步前へと出た。

現れた飼い犬達は7、8人だった。おそらく門の前にいた仲間が殺されていることに気付いたんだろう、おのおのが得物を手に取って、臨戦態勢をとっていた。

「見つけたぞ……………情報通り、殺人人形と剣士の男だな」

「他の仲間は何処へ行った？」

海を背にして、僕等は囲まれていた。シルヴィはジリジリと間合いを計りながら、男たちに向かって言う。

「ジェイ達、此処にいない」

「……………預言書はどこにやった」

過去の預言書。おそらく飼い犬達もメーリング家の敷地を探し尽

くしたんだろう。それでもなかったということは、やはりジェイロードさんか、サーシャさんが万物の章を手にしたということだ。そうになると、殺したのもやっぱり……。

「……シルヴィ達、知らない」

シルヴィは首を横に振る。だからといって見逃してもらえないはずがないことを、僕もシルヴィも分かっていた。僕は震える手でレイテルパラッシュを抱きしめる。男たちは今にも襲いかかってきそうな勢いだっただ。

男の1人が声をあげる。

「知らないはずがあるものか。……まあ、いい。痛めつければ泣いて在処を吐くだろう」

暗闇に光る鋭利な刃物。それを目の前にして僕は、また……足が動かなくなっていた。

男たちのよく分からない声が木霊している。聴覚機能にも異変をきたしたのか、彼らの言葉の1つ1つを理解することが出来なかった。

ただ、危険信号が導くままに体が動く。自己防衛機能が自動で起動し、私は臨戦態勢に入った。ワタシがわたしをかき消していく。人間の本能というのはこんな感じなのだろうか。体が勝手に動く。ただ人と違うのは、これが全て数値によって割り出された行動だということ。

「攻撃パターンZに移行します」

自分でも恐ろしい声だった。ただ、プログラムの変更を伝える事務的な言葉。

私は剣を片手に飛びかかってきた1人の頭上高くを、体を反転させながら飛び越した。飼いだ達の真ん中に着地すると、飛んできた槍を左腕で受けとめる。ミシ、と強い力に腕が軋んだ。

「ターゲット確認中……登録メンバー照合」

唇から流れ出る、繰り返される言葉。私は右手を強く握って、そして開いた。激しい電流音と共に皮膚の上で小さなスパークが起きる。

私は構わず、槍の反対側から襲いかかってきた男に蹴りを入れた。間髪入れずに剣が私の鼻先を掠める。深緑の髪が切れて宙に舞った。

「命令なシ……防衛機能、稼働中……」

剣を持つ腕を掴んで体を捻る。海へと体重を傾け、相手を放り投げた。この場所から海面まである程度の高さがある。登ってくることは不可能だ。

あと7人。

「シルヴィ……！」

クリフの声がする。レイテルパラッシュを抱えて、震えているの
だろうか。私の名前を呼ぶ声は震えていて、誰の名前を読んでいる
のかも判別できない。

シルヴィー……だれ？

「攻撃パターンFに移行、音速状態に入りマス」

何もかもがぼんやりと霧の中のように。それでも自分の声だけはク
リアに聞こえた。

私は音速状態に入ると、飼い犬達の背後に回った。一番奥の人間
を捕らえ、その首の骨を折る。絶命の音が響いて、その体が物のよ
うに倒れる。あと6人。

「危険因子……排、ジョ……」

発声機能に赤信号が灯る。言葉はまるで意味をなくしたかのよう
に、口の中で呟く音にしかならなくなった。また体の何処かが破裂
する。痛みが思考を奪っていく。

槍の突きを避けながら、私はそれを相手の手からもぎ取った。攻
撃パターン変更、武器情報を解析中……体術以外のモードに変更。
コードD、武器を使用します。

「シルヴィー！もう……」

クリフの声が聞こえる。誰の名前を呼んでいるのか、判別出来な
い。シルヴィーって、誰のコト？

武器を手にした私を見て、数人が逃げ出した。残るは、3人。力
の差は圧倒的にも関わらず、残った人間は3人。人というのは不思議
なものだ。不可能という文字があるにも関わらず、夢を描く。可

能という二文字の為に、絶望を見ることになるのに。

体に似合わない槍を回し、大きく突き出す。激しい動きに、何処かの信号が途切れた。コードが衝撃に耐えられなかったのかもしれない。

まごついていた1人が、突きの犠牲になった。しかしまだ意識はある。私は槍ごと相手を海へと突き落とす。海面が夜の海の中で更に黒く濁った。

「……………」

うわごとのように読み上げる、システムの情報。

私はすぐに攻撃パターンを変更した。残る2人のうち、剣を持っている方に向かって距離をつめる。逃げることすら出来なくなった。飼い犬は、混乱と恐怖で剣を振るった。すでに冷静さを失った剣さばきは、私にかすり傷すら付けることが出来ない。私はその腕を取ると、反対方向へとねじりあげた。

花を手折るように、それは簡単だった。骨が音を立てるのを確認して、私は剣を奪い取る。そして逃げ出そうとしていたもう一人を捕らえた。その髪の毛を掴み、悲鳴をあげるその口に鋭利な剣をねじ込む。吹き出す赤が、髪を、服を、腕を、汚していく。

「……………あ、あ……………」

恐怖のうめき声。それでも既に正常な機能を失った私の耳には届かなかった。……………あと、1人。

残されたのは、先ほど腕を折った男だった。まだ逃げようとしているのか、腰を抜かした体で地面を這っている。私はその体を掴むと、仰向けに転がした。

馬乗りになると、その肩を左手で押さえる。電流が弾ける右手を握って、開いて、そして男の左胸を押しつけた。指が皮膚から奥へ

と入り込み、心臓もろとも押しつぶす。刹那に動いた心臓は、次の瞬間にはその役目を終えていた。

……ターゲット、排除完了。

「サーシャ！」

俺の制止を聞いているのかいないのか、サーシャは三人に向かって駆け出した。あの馬鹿、不老不死だかなんだか知らないが、三大戦士を1人で相手する気なのか。

三人は一瞬だけ目を合わせると、フリッツとかいうあの男が前に出た。その様子にサーシャは顔を顰める。

「っ」

左足で地面を蹴りあげ、横へと跳躍する。クロノスが轟音を弾けさせた。フリッツは鞘から剣を抜くと間合いを詰める。サーシャの射程距離から考えて、コイツは最も相手をするのが難しい。

俺は咄嗟に援護の魔法を発動させようとする。しかし、次の瞬間、俺は後ろから伸びた手に腕を掴まれた。

「おと、兄さん相手違つよ」

「！」

掴まれた腕を振り払う。飛び退ると、いつの間にかテレジアが俺の背後に立っていた。その手にはメイスを持っている。赤い髪をなびかせて、テレジアは肩を竦めてみせた。

「ほんとならあの姉さん相手にしたいけど……人間、得手不得手あるのん。だから兄さんの相手、ワタシね」

最初の言葉に前回のサーシャへの恨みを込めたテレジアだったが、諦めるのは早かった。どうやら真剣な戦いの場で自我を通す気はないらしい。それもそうか、ふざけたフリはしてるが、コイツも三大戦士。勝つ為に一番効率のいい方法を優先する。

俺はチラ、と横目でジャンの様子を窺う。そう考えると、コイツは自分達が不利になったときの保険ってところか。

「ちっ……」

勝つ為に、か。どうやらコイツら、本気らしいな。

俺は一瞬だけサーシャに視線を向ける。フリッツの攻撃をすんでのところで受け流し、サーシャのクロノスが照準を合わせる。2発目の轟音が響いた。

生き延びたら、本気で一発殴ってやる。

「……そんなら、手加減はしねえぞ」

俺は更に後方へと飛び退る。地面に手をつき、簡略化した呪文を口にした。

「！」

テレジアは魔力の発動を感じたのか、横へと跳ねた。その瞬間、地面から突き上げるようにして鋭利な岩が突き出てくる。

俺はテレジアが攻撃を避けたのを確認して、両手を合わせた。パチン、と音をたてた掌の中に、ゆっくりと白い光が浮かび上がる。光はやがて複雑な魔法陣の形へと変わった。次の刹那、同じ魔法陣がテレジアの足下に浮かび上がる。

「爆ぜろっ！」

俺の声に合わせて陣が激しい爆発音を立てた。離れた所で俺達の様子を静観していたジャンが、ピク、と眉根を寄せる。

しかし、砂埃が舞い上がった後に人の姿はなかった。

「……流石、ファーレン様の孫だけあるのんね」

「っ!？」

予想もしない近くからテレジアの声が聞こえた。咄嗟に俺は防御の呪文を唱える。しかし、発動が遅かった。鈍い痛みと共に体が砂の中に投げ出される。

呻きながら、俺はすぐ顔をあげた。見ると、メイスを担いだテレジアが不敵な笑みを浮かべている。

「兄さん、典型的な『マジユツシ』ね。……魔力に頼り過ぎのん」
「けっ、黙ってる」

あの攻撃を避けたのは、テレジアの魔力か。一瞬だが自分以外の魔力の気配を感じた。三大戦士の中で魔術を扱えるのはテレジアのみ。だが、今の感覚では、おそらくその力は俺には及ばない。

テレジアの攻撃はおそらく、魔力による防御・攪乱とメイスの攻

撃。相手に傷を負わせるのは結局メイスによる物理攻撃でしかない。

(……メイスの攻撃をなんとか出来りゃ、勝機はある)

あとは隙とタイミングだ。こうなりゃ、ヴァルナを喚んででもこの場を切り抜けるしかない。

俺の力ではヴァルナを何度も喚び出すことは出来ない。しかしサーシャが苦戦している今、下手に出し惜しみするのも阿呆な話だ。アイツが負ければ、状況は不利どころの話じゃない。

握った右手に力を入れる。魔力を解放し、あの蛉人の名を口にしようとした、その瞬間。

「フリッツ、テレジア！」

ジャンの声が聞こえた。同時に俺もその気配を察した。テレジアはメイスを構え、フリッツは何かを感じたのか、背後へと距離を取った。

背中を向けていたのはサーシャだけだった。俺は咄嗟に叫ぼうとした。

「サーシャ、避け……っ」

避ける、と言おうとした言葉は、最後まで聞こえなかった振り返ったサーシャの胸に、ストーン、とあまりにも簡単な音をたてて投擲用のナイフが刺さる。まるで時間の流れが遅くなったかのように、小さな体が後ろへと倒れるのを、俺は見ていた。

「サーシャ……！」

第4章 1

足下に転がる、人だったものの成れの果て。その衝撃を、何に言い表せばいいだろう。震えていた僕の体は息をすることも忘れてしまったかのようなだった。呆然と目の前に広がる光景を見つめながら、僕はそこにいる彼女に……恐怖を、覚えた。

- 君、死にたもうことなかれ -

「シル……ヴィ」

自分でも情けないくらい掠れた、蚊の鳴くような声だった。地面に倒れた男の体から右手を引き抜いたシルヴィは、ターゲットが他にいないことを確認して立ち上がった。

シルヴィの体は、頭から人の血を被ったように血液で濡れていた。髪にも、頬にも、服にも……おびただしい鮮血が付着して流れている。

シルヴィは立ち上がると、人形の瞳でこちらを見た。

「っ！」

まだ警戒の解けていない、無感情な硝子の目。表情なんて忘れて

しまったかのような顔。月明かりの夜に、冷たい眼差しが浮かび上がる。

「……」

シルヴィがこちらに向かって歩いてくる。僕は無意識に後ずさった。けれど少し歩いた所で気付く。後ろは、暗闇の海。

僕は逃げ場所を探すように辺りを見回した。それでも目に飛び込んでくるのは、飛び散った血、惨殺された飼い犬の亡骸、赤く燃えるサナトリウムの炎。背筋を舐めるように、寒気と吐き気が僕の思考を壊していく。

握りしめたレイテルパラッシュユがカタカタと音をたてた。

「どっ、して……」

自分でも何を言っているのか分からなかった。ただ、僕という理性は何処か遠くへ逃げ去ってしまった。空っぽの入れ物が喋っているかのようにだった。恐怖と混乱で何も考えられないのに、シルヴィが近づぐことに、僕は捲し立てる。

「ここまで……ここまで、してっ……！」

逃げるだけの隙があればよかった。そうじゃなければ、何人かが逃げ腰になったところで止めればよかった。全員を……殺す必要はなかった。

脳裏に蘇る、鮮血が吹き出した男の姿。うめき声が耳に焼き付いて離れない。痛みと恐怖で荒ぶる呼吸が、やがて途切れる瞬間。人の命が消える空虚な刹那。

ぞわり、と背筋が凍った。

「……」

シルヴィは足を止めると、僕をじっと見つめていた。その目は僕に懐いて後を追いかけてくる彼女の目ではなかった。僕等を殺しにくる殺人人形と同じ、創られた空虚な硝子。

レイテルパラッシュを抱きしめながら、僕は恐怖心と共に吐き出す。

「っ……人は死んでしまっただよ！死んでしまっただよ……」

何も、残らないんだ。僕は叫んでいた。

死ぬこと、その存在がそこから消えてしまうこと。言ってみれば簡単だけれど、本当は全然簡単じゃない。どれくらい痛いんだろう、どれくらい苦しいんだろう……誰も知らないから、誰もが恐怖する。人は生まれてから死ぬまで、嫌というほど他人の死を見せつけられる。その苦しみを見つめながら、ただ恐怖しながら生きなければいけない。いつか自分にも訪れる、最期の時まで。

「だから……だから……」

誰もが死に対する恐怖を持っている。だから人が人を殺めることは禁じられている。やがては訪れる死の瞬間を、悪戯に早めることがないように。そして、死による恨み辛みによって同じことが繰り返されないように。

僕はレイテルパラッシュにすがりながら、シルヴィを見た。あたかさのない表情は、僕を見つめたまま瞬きすらしない。

まるで僕の言葉が理解出来ないと言われているようで……僕の理性の箍が、一瞬にして外れた。

「人は死ぬんだ。死んでしまっただよ……シルヴィとは、違う……」

…っ
「

叫んだ言葉の意味に、愚かな僕は気付かなかった。

脳内のメモリーがザラザラと耳障りな音を発している。もう殆ど聞こえていないはずの聴覚機能が、最後の一言を拾った。

私は、何処か他人事のようにその言葉を聞いていた。多分、私自身もクリフと同じことを思っている。人の死は、何も残さない。やがて何百年という時が経てば、その名も、存在すらも忘れ去られていく。体は土に還り、大地の中に消える。そして…何も、なくなってしまう。

ぼつり、と音がした。燃え上がる炎と、打ち寄せる波の音を聞きながら、その音は何故かクリアに私の耳に届いた。

「……………ア……………」

発する言葉は言葉にならなかった。私は口を結んで、そしてクリフを見る。炎に照らし出された顔は、恐怖と混乱に歪んでいた。その瞳に私はどう映っているのだろう。私は…どんな顔をしているのだろう。

自分が壊れていくのを、私は感じていた。左手で顔を覆う。見る

と、手は真っ赤な血液で汚れていた。私には存在しない、温度のある血液。

ぽつり、とまた音が響く。足下の血溜まりに透明なものが滲んでいた。

「……………」

ふと、クリフの表情が変わる。私は手を離れた。真っ赤な掌に落ちる水滴。ぽつりぽつりと手を濡らして、血に混じって消えていく。雨ではない。それは、私の瞳から流れ落ちているようだった。

……………泣いている。

「ク……………、リフ……………」

振り絞るようにして、私はクリフの名前を呼ぶ。

声を出すのもやっとだった。おそらく私の機能はこのままではすぐに止まってしまうだろう。私の死、それは人の死のような消失ではなく、動かない人形へと変化すること。

ジェイからはジュリアの所に戻れと『命令』されている。戻らなければ……………いけない。私の心など関係ない。だって、私は……………。私は、人形なのだから。

「……………シル、ヴィ……………」

またぽつり、と涙が零れ落ちた。拭い取ろうかと思ひ、手を伸ばす。けれど指先はそれに触れることが出来なかった。拭いてしまえば、この真っ赤な色に染まってしまう。そんな気がした。

「……………、て」

掠れる声で呟いた。私は私であることを止めることは出来ない。人間になることなど、不可能だとよく知っている。でも、今だけ本当の気持ちを口にしてもいいだろうか。もうすぐ消えていくであろう、私の……シルヴィの、言葉。

「…………たす、け…………て」

風が敵わぬ願いを断ち切るように通り過ぎる。劫火に照らされたこの場所で、私の思いは永久に消えてしまうのだろう。人が死ぬのと同じように。

クリフの答えを待たずに、私は後ろを向いた。そして歩き出す。戻らなければいけない場所がある。ジェイト、アイルークと、ジュリアのいる場所に。戻ってしまえば私はクリフの敵になる。でも、きつと……それでいいのだ。

足下の亡骸を避けながら私は闇の中へと歩き出す。雲間から顔を出した月が、微かに滲んで見えた。

体が泥のように崩れ、心臓が大きく跳ねるのを感じた。状況を理

解するよりも早く、胸に刺さったナイフを引き抜く。その瞬間、ぞわりと体が違和感を覚えた。

「かはっ……！」

痛みへのたうち回りながらも、意識を向ける。三大戦士と、フレイさんの向こう。そこに黒い影があった。女の形をした、殺人人形。今まで相手をしてきたものと、さほど変わらない外見だった。ただ、1つおかしいことといえば、その人形には得物らしい得物が見当たらなかったということだ。

フレイさんの呼ぶ声が聞こえる。私は体が回復に転じるまでの間、激しい痛みと出血に耐えながら、引き抜いたナイフを見る。刃には私の血が付着していたが、柄の近くまでいくと別物らしき液体が塗られていた。

「こ、れっ……は……」

あの人形の得物がこの投擲ナイフ1つだとするならば、それはあまりにも意味のないことだった。一体の殺人人形と、1つのナイフ……まるで、これで十分だと言つかのような……。

「サーシャっ！」

フレイさんが私のところに駆寄ってこようとした瞬間、殺人人形が動いた。一步、二歩と歩き、三步目で真っすぐに私達のところへと飛び込んでくる。咄嗟にフリッツさんが剣を構え直した。

「この間、城下で見たのとは……違うようだね」

人形は私達全てを敵と見なしているようだった。刃を向けたフリ

ツツさんに飛びかかり、攻撃を避けながら間合いに入り込む。しかし相手の方が一枚上手だった。繰出された蹴りを受け流し、一定の距離を開ける。その瞬間、目の前が砂嵐に覆われた。

「サーシャッ」

先に反応したのはフレイさんだった。完全に視界を覆われる前に私の所に駆寄ると、私の体を持ち上げてその場から離れる。一定の距離をおくと、視界は一気に晴れた。

離れた所から見ると、砂嵐の真ん中で微かに光を放つものがある。それはこの地域特有の古い文字を浮かび上げながらせ、そして次の瞬間大きく弾けた。途端に舞っていた砂が消え去った。

「フウ、相棒、援護するね！」

メイスを脇に挟み、テレジアさんはそう言った。人形から距離を取り、体勢を整えたフリッツさん達は頷く。

先に動いたのは人形だった。爪先で方向転換した人形が、ジャン・ユサクに向かって駆け出す。彼は私とフレイさんの目の前に立っていた。どうやら排除優先順位は、私が一番に高いらしい。まずは私の目の前にいる彼を狙うつもりなのだろう。

ジャン・ユサクは表情一つ変えることなく、背にしていたコルセス力を構えた。

「……始めるぞ」

義眼の瞳が、戦いの色を宿す。

第4章 2

意識が漣のように遠のき、そして戻ってくる。激しい戦いの音を聞きながら、私はフレイさんの腕の中で幻覚を見つめていた。おそらく遠い昔に置き忘れてきた記憶の欠片。もう戻ってくることはない……悲しい人達の思い出。

- とこしえの眠りへ -

私は言葉を発することなく、ただ見つめていた。何も言わなかったのか、それとも言葉を知らない幼子の頃の思い出なのか。私は低い視点から三人の家族を見つめていた。

傍目に見れば普通の家族だった。学に長けた父、武に長けた母。その背中を見て育った兄。何処にでもいるような旅の家族。

「ジェイ。あの星が見えるかい？」

焚き火を囲んで、アダンが兄を呼ぶ。寢床の準備をしていた兄は、顔をあげて父の指差す方向を見た。

星空の夜。父の指の先には、ひときわ輝く星が浮かんでいた。兄は父の隣まできて腰を下ろすと、星を見つめて頷いた。

「あの星は必ず西の方角に浮かぶ。季節や時間に関係なく、だ。…もし道に迷ったら目印にするといい」

(西……)

ジェイロードは静かに星を見上げ、西の方角、と呟いた。

「周りの星は歯車の形を表しているとも言われているんだ。……他にも、色々な星が存在するから、今度また教えてあげよう」

父は兄の頭を撫で、そして笑った。焚き火に照らされたアダンの顔は誰よりも幸せそうな表情をしていた。

『知』という最大の謎を追い求め、母と出会った父。彼の『知』に対する執着心は凄まじいものがあり、狂信者にも近いものがあったが……ひたすらにそれを追い求める父を頭から否定するものはいなかった。カタリナでさえ、父の提案や行動に不満を漏らすことはあつたものの、その信念自体を否定したことはなかった。

「……………」

頷く兄の姿。その横顔が微かに笑っていた。カタリナ似の兄が見せた、一瞬の子供らしい表情。尊敬する父を慕う、純朴な少年の笑み。

私はふと、同じ会話を兄としたことを思い出した。勿論ジェイロードはアダンのような生き生きとした笑みは浮かべていなかったが。

『兄さま……星はどうして、光続けられるのですか？』

私が問いかけるとき、兄はいつも私の望む答えをくれた。納得出来る理由と、問いかけた疑問を解決するに足る言葉を。彼はいつも博識だった。いや、今思えば、兄の知識を作ったのは父だったのだ

ろう。兄のくれる答えは、父のくれた答えでもあった。

(父様……)

父と同じ道を行こうとするのは、思慕ゆえなのか。私は流れていく記憶を見つめながら、思い出す。

『兄さま。星もいつかは光を失うのに、……鳥も獣もいつかは命を失うのに、どうして人は抗おうとするのですか？』

珍しくジェイロードを悩ませた疑問だった。おそらくそれは、私達のように不老不死に近い体質を持つ人間では理解出来ないことなのだろう。それでもジェイロードはしばらく悩んだ末に1つの答えを口にした。

それは兄の答えとは思えない程、単純な答えだった。

(そう……あれは、たしか……)

『……生きたい、から』

「サーシャ、しっかりしろっ！」

フレイさんの声に意識を呼び戻される。微睡みのような感覚が晴れると、一気に痛覚が思い出したかのように襲ってきた。私はうめき声をあげながら、視線を横へと向ける。

三大戦士に囲まれた人形は、ジャン・ユサクの槍撃に苦戦していた。時折真つ赤な光が魔法陣を作り、その瞬間に砂地が爆ぜる。フレイさんの魔法にも似ているが、どうやらこれは攪乱と陽動のため

の魔術らしい。

視線をあげると、フレイさんと目が合った。

「サーシャ！」

「少し……しず、かにつ……してくれま、せんか……っ」

痛みに顔を歪めながら、私は呟いた。フレイさんの手を振り払おうとするものの、力が思うように入らない。まるで体の自由を奪われてしまったかのような感覚だった。

フレイさんも私の異常に気付いているようだった。私の手元に落ちているナイフを広いあげ、ふと何かに気付いたようにこちらを見る。

「く……なんでもっ、……ありません、よっ」

私は唇だけでそう呟いた。フレイさんが苛立ったように何かを言おうとする。しかしそれもすぐに向こうから聞こえてきた激しい斬撃音に阻まれた。

視線だけで人形を見る。人形はフリッツさんの攻撃を機械の腕で受けとめ、攻撃に転じる姿勢をとった。咄嗟にフリッツさんは間合いを空ける。

「テレジア！」

合図に反応するように、赤い光が人形の周りに舞う。それは蝶のように辺りに漂った後、動きを止めた。そして次の瞬間、細い糸のような光が人形の体に巻き付いていく。

ギシギシと軋む機械の体。コロッセオで見た、あの人形は人間に限りなく近い姿をしていたが……この人形はやはり生きている雰囲気があった。

光の糸はまるでその存在を縫い付けるかのように人形の体を刺し貫いていく。光の一端がその首筋を貫いた時、微かに電流がバチバチと音をたてた。

「……………」

死んでいるような目で、人形はこちらを見ている。私は痛みで歪む顔をいつそう擡めた。

次の瞬間、黒い影が間を横切る。槍が空を切る鋭利な音が響く。コルセスカの刃が真つすぐに人形の体を貫いた。激しいスパーク音と共に、人形の体が動きを失う。

『ミツ、シヨ……………ン……………成コ、ウ……………』

倒れていく体が、まるで他人事のように眩いている。

『No.16……………シユウ復、不可能、修フク、不カノ……………』

モノのように崩れた人形はしばらく同じことを繰り返し、そして完全に動きを止めた。機械に戻った人形を見つめながら、私は力のない左手を傷口におく。

微かに響く鼓動が、力なく動いている。おそらくあのナイフに塗られた薬のせいだろう。私は再び意識が遠のくのを感じながら、思う。

ジェイロードは、私を殺すつもりなのだ、と。当たり前過ぎる事実、私は閉口した。

微かにうめき声をあげた後、サーシャの体が重くなる。くそ、なんなんだよ、この状況は。

俺はこちらに向かってきたフリッツを睨みつけた。サーシャがこの状態じゃ、逃げることにすら出来ない。ヴァルナを呼ぶことも考えたが、この3人を同時に相手出来るか。

サーシャを抱えた腕は赤く染まっていた。流れ出した血が止まる気配はない。俺は憎々しげに転がったナイフを見る。あの人形が持っていた投擲用のナイフ。そこには確かに、血液以外の液体が塗り付けられていた。

「っ……」

毒か？だとしても、おかしい。単なる毒ならサーシャの体内で消化することも出来るはずだ。それが出来ないとなると、それは毒ではない。

考えれば考える程、分からなくなってくる。畜生、なんなんだよ！

「さて……魔術師のキミ、彼女を渡してくれないかな？」

フリッツは俺達を見下ろすように立ちはだかる。俺はサーシャの肩に回した手に力を込めた。

「なんだよ……サーシャを渡せば、俺の命は助けてやるって顔だな」

「まあ、そうだね。下手な殺生で恨みを買う必要はないし」

敵は少ない方がいい、とフリッツは言う。俺は奴を睨みつけた。サーシャを渡して、自分だけ助かるうなんて馬鹿な話だ。そんなこと出来れば最初からやってる。それが出来ないから……こうして馬鹿げた状況に置かれてるんだ。

俺は自嘲した。サーシャはまだ意識のない顔で目を瞑っている。

「早めに選択することだよ。分かっているとは思うけど……僕等は知り合いだからって容赦はしない」

倒れたサーシャの顔は真っ白だった。この女がルミナリイだって言うんだから笑わせる。……ただの人間だろ、ただ化け物みてえな回復力と馬鹿力を持つてるってだけの。それ以外になんら変わりはない。悪魔の翼を持つてるわけでもねえだろ？

そう、最初から何も変わりはない。最初からな。

「そうか、なら……断る」

俺はフリッツを見上げてそう言った。たとえ勝ち目があるうとなく、かろうと……これはそんな問題じゃねえんだ。サーシャを渡すことは出来ない。見捨てることは……しない。

「！」

「馬鹿言うんじゃないよ。そんなこと出来るなら護衛の依頼自体、最初から願い下げだ」

微かに三大戦士の表情に殺気が宿る。相手は3人、そしてこっちは瀕死状態のお荷物付き。どうやったって不利だ。逆立ちしたって変わらないこの状況下。

おい、サーシャ聞いてるか。お前が自分で言ったんだろ。

「俺は俺であることを止められねえんだ。だからな……どんな最期だって歓迎してやるよ」

自分が自分であることを止められなかった。だから運命は自分の身に降り掛かってきた。どうして自分なのか、どうしてこうなってしまったのか……どうにもならない運命を嘆こうが喚こうが、テメエの勝手だ。……けどな。

嘆く暇があるなら前を向き、喚く暇があったら歩き出せ。違う風景を見たいと思うなら。

「ただし……死ぬまで足掻いた後でだっ!!」

第4章 3

世界は理不尽で、どうしようもなく不公平で、願いはいつも叶わないから。だから逃げることだけに一生懸命になっていた。立ちほだかるものを避けることばかり覚えて、ただ自分の殻を固めていた。割れ目から見える空を飛ぶ鳥は、あんなに力強く羽ばたいてる。だから……。

- 刃創と覚悟 -

深夜に扉を叩く音を聞いて、私は飛び起きた。おそらく、そんな予感があつたからかもしれない。私の寝起きする寝室からは、入り口のノック音なんて微かにしか聞こえないはずなのに……私は飛び起きて、階段を駆け下りた。

工房の入り口にはアイルークが立っていた。そして少し離れたところにはジェイロードの姿もあつた。アイルークは悲しい表情を浮かべていて……その理由に私もすぐ気付いた。

「シルヴィ……」

外は雨で、シルヴィの体は雨に濡れていた。微かに腕の接合部が光を放っている。コードの何処かが切れているのか、片腕は力を無くしたように肩から垂れ下がっていた。

シルヴィは無言のまま私達を見つめ、そしてジェイロードに向かって歩み寄る。

「……遅ク、な……リ、……マシタ」

発声機能がブレて、機械的な声が落ちる。私は咄嗟に羽織ってきた上着をシルヴィの肩にかけた。

シルヴィはじつとジェイロードを見つめていた。ジェイロードもまた、ボロボロになったシルヴィを見下ろし、ただただ無言だった。何も言わないのはいつもの黙りなのか、それとも言葉を探しているからなのか。『お帰り』の一言も言えない彼に苛立ちながら……私も言葉が出てこないことに気付く。

「……」

シルヴィの目は、今までのような……本当の人間のような輝かしい色を忘れていた。表情も忘れてしまったかのように何の感慨もない顔をしていた。

ただ、後ろから見たその背中には、言いしれない悲しみが漂っているような気がした。

シルヴィはしばらくジェイロードを見つめた後、振り絞るように声を出す。

「新シイ、命令ヲ。……マスター」

私も、アイルークも、シルヴィを止めることは出来なかった。命令を求めるシルヴィの言葉には何か……深く強い意志が込められている気がしたから。

ジェイロードはシルヴィを見下ろして言う。

「……やれるのか」

シルヴィは目を瞑り、しっかりと頷いた。それは言葉で答えるよりもはつきりとした肯定だった。

「……ジュリア、シルヴィのメンテナンスを」

「え、……あ……」

私は戸惑いながら、振り返ったシルヴィの手を取る。どうしてだろう、止めなければと思うのに、ジェイロードの言葉に反論したいのに、思うように言葉が出てこない。まるで気圧されたかのようにシルヴィは私を見つめていた。雨に濡れ、壊れてしまった彼女を……私はただ、静かに抱きしめることしか出来なかった。

剣を弾く音が響く。その衝撃が全身に伝わってきて、俺は歯を食いしばった。ヴァルナはまだ喚び出していない。1人相手に使うのすら精一杯の俺が、3人相手にヴァルナを使い続けるには無理がある。

死ぬまで足掻くとは言ったものの、余計な計算をしていることに俺は頭の中で笑った。

「くっ……」

今度は背後からテレジアのメイスの攻撃。鈍い衝撃に、結界が歪んだ。くそ、これじゃあ攻撃に転じる隙がない。

サーシャの体は先ほどよりも力を失っているようだった。重みが増して、体が温度を失い始めている。血液の流れが収まりかけているところを見ると、どうやら少しずつではあるがルミナリイの力が体の回復を始めたらしい。

しかしこの早さでは、まだ安心出来ない。

「不思議なものですね……何故、そこまでして守ろうとするのか」

フリッツは冷静な口調でそう言いながら、俺の集中を邪魔するように剣撃を繰り返す。俺は顔を歪めながら吐き捨てた。

「ハッ、……じゃあテメエらがあのガキを守る理由を一言で言えるのかよ」

すかさずジャンが攻撃してくる方向を予測して結界を厚くする。三人の中で、この男の攻撃が一番重い。コルセスカの突きは結界を打ち破るくらいの力があつた。

テレジアは体勢を立て直すと、声を投げた。

「……陛下を守るのは三大戦士の決まりのん」

「違いよ、正式な次期国王は別にいただろ。……何故あのガキなのかってことだ」

メイとそんなに歳も変わらないガキ。それを次期国王として認めた理由ってやつが、こいつらにもあるはずだった。勿論、そんな長話聞きたくもねえけどな。お前らだって、俺がどうしてサーシャの

依頼を受けたかなんて興味ねえだろ。

フリッツはふと口角を上げた。

「確かに……そうですね」

戦いに善悪を求める気はない。ここにあるのは、単に主が目的の邪魔を排除しようという、簡単すぎるほどの理由。善悪なんてものは勝負がついたあとに第三者の暇人が付けるだけの称号でしかない。こいつらは国の為に預言書を手に入れたい。その為に、預言書を集めるサーシャを殺しておきたい。ただ、それだけのこと。

「……話が過ぎるな」

「っ」

俺は背後から聞こえた声に硬直した。コルセスカが空気を切る音が木霊する。結界の強化を行う暇なんてなかった。咄嗟に体を擦るサーシャの体を抱いたままじゃ、まともに避けることが出来ない。サーシャを支える左腕を掠って、槍の刃が通っていった。途端に、結界が弾ける。

「くそっ！」

もう一度魔術を発動させようとした瞬間、目の前に黒い影が見えた。見上げると剣を構えた状態で、フリッツがこちらを見下ろしている。刃の先は力なく倒れているサーシャに向けられていた。

フリッツは静かに言う。

「バックランク・メイトだね。……太陽に仇なす者に肅正を」

祈り文句か何か知らないが、俺は奴の言葉を聞いていた。

太陽に反射して、刃が振り下ろされる。俺は咄嗟にサーシャを庇った。次の瞬間には剣で刺し貫かれる感覚が全身を覆う。その、はずだった。

弾ける金属音、乾いた音色が耳の奥で反響する。キツく目を瞑っていた俺は、ハツとして顔をあげる。

刃が擦り合う音が聞こえた。切っ先を受けとめる白刃。拮抗する力が微かに傾いた。

「っ……！？」

フリッツが驚きで僅かに身を引いた。その隙を逃さず、フリッツの刃を後方へと押しやる。次いで休む暇を与えず、影が動いた。両刃の剣が右上から左下へ、そして左から横一線。前へ、前へと向かっていく。

状況を判断する時間すらなかった。フリッツは攻撃を避け、受けとめながら、驚いた表情で口を開く。

「クリフくん！？」

「！」

俺もまた、呆然としてその背中を見つめていた。

右手に握りしめたレイテルパラッシュ、そして左手にはその鞘。クリフはこちらを振り向くことなく、フリッツとの距離を詰めていく。その足取りに迷いはなかった。

「っ」

フリッツは動揺しているようだった。距離を取ろうとするフリッツを追って、クリフは強く踏み込む。剣を前にかざし、真つすぐに突き出す。相手の隙をつく迷いのない切っ先。

刺突攻撃にフリッツは咄嗟に身を抜ってそれを交わした。バランスを崩しながらも、レイテルパラツシュを弾き返す。胸元を擦った攻撃は、フリッツが反応しなければ確実に心臓を捕らえていた。つ、とその首筋を汗が伝う。

「……まさか、キミがこんな攻撃をするとはね」

レイテルパラツシュの切っ先には確かに殺気が宿っていた。クリフは一度距離を取ると、剣を構え直す。2、3回息を整え、そしてやっと口を開いた。

「本当は……僕も、先生と戦いたくはありません」

いつもなら恐怖で震える切っ先が、全く震えていなかった。カチヤ、と音をたててレイテルパラツシュが太陽の光に反射する。クリフはまっすぐに師を見た。

「でも……やらなければいけないことがあるんです」

「……やらなければいけないこと？」

フリッツは呼吸を整えながら剣を構える。クリフは動じることなく、ただ頷く。それ以上のことを口にせず、静かに剣を持つ腕をあげた。

「サーシャさん達の傍にいないと出来ないことなんです。だから……」

……」

クリフは左手に持っていた鞘を前へと放り投げた。弧を描いて砂の中に落ちる。ギリギリと焼けるような地面に、今までレイテルパラッシュの刃を隠していた鞘が転がった。

「相手が先生だろうと、三大戦士だろうと……」

茶の瞳がフリッツを見る。強く、鋭利な、闘う者だけが出来る瞳。

「僕はもう、逃げない」

第4章 4

誰が正しくて、誰が間違ってるなんて言えない。キミを救うなんて善人じみたこと、僕には言えない。でも1つだけ誓うよ。

久々に鞘から抜いたレイテルパラッシュが手に馴染む。僕は逃がない。逃げて後悔するのは、もう止めるんだ。

- 天地万物 -

刃が空を切る音。それがずっと好きだった。見えない相手を作り上げて、剣を交えるのが小さい頃から好きだった。

そう、最初はたったそれだけの理由だった。ルクスブルムに入ったのもそんな簡単で、幼稚な気持ちからだ。傭兵学校での日々は楽しかった。ただ訓練を繰り返して、生死のない練習を繰り返す日々。いつかは誰かを守る為に、僕等はそうやって剣の腕をあげていった。

誰かを守ることは、自分を正義だと思うことだった。守ることで何かを傷つけるんだと当時はこれっぽっちも感じていなかった。

手に馴染んだレイテルパラッシュ。まともにこの柄を握ったのはいつ以来だろう。合格と共に渡された優秀者の証。同じ物を与えられた生徒達はみんな、この剣に誇りを感じていた。

でも、誰1人として知らなかったと思う。この刃が人の肉を裂き、

首を飛ばし、命の炎を消す道具だということを。誰かを守るということは、他の誰かを傷つけるということ。

知らなかった僕は……家族を失ったことでその意味に気付いた。それから剣を振れなくなった。

「クリフくん……」

全てが平穩に、全てが安息のうちに終わってほしかった。けれどそんな一生を手に来る人間なんていない。いつかは誰かを傷つけ、大切なものを失い……自身も傷を負う。

僕は、僕自身が傷つくのが怖かった。死にたくない、死にたくない、死にたくない。それでいて誰も傷つけたくないなんて、贅沢ばかりで。

サーシャさんに言われた言葉を、思い出す。逃げている僕には言われたくない、と。逃げている僕には価値がないのだと……サーシャさんは間違っていないかった。あの言葉の全てを肯定することは出来ないけど、そこだけは認められる。

僕は、逃げてた。

「……先生」

構えた切っ先をしっかりと先生に向ける。ここで、足止めをされるわけにはいかないんだ。僕にはやらなければいけないことがある。そう。

『たすけて』と呟いた、あの声が頭から離れないから。

利き足で踏み出し、レイテルパラッシュが一閃する。重心に逆らうことなく、僕の斬撃が先生に襲いかかる。右へ左へと受け流し、避けきれない攻撃は剣で弾き返す。やっぱり先生は強い。

ルクスブルムでは僕のことを褒めてくれていた先生だけれど、きっと僕の弱点も見えていたはずだ。先生は何度目の攻撃を受けると、バランスを崩しかけた体勢から反動を使って攻撃に転じてきた。

「っ」

「……ちよつと振りが大きすぎるようだね、クリフくん」

感情が先に出ると、スピードに比例して振りが大きくなる。一方で先生の攻撃は堅実だった。隙のない戦い方は今でも尊敬出来る。今度は僕が防御に徹する側になる。

「守りは苦手だったね？そういえば」

先生の言葉を聞きながら、僕は歯を食いしばった。守りに入るということは、相手の攻撃1つ1つを受けとめなければいけないということ。殺気を帯びた剣先が向かってくるのをしっかりと確認して避けるという行動は、かなりの度胸が必要だった。

心が乱れてはいけない。隙をつくっては簡単にやられる。

「少し、残念かな。……僕の生徒達にはなるべく知らないままでいてほしかったのに」

「それは……っ」

首筋近くを切っ先がすり抜けた。ゾツと寒気が背中にはしる。僕は逃げようとする意志にむち打って、次の攻撃を剣で受けとめた。先生の剣は容赦なく強い力を込めてくる。

「血の色を知らないまま……純粹に育っていく子達を見てるのは、本当に楽しかったよ」

昔の自分を見ているようで、と先生は呟く。僕は金属の擦れる音を聞きながら先生を睨みつけた。

「でも、先生っ……それは、本当の強さじゃない！」

精一杯の力を刹那に込めて押し返す。微かに隙が出来るのを確認して僕は刃を離れた。もしも、先生が僕を殺す気なら……次は剣を振ってくるはずだ。

先手を読んで勢いづく前の剣を弾いた僕は、両手でレイテルパラツシユの柄を握った。迷いはない、全てを一瞬に賭ける。鋭い切っ先が真っすぐに空気を切り裂く。

「そこまで!!」

突然聞こえた声が、張りつめた空気を一瞬にして止めた。息を飲んでクリフとフリッツの攻防を見つめていた俺は、後ろから聞こえた声に振り向く。同じように振り返ったテレジアが、そこにいた人物を見て頭を抱えた。

「……陛下、なんでここにいるのん!!」

そこにいたのは馬に跨がってこちらを鋭い目つきで見つめている、あのフェオールとかいうガキだった。周りに従者の姿はない。というよりも、従者として付き従うべき三大戦士が此処に集合してるんだから、当然と言えば当然だった。

フェオールは慣れた様子で馬から下りると、ツカツカと三大戦士に歩み寄ってきた。足取りからも分かるように、相当に苛立っている。

「何故ここにいるかだと？……馬鹿者共が余の護衛も忘れて遊び回っているからだろう！」

「いや、あの、遊んでいたわけじゃ……」

フリッツが困ったように笑う。一方で戦いの腰を折られたクリフは呆然というか、ポカンとした間抜け面をしていた。……おい、さっきまでの気迫はどこいったお前。

「余が自ら迎えに来たというのに、口答えか！」

「陛下！こちにも事情があるね、アタシ達は預言書のために……」

癩癩を起こしたように怒り続けるフェオールに、テレジアが慌てて駆寄っていく。残されたジャンは深く息を吐くと、コルセス力を背負い直した。どうやら危険はなくなつた……か？

気が抜けて安堵の息をつくと、腕の中で同じような溜め息が聞こえてきた。

「っ、サーシャ！？」

「……静かにしてもらえませんか……」

二度目ですよ、とサーシャは先ほどよりはつきりした口調で言っ

た。よくよく見れば、治癒能力のためか、傷口が塞がりかけている。出血も完全に止まったようだった。まだ力は戻っていないようだったが、意識はさっきよりはっきりしている。

サーシャは腕で血の伝う口元を拭った。

「お前っ……いつから起きてた？」

「……フレイさんがゲームに負けた辺りです」

てことは、クリフが現れたところからか。俺はほっと胸を撫で下ろした。顔をあげると、向こうからクリフが駈けてくる。

「サーシャさん！大丈夫ですかっ!?!？」

慌てた様子で走ってきたクリフに、サーシャは五月蠅そうな顔で眉間に皺を寄せた。その表情に気付いて、クリフは慌てて口を押さえる。

サーシャは深い深い溜め息を放った。

「本当に……仕方のない人たちですね……」

第5章 1

私が歩いてきたその足跡を、私は振り返らない。たとえそれがどんな苦しみであれ、どんな幸福であれ。此処にいるという今を、私は悔やまない。

私は進む。ただひたすらに、この足が動く限り。神がいるのなら、私の生き様を笑えばいい。私はこの大地から空を見上げよう。

- 地を這う者 -

少年王は説教を終えると、こちらに歩み寄ってきた。テレジアさんの制止も聞かず、私達の前に立つ。私はまだ立つことも出来ず、彼を見上げていた。

「そち、……生きているか？」

「……残念ながら、死んではいないようです」

私はそう言つて笑つた。自分で言うのも何だが、無様な格好だ。人の手に支えられ、人に守られ……動けないまま相手を見上げるこゝとしか出来ない。

彼は静かに私を見下ろした。血に染まり、力を失つた私は彼の目にどう映っているのだろうか。私は静かにその目を見つめ返した。

「1つだけ、聞きたいことがある」

少年王の言葉に、私は視線で続きを促した。正直なところ、声を発するのは辛い。まだ体は完全に回復していないからだ。それに……あの薬が、体内に残っている。

夕焼けの色をした髪が揺れる。かつてこの地の神と呼ばれた太陽神の子孫は、今でもその誇りを失っていない。

「以前、そちは余に聞いただろう。……お前は高みに行くのか、と」

まだ彼が王子だった時、私は気まぐれでヒュペリオンを渡した。ネオ・オリを救いたいと思いながら、踏み出すことの出来ない小さな王子に。

私は彼の言葉を聞きながら思う。さほど時は流れていないにも関わらず、はつきりとした目をするようになったものだ。王の自覚が、それとも彼自身の覚悟が決まったのか。

彼は真つすぐに私を見る。

「そちに問う。……お前は、高みに行くのか？」

思いがけない問いかけに、フレイさんとクリフさんが顔を見合わせた。テレジアさんとジャン・ユサクも意味が分からない、という表情を浮かべている。もちろん、あの時の会話は私達2人の間で交わされた秘密。フリッツさんだけが、何かに気付いたように少年王の横顔を見つめている。

高み……ふと、誰かの大きな背中が過った。沢山の犠牲を払ってでも、目的を果たす為に生きる後ろ姿。過去の預言書を集め、かつて道を間違ったトウアスを悪例として『知』を復活させる。

否、そんな小難しい目的ではない。誰も死なず、誰も悲しまない

世界を望んでいる……小さな少年だった兄の背中。おそらくジェイロードこそが、高みを行くにふさわしい。

ふっと、私は笑った。比べてみれば、復讐に囚われ、こんなところで砂漠に転がっている自分はどうだ。惨めで、くだらなすぎる。滑稽で、馬鹿げている。それでも……

私は少年王を見上げる。

「私が行くのは、高みではありません」

「！」

少年の表情が翳る。私は笑った。自嘲ではなく、狂った笑みでもなく。私は破顔する。

「天に行くよりも……地を這いずり回る姿の方が相応しい。そうは思いませんか？」

晴れ晴れと、私は笑ってやった。そう、最初から何も変わってない。私はジェイロードを、血の繋がらない兄を殺す。例え兄がしようとしていることが正しいことであっても。

何も変わらない。ただ、兄が預言書を追う理由を知り、私が復讐だけではない殺しの理由を作っただけ。私達の道は決して重ならない。だから……決着をつけなければいけない。

「……この地に立たずして、か」

少年王は私の表情に驚きつつも、何かを悟ったようだった。背負ってきた荷物の中から何かを取り出すと、私達に向かって投げける。咄嗟にフレイさんがそれを手に取った。

「！」

「……くれてやる。その代わり、余の国と余の部下に手を出さないことだ」

フレイさんは受け取ったものに視線を落として、驚いた表情を浮かべた。少年王の後ろで抗議の声が上がる。

「陛下！」

私達の手の中に転がり込んできたのは、過去の預言書第3章、大地の章だった。クリフさんとフレイさんは本物がどうか中身を確かめた後、信じられないような顔で彼を見つめる。

少年王はこちらに背を向けると、三大戦士に向かって言った。

「文句を言つな。余に黙って行動した罰だ。……城に戻るぞ」

陛下の乗る馬の手綱を引きながら、僕は苦笑を浮かべた。先ほどからしんがりでテレジアが文句を続けている。僕の反対側を歩くジヤンは、いつも通り無言だ。

馬の背中に揺られながら、陛下は鼻を鳴らしてみせた。

「五月蠅いぞテレジア。余は預言書と引き換えにお前達を助けたの

だ。感謝の一言もないのか」

「助けるて……陛下、あれはこちが優勢だたのん!!」

状況は3対2。いや、3対1に近かった。もう少しで、あのガンスリンガーの動きを封じ、預言書を手にすることが出来るところだった。それがテレジアは気に食わないのだろう。

でも、僕は笑う。

「まあ、でも……渡してしまったものは仕方ないですね」

「フウ！あれだけ暴れておいて、今更何ね!!」

テレジアの怒りが僕に向けられる。下手なことを言ってしまったな。

けれど、あの時陛下が止めてくれなければ正直、危なかった。最後にクリフくんが放った攻撃は、下手をすれば僕の命を奪っていたと思う。

空を見上げると、鷹が遠いところを飛んでいた。陛下といい、クリフくんといい……子供が育つのは早いものだ。すぐに飛び方を覚え、大人になっていく。

「……お前達は大馬鹿ものだな」

陛下は呆れたように溜め息をついた。そして馬の背に揺られながら言う。

「余が何も考えずに預言書を渡したと思うのか」

「……え？」

思わぬ発言に、僕はつい手綱を放してしまいそうになった。ジャンは顔を顰め、テレジアはぼかんとした顔をしている。

陛下は腕を組んでツン、と明後日の方向を向いた。

「城の魔術師達を使って、預言書は有効活用させてもらった」

「……は？」

テレジアがかるうじてそう呟く。

「もう必要がなくなったから渡した。利用価値のないものの為に三大戦士が欠けても困る」

「……」

ジャンはふと何かに気付いたように顔をあげた。

陛下は子供らしい、悪戯を成功させたような顔で笑う。そして砂漠の果てに見える砦のような城を見上げた。城に太陽が沈もうとしている。かつて太陽神バルトロが愛した、この世で最も美しいもの。陛下は凜とした声で言う。

「この気候でも地を耕す方法がないか調べていた。他国に作物や資源を求めず、自国で自給出来ないかと思っただけ」

「国内の安定化で、国を強化する……そうゆうことですか」

「ああ。それに下手に預言書を持っていては、他の国からの標的になる」

僕は納得したように声を漏らした。高みに行くのか、と問いかけた理由がやっと分かった。陛下は彼女を試したのだらう。彼女がネオ・オリを脅かすような使い方をしなければ、預言書を渡しても問題はない。

陛下は笑う。

「分かったなら、本来の仕事に戻ってもらっぞ。こんなことでお前達を失うのはまっぴらだ」

風が段々と涼しさを運んでくる。もうすぐ夜になる。何処からか聞こえてくる風の鳴き声を聞きながら、そんなことを思った。

「はあああつ!?!」

俺の声が、吹きさらしの砂漠に響いた。クリフは困ったように頬をかき、サーシャは他人事のように明後日の方向に視線を向けた。微睡みの庭で俺と別れた後の経緯を、クリフから聞いた。俺と別れてから、サーシャに会うまで。俺はサーシャの背中に向けて言った。

「お前、馬っ鹿じゃねーの!? 八つ当たりで人を撃つってどうゆうことだよ!?!」

サーシャが混乱してるのは分かっていた。詳しいやりとりまでは知らないが、クリフに発砲するってのは凶悪だぞ。俺は苦笑しているクリフの頭を殴る。お前も笑ってんじゃねえよ。

明後日の方向を見ていたサーシャは、静かに溜め息をついた。

「それについては、たしかに私もやりすぎました」
「やりすぎってレベルか！」

謝るんなら土下座しろ、土下座。

しかしサーシャはそれ以上に詫びる気はなかった。クリフも責める気はないらしい。本人達がそれでいいんなら俺はこれ以上言わねえけどな。

俺は咳払い1つして、手元にある預言書を見つめた。第1章『最初の章』、第3章『大地の章』……残りの3冊のうち、2冊はジェイロード達の手の中にある。残るは第5章『終焉の章』。全ての最後を記す、文字通り終わりの章。

「……で、これからどうすんだよ」

俺は分かりきったことを聞く。クリフもまた、サーシャに視線を向けた。

サーシャは夕暮れから夜へと変わる空を見つめていた。紺色の空が砂漠を覆い、やがて月が昇ってくる。太陽の国に訪れる静寂の夜。サーシャは傷口に手をやり、そして空を見上げた。

「預言書を探しましょう。……終焉の章のある場所に、ジェイロードは現れます」

これで、おそらくあいつらと顔を合わせるのは最後だ。サーシャは静かに目を閉じた。ジェイロードが生き残るか、サーシャが生き残るか……おそらく、それで預言書の行く末も変わる。

サーシャは振り返った。青い瞳が俺達に向けられる。

「ジェイロードのやるうとしていることは、正しいことかもしれないな

い。それでも……私の目的は変わりません」

迷いのない表情だった。殺るか殺られるか、全てはその二択だ。

「ついてきますか？……私のやるうとしていることが間違いであっても」

珍しい問いかけに、俺は鼻を鳴らして笑った。今更そんなこと聞くなつての。ついていく気がなければ、命がけで助けるわけねえだろ？視線を向けると、クリフもしっかりと頷いている。

サーシャはふと笑うと歩き出した。

「……いきましようか」

どんなに無様だろうが、地を這って泥にまみれる。それが俺達の生き方だ。

例え神であろうとも……俺達の生き様を笑う資格は、ない。

Stage of extra

もはや繁栄の跡すら見ることの出来ないトウアス帝国。時という名の風が吹き付ける。訪れる人すらいなくなった場所に、立つ影が2つ。

全ての始まりは、帝国の消失。『知』が失われた夜から長い長い時間を経て、世界は1つの書に揺れる。過去の預言書……過去の全てを知ることの出来る、魔法の書。

各国が競って奪い合いを繰り返した預言書は、やがて2人の兄妹の手に渡る。父の意志を継ぐ兄、母の面影を追った妹。

2人の道はやがて交差する。そこで途切れるのはどちらの道か……。

- Next Story -

「Veronica」

始めましょうか、兄様。

第1章 1

完璧なんて言葉は言葉だけのものではないし、善と悪を計るものさしなんて存在しない。だからって、必要なのは流されて生きていくことじゃない。しっかりと立ち上がるだけの意志……何ものにも汚されない強い意志がたった1つでもあるなら、人は生きていけるんだ。

- ヴェロニカ -

「……それで？」

サーシャお姉ちゃんが部屋のカーテンを閉めながら続きを促す。私は頷いて、魔術師サマとクリフお兄ちゃんに視線を向けた。さっきからサーシャお姉ちゃんは椅子にも座らず、窓際でクロノスを片手に私の話を聞いている。

「断言はできないんだけど、お母さん曰く予言書の可能性は高いって」

「それって、終焉の章……だよな？ な、なんでそんなところに……」

クリフお兄ちゃんはベッドに座りながら、困ったように地図を広

げていた。その視線は北西にある真っ白な地帯に向けられている。ネオ・オリよりもっと先、アルジェンナ砂漠の向こう。そこはまるで誰も足を踏み入れたことのない異界のように、何も書かれてはいなかった。

だってそこは、もう捨てられた場所だから。

「…………『終焉』って名前にゃピッタリじゃねえか」

椅子に座ってテーブルの上に足を投げ出してる魔術師サマ。煙草を加えた口から煙を吐き出して、サーシャお姉ちゃんに視線を向ける。クリフお兄ちゃんも同じように顔をあげた。

じつと窓の外を見つめていたサーシャお姉ちゃんは、クロノスを仕舞うと大きく息を吐いた。きつと、二人が何を待っているのかわかっているんだと思う。振り向いたお姉ちゃんは、クリフさんから地図を受け取るとテーブルの上にそれを広げた。

「アルジェンナの北西、トゥアス帝国跡ですか…………」

指先が海を越え、ネオ・オリから砂漠を渡る。現在私たちがいる、砂漠の南西からまっすぐに上へ。真っ白な区域は砂漠と同じくらいに広い。それでも、サーシャお姉ちゃんに迷いはなかった。

トゥアス。今はもう誰も近づかない、かつて栄華を誇った大帝国。旅人たちの話によれば、かつてひしめき合うようにして立ち並んでいた住居区も砂と化し、今はアルジェンナと一体化しつつある。辛うじて分かるのは、国境に作られたゲートと、帝国の城跡。

サーシャお姉ちゃんはしばらく地図を見つめ、そして顔をあげた。

「…………セルマの情報を信じましょう」

「！」

私はちよつとだけ吃驚した。過去の予言書の行方を調べるのは、裏社会でも名の通ったお母さんでもちよつと難しい仕事。だから、今回だけは予言書があると断定できない。勿論、この話をする前に前置きもしたけど……。

同じことを思ったのか、魔術師サマも煙草を口から話してサーシヤお姉ちゃんを見上げる。

「……いいのか？あくまでも可能性、だろ？」

「ええ」

サーシヤお姉ちゃんの目ははつきりとしていた。つい数週間前に機械人形の襲撃を受けて大怪我をしたなんて、信じられないくらいしつかりした瞳で。

「今回は争奪戦ではありません。……目的は、あちらへの接触。考えられる可能性は一つ一つ潰していきましょう。それに」

トウアス帝国の跡を、サーシヤお姉ちゃんはきつと覚えていない。自分が眠っていた、過去の遺物の都。空白の地図が、無言のまま語りかけてくるようだった。

「終わりにするには、これ以上ない舞台だと思いませんか？」

ひっそりと静まり返った夜の空。私はメンテナンス室のバルコニーから空を見上げて、一人静かにコーヒーを飲んでた。三日三晩かかったシルヴィの応急処置は、昨日の昼にやっと終わったばかり。まともな睡眠を三日ぶりに享受して、一息ついたらもうこんな時間振り返って部屋の中を見ると、暗くなった室内に横たわる少女の姿。胎児のように体を丸くして、眠りではないプログラム上のスリープ状態にいる。

「本当に……クタクタだわ」

私はため息をついた。壊れてしまったシルヴィを初期状態まで回復させることはもはや不可能だった。作った私にも分からないエラーや、プログラムの異常、何よりも記憶装置の破損が酷過ぎた。ジエイロード達と別れた後のことは全く調べられない状態で、ここに戻ってきたことも奇跡と言えるかもしれない。

現在の機能は、もう殆ど他の旧式と同じレベルまで落ちていた。それでも戦闘能力の高さは変わらない。一つだけ残りなのは、シルヴィとしての自己認識が低下してしまっていること。だから……あの笑顔は、もう二度と見れない。

私は苦みのあるコーヒーを口に含んだ。空は闇の色に染まっただけで、冷たい風が吹いてくる。もう寝てしまおうか。けれど……。ふとそんなことを考えていたとき、メンテナンス室の扉を叩く音がした。バルコニーから顔だけだして応えようと、扉が開く。

「……ジエイロード」

思いがけない訪問に、私は少しだけ驚いていた。ジエイロードは

メンテナンス室に入ると、シルヴィの様子を確認して、バルコニーへと近づいてくる。私は手すりに背を預けたまま、静かに呟いた。

「……てつきり、私が眠るのを待ってるのかと思ってたんだけど」

いつも彼らは出かけていく挨拶もせず、急にいなくなる。シルヴィのメンテナンスが終わると、いつもそうだ。私が寝ている間、出かけている間、ちょっと目を離れた隙に……いつの間にか3人も姿を消している。時折アイルークが口を滑らせるときもあるけれど、大抵そう。

だから……今眠って、朝起きたら、また彼らはいなくなるんだろうと思うてた。

「珍しく挨拶でもしにきたの？」

ちょっと皮肉って言ってやると、ジェイロードは表情が変わることなく頷いた。

「ああ」

「どつゆつ風の吹き返し？」

端正な顔に向かって、私は更に一言加えてやった。するとジェイロードは珍しく眉根を寄せる。

「……この間から機嫌が悪いな」

機嫌が悪い？悪いに決まってるじゃない。私はずっとそうだったわ。

「貴方には分からないでしょうね」

「何のことだ？」

「っ、…… 1人取り残される人の気持ちよ！」

いつも、誰もいなくなったらボを見て、ぽつんと取り残された気分になる。工房の仲間は何にもいるけれど、何故か独りぼっちになつてしまつたような、そんな錯覚を覚える。

きっと人は、望めばいくつもの宿り木を手に入れることが出来る。でも一度出来てしまつた居場所は、それがどんなものであれ、たつたの一つでも失いたくないと思つてしまふ。最初は数えるほどしかなかったはずの場所なのに。

ふと、ジェイロードが私の隣に来て、空を見上げた。星が浮かぶ、綺麗な夜空。月が静かに世界を照らす。

「……星がよく見えるな」

このメンテナンス室のバルコニーからは、向かいの建物が邪魔にならずに空を見渡すことが出来る。ジェイロードは静かに指先で何かを指差した。

「何……？」

私は目尻に溜まつた涙を拭いて、唇を尖らせた。また話をそらすのかと、ため息をつく。それでもジェイロードは気にしなかった。

「あの星の並びを、別名『エト』と呼ぶ。……分かるか？」

ジェイロードの指の先には、少しいびつだけど丸く並んだ星が見えた。

「エトって……あのエト？」

時計師の業界用語だけれど、エトっていうのは時計の文字盤のことを指す。時計師の家系に生まれて生きてきたけど、そんな星の名前なんて初めて聞いたわ。

ジェイロード曰く、丸く並んだ星は時計の数字……インデックスを表しているらしい。確かにそう言われてみると、それっぽく見えてくる。数字を表すには数が中途半端だけ。

「それに関する逸話もある。……昔、アナスタシアと呼ばれる女がいた。彼女は父親によって盗みの濡れ衣を着せられ、死刑に処されることになった。アナスタシアは牢屋に入れられた星の刻から、死刑が行われる翌日の月の刻まで、1時間ごとに詩を歌った」

トウアス帝国の時期よりもっと昔に、時間は二十四刻と呼ばれ、初（1時）、影（2時）、涼（3時）、碧（4時）、白（5時）、覚（6時）、光（7時）、動（8時）、花（9時）、暖（10時）、風（11時）、中（12時）、葉（13時）、針（14時）、鳴（15時）、燐（16時）、夕（17時）、沈（18時）、月（19時）、星（20時）、帝（21時）、亞（22時）、睡（23時）、深（24時）と呼ばれている。

「彼女の詩はどれも素晴らしかったが、その中でも月の刻……死刑の間際に歌われた詩は神々にも届いた。刑に処された彼女の命を哀れんだ神々は、彼女に神としての座を与え、敬虔なアナスタシアを月神とした」

「……それで、あの星が二十四刻のエトなの？」

私は冷えてきたコーヒを飲みながら、そう呟いた。ジェイロードは上を見つめたまま言う。

「……数百年に一度の確率で、月があゝの星の中央にくることがある。月が三日月の形をとるとき、端は彼女の死んだ月の刻を指し、もう片方の端は始まりの初の刻を指す。終わりと始まりを意味する文字盤が出来ることで、『エト』は完成する」
「途方もない先の話じゃない」

少なくとも、月があゝの中央にくるなんて、明日明後日の話じゃないような気がする。私がお婆ちゃんになっただけで、見れそうにないわ。私の言葉に、微かにジェイロードが笑った。

「……そうだな」

本当はちよつと口元が緩んだだけなのかもしれないけど。でも、見間違いじゃない。

「……それでも、それを本当に見ようと言った人がいた」

私は何も言わなかった。多分、口を挟んだら、ジェイロードは言うのをやめてしまうかもしれない。だから私はただ静かに、その言葉を聞いていた。いや、本当は一瞬の笑顔に見とれていたのかもしれない。ちよつとだけ幼い感じに笑ったその表情に。

「本当に見れるとは思っていなかったが……その表情は何よりも印象的だった」

そこまで話して、ジェイロードがこちらに視線を向けた。私は少しだけ赤くなつた顔を隠すように視線を逸らして、そしてコーヒ―を口にした。

月明かりがバルコニーを照らし出す。ジェイロードの腰にはリボルバーが下がっていた。

「……この間の答え合わせをしても良いか？」

この間の……。思い出して、私はきよんとする。もしかして、ジェイロードなりに考えたんだらうか。私の言葉なんて聞く気ないと思っただのに。

何か言わないと、先に答えを口にしてしまいそうで、私は大きくため息をついた。

「今度帰ってきた時でいいわ。……さっさと行ってらっしゃい、アイルークも待つてるんでしょ」

「……そうだな」

ジェイロードはこちらに背を向けて歩き出す。シルヴィを起こして、部屋から出て行くのを静かに見つめていた。奥でアイルークの声が聞こえていく。三人分の足音が徐々に遠ざかっていく。ぽつんとバルコニーに立ちながら、私は一人。結局、また一人。

でも、孤独感を抱くことはない。私は静かに空を見上げる。未成のエトが、静かに夜の星空に浮かんでいた。

第1章 2

不自由に体を蝕まれる。徐々に自分のものではなくなる体を感じながら、私はただ目的へと向かって歩み続ける。その先に何を見るのかは分からない。おそらく何も無いのだろう。そう、何も無い。それを知っているからこそ、私は歩み続ける。

- 永遠の眠り -

サーシャは金をメイに渡し、地図を畳んだ。クリフはまだ食べていない夕食を取りにいくと行って部屋を出て行った。食堂はこの部屋の真下だ。クリフの背中を追いかけ、メイも部屋から出て行くところとする。

「メイ」

扉に手をかけたメイが、ふと振り返った。

「何？お姉ちゃん」

「……もう一つ頼みがあるのですが」

サーシャは畳んだ地図をテーブルに置くと、荷物の中から何かを

メイに投げた。重みのある袋が俺の目の前を弧を描くように飛んでいく。

メイは慌ててそれを受け取ると、中身を見て驚いた表情をした。

「わ、お姉ちゃん。いつもより多いよ」

「……注文はクロノス・ヒュペリオンの弾丸、それとサーベルを」

耳慣れない言葉に、俺はテーブルから足を下ろした。サーシャは俺の前に立ったまま、静かにメイを見下ろしている。背中からは、表情は読み取れない。勿論、読み取れるような表情なんざ浮かべていないだろうが。

メイは瞬きをすると、サーシャと金とを見比べて何かを悟ったようだった。

「……うん、分かった。夕食が終わったら、お姉ちゃんの所に持ってくるね」

それじゃ、と言ってメイは部屋から出て行った。足音が徐々に部屋の前から遠のいていく。ふと窓の外を見ると、夕日が藍色の空に消えていくところだった。

俺は煙草を加えたまま、サーシャの背中を見る。

「……オイ」

大地の章を手に入れてから数週間。サーシャの傷は瞬く間に治っていった。本当に心臓を貫いても死なない化け物女だ。ただ……俺には気になることがあった。

機械人形に襲われたとき、あのナイフには明らかに血とは違うものが付着していた。そして、ルミナリイとかいうこの女を苦しめた、あの症状。あれは一体なんだったのか。

クリフも、三大戦士も気づいていなかった。サーシャ自身も、何も言おうとはしない。

「……なんですか？」

サーシャは振り返ると、いつもの表情で俺を見下ろした。煙草の灰が床に落ちる。俺は煙を吐き出すと、短くなった煙草を口から離した。

「お前、体の具合は？」

「怪我ならもう治っていますか？」

言うと思った。俺はいつもの調子で怒鳴りつけるのをこらえ、椅子から立ち上がる。灰皿に煙草を押し付けると、見上げる立場と見下す立場が入れ替わった。

「違えっての」

「何が違うんですか」

「俺が言ってるのは、あのナイフのだな……」

「『毒』、ですか？」

サーシャが俺の言葉を遮るように言った。急に話の核心を突かれ、俺は一瞬言葉に詰まる。

サーシャの顔色は変わらなかった。ただじつと俺を見上げ、そして目を離す。興味を失ったような表情が、少しだけ白く染まって見えた。

「……毒ではありませんよ」

そう呟いた声に、俺は安堵の息を漏らした。しかしそれもひとと

きの間だった。

「ただの毒なら多少の消化は体内の中で行えます。……それがおそろしく、出来ていない」

語るサーシャの声は、まるで第三者のように静かだった。まるで全てを知った傍観者のように、サーシャはベッドに腰を下ろす。事実を淡々と述べるその声音に、俺の方が動揺していた。

サーシャはクロノスとヒュペリオンをベッドの上に置いた。

「薬が効いているのは自覚しています。私のルミナリイとしての力のせいも、もともと遅効性のものなのか……まだ完全に効き目が出ているとは言えませんが」

「なっ……」

あの襲撃から、サーシャが苦しんでいる様子は見えなかった。だからこそ、クリフもサーシャの体調に気づかずにいる。

「オイ、サーシャ」

サーシャは手を組んだまま、静かに指先を見つめた。

「おそらくジェイロード達もこれで終わりにするつもりでしょう。用意周到なことですね」

「サーシャ！説明しろっ」

怒鳴ると、サーシャは大きくため息を吐いた。微かに眉間に皺を寄せたが、すぐに表情を戻す。そして俺を見上げたまま言った。

「……簡単に言いますか。死なない人間を黙らせる方法を」

死なない人間を黙らせる？どうゆうことだ。

俺はまだ混乱したままの頭で考える。サーシャはヒュペリオンを手にとると、誰もいない壁に向かってそれを向けた。いや、そこに人がいると仮定したのかもしれない。死なない人間……ルミナリイを。

「心臓を貫かれても死なない人間がいるとしたら、フレイさんならどうしますか？」

「……それは」

言葉に詰まる俺を見て、サーシャは言い換えた。心臓を貫かれても死なない人間が、自分の敵だとしたらどうするか。突破口をどう見だし、勝利を得るか。

「……。」

「分かりますか？」

「……死なないってことは、『殺せない』ってことか？」

俺の言葉に、サーシャは頷いた。

「ええ、つまり『殺す』のではなく『負かす』しかない」

負かす。んでもそう考えるとおかしいだろ。こっちは殺すつもりだつてのに、そんな考えは不利になるだけだ。それにあいつ等がそんな穏便に済ます人間ではないことは、よく分かってる。それに、負ける負かすつてのは、賭博じゃねえんだ。一体どこで区切りをつけるつもりで……ん？

俺の表情に気づいたのか、サーシャは口の端で笑ってみせた。

「分かりましたか？……動く障害物があるのなら、動かなくしてしまえばいいんですよ。殺せない敵がいるのならば、体を動けなくすればいい。意識も奪うことが出来るのなら完璧でしょうね」

「じゃあ、あの薬は……」

「そうですね。体の自由を奪うと同時に、思考能力も奪う……睡眠薬と似たようなものです。おそらく永遠に眠るためのもの、でしょうね」

毒薬とそんなに変わりませんか、とサーシャは他人事のようにそう言った。死と、永遠の眠り。同じじゃねえか。ただそこに体だけが朽ちることなく残る。それだけ。

馬鹿言うな。俺が口を開こうとすると、それをサーシャが遮った。

「効き目はかなりの遅効性です。あの時の症状はおそらくルミナリイとしての治癒効果が生み出した、拒絶反応でしょう。……問題ありません」

「問題ないって、お前……！」

サーシャは静かにヒュペリオンを下ろした。指先でバレルをなぞりながら、サーシャは静かにため息をつく。それ以上口にするなど言うかのように。

サーシャの様子は俺の目から見ても普段と何ら変わらない。おそらく当人が言う『かなりの遅効性』というのは本当だろう。もし、あの薬によって復讐という目的が困難になるならば、サーシャは遠回りしてでも体を癒すことに専念するはずだ。

それをせずトウアス帝国跡を目指すというのなら、問題ないというサーシャの言葉は信用できる。……。

「フレイさんも人のことより自分のことを気にしてはいかがですか？」

「……うるせえ」

サーシャに背を向けて、扉に手をかけた。俺もまだ食事を取っていない。下に降りて飯を食ったら、さっさと寝てしまおう。この件はさっさと忘れて。

扉を閉める間際に見たサーシャは、何かを思案するように目を瞑っていた。白い横顔が扉の開閉によって遮られ、見えなくなる。

廊下から見える夜の町並みを見つめながら、俺はまだ煙草の香りがする息を吐いた。軋む床板の音。微かな不安が脳裏に過る。

アイツは……ジェイロードを殺したら、その後、どうする気なんだ……？

「クリフお兄ちゃんもご飯？隣座ってもいい？」

考え事をしながらもごもごと口を動かしていると、急にメイが視界にわって入ってきた。食堂の人影はまばらで、空席が目立ってる。メイは水の入ったコップを持ってきて僕の向かい側に腰を下ろすと、食事をしている僕をじっと見つめた。

「……な、何？」

「んー……」

僕はギクシヤクしながら首を傾げた。もしかして、顔に何かついているのかな。でもメイの表情はそんな様子じゃなかった。

「ねえ、クリフお兄ちゃん。お兄ちゃんには、兄弟っている？」

「兄弟？」

突然のメイの言葉に、僕はつい問い返した。兄弟はいないけれど、姉と妹がいる。世話焼きの姉さんと、明るい妹。女兄弟に挟まれて育ってきたせいか、僕が泣き虫で臆病なのは昔から有名だった。

僕はふとまじめな顔で水を口にするメイを見る。メイの兄弟は、あの家にいた子供達だ。兄弟というより、弟妹。一人も血が繋がっていない、拾われた子供達。

「メイ……時々思うんだ」

メイはぼつりと呟いた。

「メイはあの家で一番お姉さんだから、小さい子の面倒を見るのは当たり前だし、そうしなきゃって思う。でも……」

「でも？」

握ったグラスから水滴がこぼれ落ちて、円形にテーブルを濡らす。メイは小さい子供のような顔をしていた。僕からすれば子供だけどころ……いつものメイは、同じ年代の子供達より背伸びをしているように見えていたから。だって、そうだよ。メイの年で、一人で旅をして、一人で仕事をして、一人でお金を稼ぐなんて、普通は出来ない。

メイはちょっとだけ寂しそうにうつむいた。

「本当はね、お母さんを独り占めできたらなあって、思うの」

年相応の表情を浮かべて、子供っぽいよね、とメイは笑って誤摩化した。僕は首を横に振る。僕の妹もメイくらいの年齢だったけど、病気がちの母さんや、活発な姉さんにベッタリの時期もあった。でも、メイとは事情が違う。

セルマさんには、きっと僕らなんかには話せないような過去があつて、僕らなんかよりよっぽど壮絶な人生があつたんだろう。あんな場所で身寄りのない子供達を集めながら、武器や情報を売る裏社会の人間。メイに見せる表情も、母としてではなく……どちらかというと師のような顔だった。

「お母さんはね、ホントはメイのこと愛してないの」

メイはえへへ、と笑いながらそんなことを言った。まるでちよつとした欠点を口にするかのような、そんな表情だった。

「お母さんは、きっとメイよりお父さんの方がずっとずっと大好きだったから、だから、ホントはあの日だってお父さんと一緒に……」

ふとメイはテーブルに落ちた水滴で一筋の線を作った。濡れていた指先が徐々に乾いて、線は途中で消えてしまう。

メイは泣かなかつた。その代わりに、とても寂しそうな顔をしていた。指先を空中に向けて、そしてメイは呟く。

「……メイのことを愛せないお母さんが、ちっちゃい子連れてきた時は驚いたんだよ」

「あの子供達？」

そう、とメイは頷いた。子供達の数は……申し訳ないけど、はっ

きりと覚えていない。でも、沢山の子供達が走り回っていたことだけは覚えてる。きつと僕らと顔を合わせていない子もいるかもしれない。

「お母さん、どうしてメイのこと愛してくれないのに、別な子を連れてくるんだろうつて、ずっと思ってた」

メイは視線を天井に彷徨わせる。上はサーシャさんの部屋だ。そういえばフレイさんもサーシャさんも、まだ下に降りてこない。食事は先に済ませてしまったんだろうつか。

メイは椅子の背もたれに寄りかかった。

「サーシャお姉ちゃんとカタリナさんはあんなに仲良しなのに、どうしてお母さんはそんなことばかりするんだろうつて」

「……」

本当のことを言うと、サーシャさんとカタリナさんの関係だって普通の親子関係とはちよつと違ってている。でも、二人の間に強い信頼関係と愛情があつたのは確かだ。互いのためならば、嘘を貫き通すことが出来るくらいに。

でもね、とメイは視線をこちらに向けた。

「最近、ちよつとだけ思つたの。お母さんはもしかして、やり直そうとしてるのかなつて」

「やり直す?」

「うん。変な話だけど……」

テーブルに描いた水の線がゆっくりと消えていく。メイは両手で水の入ったグラスを支えると、複雑そうに、でも満足そうに笑つた。その笑顔は何か例えることの出来ない、とても難しい表情だつた。

「誰かを愛せるように……いつかメイを愛せるように」

変な話ばかりでごめんね、とメイは言った。僕は首を横に振る。きつとメイが伝えたいのは言葉に表せない、複雑な気持ちなんだろう。僕にも分かる。言葉に出来るものは、きつとこの世界に沢山ある事柄の十分の一くらいでしかない。それを、僕もやっと知ったから。

メイは最後にこう締めくくった。

「だからね、メイ最近こう思うの。お母さんはメイを愛せないけど、メイを愛そうとしてくれる。その気持ち、何より一番大切なんじゃないかな？」

第1章 3

0と1を繰り返し、私は再び目を開ける。複雑に絡み合う信号がこの個体を操り、促されるままに体は動く。信号の音は単調で、私の歩みもまた単調で。与えられた命令のままに動き、この体は全てマスターの為に存在し。

螺子と歯車に埋め尽くされた私の思考は、機械音を立てて起動する。

- 人形姫の物語 -

「トウアス帝国跡って、この先にあるんですか？」

アルジエンナ砂漠の道なき道を歩きながら、クリフさんが呟いた。私は頷いて、視線を陽炎の先に向ける。商隊すらも近寄らないというトウアス帝国跡。帝国が滅んだ後、トレジャーハンターが行き来していたこともあったが、知に関する文献はおるか当時の文明の欠片すらも見つからず、今では旅人すらも近寄らない空白の地となった。

「……全然見えてこねえぞ」

日差しに肌を焼かれないようにローブを被ったフレイさんは、苛立ったようにその声をあげた。辺りに広がる砂漠には終わりが見えない。それでも、徐々に辺りの風景は変わってきていた。アルジェンナ特有の細かい砂の広がる地帯から、徐々に荒廃した地形へ。近くに転がる岩には、微かに人の手によって掘られたような不自然な傷跡が残されていた。

「……帝国時代はこの辺りにも民家が建ち並んでいたと聞きます。ゲートはもうすぐでしょう」

帝国の城下に入るには、厳しく規制されたゲートをくぐらなければいけなかった。荷物の検査、及び旅標のチェック。また反帝国組織の入国を防ぐ役割もあつたとされる。

「……サーシャさん？」

ふとクリフさんに呼ばれて、私は自分が足早になっていることに気づいた。辺りに見える風景に覚えはない。それでも何処か懐かしく感じてしまうのは、カナリナから伝え聞いた帝国の記憶のせいだろうか。彼女は帝国を憎んでいた。しかし私にとって帝国は……：私自身を作った、もう一人の母なのかもしれない。

知の申し子『ルミナリイ』。ルミナリイ計画と呼ばれた不老不死を作る研究は、おそらくあの『知』消失の夜に完成した。皮肉にも研究者達はその完成を目の当たりにすることなく……：私が見つかったというあの地下のラボで、数多くのモルモットが長い歳月のうちに腐り果てていった。

「ああ……すみません」

実験に使われたモルモットは、下級民族やスラム街の人々の子供

だったという。不老不死という崇高な理想の為に、帝国は実験体が人の形を取る前……母体からその遺伝子を操作する方法を考えたという。今となつては理解することさえ出来ない、途方もない試み。

徐々に荒れた大地の中に石畳の残骸が見えてきた。砂に埋もれた地面が固く、靴がコツコツと音を立て始める。凸凹に壊れた石畳に足を取られそうになりながらも、クリフさんが後ろから追いかけてきた。

「も、もうこの辺りから帝国領なんですか？」

「……領地の範囲で言うのなら、ネオ・オリから出た時点で帝国領にあたります」

アルジェンナ砂漠も、当時は帝国の領地だった。この広大な砂漠は500年前も存在し、敵国からの攻撃を防ぐのに役立つたという。オリエントと呼ばれる長年続く大国を隣に持ちながら、帝国が力を伸ばしたのはこの立地のためだろう。

ふと顔をあげると、視界の先にゲートの残骸らしきものが見えた。巨大な石柱が斜めに崩れ、通り道は瓦礫に埋もれている。

私は目を細めて、ゲートを見つめる。

「……」

広大な砂漠と、荒れ果てた大地。茶と褐色の世界に不似合いな緑がゲートの手前に立っていた。人の姿をしたそれは、まるで動かない石像のように道の中央に存在している。

砂を巻き上げる強風に、緑の髪が揺れた。同時に服の裾がはためく。歩みを止めていた私はその姿を確認すると再び歩き出した。

「っ……」

ふと後ろにいたクリフさんが、息を詰まらせた。フレイさんもまた、眉間に皺を寄せてそれを見ている。

私がゲートの手前まで行くと、相手は少しだけ顔をあげた。私たち三人をガラスの瞳で捉え、何の感慨もない表情で口を開く。

「……サーシャ・レヴィアス……」

フルネームで呟かれた名前に、私は左手でクロノスに触れた。まだ構えはしない。指先を添えながら、相手の動きを見る。

「シルヴィ……」

クリフさんが呟く。それはこの機械人形の名前だっただろうか。

他の機械人形とは違う、人間そっくりの表情、そして動き。それも……これは人ではない。

「……貴女の主人はどこに？」

試しに問いかけると、人形は首を傾げる動作をした。人間の少女と何ら変わりのない自然な仕草。なぜ私がそんなことを聞くのかと、そんな反応を示しているのだろう。答える義務がないのか、答える必要がないのか……。

ゲートの向こうは瓦礫によって見えなくなっていた。

「ちっ……どっちにしてもコイツを倒さねえと先に進めないってことか」

フレイさんの舌打ちが響いた。人形はその言葉に反応したのか、微かに警戒の態勢をとる。私もまたクロノスを握りしめた。おそらくこの殺人人形一体をここに置くのだから、それなりの勝機あつて

のことだろう。警戒を怠ってはいけない。

「……ターゲット照合、情報確認中……攻撃パターンR、起動します」

「……待ってください!!」

一本の線が張りつめたような緊張。後ろから響いた声は、クリフさんのものだった。私とフレイさんが振り返ると、クリフさんが一歩、二歩と前に出る。

砂嵐が間を通って抜けていく。

「……彼女の相手は、僕がします」

ふと私は目を見開いた。殺人人形の相手すらまともに出来ないクリフさんに、この場を任せられるだろうか。しかし、答えを出す暇もなく、フレイさんが動いた。私の腕を取ると、強い力でゲートへと引っ張っていく。

「!!」

私はフレイさんを見上げ、そしてクリフさんを見た。その右手はレイテルパラッシュの柄をしっかりと握っている。左手は剣の鞘にかけられていた。

「フレイさん」

「言ったなクリフ。後で怖くなって逃げてくんじゃねーぞっ!!」

クリフさんと人形の脇をすり抜ける。クリフさんはこちらに視線を向けなかった。ただフレイさんの言葉に答える。

「……………はいっ」

おそらく、この先にイルークさんと……………ジェイロードがいる。あの殺人人形相手に負傷してしまつては、この先に勝ち目はない。私はフレイさんを見上げた。ゲートのその先を見る横顔。そうだ、私が考えるべきはジェイロードのこと。それだけでいい。

今にも崩れそうなゲートの横を走り抜け、私はフレイさんと共に走つた。

巻き上がった砂が空に散らばつて、微かに太陽の光を遮る。目をつむることなくこちらを見つめるシルヴィは、しばらくそうやって僕を見つめていた。

人に似た動き、言葉、表情……………それでも、今のシルヴィはあのサナトリウムにいた頃よりずっと機械的で生気がなかった。レイテルパラッシュの鞘を握つた手が、微かに脈打つた。

「……………シルヴィ……………」

真っ白な顔に、別れ際のシルヴィの表情がだぶる。確かに泣いていた彼女の顔、悲痛な思い。

僕の言葉に、シルヴィは微かに顔をあげた。それでもその瞳が動

くことはなく、彼女はただ静かに戦いの時を告げる。

「……ターゲット照合完了。攻撃パターンR、開始します」

言葉が終わるのとほぼ同時だった。彼女は人には出せないスピードで間合いを詰めてきた。僕は咄嗟に鞘を抜き、レイテルパラッシュを構える。

「っ」

シルヴィのスピードは、とてつもなく早かった。間合いを詰めてきたと思った瞬間、更なる加速で僕の判断を鈍らせる。風を切る音とともに目の前をかすめる左足。蹴りと呼ぶには強力過ぎる攻撃に、背中がぞつとした。

でも、その攻撃をかわしたからといって安心は出来ない。直後に飛んできた右の拳を慌てて避けて、一度距離を置こうと後ろへ飛び退ろうとした。そのとき。

「……逃げるノ？」

ぼつり、とシルヴィがそう呟いた。さっきまでの機械的な口調とは違う、あの声。僕の体は凍り付いて、その言葉が冷静な判断を失わせた。

「！」

轟音が左足から左肩にかけてを襲う。強い衝撃より、体が吹っ飛ばされたことを先に理解した。痛みは後から襲ってくる。左腕の痛みも、心の痛みも。

肺の中に空気が詰まったように、僕は砂の中に転がりながら激し

く咳き込んだ。かろうじて右手はレイテルパラツシュを握ってる。

「っ、……あ……」

空から降り注ぐ太陽を遮るように、シルヴィが立っていた。その顔には表情がない。悲しむことも、喜ぶこともなく……ただ、無の表情を浮かべている。

あの時、最後に別れた時、僕は彼女に酷いことを言った。謝りたかったんだ。謝らなきゃと、思った。本当は心の何処かで、シルヴィの気持ちにも気づいていたのに……。

『シルヴィとは、違う……っ』

綺麗に染まった緑色の髪が砂漠の風に揺れている。微睡みの庭で受けた傷は修復されたのか、今の彼女は出会った頃と何一つ変わらない。

「……」
「……」

僕はレイテルパラツシュを地面に突き立てて、なんとか立ち上がった。シルヴィは無言のままそれを見つめている。冷たい瞳に見えるのは、僕の罪悪感のせいなのか。

口の中を切ったのか、血の味がする。痰が絡まったみたいに気持ち悪くて、地面に吐き捨てる。恐怖も全部一緒に出て行けばいいにと、心の中で冷静なもう一人の僕がささやいた。

でも、それじゃ駄目だ。僕は、どうしてここに一人で残ったんだ。

「……今のはずるいよ、シルヴィ」

僕は笑った。多分、笑えたと思う。シルヴィは首を傾げ、意味が分からないと言いたげな顔をしていたけれど。

もう一度レイテルパラツシュを構える。左腕が熱いのは、さっきの衝撃のせいかもしれない。それでも、そんなことを気にしている暇はないんだ。

「シルヴィ。僕は……」

剣を向けられたことに反応して、シルヴィは警戒の態勢をとった。もう彼女の中には、彼女の意識は存在していないらしい。それでも、僕は続ける。

レイテルパラツシュが、カチャリと音を立てた。

「キミを……」

第1章 4

何も考えていなかった。今思えば、それが本音だ。どんな手を使っても、最後の預言書を手に入れる。あのジェイロードとかいう男に、勝つ。それだけを考えればいい。それだけを……。

俺のそんな考えは、あの一言で脆くも崩れ去った。

- ジョーカー -

陽炎の奥に浮かぶ、二つの影。吹いた口笛の音が乾いた風の中に消えた。ジリジリと照りつける殺人的な太陽の日差しに、それははつきりと浮かび上がる。

「やあ、リリイ」

一向にこちらを見ようとしないサーシャ・レヴィアスに手を振ると、隣にいたフレイがこちらを睨みつけてきた。剣士の姿はない。

二人……か。俺は笑みを浮かべたまま、心の中で静かにそう呟いた。彼らはここに来る前にシルヴィと接触したはずだ。一人減っているのは、戦ったせいなのか。しかしその割に二人に疲労の色はない。

(……………まあ、悪くはないか)

俺は隣に立つジェイロードに視線を向けた。この焼けるような日差しの下でも、涼しい顔は変わらない。金色の髪が風に揺れている。その視線は静かにサーシャ・レヴィアスを見ていた。

何を思い、何を考えているのかなんて分からない。兄弟なんて存在しないし、殺す、殺される、なんて直接的な殺意を肉親に対して抱いたことはなかった。ちら、と視線をフレイに向けると、ヤツは気に食わないといった顔で口を開いた。

「……………最後の予言書は？」

「さあ？……………この広大な砂漠のどこにあると思う？」

フレイが舌打ちをする。俺は肩をすくめてみせた。分かりきった嘘をつくくなって？

もう少しフレイをからかってやろうかと思った時、ふと隣から黒い表紙が顔を出した。

「……………ここだ」

ジェイロードは荷の中から取り出した予言書をフレイに向けて見せた。漆黒の表紙に踊る文字、過去の予言書5冊目、終焉の章。本物を目の当たりにして、フレイの表情が微かに強ばる。一方でサーシャ・レヴィアスは目を細めただけだった。ザッ、とフレイが砂を踏みしめる。

「……………お前をぶっ殺せば、手に入るってことだな」

相変わらずの口調に俺はため息をついた。

「お前の単細胞っぷりには毎回呆れるよ。これが俺の従兄弟だなんて」

「お前は黙ってるっ」

ああ、こわいこわい。口笛を吹いて笑うと、フレイが拳を握りしめた。分かりやすく扱いやすい。そこはお前の良いところだよ。少なくとも、お前の対極に立つ人間にとっては。

「……フレイさん」

ふと、今にも噛み付いてきそうな勢いのフレイの前にリリイが手を伸ばした。何も言わず、ただ差し出された左手。急にフレイが大人しくなる。静かになるというよりは、無理矢理黙らされたようにも見えた。

サーシャ・レヴィアスが一步、前へと足を踏み出す。真つすぐに前を見つめる鋭い瞳。その美しさは美女神フィオレンティーナと例えたが、撤回しよう。あのコロシウムでも、微睡みの庭でも、彼女は違っていた。その眼差しは刃の如く、その姿は毒花のように。何よりも美しく、血に濡れたまま赤く輝く百合。鮮血は乾くことなく、深紅こそが彼女を彩るのだろう。

「……」

リリイを見つめていたジェイロードは、彼女を誘うように砂漠の更に奥へと歩き出した。言葉を交わすことなく、リリイもまたそれに続く。全てを理解しているんだろう、彼女はすれ違う瞬間、一度だけこちらを見たが、すぐにジェイロードを追って歩き出した。腰のクロノスが鈍く反射している。

「サーシャっ」

追いかけるようにフレイが動いた。リリイは振り返らない。おそらくその思考は全て、兄であり、敵であるジェイロードに向けられているのだろう。俺はため息をついた。……お前だけだよ。何も分かってないのは。

フレイの行き先を塞ぐように立ちはだかる。兄妹水入らずに割り込もうとするなんて、頭が回らないな。

「っ！……どけ、アイルーク」

フレイは犬のように眉間に皺を寄せる。

「お前はリリイのナイトとしてなってないな……。自分の目的と、リリイの目的とを混同してるんじゃないか？」

「……ふざけんな。お前と遊ぶ時間はねえんだよ」

ギリギリと歯ぎしりする様を見ながら、俺は鼻で笑った。つまり俺の相手をする気はないと、そうゆうことか。どうやらリリイのことで頭がいつぱいのようだ。まあ、そこまで不安がる理由も分からなくもないけれど……。

俺はフレイを見下ろした。子供の頃と変わらない優越感に、懐かしさを感じる俺がいた。そう、状況はこちらが有利。フレイが俺を無視してリリイのところへ行こうとするのも、ある意味、自分達の不利を感じ取っているからだろう。

そう、切り札はこちらの手の中にある。

「お前の相手をする暇はないっ、退ける！」

「ははっ、お前は分かってないな……」

俺は懐からあるものを取り出した。小瓶に入った、透明の液体。

微かにとろみを含んだ液体は、緩く瓶の中で揺れている。

一瞬怪訝そうな顔をしたフレイは、すぐに表情を変えた。俺は二タリと笑ってみせる。

お前がジェイロード達の戦いに割って入ろうとすることくらい、予想できる。サーシャ・レヴィアスにとって俺が厄介なように、ジェイロードにとってはフレイが厄介な相手だ。出来るなら、互いに魔術師が介入しない状態で決着をつけたい。

そして、その状態を作り出すには、フレイをここで足止めしなければいけない。

「これが何か……分かってるよな？」

風が止み、辺りがシンと静まり返る。焼け付く日差しと似合わないほどの冷たい静寂。どこまでも続く砂漠を屈折させながら揺れる液体。

「……っ」

「フレイは本当に想像通りの反応をするな。……心配しなくても本物だよ」

睨みつけてくるフレイに、俺は嘲笑した。

「なんだ、断言した方がいいのか？……『解毒薬』だ。ふっ、その焦り様じゃ、リリーの状態にも気づいてるんだろっ？」

ネオ・オリでリリーを襲った殺人人形の武器には、特殊な薬を塗ってあった。それはルミナリイを『殺す』ための薬。勿論、薬でルミナリイを殺すことなどできない。効き目は命を奪うことではなく、生命活動の停止を強制的に行うもの。簡単に言うのなら、永遠の眠り姫をつくる薬とも言おうか。

「てめえ……！」

俺は小瓶を懐に戻した。やっとこちらに意識が向いてきたようだな。たとえ俺を無視してサーシャ・レヴィアスに助太刀したところで、彼女の行く末は見えているんだ。

お前は予言書の使い方なんて興味ないんだろう？ 残念だが、それは俺も同じさ。

「残念ながら、眠り姫を目覚めさせるのはキスじゃ不可能らしいな」

爺さんは過ちの罪悪感にかられて、逃げ道を予言書に求めた。予言書を作ることで、最愛の息子を失った苦しみから逃れられると思っていた。しかし全ては幻想で、都合のいい思い込みでしかなかった。

爺さん、あんたのおかげで沢山の人が『過去』の力に惑い、争いに手を染め、新たな悲しみと憎しみが残った。解決したものなんて一つもない。幸せになった者も一人として存在しない。そして、アンタの願いも最後の最後で叶わなかった。

「さあ、始めようか。……殺し合いでしか、お姫様は目覚めない」

俺たちの道は、もう違っている。

砂漠の中に瓦礫が目につくようになり、やがて街とは呼べないガラクタが顔をのぞかせ始める。私は静かにジェイロードの後ろ姿を追っていた。素直についてきたが、勿論警戒は怠っていない。何があってもクロノスを構えることのできる程度に集中している。

こちらに背を向けているジェイロードもおそらく同じだろう。私以上の警戒を感じる。通常の間人では察知できない自然さを装って

「……」
「……」

置いてきたフレイさんがどうなったのか、人形と対峙していたクリフさんは無事なのか。そんな全てのことを忘れ、私はただ兄の背中を見ていた。

昔もそうだった。私はそんなことを考える。まだ幼く無力だったころ、私はよくこうやって兄の背中を追っていた。兄の後ろにいる時は、母とは違う安心感があった。母は私を一人の旅人として鍛える義務があったが、兄にはそれがなかった。だからそう思うのかもしれない。

しかし、それも今は違う。

「……終焉の章は、何処にあったのですか」

私は静かに口を開く。ジェイロードは振り返ると、目を細めて今まで歩いてきた足跡を見た。

「……お前が通ってきたゲートの前だ」

「終焉の章をわざわざ此処に、ですか」

どこの洒落者がやったことかは分からない。しかし一夜にして消え失せたという大帝国の址に終焉の章を捨て置かれていた。おそらく、私たちにとって始まりであり……終わりである場所。

歩くほどに街の外観がはつきりとしてくる。やがて道がはつきりとした形で現れ、石畳の上に巨大な城門が現れた。入り口は開かれたまま、門は寂れて砂の中に埋もれている。向こう側にはもとは城であつたはずの壁が崩れていた。

「……………」

城門をくぐると、ジェイロードは足を止めた。私も一定の距離を置いて足を止める。スウ、と息を吐き出すと、頬を埃っぽい風が通り過ぎた。

私はゆっくりとクロノスに手を伸ばした。急ぐことなく、決して相手の隙を狙うことなく。まだ、始まりを告げる合図はない。

「……………今一度、貴方の口から聞きましょうか」

相手もカイロスを手を取っていた。型式も同じ、クロノスのかたわれ。母から貰った2丁のリボルバー。太陽光に反射するそれは、それぞれの命を繋ぐ一筋の光。

「過去の予言書を手に入れる、理由は？」

私の問いかけに、ジェイロードは微かに眉間に皺を寄せた。なぜそんなことを問いかけるのか、と。その顔はそう語っていた。

言葉にしなくとも、自身で読み取ること。それが私たち兄妹の暗黙のルールだった。それでも……………私は問いかける。

「互いに命を賭ける理由となるのですから……はつきりと口にして
もいいのでは？」

それが例えどんなに素晴らしく、どんなに馬鹿げているものだと
しても。私は笑うつもりはなく、そして怒るつもりもない。

ジェイロードはしばらく考え、そしてカイロスを一回転させた。
カチャリ、と耳慣れた音がする。金髪が、撫でるような熱風に揺れ
る。精悍な表情が、こちらに向けられた。

「……『ルミナリイの創造』だ」

静かに告げられた一言に、驚きはなかった。分かっていた。兄は、
取り戻したいのだろう。数百年前に滅びた国によって奪われたもの
を。そのために必要なものは……過去の予言書と、私の死。

私は口元を緩めた。私がどうやっても兄に歯向かうことは分かっ
ているのだろう。互いに互いの信念を信じている。それを曲げよう
とすることは、例え兄であっても妹であっても、不可能だというこ
とを。

「お前は……」

ふとジェイロードが私を見つめ返してきた。兄が表情以外で問い
かけるのは珍しい。私もクロノスを手にしたまま、髪を耳にかける。

「簡単ですよ。……私も予言書を使っていたことがあります。そ
のために手に入れたい」

ジェイロードの表情が曇った。おそらく私が過去の予言書を使う
とは思っていなかったのだろう。……そう、私もそう思っていた。

全ては兄に接触するため、預言書を集めようとしていたのも、フレイさんやクリフさんと契約したのも、兄への復讐心からだ。

しかし、今は違う。気が変わった。私は破顔する。おそらくフレイさんかクリフさんがいれば、止めようとするだろう。それでも、今ここにいるのは兄だけ。

「……………5冊とも手に入れたら、焼き払ってやろうと思います」

きつと、さぞかしせいせいするだろう。私は静かに笑った。

第2章 1

人は誰もが願い、そして誰もが夢想する。誰もが叶わぬ夢を求めている。欲を持たない人間がいないように、誰もが己の煩惱の海に岸辺を求めて彷徨う漂流者。流木にしがみつき、見る岸辺は層気楼でしかない。

それでも、叶わぬ願いに溺れながらも、生きようとする姿は美しい。

- アストレア -

人はいつか死ぬんだと、僕は知った。誰でも分かっているのに、僕自身だって例外じゃないのに、僕はずっとそれを否定していた。少なくとも僕の目に見える範囲の世界はそうじゃないんだと、信じていた。

いつも隣り合わせに『死』というものがあることを知ったあの日、僕の世界は暗転した。大切な人も、大切な思い出も、全てが無に還ってしまったんだと、そう思った。それはとても怖くて、恐ろしくて。

僕には分からないのに、僕の大切だった人たちはみんな知ってる。でも、誰一人としてそれを教えてくれない。死人はしゃべることが出来ないから。

「……っ」

いや、そうじゃない。死人というより、みんな無くなってしまったんだ。だから『死』というものの苦痛を、もしくは快楽を、伝える亡骸は存在しなかった。だから、よりいつそう怖くなった。

手に触れるレイテルパラツシユの感触。武器は身を守る為に、そして相手を傷つけるために存在する。一度は剣を持つことさえ出来なくなった。それはまるで冥界か何かと繋がる鍵のように思えて。

「うっ……」

シルヴィの蹴りが目前を通り過ぎた。そのスピードに息が詰まる。まるで空気さえも操られているかのように、うまく呼吸が出来ない。相手の表情は涼しいものだった。僕は半歩引いて体を傾ける。即座に次の攻撃が左肩をかすった。ガラスの瞳は標的を捉えて離さない。

「……」

シルヴィにとっては、何が怖かったんだろう。あの時はひどい言い方をしてしまったけれど、彼女には確かに人のような『死』がない。その恐怖すらもない。

『壊れる』という危機感は、それに近いんだろうか。けれど他の殺人人形達は、自身が傷つくことも壊れることも厭わずに、僕らに向かってきた。命令の為に身を滅ぼすのは、機械として逃れられない運命。

「シルヴィ……」

「……攻撃パターン、RからFへ。移行します」

事務的な口調で呟いた直後、シルヴィの体が大きく跳躍した。これだけの攻防を繰り返しても、やっぱり疲労の色は見られない。

「うあ……っ！」

殆ど体当たりに近い衝突だった。僕は倒れこんで、それでもなおレイテルパラッシュを握りしめる。一瞬途切れそうになった意識の中でも、レイテルパラッシュの柄を掴んでいたのは幸運だった。続いて延ばされた右腕を、僕は刃で薙ぎ払う。

剣は堅い感触とともに、金属音を立てて弾かれた。人の腕なら、確実に肉に食い込む力だ。それがこんな感触で弾かれるなんて。

痛む体を抑えて立ち上がって、僕は剣を握り直した。柄に汗が伝って湿った感触が伝わってくる。攻撃しなければ、状況を変えることは出来ない。守りに入ってしまったのは何も変わらない。

剣の先を持ち上げて、微かに震える切っ先を見る。息を吸い込み、そして吐き出す。皮膚が吸い付くようにレイテルパラッシュを握りしめている。

「……」

反撃を予想してか、シルヴィは間合いをとった。僕はその場に立つたまま、カチャリと切っ先を傾かせる。

「……シルヴィ、僕はね。何も……考えてなかった」

何の為に戦うのか。何の為に剣を振るうのか。決断しなければ歩む必要もなく、下を向いていれば分かれ道を選ぶ必要もなかったから。でも、サーシャさん達と出会って……僕は否が応にも前を見なければいけなくなった。

誰のせいであれ、何のせいであれ、独りぼっちになってしまった僕は生きていく術として戦うことを選んだ。選んだからには、傷つくことも傷つけることも分かっているからいけなければいけない。

「……後悔してる……」

立ち尽くしていれば、何も変わらないまま、誰かを傷つけることも自分が傷を負うこともないと思ってた。分かれ道を選ばなければ、間違っただ道を歩むこともないって思ってた。

「でもね、シルヴィ」

でも、そうじゃない。歩まなければ傷ついていくものがある。それが僕の信用なのか、ちっぽけなプライドなのか、それともキミのたった一つの願いなのかは分からないけれど。

レイテルパラッシュは太陽を反射する。目が眩むくらいの光を放つて。

「僕はキミを助ける為にきたんだ」

使われる『人形』は終わりにしよう。人を殺すだけのモノになるのはやめよう。キミの意識がもうないというのなら、キミが人として生きようとしたあの意思を尊重しよう。

あのサナトリウムで、キミは殺人人形としてではなく、たしかにシルヴィ・フェブラインとして生きていた。それでも、機械としての性から逃れられず、人形という器から離れられないのなら。

僕は剣を振るうよ。キミを解き放つ、たった一つの方法として。

「……負けるわけには、いかないんだ……!!」

砂漠の風に冷たさを覚えたのは、尋常じゃない汗をかいているからかもしれない。俺は足を止めたまま、目前を砂の混じった風が過ぎ去っていくのを見ていた。

アイルークはローブのポケットに手を突っ込んだまま、ニヤついた顔でこちらを見ている。俺は舌打ちをした。こいつを相手にしない限り、サーシャのところへ行くことは出来ないのか。

「ちっ……」

ポケットに手を突っ込む癖は、余裕を感じている証拠だ。ガキの頃から見ていたから知ってる。だがこれはただの優越感じゃない。これから起こりえる全てを計算しつくした上で、感じる余裕。こいつはローブのポケットの中でも、確実に俺の一手を相殺する魔法を拵えている。

俺は足下に視線を向けた。地面は砂漠。樹を象徴するヴァルナを喚び出すには最悪の状況だった。一方で、アイルークが喚び出す鈴人は風を司るフィオ。相性的にもこちらが不利だ。

（不利、不利って……何を弱気になってんだ、俺は）

例え奴がジジイの才能を受け継いだ魔術師だとしても、鈴人のN

0・2であるフィオを使役していたとしても、そんなのは関係ないことだ。

「……くそっ」

俺は握り閉めた拳から、指を弾いた。瞬間、アイルークの足下で砂が弾ける。省略呪文による牽制の一撃。しかしアイルークの涼しい表情は変わらなかった。

弾かれた砂を一步後ろへ飛んで避けながら、ヒュウ、と軽く口笛を吹いた。途端に奴を守るようにつむじ風がその体を包む。

「相変わらず……大きな口を叩くわりには、やることが地味だなあ」

風がやむのと同時に現れたのはフィオだった。まさか、あの口笛一つで喚び出したのか？雲の色をした体に憂いの瞳、そして鳥のような翼。鈴人の女王とも喚ばれるフィオ。力のある魔術師は召喚を省略することが出来るが、まさか契約の言葉すら口にせず喚べるなんておかしいだろ。

「うるせえ……黙れ」

俺は引きつった顔でそう言った。仕方ない、フィオが出てきたんじゃ、こつちもこつちで喚び出すしかない。本当はサーシャ達の援護に回すために温存するはずだった。温存、なんて言ったら使われるヤツも文句を言うかもしれないが。

下から睨み上げて、俺は大きく息を吐いた。いつも俺の立ち位置はこつだ。アイルークは一步先にいて、俺はいつも後ろにいる。背中を追っても追いつけない。遠くなる背中を見ては歯ぎしりを繰り返すばかり。

悔しかった。正直言って、お前を喚んだのもそつだよ。今なら認

めてやる。今だけな。んでもここでガキの頃の精算なんざする気はさらさらねえんだよ。コイツが俺より魔術師として上なのは周知の事実だ。俺だつて理解してる。それでも抗う気をなくしたら終わりだろ？

「……………アイデア・トゥルーン・レ・ヴァルナ」

術の省略も何もせず、俺はヴァルナの名を喚んだ。その名こそが契約の言葉。俺とあの鈴人を繋ぐ召喚だ。

召喚には体に不可がかかる。ネオ・オリでヴァルナを喚び出したときの、あの膝が砕けそうな重苦しい重圧。未だに俺はそれに慣れることが出来ない。

俺の目の前に人間の男によく似た姿が浮かび上がる。胸の位置で閉めた帯の端が風に揺れ、袖からは浅黒い腕が突き出している。左頬の傷が深く刻まれ、ヴァルナは苦笑にも似た笑みでイルークとフィオを見下ろした。

『ふつ……………終焉の地にて再会するとは、よほど業が深いようだな』

ヴァルナの呟きに、イルークが口を開いた。まるで珍しい動物でも目の前にしたかのように、恐怖心の欠片すらない、興味関心のみの瞳で鈴人を見上げる。

「へえ……………アンタがフォルカーに使えたつていう『堕ちた鈴人』か。噂はかねがね聞いてるよ」

俺は親父の名前に顔をしかめた。親父がヴァルナを使役してたつて話は、ガキの頃……………初めてコイツを喚び出した後に知った話だ。

俺がジジイの部屋で見つけた走り書き。そこにはジジイの持つ『デルヴァ』、イルークに使える『フィオ』とは全く別種のもの

してヴァルナの名があつた。最初は、何の考えもなかつた。ただフイオ以上の鈴人を手に入れたかつただけだつた。

ヴァルナは鋭い目つきでアイルークを見る。

「元主の息子に使えるとは、随分人好きするみたいだな。伝説によればかなり気難しいって話だつたけど」

『……………主、命を』

ヴァルナが俺に視線を向ける。低く地の底から響く声に、俺は一瞬体が震えた。今の言葉がヴァルナの怒りに触れたことが、はつきりと伝わってきた。空気が緊張を帯びて辺りが一瞬静かになる。微かにフイオがアイルークの前に出た。ヴァルナの殺意を感じ取つたかのように。

俺は小さく舌打ちする。言ってくれるじゃねーか。さつさと始めるつてのが。

「……………我、汝等が主の名を受け継ぎし者。契約に応じ、我が道を阻む者に制裁を」

馬鹿みてーに真面目に契約と命令の言葉を口にする。俺は呪文省略つてのが出来るほど器用な人間じゃねえんだ。小さい属性魔法ならまだしも、コイツを動かすんなら地味だろうがクソ真面目に命を下すしかない。

手で印を組み、そして意識をヴァルナに繋げる。鈴人を形として出現させるにも意識を繋げることは必要だが、こいつを本当の意味で動かすのなら深い精神共有が必要となる。心よりもずっと奥、無意識の深淵で。

息をするのも忘れるほど、強い圧力の中。アイルークの声が耳に入ってきた。

「ファイオ。
……やれ」

第2章 2

私は夢を見ている。人形が自由な器を手に入れ、平穩の時を過ごしている夢を。そこで私は私であり、私という人形である。これは私が見ている夢なのか、それとも人形が見ている夢なのか。水面上に漂う泡のように儂く、降り始めの雪のように哀しく……夢の終わりは突然に訪れる。

- 泡沫 -

メモリにインプットされた戦いに関する知識は、全てマスターであるジェイロード・レヴィアスのものをコピーしている。彼が母であるカタリナから受け継いだという力、経験、その全てを、この器の中に詰め込んだ。勿論旧式と同じように剣や銃を扱うことも出来るが、何よりも柔軟性を生かすことの出来る体術を一番に強化させている。

「っ」

体の傾きを利用し、大きく足を振り上げる。バランスと引力に逆らわず、流れに任せて強い力を込める。ターゲットは即座に身を振り、僅かな差でそれを避けた。

白刃の煌めきが、瞬時に襲ってくる。避けるでもなく刃を腕で弾いた。鈍い音が響く。僅かな痛みを信号を感じ取ったが、それでもミツシヨンに支障はない。

「……はあっ！」

僅かな隙間を空けた次の瞬間、レイテルパッシュが突き出された。風を切る刃の一撃。攻撃範囲のギリギリに飛び退り、足で剣先を跳ね上げる。刹那、相手の間合いに入り込み、軋む拳を叩き付けた。

「うっ……」

一度でも隙を見せれば、後は雪崩のように攻撃を繰り返していく。人間の体は脆く、そして弱い。痛みという信号に正常な判断を失ってしまう。だからこそ、人間は死というものに敏感なのかもしれない。

左耳から頭を飛ばすほどの勢いで蹴りを繰り返した。ターゲットは攻撃の連鎖にダメージを受けながらも、最後のとどめだけは上手く回避したようだった。

相手の体が砂の中に埋まる。灼熱の太陽が、ジリジリと二つの影を焼き付けた。

「……」

ただ、じつと立ち上がろうとする相手を見つめていた。口端から溢れた赤い液体が砂粒を固め、褐色に変化させていく。静かに左手を握り、そして開いた。

「っ……シルヴィ……」

レイテルパラッシュを地面に突き立て、ターゲットが立ち上がる。満身創痍といった状態でも、まだ警戒は怠らない。赤い信号が点滅し、回路を駆け巡る。

『私』は、静かに目を閉じた。

「……………」

助けると、彼はそう言った。おそらく分かっているのだろう。私
がもう元の状態には戻れないということ。全ては夢の中だった。
そう、人形の見た夢だったのだ。人の手によって心を持ち、短い時
間ながら人として過ごしたこと。心によって、人の抱える痛みも、
苦しみも知った。そして……………自分が人形でしかないという苦悩も抱
いた。

今思えば、あれは私の見た夢だったのか。それとも人形の見た夢
だったのか。ここでクリフと対峙している今の状況すらも夢の一部
なのかもしれない。もしかしたら私は全く別の人間なのかもしれない、
もしかしたら全てが幻なのかもしれない……………。

そして、この夢は、たった一つの方法でしか終わらせることが出
来ない。

「……………攻撃パターン、Sへ移行。ロック解除まで30秒」

メモリを埋め尽くす数字の群れ。全てが高速に変化していき、全
ての数字が100へと上昇していく。体の特殊機能を全て解除し、
信号による警戒を無効へ。インプットされた基本情報だけを基にし
て、最もシンプルな状態へと体を戻す。

「ロックパスワード入力……………解除まで15秒」

助けに来た、とクリフはそう言った。私を助けるには、私を殺すしかない。それでも、私には……シルヴィにはシルヴィとしての、望みがあるから。

夢の最後に、叶えたい願いが一つだけあるから。だから、私は戦う。

「解除まで10秒……8、7、6、5……」

カウントをしながら、沢山の思い出が過っていく。初めて起動したときのこと、ジュリアの嬉しそうな顔、物珍しげに覗き込むアイルーク、遠くで何かを見ているジェイの背中……。

「4……3……2……」

初めてクリフと出会ったときのこと。慣れない任務にエラーを起こして倒れてしまったとき、駆け寄ってきて心配してくれた。

ネオ・オリでライラ・メーリングとの戦いに負傷したときも……私を機械人形としてではなく、シルヴィとして扱ってくれた。

「……1……」

長い、長い夢の中で、私はきつと欲張りになりすぎた。だから、夢の最後に一つだけ最後の願いを叶えたいのだ。だから……。

「既成パターン解除。コードSylvie、起動します」

人はなぜルミナリイを、そして不老不死を求めるのか。私はそう考えていた。

限りある命には制限という足かせがいつもついてまわる。死は生のすぐ裏に存在し、気を抜けばいつ襲ってくるかもわからない。逆を言えば、生というものは考えるだけでもひどく億劫だった。

不確かで、不明瞭で、不完全。死はこんなにも完全なのに、相対する生は脆い。何故そんなものを求めるのか、何故そんなものになりつくのか。

そんなことを疑問に思う私は、人と名乗る資格はないのかもしれない。

「……………」

利き手とは逆の手でサーベルの柄を弾いた。銃弾と共にメイから買い取ったものだ。兄は少し眉をひそめたが、すぐにいつもの表情に戻った。相手との距離をはかりながら、私はクロノスを握りしめる。

……………どちらから仕掛ける。あちらか、それとも……………。

「……………」

フツと息を吐き、そして私は肩を下げた。余計なことは考えるべきではない。ただ己の心音に耳を澄まし、その音だけに意識を向ける。

(……一度息を吸い、そして吐き)

確実に繰り返される、命の旋律。生々しく、鉄臭く、味気のないその音だけが、私を生かす。

(……ゆっくりと目を開く……)

気配の位置を把握する。視界の真正面に相手を置き、そこから視線を外さないこと。たとえどんな状況になっても、相手から目をそらしてはいけない。ジェイロードに向けられた銃口。そして私に向けられた銃口。向かい合った二つの穴が、来るべき時を告げる。

「っー」

引き金を引いたのが先か、私の頬を銃弾が擦ったのが先か。轟音に反応するより先に、私の体は動いた。一発目の弾を避けると、後ろへと飛び退る。追撃を二発、三発と避けると、体勢を低くしながらクロノスの発砲音を響かせる。

ジェイロードは半歩身を引いて弾を受け流す。その身のこなしは間違いなく、数年前まで手合わせをしていたときと同じ、無駄のない動作だった。

私はジェイロードの攻撃がやんだ一瞬に、間合いを詰めた。クロノスの銃口が鈍い色の鉛を高速で吐き出していく。響く轟音に耳をやられそうになるが、後は全て己の感覚に頼るしかない。砂埃が宙を舞う。

『サーシャ』

その機能を失った聴覚に、流れ込むようにあの懐かしい声が聞こえる。今にも消え入るような細く、弱々しい声が、虫の息と共に

蘇ってくる。

最後に聞いたカタリナの言葉。

『ひとつ、だけ……約束、できますか……』

予想だになかった、兄の行動と、それを抵抗一つせずに受け入れた母。私は何が起ったのかすら理解できず、ただ血を流す母の手を握っていることしかできなかった。

『あの家に、戻って……この家の子供にさせてください、と……っ
そう、言い、なさい……』

あの日の前夜、宿の代わりに泊まった民家は、旅人に対する偏見があつたものの、人間としての温かみのある家だつた。死を直前にした母が何を思ったのかは分からない。それでもそんな一言が口について出たのは、おそらく、彼女なりの親心といったものだったのかもしれない。

『ジェイを……追いかけては……っ！……いけ、ませんよ』

カイロスを握った兄に抵抗を示さなかったのも、彼女なりに思うところがあつたのかもしれない。父の意思を受け継ぐことを決めた兄。カタリナはそれを知っていたのかもしれない。

「……っ」

銃声が二重に響き渡る。私は腕を擦った銃撃に耐えながら、一気に距離を縮めた。相手の懐に入り込み、カイロスを握る腕を取る。しかし体術に関しては兄も下手ではない。逆手を取って利き手を捻りあげられそうになり、私は身を捻って相手の脇腹を蹴った。バラ

ンスは崩したものの、一度二人の間に距離が出来る。

しかし体勢を崩したままでは次の攻撃が来る。私は左手でサーベルに手をやった。次の瞬間、こちらに向けられた銃口を剣先で弾き上げる。

『サー、シャ……』

体を起こす反動を利用して、剣を右から左へと一閃させる。ジェイロードが後ろへと飛び退った。慣れた動作でカイロスに弾を詰めると、すぐに銃撃を続ける。

私はスツと体を後ろへ引いた。

『どう、か……どうか……』

まるで訓練をしているときのような錯覚を私は感じていた。勿論、私たち兄妹にとって訓練とは、普通の人間でいうところの殺し合いと近いものなのだ。

兄の動作は相変わらず私の一步先に行く。知恵を振り絞っても、どんなに攻撃を繰り返しても、ジェイロードにはかなわない。思えば、訓練の時点で私はいつも負けを確信していたような気がする。

私は再びサーベルを握り直した。砂嵐を一刀両断し。サーベルがジェイロードの右手首を大きく抉る。……まだ、終われない。

『人と、して』

カタリナが願ったのは、本当に普通の人間としての幸せだったのだろうか。彼女は知っていたはずだ、私がルミナリイであり、普通の人間の中で生きていくには異常だということを。不老不死がその正体を偽って社会の中に紛れ込めるわけがない。

おそらく、彼女は知っていたのかもしれない。私が嘘をついたこ

とを。兄を追い、こうして対峙することまでも。

『人として……幸せに』

まだ、終われない。まだ……終わらせることはできない。

第2章 3

数値化された信号の中で、私の声はちゃんと聞こえる？終わりのない暗闇と、作り込まれたプログラムの間。敷かれた一本の線は、どこまでも果てしない彼方へと繋がっている。交わる場所はきつくない。それでもきつと願ってしまう。だから叫ぶの。ねえ、お願い。私を助けて。

- オート・マタ -

僕は肩で息をしながら立ち上がる。もう一度剣を握り直した。シルヴィの言葉と共に息を整える間もなく攻撃が繰り出された。

そのスピードは先ほどと変わらないものの、一撃一撃の力がいつそう重くなった。蹴り中心の攻撃スタイルは変わらないけれど、ちよつとでも隙を見せれば一人の体なんて簡単に砕いてしまいそうな力だ。

ぞつとするくらいの空気を切り裂く音。耳元を横切る蹴りに僕は寒気を感じた。

「つ………！」

悪いイメージばかりが頭をよぎっていく。目をつむっちゃいけない。後ずさるうとする足で踏みとどまって、僕はレイテルパラッシュを握りしめた。シルヴィの次の攻撃を目で追う。瞬きをしてはいけない……見なければ、相手の次の一手を読むことはできない。

シルヴィが軸足で地面を蹴った。おそらく体を捻って回し蹴りを

繰り出すつもりなのだろう。僕は僅かに片足を引いた。攻撃をギリギリで避ける距離。

「！」

恐ろしいほどの近距離。それでしか攻撃をかわすことはできない。それ以上に動けば、おそらく次の行動が遅れてしまう。生き物の勘か、それとも本能か……まるで線引きされたようにそれが分かる。最前の対処、最前の行動……百から選び出した一つのみが、僕を生かす。

違う、生かされている。

「……っ！」

頭が何か考えるより早く、体が動いたことを感じるより早く。おそらく意識が動いていた。鉛を叩き付けるように振り下ろされた蹴り。避ける足に力を込めて、シルヴィの背後へと転がり込む。

誰もが、生と死の線引きされた道の上を歩いている。たとえどんな強者であろうとも、風前の灯である弱者であろうとも。僕はただの傭兵学校出の剣士で、シルヴィは戦う為につくられた存在。シルヴィの優勢は火を見るより明らかだ。

「っ……シルヴィ！」

僕は大きく腕を振り上げた。剣先が空を切り、シルヴィの緑色の髪が数本だけ風に舞う。反射的にシルヴィが僕の腕を掴んだ。

「！」

今まで聞いたことのないような、何にも例えられないような生々しい音が骨を伝って響いた。吹き出す、という表現が正しい。何が、とはあえて考えなかった。

美しい色だった。真っ赤に染まった右袖が、つなぎ止めるものを失って地面に落ちる。

「……………」

シルヴィは、静かにその末端を見つめていた。人間のように作られた硝子の瞳が、微かににじんでいる。

時間はまるで小川の流れのようにひっそりとして緩やかだった。僕は左手に握りしめたものを突き出す。ただそれだけでよかった。生と死の狭間で、それが全ての終わりだということを風が耳打ちした。

「……………」

剣は鋭い切っ先を機械の中に埋め込み、微かに火花がその服を焦がした。血の代わりに隙間からのぞいたのは無数のコード。透き通った瞳をゆっくりと閉じて、膝が崩れ落ちる。

倒れる一瞬、シルヴィは僕を見た。砂の中に崩れるように倒れ込んだ彼女を受け止めようと手を伸ばす。けれどそれは空しくも空を切った。そして同時に、痛みが津波のように流れ込んできた。

「うつ……………あ、く……………っ！」

左手で、僕は傷口を握った。どうするべきなのか、頭は殆ど働かなかった。僕は砂漠の中に倒れ込む。傍らにはレイテルパラッシュで腹部を刺されたまま子供のように蹲るシルヴィと、持ち主をなくした見覚えある右腕が横たわっていた。

「フィオ。……やれ」

アイルルクのその言葉に、俺は寒気を感じた。咄嗟に後ろへと飛び退る。次の瞬間、まるで巻き上がるように足場だった砂が空中へと吹き上がった。フィリオーネと呼ばれるあの蛉人はジジイの使っていたNO・1の蛉人に次ぐNO・2。冗談じゃねえ、ちよつとでもあの魔法にかかったら殺される。

ヴァルナは一瞬の殺気を感じ取ったようだった。精神を深く共有させると、蛉人と主の精神は一体に近くなる。危険を察知したのは俺ではなくヴァルナだったのかもしれない。

『……相変わらずの性格のようだな』
(全くだ……くそ)

続けざまに俺の両脇から砂が吹き上がる。咄嗟に前に避けようとしたが、足が止まった。チツ、陽動か。

「ヴァルナ！」

叫ぶより早かったか、足場と周辺を覆うように蔓と枝の結界が現れた。人間には到底発動が不可能な魔法陣が浮かび上がっている。

ヴァルナの結界の間からイルークを見ると、ヤツは皮肉な笑みを浮かべていた。

その目は蛉人に守られている俺を皮肉っているのか、それとも蛉人を抜きにしても力及ばない俺を笑っているのか。あの表情に俺は覚えがあった。……そう、ガキの頃、ジジイのご機嫌取りに村の子供達が躍起になっていたあの頃だ。

(ちっ……！)

『ねえ、みんな。かくれんぼしようよ。ホラ、フレイも』

ガツ、と鈍い音がして、強い魔力に結界が歪んだ。イルークの隣に浮かぶフィオは、もはや蛉人の女王とは呼びびがたい冷酷な表情を浮かべている。その殺気は刃のように鋭く、ヴァルナは険しく眉をひそめた。

『魔法を使って上手く隠れるんだよ。ほらほら、フレイは鬼！』

歪んだ結界は思わぬ隙を生みやすい。俺は咄嗟に結界を解いた。その瞬間、結界にかかっていた負荷で後方へ吹っ飛ばされる。視界が二転三転して、空が視界を覆った。

口の中に砂が混じっている。くそ、と呟いて俺はそれを吐き出した。血が混じった唾は赤くにじんで、手の甲で口元を拭う。

『……なんだよ、フレイ。まだ誰も見つからないのか？』

『ははは、声が聞こえても誰も姿が見えないって？ばかだなあ、じいちゃんに教わらなかった？』

膝に手を置いて立ち上がる。距離が離れた。追撃してこないのは

フィオの攻撃範囲を超えたからか？

しかし俺の予想は早々に裏切られた。足下を通ったムカデがまるで内側から爆発するように、小さく弾ける。見ると、フィオが軽く片手を向けていた。その手のひらが今度はこちらへと向けられる。

「お前は本当に馬鹿だな、フレイ。……フィオの攻撃から逃れられると思つた？」

「チツ、ヴァルナ！！」

守りも殆ど役に立たない。格が違いすぎる。ジジイの使役する鈴人王デルヴァ、アイルークが従える女王フィオ……鈴人はその格が高ければ高いほど、その魔力も強い。それに対してヴァルナは……。ヴァルナを呼ぶ俺の声に、奴の魔力が応じた。地面から伸びた蔦がフィオの手足に絡まり、自由を奪う。鈴人に触れるのは危険を伴う。それでも、フィオを拘束しておかなければ、1しかない勝ち目が更に減ってしまう。

「くっ……」

フィオへの拘束はヴァルナを通じて俺自身にも伝わってくる。フィオは嫌悪を露にしたようだった。反動のように強い魔力が逆に送り込まれる。

(くそっ……下手したら)

下手したらさっきの虫と同じことになるぞ。

俺は唇を噛み締めてアイルークを見た。アイルークは馬鹿な子供を見るような目で、俺を嘲笑っていた。

熱くジリジリと焦がすような太陽の光が、空から降り注いでいる。それでも私の瞳はその輪郭を捉えることが出来なかった。視界が霞む。まるで水面を通して見つめたかのように、私は空を見ている。

傍らにはクリフが横たわっていた。真っ赤に染まった血液がゆっくりと地面を潤していく。私が視線だけでそちらを見ると、クリフは痛みに呻きながらもそれに気づいたようだった。

「ク、……リフ……」

終わったのだと。私はそう感じた。微かに顔を動かすと、クリフの右腕は肘の少し上の辺りから別な場所に転がっている。傷口を押さえる左腕に、辛うじて動く私の右手を重ねた。

「……シル、ヴィ……」

ずっと考えていた。死とは何か、生とは何なのか。私は人形であつて人ではなく、生きるものの本当の痛みはおそらく壊れるまで分からない。壊れても、生命の欠片も理解することは出来ない。心を得ても、手に出来ないもの。人としての性。

沢山のひと、私は触れ合つて生まれた。ジェイに、アイルークに、ジュリア……そしてクリフ。心が芽生えて、私はその人達の命の隣に入れただろうか。殺すことを目的として生まれた人形は、その傍

らにすることが出来たのだろうか。

手が触れると、クリフは肩から力を抜いて呟いた。

「シルヴィ。やっぱり、……ちょっと、いたいよ」

少し泣きそうな顔でそう言うクリフに、私は笑った。小さく、笑った。

「ク、リフ、……体……欠けちゃ、た。っけど……」

傷口に触れた手が熱い。命とは、このことだろうか。収まることのない血液の流れ……生々しくも確かにそこに生きる、醜くも美しい赤。

「これ、で……シルヴィ、ずっと……」

私はそれを感じながら目を閉じる。

傷口はいつか塞いでしまっても、この腕が戻ることはないかもしれない。きつとクリフは一生忘れないだろう。欠けた腕と、今のこの瞬間を。私は静かに微笑んだ。

欲しかったものを、手に入れた。叶えたかったものが、今叶った。人は死んでしまえばいつか忘れ去られていく。人々の記憶から忘れ去られ、そして無くなってしまう。人形であれば、それはもつと簡単なこと。

それでも、きつとクリフは最期まで忘れないはずだ。この腕を奪ったのが誰だったのか。そして、私は……。

「ずっと、一緒、だね……」

耳奥に機械音が響く。信号が途絶え、処理機能が低下し、体は人

形のように動かなくなった。閉じられた瞳の中で心地よい闇を感じながら私は死ではない、壊れるという感覚を味わう。

メモリが落ち、体の各部分がダウンしていく。最後に指先だけが暖かい何かに触れていた。心地よい声が私の最期。

「シル、ヴィ……?」

ありがとう。

第2章 4

戦いに善悪はなく、そこにあるのはただ理由のみ。だからこそこの腕は動く。思考は私を奮い立たせる。砂塵の中に吹き荒ぶ風は、全てを知りながらもただ無慈悲に通り過ぎていく。

そこに生半可な結末など存在しない。

- コギト・エルゴ・スム -

終わらない雨はないという。それでもあの時から、確かに終わらない雨が始まった。悲しみを演じるようにハンカチで目を抑え、誰もコソコソと口裏を合わせたように同じ台詞を発する。慣れない黒い喪服を着せられた俺は、まるで鏡でも見るように同じような服を身にまとうアイツを見ていた。

「この度は……」

葬式は初めてだった。あちこちから人が集まって来る様子に、俺は少しだけ心の何処かでわくわくしていた。それが顔すら殆ど覚えていない伯父の葬式ならなおさらだった。

子供達のほとんどが同じような喪服を着ていたが、顔を合わせる度にはしゃぐ様子を見れば意味が分かっているのは一目瞭然だった。

た。

「……………」

ただジイさんだけが、周りとは違う表情を浮かべていた。ただ悲しみにふけるエメリナ様とは違う顔……。

「お爺ちゃん！」

あれは雨の降る夏の夕方。どしゃぶりのように降り続ける雨の中で、俺は葬列の意味も分からず、いつものようにジイさんのご機嫌取りに駆け出していった。ジイさんはフレイを抱きかかえたまま、葬列の先頭付近を歩いていった。

あの頃はまだジイさんがフレイを可愛がっていた頃だった。伯父は誰よりもよく出来た魔術師で、エメリナ様もジイさんによって立ての良い嫁だった。その間に出来た孫。当時のジイさんの可愛がりようは俺の比ではなかった。最も、当時はまだ魔術師としての力量に差はなかったが。

「お爺ちゃん！」

「……………」

ジイさんの目はうつろだった。何処か遠くを見ているようだった。抱き上げられたフレイもまた、自分に興味のないジイさんの顔に首を傾げ、一瞬だけ俺たちは顔を見合わせた。

「……………アイルーク」

ふと、エメリナ様から呼びかけられて、俺は足を止める。エメリナ様は葬列から離れ、俺の肩に手を置くと、ただ悲しそうな目をし

て微笑んだ。勿論、それで全てを察したわけではなかったが追いかけてはいけないのだと、子供心に気づいた。

エメリナ様は俺の背中を軽く撫でると、立ち上がって再び葬列に加わっていった。

「……………」

黒服を纏った列がゆっくりと雨の中を進んでいく。辺りからチラホラと聞こえる偽りの同情の言葉を聞きながら、俺はひとりぼっちになった。

雨が水たまりに叩き付けられる。空が激しい感情を表すかのように、冷たい飛沫が頬を打った。小さい体には堪える冷たさだった。

再び金属音を放つサーベル。暴発したカイロスの銃弾は私の頬の真横を通り過ぎた。剣先を弄ぶように螺旋を描き、利き腕を絡ませる。同時に投げの体勢を取ると。ジェイロードは簡単にそれ勢いを殺し、体を捻った。次の瞬間、攻撃と防御が逆転する。私は咄嗟に体を引くと、後ろに飛び退った。

「……………つ、ハア」

息が切れる。どれだけこの攻防を続けているのだろう。心臓が跳ね上がったように緊張状態を続けている。心臓に悪いとはこのことを言うのだろうか。

乱れる息を立て直しサーベルを振った。腕を見ると、血と共に袖が破けている。右手に伝い落ちた血液の感触が嫌悪感を呼んでいる。しかしそれを拭い取るより先に、ジェイロードが動いた。

「！」

カイロスの銃口がこちらへ向けられる。咄嗟に右前方に飛び込むと、体勢を立て直すより先に視界の端に何かが横切った。

刹那に取った判断は間違っただけではなかった。次に来る攻撃を判断するより先に、武器を持つ手を蹴り上げられる。鈍い痛みとともに剣の柄が指先から弾き飛ばされた。

焼き付ける太陽の光の中に、刃が消える。高く跳ね上がったサーベルが音を立てて地面に突き刺さった。砂に剣を突き立てる乾いた音だった。

「くっ……」

不幸なことにそれは兄のすぐそばにあった。兄はカイロスに戻し、サーベルの柄に触れる。ゆっくりと地面から引き抜かれた刀身は、確かに私の姿を映していた。

ジェイロードは引き抜いたサーベルを持ち直すと、体勢を崩した私に先を向けた。

「槍は洞察、銃は不動心……」

それは母に習った言葉だった。槍術は相手を見る洞察力を必要とし、銃撃には何事にも動じない心が必要となる。そして剣術は。

「剣は……才幹」

一振りされたサーベルが勢いよく風を切る。全てを切り裂くかのようなその無情な音は、おそらく万人のため息を誘うだろうと私は思った。

それでも、と私はクロノスに指先を伸ばす。引き金にかけた指先に力がこもる。

異物感とでも呼ぶのか、体に逆流する魔力に耐えるのは正直辛かった。鳥肌どころじゃない、嫌悪感。確実にフィオの力は強い。ガキの頃から知ってたことだったが、それを改めて思い知った。気を抜けば体の何処かが弾け飛びそうだ。

足場の砂が舞い上がる。螺旋状に砂を吹き飛ばし、焼け付く太陽の下に弾け飛ぶ。ヴァルナはフィオとイルークを睨みつけながら呟いた。

『共有が深い……随分とあの男に入れこんでいるようだな』

それがどうした馬鹿野郎。今それどころじゃねえっつーの！

俺は視線だけをイルークに向けた。にやけた顔を見ながら、ヴ

アルナの声を聞く。

『……浸食と共有の境界を上手く保っている。主導しているのはどちらだろうか』

主と使役の意識がどれだけ通っているか。共有の状態っていうのはつまりそうゆうことだ。これがどちらが強くてもいけない。下手をすると使役の力に浸食されることもある。対等な力を扱うことにより、魔法は更に精度を増す。

それを主導してるのはどっちか、だって？

「……」

チラ、と横目でヴァルナを見た。ヴァルナはこちらを見なかったが、何をするのかは大体見当がついた。下手をしたら一気に決着がついてしまう、一つの賭け。俺は意識を途切れさせないように集中を高める。

……ああ、そうだ。諦めるのは全てが終わった後でだ。

俺はヴァルナの名を叫ぶ。握りしめた拳に力が籠った。

「！」

派手な音を立てて、アイルークの足下から木の根が飛び出してき た。剣にも劣らない鋭利な突起が飛び出してくる。気配を悟ったのか、アイルークは瞬時に後方へと飛び退った。

一瞬、体に圧力をかけていた魔力が緩んだ。フィオの意識がアイルークに向いた。俺は即座にフィオを縛っていた力を解く。そして即座にヴァルナの召喚を解いた。

俺は肩についた砂を払い落とした。羽織っていたローブを脱ぎ捨てる。ここからは運と力次第だ。つま先に力を入れ、アイルークと

の距離を一気に詰める。フィオが何かに気づいたように顔を上げた。その瞬間、足下の砂が弾け飛ぶ。俺はそれを避けると、フィオの脇を抜けてイルルクに殴り掛かった。

「！」

突き出した拳は、あいつの顔のすぐ横を掠めた。咄嗟に体を引くと、フィオが盾になるようにイルルクの前に出る。

「っ……なんだ、もう自棄になったのかっ？」

僅かだが動揺の色が伝わってくる。顔をしかめてこちらを見るイルルクに、俺は鼻で笑ってやった。優秀な魔術師サマは殴り合いの喧嘩なんてロクにしたことねえだろ。俺は殴られ方も殴り方もよく知ってたんだ。誰かと違って俺は出来損ないだからな。

俺はもう一度イルルクに殴り掛かった。しかし、拳はあいつの顔面に届く寸前に、壁に当たったかのようにピタリと止まる。そして次の瞬間、爆発でも起ったように俺の体は弾き飛ばされた。

「っ！……く」

砂の中に転がると、次の刹那、再びそこから吹っ飛ばされた。どうやらフィオの逆鱗に触れたらしい。口に入った砂を吐き捨てると、血の味が広がった。俺は痛みを耐えながら、次に来る一手をかるうじて避ける。

「……っ」

俺は更なる攻撃を避けながら、イルルクに飛びかかった。まだ体勢を整えていない。腹部へ蹴りを入れると、僅かに体のバランス

が崩れた。相手の襟首を掴み、今度は顔面に強烈な強打を与える。今度はアイルークの体が砂の中に倒れ込んだ。

更に殴り掛かろうと拳を握りしめたその瞬間。俺は首筋に冷たいものを感じた。

「！」

首に触れた手は、形あるものの感触ではなかった。灰色に近い翼が俺の首にかかっている。その羽根はまるで刃物のように鋭く光っていた。勿論締め上げるつもりではなく……下手に動けば首を飛ばすという意味なのだろう。

俺は横目でフィオの様子を見つめる。睨み返してくる瞳は本気だ。ガキの頃、初めてアイルークが召喚を成功させたときのような、あの恐怖感。背中に冷たいものを感じながら、俺は静かに視線を落としました。

ここまで、か。俺は口を開く。

「動くなと言っつもりだろーが……俺を殺すことより主の心配した方がいいんじゃないか？」

第3章 1

違った道の上を歩いてきた。それは誰かが望んだ形ではなく、少年達自身が望んだ結果。何処かへ繋がるのか、道の途中で途切れてしまうのか。それは神にすら分からない。ただ確実なことは、それが人というものであり……それこそが旅と呼ぶべき、生命の摂理だということだ。

- 宿望と天秤 -

「フィオ！」

フィオがハツとしたように顔を上げる。その視線の先には、砂の中に転がった状態でもかくアイルークの姿があった。首には地面から突き出した木の根がしっかりと絡み付いている。その後ろにはヴァルナの姿があった。

陽動と呼ぶには力任せな作戦だった。ヴァルナの召喚を解き、俺自身がアイルークに向かっていく。アイルークの意識はもちろん、フィオの集中も俺に向くはずだった。もちろん、そうなるという確かな理由が俺の中にあっただ。

俺はヴァルナに目配せする。ヴァルナが手を挙げると、アイルークの首を絞めていた力が少し弱まったようだった。俺は後ろにいる

フィオに問いかける。

「下手に動いたら……って言いたいところだが、動く気はねえよな？ フィオ」

『…………』

フィオはしばらく沈黙し、何かを考えていたようだったが、やがてゆっくりと翼を降ろした。俺はやっと恐ろしい殺意から解放され、安堵のため息をつく。

「フィオ…………」

アイルークの視線から逃れるように、フィオはうつむいた。かつて鈴人の女王と呼ばれた精霊がこんな表情をするもんなのかと、俺は思う。いや、もしかしたらそうなのかもしれない。ジジイの願いの為に何年も待ち続ける鈴人がいるくらいだし、な…………。

フィオの力はたしかに強かった。真正面からぶつかって勝てるような相手じゃない。それでも、この状態に持ち込めば勝機があった。フィオはアイルークの身を最優先に考える。主を守る為に俺への攻撃を解いた瞬間、それに気づいた。

魔術師と精霊の関係は契約ではない。主を守るのは役目だが、役目以上のものではない。フィオにはそういった利害関係以上の何かを、アイルークに対して持っているのだろう。

フィオはアイルークを人質に取られれば、動きをとれなくなる。それに全てを賭けるしかなかった。

「…………ヴァルナ」

離してやれ、と言うと、アイルークは信じられないといった表情で俺を見返してきた。ヴァルナが呆れたようにため息をつく、木

の根がゆっくりと砂風の中に消えていく。

焼けるような太陽の下に、チリチリと乾いた砂が流されていった。獣が咆哮するような風の鳴き声が響き渡る。悲しくも残酷な、終わりを紡ぐように。

「……お前は確かに強えよ、アイルーク」

俺は砂の中に倒れ込んだままのアイルークを見下ろした。ガキの頃と真逆の立場に、困惑を覚える。それでも、コイツが俺よりずっと優秀で、力のある魔術師だつてことは変わらなかつた。

魔術師としての考え方も、魔力も……たしかに天才だなんだともてはやされるだけの実力があつた。おそらくあの歳でフィオを召喚できたのもマグレなんかじゃない。貴族仕えになつたのも、母親が手を回したからではない。

ジジイが気に入つてたのも本心からだと思う。誰だつて出来のいい孫は可愛いもんだろ？

「なんだよ……今更」

アイルークは起き上がるとはせず、ただ上を見つめていた。何処までも広がるアルジェンナ砂漠の空。ここの空は照りつける太陽を別にすれば、故郷の空によく似ている。

高くて届かない場所に浮かぶ雲。広過ぎてめまいのしそうな、そんな青。ガキの頃は、遠くを飛ぶ自由な雲がうらやましかつた。

「……いや……」

俺は口を開き……そして大きく息を吐く。

サーシャと出会つて、予言書にアイルークが関わっていることを知つたあの瞬間から、溜まりに溜まっていたものは色々あつた。い

や、実際はもつと昔からかもしれない。腹の中に溜まっていた羨み、怒り、悲しみ……。全てをぶちまけるつもりで、此処まで来た。

それでも、いざとなると感情は言葉にならず、不思議と俺は冷静だった。いつものように頭に血が上るだろうと、そう思っていたのに。

「……………ああ、そついやもう一つ」

ふと空を見上げると、一つだけ思い出したことがあった。高い雲間から、太陽がジリジリと肌を焼く。俺は上を見つめたまま自嘲した。

口から出た言葉に、苦笑するしかなかった。

「……………俺はお前になりたかつたんだよ、アイルーク」

笑つなら笑え。そう言つてアイルークを見ると、奴は少しだけ意外そうな顔をして……。そして手で顔をおさえてクツクツと笑い始めた。肩を震わせて笑いながら、口を開く。

馬鹿な奴、と。

どうすれば愛されるのかと、そう思い続けた。爺さんの目を引いて、誰よりも優秀になることだけが、愛される道だと信じていた。

けれど愛されたい人に愛されることが出来ず、目的はやがて消え去り、手段だけが残された。優秀であること、それだけが全てになっていたことに気づいた。

フィオが俺のところに戻ってくる。少し、疲れた。満身創痍ではないのに、体が重く、ぐったりとして動く気になれない。目の前に立つフレイを見て、今なら確実に殺せるのにな、と心の中で呟いた。

「……で、本つ当に本物なんだろうな？」

疑い深いフレイに俺はため息をついた。

「……ここまできて偽物でしたって？そんなオチじゃリリーのナイトが台無しだろ？」

解毒剤の入った小瓶を疑いの視線で見つめながら、フレイは顔を顰めた。相変わらず分かりやすい奴だな。思ったことがはっきり顔に出てる。

俺は肩をすくめた。

「……それより、さっさと行けよ。お前が行ったところで、流れ弾に当たって引き返すことになりそうだけど」

「馬鹿言っな」

俺は視線だけを砂漠の向こうにやった。トウアス帝国の廃墟には瓦礫が山のように積み重なっている。吹き付ける砂風の先に、2人はいる。ジェイロード・レヴィアスとサーシャ・レヴィアス。あの兄妹の戦いは、あの先で繰り広げられているはずだ。フレイもまた、同じ方向に視線を向ける。

はつきり言ってしまうえば、どちらが勝つかなんて分からない。ジェイロードの強さは誰よりも俺が一番よく知っている。とはいえ、

相手は帝国の研究によって生み出されたルミナリィ。毒薬の力があるといっても、勝算は確実とは呼べない。

「……………」

どちらが勝つかは分からない。けれど、どちらかが勝つことで、どちらかの意志が途絶える。

「……………ヴァルナ、行くぞ」

フレイがそう言って歩き出した。その背中を見つめながら俺は溜息を漏らす。お前が行ったって勝敗は殆ど変わらないだろうさ。いや、既にもう終わっているかもしれないしな。

顔を上げるとフィオがこちらを覗き込んでいる。その表情を見て、俺はふっと笑った。灰色の肌の向こうに、青空が透き通って見える。鳥が飛んでいく。自由な翼を持つ鳥は、何者にも縛られず……………あの手が届かない青の中を泳いでいる。

「……………なあ」

俺は空を見つめたまま、フレイの背中を呼び止めた。振り返るフレイの顔を見て子供の頃を思い出す。いつも徒党を組んでいじめては泣かせていた頃の悪戯心が、胸の中に蘇った。

フレイの方を向いて、口を開く。氷晶より冷たい言葉の一撃。

「殺してかないの？」

訝しげに振り返ったフレイの表情が、固まった。

俺はそれを見つめる。ケラケラと笑いながら。俺の笑い声だけが、砂漠の中に響いていく。呼応したように砂煙が巻き上がり、俺たちの間を通り過ぎる。

フィオが何か言いたそうな表情をしていた。けれど俺はわざと視界から外してフレイを見る。次の一言を紡ぐのはフレイしかあり得なかった。

このお人好しがどう困惑し、どう返答に迷い、どう狼狽するのか。ただそれだけが見たかった。

「なあ」

もう一度、急かすように答えを求める。すると、フレイは口をむすんだ。そして、一瞬言葉にならない息を吐き出すと、次の瞬間

「ハッ……馬つ鹿じゃねえの」

笑った。

俺の目をはつきりと見返したその瞳には、怪訝の色も困惑の色もなかった。自嘲でも、嘲笑でもなく。ただ面白いことを言われたかのように、笑った。

俺はただ呆然と、その顔を見ているしかなかった。息を吐いた途端に、何か全てが抜け落ちてしまいそうだった。

きっと……これこそが、俺たちの勝敗を決めた瞬間だったんだろう。俺は、負けたんだ。

「……じゃあな」

フレイの背中が去っていくのを、俺はただ見つめていた。瓦礫の

中に姿が消えていく。気配が遠ざかっていくと、俺は体が重くなつたような感覚に陥った。生きてきたこれまでの疲労感が全て押し寄せてきたかのような、そんな感覚だった。

「……………」

愕然とする俺を、ただ隣で見つめ続けるフィオ。ふと子供の頃の光景が脳裏をよぎる。同じような状況を見たことがある。十数年前のことだが、はっきりと覚えている。

俺と同じように、フレイが倒れ込んでいた。徒党を組んでいた奴らがよつてたかつてフレイをいじめた後だった。あちこち泥にまみれた姿を見て、エメリナ様が走ってくる。

『……………フレイ、大丈夫？』

いつも苛められて泣きそうだったフレイは、エメリナ様の手を借りて立ち上がる。俺は少し離れたところからそれを見ていた。

フレイは慌てて涙を拭く。腕で目尻に溜まった涙をこすると、顔に泥がついた。

『あらあら……………』

動物の鼻が何かのようだった。エメリナ様はそれを見て思わず笑う。すると不思議そうな顔をしていたフレイもまた、自分の鼻に泥がついていたことに気づき……………そして、笑った。

先ほどのフレイの顔と、少年時代のその笑顔がかぶる。そして、俺は気づいた。

あの笑顔が欲しかった。俺もあんな風に笑ってみたかった。あの場所にいるのが自分だったらと、何度思ったことだろう。

「くそ……、畜生っ……」

俺も……俺もお前になりたかったんだよ、フレイ。

第3章 2

人はこの世に生まれ落ちて、やがて死に逝くものだということを知った。それは誰にとっても例外なく訪れるべき、奇跡とも呼ぶことの出来る平等。等しく死に逝く者のみが持つ、当然の権利として存在するもの。しかし、人は死の瞬間を選ぶことは出来ても、生の延長を許されることはないのだ。

- かつて交わされた問い -

私が持っている父の記憶など、おそらく右手で数えられるほどのものでしかない。そこに存在する父は何も語らなかつたが、それでも彼の意志は強く根付いたまま現在まで続いている。

いや、実際には兄だけではない。数多の国、数多の人間達が願っている。かつて亡国が成し遂げた不老長寿……永遠に続く命というもの。

誰もが死に恐怖し、その暗闇を払いのける為に予言書を探しているのかもしれない。そこに記される文明という名のメティス、知という名の永劫。それは力を手に入れることでも、国を手に入れることでも、積もった探究心を癒すためでもない。

渴望しているのだ。永久に生き長らえるというその響きに。

『サーシャ。立ちなさい』

ジェイロードとの訓練を終えると、私はいつも立っていることが出来なくなった。地面に転がると大きく呼吸を繰り返す。カタリナは私に歩み寄ると、立ったまま続けた。

『……サーシャ。立ちなさい』

『……はい』

今日の訓練は槍術だからまだ良かった。私は力の入らない手を握りしめ、槍に頼って立ち上がる。髪についた砂がぱらぱらと足下に散った。

カタリナはしばらく私の様子を見ると、ため息をついた。嘆息にも似たため息は何度目だろう。ふと顔を上げると、こちらを見つめていた兄がその場を去っていく。息が乱れているものの、ジェイロードにはまだ余裕がある。

『貴女も顔を洗ってきたほうがいいでしょう』

カタリナは背を向けると、荷を置いた場所へと歩き出す。私は呼吸を整えると、母の背中に向かって問いかけた。

『母様。……一つ聞いても良いですか』

私の問いに、カタリナは無言のまま振り返った。まだ荒ぶる心音を飲み込んで、私はカタリナを見つめる。ずっと抱き続けてきた疑問があった。訓練と称して兄と戦うこと、母の手荒な指導。嫌になつたことはなかったが、疑問は一つだけ浮かんでいた。

カタリナの瞳に、私が映る。

『母様は、死についてどうお考えですか？』
『……………』

私の問いかけに、カタリナは再び歩み寄ってきた。私の手から槍を受け取り、そして慣れた手つきでクルリと回す。風を切った刃が乾いた音を立てた。

『死とは、生命全てに訪れる平等。……………いつか私にも訪れるでしょう。貴女にも、ジェイロードにも』

死のない生などないのだと、カタリナはそういった。半不老不死といえども、いつかは終わりがくる。永遠も永劫もない。終わってしまうえば、やがて忘れられていく命。誰もが同じ運命を辿る。

私は地面に視線を落とした。

『なら……………人は何故、生き長らえようとするのですか』

今まで、数多の者達と相対し、戦ってきた。しかしその中に、勝利を信じることなく戦いに身を投じた者がいただろうか。我々も彼らと変わらない。生きる為に、鍛錬を繰り返している。

命などというものは曖昧で、形すらない。誰かが名付けた概念に宗教心や運命といったものを絡めて、人は恐れている。いつ消えてしまうのか、いつ失ってしまうのか。誰も知らないことだからこそ恐ろしい。

『……………ある男は、それが全ての悲しみを断つのだと言いました』

カタリナの言葉に、私は顔を上げる。

『人の全ては生に起因しているのだと……………確かにその考えに異論

はありません』

カタリナは日暮れの紺色に染まった空を見つめながら呟いた。

『しかし、それが本当にこの地上に生きる者の為になるのか……』

もしもそうなってしまえば、そこに生は必要なのか。

この大地に生きる者達を……人と呼ぶことが出来るのだろうか。

終わらない。めまぐるしく変化する戦況に、私は唇を噛んだ。先ほどから何度も繰り返される攻防。脳裏に過る、母の言葉。

ふと目眩が襲ってきた。あの薬の効果だろうか。徐々に効くのな
らまだ良いのだが、体を動かす度に薬が回る。体の動きが鈍る。私
は口の中に溜まった唾を吐き出した。呼吸がままならない。

拳を握りしめ、クロノスを構える。時折視界が歪んだ。時間がな
いのだと、心音が私を焦らせる。

予言書を手に入れるには、勝つしかない。私達兄妹の間では、そ
れは生と死でしかない。抗っているのだろうか、私達も。母すら答
えを導き出すことの出来なかった答えを、私も模索しているのだろ
うか。

「ハア……っ！」

サーベルの剣先を避ける。恐怖心を押さえつけ、相手が狙う急所を一瞬で読む。体をねじり、最小限の動きでかわし、次の攻撃に転じる。あの時の訓練から、それは戦いへと変化していた。

ふと、兄が私から距離をとった。私は警戒しながら、注意深く相手の動きを見つめる。

兄は一度サーベルの先を降ろした。微かに乱れた息を整え、そして私を見る。碧眼の瞳は、誰よりもカタリナによく似ていた。

「お前は……何故、戦う」

問いかけは至極淡白なものだったが、ジェイロードの目が全てを語っていた。預言書を手に入れるために戦うだけの理由とは何か。

私には、どこかの庭に眠る人間のように狂った妄執もなく、少年王のように国と民を背負う義務もない。ましてや、稀代の魔術師と呼ばれた一人の老爺のように過去を変えたいわけでもない。

勿論、焼き払ってやろうというのは本音。こんなものの為に戦うのは一度限りで十分だ。

「お前は……何故、生を賭して戦う」

「これしか……生き方を教わって、いませんから」

私はクロノスを握りしめた。生と死の綱渡りを繰り返して、私は生きてきた。安穩に手を伸ばせば、届かないこともないのかもしれない。休みたいと思えば休むことも出来たのかもしれない。それでも、私は不器用に戦いに身を投じてきた。

この身がルミナリイだからではない。通常の人間より少しばかり死に遠いところにいるだけだと、そう思っている。ルミナリイの……不老不死の力が無くても、おそらく私はこうやって兄と対峙しているだろう。

「……いえ、違いますね」

生まれ落ちた全ての者に死は与えられる。誰もがいずれ訪れる闇に恐怖し、生きることを願い続ける。それは苦しみなのかもしれない。渴きを潤すように永遠なる魂を求め、誰もが手に入れることが出来ずに死んでいく。

私がこんなことを思うのは滑稽なことだ。それでも、それが理由だとしたら。

「……ある男は、それが全ての悲しみを断つのだと言いました」

彼が何によつてそう思ったのか、それは分からない。それでもその気持ちは私にも理解することが出来る。誰かの為に涙を流し、誰かの死を悔やんだことがあるのなら。

「人の全ては生に起因しているのだと……」

確かにその考えに異論はない。生きることは喜びであり、死ぬことは苦しみである。いや、もっと簡単なことだろう。

人は、生きていたい。死にたくない。

「……」

もしも、兄が母を殺した時、兄の口から弁明の言葉が出ていたのなら、今と何か違っていたのかもしれない。私も同じように、父の抱いた願いを正しいものとして受け入れていたかもしれない。

しかし、そうはならなかった。私は、旅をしながら、この目で見ってきたのだ。

「私は……そうは思いません」

ジェイロードが訝しげな表情でこちらを見る。私はクロノスを回転させた。カチャリ、と音がして私の手の中になじむ。その感触を頼りに、私は戦いを生き延びてきた。

正否は誰にも決めることは出来ない。それでも、私の中に、私の答えはある。

「人の全ては死に起因する。死を前にするからこそ、人は生きようとするのです」

予言書がどうなるかと、結局のところどうでもいい。ただ、私の中にある答えだけは否定させはしない。数多の戦いと、数多の記憶の中から生まれた答えを、守る為にただ戦う。

「叶わぬ願いに溺れながらも、生きようとする姿は美しい」

瓦礫にまみれた街は、時の流れを感じさせた。俺はバランスを崩しながらも、強風に逆らって進む。アイルークとの戦いで無茶をしたせいか、足が笑ってまともに前に進まない。ヴァルナの召喚も長過ぎた。俺は足を止めて辺りを見回す。

「ちくしょう、何処まで行ったんだよ……っ」

見渡す限りの、瓦礫の山。風化したかつての帝国には繁栄の跡は見られない。

サーシャは無事なのか。あのバケモノが簡単に負けるとは思えないが、薬のことが気になった。本人は大丈夫だと言っていたが……本当にそうなのか。

自分の兄を殺すのだと、サーシャについていくことを決めた時、アイツはそう言っていた。その為だけに、俺達を雇った。その為だけにあちこちを周り、予言書を集めてきた。

全て、ジェイロードと同じ舞台に立つためだけに。

「サーシャ……」

サーシャの口から、その後を聞いたことはない。アイツはただ、己が目的の為だけに生きている。もしも、ジェイロードを殺すことが出来たとしたら、サーシャはどうするつもりなのか。

懐に入れた小瓶が微かに震える。

「くそっ……」

ローブの上から握りしめると、俺は前を向いた。あの2人がこっちに行ったことはたしかだ。歩き続ければ、必ずたどり着くはず。

俺は足を引きずって歩き出す。満身創痍のわりに動くことが出来るのは、おそらく俺自身、この旅の終わりを目覚めの悪い結末にしないからだ。

無惨に崩れ落ちたガラクタが足を取る。それでも、俺は前へと進んだ。

「……ふざけんなよ」

砂風が言葉を奪い去っていく。

第3章 3

つ。
渴いた荒野に響き渡る銃声。終焉は、どちらかの死の上に成り立

- 終止符 -

横に足を滑らせる。体勢を低くするとクロノスの引き金を引いた。勿論命中することなど期待していない。私は駆け出した。目が霞む。こんなときでも薬の効果は歯止めがかからないらしい。体の自由が効かなくなってくる。

足の筋肉に力をかけて大きく飛び上がった。同時に背中に隠していたヒュペリオンを抜き取る。黒光りする銃口が激しく攻撃音を発した。

「！」

ジェイロードの反応は早かった。三步分後ろに下がると、サーベルを捨てカイロスを構える。こちらが続けて攻撃するより、相手の方が早かった。

カイロスの銃声に、私は空中で身を捻った。ヒュペリオンを撃つた反動から体を回転させ、着地の体勢をとる。その間もクロノスの

攻撃は止まない。

「っ……っ」

ジェイロードが動いた。私との距離を縮め、確実に射程距離範囲内に入ってくる。私はクロノスを持ち直すと、同じようにジェイロードに向かって走り出した。

動局的を仕留めるのは簡単なことではない。耳元を霞む銃弾を気に留める時間はなかった。いつもなら目で追える範囲のものが見えない。視界が微かに狭まったのを感じた。

それでも後退するわけにはいかない。相手の狙いが定まらないように、スピードをあげる。ジェイロードの指先が微かに動いたのを感じて、私は肩から地面に転がった。勢いは死なず、クルリと地面を一回転する。刹那、ヒュペリオンの弾丸がジェイロードの右肩を射抜いた。

「っ」

一発の銃弾を確認した次の瞬間、右足を何かが通り抜ける感覚があった。痛みを感じるより先に、体の内部が風を感じた。途端に体のバランスが崩れる。

カイロスの銃弾は私の右足のふくらはぎを貫通していた。私は右手で体を起こすと、ジェイロードと距離をとる。

「ちっ……っ」

私は小さく舌打ちした。誰かの癖がうつってしまったようだ。

ジェイロードの動きを見ながら、私はヒュペリオンをジェイロードに向けた。利き腕側を狙ったことでハンデになったかと思っただが、どうやら状況は五分にもならないらしい。

やはり強い。薬の効果がなかったとしても、おそらく同じ状況に追い込まれているだろう。唯一の救いは、まだ引き金を引く手があることだ。

ジェイロードが一気に距離をつめる。私はヒュペリオンとクロノスをホルスターにおさめた。ジェイロードの強い蹴りが体を襲う。咄嗟に両腕で受け止める。重い一撃だった。

次の瞬間、腕を掴まれて体を投げられる。重心がしっかりとかかっていない足は、簡単に宙に浮いた。

「うっ……！」

砂の中に叩き付けられて、私は胸が詰まるような錯覚に襲われる。一時的に、視界からジェイロードが消えた。痛みよりも先に、反射神経が体を動かす。

私が転がっていたところに再び蹴りが襲った。危ないところでそれを交わし、起き上がる。しかしジェイロードの攻撃は止まない。私の襟を取ると、再び砂の海に私を沈めた。

「……っ」

もう時間はない。続いてくる攻撃を避けると、怪我をしている足に力を込めた。後ろへと飛び退り、そして相手の腕をクロノスで弾く。反動でバレルが指先から落ちた。

私とジェイロードの間に距離が出来る。おそらく考えたことは同じだろう。体術をしかけるために仕舞ったりボルバーに指を伸ばす。それはほとんど同時だった。

私は顔を顰める。こんな時に、視界が霞んで相手の姿がよく見えない。それでも、何をしようとしているかは分かった。この距離は、いつもの訓練と同じ……あの距離。

親指をハンマーにかけ、抜き出しながらトリガーに指をかける。

あとは全て勘に頼るしかなかった。グリップの高さ、銃口の向き、相手の急所、トリガーに力を入れるタイミング。

全ては、あの頃と同じ。幾度も幾度も繰り返されてきた、訓練という名の戦いと同じ。たとえ視界がはつきりとしなくても、指が、手が、腕が、体が覚えている感覚。体の概念を忘れ、私は意識そのものになる。私を作り上げた細胞一つ一つの、その感覚に体を任せ

る。
迷いも何もない。足をやられようが、頭をやられようが、まだ腕は動く。指先が、動く。目の前に立つ、ジェイロードより僅かに早く。

銃声が、響く。

真上に乗っていた太陽がいつの間にか傾き、空は夕日と夜の色に二分されている。僅かに輝き始めた星達が、満月の夜を飾っていた。地面に転がったままのクロノスを持ち上げると、同時に溢れるように鮮血が滴り落ちる。無言のままそれを見つめ、そしてクロノスをホルスターにおさめた。どうやら銃弾もほとんどなくなっていたらしい。弾を無駄にする戦闘は力不足の証拠なのだろう。

風はやがて冷たくなり、激しく体に吹きつける。濡れた頬を冷やしているのは、本当にこの砂風だろうか。

倒れたままの相手に歩み寄ると、私は膝を折った。

「手元が狂ったようですね。……お互いに、とは滑稽ですが」

横たわったジェイロードにそう言つと、彼は視線だけをこちらへと向けた。右肩の傷とは別に、左胸を覆う血の色。私は傍らに腰を下ろすと、静かに目をつむる。

「……。……貴方のしようとしたことは、間違っていないのかもしれません」

誰もが悲しまずに済む世界があるのなら、私は最初からそこに生まれなかった。それでも、死の訪れるこの世界だからこそ、生まれるものも数多くある。

空がやがて夜に浸食され、月が光を放ち始めている。

「それでも……。全てのものに終わりは訪れる」

私は兄を見つめた。小さな頃から見てきた端正な顔は、死を目前にする今となっても歪むことがない。

「終われば、また何かが始まってゆく……」

予言書がなくなったとしても、父のような、兄のような願いを持つ者は耐えないのだろう。やがてトウアスのように、また何処かの国が永遠の命を実現させるのかもしれない。それでもおそらく、異を唱える者はいるはず。永劫というものは、虚しい以外の何者でもない。

やがて生まれ、やがて死んでいくものたちの為に存在する摂理を、曲げてはいけないのだ。

「……」

ジェイロードはふと星空に目を向ける。アルジェンナ砂漠の周辺には街がないため、この辺りからは星がよく見える。おそらく、帝国が存在していたころと何も変わらない、変化のない星空が。手を取ると、その指先は冷たくなっていた。

「……理想は、理想か……」
「ええ。それでも……」

触れそうで、触れられないあの星空と同じように、それはきつと美しい理想なのだろう。

いつか見た夜空のように光り輝く星々。私はふと、掴んでいた指先から力が消えるのを悟った。眠るように目をつむり、また一人、大切な人の生命が消えていく。

私は静かに、その手を降ろした。ホルスターにおさめていたりポルバーを手にとると、中に入っていた弾をその場に捨てる。地面で跳ね返った銃弾が砂地に転がった。

漆黒のバレルを右手に持たせる。そしてそれを胸の上に置いた。

<高みヒュペリオンを行く者> やはり、これは彼にこそふさわしい。

長い長い黙祷を終え、私は立ち上がる。空は榛から漆黒へと変わりつつある。太陽を失った世界に月が君臨し、星々がその周りを彩った。

手にしていたクロノスをホルスターにおさめ、そしてもう一挺、クロノスによく似た白銀のリボルバーを見つめる。誰の血とも分らない鮮血がついたカイロスを、私はヒュペリオンをおさめていたホルスターにおさめた。

そして歩き出す。もう日が暮れる。

冷たく吹きつける風。脇に抱えた予言書が重い。私はただただ無言のまま、瓦礫にまみれたその場所を歩んでいく。かつて栄華を極めたと呼ばれるトゥアス帝国。ここでカタリナの運命は狂い、私の命も始まった。

地上から空を見上げると、砂漠に散らばる砂くずのような星空だった。かつて赤子だった私は、この空を見たのだろうか。

「……サーシャ……！」

ふと聞き覚えのある声に気づいて振り返ると、向こうから息を切らして走ってくる人影があった。私は肩をすくめてため息をつく。思っていたよりは軽傷のようだ。

「ああ、フレイさん。どこをフラフラしていたんですか」

「フラフラしてんのはテメーだっつもの！」

おそらく私を捜して帝国址を歩き回っていたのだろう。砂にまみれたロープからそれが窺えた。機嫌の悪いフレイさんは噛み付くようにまくしたてる。

「人が探しにきてみれば、その言い草！大体な、俺はお前の体を心配して……」

「ああ、予言書なら手に入れました。重いので持っただけですか」

「俺は荷物持ちかつ……！」

それでも胸の前につきつけると、フレイさんは嫌々ながらそれを受け取った。ふう、と息をついて、私は視線を砂の海に向ける。薄暗くなり始めた夜と、寂れた空虚な場所。

グチグチと文句を続けるフレイさんを見無視して、私は歩き出す。日が暮れる前に休む場所を見つけなければ。

「聞いてんのか、サーシャ！」

「いえ、全く。それより……」

私は西の方角に視線を向ける。暗くなり始めた闇の中に、人が転がっている。見覚えのある服装。瓦礫の脇で風を避けるようにして倒れ込んでいるその姿に、私はため息をついた。

「……クリフさんが転がってますが」

霞む目をこすり、その場へと駆け寄っていく。どうやら激しく動いている時以外は比較的、薬の効果は出にくいらしい。

フレイさんがクリフさんを抱え起こす。私は立ったままその様子を見つめていた。

「おいっ、クリフー!!」

辺りには円を描くように血溜まりが出来ていた。そして彼の足下から砂漠の奥へ、点々と血の跡が残っている。どうやら怪我をした場所からここまで這ってきたらしい。

彼の出血は右腕からのようだった。引き裂かれた右腕から下は存在せず、右袖を破いて止血した後がある。自分で施した処置なのか、しっかりと血を止めることが出来ず、出血は続いているようだった。気を失っていたのか、クリフさんは顔を叩かれてやっと意識を取り戻したようだった。

「うっ……あ……さ、サーシャ、さん？」

「俺は無視かっ!!」

いつもならば殴り掛かる手を握りしめ、フレイさんは怒りをこらえる。私は立つたままクリフさんを見下ろすと、その様子を見て苦笑した。

「大見栄を切りましたね」

怪我は酷いが、しっかりとレイテルパラッシュも握りしめている。もはや柄まで赤く染まってしまった剣を受け取り、クリフさんに言う。

「背負いましょう。……フレイさん」
「俺がかっ!!」

いつものように文句を言うが、フレイさんは渋々クリフさんを背負う。この怪我では歩くこともままならないと分かっているのだから。それに……今回は随分と聞き分けが良い。

私達はゆっくりと歩き出した。どうやら何処かで休むよりも医者にクリフさんを見せることの方が急務のようだ。

昼間の砂風と違った、澄んだ風が通り過ぎていく。私は顔を上げた。澄んだ空気を肺に吸い込むと、冷たさが胸の中を襲ってきた。

寝転んだまま見つめる空は暗く、いつの間にか日が傾き、夜が辺りを支配していた。月が真上に上り、そしてやがて朝がくるのだから。

一体どれだけ寝転んでいたのか。大きいため息をついて、抜け殻のような体で星を見つめた。そろそろ行かなきゃいけない。何処へかは分からない。それでも、おそらくずっと此処にいて何も変わらないということ……つまり、そうゆうこと。

上半身を起こして髪についた砂を払い落とすと、冷たい風が首筋をくすぐっていった。こんな夜中に野宿をしていると子供の頃を思い出す。それでも誰かがいれば、まだマシだった。

「……フィオ」

そういえば先ほどからフィオの姿が見えない。呆れて消えてしまったのか、それとも主として見限られたのか。契約をしている以上そんなことはあり得ないと知りつつも、もしかしたらそうかもしれないな、と俺は嘆息した。

「……」

無理に喚び出す必要もない。立ち上がると、まだ歩く力はない。うだつた。ただ、変に肩が痛い。フレイとの戦いで変なところに力が入っていたのかもしれない。体のあちこちが悲鳴をあげているかのように痛かった。

辺りを見回すと、崩れ落ちた廃墟ばかり。風化した土壁、崩れた石畳。人が住んでいた名残は僅かしかなく、誰の気配すらしない……。

「また一人、か……」

今度は涙も出なかった。慣れてしまったと考えると悲しいが、それはそれで負担が少なくて楽なのかもしれない。

また、ひとりぼっち。そう呟いたとき、ふと何かの気配が瓦礫の向こうから近づいてきた。顔を向けると、灰色の翼が現れる。美しい女性の姿に鳥の羽根を携えた鈴人がこちらに歩いてくる。

「フィオ」

少し驚いて、俺はそう呟いた。フィオは静かに歩み寄ると、俺の前にひざまづく。

『……お嘆きですか、アイルーク』

数年ぶりに聞くフィオの声だった。声も表情も変わりなく、あの港町で主人に殺されかけた、あの日と変わりなく。

『貴方を守る為に私は存在する……私の判断を、間違っていたと嘆いておられるのですか？』

「……」

あの日も、フィオによって助けられた。自尊心のためだけに呼び出し、無理に契約を結ばせたこの俺を。お前は二度も守ろうとした。二度も信じたというのか。

ただ、翼だけを望んでいた。鳥になりたかった。翼を得ることが出来れば、というただの子供の願いだった。

「……。……フィオ、お前にはかなわないよ」

呟くようにそう言うと、フィオはただ首を傾げた。そして立ち上

がると、北東の方向に翼を向ける。暗闇の奥に微かに揺れる光の粒。何列かに並んで横切っていくその姿は商隊のようだった。

商隊がトウアスの近くを通るのは珍しい。天の助け、ということにしておこうか。

「行こう、フィオ」

俺はそう言って歩き出す。空に満月が君臨する夜だった。

第4章 1

火の粉は燃え上がり、やがて黒く燻って空に消えた。晴れ渡った太陽の下、のぼる煙を見つめながら俺はため息をつく。これでいいだろ、ジジイ。俺も、アイツも、誰もこの予言書を手にすることはない。誰にも知られずに消えていく。これで平等、ってやつだろ？

- 別れの言葉 -

火の勢いに太陽が覆い隠される。公園の片隅で燃やされた煙はもくもくと空へ上っていく。僕は咳払いをしながら火の中の予言書を見つめていた。もつたいたいと思うのは、多分当然のことだと思う。燃え上がる5冊の『過去の予言書』。これがあればきっとこの世界を支配することだって不可能じゃない。

勿論、僕はそんなことしたいとは思わないけど。

「……でも、本当にいいんですか？ エメリナさんに言わなくても」「うっせえな。所有者は俺なんだ。オフクロは関係ねえよ」

隣で火を調節しながら、フレイさんは口を尖らせた。この表情からすると、本当は族長のエメリナさんに一言通した方がいいのかもしれない。けれど言い出したのはサーシャさんだし……反対は出来

ない。

後ろで立ったまま僕らの様子を見つめていたサーシャさんがため息をつく。

「あとで誰かに奪われると面倒です。フラフラと遊び回るフレイさんを持たせるわけにもいきませんし、エメリナさんの家に保管するのも危険でしょう」

「……そうですね」

過去を見ることができる魔法の本。そんなものが存在すること自体、最初から間違っていたんだ。

本当はサーシャさんが予言書を燃やしたいと言ったとき、少しでいいから使わせてもらおうかと思った。故郷が消えたあの一件……あの真相を知ることが出来るかもしれないと思ったから。でも、口に出かかった言葉はそこで止めておいた。

それより、とサーシャさんは僕を見下ろす。なくなった片腕に視線を落として、サーシャさんは言った。

「お医者様の診断は？」

「えっ？あ……もう大丈夫だそうです」

あはは、と僕は乾いた笑いを漏らした。あのお医者様には最初病院に担ぎ込まれたとき、かなりガミガミ言われてしまった。ちぎれたとはいえ、腕半分持ってくればまだ修復の見込みがあつたかもしれない、と。どんなに腕が立つ医者でも腕を生やすことは無理だと僕も分かつてる。もちろん治るなんて思っていないし、あれは……あの右腕は、あそこに置いてきたのだから仕方ない。

おかげで右腕は肘と肩の真ん中から綺麗になくなってしまった。それでも、ここまで対応してくれたお医者様は凄いと思う。ただ、問題があるとしたら……利き腕がなくなつて、日常生活も剣を振る

「ことも難しくなっていましたただけだ。」

「そうですね。なら問題ありませんね。」

サーシャさんの言葉に、ふとフレイさんが顔をあげた。僕は首を傾げる。

「……行くのか。」

そう言ったフレイさんを見つめ返し、サーシャさんは頷く。僕は驚いて立ち上がった。

「え、ええっ!?!」

いつものように五月蠅そうな目で僕を見返して、サーシャさんは数少ない荷物を持ち上げる。突然の別れに動揺する僕は、フレイさんとサーシャさんを交互に見ては、ただオロオロするしかなかった。フレイさんは肩をすくめて大きくため息をつく。

「もともと過去の予言書を集めるまでの契約でしたから。この後はお好きにどうぞ。」

お金は出ませんが、と呟いて、サーシャさんは僕らに背を向ける。そんな。前触れもなくそんなこと。

どうすればいいのかとフレイさんに視線を向けるけれど、フレイさんは引き止める様子も見せなかった。ただジッとサーシャさんの背中を見つめている。

「……それでは。」

背中を向け、去っていくサーシャさん。僕は呆然とするしかなかった。予言書を集めた後にどうなるか、なんて考えてもいなかったから。確かに、僕らの目的はここで終わってしまった。僕らの出会いもすべて予言書が始まりだったし……でも、本当に？

サーシャさんの背中が遠くなると、フレイさんも歩き出した。僕はあわててフレイさんに問いかける。

「ふ、フレイさん!？」

「お好きにどうぞってバケモノ女も言ってただろ？生きてりゃそのうち会えるだろうよ」

じゃあな。そう言っただけでフレイさんはサーシャさんが向かった道とは別の道へと歩いていった。僕はまたオロオロと2人の背中を見つめる。

突然契約を組んで、突然一緒に旅をすることになった僕らだけ……別れも突然なんて。そんな……。

隣で燻っている炎が、風に流されていく。呆然としたまま、僕は公園の片隅に一人、残された。

心地よい風が吹き抜ける。砂漠から少し離れた平野には、まばらに緑の絨毯が広がり、木々も点在している。乾燥しているが澄んだ

匂いが鼻をくすぐった。平野の中央を通る道は、数多くの人々の足跡が繋がって、地上に真つすぐな線を作っている。

旅人の姿はなかった。この辺りはネオ・オリに近い。戦争の警戒態勢が解かれていないのだろう。目を細めて辺りを見回すと、陽炎が地の果てに揺らめいていた。

荷が重い。体にのしかかるこの疲労感はどこからきているのだろう。左手で眉間を抑え、そして息をついた。早々に出てきたのは正解だったようだ。

照りつける太陽は容赦なく、私を背中から照らし出した。足下に見える影は私の足取りを真似るように先を行く。ふと、荷が揺れる音とともに影が傾いた。

どうやら膝が砕けたらしい。

「……」

どれくらい歩いてきただろう。果てしなく長い間をずっと、歩き続けてきたような気がする。思えば、私は生まれたその時から旅をしていた。帝国跡からカタリナによって助け出されたあの日から、ずっと。

もう片方の膝も簡単に崩れた。私の瞳は太陽を拝む。これだけの晴天はいつ以来だろう。まるであの日のような残酷で暖かな陽の光

「……」

体の重みはやがて心地よさへと変化する。眠るのだろうか。体がそれを欲している。いや、私自身が、と言った方がいいのかもしれない。永遠に覚めることのない眠りによって、先覚者……ルミナリイは、滅びるのだ。

手のひらに目をやると、あちこち傷の跡があった。母の死に際もそうだったと、静かに目をつむる。かつてトウアス帝国の華と唄わ

れた王女の死に顔は、その面影をなくしていた。それでも私には誰よりも美しく見えた。

「……嘘、か……」

体が崩れ落ち、うつぶせのまま私は地面に顔を伏せる。僅かな力で横を向くと、疎らに生えた雑草の中に一輪の白い花らしきものが見えた。太陽に向かって咲く姿は美しく、私は静かにそれを見つめる。歪んだ視界の中ではそれがどういった花なのかも識別できなかったが……名もなき花はそこにしっかりと根を張り、花を咲かせていた。

母の死の間際に嘘をつき、そして兄を復讐のために殺した。人の定めを口にするとしたら、私の生きた時間はその言葉につきるのだろう。

「……」

それでも、こんな風景を目にしながら、文字通り『永遠の眠り』につけるといふのなら、それも一興。

ふと、途切れるように目の前が暗くなる。足が動かなくなり、手がその役目を終え、やがて五感が奪われていくらしい。それでも、耳だけは静かに風の音を聞いていた。

永遠の命とかいうものが、この世に存在すること。それを人は羨み、渴望してきた。誰もが単純に欲しがっている。かくゆう俺だつて、もしかしたら心の何処かでそう思ってるかもしれない。それでも人が死ぬことを怖がるように、永劫とか永遠だとかいうものもまた、恐ろしい存在なのだ、俺にはそんな風に思えた。

荷物を肩にかけながら、俺は歩いていった。煙草をくわえながら辺りの風景を見る。どうやらこつちを通ると次の街へは遠回りになりそう。舌打ち一つして、吸い殻を地面に捨てる。靴のかかとで火を消すと、煙を吐き出しながら前を見た。

見覚えのある女が一人、道のと真ん中に倒れている。

「チツ……」

どうせこんなことだと思った。帝国跡を抜けてから今まで、コイツは一度も体の調子を口にしなかった。俺がそのことを口にしようとする話題を変え、素知らぬ顔で席を立つ。一見自然に見えて不自然なその様子に、心の何処かで勘付いていたのかもしれない。

近づくと、眠っているのか死んでいるのか、体はピクリとも動かなかった。それでもまだ脈はある。間違いなくバケモノだ。俺は肩にかけた荷物の中に手を突っ込んだ。

「まったくもって手間のかかる女だな」

憎まれ口を叩く。聞こえているだろうか。おそらくコイツのことだから、全て聞いているに違いない。なら、今のうちに言っておこう。あとで罵詈雑言飛ばされてはかなわない。

「……お前がルミナリイだか何だかは知らねえけどな」

人の手によって作られる永遠なんてものは、存在しない。現にてめえだって、薬一つで死んでると同じ状態じゃねえか。頭と手足をぶった切って粉々にしてばらまいたら、結局火葬して灰を撒くのと同じじゃねえか。

「お前が死んで、何か変わるのか？」

死のうが生きようが、何も変わらない。ただこの地上に立つ人間の数が減るか増えるかの違いだけ。俺たちはただの旅人だ。そう考えると、普通の人間よりその命は軽い。

死ぬのも生きるのも自由だ。それでも……生きてやがて死んでいくという、その摂理を選んだ人間が、こんなところで簡単に受け入れてどうする。

「……俺は端っからめえが気に入らねえんだよ」

荷物に突っ込んだ指先がアイルークから受け取った解毒薬の瓶に触れる。透明な液体がガラスの中で揺れた。白い顔をしたサーシャの顔を叩いて、俺は言った。

「最後まで足掻きやがれ、このバケモノ女」

遠くなる音の中で、何かはつきりとした言葉が聞こえた。なんと
言われたのかは分からなかったが、それでも馬鹿にされたような、
そんな言葉であることは理解した。

口の中に何かを流し込まれる。味覚は鈍っていたものの、喉元を
通すには飲み込みづらい液体だった。呼吸を塞がれるような感覚に
肺が痙攣する。

「あつ、吐き出すな馬鹿っ」

何か固形物を溶かしたような、そんなとろみのある液体だった。
途端、強烈な味に顔を顰める。薬と呼ぶには刺激の強い味だった。
五感を鈍らせていた感覚を晴らすには十分なものだろう。気付け薬
を口から入れられているような、そんな不快感。

「ったく、てめえは……っ」

苛立った声と共に今度は口をしっかりと塞がれて流し込まれた。
吐き戻さないようにゆっくりと。

全て飲み干すと、吐き気を感じた。それでもしばらくすると口の
中に残っていた液体の味も消えていく。スツと胸の中に風が通った
のを感じた。呼吸を2、3繰り返し、そして静かに息を吐く。

ふと、傍らにあった気配が立ち上がった。

「クソ不味いな……。水は……」

何かを探すようにそう呟いた後、何かに気づいたように声は止ま
る。

ゆっくりと意識が戻ってきた。まだ目は開かないが、大体そこで

繰り広げられているであろう様子は窺える。水、と呟いた声が、いつものように、聞き飽きた大声をあげる。

「げっ、クリフ!？」

「えっ!? あ、あ、あああの、そ、その……見てないですっ! 見てませんっ!！」

遠くの方から、また聞き覚えのある声が響く。おそらく蛇に睨まれた蛙、猫に追いつめられた鼠……そんなところだろう。近くにいた気配がジリジリと相手に詰め寄っていく。ビクビクと怯えながら、相手は弁解の言葉を必死に探す。

「えっと、あの、分かっています! あの、あの、何にも見てないですっ」

「デメエ、本気で殺してやるっ!！」

また騒々しくなってきたようだ。逃げ回る足音と、追い回す足音が響いている。私はため息をついた。

やはり、私の死に際は綺麗に終わらせてはくれないらしい。

終章

2人の騒動は私が目を覚ましても終わらないらしい。ゆっくりと体を起こしながら手元に目をやると、やはり傍らに小さな花が咲いていた。太陽に凜と背を伸ばし、雨の少ないこの大地に生きる姿。手荒な起こされ方をしたが……どうやら目覚めは至極良さそうだ。

- 旅路 -

「そこのお二方。……少し黙れませんか」

頭を抑えながら、ゆっくりと体を起こす。まだ手足に力が入らない。声を出すのも力がある。不自由な体に呆れながらも、私は2人を見た。鬼の形相で追いかけるフレイさんと、必死に逃げ回るクリフさんの姿。私はまた呆れた。

私の様子に気づいたのはクリフさんが先だった。

「サーシャさん！だ、大丈夫ですか？」

私の側まで駆け寄ってくると、背中に手を回して支える。気怠い体で息を吐くと、力が全て吐き出されていくかのようだった。

「視界が戻ってきました。……まだ立つことは出来ませんが」

今の状態を言葉にするならば、疲労困憊という四字が最適だろう。こんなに疲れたことはない。身体的にも、精神的にも。しかし近くに集落はなく、辺りに広がるのは果てない砂漠のみ。地平線に浮かぶ陽炎が、私の気力までも吸い上げるように揺らめいている。私と同じように辺りを見回していたフレイさんは、小さく舌打ちをして呟いた。

「まったく、どうすんだよ、これから。行き先なんざ決めてねえぞ」

それは私も同感だ。全く……此处で終わるはずの旅路の終点が、果てない荒野の先へと延長されてしまった。何処を通るのかも分からない。何を目的に行くのかも分からない。

そして、いつ終わるのかも分からない。

「ま、まあまあ。とりあえず、行けるだけ行ってみましょう。……サーシャさん、背負います」

クリフさんが肩を支えながらそう言った。しかし私は首を横に振る。

「いえ、大丈夫です。片腕のないクリフさんに背負っていただくほど鬼ではありませんから。……フレイさん」

「魔術師の俺に背負わせるお前は悪魔だ」

フレイさんはそう言ったが、仕方なく腰を下ろす。どうせすぐ音を上げると思うが、それでもここに立ち往生するよりはマシだろう。少なくともフレイさんが歩いている間に、体力も戻ってくるはず。

私は魔術師のローブの肩越しに前を見つめた。クリフさんは私達の荷物をかき集めると、フレイさんと並んで歩き始める。

「でも、サーシャさんが元気になって本当によかったです」

「口だけな」

「倒れてたときはどうしようって焦ったんですけど……」

「お前は一体いつから見てた」

日常のやり取りが繰り返される。クリフさんはフレイさんに怯えながらも何処か嬉しそうに、そしてフレイさんはクリフさんを脅しながらも何処か満足そうに他愛ない会話を続ける。

本当に仕方がない人たちですね、と私は呟いた。この旅の報酬などはなから無い。彼らが手に入れたのは、自己の満足か、しがらみとの決着か……勿論、私には知る由もない。

私は目を細め、そして砂風の吹き荒ぶ荒野を見る。終着点のない旅路に行くのも一興、そうゆうことにしておこうか。

旅路は此処で終わり、そして新たな時間が動き出す。

「……行きましようか、共に」

すべてのものに終わりはおとずれ、そしてまた、何かが始まっていく。

FIN .

終章 (後書き)

初めての方は初めまして、何度目かの方はこんにちは。『過去の予言書』作者の由城 要と申します。

『過去の予言書』いかがでしたでしょうか。この物語はサイトに載せていた長編で、紆余曲折しながらも最初の目的を果たす、そうゆうストーリーをめざして書きました。

サイトからコピペしてしまうのは申し訳ないので、ラストの終章のみ書き直しをしました。サイトではフレイ視点、なるうさんではサーシャ視点となっております。内容はあまり変わっていませんが……。あ、クリフはないです。ごめんなさい(え)

この『過去の予言書』は、現在シリーズ化して続編を執筆している途中です。なるうさんにもUPしていく予定ですが、サイトの更新に追いついてしまったので、ここからは亀更新になります。

それでもよろしければ、お暇な時にでもお立ち寄り下さいませ。

感想、意見などありましたら、どうぞお気軽に書き込みいただけると嬉しいです。それでは、失礼いたします。

Stage of extra . . . ?

Stage of extra . . . ?

(続編予告)

あれは、私がまだ幼かった頃。国を守る数多の兵達の中で、最も強く、最も人々の瞳を奪った一人の英雄がいた。かつて約500年の栄華を誇り、世界を治めた帝国の歴史の中で、英雄の称号を受けたのは20名。

『英雄称号16号』と、その人はそう呼ばれた。

「私は貴女に忠誠を誓いましょう。小さな王女、カタリナ様」

まだ物心ついたばかりの幼い私にそう言った英雄。私はその人のことを、未だに忘れることが出来ない。その瞳は海より蒼く、その髪は太陽の光のように金色の輝きを放ち……その背中はどんな屈強な兵士より大きかった。

おそらく私は懂れていたのだろう。英雄という鎧の中に生きる、一人の人間に。

「人は、その手の分しか人を幸せに出来ないの。袖触れ合った私まで数に入れるのは間違いよ」

「帝国は知を手中に収め、その利を我がものとしている。その事実を認めてまで、国を背負うか？英雄称号16号」

あれはまだ私が人に守られ生きていた頃の記憶。秩序を守る軍と、

新たな夜明けを目指した反乱因子の戦い。曖昧な記憶の中で、誰のものともつかない声は言った。

「ならば、あなたは私が守りましょう。全ては小さな王女の為に」

N e x t S t o r y

「 a p p r e n t i c e 」

過去に生きた英雄の物語。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1211q/>

過去の予告書

2011年5月14日22時56分発行